4

國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
JUN 0 1 1993
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

本縁部 二

常盤大定
美濃晃順 譯

凡例

一、佛傳の傳譯せられたるもの頗る多い中、現存するもの、約十三種有り。これに律藏中の佛傳や、長阿含中の佛傳の一部分、及びその異譯を加ふる時には、二十種以上を數ふるのである。中に於て、首尾完結せるものは、馬鳴菩薩造「佛所行讃」であつて、又最も大集成せられたるものは、この「本行集經」である。

二、是等多數の佛傳は、大體上、之を四類に分類する事が出來る。第一類は小乘的のもの、第二類は大乘的のもの、第三類は大小未分的のもの、第四類は大小調和的のものである。「四分律」中の佛傳は、小乘的のもの〻代表であり、「大莊嚴經」は、大乘的のもの〻代表であり、「佛所行讃」は大小未分的のもの〻代表であり、而して第四類の大小調和的のものに更に二種類がある。「過去現在因果經」の如きはいづれかといへば大乘に立脚し、この「本行集經」はいづれかといへば小乘に立脚する小乘的、大乘的の語は、或は不穩當かも知れぬから、これに代へて、人間佛・應身佛の語を以てする方がよいかも知れぬ。

三、本經は、始終に亘りて、摩訶僧祇師・迦葉維師・尼沙塞師・薩婆多師の異傳を擧げて居る所から見ると、曇無德師の所傳を中心として居るのであるが、然し一師の所傳だけでは無くて、諸師の佛傳を調和せしめたものである事は、記事の重複によつて、明白に之を知る事が出來る。若し之を分析研究する時には、印度に於ける各派の佛傳を彷彿せしめ、よつて以て、傳譯諸佛傳の系統を推想せしめ、これを推し擴めて、阿含諸經の系統を判別せしむる一資料とする事も出來るだらう。

四、現存梵文佛傳中、本經との間に、最も能く一致を有するものは、「大事（マハーヴスツ）」であるから、精細に之との比較を試みたが、然しその一致の部分は、全經に比すれば、その一部分に過ぎぬ。而も「普曜（ラリタ・ヴィスタラ）」は全部活用せられ、中には同經と文々句々一致する部分もある。是等一致の部分に於ては、兩者を對照する事によつて、原語を挿入するに努め、猶、是等梵文佛傳に見えないものは、出來得る限り、他の資料

より、之が推定を試みんと努めた。

五、斯くて本經そのまゝに相當する梵文は存しないが、この綜合大成の佛傳が印度に於て旣に成立し、本經はその忠實なる飜譯である事は、梵文と一致せる部分の比較によりて證明せられる。本經中、漢文としては然るべからざる顚倒句法があるが、そは却つて忠實なる飜譯より來た結果であつて、漢文として顚倒して居る事は、寧ろ本經の傳譯價値を高むるものである。

六、本經は、譯者の一人によつて、嘗て國譯大藏經中に國譯せられた。當時譯者は、和訓の困難な章句を、そのまゝに脚注として記し、以て學界の意見を問ふたのであつた。爾後之に關して一の教示をも得ない。今回、更に兩者の研究によつて、その多分は、それ以外には訓じ難いと決定したから、今回には之を取り除く事とした。

七、國譯は、原文の一字をも捨てず、又一字をも顚倒せしめない事を期したので、中には國文として煩はしいものもあるけれども、蓋、止むを得ない所である。往々にして原文中注語の挿入せらるゝものがあつて、漢文としては一見之を判然せしむる事を得るけれども、之をそのまゝに書き下す時に、解し難たからしむる場合には——を附して、以て本文と注語とを區別した。又二三の語を補足する事によつて、意味を明了ならしめ、然らざる時に意味の不明を來す場合には、補足語の右邊に縱線を附して以て之を明了ならしめた。

八、本經の成立に關する研究や、本經の特色や、各品の梗概や、他の諸佛傳との關係交涉やは、最後にやゝ精細な解題を加ふるから、その時に論ずる事とする。これによつて、一見した所では頗る煩瑣と思はれる本經が、その實却つて印度佛教の諸種の問題を闡明すべき貴重な資料である事を知るに足ると思ふ。

昭和六年十一月

常盤大定
美濃晃順
識

目次

（本丁）（通頁）

佛本行集經（全六十巻中 自巻第一 至巻第二十七）……〔一―四二五〕……一

巻の第一……〔一―一三〕……一

發心供養品第一の上・中・下……一

巻の第二……〔一四―二八〕……一四

巻の第三……〔二九―四三〕……二九

受決定記品第二の上・下……三四

巻の第四……〔四四―五八〕……四四

賢劫王種品第三の上・下……五六

巻の第五……〔五九―七四〕……五九

上託兜率品第四の上・下……七〇

巻の第六……〔七五―八八〕……八九

巻の第七……〔八九―一〇四〕……八九

俯降王宮品第五……八九

樹下誕生品第六の上・下……九八

卷の第八……〔一〇五——一一九〕……一〇五
從園還城品第七の上・下……一〇八
卷の第九……〔一二〇——一三三〕……一二〇
相師占看品第八の上・下……一二一
卷の第十……〔一三四——一四七〕……一三四
阿私陀問瑞品第九……一三七
卷の第十一……〔一四八——一六二〕……一四八
姨母養育品第十……一四八
習學技藝品第十一……一五四
卷の第十二……〔一六三——一七九〕……一六三
遊戲觀矚品第十二……一六三
捔術爭婚品第十三の上・下……一六八
卷の第十三……〔一八〇——一九五〕……一八〇
常飾納妃品第十四の上・下……一九二
卷の第十四……〔一九六——二一八〕……一九六
空聲勸厭品第十五……二〇一
出逢老人品第十六……二一四
卷の第十五……〔二一九——二三四〕……二一九

淨飯王夢品第十七……二一九
道見病人品第十八……二二三
路逢死屍品第十九……二二五
耶輸陀羅夢品第二十の上・下……二二八
卷の第十六……〔二三五――二四九〕……二三五
捨宮出家品第二十一の上・下……二四三
卷の第十七……〔二五〇――二六五〕……二五〇
剃髮染衣品第二十二の上・下……二六一
卷の第十八……〔二六六――二八〇〕……二六六
車匿等還品第二十二の上・中・下……二七八
卷の第十九……〔二八一――二九六〕……二八一
卷の第二十……〔二九七――三一二〕……二九七
觀諸異道品第二十四……二九九
王使往還品第二十五の上・下……三一〇
卷の第二十一……〔三一三――三二九〕……三一三
問阿羅邏品第二十六の上・下……三二三
卷の第二十二……〔三三〇――三四五〕……三三〇
答羅摩子品第二十七……三四二

勸受世利品第二十八の上・中・下……三四四
卷の第二十三……〔三四六――三六〇〕……二四六
卷の第二十四……〔三六一――三七六〕……三六一
精進苦行品第二十九の上・下……三六六
卷の第二十五……〔三七七――三九二〕……三七七
向菩提樹品第三十の上・中・下……三八八
卷の第二十六……〔三九三――四〇八〕……三九五
卷の第二十七……〔四〇九――四二五〕……四〇九
魔怖菩薩品第三十一の上……四一四

◇　◇

索引……卷末

佛本行集經[一]

隋天竺三藏闍那崛多譯

卷の第一

發心供養品[二]第一の上

大智海 毘盧遮那佛[三](Vairocana)に [四]歸命し奉る。

是の如く、我聞けり。一時、婆伽婆[五](Bhagavat)、王舍城(Rājagṛha)の迦蘭陀鳥竹林(Karaṇḍa-veṇuvana)の内に住したまひて、大比丘僧五百人と倶なりき。爾の時、如來、佛行に住して復煩惱なし、故に 耆那[六](jina)と名く。一切智を得、一切智を行じ、一切智を知り、[七]天行に住し、梵行に住し、聖行に住して心に自在を得、諸の世尊に依りて諸の行を行ぜんと欲し、悉く皆行ずるを得たまへり。

比丘(bhikṣu)及び比丘尼(bhikṣuṇī)、諸の [八]優婆塞(upāsaka)及び [九]優婆夷(upāsikā)の [一〇]四衆の中に在して、大供養と恭敬尊重とを受けたまふ。又諸の國王、大臣、宰相、種種の外道、及び諸の沙門、婆羅門等の内に在して……受けたまふ。佛、是の如き種種の利養を得たまひて、飲食、衣服、床舖、湯藥の四事充滿し、皆悉く具足す。最勝最妙にして與に等しき者無く、智慧第一にして名稱遠く聞え、利養を受くと雖も心に染なきこと、猶し蓮華の水に著せざるが如し。世尊の名號、說法の音聲は、世間中に於て最上最勝にして更に過ぐる者無し。是の如き世尊は、[一一]多陀阿伽度(tathāgata) [一二]阿羅訶(arhat) [一三]三藐三佛陀(saṃyaksaṃbuddha)等の [一四]十號具足し、能く現在の天・[一五]魔(māra)・[一六]梵(Brahmā)・釋(śakra)沙門(Śrāmaṇa)・婆羅門(brahmaṇa)等、一切の天人世間の中

【一】 本行(carita)。釋尊が過去世に菩薩たりし時の實修行跡。
【二】 發心(cittam-utpādeśi)。發菩提心の略、佛果菩提を求めんとの大心。菩提(bodhi)とはさとりの智慧。
【三】 毘盧遮那(Vairocana)。光明遍照、遍照、又は大日と譯す。
【四】 歸命(namah) は信仰の心相を表象する語。
【五】 婆伽婆(Bhagavat)。世尊と譯す。
【六】 耆那。勝者と譯す。
【七】 天行(Deva-cārya)、梵行(Brahma-cārya)、聖行(Ārya-cārya)。天行は帝釋天の行、梵行は梵天の行、聖行は佛陀の行。帝釋と梵天とは佛時代の民間信仰を代表する神格にして、佛陀はこれら神格の德行を獲得せらるゝは勿論、その以上に位すとは、佛時代以來の佛教徒の信念にして、阿含聖典中に、これら梵釋聖の三行三座を並べ擧ぐる文獻少からず。
【八】 優婆塞。清信士と譯す、男子の信者。
【九】 優婆夷。清信女と譯す、女子の信者。
【一〇】 四衆(catur-pariṣā)とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。

に於て、神通もて遍ねく知り、知り已りて說法し、世間に行はしむ。前後及び中、言語皆善く、文義巧妙、理趣精微、相好[一七]莊嚴[一八]、具足して缺くるなく、淸淨梵行もて宣揚顯說し給ふ。

爾の時、尊者[一九]大目犍連(Mahāmaudgalyāyana)、晨朝の時に於て、衣を整へ鉢(pātra)を持し、王舍城に入りて乞食を行ぜんと欲す。時に目犍連、獨立ちて思惟すらく、『今日、晨朝の乞食尙早し、我今、先づ當に[二〇]淨居天(Śuddhavāsa)に至るべし』と。尊者目犍連、是の念を作し已るや、譬へば力士の臂を屈伸する如き頃に、王舍城より身を沒して現ぜず、淨居諸天(Śuddhāvāsā)宮の所に至り、忽然として立ち住まりぬ。

爾の時、無量の淨居諸天、既に目連の安庠として至るを見、心に歡喜を生じて、各相謂ひて言はく、『我等今は、共に往いて尊者目連を迎ふべし』と。是語を發し已り、相隨つて目犍連の所に至り、頭面もて目犍連の足を頂禮し、却いて一面に住まり、目連に白して言はく、『尊者目連よ、希有なり、希有なり、尊者目連よ、世間中に於て見難く値ひ難し、謂く、佛・世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、無量百千萬[二一]劫(kalpa)に於て、諸の行を勤修したまへり』と。而して偈(gāthā)を說いて言はく、

『百千劫中に於て　[二二]懃ろに菩提(bodhi)の道を求め
多時を過せしより來た　衆生の中の大寶
世間の見難きものは　唯佛世尊のみ有り』

爾の時、尊者大目犍連、淨居天より是の偈を聞き已りて、遍體戰き慄ひ、身毛皆竪ちて而して是念を作さく、『希有なり希有なり、不可思議なり、見難く値ひ難し。謂く、佛・世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、世間に逢ひ難し、無量百千萬億の劫中、時に一たび出現したまふ』と。爾の時、尊者大目犍連、淨居天に於て、彼の天衆の爲に無量種の微妙の法を說き、無量の淸淨なる法義

【一一】多陀阿伽度。如來と譯す。
【一二】阿羅訶。應供と譯す。
【一三】三藐三佛陀。正等覺と譯す。
【一四】十號(daśa Tathāgata-nāmāni)。上の如來、應供、正等覺の三に、明行足(Vidyā-caraṇa-sampanna)、善逝(Sugata)、世間解(Lokavit)、無上士(Anuttara)、調御丈夫(Puruṣa-damya-sārathi)、天人師(Śāstā deva-manuṣyāṇām)、佛(Buddha or Jina)、世尊(Bhagavān or Lokajyeṣṭha)の七を加ふ。何れも佛德を表象せるもの。
【一五】梵。梵天のこと。
【一六】釋。帝釋天のこと。
【一七】相好とは三十二相、八十種好の略、具足圓滿なるすがたにいふ。本經中に詳出す。
【一八】莊嚴(alaṃkāra)とはカザリ。
【一九】目犍連。略して目連といふ。十大弟子の一人。神通第一の稱あり。
【二〇】淨居天とは色界第四禪九天の中、上方の五天をいふ。聖者の居る所なるを以て、この名あり。色界とは三界の一。
【二一】劫は劫波(Kalpa)の畧、譯して長時といふ。
【二二】菩提は、さとりの智慧。

を顯現し、無量の深密なる法要を宣通し、諸天をして心に各歡喜を生ぜしめ、教化し顯示し、法を尊重し已るや、即ち身を沒して此[二三]閻浮提(Jambudvipa)に廻ること、譬へば力士の臂を屈して還た舒るが如き一念の頃にして王舍城に到り、次第して乞食し、還た本處に至り、飯食し訖りて衣鉢を收め、足を洗ひ已りて佛所に詣り、佛所に到り已りて佛足を頂禮し、却きて一面に坐し、復た自ら坐し已りて佛に向つて行來せし處を說かく、『世尊、我、旦に乞食して王舍城に到り、便ち[二四]首陀婆娑天(Śuddhavāsa)上に至るに、天、我に語りて言はく、「如來世尊は、世間の中に於て、見難く値ひ難し」と』。前の所說の如く、具さに佛に白して言さく、『世尊、我、是の如き希有の語を聞き已りて實に思議し難し、謂ゆる諸の佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、無量百千劫中に於て時に一たび出世したまふこと』と。

爾の時、佛、目揵連に告げて言はく、『目揵連よ、淨居諸天は少知少見なり、狹劣の智を以てして乃し能く百千劫の事を知るを得たり、所以は何ん。目揵連よ、我、往昔を念ずるに、無量無邊の諸の世尊の所に於て、諸の善根を種ゑ、乃至、[二五]阿耨多羅三藐三菩提(anuttara-saṃyaksaṃbodhi)を求めたり。

(1)目揵連よ、[二六]我往昔を念ずるに、[二七]轉輪聖王(cakra-varti)の身と作り、三十億の佛の皆同一號にして釋迦(Śakya)如來と號せると、及び[二八]聲聞衆とに值ひ、尊重し承事し恭敬し供養して、[二九]四事具足せり、謂ゆる衣服・飲食・臥具・湯藥なり。時に彼の諸佛は、我が與に「汝當に阿耨多羅三藐三菩提・及び[三〇]世間解・天人師・佛・世尊を得て、未來世に於て、正覺を成ずるを得べし」と[三一]記したまはざりき。

(2)目揵連よ、我往昔を念ずるに、轉輪聖王の身と作り、八億の諸佛の皆同一號にして然燈(Dīpaṅkara)如來と號せると、及び聲聞衆とに值ひ、尊重し恭敬し・四事供養せり。衣服・飲食・臥具・湯藥・旛蓋・華・香なり。

【二三】閻浮提は、須彌山の南方にある人間世界。初は、印度半島を指示す。
【二四】首陀婆娑。前に出でし淨居天の原語。
【二五】阿耨多羅三藐三菩提、無上正遍知と譯す。
【二六】以下、釋迦佛が前生に於て發心するに至るまでに、十七類の佛に值遇せしことを記す。大畧、梵文大事の卷一、五十八頁以下に相當す。
【二七】轉輪聖王。佛教徒によつて傳へられたる印度神話中の宇內統一の王にして、七寶と千子とを備へ、兵伐を用ひずして、法によつて天下を治むと考へらる。七寶は佛の七菩提分に比し、千子は千二百五十の佛弟子に比すべし。身に三十二相を備ふるものは、在家せばこの王となり、出家せば佛と成るといはるゝ等の點より見て、佛教徒が釋尊を讚仰せんが爲の一途として案出せる神話と見るべく、恐らくは佛滅百年代の創作なるべし。佛教以外には不傳、長阿含、中阿含に含まるる轉輪王經中に古說見ゆ。
【二八】聲聞(śrāvaka)とは、說法の聲を聞きてさとるもの、即ち佛の親弟。
【二九】四事(catur-vastūni)。……これに、肉身に献ずる生活必

時に、彼の諸佛は我が與に、「汝當に阿耨多羅三藐三菩提及び世間解・天人師・佛・世尊を得べし」と記したまはざりき。

(3)目犍連よ、我往昔を念ずるに、轉輪聖王の身と作り、三億の諸佛の皆同一號にして弗沙（Puṣya）如來と號せると、及び聲聞衆とに値ひ、四事の供養皆悉く具足せり。時に彼の諸佛は、我が與に「汝當に佛と作るべし」と記したまはざりしこと、上の所說の如し。

(4)目犍連よ、我往昔を念ずるに、轉輪聖王の身となり、九萬の諸佛の皆同一號にして迦葉（Kāśyapa）如來と號せると、及び聲聞衆とに値ひ、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりしこと、上の所說の如し。

(5)目犍連よ、我往昔を念ずるに、轉輪聖王の身と作り、六萬の諸佛の皆同一號にして燈明（Pradīpa）如來と號せると、及び聲聞衆とに値ひ、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりしこと、上に說く所の如し。

(6)目犍連よ、我往昔を念ずるに、轉輪聖王の身となり、曾て一萬八千の諸佛の皆同一號にして、娑羅王（Sālarāja）如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養皆悉く具足す。然る後に出家して是の如きの念を作せり、「未來世の爲に、當に佛道を得て禁戒を護持すべし」と。時に、彼の諸佛は我が爲に、乃至、佛と作るを記したまはざりしこと、上に說く所の如し。

(7)目犍連よ、我往昔を念ずるに轉輪聖王の身と作り、曾て一萬の諸佛の皆同一號にして能度彼岸（Pāraṃgata）如來と號せると、及び聲聞衆とを供養して、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりき。』

(8)目犍連よ、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て一萬五千の諸佛の皆同一號にして日（Āditya）如來と號せると、及び聲聞衆とを供養して、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與

須の、衣服、飲食、臥具、湯藥（cīvara, piṇḍa, śayana, glāna）と、法身像塔に供する、幡、蓋、花、香（patākā, chattra, puṣpa, gandha）の二類あり。後者は佛滅後、佛塔供養のために、前者に倣つて考案されたるものなり。

【三〇】 世間解、天人師、佛、世尊の四は、共に前出佛の十號中のもの。

【三一】 記（vyākaraṇa）、記別とは、あらかじめ說くこと、豫言なり。委しくは、記莂。之を說くを授記、又は授記莂といふ。

に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりき。

(9)目揵連よ、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て二千の諸佛の皆同一號にして憍陳如(Kauṇḍinya)如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりき。

(10)目揵連よ、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て六千の諸佛の皆同一號にして、龍(Nāga?)如來と號せると、及び聲聞衆とを供養して、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりき。

(11)目揵連よ、我念ずるに往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て一千の諸佛の皆同一號にして紫幢(Jambudhvaja)如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりき。

(12)目揵連よ、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て五百の諸佛の皆同一號にして蓮花上(Padmottara)如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與めに「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりき。

(13)目揵連よ、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て六十四諸佛の皆同一號にして螺髻(Cūḍa?)如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と記別を授けたまはざりき。

(14)目揵連よ、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て一佛の正行(Samantabhadra?)如來と、號せると及び聲聞衆とを供養し、四事の供養皆悉く具足せり。彼の佛も亦我が與に「當に阿耨多羅三藐三菩提及び[三]明行足・一切世間解を得べし」と授記したまはざりき。

(15)目揵連よ、我念ずるに、往昔、曾て八萬八千億の辟支(Pratyeka)佛を供養し、旛・蓋・香・華の

【三】明行足、一切世間解の二、共に佛十號中のもの。

四事具足せり。乃至、彼の佛の[三三]滅度の後、爲に塔廟を起して供養せること前の如かりき。而も我が與に「汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と記別を授けたまはざりき。

(16) 目犍連よ、我念ずるに、往昔、一如來の號して[三四]善思(Sucinta?)多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へるありき。彼の佛の所に於て、[三五]彌勒菩薩、最初に發心し、諸の善根を種ゑて阿耨多羅三藐三菩提を求めき。時に彌勒菩薩、身、轉輪聖王と作りて毘盧遮那(Vairocana)と名く。爾の時、人民、壽、八萬歲なり。目犍連よ、彼の善思如來の初會の説法に九萬六千億人、[三六]阿羅漢道(arhatmārga)を得、第二會の説法に八萬四千億人、阿羅漢道を得、第三會の説法に七萬二千億人、阿羅漢道を得たり。目犍連よ、彼の毘盧遮那轉輪聖王は、彼の善思如來及び聲聞衆を供養して恭敬尊重し、旛、蓋・花・香の四事具足せり。目犍連よ、時に毘盧遮那轉輪聖王、彼の如來の[三七]三十二大人相、八十種好を具足せると、及び聲聞衆と、[三八]佛刹(buddha-kṣetra)の莊嚴と、壽命の歲數とを見て卽ち道心を發し、自ら口稱して言すらく、「希有なり、世尊、願はくは、我、當來に佛と作るを得て、十號の具足すること、還、今日の善思如來の如く、大衆聲聞人天に恭敬圍遶せられ、佛の説法を聽いて信受奉行すること、一種にして異る無けん」と。彌勒又言さく、「願はくは、我、當來に多衆生の爲に諸の利益を作し、安樂を施與し、一切天人世間を憐愍せん」と。目犍連よ、彌勒菩薩は、我前に在ること四十餘劫にして、菩提心を發し、而して我、然る後に始めて道心を發して諸の善根を種ゑ、阿耨多羅三藐三菩提を求めたりき。』

(17) 目犍連よ、我念ずるに、往昔、一佛あり、示謗幢如來(Aparājita-dhvaja)と名く。目犍連よ、我、彼の佛國土の中に於て轉輪聖王と作り、名けて牢弓(Dṛḍhadhanu)と曰ふ。初めて道心を發し、諸の善根を種ゑて阿耨多羅三藐三菩提を求めき。我時に、彼の佛世尊を供養すること一千年に滿ち、及び聲聞衆を恭敬、尊重、禮拜、讚歎して四事充足し、五百具の妙好の衣裳を持して一時に布

【三三】滅度とは涅槃(nirvāṇa)の譯。かくれたまふこと。

【三四】善思、三本に「善念」に造り、大事(Vol. I. 59)には Suprabhāsa (善光)とす。以下、彌勒及牢弓王に關する傳、大事卷一、五九—六〇頁に一致す。

【三五】彌勒(Maitreya)。悲氏と譯す。等覺とて殆ど佛陀に等しきさとりを得、釋迦に次いで成佛すべく、今現に兜率天にありて修行しつゝありと信ぜらるる菩薩の名。菩薩は菩提薩埵(Bodhi-sattva)。譯して覺有情といふの畧。或は大心有情ともいふ。廣大なる願を發し、廣大なる行を爲す人をいふ。

【三六】阿羅漢道。阿羅漢に至る道。三乘分別の立場よりは小乘中の聲聞の敎とすれど、こゝには原始的意味に從つて一般的佛道と解すべし。原始的には阿羅漢は「世の供養を受くる資格ある者」の意にして、「聖者」卽ち「佛」を指す。

【三七】三十二大人相は、佛陀又は聖王の如き大人の具足すと信ぜらるる三十二種のよきすがた。八十種好は、同じく大人の具足すと信ぜらるる三十二相以外のよきすがたの八十種。兩者を合し、畧して相好といふ。

施し、乃至、彼の佛の[三九]般涅槃(parinirvāṇa)の後に舍利塔(śarira-stūpa)を起しぬ。高さ一由旬(yojana)、廣さ半由旬。七寶もて莊嚴せり。所謂金、銀、玻璃、瑠璃、赤眞珠等、硨磲、碼碯にして、而して以て校飾せり。復、種種の旛、蓋、幢、鈴、香、花、燈、燭を持して、以用て供養せり。目犍連よ、我、是の如き諸供養を設け已り、晝夜に精勤して、廣大の誓願を發すらく、「當來に於て佛と作るを得ん時、諸の衆生有つて、父母に孝ならず、沙門及び婆羅門を敬せず、家内の親疎尊卑を識せず、信敬の心なく、三世の[四〇]因緣業果を信ぜず、現在に聖人の有るを信ぜず、一の法行なくして、唯貪欲・瞋恚・愚癡を行じ、[四一A]十惡を具足し、唯雜業を造りて一の善事なからん。願はくは我、彼の世界の中に於て當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、彼等諸衆生を憐愍するの故に、說法敎化して多くの利益を作し、衆生を救護して慈悲もて拔濟し、諸の苦を離れしめて樂中に安置し、彼の天人の爲に廣く法を說くべし」と。

[四二]目犍連よ、諸佛如來に、是の苦行希有の事あるは、諸の衆生の爲なり。目犍連よ、諸の菩薩(bodhisattva)等に、凡そ四種の微妙の性行あり。何等をか四と爲す。一に自性行、二に願性行、三に順性行、四に轉性行なり。目犍連よ(一)云何なるをか名けて自性行(prakṛti-caryā)と爲す。若し諸の菩薩、本性已來、賢良質直にして父母の敎に順ひ、沙門及び婆羅門を信敬し、善く家内の尊卑親疎を知り、知り已りて恭敬し承事して失なく、[四一B]十善を具足し、復更に廣く其餘の善業を行ぜば、是を菩薩の自性行と名く。(二)云何なるをか名けて願性行(praṇidhi-c.)と爲す。若し諸の菩薩、是の如きの願を發さん。「我何の時に於てか、當に佛・阿羅訶・三藐三佛陀等の十號具足と作るを得べきか」と。是を菩薩の願性行と名く。(三)云何なるをか名けて順性行(anuloma-c.)となす。若し諸の菩薩、[四三]六波羅蜜—何等をか六と爲す。所謂、檀波羅蜜(dāna-pāramitā)乃至、般若波羅蜜(prajñā-p.)なり—を成就具足せば、是を菩薩の順性行と名く。(四)如何なるをか名けて轉性行(avivarta-

【三八】佛刹。刹は國土、佛陀の住する國土なり。
【三九】般涅槃。譯して滅度又は圓寂といふ。佛陀のかくれたまふこと。
【四〇】因(hetu)は直接原因、緣(pratyaya)は間接原因、業(karma)は所作、果(phala)は結果。これ佛敎の因果論を示す十條目なり。
【四一】十惡、十善。十惡は(daśa-akuśalāni)は、殺生(prāṇātighātā)、偸盜(adattādānā)、邪淫(kāma-mithyācārā)、妄語(mṛṣā-vādā)、惡口(pāruṣyā)、兩舌(paiśunyā)、綺語(saṃbhinna-pralāpā)、貪欲(abhidhyāyā)、瞋恚(vyāpādā)、邪見(mithyā-dṛṣṭe)の十惡業なり。十善(daśa-kuśalāni)は右の十惡を離るゝ(virati)こと。
【四二】以下、四性行。「大事」I. p. 46ff.
【四三】六波羅蜜(ṣaḍ pāramitā)。波羅蜜は最上無極の意、菩薩思想に在りては、佛道の最上行としてこれを立て、佛果に到る行とするが故に、「到彼岸」(param+it)と譯せり。これは部派によりて四、六、十等の異分類あるも、本經は六分類を取ること注意すべし。六は布施(檀、檀那)、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧(般

(?) となす。我の、然燈世尊を供養し、彼の因緣に依つて、讀誦して則ち知れるが如き、是を菩薩の轉性行と名く。目揵連よ、是を菩薩の四種性行と名く。』

爾の時、世尊、舍衞國(Srāvasti) [44]祇樹給孤獨園(Jetavane Anāthapiṇḍikasya ārāma)に在り。時に、佛、食し訖つて、七日入定し、往昔の諸佛・世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を念じたまふ。爾の時、[45]阿難、作佛を得たるを以て、佛行に住したまへること、略して上に說けるが如し。七日を過ぐるの後、佛の所に詣り、佛足を頂禮して、却いて一面に坐し、佛に白して言さく、『世尊よ、希有なり、如來、身體淸淨に面色巍巍たること、我が前に見たるが如きも、今復常に倍して光明增盛し、世尊の[46]諸根は無量寂靜なり。何の[47]三昧(samādhi)に坐し、何の[48]法相をか念じたまへる』と。爾の時、世尊、阿難に告げて言はく、『是の如し、阿難よ、汝が說く所の如し。多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、若し定に入りて住して、往昔の諸佛如來を念じ、大自在神通智を得已りて、一劫に住し、若くは一劫(kalpa)を滅ぜんと欲し、百千億の諸佛の智慧を念ぜんに、而も如來智に障礙あるなし。何を以ての故に、如來は諸佛の智慧を具して、[49]彼岸に度るを以ての故なり。阿難よ、如來は一食し訖已りて或は一劫に住し、或は一劫を滅ず。住の多少を欲すること隨意自在にして、疲倦あるなし。何を以ての故に。如來は具さに諸佛の三昧を得て彼岸に度ればなり。諸の三昧の中、此を最も勝ると爲す。』

佛、阿難に告げたまはく、『我念ずるに、往昔無量無邊[50]阿僧祇劫(asaṃkhya-k.)の時、[51]世に佛有り。(1)帝釋幢(Indradhvaja)多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號す。能く一切無量の[52]衆生の爲に歸依處と作り、能く衆生の爲に慈悲の宅と作り、善能く一切の衆生を憐愍し、能く一切の衆生に安樂を與へ、大威德有りて無量の聖衆前後に圍遶せり。阿難よ、彼の帝釋幢如來に五百億の諸の聲聞衆あり、悉く皆阿羅漢果を證するを得て壽五千歲なり。彼の帝釋幢如來は一菩薩に記を授けぬ、「次

若)(dāna, śīla, kṣānti, vīrya, dhyāna, prajñā)なり。

【四四】祇樹給孤獨園とは、祇陀太子が樹木を布施し、給孤獨長者が、精舍を建立布施せるもの。普通に畧して祇園精舍といふ。

【四五】阿難(Ānanda)。十大弟子の一人、常に佛に侍せるを以て、多聞第一の稱あり。

【四六】諸根(sarva indryāṇi)とは、眼耳鼻舌身意の六根をいふ。

【四七】三昧、等持と譯す。精神の極めて統一せられたる域に名く。

【四八】法相(dharma-lakṣaṇa)とは、法門の義相。相はすがた、あや、模樣。

【四九】彼岸(para)。迷界を此岸、生死を海、悟界を彼岸に喩ふ。

【五〇】阿僧祇。無數と譯す。

【五一】以下の諸佛授記の一段、大事、卷三、二三〇頁以下參照。

【五二】衆生(sattva)は舊譯、新譯に有情といふ。いきとしいけるもの。

で當に佛と作つて上幢(Dhvajottama) 如來と號すべし」と。(2)阿難よ、彼の上幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて幢相(Dhvajaketu)如來と號すべし」と。(3)阿難よ、彼の幢相如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて喜幢(Dhvajarucira) 如來と號すべし」と。(4)阿難よ、彼の喜幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて十幢(Daśadhvaja?)如來と號すべし」と。(5)阿難よ、彼の十幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて難伏幢(Dhvajamaparājita)如來と號すべし」と。

(6)阿難よ、彼の難伏幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて明燈(Pradīpa)如來と號すべし」と。(7)阿難よ、彼の明燈如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて善明燈(Supradīpa?) 如來と號すべし」と。(8)阿難よ、彼の善明燈如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて建立(Pratiṣṭa?) 如來と號すべし」と。(9)阿難よ、彼の建立如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて善建立(Supratiṣṭita)如來と號すべし」と。(10)阿難よ、彼の善建立如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて龍仙(Nāgamuni)如來と號すべし」と。(11)阿難よ、彼の龍仙如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無比威德(Supratāpa)如來と號すべし」と。

(12)阿難よ、彼の無比威德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて聖所生(Āryajā?)如來と號すべし」と。(13)阿難よ、彼の聖所生如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、妙勝如來と號すべし」と。(14)阿難よ、彼の妙勝如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて仙勝(Munipravara) 如來と號すべし」と。(15)阿難よ、彼の仙勝如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて普陰(Saṁvṛta-skandha) 如來と號すべし」と。(16)阿難よ、彼の普陰如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて預相如來と號すべし」と。(17)阿難よ、彼の預相

如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて上族(Bandhuma)如來と號すべし」と。(18)阿難よ、彼の上族如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて自境界如來と號すべし」と。(19)阿難よ、彼の自境界如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無等(Asamasama)如來と號すべし」と。(20)阿難よ、彼の無等如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて拘留孫(Krakucchanda)如來と號すべし」と。(21)阿難よ、彼の拘留孫如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて大光明(Prabhaṃkara)如來と號すべし」と。(22)阿難よ、彼の大光明如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて離憂如來と號すべし」と。(23)阿難よ、彼の離憂如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて捨洪水(Oghaja)如來と號すべし」と。(24)阿難よ、彼の捨洪水如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて大力(Mahabala)如來と號すべし」と。(25)阿難よ、彼の大力如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて至彼岸(Pāraṁgata)如來と號すべし」と。

(26)阿難よ、彼の至彼岸如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて日如來と號すべし」と。(27)阿難よ、彼の日如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて寂滅如來と號すべし」と。(28)阿難よ、彼の寂滅如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて大震聲如來と號すべし」と。(29)阿難よ、彼の大震聲如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて自王如來と號すべし」と

(30)阿難よ、彼の自王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて寶王如來と號すべし」と。(31)阿難よ、彼の寶王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて宿王如來と號すべし」と。(32)阿難よ、彼の宿王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて微妙如來と號すべし」と。(33)阿難よ、彼の微妙如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて梵音(Brah-

masvara）如來と號すべし」と(34)阿難よ、彼の梵音如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて功德生如來と號すべし」と。(35)彼の功德生如來に、七十億の聲聞弟子有り。皆悉く阿羅漢果を證せり。其の佛の壽命、七萬年に足り、般涅槃の後、正法の世に住すること、滿三千歲なり。(36)阿難よ、彼の功德生如來は、復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて龍觀如來と號すべし」と。彼の龍觀如來、菩提を得已りて、諸の衆生の爲に世に住すること一劫なり。(37)阿難よ、彼の龍觀如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無畏上如來と號すべし」と。(38)阿難よ、彼の無畏上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて龍上(Nāgottama)如來と號すべし」と。(39)阿難よ、彼の龍上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて天德如來と號すべし」と。(40)阿難よ、彼の天德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて身分上(Aṅgottama)如來と號すべし」と。

(41)阿難よ、彼の身分上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無比月(Candrima)如來と號すべし」と。(42)阿難よ、彼の無比月如來は復た一菩薩に記を授けぬ「次で當に佛と作つて因上(Hetumanta)如來と號すべし」と。(43)阿難よ、彼の因上如來に、一千六百の聲聞弟子あり、皆阿羅漢なり。阿難よ、彼の因上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、次で當に佛と作つて紫上(Jambunadottara?)如來と號すべし」と。

(44)阿難よ、彼の紫上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて多伽羅尸棄(Tagara-śikhin)如來と號すべし」と。(45)阿難よ、彼の多伽羅尸棄如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて蓮華上(Padumottama)如來と號すべし」と。(46)阿難よ、彼の蓮華上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて憍陳如(Kauṇḍinya-gotra)如來と號すべし」と。(47)阿難よ、彼の憍陳如如來と同名號の者、一百佛あり。所住の劫を小蓮華と名く。彼の憍陳如如來、各各皆三

百億衆の聲聞弟子あり、皆阿羅漢なり。彼の諸の如來、一一の住壽各三百歳にして佛涅槃の後、正法の世に住するも、亦三百歳なり。(48)阿難よ、その最後の憍陳如如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて栴檀(Candana)如來と號すべし」と。

(49)阿難よ、彼の栴檀如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて明燈如來と號すべし」と。(50)阿難よ、彼の明燈如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて利益(Hiteṣa)如來と號すべし」と。阿難よ、彼の利益如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて善德(Supātra)如來と號すべし」と。彼の善德如來は佛眼を以て一切衆生を觀じ、諸の衆生を憐愍せんと欲するが爲の故に、佛種を斷ぜずして世に住すること千劫なり。彼の善德如來、多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に、三十二億【五三】那由他(nayuta)の聲聞弟子あり。皆阿羅漢なり。(51)阿難よ、彼の善德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて明星(Varuṇa)如來と號すべし」と。

(52)阿難よ、彼の明星如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて護世知足(Dhṛtarāṣṭra)如來と號すべし」と。彼、護世知足如來は無量那由他劫を過ぎて、然る後に佛と作れり。阿難よ、彼の護世知足如來に二十億の聲聞弟子有り、皆阿羅漢なり。(53)阿難よ、彼の護世知足如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、尸棄(Sikhin)如來と號すべし」と。阿難よ、彼の尸棄如來の成佛の處、劫を蓮華(Paduma)と名く。彼の劫内に於て、同號の尸棄多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、六十二あり、次第にして佛を得たり。(54)阿難よ、その尸棄如來の最も後に在りて菩提を得たる者は、復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて出生(Viruḍhaka)如來と號すべし」と。阿難、彼の出生佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、一切の諸衆生を憐愍するが故に、住世教化すること、滿二千劫なり。(55)阿難よ、彼の出生如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて善目(Sunetra)如來と號すべし」と。

(56)阿難よ、彼の善目如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて商主如來と號すべし」

【五三】那由他。萬億又は千億と譯す。

と。(57)阿難よ、彼の商主如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次に當に佛と作つて善生(Sujāta)如來と號すべし」と。(58)阿難よ、彼の善生佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は壽命少時にして、唯住すること一日なり。その中間に於て八萬四千の聲聞を教化し、悉く皆阿羅漢果を得しめたり。(59)阿難よ、彼の善生如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて梵德(Brahma-datta?)如來と號すべし」と。阿難よ、彼の梵德如來に三十二億の聲聞弟子あり、皆阿羅漢なり。彼の梵德如來の般涅槃の後、正法の住世すること滿三萬歲なり。(60)阿難よ、彼の梵德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて青蓮華(Utpala)如來と號すべし」と。(61)阿難よ、彼の青蓮華如來は復た一菩薩に記を授けぬ。「次で當に佛と作つて善見(Sudarśana)如來と號すべし」と。阿難よ、彼の善見佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に、三千億の聲聞弟子あり、皆阿羅漢なり。

(62)阿難よ、彼の善見如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて見眞諦(Arthadaśin)如來と號すべし」と、(63)阿難よ、彼の見眞諦如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて根(Mūla)如來と號すべし」と。(64)阿難よ、彼の根如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて紫色(Jāmbunada)如來と號すべし」と。(65)阿難よ、彼の紫色如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて爲他(Hitaiṣin)如來と號すべし」と。(66)阿難よ、彼の爲他如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて南斗宿(auṣadhin)如來と號すべし」と。(67)阿難よ、彼の南斗宿如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて娑羅(Sāla)如來と號すべし」と。(68)阿難よ、彼の娑羅如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて主領(Abhijit)如來と號すべし」と。(69)阿難よ、彼の主領如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次に當に佛と作つて大主領(Mahābhijit?)如來と號すべし」と。(70)阿難よ、彼の大主領如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて智勝(Jinavaruttama)如來と號すべし」と。(71)阿難よ、彼の智勝如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて普賢(Samantabhadra)如來と號すべし」と。

卷の第二

發心供養品第一の中

(72)阿難よ、彼の普賢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて月(Candrima)如來と號すべし」と。(73)阿難よ、彼の月如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて分陀利 Paṇḍarika)如來と號すべし」と。(74)阿難よ、彼の分陀利如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無垢(Vimala)如來と號すべし」と。(75)阿難よ、彼の無垢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて證我(Bhāvitātma)如來と號すべし」と。(76)阿難よ、彼の證我如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて大雨(Oghaja)如來と號すべし」と。(77)阿難よ、彼の大雨如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無畏(Abhaya)如來と號すべし」と。(78)阿難よ、彼の無畏如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて自光明(Svyamprabha)如來と號すべし」と。(79)阿難よ、彼の自光明如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて大力(Mahābala)如來と號すべし」と。

(80)阿難よ、彼の大力如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて日(Āditya)如來と號すべし」と。(81)阿難よ、彼の日如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて秋光如來と號すべし」と。(82)阿難よ、彼の秋光如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて熱光如來と號すべし」と。(83)阿難よ、彼の熱光如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて相(Ketu)如來と號すべし」と。(84)阿難よ、彼の相如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無比如來と號すべし」と。(85)阿難よ、彼の無比如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて勝上如來と號すべし」と。(86)阿難よ、彼の勝上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と

作つて相上(Ketuttama)如來と號すべし」と。(87)阿難よ、彼の相上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて娑羅王(Sālarāja)如來と號すべし」と。(88)阿難よ、彼の娑羅王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて身上如來と號すべし」と。

(89)阿難よ、彼の身上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無處畏(Akutobhaya)如來と號すべし」と。(90)阿難よ、彼の無處畏如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて化(Nirmita)如來と號すべし」と。(91)阿難よ、彼の化如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて寂定(Upaśānta)如來と號すべし」と。(92)阿難よ、彼の寂定如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて勝王(Jinendra)如來と號すべし」と。(93)阿難よ、彼の勝王如來、成佛の處、其劫を賢と名け、三百佛あり。皆同一號に、勝王如來と號しぬ。(94)阿難よ、彼の勝王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて一切事見(Sarvārthadarśi)如來と號すべし」と。(95)阿難よ、彼の一切事見如來に三億衆の聲聞弟子あり、皆阿羅漢なり。(96)阿難よ、彼の一切事見如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無憂(Aśoka)如來と號すべし」と。

(97)阿難よ、彼の無憂如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて龍上(Nāgottama)如來と號すべし」と。(98)阿難よ、彼の龍上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて閻浮上如來と號すべし」と。(99)阿難よ、彼の閻浮上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて尼拘陀(Nyagrodha)如來と號すべし」と。(100)阿難よ、彼の尼拘陀如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて廣信如來と號すべし」と。(101)阿難よ、彼の廣信如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて救脱如來と號すべし」と。(102)阿難よ、救脱如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて勝上如來と號すべし」と。

阿難よ、彼の諸の世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、各各次第して轉た相授記し、最後の

勝上如來に至るまでを、我身、悉く皆供養し承事せり。爾の時、世尊、偈(gāthā)を說いて言はく、

彼等諸の如來を　釋迦大師子は　佛の淸淨眼を以て　一切皆覩見したまへり
是の如き如來の智と　不思議の佛行とを　諸天諸人等は　悉く得て知る能はず
因果及び佛智　諸法顯現の相は　唯諸佛の境界にして　凡夫は知る能はず
說く所の諸佛の名に諸佛の行を顯現し　大威德の相のあること　佛眼を以て普く見たまふ
若し智慧有るの人　菩提を求めんと欲するに當りては　應に此佛名を讀むべし　久しからずして佛と作るを得ん

爾の時阿難、佛に白して言さく、『世尊、我曾て佛の金口もて說きたまふ所を聞き、聞き已りて繫心し、憶持して忘れず。謂ゆる諸佛の智は、無有礙、[1]無等等、無障礙なりと。世尊、如來は實に是の如きの智を知りたまふや否や。』

爾の時世尊、阿難に告げて言はく、『如來の智慧は具足して了知す。是の故に知見に障無く礙無し。如來、境界の寬狹を作さんと欲して、諸佛の智を念ずるに、分齊の少多、意に隨つて皆得。』と。爾の時阿難、復佛に白して言さく、『世尊、猶、尊者[2]阿尼盧豆(Aniruddha)の、淨天眼を得ること、人間に過ぐるが如し。是の如し、尊者阿尼盧豆は、淨天眼を以て能く一千世界を見るを得。如來は說いて「我見無邊なり」と言ふ。此義云何と』。佛、時に默然たり。是の如く再び問ひ、乃至三びを過ぎて、然る後に方に答へたまふ。

佛、阿難に告げたまはく『汝、聲聞の智慧を以て如來に比せんと欲する莫かれ。何を以ての故に。我今、淸淨の天眼の人眼に過ぐるを以て、(1)此の東方[3]恒河沙數の佛刹の中の、諸の菩薩等の初めて道心を發して諸の善根を種うるを見、(2)或は、東方恒河沙數の諸の佛刹の中の、無量の菩薩の記

【一】無等等(asamasama)とは、佛智に等しきものなきを無等といひ、佛と佛との智が互に等しきを等といふ。

【二】阿尼盧豆、十大弟子の一人。天眼第一の稱あり。千世界を見ること、A. III. 128に出づ。

【三】恒河沙數(Gaṅgā-vāli-kā)。恒河(ガンヂス河)の沙の數の如く多き、卽ち無限數を比喩する語。

別を得受するを見、(3)或は、東方恒河沙數の佛刹の中の、諸の菩薩等の菩薩行を行ずるを見、(4)或は、無量の諸菩薩等の、諸佛の邊に於て[四]梵行を修行し、後に[五]兜率(Tuṣita)天宮に生ずるを得、兜率より下りて母胎に入るを見、(5)或は、菩薩の母の右脇より誕育して生るるを見、(6)或は、菩薩の童子の法を行ずるを見、(7)或は、菩薩の宮內に在りて行欲の法を示すを見、(8)或は、菩薩の轉輪聖王の位を捨てて出家修道するを見、(9)或は、菩薩の[六]四種の魔を降すを見、(10)或は、菩薩の菩提樹(Bodhi-vṛkṣa)の下に阿耨多羅三藐三菩提を證得するを見、(11)或は、菩薩の菩提を得已りて[七]解脫の樂を受くるを見、(12)或は、菩薩の端坐思惟して[八]二種分別するを見、(13)或は、菩薩の[九]轉法輪の時を見、(14)或は、菩薩の諸の衆生の爲に壽命を捨てて無餘涅槃に入らんと欲するの時を見、(15)或は、菩薩の般[一〇]涅槃の後[一一]正法住世、像法住世の久近多少延促の時を見る。阿難よ、我、是の如く、東方佛刹の恒河沙等の諸佛の成道、及び滅度の後、正法像法の悉く皆沒盡するを見る。東方刹の如く、南西北方、[一二]四維上下も、亦復是の如し。』

爾の時世尊、阿難に告げて言はく、『阿難よ、我、念ずるに、往昔、無量無邊、阿僧祇、不可數、不可說劫を過ぎて、是の時、一轉輪聖王あり、名けて善見(Sudarśana)と曰ふ。四方を降伏して、如法に世を治む。彼の王の統ぶる所悉く皆豐樂にして、鞭杖を行はず、亦殺害する無く、兵戈偃息して如法に人を化す。阿難よ、彼の善見王の居住する所の城を閻浮檀(Jambunada)と名く。其の城、東西十二由旬、南北の面、各七由旬あり。

阿難よ、彼の閻浮城は、淸淨の莊嚴、殊特妙好にして、悉く四寶—黃金・白銀・玻瓈・瑠璃を用て莊飾する所なり。其の外、別に更た七重の城あり。彼の城、皆悉く七尋より高く、各厚さ三尋にして、而も彼の城頭の周匝に皆七重の欄楯あり。彼の諸の欄楯、雕刻精麗にして殊妙なること雙び少なり。亦た四寶—黃金・白銀・瑠璃・玻瓈を用て、成就する所なり。若くは、黃金の欄、黃金の鈎

【四】梵行(brahma-caryā)。梵天の行を意味することあるも、一般には「淸淨なる行」即ち佛法の修行を意味す。

【五】兜率。欲界六天中の中央に住す。下生成佛すべき位にある菩薩、必らずこの天にありて、修行すべしと信ぜらる。

【六】四種の魔(catvāri mārāḥ)とは、蘊魔(skandha-)、煩惱魔(saṃkleśa-)、死魔(maraṇa-)、天魔(deva-)なり。

【七】解脫(mukti)。煩惱を生存の繫縛と見、涅槃をこれより解放さるゝことゝ見る。卽ち涅槃の德性を積極的に喩示せ喩語なり。

【八】二種分別(dvi-vibhaṅga)とは、十二因緣を順觀し、逆觀するをいふ。

【九】轉法輪(dharma-cakra-pravartī)とは說法のこと。輪に一切を破碎する力用あり。以て一切の障礙を摧破する法に譬ふ。

【一〇】涅槃(nirvāṇa)とは語義、消滅。大悟して煩惱の熱火を消滅せる狀態を消極的に喩示する語。これに有餘依(sopadhiśeṣa)と無餘依(nirupadhiśeṣa)の別あり。前者は前業感果の肉身猶存するの意、後者は肉身死滅して法身に歸し業果餘燼なき意。而

柱、白銀の窓臺。若くは、白銀の欄、白銀の鈎柱、黄金の窓臺。若くは、玻瓈の欄、玻瓈の鈎柱、瑠璃の窓臺。若くは、瑠璃の欄、瑠璃の鈎柱、玻瓈の窓臺なり。而して、彼の七重の一一の城内に、皆七重の寶多羅樹（ratnatāla）有りて、行列し圍遶す。彼の樹の枝葉華果は、扶疎蓊鬱として敷榮し、人の樂み見る所にて、其の樹の根莖は、皆是四寶―黄金・白銀・玻瓈・瑠璃なり。金多羅樹は、金根、金莖、銀枝、銀葉にして、華果悉く銀なり。銀多羅樹は、銀根、銀莖、金枝、金葉にして、華果悉く金なり。若くは、是れ玻瓈もて多羅樹と爲せるは、玻瓈の根莖、瑠璃の枝葉、瑠璃の華果なり。若くは、是れ瑠璃もて多羅樹と爲せるは、瑠璃の根莖、玻瓈の枝葉、玻瓈の華果なり。彼の多羅樹には皆[一三]羅網あり。其羅網の間に悉く寶鈴を懸く。其の諸の鈴網は、皆七寶もて成る。所謂、金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・玻瓈なり。彼の諸城の外に、七重の塹有りて、周匝し圍遶す。彼の塹は甚だ深く、[一四]八功德水、湛然として盈滿し、種種の名花、所謂[一五]優鉢羅(utpala)花・[一六]波頭摩(paduma)花・[一七]拘勿頭(Kumuda)花・[一八]分陀利(puṇḍarika)花、水上を彌覆せり。彼の諸の塹の底は、皆是れ金沙、彼の塹の岸邊の周匝には、皆七寶の羅網ありて其上を彌覆す。

阿難よ、彼の閻浮城の四面に各一十六門あり。彼の諸の城門は、四寶―黄金・白銀・玻瓈・瑠璃の成せる所なり。金門に銀扇あり、銀門に金扇あり、若くは玻瓈の門に瑠璃を扇と爲し、若くは瑠璃の門に玻瓈を扇と爲す。彼の諸城門に各各皆却敵樓櫓あり。層閣の飛簷に珠の羅網を垂る。亦、七寶を以つて莊嚴する所、微妙精奇にして人の喜び見る所なり。其の諸の城門に皆七重の四寶―所謂金・銀・玻瓈・瑠璃の門障有り。安住して動かず、發起開閉に顯耀する光明愛す可く、樂む可し。彼の諸の城門は、――遠觀洞徹す。門若し開く時には、風自らに吹いて開き、門閉ぢんと欲する時には、風自らに吹いて閉づ。彼の七重の障は、風若し開く時には、門門相當りて悉く皆通見し、門閉ぢんと欲する時には、風自らに吹いて閉ぢ、七重の門障、流然として還遮る。阿難よ、閻浮檀城の

して後者に入ること、即ち證悟者の最終を般涅槃(parinirvāṇa)といふ。

【一一】正法とは佛滅の後五百年間をいひ、像法とはその後の一千年間をいふ。像は似の意。正法には敎あり、行あり、證あり。像法は之に似て、敎あり行あれども、證なし。

【一二】四維(catur-diśa)は四隅、東北、東南、西南、西北なり。

【一三】羅網(jāla)はあみ、淨土のかざりの一。

【一四】八功德水(aṣṭāṅgopetavāri)とは澄淨・淸冷・甘美・輕軟等の八の功德を具へたる水。

【一五】優鉢羅。靑蓮華と譯す。

【一六】波頭摩。紅蓮華と譯す。

【一七】拘勿頭。黃蓮華と譯す。

【一八】分陀利。白蓮華と譯す。

中に處して、一大池有り、名けて歡喜（Nandā?）と曰ふ。彼の池の東西、廣さ一由旬、南北廣さ半由旬なり。其の池の四岸に四重の塼壘あり。彼の塼、端正微妙なること喜ぶ可し。四寶—黄金、白銀、瑠璃、玻瓈もて成る所なり。彼の池の四面に皆閣道有り。而して彼の閣道端正なること喜ぶ可く、亦四寶—黄金、白銀、瑠璃、玻瓈もて合成せらる。黄金の閣道には白銀の階級あり。白銀の閣道には黄金の階級あり。玻瓈の閣道には玻瓈の階級あり。玻瓈の閣道には瑠璃の階級あり。彼の閣道の上に悉く却敵有り。而して彼の却敵や、嚴飾にして喜ぶ可く、七寶—黄金・白銀・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀及以瑠璃もて成ぜらる。彼の池の四邊に皆构欄有り、端正なること喜ぶ可し。亦皆四寶—黄金・白銀・瑠璃・玻瓈もて共に合成せらる。其の池、東面は黄金の构欄、其次の南面は白銀の构欄、其次の西面は瑠璃の构欄、其此の北面は玻瓈の构欄なり。黄金の构欄は、黄金もて柱と爲し、白銀もて窓臺とす。白銀の构欄は、白銀もて柱と爲し、黄金もて窓臺とす。玻瓈の构欄は、玻瓈もて柱と爲し、瑠璃もて窓臺とす。瑠璃の构欄は、瑠璃もて柱と爲し玻瓈もて窓臺とす。

阿難、彼の歡喜池を周帀圍遶して多羅樹あり、七重に行列す。彼の樹間の中、悉く羅網有り、七寶もて莊嚴す。其の羅網の間に皆寶鈴を懸く。多羅樹の外に七重の壍有り。端正なること喜ぶ可し。然るに彼の池中に、種種の花、所謂、優鉢羅花・波頭摩花・拘勿頭花・分陀利花有り。其の池の岸上に、陸生の花、所謂瞻婆華（campaka）・阿陀目多華（atimuktaka）・婆利師花（vārṣikī）・揵陀婆利師華（gandhavārṣikī?）有り。彼の歡喜池は、八功徳水もて充滿せられ、諸鳥渇する時には皆平飲を得べし。彼の池水の底には、皆金沙を布き、七寶の羅網は以て池上を覆へり。彼の妙羅網は、節節に皆七寶の鈴を懸く。

阿難よ、彼の閻浮城は、街巷平整にして其の街の兩邊に多羅樹有り。多羅樹の間に悉く羅網有り、其の羅網の間に節節皆七寶の鈴を懸く。其の七寶の鈴は微風吹動して妙音聲を出し、人をして樂み

聞いて心に歡喜を生ぜしむること、譬へば、人の五種音樂を作すが如し。阿難よ、彼の閻浮城の有ゆる人民は、皆悉く純直なり。彼の諸の人民は、相娛樂せんと欲するも、更に別の音無し。彼の鈴聲を聞けば卽便ち歡喜し、自然に歌舞して更に其の餘の音樂を憶念せず。阿難よ、彼の閻浮城には、常に種種微妙の音樂あり。所謂、鐃・鈴・螺・鼓・琴・瑟・箜篌・篳篥・笳・簫・琵琶・箏笛、諸の是の如き等の種種の音聲なり。復、無量の微妙の鳥音あり。所謂、鴝鵒・鸚鵡・孔雀・拘翅羅[19]（kokila）鳥、命命鳥等、無量無邊の種種の諸鳥、皆微妙殊異の音聲を出して、時として暫くも息む無し。地上には皆種種の妙華を散ず。所謂、優鉢羅花・拘勿頭花・波頭摩花・分陀利花及び諸の陸地の種種の雜花なり。阿難よ、彼の城には、苦惱、逼切、不如意の事あることなし。一切備りて悉く減少する所なく、是物豐饒にして飮食に乏しき無く、衆味具足す。悉く家居を滿して空地有るなく、人民熾盛にして威德巍巍たり。所住の城は、譬へば、北方[20]毘沙門王の阿羅迦（alakā）城の如く、等くして異り有るなし。

阿難よ、時に彼の世中に、一佛の出るあり、名けて寶體（Ratnāṅgi）多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひ、十號具足す。阿難よ、彼の寶體佛、未だ道を得ざるの前、菩薩と作れる時、常に清淨を樂しめり。彼の城の人民も亦清淨を樂しむ。時に、寶體佛の居止、閻浮檀城に側近す。若し晨朝に於て乞食を行ぜんと欲して、城邑聚落の中に入れば則ち無量千萬の諸天有り。下り來つて供養し圍遶し侍衞す。寶體如來、城に入らんと欲する時、足城門を按す。時に彼の城內の有ゆる人民、皆悉く諸天護持の神通力の爲の故に、彼の寶體佛を供養せんが爲の故に、糞穢を掃除し、香湯を地に灑ぎ、香泥を地に塗り、雜香花を散じて地上に滿て、處處に皆妙好の香鑪を安じて、無價の香を燒き、種種の旛・幢・蓋等を張懸す。是の如き無量の供養の具を以て、用て寶體如來を供養す。

爾の時、一城外の村人あり。城內の人と共に婚娶を結ばんと欲して來つて城邑に入る。彼の人、

【一九】拘翅羅。鵠鵑と譯す。

【二〇】毘沙門。須彌山の四方天の一。北方に居す。

城を見るに、端嚴殊妙にして世に希有なる所、小より已來、眼に未だ覩ざる所、心大に驚怪して、城内居住の人に問うて曰はく、「此の城、今は何事をか作さんと欲する」と。彼の城内の人、村人に報へて言はく、「此の處、一如來ありて、世に出づ。名を寶體多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ふ。久しからずして、此の城に入つて乞食せんと欲す。是の如きの故を以て、灑掃莊嚴す」と。更に、復、村人に向つて、廣く如來の功德の無量無邊なるを說き、亦、佛德、多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の十號具足するを讃ず。是の如く、復、法寶の有德を歎じ、是の如く、復、僧寶の有德を稱す。彼の人、三寶の功德を聞いて心に歡喜を生じ、踊躍無量にして、是の如き念を作す。「寶體世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、希に世に現じたまふ。我、今、寶體佛の所に詣るべし」と。彼の人、内心に是の念を作し已るや、即ち、城邑諸聚落の人と共に、相將ゐて往いて寶體佛の所に詣る。佛所に至り已りて、是の如きの念を作す、「若し是の如來、一切智を得て我心を見たまはば、應に先づ我と共に語言慰喩すべし」と。

時に寶體佛、彼の人の心を知りたまひて、先づ即ち彼の村人と語りたまふ。時に彼の村人、彼の如來と先に於て語るを得已りて、心に歡喜を生じ、踊躍無量、既に其の願を滿して、即ち如來に、後日、食を施さんを請ふ。時に佛、默然として彼の人の請を受けたまふ。時に彼の村人、如來の己が請を受けたまふを得已りて、復、歡喜を生じ、速に自家に向ひて具さに飲食を辦ず。時に四天王(Caturmahārājika)、及び、梵・釋等の諸天大衆、種種の天の諸供具を齎持し、來りて如來に獻ず。時に彼の村人、自家に至りて、其の夜種種の美食、飡噉舐嗽、可食の味を辦具し、辦具し已訖るや、明の清旦に起きて家地の上を掃除清淨にし、香泥を地に塗り妙香水を以て重ねて其上に灑ぎ、復、種種の雜妙好華を散じて牀座に敷置し、即ち使人を遣はして、往いて佛に白して言さく、「如來、若し時節の至るを知り給はば、願はくは我家に赴かれんを」と。時に寶體佛、晨朝時に衣を著け鉢を持

し、千億衆の聲聞比丘の與に前後圍遶せられて、受請の家に到りたまふ。彼の家に到り已るや、諸の比丘等、各大小に隨ひ次に依りて坐す。時に彼の村人、寶體佛の安坐したまへるを見已訖り、即ち種種妙好の飲食を將つて、自ら手もて擎持して以て如來に奉り、白して言さく、「世尊、唯願はくは佛及比丘僧(bhikṣu-saṅgha)の意に隨つて飲食したまはんを請ふ」と。及び諸大衆受食し已訖るに、食盡く可らず。彼の人念を生ずらく、「此の百味の食、既に盡す可らず。必らず是れ、如來、威神德力もて充溢せしめたまふならん。餘食既に多し。我今、如來を看たてまつる所の白衣[三一]の人衆を喚んで、此食を布施すべし。皆食して飽滿せば、然る後に我が心大いに歡喜を得ん」と。復此念を生ずらく、「希有なり希有なり、不思議の法なり。此寶體佛の威德力大にして、我が眷屬をして、喚ばずして自ら來つて我を佐助せしむ。我亦曾て一人をも借倩はず。又、我、亦復、多功を用ひずして、衆事一時に辨具するを得たり」と。時に寶體佛、飲食し訖已りて、彼の村人の爲に應の如く說法し、其をして歡喜して希有の心を生ぜしめ、彼の人を正法中に安置したまふ。及び彼の大衆、皆說法を聞きて悉く各歡喜し、或は道を得る者あり。乃至、起つて、還、本處に歸向したまふ。

時に、彼の村人、寶體佛の說法教化を聞き、法を聽受し已りて歡喜踊躍し、心に[三二]弘誓を發し、是の如き言を作しぬ、「願はくは我、未來に寶體如來の得たまふ所の一切諸法に如似たるを、我皆具足せん。又願はくは我、大衆の中に於て是の如く法を說き、一切の人をして歡喜信受せしむること、今の世尊寶體如來の比丘衆を將ゐて安庠として行くが如きと、一種にして異なる無けん」と。時に、彼の村人、如來を供養し、尊重恭敬の心を具足し已り、佛に隨つて寺に向ひ、鬚髮を剃除し、俗を捨てて出家し、比丘と成るを得たり。時に彼の寶體如來、世に住して諸の衆生の爲に說法し已訖りて、般涅槃に入りたまふ。涅槃の後、無量無邊の天人衆等、佛身を[三三]闍維し、復、無量の供養の具を以つて、闍維所に於て而も供養を設く。時に彼の比丘、既に如來の般涅槃に入りたまへるを聞き、

【三一】白衣。俗士のこと。印度にては一般の人は白衣を着け、出家は壞色の衣を著けたり。

【三二】弘誓(pranidhana)は大なるちかひ、大なる理想に對するちかひ。

【三三】闍維(jhapita)は荼毘に同じ。焚燒すること。

大憂惱を生じて是の如き念を作さく、「我、今、闍維所に往至すべし。若し彼の處に至らば、應に異法を得べし」と。是の時、比丘、速疾に彼の闍維所に往き詣り、彼の處に到り已りて、卽ち異寶を得たり。初めて得たる時、謂へらく、「彼の珍寶、甚だ清淨ならず、少しく塵垢有り」と。

爾の時、比丘、細かに刮拭して看るに、卽ち清淨の眞瑠璃寶にして、價數百千兩金に直るを知りぬ。彼の[24]摩尼寶(maṇi-ratna)の安置の處、晝も夜も異なるなく、夜も日の現ずるが如し。一切の房舍、一切の院落、皆悉く光明あり。是の時、天人、彼の寶體佛の舍利を收め已りて、塔(stūpa)を起造す。時に彼の比丘、亦、心念を生ずらく、「我、今、此の摩尼寶を以て[25]浮圖(stūpa)に安置し、承露盤の上に、寶瓶を作るべし」と。此の念を生じ已りて、塔所に至り、彼の所に至り已るや、是の如きの念を作す、「我が此の摩尼の寶珠は、價百千兩金に直ひす。我今是の摩尼寶珠を以て、塔上に安ぜん。彼の如來は是れ我の師たるが爲なり。是の故に我今、此の摩尼を持して、塔上に置かんに、彼の摩尼寶の光明は、彼の塔の上を照すこと、無量千歲ならん」と。而して彼の比丘、復無量種種の燈明を然し、千年に足り滿ちて彼塔を供養し、恭敬尊重すること千年に滿ちて心常に念佛三昧を捨てず。彼の比丘、[26]清淨戒を持するが故に、加ふるに復、如來の塔を供養するが故に、是の因緣を以て命終の後、生死中に在ること無量無邊百千萬世にして、人天の福樂果報を受け、曾て惡道中に墜墮せず。

[27]阿難よ、時に彼の比丘、百千無量無數阿僧祇劫を過ぎて、復、一佛の世に出現したまふに値へり。號して能作光明如來と曰ふ。時に彼の比丘、佛を供養し、禁戒を修持し、梵行清淨にして出家すること前の如く、復、此の心を發す。「願はくは我、未來、此の功德に藉りて、生生世世惡道に生ること莫らんを」と。時に、作光佛、彼の比丘の心に願ふ所を知り已りて、卽ち授記を與へて語げて言はく、「仁者、汝、來世に於て、百千無量無數阿僧祇劫を過ぎて、當に佛・多陀阿伽度・阿羅訶・

【二四】摩尼。如意寶珠と譯す。

【二五】浮圖は塔なり。

【二六】清淨戒を持すとは如法に戒を持ちて、毫も犯さざるをいふ。

【二七】以下然燈佛の記事、「大事」I. p. 193—248. 參。

三藐三佛陀と作るを得べし。號して然燈と曰ふ。彼の然燈佛、菩薩と作る時、末後の身に於て兜率天に生れ、兜率天より降神來下して右脇より入りて母胎に託し、住居すること十月、十月を滿じ已りて一心正念にして生れんと欲するの時、光明を放ちて彼の佛刹を照すに、皆悉く遍滿す。」

爾の時菩薩、既に將に生れんと欲す。其の母、王[二八]──智者主に諮りて言く、「大王、當に知るべし。我が意、園林の內に往いて、遊戲觀看せんと欲す」と。王、夫人の是の如く語るを聞き、卽ち勅を出して、城內の大臣、及び諸の豪富、長者、[二九]居士、商賈人に告げて言はく、「我今、夫人を園林に出して、觀看遊戲せしめんと欲す。汝等、家に當つて各城內の街衢を莊嚴し、悉く清淨ならしむべし。有ゆる穢惡・瓦礫・糞堆は、並に宜しく除却すべし。香湯を辦具して道に灑散し、香泥を地に塗り、妙香華を以て其上に布散し、處處に妙寶の香鑪を安置して衆名香を燒き、又復、種種の寶瓶を安置して諸香水を盛り、好淨花──優鉢羅花・波頭摩花・拘勿頭花・分陀利花を著けて瓶內に置き、處處に芭蕉の樹を安置せよ。芭蕉樹の大小高下に隨つて、各雜色種種の幡幢を懸け、其諸幡幢は衆色間り雜え、其の幢樹の內に、復、各〻寶の網羅を垂れよ。眞珠の瓔珞ある羅網の節目に悉く寶飾ありて、夜の淨天に星辰の出現するが若くせよ。又、處處に於て悉く各衆寶の明鏡を施懸すること猶、日月の如くせよ。或は種種雜色の流蘇を懸け、或は處處に金銀の寶帶を垂れよ」と。彼の城の街巷の是の如き種種の精麗なる莊嚴は、彼の天神[三〇]揵闥婆城（gandharva-nagara）に等しく、一種も異ることとなし。

時に王夫人、千の左右と共に寶輦轝に乘じ、伎樂の引導あり、種種の音聲もて前後圍遶し、街巷を塡滿して宮殿より出で、四面觀看しつゝ安庠として行くに、威德特尊、勢力廣大にして衆中に處在すること、與に比する者なし。彼の園林に向ひて既に園林に到り、漸くにして河岸に趣く。河岸に至り已りて卽ち船に上り、河中に遊入して中流に至り已るや、忽然として自ら一大[三一]燈明の上下縱

【二八】父王の名、「大事」は Arcimat とし、母后の名を Sudipā とす。

【二九】居士（kula-pati）とは普通の家主をいふ。

【三〇】揵闥婆城、喜見城、蜃氣樓のこと。

【三一】燈明「大事」I. p. 217）には島（dvipa）とせり。次句に渉草叢ありとするには通ずるも、然灯佛の名義には灯（dīpa）とするは適切なり。ために「大事」には、然灯佛の名義の爲には、生時光明ある故にいへる註を附す。何れにしても然灯佛の名稱の起原には深き關係あるものとして注意を要す。猶兩語は共に俗語化しては dīpa となる。恐らくはこの佛名は最初俗語文學中に創作されたるものなるべし。

廣共に十二由旬なる有り、其の燈明の內に莎草の叢有り、高下四指、其の色の艾白柔輭なる、猶、迦耶隣提(gajarindhi? 老象)の如く、妙香氣を出すこと、又、[三二]瞻婆・波利師華の如し。其の園林の內に、種種の花及び種種の果、種種の樹木を出し、天上人間の有ゆる樹木・名華・美果・悉く此園に滿つ。時に菩薩の母、仰いで虛空を觀、安庠として右手に樹枝を攀引するに、枝卽ち垂下す。時に王夫人、卽ち右手を以て樹枝を捉ふるに、右脇の間より一童子を出す。端正熹ぶべし。名けて然燈と曰ふ。自然にして手の十指の掌を合す。童子生るる時、大光明を放ち、彼の佛刹を照して皆悉く充滿し、天上より卽ち無量の諸花を雨す。所謂、[三三]曼陀羅花(mandārava)、摩訶曼陀羅華(mahāmandārava)・[三四]曼殊沙華(mañjuṣaka)・摩訶曼殊沙華(mahāmañjuṣaka)・優鉢羅華・波頭摩華・拘勿頭華・分陀利花なり。又、無量の栴檀(candana)散香を雨して、充滿遍布すること十二由旬なり。復、種種無量無邊の天の諸伎樂を雨し、鼓せずして自ら鳴る。又、無量の歌讃の音聲を出す。音聲の內に言辭あり、唱へて云はく、「無量に燈明と作らん、無量に燈明と作らん」と。是、彼の菩薩の瑞應の號なり、故に然燈と稱す。

爾の時、然燈菩薩大士、諸根具足し相好圓滿にして乏少する所なく、日日に長大して、樓上に在りて五欲の樂を受く。然るに彼の童子、五欲を受くる時、復、歡樂すと雖も忽ち自ら念を生ずらく、「世間の愛欲は虛幻のみ、暫時須臾にして破壞し、久しからずして磨滅す」と。此く思惟し已りて家內より出で、鬚髮を剃除し身に袈裟を服して、出家するを得たり。出家の後、菩提を求めんと欲して漸く樹下に向ひ、正覺を修習す。正覺を證せる後、[三五]佛眼を以て一切世間を觀て、卽ち此の念を生ずらく、「誰有つてか最も初めて正法を聞くを得ん」と。卽ち、世間を見るに、空にして化者無し。再觀し三觀して、亦世間を見るも、聞法及び可度の人有るなし。彼の佛、世にあること三千年を經て、獨一無侶にて端坐す。三千年を過ぎて後、彼の然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、

【三二】瞻婆波利師華は婆波は瞻波婆の寫誤。

【三三】曼陀羅華。天妙華と譯す。

【三四】曼殊沙華。如意華と譯す。

【三五】佛眼。五眼中、最高にあり。五眼とは肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼なり。

是の如き念を作す。「此の衆生の輩は[三六]五欲に耽著して、放逸多時、迷荒厭く無し。我今、當に化して彼をして覺知せしむべし」と。此の念を作し已りて、燈炷(Dīpavatī)城より出で、空中に住して一城を化作し、閻浮檀と名く。彼の城内に於て、種種の瑠璃(vaidūrya)の諸屋を化作し、其の城外に於て、又復、種種の七寶の多羅(tala)樹を化作して、七重に行列す。七寶の莊嚴は、上に說く所の城の莊嚴事の如し。其の城の縱廣、東西南北、五千由旬、又、其の城内の莊嚴の具は、[三七]忉利天(Trāyastriṃśa)の如くにして一種も異るなし。彼の城内の人壽は三千歳なり。此の閻浮提(Jambu-dvīpa)の諸衆生等、悉く遙かに彼の一切人民の歡樂を受け自ら五欲を恣にするを觀、悉く見、悉く知り、悉く聞き、悉く羨む。時に、然燈佛、是の如くにして三千歳を過ぎて後、是の念を生じて言はく、「我今、神通變化を作し、閻浮の人をして厭離の想を生ぜしむべし」と。

時に閻浮の人、然燈佛所居の城の四壁の、皆、猛火熖熾を出すを見て、大恐怖を生じ、共に相謂つて言はく、「嗚呼、彼の城や、自然に燒盡し久しからずして漸く滅びん」と。時に、閻浮提の一切の人民、諸根成熟して應に佛化を得べし。彼等人民、彼の化城の四面に火起り、熾盛に燒然するを見て怖畏驚恐し、歸依の處を求むるも救護する者なく、解脫を求めんと欲するも能く度する者無し。此の言を發し已りて願ふらく、「彼の城、下り來りて此に至れ。或は復、此城、上りて彼に至れ。我等一切、當に彼の火を滅すべし」と。是の時、天(deva)龍(nāga)夜叉(yakṣa)乾闥婆(gandharva)人非人(manuṣya-amanuṣya)等、彼の城を出でて我等に告げて言はく、「何の故に此の城、自ら火を出して燃ゆる」と。時に、彼の城の前に忽爾として自然に[三八]三階道を出す。一は金の成ぜる所、二は銀の成ぜる所、三は玻璃もて成る。其階道の間に、各、雜寶の多羅樹ありて行る。彼の多羅樹、大聲を出して云はく、「汝等人輩、宜しく速かに聚集して一處に會すべし。若し、汝の心に、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を見んと欲せば、彼の佛、久しからずして閻浮提に下らんと欲す」と。時

【三六】五欲(pañca-kāma-guṇa)、眼耳鼻舌身の五官の所欲の對境。

【三七】忉利天。譯して三十三天といふ。六欲天の第二にして、須彌山の頂上にあり。

【三八】三階道。天と地との間に亘る三階道は、恐らくは虹より想ひ得たるものか。釋尊の三十三天より下れる時にも、三階道の事あり。

に閻浮提の一切の人民、皆悉く往いて彼の閻道の所に詣るに、然燈佛の城內より出でて閻道より下りたまふを見る。諸の梵・釋・四天王等、前後に圍遶す。閻浮提の人、彼の佛を見已りて皆大いに歡喜し、各是の心を生ず、「我等、前に如來を覩んと欲して、今已に見るを得たり」と。復更に、念を生ず、「我、各、先に佛に是の事を問はん。此の城、何が故に是の如く火に燃ゆるぞ。如來、應に我等の爲に解釋すべし」と。時に然燈佛、足もて地を踏み已るや、其の諸の人民、悉く各皆「我、獨、頭面もて佛を頂禮せん」と念じ、而して此の言を發す、「我、先に於て、佛足を頂禮するを得ん」と。

『時に然燈佛、師子座に坐し、坐し已りて彼の衆生の爲に說法したまふ。所謂、[三九]布施の事、持戒の事、離欲の事、[四〇]漏盡を得るの法を讚歎し、出家功德の利、助清淨の法を說きたまふ。如來、此の閻浮提の人の佛の說法を聞きて信樂聽受し、歡喜心を生じて心意柔輭に、心に無礙を得たるを見、如來、更に復爲に諸の法を說くこと、往昔の佛が、衆生の機根を知りて說法し、其をして歡喜せしめたるが如く――所謂、[四一]苦集滅道――世尊、今復、閻浮人の爲に、具足して此の[四二]四諦の法を說きたまふ。時に然燈佛、初日の說法に、敎化度脫すること六百億人、悉く皆漏盡して阿羅漢を證し、心に自在を得たり。第二日に五百億人を化し、第三日に四百億人を化し、第四日に三百億人を化し、第五日に二百億人を化し、第六日に一百億人を化し、第七日に五十億人を化し、悉く皆上の如く阿羅漢を得しむ。第二の一七日內に至りて一百億人を敎化度脫し、最後第三の一七日內に、復、七十五億の衆生を度す。悉く、上利、漏盡、意解を得て、阿羅漢を成ぜり。彼の然燈佛、世に住まること一劫なり。諸比丘、聲聞弟子と共に、世間人の爲に利益を作さんが故なり。』[四三]迦葉遺(Kāśyapīya)師、是の如き說を作す

『阿難、諸佛は次第に相傳して授記す。其の然燈佛は、初善根を種ゑて阿耨多羅三藐三菩提を求め、乃至、法輪を轉じ、住世一劫す。衆生を化せんが故に。』[四四]摩訶僧祇(Mahāsāṅghika)師、是の如き說を作す。

【三九】布施等。布施・持戒は釋尊が常に俗士に說ける施論・戒論に當る。その目的は生天にあり。離欲・漏盡は、涅槃の道なり。次の出家功德は漏盡なり。助清淨法は施戒なり。

【四〇】漏盡法(āsrava-kṣaya-dharma)とは、身口より出でて他をけがすの意。煩惱の異名也。これを盡す法とは、佛法のこと。

【四一】苦(duḥkha)は人界の果報、集(samudaya)は苦の原因、滅(nirodha)は涅槃の果、道(mārga)は涅槃に至るの道。苦集は迷界の因果、滅道は悟界の因果。

【四二】四諦(catvāri satyāni)とは四重の眞理、卽ち苦集滅道をいふ。

【四三】迦葉遺は小乘の分派たる十八部中の一、飲光と譯す。

【四四】摩訶僧祇は小乘分派たる十八部中の一、大衆と譯す。

「阿難、其然燈佛、菩薩たりし時、船上にありて五欲を受くと雖も、世間の中に於て深く厭離を生じ、是の如き念を作さく、「我、船に坐して河の彼岸に渡るべし」と。亦、此の心を發するや、卽ち一大清淨の蓮華を生じ、然燈童子、其の華上に於て結跏趺坐し、坐し已るや蓮華卽ち自らに還合す、猶し象蓮の如し。時に、諸の婇女、童子を求覓めて所在を知る莫く、卽ち大王に奏す。爾の時大王、使を四方に遣はし、東西南北を推求し尋覓するも、其の所を知らず。乃至、四維も亦、處を知らず。然燈菩薩、大威德、神通力を以ての故に、彼の船上の蓮華臺中に在りて、結跏趺坐するに、而も身現はれず。卽ち[四五]五通を得て虛空に飛騰し、乃至、菩提樹下に向つて一切智を得、及び法輪を轉じて說法し、六十八億百千人を度脫す。俱に皆悉く共住して世間に在り、衆生を敎化したり。」「[四六]尼沙寨(Mahīśasaka)師、是の如き說を作す。

【四五】五通(pañca-abhijñā)とは五種の神通。天眼・天耳・神足・宿命・他心の通力をいふ。宿命とは宿世の命運を洞觀するをいふ。

【四六】尼沙寨は小乘十八分派中の一。化地と譯す。

卷の第三

發心供養品第一の下

爾の時、世尊、舍衛城に在り。阿難に告げて言はく、『阿難よ、諸佛菩薩は晝夜常に一切諸法を説き、[一]四種攝(catvāri saṅgraha vastūni)ありて衆生を攝す。何等をか四と爲す。一には布施(dāna)、二には愛語(priya-vāditā)、三には利益(artha-caryā)、四には同事(samānārthatā)なり』と。

爾の時、阿難、座よりして起ち、衣服を整理し右肩を[二]偏袒し、十指掌を合せて右膝を地に著け、而して佛に白して言さく、『世尊よ、如來は往昔、幾の佛を供養して阿耨多羅三藐三菩提を求め、何の佛の邊に於て諸善根を種ゑて、未來世の爲に菩提を求めたまひしか』と。

佛、阿難に告げたまはく、『諦かに聽き諦かに受けて、善く之を思念せよ。今當に汝の爲に、彼の如來諸佛の名字、并びに及び善根を種うる所の處を説くべし。

[三]阿難よ、我念ずるに、(1)往昔、佛有りて世に出づ。號して然燈多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へり。彼の佛の邊に於て諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(2)次で、復、一佛、世に出現して、世無比と號しぬ。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(3)次で復、一佛世に出現し、蓮華上(Padumuttama)と號す。我、時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(4)次で復、一佛世に出現し、最上行と號す。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(5)次で復、一佛世に出現し、德上名稱と號す。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、

【一】四攝。菩薩の行法として、六波羅蜜と共に、大乘佛典中に特に重要視せらる。四攝中に於て、第四の同事とは、形を他に同ずるものにして、慈悲化他の至極なり。第三の利益とは又利行と譯せらる。

【二】偏袒(uttarā-saṅgaṃ kṛtvā)とは片袖ぬぐこと。衣服整理以下、右膝着地は、一般に佛に對して敬意を表する儀禮なり。

【三】以下、燃燈佛以來の十五佛の傳燈を明す。

未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(6)次で復、一佛世に出現して釋迦牟尼と號す。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(7)次で復、一佛世に出現して號して、帝沙(Tiṣya)と曰ひぬ。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(8)次で復、一佛世に出現したまひ、號して弗沙(Puṣya)と曰ふ。我時に、彼の佛世尊を供養して、諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(9)次で復、一佛世に出現し、見一切利(Sarvâthadarśin)と號す。我時に、彼の佛世尊を供養して、諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(10)次で復、一佛世に出現して毗婆尸(Vipaśyin)と號す。我時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(11)次で復、一佛、世に出現し、號して尸棄(Sikhin)と曰へり。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(12)次で復、一佛、世に出現したまひ、毗沙門(Vaiśramaṇa)と號しぬ。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。

(13)次で復、一佛、世に出現し、拘留孫(Krakucchanda)と號しぬ。我時に、彼の佛世尊を供養して諸の善根を種ゑ、乃至、梵行とて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(14)次で復、一佛、世に出現して拘那含牟尼(Kanakamuni)と號せり。我時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑ、乃至、梵行もて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

(15)次で復、一佛、世に出現し、號して迦葉(Kāśyapa)と云ひぬ。我時に、彼の佛世尊を供養し、

諸の善根を種ゑ、乃至、梵行もて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。

阿難よ、我、彌勒菩薩の邊に於て、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。

而して偈有りて說かく、

『此佛大威德あり　離欲寂靜を得たり
釋迦牟尼佛　皆悉く供養し來りぬ』

爾の時阿難、佛に白して言さく、『世尊、如來は、彼等諸佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を供養したまふに、何等の供養の具を將つて、彼の佛を供養し、諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたまひしか。』

四 佛、阿難に告げたまはく、『我念するに、往昔無量世を過ぎて、一國王有り、名けて降怨(Vāsava)と曰ふ。是れ 五 刹利(kṣatriya) 種にして 六 灌頂位を紹げり。其の王、福德ありて壽命極めて長く、端正にして喜ぶ可く、名稱遠く聞えぬ。阿難よ、彼の降怨王居住の處に一大城有り、名けて 七 蓮華(Paduma)と云ふ。彼の王、此の城中に於て治化して宮殿を安置す。彼の城、東西十二由旬、其の南北面は七由旬に經る。土地調適にして雨澤時を以てし、五穀豐熟して乏少する所無し。多く人民有りて塡滿充塞し、間に空處無し。園苑の樹林は、華果具足し、泉流池沼は、水常に湛然たり。街巷の兩邊は皆店肆を安んじ、去來の市買は暫時も停る無きこと、猶ほ北方毘沙門の城の阿羅迦と名くるものの如し、東西南北、等しくして異り有るなし。彼の蓮華城は、是の如く莊嚴して種種具足せり。

阿難よ、彼の降怨王に一豪富大婆羅門有り。名を日主(Sūryapati?)と爲す。勇健强力にして、多饒の財寶あり、象馬奴僕・六畜牛羊、種種皆豐かにして乏少する所無し。其の庫藏內は、純ら是れ異類の黃金・白銀・眞珠・珍寶・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀、悉皆備具して、一に北方毘沙門王の如し。阿難よ、時に彼の日主大婆羅門、特に彼王の爲に心に愛重せられ、恒に相伴偶して曾て暫くも離れず。

【四】降怨王の傳、四分律の所傳に最も一致す。
【五】刹利は刹帝利(Kṣatriya)の略。四姓の一。武士階級。
【六】灌頂(mūrdha-abhiṣikta)とは、四大海水を以て頂に灌ぐこと、王位を繼紹する時の聖式。
【七】四分律に鉢摩大城とあり。

日日相見ゆるも厭倦の心無し。阿難よ、彼の降怨王、時に一事有り、將に日主婆羅門に付して、判じて好く斷決せしめんとす。日主、法の如く分判し已りて後、彼の王の意に入る。王、日主婆羅門の所に於て倍歡喜を生じ、半國を分割して婆羅門に與へ、封授して王と爲し、其をして治化せしむ。時に降怨王、彼の日主婆羅門王の爲に、別に更に城を立て、名けて埏主（＝提浮婆帝 Dīpavatī）と爲す。東西南北の街衢巷【八】術、城郭の莊嚴なること蓮華城の如く、一も異ること有る無し。阿難よ、彼の日主王に、一の夫人有り。名けて月上と爲す。阿難よ、然燈菩薩、兜率より下りて降神の時、日主宮の月上夫人の右脇に於て入胎して端坐し、出生して成道し、說法して人を化し、皆阿羅漢果を得たること、上の因緣然燈菩薩本行經に說くが如し。時に然燈佛彼の一城に城りて次第に居住し、說法して人を度したまへり。

時に父日主、常に四事を以て彼の佛を供養し、尊重恭敬すること、佛の歎ずる所の如し。阿難よ、其の降怨王、漸漸傳聞すらく、「彼の埏主城、日主王宮の第一大妃、月上夫人、一童子を生み、名けて然燈と曰ふ。端正にして意ぶ可き、世間に雙び無く衆相の具足すること譬へば金像の如し。童子生るるや、將ゐて相師たる國內の大智婆羅門の所に詣り、敎令して、童子の是の如き相貌云何を占相せしむ。彼の相師言はく、「此童子は福德もて莊嚴す。若し家內に在らば、轉輪王となりて四天下を化し、大地主と作つて七寶(sapta-ratna)【九】——一に金輪寶(cakra-ratna)、二に神珠寶(maṇi-r.)、三に玉女寶(strī-r.)、四に象寶(hasti-r.)、五に馬寶(aśva-r.)、六に主兵臣寶(grhapati-r.)、七に主藏臣寶(pariṇāyaka-r.)を具足すべし。復千子あり、悉く皆端正にして丈夫の相を具し、能く怨敵を摧きて威大地を被ひ、四海山林降伏せざるなく、國土安寧、雨澤時を以てし、五穀豐熟し人民安樂に、苦惱有るなく、疾病有るなく、兵戈を用ひずして如法に治化せん。若し、家を捨出せば、當に佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得て、十號具足し、名稱遠く聞ゆべし。阿難よ、彼の童子家を捨て丶出

【八】術はみち、又はちまたのことなり。

【九】七寶。この七寶は轉輪王に必要なるものなるを以て、これを輪王七寶といふ。

家し、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、及び法輪を轉じて、名稱遠く聞ゆること、上に說く所の如し」と。

時に降怨王、是の如き念を作す、「希有なるかな。世尊の出世は甚だ難し。時時に一たび聞くも、復、覩見し難し」と。是の時降怨王、即ち使人を遣はして日主の所に向ひて是の如き言を作さしむ。「我今、王の大夫人の好童子を生み、衆相の具足せること上に說く所の如きを傳聞す。我今、彼の然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を請ぜんと欲す。我が所に至り蓮華の城に住して、我が微供を受けたまへ。王若し遣はし來らば、彼此益を蒙らん。如しそれ我に放さずんば、當に四種の兵を嚴備して往くべし」と。時に彼の使人、此の語を受け已るや、延主城日主王の所に往き、具さに此の語を以つて日主王に白す。

時に日主王、此の語を聞き已りて、悵怏憂愁し、心懷樂まず。時に日主王、群臣を集聚し、具さに上の事を以て向つて之を說くらく、「汝等、思惟せよ。彼に是の言有り、何に報答せんと欲するぞ」と。時に諸の群臣、共に王に白して言はく、「大王當に知るべし。此の如きの事、還つて然燈佛に諮問すべし。何を以ての故に。然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は大慈悲あればなり」と。時に日主王、諸臣に報へて言はく、「我が心亦、是の如きの憶念有り」と。時に日主王、諸の群臣と共に、躬自ら然燈佛の所に往詣す。乃至、彼の佛、王を慰喩して言はく、「大王、心を安じて驚く莫れ、怖るる莫く、憂愁を生ずる莫れ。何を以ての故に。我今、他國に遊行し、民人を教化し、一切の諸衆生を慈愍せんと欲するが故に」と。

時に、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、彼の國に遊向し、衆生を化せんが故に、即ち無量無數百千の諸比丘衆と共に、相隨ひて行く。時に日主王、然燈如來を供養供給して、四事具足し乏少する所無し。後に在つて隨從し、佛を送つて自らの境界に到るや、佛足を頂禮して三匝圍遶し、

泣涙して還、本宮に歸りぬ。

時に降怨王、然燈佛の蓮華城に來りたまひ、及び無量の聲聞比丘百千の衆は皆是漏盡の大阿羅漢なるを聞き、聞き已りて喜歡し、道路を嚴治し、有ゆる雜穢を悉く耘除せしめ、校飾莊嚴すること上に說く所の如く、乃至、彼の乾闥婆城に等しく、一種も異ること無し。時に降怨王、敕を出し、其の城の內外十二由旬に告示して、一切所有の人民に禁斷すらく「我に諸の香と華鬘とを賣るを聽さず、其のこれある處は、我、自ら採買して持つて彼の然燈佛を供養せんと欲す」と。時に、降怨王、〔一〇〕四種の兵を將ゐ、大威德を具し、城よりして出でて然燈佛を迎へたてまつりぬ。

受決定記品第二の上

〔一〕「爾の時、彼の國の雪山(Himarat)の南面に一梵志(brahmacārin)有り。名を珍寶と曰ふ。父母は清淨婆羅門の種、乃至、先祖七世已來、曾て〔二〕穢を雜へず、人の能く輙ち敢へて譏毀すること有る無く、然して其の種姓は、皆智者の讚譽する所と爲し、又、其の餘の諸導師等の恭敬する所たり。三種の行具はり、能く一切の毘陀(Veda)の論を敎へて、〔三〕四種の毘陀皆悉く收盡し、又闡陀論(chandas=詩法)、字論、聲論、及び、可笑論、呪術の論、受記の論、世間相の論、世間の祭祀呪願の論、皆悉く收盡し、大丈夫の相を具足して自ら善家に生る。復、五百の善姓家の兒あり。其の弟子と爲りて圍遶供承す。阿難よ、當に知るべし、爾の時の珍寶婆羅門は、現今の彌勒菩薩是なり。時に、彼の五百の諸弟子等、常に是の師に從ひて祭祀呪術の法を讀誦す。時に、彼の五百弟子の中に一大姓婆羅門の子有り。號名けて雲(Megha)と爲す。彼の衆中に於て而も上首と作り。衆行具足して、少小より師に從ふ。時に年十六、端正にして憙む可し。善種に生るるを得て、父母清淨に、乃至、七世まで雜濁有る無く、能く其家の種族を譏訶するもの無し。乃至、大丈夫の相を具足して世間に比

〔一〇〕四種兵 caturaṅga-bala。象隊(hasti-kāya)、馬隊(aśva-k.)、車隊(ratha-k.)、步兵隊(patti-k.)の四。

〔一〕以下、雲童子本生も亦四分律の傳のみ一致す。

〔二〕穢を雜ふとは、血統に不純の血液を加ふること、卽ち婆羅門外の三姓に娶り、他姓の血を交ふること。この血統純潔を尊ぶは、印度アリアン民族の一特質と見るべく、從つて同族結婚盛行す。

〔三〕毘陀、婆羅門敎の根本聖典、これに四種あり。梨倶毘陀(Ṛg-veda)、耶柔毘陀(Yajur-veda)、三摩毗陀(Sāma-veda)、阿闥婆毘陀(Atharva-veda)これなり。

なく、身は黄金色、頭髪も亦然り。其の聲清淨にして、梵天の音の如く、彼の珍寶仙人の邊に從ひ、呪術を受誦するに、捷利速疾、所得眞正にして、一び聞きて便ち領す。語言辯了、字句分明にして、有ゆる一切の婆羅門家の、種種の呪術・工巧・技能、皆悉く洞解し、解し已りて彼の梵志師に語りて曰はく、「大師和上(upādhyāya)、我今、習學して已に和上の有ゆる德術を盡しぬ。意に家に還らんと欲す」と。其の和上、心に雲童子を戀ひて別離を欲せず、卽ち之に語つて言はく、「汝、[四]摩那婆(māṇava、學童)、我に一論有り、名けて毘陀と爲す。乃ち是れ往昔の諸仙の說く所、一切の外道婆羅門等も未だ曾て知聞せず、況んや、復、見、及以び他に教ふるを得んや」。摩那婆言はく、「唯願はくは和上、我が爲に解說し給へ」と。

時に彼の梵志、卽ち復更に、彼の摩那婆に祕要の呪術を教ふ。時に摩那婆、亦悉く受得し、復更に、重ねて彼の梵志に白して言はく、「我今已に、和上の呪術の方法を悉く解するを得たり。復、更に、何をか作さん」。梵志、復、摩那婆に告げて言はく、「我が婆羅門は、種姓相承けて、復、家法有り。若し、弟子有り、師に從ひて學問せば、必ず恩を報ず須く、諸の財物を將つて、以用て布施す」。摩那婆言はく、「和上、我が爲に家法を解說す。何を將つてか恩に報ぜん。和上、今、心に何等を須ひんと欲するか」。梵志語つて言はく、「汝、摩那婆、我に報ぜんと欲せば、一好を將つてすべし。清淨の繖蓋・革屣・金杖・金三叉木・金瓶・金鉢・上下舍勒(sāṭaka＝內裙)、五百の金錢、是の如きを我に與へよ」と。

爾の時、童子、梵志に白して言はく、「和上大師、我上に說く所の如き物の和上に奉る可き無し。請乞ふ、我を放して四方に求索めしめよ。得ば、卽ち將來して和上に供養せん」。梵志報へて言はく、「汝、若し時を知らば、當に去る所に隨ふべし」と。時に雲童子、師の足を頂禮し、圍遶三匝して辭別して行く。時に雲童子、一處有るを聞きぬ。此の雪山を去ること五百由旬、其の城を名けて輸羅

【四】摩那婆(māṇava)。また摩納縛加(māṇavaka)に作る。儒童、年少淨行と譯す。青年の行者を指す。

波者と爲す。時に、彼の城内に一の種姓大婆羅門有り、[五]祭祀德（Yajñadatta）と名け、彼の城に居住す。彼の婆羅門、大富饒財にして甚だ資産足る。彼の祭祀德大婆羅門六萬の諸婆羅門の爲に、一年[六]無遮の會を奉設せんと欲して、六萬の布施の具を備辨す。一一人人の爲に、一の傘蓋・一の三叉木・革屣・瓶鉢・上下舍勒・及び錢物等・供身の具、皆悉く備足す。別に上座の一婆羅門の爲に、金柄上妙の傘蓋・最勝の革屣を造り、純金もて杖を爲り、金の三叉拒・金瓶金鉢・上下の舍勒、價數各百千兩金に直す。五百の金錢、一千の牸牛、各犢子を幷せ、一牛一聲して一斗の乳を得、其の牛角の上を皆金を以て裝ふ。五百の童女あり、皆珠の瓔珞もて其の身を莊嚴す、其の諸女の中に一童女有り、名けて善技と曰ふ。最も上首たり。時に、[七]般遮會（pañca-varṣikā-mahāpariṣad）年歲已に滿ちて唯一日在るのみ。

時に、雲童子雪山より下り、安庠として輸羅波城の無遮會の所に至る。時に、彼の六萬の諸婆羅門、遙かに童子を見即ち大聲を發して、唱言すらく「善き哉や、是の處、善く此の般遮會に造ることと。今梵天自ら來至して、此の般遮の布施を受く」と。時に、雲童子、彼の六萬の婆羅門に語りて言はく「汝等、我を喚んで梵天と作す莫れ。我は是れ人なり。實に梵天に非ず」。婆羅門言はく「汝は是れ誰ぞや」。雲童子言はく「汝聞かざるべし。雪山の南面に一梵志有り、名を珍寶と曰ふ。種種通達して門徒の五百弟子を教授し、乃至、上に次第して說く所の如し。彼の衆の中に、一上足弟子有り、雲と名く。年始めて十六、智慧聰明、德術具足して師と異る無し。乃至、其の聲は梵天の音の如し。汝等聞きしや否や」。婆羅門等、皆各答へて言はく「聞けり」。雲童子言はく「卽ち此身是なり」と。婆羅門衆、既に識知し已りて更に復歡喜し、大聲を發して言はく「善哉、善哉、善く此の無遮會を建立して、雲童子の來りて此の供を受くるを得たること」と。

「時に、祭祀德婆羅門の女、善技の身を望見し、及び諸の童女、樓上より遙かに、雲童子の端正雙び少きを望見し、見已りて喜觀し、四方に向ひて諸天諸神を禮し、心に自ら密念すらく「願はくは此

【五】四分律卷三一、增一阿含四〇・一〇に耶若達とあり、又祀施と譯せり。今の梵名之に依る。

【六】無遮會。次註を見よ。

【七】般遮會は、五年一大會なり、何者たるを問はず布施するを以て、無遮會とも義譯せらる。

の童子、論議第一にして舊上座の諸婆羅門に勝り、我をして此の不善の人を遠離し、此の如き不善の人と共に、夫婦たること莫らしめよ」と。時に、雲童子、會所に至り、圍遶すること三匝、遶ること三匝し已りて、上座婆羅門の前に至り、美言慰喩して問ひて言はく、「仁者、何の論をか誦持する」と。時に、此の六萬の諸婆羅門、聲を同じうして共に雲童子に答へて言はく、「仁者、我が此の上座に、何の論を誦するかを問ふ勿れ、何を以ての故に、今、此の上座は、是れ我家の婆羅門法の呪術、諸論、悉皆誦持す可ければなり」と。雲童子言はく、「婆羅門輩よ、汝が此の上座は、復、婆羅門家の醫方技藝を誦念すと雖も、但、我が師資せる婆羅門の學に、別に自ら法有り、要らず須く相問ふべし、汝等、論の先有と名くる有りや否や」と。時に、彼の六萬の婆羅門衆、各共に答へて言く、「我等此の名をすら、尙未だ曾て聞かず、何に況んや有るを得ん、何に況んや誦するを得ん」と。雲童子言はく、「我が師の法中、我に敎ふるに此の一毘陀論有り、名けて先有と爲す。我も亦た誦し得たり」と。時に、彼の大會の婆羅門言はく、「請ふ解説を爲せ、我等聞かんを樂ふ」と。時に雲童子、上座敷設の處に在りて立ち、梵音聲を以つて、彼の先有毘陀の論を誦す。時會の六萬の婆羅門衆、歡喜踊躍して同聲に唱言すらく、「我が心に稱適ひ、我が意に稱適ふ」と。甚大歡喜し、雲童子に告げて言はく、「汝、摩那婆、今我が爲に上座と作り、我が座首に坐し、我が上座最勝の水を受け、我が上座最初の食を受くべし」と。時に、雲童子、彼の上座を推して下座に向はしめ、卽ち勝座に於て最初の水を承け、先食を受け、稱意の食を食し、食し訖已りて後に、須ふる所の布施の具は、上座の法に依りて爲に之を受け、其の須ひざるは辭して受けず。時に、祭祀德大婆羅門、心に自ら念じて言ひらく、「我が今建つる此の無遮の會は、聖法に依らざるか。有ゆる一切布施の物は、聖教に依らざるか。何を以ての故に。此の會の達嚫(dakṣiṇā)、有ゆる一切布施の物を、雲童子、我が意を領して具足して受けざるが爲なり」と。』

【八】 師資は師弟相承くるをいふ。

『時に、祭祀德大婆羅門、長跪して雲童子に諮り白して言はく、「大德童子よ、汝、此の我の布施一切の物を受くべし、我が會の施をして、具足せざらしむる勿れ」と。時に、雲童子、祭祀德婆羅門に語つて言はく、「大婆羅門、汝、善く布施して衆事具足しぬ。是れ不善なるに非ず、此の無遮會は、闕少くる有る無し。唯我が須ふる者は、我今之を受けぬ、須ひざる所の者は、徒らに取るも益なし」と。時に、彼の上座の舊婆羅門、心に此の念を生ず「我久しき時、是の如き布施の具を得んを乞願ひ、決して先取を望めるに、云何ぞ今は、此の幼歳の摩那婆來りて、我を推して下座に向はしめ、我が利養を奪ふを爲すや。若し我が生來の一切の持戒精進苦行の果報、是の果報の緣もて、生生世世、此の童子と共に相會集せん處に、その我が利養の事を奪へるが爲に、此の怨讎を報じて、終に相捨てざらん」と。阿難、當に知るべし。爾の時の雲童子は、我身是なり。祭祀德は現今の檀陀波尼(Daṇḍapāṇi = 執杖)是なり。時に彼の上座婆羅門は、卽ち今の提婆達多(Devadatta)是なり。阿難よ、是の因緣を以て提婆達多愚癡の人は、往昔、我と共に世世生生、恒に怨讎を作して相捨離せざるなり。』

『時に雲童子、其の得たる所の種種の施物を將ちて、雪山に向つて以て梵志に奉ぜんと欲し、諸の聚落、村邑、國城を經て、或は住り、或は行き、是の如く觀看して、後に於て漸漸に蓮花城に至る。彼の城內に入りて城の莊嚴の殊特妙好にして不可思議なること、上に說く所の如くなるを見、卽ち是の念を生ずらく「何の故に今此の蓮花城は、是の如く莊嚴不可思議なるや。或は、當に人有りて此の城に於て無遮會を作さんと欲すべきや。或は復、諸の星宿天を祭祀するか、或は吉祥をなすか、或は福業を作すか、或は是れ時節(parva)の婆羅門會か。或は當に是れ此の城內の人民の、我が名聲の多解多知なるを聞きて、我此に來つて諸の婆羅門と共に問難論義すと謂へるべきか」と。而も復、一人の我を念ひ、或は復、我を恭敬禮拜するものあるなし。」

【九】福業(puṇyakarma)とは、人生上の福德を將來すべき作業。

『時に我、卽ち彼の一人に問ひて言はく、「仁者、此の城、何が故に莊嚴すること是の如く微妙なるか」と。爾の時彼の人、卽ち我に報へて言はく、「大智童子よ、汝、聞かざるべし。然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、久しからずして此の蓮華城に來りて說法敎化せんと欲したまふ。是の事の爲の故に、我が王降怨、人民に約令して各莊嚴せしめ、時に諸人等、福業を造らんと欲して、是の如き種種の雜飾を布設し、然燈如來を供養せんとばかり欲するなり」と。阿難よ、我、時に念を生ずらく、「我が法中の如くんば、此の言說有り。若し人、三十二相を具足せば、彼の人、卽ち二種の果報有り。若し在家せば、必定して轉輪聖王と作るを得ん。若し捨てて出家せば、聖道を修學して必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、名稱遠く聞え、威德自在なるべし」と。此はこれ疑無し。

阿難よ、我、爾の時に於て、更に是の念を生ずらく、「我、今、先づ應に此に向つて停住し、然燈世尊を供養禮拜して、未來の阿耨多羅三藐三菩提を求め、然る後に、別に梵志の師恩に報ゆべし」と。

我、又、念を生ずらく、「何等の物を將て佛を供養し、何の事業を以て諸の善根を種ゑんか」と。爾の時、我が心に是の思惟を作さく、「諸佛世尊は錢財を尙んで以て供養と爲さず。唯、法供養のみ聖の稱譽する所。我未だ法有らず、義として空しく見る無けん。今、上妙の好華を買覓め、持して以つて奉獻し、未來世に佛と作るを得んを願ふべし」と。我、時に、卽ち一鬘師の家に至り、彼の人に語げて言はく、「仁者よ、此の華を賣つて我に與ふべし」と。爾の時、彼の人、我に報へて言はく、「仁者童子よ、汝聞かざるべけんや。降怨大王、勅を出し、下に告げしを――有ゆる華鬘は悉く他人に賣與するを聽さずと。何を以ての故に。王、自ら、取りて持て佛を供養せんと欲すればなり」と。我、彼の人の是の如く語るを聞き已り、復更に、餘の鬘師の店に至りて華を買はんことを求索む。彼、還我に答ふること、前の如くして異ならず。是の如く處處に華を買はんとして得ず、街巷の裏を私竊に訪ね求めて、一靑衣の水を取る婢子の名を賢者と曰へるが、密かに七莖の優鉢羅華を將

つて瓶中に入れ、前よりして來るを見る。我、彼を見るや、心に歡喜を生じ、卽ち之に語つて言はく、「汝、此の華を將つて何事をか作さんと欲する。我、今、汝に五百の金錢を與へん。汝、我に、瓶內の七莖の優鉢羅華を與ふべし」と。彼の女、復、言はく、「仁者童子よ、汝聞かざるべけんや。然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、今城に入りて、此の地主降怨王の請を受けんと欲したまふ。王、佛の所に於て尊重の心を生じ、復、諸の功德を建立せんと欲す。故に、國內十二由旬(yojana,七哩)に宣令し、有ゆる香油華鬘の屬の、一人の私竊に盜賣するを聽さず。若し賣る者あらば、唯、王のみ買ひて自ら將つて供養するを得ん。我が毘舍に一鬘師有り、名けて怨讎と曰ふ。彼に一女あり。私かに我が邊より五百錢を取り、卽ち我に此の七莖の華を盜與せるを以て、我、旣に禁に違ひて此の華を得、自ら、然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に供養せんと欲す。實に得べからず」と。時に我、復、更に彼の女に語つて言はく、「善女よ、所說の因緣は、我今、已に知れり。汝、我が五百の金錢を取りて我に五莖の優鉢羅華を與ふべし。兩莖は汝に還さん」と。爾の時、彼の女卽ち我に答へて言はく、「仁者童子よ、汝、此の華を取りて何の用をか作さんと欲する」と。我、時に報へて言はく、「如來の出世は見難く逢ひ難し。今旣に遭遇す。此の華を買ひて、然燈如來・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に上り、諸の善根を種ゑて、未來世の爲に阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲す」と。爾の時、彼の女、復我に語つて曰はく、「我、童子を觀るに、內外の形容、身心勇猛にして愛法精進なり。汝、必ず、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。摩那婆よ、汝、若し我に、未だ聖道を得ずんば、中間に於て、生生世世、汝の爲に妻と作らん。若し、汝、得道せば、我當に剃除して出家し學道して阿羅漢を求め、汝の弟子と爲つて沙門の行を修すべきを許さば、若し是の如くんば、我今、汝に、此の五莖の華を與へん。不とならば與へず」と。我時に、復更に彼の女に語つて言はく、「善女よ、我今、此の身は是れ婆羅門なり、種姓清淨にして四種毘陀の論に通達

す。我が毘陀の中に是の如きの說を作さく――若し人、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲して菩薩行を行ぜば、彼の人、應に一切衆生に於て、憐愍の心、安樂の心を生ずべし。來り求むる所の者は、悋惜むべからず。乃至、身命も亦須く人に施すべし。況んや復、愛する所の婦兒・妻子及び餘の財物に慳貪なるを得ざれ――と。善女よ、我今發願して菩提を求め、諸の衆生を安樂ならしめんと欲するが爲の故に、一切の衆生を憐愍し救濟す。或は人有り、來つて我が妻子を索めば、我、以て布施せん。彼の時、汝の愛戀心、若し障礙を作さば則ち我割捨せん。我が心願成らずんば、復汝の邊に於て、無量の罪を得ん。汝若し能く彼の時に於て、一切あらゆる資財寶物を我が布施せん時に、難を作さじと作願せば、我當に、汝の我が爲に妻と作るを許すべし」と。』

爾の時彼の女、卽ち我に語つて言はく、「摩那婆よ、假令、人有つて來つて、汝の邊に向ひ、我が身を乞ふとも、我亦、慳貪の心を生ぜじ。況や、復、男女の兒及び餘の財物をや」と。我、彼の女に語るらく、「必ず能く是の如くば、汝の願ふ所の如く、當來の世に我がために妻と作るを許さん」と。是の時、彼の女、我が邊より、五百の金錢を受けて、卽ち五莖の優鉢羅華を授け、持して以て我に與へ、其の餘の兩莖は、我が爲に布施して、「汝と與に同じく未來の因緣を作さん」といひ、復、我に語つて言はく、「汝が善根を種植ゑんと欲するの處、此の二華を將つて其の上に散じて、當に汝と共に生生同處して、相捨離する莫らんを願ふべし」と。』

『時に、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、外より來りて、蓮華城中に入る。我、時に、此の七莖の蓮花を齎して、遙かに佛の來るを見、漸漸に至り近いて彼の佛身を覩るに、端政にして喜ぶべく、清淨の光明は世を照耀し、諸根を調伏して其の心寂定に、安住して動かず。六根の澄靜なること、瑠璃池の若く、進止の威儀は猶し象王の如し。復、無量百千萬億の諸天大衆有りて、前後に圍遶し、各無量の天の諸雜華、及び無量の天の栴檀末香・優鉢羅華・波頭摩花・拘勿頭花・芬陀利

花を、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の上に散じて、尊重供養しぬ。時に、降怨王、羽儀四種の兵種を備へ從へ、彼の城門を出でて然燈佛を迎ふ。爾の時、彼の處に聚集せる無量無邊異類の人、及び非人の天龍〔一〇〕八部諸鬼神等、將てる所の香末、種種の雜華を以つて佛上に散ずるに、一華の地に墮落る有るなし。竝びに然燈如來の頂上なる虛空の中に在りて、大いたる寶蓋を成し、佛行けば隨つて行き、佛住まれば隨つて住まる。我、時に、彼の然燈如來を見て信敬の心を生じ、殷重の心を生じ、敬心を生じ已りて、此の七莖の優鉢羅華を將つて佛上に散じ、此の願を發して言はく、「若し、我來世に佛と作るを得ん時、今の然燈如來の得たまへる法及び大衆の如く、異るもの有る無けん」と。散ずる所の華、虛空の中に住まりて、華葉は下に向ひ、華莖は上に向ひ、佛の頂上に當つて華蓋を成し、佛に隨つて行住す。我、是の如き神通德力を見て、倍復、信敬の心を生じぬ。」

『阿難、時に、彼の無量無邊の人衆、各無價の妙好の衣裳を將つて、道上に布く——所謂、微細の迦尸迦衣（kāśikavastra カーシー產絹）・細白の氎衣・細芻摩衣（sūkṣma 軟妙衣）・微妙細輭の拘周摩衣（kṣauma亞麻衣）、及び妙繒綵の憍奢耶被（kauśeya野蠶絲衣）なり。然燈佛を供養せんと欲するが爲の故に、地を覆うて滿たしむ。阿難よ、我是の時に於て、彼の無量無邊の人衆を見るに、無價の衣を將つて悉く皆地を覆へり。時に我が身上には唯一の鹿皮あるのみ。我、鹿皮を將つて地上に布くに、我が鹿皮の地を覆へる處は、彼の人衆の爲に惡罵瞋嫌して、我が鹿皮を挫きて遠く他處に擲たる。我、此の念を生ずらく、「嗚呼世尊然燈如來は、我を憐愍し、慈念したまはざる可けんや」と。此の念を生じ已るや、佛、我が心を知りたまひ、我を憐愍するが故に、時に然燈佛、神通力を以て一方の地を變じて稀土の泥の如くす。時に彼の人衆、此の路泥を見て各避行し、一人の泥に入る者有るなし。我時に、行き見て、速かに泥の所に往き、彼の泥を見已るや即ち此の念を生じぬ、「是の如き世尊を、云何ぞ此の泥中を踐んで行かしめん。若し泥中に行かば、泥、佛脚を汙さん、我今、乃ち臭肉身を

〔一〇〕 八部とは、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽。

將つて、此の泥土に於て大橋梁と作り、佛世尊をして、我が身を履んで過ぎしむべし」と。我時に、即ち所有の鹿皮を鋪き、〔一〕髮を解いて布散し、面を覆ひて伏し、佛の爲に橋と作る。一切の人民、未だ踐み過ぐるを得ず、唯佛のみ最初に我が髮上を蹈みたまふ。是の如く然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を供養せんが故に、復、是の念を生ずらく「願はくは此の然燈如來世尊、及び聲聞衆の足、我が身及び頭髮の上を踏んで、此の泥を度らんことを」と。復、此の願を發しぬ、「願はくは未來世に佛と作るを得ん時、今の然燈如來の如く異る無からん、是の如き威德、是の如き勢力もて、天人師と作らん。又願はくは、我今、此の身命を盡すまで、若し然燈佛、我に記を授けずんば、我終に此の泥中より起たざらん」と。是の童子の身髮を布く時に當つて、是の時、大地六種に震動す――所謂、東涌西沒・西涌東沒・南涌北沒・北涌南沒・中涌邊沒・邊涌中沒なり。』

【一】布髮。然燈如來の爲に布髮せるは、一般にはスメーダとせられ、印度の佛教藝術上、數々見らるゝ程に有名なる本生なり。

卷の第四

受決定記品第二の下

「爾の時、然燈如來・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、我が心を知りて、大比丘（bhikṣu, 乞士）百千人と倶に、及び彼の天龍千萬億衆、左右に圍遶し來り、我が所に向つて足もて我が身及び螺髮の上を蹈み、安庠として行くこと大龍王の如し。左右を觀看て、諸の比丘に告げたまはく、「汝等比丘、我と共に路を同じうして行くを得ざれ、この摩那婆の身及び螺髮は、一人の蹈むべきに堪ふる者有るなし。此の人の身髮は、唯如來のみ乃ち踐むに堪ふるを除く。何を以ての故に、此は是、菩薩の身及び髮の分なればなり」と。時に然燈佛、卽ち我に語つて曰はく、「善い哉、善い哉、汝摩那婆、廣大の心を發せり。誓願は海の如し。汝の求むる所の者は、諸の衆生の爲に利益を作すが故に、諸の衆生の爲に安樂を作すが故に。摩那婆よ、汝、旣に此を求めぬ。是の如きの大願は、一切世間を利益し安樂して、無量無邊の衆を憐愍するが故に、能く天人の爲に引導を作すが故に、大精進勇猛の心を起して乃ち能く是の如き等の法を滿足して、志來金剛に身命を惜まず。是の故に汝、今身を以て、如來を荷負して行く。汝當來に於て、乃至、身命を慳惜むを得ざれ、何に況んや餘の財をや。汝摩那婆、阿耨多羅三藐三菩提を求むること、此は是初相なり。汝は能く是の如き弘願を發起し、汝は所有の物を一切捨てぬ。汝摩那婆、行ふ所の布施は、未來世の報を求むるを得ざれ、唯出世無上の菩提を求めよ。貪心を生ずる勿れ。他の資財を見て奪取するを得ざれ。汝禁戒を持して缺犯せしむる勿れ。[一]穢濁するを得ざれ。應に[二]相を取るべからず。自ら譽讃して他人を誹謗し、及び自身を毀つ勿れ。汝當に忍辱すべし、設し、他の來つて打罵、禁繫、殺害する者有らんに、皆須く忍受すべし、乃至、汝の身體を[三]節筋支解するの時、汝は是の如き怨讎等の邊に於て、當に忍辱して慈

【一】穢濁。德行を穢すこと。

【二】相を取るべからず。相は外相の特徵、卽ち喜怒哀樂等の外見の相貌に捉はれて、自らも喜怒哀樂する勿れといふなり。

【三】節々支解。肉體を寸斷すること。

悲心を生ずべし。殺生するを得ざれ。他の身命財を劫奪するを得ざれ。他の財物に於て常に遠く捨離し、自らの營求に於て亦當に足るを知るべし。他人の婦女妻妾に近づく莫れ。自らの所有に於て亦須く貪らざるべし。妄語を遠離せよ。乃至、命盡くるまで、他に向つて非實もて而も說くを得ざれ。鬪亂して親しき者を疎からしむるを得ざれ。[四]破壞人を見ば恒に和合せしめよ。惡口するを得ざれ、常に美言を以てせよ。綺語するを得ざれ、必ず利益有らしめよ。[五]時語し、法語せよ。汝[六]正見を行じて、一切の邪道皆當に捨離すべし。汝摩那婆、若し能く是の如き諸事を荷擔せば、汝の求願する所具足せざる無けん。汝當に彼の一切衆生に於て[七]一子の想を生ずべし。衆生を哀愍し、心口を調伏し、諂曲を作す莫れ。應當に人を供養尊重すべし。汝、憍慢にして心を放逸ならしむる莫れ。常に須く寂定にして、[八]三昧正受もて無我の法を觀ずべし。未來の[九]菩提種性を斷する勿れ。汝當に是の如く衆生を利益して一切を安樂すべし。摩那婆、汝若し能く是の如き等の事を辨ぜば、口に自ら唱稱へて、我能すと言ふべし」と。時に我、爾の時、卽ち佛に白して言さく「世尊、我能くせん」と。』

『時に、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、旣に我が心を知り、卽時に微笑したまふ。彼の佛に一侍者比丘有り。座より起つて衣服を整理し、右臂を偏袒し長跪合掌して、白して言さく「世尊、何の因緣を以て、如來は微笑したまへるか」と。時に然燈佛、比丘に告げて言はく『汝、是の摩那婆を見よ、七莖の華を持して我を供養し、身を伏せ髮を被きて泥上に橋と作り、我をして蹊み渡らしむ。是の事を以ての故に、此の摩那婆は、阿僧祇劫（asaṃkhya-kalpa, 無數長年時）を過ぎて、當に佛と作り、釋迦牟尼（Śākyamuni）多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號し、十號具足すること我が如くにして異るなきを得べし」と。阿難よ、我是の時に於て、然燈佛の我が爲に決定記を授けたまふを聞き已り、身心輕便に、覺えず自ら虛空の中に騰ること、高さ[一〇]七多羅（tāla）樹なり。

【四】破壞人。僧伽（敎團）の平和を破壞する人。
【五】時語、法語。時に適ふ語。法に適ふ語。
【六】正見。こゝにては如實知見に同じ、實の如くに觀ずること。
【七】一子想。釋尊の大慈悲心が、一子羅睺羅に對すると、餘の諸弟子に對すると、更に差別なしといふ思想より出でたる言葉にして、卽ち一切衆生に對して、無差別平等の悲心を有するをいふ。
【八】三昧正受。心を統一集注して他に散らさざること。
【九】菩提種性。又佛種姓ともいふ。佛果菩提を生むべき性能。こゝは菩薩行をいふ。
【一〇】七多羅樹。多羅は丈高き木、この木を以て飛躍の高度を測る標準とするは、文學上のことなれば、實測的意味を具へず。

清淨心を以て、十指の掌を合せ、佛に向つて禮を作す。阿難よ、我彼の時に於て、遍身喜悅して自ら勝ふる能はざりき。阿難よ、時に然燈佛、卽ち我に告げて言はく、「摩那婆よ、汝、東方世界を觀る可し」と。時に、我卽ち彼の東方恒河沙等の刹土の諸佛を觀見するに、皆悉く我が爲に決定記を授けたまへり。――「汝摩那婆、未來世に於て阿僧祇劫を過ぎなば、當に佛と作つて、釋迦牟尼と號し、十號具足するを得べし」と。――此の如く、東方・南・西・北方、四維・上下も亦復是の如し。』

『阿難よ、我、爾の時に於て、空よりして下り、安立して地に住まり、然燈世尊の佛足を頂禮し、却いて一面に住し、卽ち此の念を生ず、「我今、然燈佛の邊に於て出家を求索むべし」と。卽ち、佛に白して言さく、「唯願はくは世尊、我が出家して〔一〕具足戒を受くるを聽したまへ、我佛邊に於て〔二〕梵行を修行せん」と。佛、我に語りて言はく、「汝摩那婆、今正に是れ時なり」と。卽ち出家して、鬚髮を剃除するを得、鬚髮を除き已るや、無量の諸天、我が髮を取り、供養の爲の故に十億の諸天、共に一髮を得たり。阿難よ、我が阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得てより已來、一の衆生だも諸佛を供養せずして而も安樂を得たる者を見ず。是の處有る無し。阿難よ、我、彼の時に於て、猶未だ諸の煩惱の縛を具足し、貪欲・瞋恚・愚癡、未だ盡きざりしも、無量百千億の諸衆生は、我が髮を取つて各持し供養して解脫を得たり。況や、復、今日、欲・瞋・癡を離れたるをや。而も我が邊に於て諸の功德を作して解脫を得ざらんこと、是の處有る無し。是の故に阿難よ、一切の衆生は、應に當に發心して如來を供養すべし。』

『阿難よ、我、彼從り來かた、煩惱中に在つて菩薩行を行じ、精進勇猛の心を捨てず、常に布施を行じ、常に功德を作しぬ。我、是の如き諸の善業を以ての故に、彼の無量百千の世中に於て、梵王と作り、帝釋と作り、或は百千の轉輪聖王と作るを得、彼の善根の因緣力を以ての故に、今、佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得て、無上最妙の法輪を轉ずるを得たり。阿難よ、我、福德智

【一】具足戒。出家比丘の受くべき戒條は、佛制の戒律のすべてを具するを以て、具足戒といふ。その戒數は、部派によつて差異なり。
【二】梵行。清淨なる行。

慧力を以ての故に、現今有ゆる一切の刹利(kṣatriya, 王族)及び、婆羅門・長者・居士・沙門(śramaṇa, 出家)・智人は、我が語を信受し、我が法に依りて行ぜ。阿難よ、汝、我が語の終に二言無きを觀よ。然燈佛の我に決記を授け、我に教示せしが如く、我修行に依りて、今、阿耨多羅三藐三菩提を得たり』と。爾の時世尊、偈を說いて言はく、

『假使天の地に落ち　此大地變壞し　一切の諸の衆生　猶常住の身を得、　[一三]須彌山王(Sumeru)崩れ　大海の水乾き竭くとも　阿難汝當に知るべし　諸佛に二言のなきを』

爾の時、世尊、此の偈を說き已り、復、阿難に告げたまはく、『諸佛世尊に常に此行有り。假使光明無量無邊なるも、諸の衆生の爲に一尋を住持し、是の一尋より、諸の衆生の爲に、復、無量無邊の光明を現ず。何を以ての故に。諸の衆生の、晝夜を知らざるを畏るればなり。一月・半月・一年・半年、春夏秋冬の四時八節、其の忘失せんことを恐るればなり。阿難よ、彼然燈佛は、十號具足して明照の業成り、常光にして暗無し。是故に、彼佛は號して然燈と曰ふ。常に光明有りて天下を照耀せり。自餘の因緣は、上に說く所の如し。』

[一四](1)阿難よ、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して勝一切(Sarvābhibhū)多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號せり。我、金華を以て、彼の佛の上に散じて、是の如き言を發しぬ。「願はくは、我れ未來に微妙身を得て[一五]相法を具足すること、今の世尊の如からん」と。爾の時彼の佛、我が心を知りて卽時微笑したまふ。侍者比丘、衣を整へて佛に白す。乃至、佛、彼の侍者に告げて言はく、「比丘、汝、是の人の金華を將つて我が上に散ずるを見しや否や」。彼の比丘答へて言さく、「我見たり」と。佛、比丘に告げたまはく、「是の人、一億劫を過ぎて後、當に佛と作るを得、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號し、十號具足すべし」と。阿難よ、我、彼の時に於て、授記を得已り、精進勇猛の心を捨てず、倍更に增長して、餘の福業を修めぬ。我、是の如きの善因緣を以

【一三】須彌山王。須彌山とは、印度の神話的世界觀に出づる、地界の中心をなす高山なり（ヒマラヤ山の神話化せるもの）。故に山中の王として山王と呼ぶ。

【一四】以下の諸授記段は、Mahāvastu, vol. III. p. 240 ff. 參照。

【一五】相法。三十二相を具足するを以て、佛たるの外見的條件とす。

ての故に、無量世中に梵天の上及び帝釋、轉輪聖王に生れぬ。又一王と作れり、名を善見(Sudarśana)と曰ふ。彼の王の城郭、却敵、門樓、宮室、殿堂は、純ら是れ黄金なり。園苑樹林、泉流池沼は皆金もて校飾せり。彼の業の因緣もて、我今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、無上清淨の法輪を轉ず。』

(2)『阿難よ、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して、蓮華上(Padmuttara)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。我、銀華を將つて彼の佛上に散じ、是の如き願を發しぬ、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「汝是の人の銀花を將つて我を供養せるを見しや不や」。比丘言く「見たり」と。佛、比丘に告げたまはく、「是の人、未來十萬劫を過ぎて當に佛と作るを得て、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號すべし」と。我彼の時に於て、授記を聞き已りて精進勇猛の心を捨てず、倍更に增長して諸の功德を作せり。我是の如き善果報を以ての故に、無量世中に梵天王及び帝釋、轉輪聖王と作りぬ。又、我過去に、曾て一王と作り、大善見(Mahāsudarśana)と名けぬ。居る所の城を拘尸那(Kuśina-ngara)と名けたり。彼の城の樓櫓、却敵、窓牖は、皆白銀の成就する所たり。園苑樹林、泉池諸水は、悉く是白銀もて莊嚴し挍飾せり。乃至、彼の業の因緣の報の故に、今、佛、多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と作るを得、乃至、無上の法輪を轉ず。阿難よ、往昔以來是の如きの法有り、凡そ諸の菩薩は、初生の時に、東西南北各七步を行くに、人の執持する無し。阿難よ、彼の蓮華上佛は、初生の時、兩足の地を蹈むや、其の地、處處、皆蓮花を生じ、面り七步を行くに、東西南北、所蹊の處悉く蓮花有り。故に此の佛を號して蓮花上と爲す。彼の時に當りて無量無邊の千萬の衆、天・龍・夜叉(yakṣa)・乾闥婆(gandharva)・阿脩羅(asura)・摩睺羅伽(mahoraga)・人非人(manuṣâmanuṣa)等、一時に大唱して處處に聲を出し、是の如きの言を發しぬ、「此の大菩薩を蓮華上と名く」と。天人此の聲を唱ふるに因つての故に、彼の佛世尊を蓮花上と號せり。』

(3)『阿難よ、我念ずるに、往昔、一如來有りて世に出現し、最上行(Atyuccagāmin)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。爾の時、我一把の金粟を將つて、彼の佛の上に散ぜり。乃至、彼の佛、侍者に語つて言はく、「是の人一千劫を過ぐる後、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號すべし」と。我彼の時に於て、授記を聞き已りて精進を捨てず、善業を增長せり。彼の功德の果報因緣の故に、無量世中に梵、釋天、轉輪聖王と作れり。又復、曾て一轉輪王と作り、名を頂生(Mūrdhajāta)と曰へり。我、彼の時に於て、宮殿の內に七日を經由して、金粟の雨を雨らし、人の膝を沒して縱廣彌滿しぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、我今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず。阿難よ、彼の最上行如來は、聚落城邑に至りて乞食せんと欲したまふに、足、虛空を步して、地を去る六尺なり。是時、天龍人非人等、高聲に唱言すらく、「此の佛世尊を最上行と名く」と。是の因緣を以て、是の如來を號して最上行と爲せり』。

(4)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有りて世に出現し、上名稱(Yaśottara)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。我時に、彼の佛に一室を布施し、及び比丘僧に一室を布施して、乞願して言ふ、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「是の人、後五百劫を滿つるに於て、當に佛と成るを得て釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を得已りて精進を捨てざる業因緣の故に、無量世を經て梵・釋天・轉輪聖王と作り、又、是の報の故に、我、時に一轉輪聖王と作れり、名を善見(Sudarśana)と曰ふ。時に、天帝釋と[一六]毘首羯磨(Viśvakarma)下り來りて我が爲に一殿を化作し、一切勝(Sarva-vajayanta ?)と名けぬ。是の善業の果報因緣を以て、我、今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず』。

(5)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有りて世に出現し、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號せり。我と同號にして種姓、父母、名字、壽命、一切悉く同じ。我一掬の蘇摩那(sumana)華

【一六】毘首羯磨。工巧天と譯す。天地を造作せる神話に基き、工匠を司る神と仰がる。

を以て彼の佛の上に散じ、（伽葉道師、說いて言ふ、金の一掬を將つてすと。）是の如き願を發す。乃至、彼の佛、侍者に語りて言はく、「是の人、後一百劫を滿つるに於て、當に佛と作るを得て釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、受記を得已りて精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中に梵、釋天、轉輪聖王となりぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、[七]三十七助菩提分法を以て我身を莊嚴し、我をして阿耨多羅三藐三菩提を成じ、乃至、無上の法輪を轉ずるを得しめたり。』

(6)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有りて、世に出現し、號して帝沙(Tiṣya)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ひぬ。我、一掬の碎末旃檀を將つて彼の佛の上に散ず、乃至彼の佛、侍者に告げて言はく、「此の人、九十五劫を過ぎて、當に佛と作るを得て釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を得已りて精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中に梵・釋天・轉輪聖王と作りぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、我、名けて最上戒行清淨具足とせらるるを得、是の善業の果報因緣を以て、我、名けて最上智見功德具足とせらるるを得、（伽葉道師、是の如く說いて言く、我、善業の因緣力を以ての故に、最上戒行の功德名稱遠く聞ゆるを得、乃至、最上智見の功德遠く聞ゆるを得たり。）我、今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず。』

(7)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有りて世に出現し、號して弗沙(Puṣya)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ふ。時に彼の佛、雜寶窟內に在せり。我、彼の佛を見て心に歡喜を生じ、十指の掌を合し一脚を翹げて七日七夜、而して此の偈を將つて彼の佛を讚歎せり。而して偈に說いて言はく、

『天上天下佛に如くなし　十方世界にも亦た比なし
世界の所有を我盡く見つれど　一切、佛に如く者有るなし』

『阿難よ、我、此の偈を以て彼の佛を歎じ已りて、是の如き願を發す、乃至、彼の佛、侍者に語つ

【七】三十七助菩提分法とは、菩提を助成する三十七件。また三十七道品、三十七菩提分といふ。四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道分これなり。

て言はく、「是の人[一八]九十四劫を過ぎて當に佛と作るを得、釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を得已りて精進を捨てず、功德を增長せしかば無量世中に、梵・釋天・轉輪聖王と作りぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、我、[一九]四種辯才の具足を得て、一人の能く我と共に論じて、我を降伏する者有る無し。我、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず。

(8)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有りて世に出現し、[二〇]見眞理(Arthadarśin)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號せり。我、爾の時に於て、種種の花を將つて、彼の佛の上に散じ、(伽葉遺師、說いて言く、彼の佛號して見一切理と曰ふと。)乃至、彼の佛、侍者に語つて言はく、「是の人、九十三劫を過ぎて當に佛と作るを得、釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に受記を得已りて精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中に、梵・釋天・轉輪聖王と作りぬ。是の因緣を以て、我今、最上の名たる「具持戒行」を獲得し、乃至、「解脫知見一切具足」と名くるを得、阿耨多羅三藐三菩提を證し、乃至、無上の法輪を轉ず。』

(9)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有りて世に出現し、[二一]毘婆尸(Vipaśyi)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號せり。我、爾の時に於て、一掬の小豆を將つて彼の佛の上に散ず、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「是の人、九十一劫を過ぎて當に佛と作るを得、釋迦牟尼と號し、十號具足すべし」と。我、彼の時に、授記を得已りて精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中に、梵・釋天・轉輪聖王と作りぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、我又、曾て一轉輪聖王と作り、名けて頂生(Mūrdhajāta)と爲す。四天下を得、復、帝釋の半座を得て而して坐せり。是の果報を以て、今、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、乃至、無上の法輪を轉ずるを得たり』。

(10)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有りて世に出現し、號して[二二]尸棄(Sikhi)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰へり。我、彼の時に於て、無價の衣を將つて彼の佛の上及び聲聞衆を覆ひ、是の如き願を發す、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「是の人、三十一劫を過ぎて當に佛と作るを得、

【一八】九十四劫—釋尊が本生に於て菩薩たりし時、彌勒菩薩と共に修道し、精進に於て勝れるが爲に、九劫を超越して成佛せる事は、他の經論の中にも見ゆ。

【一九】四種辯才。四無碍辯の義譯、法(教法)、義(教法の意味)、辭(義を表現する詞)、樂說(說法)の四に自由なること。

【二〇】見眞理。後に見義と譯せり。

【二一】毘婆尸。過去七佛の第一。

【二二】尸棄。過去七佛の第二。

釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を得已りて精進勇猛の心を捨てず、常に布施を行じて福業を造作しぬ。我、是の如き善業の因緣を以て、無量世中に大梵王及び天帝釋、轉輪聖王と作り、今日復、種種の衣服を得たり——所謂、迦尸迦衣、須摩妙衣、劫波妙衣（karpa-sūkṣma, 綿上衣）憍奢耶衣、拘沉婆衣（Kauṭumba, コートウンバ蠶衣）——我、今、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、乃至、無上の法輪を轉ずるを得たり』。

(11)『阿難よ、我念ずるに、往昔一如來有り、世に出現して[二三]毘舍浮（Viśvabhū）多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。我、爾の時に於て、好き種種百味の飲食を以つて、彼の佛及び聲聞衆に布施し、是の如き願を發せり、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「是の人、三十劫を過ぎて後、當に佛に作るを得て釋迦牟尼と號すべし」。我、彼の時に於て、授記を得已りて精進勇猛の心を捨てず、常に布施を行じて福業を造作しぬ。我、是の如きの善根の因緣を以て、無量世中に大梵王と作り、或は帝釋、轉輪聖王と作り、今、種種百味の飲食を得、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を成じて、無上清淨の法輪を轉ずるを得たり』。

(12)『阿難よ、我念ずるに、往昔、[二四]拘婁孫（Krakucchanda）多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の邊に於て梵行を行ぜしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり』。

(13)『阿難よ、我念ずるに、往昔、[二五]迦那迦牟尼（Kanakamuni）多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の邊に於て梵行を行ぜしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり』。

(14)『阿難よ、我念ずるに、往昔、[二六]迦葉（Kāśyapa）多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の邊に於て梵行を行ぜしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり』。

(15)『阿難よ、我念ずるに、往昔、彌勒菩薩（Maitreya）の邊に於て、種種微妙なる四事供養の具を齎持して、供養、恭敬、尊重、讚歎し、自ら恣に奉獻せしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求

〔二三〕 毘舍浮。過去七佛の第三。

〔二四〕 拘婁孫。過去七佛の第四。賢劫千佛の第一。

〔二五〕 迦那迦牟尼。過去七佛の第五。賢劫千佛の第二。又拘那含牟尼に作る。

〔二六〕 迦葉。過去七佛の第六、賢劫千佛の第三。

むるが故なり』。
(16)『阿難よ、我念ずるに、往昔、無量種の供養の具を將つて、至到れる所の處に、卽ち持して過去無量の諸佛菩薩及び聲聞衆を供養して、諸の善根を種ゑしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり』。
『阿難よ、往昔、百阿僧祇劫を過ぎて、是の時に佛有りて世に出現し、號して然燈多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ひぬ。阿難よ、是の如く次第して百億劫を過ぐる時、一佛有りて世に出現し、一切勝多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。阿難よ、是の如く次第して五百劫を過ぐる時、一佛有りて世に出現し、最上名稱多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。阿難よ、是の如く次第して一百劫を過ぐる時、一佛有りて世に出現し、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。阿難よ、是の如く次第して九十四劫の時、一佛有りて世に出現し、號して弗沙多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰へり。阿難よ、是の如く次第して九十三劫の時、一佛有りて世に出現し、號して見義多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ひぬ。阿難よ、是の如く次第して九十一劫の時、一佛有りて世に出現し、毘婆尸多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しぬ。阿難よ、是の如く次第して三十一劫の時、一佛有りて世に出現し、號して尸棄多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ひぬ。同じく是の劫の中、又、一佛有り。復、世に出でて號して神聞(Viśvabhū?)多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ひぬ。阿難よ、是の(二七)賢劫の初、第一に拘婁孫駄如來、世に出現し、第二に拘那含牟尼如來、世に出現し、第三に迦葉如來、世に出現し、第四に我身釋迦牟尼如來、今現に世に在り』。
『阿難よ、彼の然燈多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀、世に出現して大婆羅門家に生れ、一切勝佛、世に出現して大刹利王家に生れ、蓮華上佛、世に出現して大婆羅門家に生れ、最上行佛、世に出現して大刹利王家に生れ、德上名稱佛、世に出現して大婆羅門家に生れ、釋迦牟尼佛、世に出現し

【二七】賢劫 (bhadrakalpa)。現在の宇宙の存續期間をいふ。この劫中、千佛の出現あるべきを以て、この名あり、之に對して過去を莊嚴劫、未來を星宿劫といふ。

て大刹利王家に生れ、帝沙如來、世に出現して大婆羅門家に生れ、弗沙如來、世に出現して大刹利王家に生れ、見眞義佛、世に出現して大婆羅門家に生れ、毘婆尸佛、世に出現して大刹利王家に生れ、尸棄如來、世に出現して大刹利王家に生れ、神聞如來、世に出現して大刹利王家に生れ、拘婁孫駄佛、世に出現して大婆羅門家に生れ、拘那含牟尼佛、世に出現して大婆羅門家に生れ、迦葉如來、世に出現して大婆羅門家に生れ、阿難よ、我今、刹利種姓大王の家に在りて生れ、世間に出現せり』。

『阿難よ、然燈佛多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は、壽命八百四千萬億歲、世に住したまへり。諸の世間を利益せんが故に。尼沙寨師、是の如く説く。迦葉遺師、復言く、然燈如來、壽命一劫、世に住す。及び聲聞衆も諸世間を利益せんが故なり。阿難よ、一切勝如來、世に住すること八萬億歲、一切諸世間を利益せんが故に。尼沙寨師、是の如く説く。迦葉遺師、復言く 一切勝如來、住世一劫、世間を利益せんが故に。蓮華上佛、世に住すること八萬歲、利益を爲さんが故に。最上行佛、世に住すること八萬歲、利益を爲さんが故に。上名稱佛、世に住すること六萬歲、利益を爲さんが故に。釋迦牟尼佛、世に住すること八萬歲、利益を爲さんが故に。帝沙如來、世に住すること六萬歲、利益を爲さんが故に。弗沙如來、世に住すること五萬歲、利益を爲さんが故に。見眞義佛、世に住すること四萬歲、利益を爲さんが故に。毘婆尸佛、世に住すること八萬歲、利益を爲さんが故に。神聞如來、世に住すること六萬歲、利益を爲さんが故に。拘婁孫駄佛、世に住すること四萬歲、利益を爲さんが故に。拘那含牟尼佛、世に住すること三萬歲、利益を爲さんが故に。迦葉如來、世に住すること二萬歲、利益を爲さんが故に。阿難よ、我、今、多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀、世に住すること八十歲、利益を爲さんが故に』。而して、偈を說いて言はく、

『佛有り神通を以て　世に住して供養を受け
或は神通と業とあり　盡き已りて涅槃に入る』

『阿難よ、然燈如來に二百五十萬億の聲聞弟子の大衆の集會あり、如來の滅後、法世に住して七萬歲を經、末後の十年は諸比丘等、敬信を生ぜず、慚愧の心なく、世務を營理して諸業を樂しみ、所有持てる疑も相諮問せず、各己が能を恃んで互に憍慢を生じ、恒に非法を聚め、諸の惡知識不善の人を以て朋友と爲し、共に相狎習して圍繞遊從せり。是等の癡人、行、純ならざるが故に、彼の如來の佛法僧寶をして、速疾に隱沒して世間に現ぜず、有ゆる經書は悉く皆滅盡せしめぬ』。

『一切勝佛に萬四千の聲聞弟子大衆の集會有り、如來の滅後、正法世に住して少時を經、蓮華上佛に七萬衆の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法世に住して十萬歲を經たり。上行如來に六萬衆の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法の世に住すること七萬七千歲なり。德上名稱佛に[二八]二萬衆の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法世に住して五百歲を經たり。釋迦牟尼佛に一千二百五十の聲聞の集會あり、如來の滅後、正法世に住して五百歲を經、像法の世に住することも亦五百歲なり。帝沙如來に六萬億の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法世に住して二萬歲を經たり。弗沙如來に無量億の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法、像法に乃至、法住し、乃至法滅せり。見一切義佛に三十二億那由他(nayuta)衆の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法暫時にして久しく世に住せざりき。毘婆尸佛は三會に說法して聲聞衆を度せり。第一の大會には[二九]一百六十八百千人、第二の大會には十萬人有り、第三の大會には八百千人なり。如來の滅後、正法世に住して二萬歲を經たり。神聞如來には唯二會のみありて聲聞衆を度せり。第一會に度せるもの七萬人有り、第二會に度せるもの六萬人有り。如來の滅後、正法世に住して六萬歲を經たり。拘婁孫駄佛に四萬衆の聲聞弟子有り、如來の滅後、正法世に住して五百歲を經たり。拘那含牟尼佛に三百萬の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法世に住すること二十九日なり。迦葉如來に二萬衆の聲聞の集會有り、如來の滅後、正法世に住して七日を經たり。阿難よ、我、多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀に、一千二百五十の聲聞の集會有り、

【二八】二萬—麗本二萬に作り、宋元明三本、二千に作る。

【二九】一百六十八百千人—麗本に一百と作し、宋元明三本に一萬と作す。

我が滅度の後、正法世に住して五百歳有り、像法の世に住することも亦五百歳なり。今當に〔三〇〕優陀那(Udāna)偈を略說すべし』。而して、偈を說いて言はく、

『施と及び年數と　種姓と幷に壽命と　聲聞衆の集會と　正法と像法とを說き
彼等諸世尊の　住世と般涅槃と　釋種大師子は　總て說き已に訖りぬ』

賢劫王種品第三の上

〔一〕爾の時、佛、王舍大城の〔二〕竹林精舍迦蘭陀鳥所居の處に在し、大比丘五百人と俱たり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝、諸の比丘よ、諦かに聽き諦かに受けよ、世尊の敎の如かれ』と。諸の比丘、言さく『我等歡喜して、信心もて奉持せん』。佛、比丘に告げたまはく、(1)『此の賢劫の初、地、建立し已りて、一最尊あり、豪勝富貴にして大首領人たる轉輪王種なり。名衆集置して旣に安置し已る。時に諸の大衆、地主に白して言はく、「我が大地主よ、當に我等の爲に惡人を治罰し、良善を賞すべし。仁者、當に稻田を分つて我に與ふべし、我各之に種ゑん、我等種ゑ已りて、當に各割分して仁者に奉輸すべし」と。時に、彼の地主、大衆の請を受け、卽ち爲に法の如く、平に依つて撿挍し、惡しき者は治罰し、善き者は之を賞せり。人、稻田を得て各守護を加へ、但熟し已りて後、分に隨つて之を受けぬ』。

佛、比丘に告げたまはく『時に彼の大衆、是の如く集會和合して共に彼の仁者を推扶し、持して地主と爲す。大衆の商量して擧ぐるが爲を以ての故に、故に彼を號して大衆平章(Mahāsaṃmata)と爲しぬ。又、彼の地主、諸の大衆の爲に法の如く治化し、衆をして歡喜し、同心に愛樂し、共に和合するを得て各各處分せしめたり。故に名けて〔三〕王(rāja)と爲しぬ。又、復、一切の稻田を守護し、熟すれば衆人の稻田の分を取るが故に、刹利王(kṣatriya)と名けぬ。〔四〕刹利王をば名けて田主

【三〇】優陀那。集施と譯す。多義を縮めて、僅少の語句に收めたる韻文。

【一】以下大事卷一、三四八頁以下に異傳あるも、巴利傳(島史、太統史)並に衆許摩訶帝經に列する王統傳說最も近し、今はこれらを參照して梵名を撰べり、?を付せるもののみ私案とす。

【二】竹林精舍。Veṇuvana-vihāra　摩揭陀國王頻婆沙羅の建立布施せる所。

【三】王の原語 Rāja は如法治化(dhammena pare rañjeti)の意味より成るといふ。

【四】刹帝利の原語 kṣatriya は田主(kṣetra-pati)の意味なりといふ。

と爲す。汝等、當に知るべし、是の因緣を以て[五]劫の最初の時の、大衆の立てし所の王種は是なるを』。

佛比丘に告げたまはく、『時に、彼の大衆立つる所の王、後に一子を生めり、名けて(2)眞實(Kalyāna)と曰ふ。轉輪王と爲りて四天下に王たり。大地主と作りて七寶自然に千子具足し、三十二大丈夫の相を備へ、威德勇猛にして能く怨賊を摧けり。彼の王の治化在世の時、大地及び海に、荊棘丘陵高下有ること無く、五穀豐熟し人民安樂にして、諸の恐怖及以び艱難無く、兵戈を用ひずして諸方自ら伏し、法の如くに治化せり。諸の比丘よ、彼の眞實王の千子の內に一長子有り、名けて(3)意喜(Roja)と曰ひ、亦た自用と名く。此子、亦、轉輪聖王と作りて、上に說く所の如く七寶、千子、乃至、大地あり、法の如く治化せり。諸の比丘よ、彼の自用王の千子の內に一長子有り、名けて(4)智者と曰ふ。衆人之を號して、名けて受戒(Upoṣadha)と爲せり。彼の智者王も亦父の位を紹ぎて轉輪王と作り、上に說く所の如く、七寶、千子、乃至、大地あり、法の如く治化せり。諸の比丘よ、彼の智者王の千子の內の最初の長子を名けて(5)頂生(Māndhātā)と曰ふ。亦、父の位を紹ぎて轉輪王と作り、上に說く所の如く、乃至大地あり、法の如く治化せり。諸の比丘よ、彼の頂生王の千子の內の最初の長子を名けて(6)大海(Mahā-sāgara)と爲す。亦、父の位を紹ぎて轉輪王と作り、上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の大海王の千子の內の最初の長子を名けて(7)具足と爲す。衆人、又、喚んで之を名けて敷と爲す。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の具足王の千子の內の最初の長子を名けて(8)養育(Bharata)と爲す。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の養育王の千子の內の最初の長子を名けて(9)福車(Bhagīratha)と曰へり。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の福車王の千子の內の最初の長子を名けて(10)解脫(Mucala)と曰へり。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の解脫王

【五】劫初、この宇宙の成生せる初の時。

の千子の内の最初の長子を(11)善解脱(Sumucala)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の善解脱王に子有り、名けて(12)逍遙(Caraka)と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の逍遙王に子有り、(13)大逍遙(Uracaraka)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の大逍遙王に子有り、名けて(14)照耀(Pratāpa)と曰へり。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の照耀王に子有あり、(15)大照耀(Mahāpratāpa)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し』。

賢劫王種品第三の下

『諸の比丘よ、彼の大照耀王に子有り、還(16)意喜(Rucei)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ彼の意喜王に子有り、名けて(17)善喜(Surucei)と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ彼の善喜王に子有り、名けて(18)滿足(Pranāda)と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ彼の大滿足王に子有り、還、(19)養育(Bharata)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の養育王に子有り、還、(20)福車(Bhagīratha)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の福車王に子有り、(21)人首領と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の人首領王に子有り、名けて(22)火質と曰へり。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の火質王に子有り、名けて(23)光炎(Arcimant)と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の光炎王に子有り、(24)善譬冠と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の善譬冠王に子有り、(25)名を空冠と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の空冠王に子有り、名を(26)善見(Sudarśana)と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の善見王に子有り、(27)大善見(Mahāsudarśana)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ、彼の大善見王に子有り、名けて(28)須彌(Neru)と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し。諸の比丘よ。彼の須彌王に子有り、(29)大須彌(Mahāneru)と名く。次いで王位を紹ぐこと上に說く所の如し』。

『轉輪聖王、四天下海等の大地を統べ、七寶を具足し、乃至、法の如く、人民を治化せり。諸の比

丘よ、是の如き等の王は、皆是れ過去の轉輪聖王なり。無量の福業を具足修習し、深く善根を種ゑ、是の果報を以て、並びに食を此の四天下の一切の大地に得、諸の福業を受けて壽命量り難く、算へ計るべからず。諸の比丘よ、汝等當に知るべし。我今更に、彼の轉輪王の種姓、苗裔、世世の相承、幷びに餘の小王の子孫の繼襲、住處名字、次第の少多を說かん。汝の爲に、略して彼等の氏族を說かん、汝等善く聽けよ』。

『諸の比丘よ、(1)大須彌王の治化已來世世相承け、子子孫孫、一百一の小轉輪王有り、悉く皆住して褒多那城(Potanagara, Potalaka)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を(2)師子乘(Siṃhayāna?)と名く。師子乘王世世相承け、子子孫孫、六十一の小轉輪王有り、悉く皆住して波羅捺城(Bārāṇasī?)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內最後の一王を、名けて(3)女乘(Striyāna?)と曰へり。彼の女乘王、世世相承け、子子孫孫、五十六の小轉輪王有り、悉く皆住して阿踰闍城(Ayodhya)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を(4)嚴熾生(Abhitapta)と名く。嚴熾生王、世世相承け、子子孫孫、合せて一千の小轉輪王有り、皆悉く住して迦毘梨耶城(Kavirya? Kapila)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を名けて(5)梵德(Brahmadatta)と曰ふ。彼の梵德王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、皆悉く住して阿[呵]私帝那富羅城(Hasthinapura)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を名けて(6)象將(Hasthidatta)と爲す。彼の象將王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、皆悉く住して德叉尸羅城(Takṣaśila)に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を號して(7)護(Tāliśvara?)と名く。彼の護王、世世相承け、子子孫孫、一千二百の小轉輪王、皆悉く住して奢耶那城に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を(8)能降伏と名く。能降伏王、

世世相承け、子子孫孫、合せて九十の小轉輪王有り、皆悉く住して迦那鳩闍城(Kanyakubja)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて(9)勝將(Jitasena?)と爲す。彼の勝將王、世世相承け、子子孫孫、二千五百の小轉輪王、皆悉く住して瞻波城(Campā)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を名けて(10)龍天(Nāgadeva)と曰ふ。彼の龍天王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り。皆悉く住して王舍城Rājag-ṛha)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて(11)作闍と爲す。彼の作闍王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、悉く皆住して拘尸那竭城(Ku-śinagara)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を(12)大自在天(Ma-heśvara)と名く。彼の大自在天王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、悉く皆住して菴婆羅劫波城(Āmrakalpa?)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、還た(13)大自在天と名く。彼の大自在天王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り。悉く皆住して檀多富羅城(Dautapura)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を名けて(14)善意(Sumati?)と曰ふ。彼の善意王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、悉く皆住して多摩婆頗梨多城に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を(15)無憂豐と名く。彼の無憂豐王、世世相承け、子子孫孫、八萬四千の小轉輪王、皆悉く住して寐洟羅城(Mithilā)に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を(16)毘紐天(Viṣṇu)と名く。彼の毘紐天王、世世相承け、子子孫孫、一百一王、皆悉く住して毘婆多那城に在り、人民を治化して福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、還た(17)大自在天と名く。彼の大自在天王、世世相承け、子子孫孫、合せて八萬四千の諸王有り、還た彼の寐洟羅城に在りて人民を治化し、福樂を受けぬ。彼の諸王の內、最後の一王を名けて(18)魚王と曰ふ。比丘よ、當

【一】作闍は恐く作闇ならん。

に知るべし、諸の是の如き等の小轉輪王に悉く福德有り、皆善根を種ゑて世間の福報を具足して受くること、與に等しき者無し。其化の被る所、大地及び海、一切の諸山、悉く皆統攝せり。諸の比丘よ、彼の轉輪王に各皆[三]粟散の諸王有り、我今之を說かん』。

『諸の比丘よ、(1)魚王に子有り、名けて(2)眞生と曰へり。彼の眞生王、父祖已來善根を修習して、王を紹繼するを得、福報盡きたるが故に便ち王位を失へり。時人、彼の王化の道を失して福德有る無きを見て、共に相謂つて言はく、「此の王は人中の最好貧劣、人中の單薄、人中の可愍、人中の可掘なり」と。是の故に世人皆之を號して、可掘の王と爲せり。掘王に子有り、名けて(3)平等行王と爲す。平等行王の子を(4)闇火と名く。闇火王の子を名けて(5)熖熾と爲す。熖熾王の子を名けて(6)善譽と爲す。善譽王の子を名けて(7)虛空と爲す。虛空王の子を名けて(8)戒行と爲す。戒行王の子を名けて(9)無憂(Aśoka)と爲す。無憂王の子を名けて(10)離憂と爲す。離憂王の子を名けて(11)除憂と爲す。除憂王の子を名けて(12)勝將(Vijitasena)と爲す。勝將王の子を名けて(13)大將と爲す。大將王の子を名けて(14)胎生と爲す。胎生王の子を名けて(15)明星(Aruṇa)と爲す。明星王の子を名けて(16)方主(Diśaṃpati)と爲す。方主王の子、號名を(17)塵(Reṇu)と爲す。彼の塵王の子を名けて(18)善意(Sumati)と爲す。善意王の子を名けて(19)善住(Supratiṣṭhita)と爲す。善住王の子を名けて(20)歡喜(Ānanda)と爲す。歡喜王の子を名けて(21)大力(Mahābala)と爲す。大力王の子を名けて(22)大光と爲す。大光王の子を(23)大名稱と名く。大名稱王の子を名けて(24)十車(Daśaratha)と爲す。十車王の子を(25)二十車(Dvadaśaratha)と名く。二十車王の子を(26)妙車(Sucitraratha)と爲す。妙車王の子を名けて(27)步車と爲す。步車王の子をけて(28)十弓(Daśadhanu)と爲す。十弓王の子を名けて(29)百弓(Śatadhanu)と爲す。百弓王の子を(30)二十弓(Dvadaśadhanu)と名く。二十弓王の子を(31)妙色弓(Sucitradhanu)と名く。妙色弓王の子を名けて(32)罪弓(Neritadhanu?)と爲す。罪弓王の子を名

【三】粟散、小國の王をいふ。以下その傳統を明す。

けて(33)海將(Sāgarasena?)と爲す。海將王の子を名けて(34)難勝(Prajita)と爲す。難勝王の子を名けて(35)茅草(Kusa)と爲す。茅草王の子を(36)大茅草(Mahākusa)と名く。大茅草王、世世相承け、子子孫孫、苗裔合せて一百八王有り、還た住して彼の褒多那城(Potana)に在り、人民を治化して福樂を受けたり』。

「彼の一百八の最も後に在る王は、大茅草にして其王に子なし。是の如きの念を作しぬ、[三]「上世已來、我の種姓、粟散諸王は、自らの頭鬚に白髮を生ずるを見るの時、各諸子を以て灌頂して王と爲し、別に勝上最好の一州を取り、以つて布施に用ひ、鬚髮を剃除し、王位を捨てて出家して道を修めき。我今兒なし、當に誰を以て我王の後を繼嗣すべき。誰か我の種姓を增長するに堪へたる。或は復、我今、諸王種を斷ぜんか」と。復、此の念を生じぬ、「我今、若し、出家修道せずんば、則ち一切諸賢聖の種を斷ぜん」と。是を思惟し已りて、時に大茅草、卽ち王位を以て諸大臣に付す。大衆圍遶して王を送つて城を出で、鬚髮を剃除して出家の衣を服しぬ。王、出家し已るや、持戒清淨に、專心勇猛にして、[四]四禪を成就し[五]五通を具足し、王仙と成るを得て壽命極めて長く、年衰老するに至つて肉消え背曲り、復、杖に拄ると雖も遠行する能はず。時に彼の王仙の諸の弟子等、東西に往きて飮食を求覓め、好輭草を取りて籠裏に安置し、用て王仙を盛りて樹枝上に懸けんと欲す。何を以ての故に。諸の蟲獸の來りて王仙に觸るるを畏るればなり。時に諸の弟子の乞食に去れる後一獵師有り、山野を遊行して遙かに王仙を見、是を白鳥と謂ひ、遂に卽ち之を射る。時に彼の王仙、既に射られ已るや、兩滯の血有りて出でて地に墮ち、卽便ち命終す。彼の諸の弟子、乞食より來り還り、彼の王仙の射られて命終せるを見、復、血の兩滯有りて地に在るを見るや、卽ち彼の籠を下し、王を將て地に置き、柴木を集聚して王の屍を焚燒し、骨を收めて塔を爲り、復、種種雜妙の香華を將て、彼の塔を供養し、尊重し、讚歎し、承事し畢了れり。爾の時、彼の地に兩滯の血

【三】以下の傳說は中阿、大天捺林經の傳說を利用せるもの。

【四】四禪は禪定の四階級。初禪、第二禪、第三禪、第四禪これなり。三界說にては、之を色界と爲す。阿含諸經中(長阿含三明經等)に詳出する。參照せよ。

【五】五通は五種の通力。(一)天眼、(二)天耳、(三)宿命、(四)他心、(五)神足、これなり。佛敎の解脫者が六神通を備ふといふに對して、外道には第六の漏盡通なしとするなり。これまた阿含中に出づ。參照。

あり、即便ち二甘蔗の芽を生出しぬ。漸漸に高大し、時に至りて蔗熟し、日に炙られて開剖し、其一莖の蔗より一童子を出し、更に一莖の蔗より一童女を出す。端政にして憙ぶ可く、世に雙有る無し。時に諸の弟子、心に王仙の世に在りし時、兒子を生まざりしを念ひ、今是の兩童は是王仙の種なりとて、養護看視して諸臣に報じ知らしむ。時に諸の大臣、聞き已りて歡喜し、彼の林に往き至りて二童子を迎へ、將ゐ還りて宮に入り、解相[六]の大婆羅門を召喚して占相せしめ、并に名を作さしむ。彼の相師言はく「此の童子は、既に是れ日に炙られて、熟せる甘蔗の開いて而して出生せるが故に、一に善生(Sujāta)と名く。又、其の甘蔗より出づるを以ての故に、第二に、復、甘蔗生（Ikṣvāku）と名く。又、日に炙られし甘蔗より出づるを以ての故に、亦、日種(Sūrya-varṣa）と名く。彼の女の因緣も、一種も異ることとなし。故に善賢(Subhadrā?)と名く。復、水波[七](Jalā?)と名く。時に彼の諸臣、甘蔗種所生の童子を取り、幼少年の時、即ち其頂に灌ぎ、立てて以て王と爲す。其の善賢女は、年長大するに至つて、伏事に堪能なり、即ち拜して王第一の妃と爲しぬ』。

『時に甘蔗王に第二の妃有り、絕妙端政にして四子を生む。一を炬面(Ulkāmukha)と名け、二を金色(Karakarṇa)と名け、三を象衆(Hastikaśirṣa)と名け、四を別成(Nikura)と名く。其の善賢妃は唯一子を生む。名けて長壽（Dirgāya?）と爲す。端政にして憙ぶ可く、世間に雙少なし。然れども、其の骨相、王と作すに堪へず。時に善賢妃、是の如く思惟すらく、「甘蔗種王に、此の四子有り、炬面等の輩は兄弟群强なり。我今、唯此の一子有るのみ。極めて端正にして世に雙有る無しと雖も、其の相分は主たるに堪へず。何の方便を成してか、我が此の子をして王位を繼ぐを得せしめん」と。復、此の念を成しぬ、「是の甘蔗王は、今我邊に於て、量りなく敬愛し、深く心に染著して情を縱にし意を蕩かせり。我今更に、婦人莊飾の法を窮極すべし。所謂、淨潔に身體を摩拭し、香湯もて沐浴して氣を芬芳ならしめ、髮に澤蘭[八]を塗り面に脂粉を著け、花鬘瓔珞もて種種に莊嚴

【六】解相。人相を占ふ術を知ること。

【七】水波。大事には甘蔗王の第四女に Jalā, 第五女に Jalī を擧けり。

【八】澤は香油。

し、甘蔗王の心をして我邊に於て重ねて耽湎、愛戀、娯樂を生ぜしめん。若し心の如きを得ば、我れ屏處に於て當に乞ひ求めて願ふべし」と。是を思惟し已りて、上に説く所の如く自身を莊嚴し、極めて殊絶ならしめて、王の邊に至る。王、妃の來るを見て重愛敬を生じ、其の心を縱逸にす。妃、王の是の如き心を生ぜしを見已りて、二人眠臥し、妃、王に白して言はく、「大王當に知るべし、我、今、王より一願を乞ひ求めん、願はくは王よ、我に與へよ」と。王言はく、「大妃、意の隨に逆はじ、心の欲する所に從へ、我當に妃に與ふべし」と。時に妃、復更に重ねて、王に誥つて言はく、「大王の自在なる、若し我に願を與へば、變悔するを得じ、若し變悔せんも、我此を須ひず」と。王、妃に語りて言はく、「我、一たび妃に心の願ふ所を與へぬ、後若し悔いなば、當に我が頭をして破れて七分と作らしむべし」と。妃言はく、『大王よ、王の四子、炬面等の輩を、願はくは國より擯出し、我が生子の長壽をして王爲らしめたまへ」と。時に甘蔗王、卽ち妃に語つて言はく、「我が此の四子、過失あるなし、横まに財を求めず、罪患有るなし、豈辜無きに枉げて驅遣し、遠く他土に擯くるを得可けんや、我が治化する國境の內に於て、何の非祥ありてか、其の住むを聽さざる」。妃、又白して言はく、「王よ、已に先に誓語せり。若し悔いなば頭破れて七分せん」。王、妃に告げて言はく、『我が前に言へるが如く、妃の願ふ所を與へん、妃若し時を知らば、妃の意に任隨せよ」と。時に、甘蔗王、此の夜を過ぎて後、明の清旦に至り、四子を集聚して而して告勅して言はく、「汝四童子、今、我が治化の內を出で去るべし、居住するを得ず、遠く他國に向へ」と。』

『[九]時に、四童子胡跪合掌して父王に白して言はく、「大王當に知るべし、我等四人、罪惡有るなく、諸の過咎無し、非法もて、他の錢財を取るを作さず、又復、其餘の惡業を造らず、云何ぞ父王、忽然として我を擯けて國界より出すか」と。王、子に勅して言はく、「我、汝等の實に過失なく横まに財を取らざるを知る。上に説く所の如きは、此れ我意もて汝を駈擯するに非ず、此は是れ善賢大妃の意

【九】四王子追放のこと、長阿、阿摩晝經の古傳に關連するものゝ如し。

なり。彼の妃の乞願せるを、我れ彼に違はずして、汝をして國を出でしむるなり」と。

時に四王子を生める所の母、甘蔗王の其の子を擯けて國界より出でしめんと欲するを聞き、聞き已りて速疾に王の所に往至し、王の所に至り已りて白して言はく、「大王よ、聞くならく、王、我が四子を逐ひて、國界より出でしめんと欲すと、實に爾りと爲すや不や」。王言はく、「實に遣るなり」。諸妃、各復、王に白して言はく、「善い哉や大王、我等各兒に隨つて去ちんを求め乞ふ」と」。

『王、諸妃に報ふらく、「汝の意の隨にして去れ」と。時に、諸妃の妹、復王に白して言はく、「我姉の外甥、今已に國を出づと。我亦去らんを乞ふ」と。王、各、報へて言はく、「汝の意に任隨せよ」と。時に諸の大臣・公卿・輔相、亦王に白して言はく、「王今、此の四王子を斥け遣りて、國を出でしめば、我等諸臣も亦隨ひ去らんを求む」と。王言はく、「意に任せよ」。時に、王の諸象馬を典當せる臣も、亦隨從せんことを求む。王言はく、「意に隨へ」と。復、弓將、弩將、獄將、諸の羊畜牧等を典當せる將の諸臣の子有り。又復、諸餘の主藏、兵將、遊軍、壯士、善射の將、奴婢僕使、及び其子等、甘蔗王の四子を逐ひて國界より出でしめんと欲するを聞き、倶に王に白して言はく、「我等、並に王子の東西するに隨從して去らんことを求む」。王言はく「意に隨へ」と。又復、國內の竹匠、皮匠、瓦師、塼師、造屋木師、造酒食師、剃鬚髮師、染洗衣師、屠兒、按摩、治病、合藥、釣魚等の師、王の四子を駈りて國を出さんと欲するを聞き、是の如きや不やを審む。王曰はく、「實に爾り」。「我等も去らんを求む」。王言はく、「意に隨へ」と。時に甘蔗王、諸の王子を勅して是の如きの言を作しぬ。「汝等王子、今よりして已去、若し婚姻を欲するも、餘の處にて他の外族を取るを得ざれ、還つて自家の姓內に於て取り、甘蔗の種姓をして斷絕せしむること莫れ」と。時に諸の王子、父王に白して言はく、「大王の勅の如からん」と。

彼の諸の王子、父の敎を受け已りて、各各自ら所生の母、幷に姨姉妹、奴婢、資財、諸駄乘等を

將つて、即ち北方に向ひ、雪山(Himavant)の下に到り、少時を經て住まる。一大河有り、婆耆羅渓(Bhāgīrathī) と名く。彼の河を渡りて雪山の頂に上り、游渉して久しく停る。時に四王子、彼の山頂に在り、射獵して諸の禽獸を捕へて食ひ、漸漸に前行して山の南面に至り、見やれば、川は寛く平かにして諸の坑坎、堆阜、陵谷、丘壑、溝渠、荊棘、塵埃及び沙礫等無く、其の地、唯、輭細の青草を生じ、清淨にして愛す可く、樹林華果、蔚茂敷榮すること、猶ほし黑雲の如く、光澤〔一〇〕儵鑠に、林木遍滿して、其間空る少し。所謂、娑羅樹(sāla)多羅樹(tāla)那多摩羅樹(nāḷāmra?)、阿說他樹(aśvattha)、尼拘陀樹(nyagrodha)、優曇婆羅樹(udumbara)、千年棗樹、迦梨羅樹(khadira) 等、諸の枝柯を垂れて各相蔭映す。又種種諸の雜妙の花、有り、所謂、阿提目多華(atimuktaka)、瞻波華(campaka)、阿趣迦華(aśoka)、波多羅花(pāṭala)、婆利師迦華(vārṣikī)、拘蘭那華(kuraṇṭaka)、拘毘陀羅花(kovidāra)、檀奴沙迦梨迦花(dhānuṣkārikā)、目眞隣陀華(mucilinda)、蘇摩那(sumana) 等、一切の諸華、或は已に開ける有り、或は未だ開かざる有り、或は初めて開かんと欲し、或は開き已りて落つ。復、無量衆雜の果樹有り、所謂、菴婆羅果(āmra)、閻浮果(jambu)、陵拘闍果(?)、波那娑果(panasa)、鎭頭迦果(tinduka)、呵梨勒果(karītakī)、毘醯勒果(viheṭhaka)、阿摩勒(amala)等、種種の諸果、或は始めて子を結び、或は子熟せんと欲し、或は子已に熟して食噉すべきに堪へたり」。

『復、無量諸雜の野獸有り、所謂、伊泥耶獸(eṇeyya羚羊)麞鹿、水牛、那羅迦獸(?)、野牛、白象及び獅子等なり。復、無量種種の飛鳥有り、所謂、鸚鵡、及び拘翅羅(kokila)、鸜鵒、孔雀、迦陵頻伽(kalaviṅka)、命命、鵁鶄、山鷄、白鶴、遮摩迦鳥(carma-caṭaka,蝙蝠)、及び蘭摩(?)等、一切の雜鳥なり。復、無量諸水の陂池有り、其の池に各各種種の雜花有り、所謂、優鉢羅華(utpala)、波頭摩花(padma)、拘勿頭華(kumuda)、分陀利華(puṇḍrīka)、悉く諸池に滿つ。池岸の四邊、復、

【一〇】儵はあをぐろなり。

諸華有り、池上に垂覆す。其の水清淨にして濁穢有る無く、湛然として彌滿し、深からず淺からず、度り易く行き易し、四邊を周帀して種種の諸樹あり、池內に復種種の諸蟲有り、所謂、魚、鼈、黿、鼉龜、鼇、螺、蚌など、一切の水性なり。復水鳥あり、所謂、鳧、雁、鵝、鴨、白鷺、鸕鷀及び鴛鴦等、一切の諸鳥なり。然るに其の彼處に、舊と一仙有り、中に在りて居止しき、迦毘羅（Kapila）と名く。彼の諸王子、是の處を見已りて共に相謂つて言はく、「此の間に於て、城を造りて治化すべし」と。』『爾の時王子、旣に安住し已りて父王の語を憶ひ、自姓の中に於て婚姻を求覓むるに、婦を得る能はず、各、姨母及び姉妹を納れて共に夫妻と爲り、婦禮に依る。一に父王の敎令に隨從せんと欲し、二に釋種に雜亂の相生ぜんを恐るるなり。

爾の時、日種甘蔗王、一國の師の大婆羅門を召し來り、之に謂つて言はく、「大婆羅門よ、我が四王子は今何處にありや」。國師答へて言はく、「大王、當に知るべし、王の四子、已に、各、自ら姨母、姉妹、駄乘、人物を將ゐて國外に出で、北方に向ひ、乃至、已に端政の男女を生めり」と。時に甘蔗王、自ら愛する所の諸王子の爲の故に、心に見んと思欲し、意情歡喜して而して是の言を發しぬ、「彼の諸王子、能く（Sak）國の計を立て太だ好く治化す」と。彼等王子、是の故に姓を立て、稱して釋迦（Sakya, 能）と爲す。釋迦、大樹の蓊蔚たる枝條（Sakha）の下に住めりしを以て、是の故に名けて奢夷耆耶（Sakhā+i+ya）と爲しぬ。其の迦毘羅仙の所住に本づくを以ての故に、因つて城に名を立つるが故に迦毘羅婆蘇都（Kapilvastu）と名く。時に、甘蔗王の三子沒して、後に唯一子在り、尼拘羅（隋に別成と云ふ）と名く。王と爲り、住して迦毘羅城に在り、人民を治化して福樂を受けたり。[二] 其の尼拘羅王、一子を生む。名けて拘盧と曰ふ。還、父王の迦毘羅城に在りて、治化して住せり。其の拘盧王、復、一子を生む。瞿拘盧と名く。亦、父の城に在りて、王と爲りて治化しぬ。其の瞿拘盧王、復、一子を生む。師子頰（Simhahanu）と名く。還、父の城に在りて人民を治化せり。師子

【二】尼拘羅王より師子頰に至る傳統は、諸傳悉く大差あり、多きは二十數萬年、一萬に近き世代をすら數ふ。本經は最も簡にして、其の間二代に過ぎず。諸傳一致せざるを以て、王名の原語も推定しがたし。

頬王、四子を生む。第一は名けて閲頭檀王(Suddhodana)と曰ひ、隋に淨飯と言ふ。第二は名けて輸拘盧檀那(śuklodana)と爲し、隋に白飯と言ふ。第三は名けて途盧檀那(Dronodana)と爲し、隋に斛飯と言ふ。第四は名けて阿彌都檀那(Amrtodana)と爲す、隋に甘露飯と言ふ。復、一女有り、甘露味(Amrtā)と名けたり。師子頬王最初の長子、閲頭檀は、次いで王位を紹ぎ、還父の城に在りて人民を治化し福樂を受けたり。』

『時に、迦毘羅と相去ること遠からずして、復、一城有り。名けて天臂城(Devadaha)と曰ふ。彼の天臂城に一釋種の豪貴の長者あり、名けて善覺(Suprabuddha)と爲す。大富多財にして諸の珍寶を積み、資産豐饒にして威德を具足し、稱意自然にして乏少する所無し。舍宅は猶毘沙門王(Vaiśrāvaṇa)の宮殿の如く、異ることとなし。彼の釋長者、[一二]八女を生めり。一を名けて[一三]意(Māyā)となし、二を無比意(Atimāyā)と名け、三を大意(Mahāmāyā)と名け、四を無邊意(Anantamāyā)と名け、五を髻意(Cūlimāyā)と名け、六を黑牛と名け、七を痩牛と名け、八を摩訶波闍波提(Mahāprajāpatī)と名く。隋に大慧と言ひ亦、梵天と云ふ。而して、[一四]此の梵天は諸の女中に於て年最も幼少なり、初生の日、諸の能相を爲す婆羅門師、其體を觀占して云はく、「此の女嫁して若し兒を生まば、必ず當に轉輪聖王と作るを得、四天下に王たり、七寶自然に、千子具足し、乃至、鞭杖を用ひずして民を治すべし」と。時に善覺の女、年漸く長成して行嫁を欲するに堪へたり。白淨王、自國の境內に一の釋氏有り。甚大の豪富にして八女を生み、端政雙少れに、乃至、相師其女を占觀して、當に貴子を生むべしと言へるを聞く。時に、淨飯王、是の語を聞き已り、是の如き言を作しぬ、「我、今、當に、是の女を索めて妃と作し、我が甘蔗轉輪聖王の苗裔をして絕えざらしむべし」と。』此は是律家に是の如き說を作す。又言く、大慧は是菩薩の母とは、此れ阿波陀那經(Avadānasūtra)文に依れり、又言はく、輪頭檀王はこれ我の父、摩耶夫人はこれ我母と。阿波陀那經に說くが如し。諸經文を檢するに、此義は是實なり。

『時に、淨飯王、即ち使人を遣はして善覺大長者の家に往き詣らしめ、大慧を求索め、「我が爲に波闍波提を作せ。」と。[一五]波闍波提は隋に生活本と言ふ。爾の時、善覺、彼の使に語つて言はく、「善使、仁者よ、我が

【一二】善覺長者に八女ありとすることは、本經のみの傳なり。從つてその梵名に決し難きものあり。

【一三】大事には七女を擧げ、黑牛、痩牛を缺きて、第六女にKolisovā を擧ぐ。

【一四】こゝには摩訶波闍波提女を以て佛の生母に擬せんとするものゝ如きも、後には摩耶を以て生母とせり。本經が各種の異傳を合糅し居るを見るべし。

【一五】摩訶波闍波提を、前には大慧、梵天と釋し、今は生活本とせり、前二は印度に於ける轉釋なるべく、共に摩訶波闍波提を梵天の異名とするによれり。今は語義釋にて、波闍を生、波提を本と解したるなり。

爲に、大王に是の言を諮啓せよ、我に八女有り、一の名を意と爲し、乃至、第八の名を大慧と爲す。何が故に大王、最小者を求むるか、大王、且く待たるべし。我、七女を處分し竟りて、當に大王に大慧を與へて妃と作すべし」と。時に、淨飯王、復更に使を遣はし、長者に語らしめて言はく、「我今、汝が一一、七女を嫁し訖りて、然る後に大慧を取りて妃と作すを待つを得ず、汝が八頭の女、我盡く皆取らん」と。時に善覺釋、大王に報じて言はく、「若し是の如くんば、大王の命に依らん、隨意に將ゐ去れ」と。時に淨飯王、即ち使人を遣はし、一時に八女を迎へ取りて宮に向ひ、宮に至り已りて即ち二女を納れて、自ら用て妃と爲せり。其の二女とは、第一を名けて意となし、及び第八を大慧と名く。自餘の六女は、三弟に分與し、一人に二人りを與へ、並に妻りて妃となせり。時に淨飯王、意の姉妹を納めて宮中に内れ、縱情嬉戲し歡娯受樂して、諸王の法に依りて四方を治化しぬ」。

上託兜率品第四の上

爾の時、[一]護明菩薩(Śvetaketu?)[二]大士、迦葉世尊の所に從ひ、禁戒を護持して梵行清淨に、命終の後、正念にして兜率陀天(Tuṣita)に往生しぬ。何を以ての故に、或は衆生有り、命終の日、[三]風刀に節節支解せられて楚痛を受け、或は氣盡きんと欲して喘息安からず。是の因緣を以て大苦惱を受け、本心を失ひ其の[四]宿行を忘れ、其の心を專正寂定にする能はざるも、菩薩は然らず、命終らんと欲する日、正心に思惟す。其前世の託生の處所に緣りて、是の如き等の希奇の法有り。又、諸菩薩に、復、一法有り。命終の後、必ず天上に生る。或は高く、或は下く、一天を定めず、而して、其の[五]一生補處の菩薩は、多く必ず[六]兜率陀天に往生し、心に歡喜を生じ智慧滿足す。何を以ての故に兜率天に生るゝか。在下の諸天には多く放逸有り、上界の諸天には禪定力多きも、寂定輭

【一】菩薩の名、大事に Śvetaketu とせり、この語、方廣大莊嚴經、同梵本、善見律(巴利傳 Setaketu)に「淨幢」とせるを正譯とするも、因果經には「聖善白」又は「聖善慧」とせり、蓋し Śveta は「白」なれば「善」又は「善白」と義譯し、ketu に「光明」の意あるを以て「慧」とせるならん。今の「護明」も、恐らく同一原語なるべし、

【二】大士。摩訶薩 mahāsattva の譯にして、菩薩を一層强調せるもの。

【三】風力。命終の時、體中の風大動搖するが爲に、恰も刀もて割截せらるゝが如きにいふ。

【四】宿行とは、宿世の行業。

【五】一生補處とは、一生を終れば、前聖の後を嗣ぎて、佛處を補ふ域にあるをいふ。

【六】兜率陀天。六欲天の中、第四位にあり、一生補處の菩薩は、必ずこゝにありて修行し、下生成佛の時を待つと信ぜらる。

弱にして、生れて以て樂を受くるを求めざるが故に。又、復、一切衆生の爲に慈悲を生ぜざるが故に。――菩薩は然らず、但、諸の衆生を敎化せんが爲の故に兜率天に生る。下界の諸天は、聽法の爲の故に、兜率天に上りて法を聽受し、上界の諸天は、復、法の爲の故に、兜率陀天に下り來つて法を聽受する有り。

然るに此の菩薩、亦、兜率に生れぬ。其の兜率陀に居る所の諸天、即ち菩薩を呼んで名けて護明と爲せり。是の因緣を以て號して護明と爲す。諸天展轉す。其の聲、上に徹して淨居天に至り、及び〔七〕阿迦膩吒天(Akaniṣṭha)の頂に到る。時に、諸天等、皆同く唱へて言く、『護明菩薩、已に來つて兜率天中に生る』と。此の聲、下つて〔八〕三十三天に至り、乃至、〔九〕四天王天に達到し、并に復、諸の〔一〇〕阿修羅(Asura)宮に徹す。各共に相謂へらく、『護明菩薩、已に兜率陀天に上生するを得たり』と。極下は阿修羅宮に至り、最上は彼の阿迦膩吒に到るまで、皆悉く兜率天に來集し、護明菩薩の宮所に聚りて法を聽受しぬ。護明菩薩、既に兜率に生るゝや、其の兜率陀諸天の宮殿は、光明照耀して自然に莊嚴し、更に、復、無量無邊の莊嚴の事を出す。皆護明菩薩の功德威神力に由るが故なり。大梵天王(Mahā-brahma)及び、大威德ある阿修羅等、皆悉く集つて兜率天中に來り、前後に護明菩薩を圍繞す。復、無量無邊の衆生有り、兜率に託生して最勝最妙の五欲を見るを得るや、心迷ひて忘失し、〔一一〕本行及び先業を憶はざるも、護明菩薩は、兜率天に生れて、設ひ最勝最妙の五欲を見るも心迷惑せず、曾て忘失せず、本緣を正念し、乃至、諸衆生を化せんが爲の故に、兜率天に住し、天數壽命、滿四千歲、彼の諸天の爲に說法敎化し、〔一二〕法相を顯示して心をして歡喜せしむ。自餘の衆生の彼の天に生るる者、或は往昔の不淸淨業を以ての故に、其中に生るるも、或は、復、橫死して天壽を滿ぜず。護明菩薩は、過去修行の淸淨の業因と、復、諸の衆生を敎化せんが爲の故に、兜率天の所有の壽命を盡す。是の故に稱言すらく、『希有、希有、不可思議なるかな。又、

【七】 阿迦膩吒(Akaniṣṭha)は色究竟天と譯す、色界十八天の最上に位す。
【八】 三十三天。忉利天なり。六欲天の第二位にあり。
【九】 四天王天。須彌山の四方を護る。六欲天の第一位なり。
【一〇】 阿修羅宮。大海の底にありと信ぜらる。
【一一】 本行、先業。本行は本生の行、業は先世の業。共に前生に於ける自己の作せるしわざ。
【一二】 法相。萬物の空、無常、無我なる狀態。

復、不思議の法を得て、護明菩薩、彼の天年を盡す』と。爾の時、護明菩薩大士、天壽滿ち已りて自然にして五衰の相を現ずる有り。——何等をか五と爲す。一には頭上の華萎み、二には腋下より汗出で、三には衣裳垢膩し、四には威光を失ひ、五には本座を樂まず。——時に兜率天、彼の護明の衰相現ぜるを見已りて、大音聲を出すらく『嗚呼嗚呼』と。共に相謂つて言はく『苦しい哉、苦しい哉、護明菩薩、久しからずして應に此の兜率天宮を捨離して、威神を退失すべし、我等今、何ぞ住するを得べけん』と。是の時、彼の處の兜率天衆、唯哭聲を聞くのみ。諸天の宮殿、聲響相接して、此の聲乃ち上の色界の頂なる[一三]首陀會天(Śuddhāvāsa)に至る。阿迦膩吒の諸天衆等、各相謂つて言はく『嗚呼哀しい哉、護明菩薩、今已に五種の衰相を現じ、久しからずして墮落せん』と。兜率より下、修羅宮に及ぶまで、嗚呼の聲あり、其の音偏滿して處處に唯『久しからずして、墮落せん』の音を聞くのみ。是の時諸天、此の聲を聞き已るや、阿迦膩吒、他化自在(Paranirmita)、色(Rūpa-deva) [一四]欲(Kāma-deva)の天等、並びに各下り來りて兜率天に至り、夜摩(Yama)諸天、四天王天(Catur-mahā-rājikā)、此の聲を聞き已りて皆悉く集聚して兜率天に上る。是の如くして、乃至龍王(nāgarāja)、夜叉(yakṣa)、乾闥婆(gandharva)、阿修羅、迦樓羅(garuḍa)、緊陀羅(kiṃnara)、摩睺羅伽(mahoraga)、鳩槃茶(kumbhāṇḍa)羅刹(rākṣasa)等、地居の諸天の色欲界諸天の攝に屬するもの、皆悉く飛騰して兜率天に上り、一處に集聚して共に相謂つて言はく『我等、今護明天子を見るに、兜率より下りて人間に生れんと欲す』と。其の兜率天の衰相現ずる時、卽ち人間の數にして十二年有り。時に首陀會の一切の諸天、是の如き念を作す『我昔、曾て補處の菩薩の兜率天より下りて人間に生るる時を見しが、此と異ること無かりき』と。彼等諸天、今、護明菩薩大士の五衰の相現ぜるを見て、閻浮提(Jambu-dvīpa)に下るを必定して、卽ち大聲を發して、是の如き言を唱ふ『人等、此刹土を莊嚴せよ、菩薩大士、久しからずして彼の兜率天より來りて、此の處に下生せ

【一三】首陀會天。淨居天と譯す。色界の頂上にある阿迦膩吒天以下の五天又は六天の總稱。これを五淨居天といふ。

【一四】欲天に六あり、(一)四天王天(二)忉利天(三)夜摩天(四)兜率天(五)化樂天(六)他化自在天。この次第を知れば、前後のこれに關する部分を理解し易し。

ん。掃治せよ、掃治せよ、佛、下生せんと欲す」と。是の時、此の間の閻浮提地に五百の辟支佛(pratyeka-buddha)有り、一林中に在りて修道居住せり。時に、彼の五百の辟支佛、此の聲を聞き已りて虚空に飛騰し、相共に波羅㮈城(Bārāṇasī) に往詣し、彼處に至り已て、各各五種の神通を示現し、身を虚空に踊らして烟焰を出して、次第して偈を說き、壽命を捨てて般涅槃(parinirvāṇa) に入りぬ。爾の時、護明菩薩大士、彼の天衆、及び梵、釋天、護世の諸龍、毘舍闍(piśāca. 靈鬼) 等を見、彼の衆を觀察して心意泰然として恐れず、驚かず疑はず畏れず、柔輭の語を出して而して之に告げて言はく『汝、諸の仁者よ、各各當に知るべし、我の今の如く、此五種の衰相の出づるを見る時は、久しからずして兜率天より下りて人間に生れん』と。時に梵釋等の諸天、報へて言はく『尊者護明、尊の所見の如く、五種の衰相出現すれば、尊は必ず久しからずして、當に兜率を下りて人間に生るべし。尊よ、昔の[一五]本行願を憶念すべし』と。時に、彼の無量百千の天衆、是の語を發し已りて徧體戰慄し、身毛皆竪ち、心大いに驚怖し、十指の掌を合して護明を頂禮す。

爾の時、護明、彼の衆に告げて言はく『我今、必ず下らんこと決定して疑ひ無し。時今、已に至りぬ。是の故に汝等、應に無常を念ずべし。當に未來恐怖の事を想ふべし。汝等善く身體の穢汚を觀ぜよ。心に強く愛著すれば、是の諸欲、共に相纏遶するを以て、生死中に於て出離するを得ず。是の如きの臭形は甚だ厭惡すべし。汝等一切、十指の掌を合して我が身體及び諸の衆生を觀ぜよ。相與に未だ此法を免脫する能はず。是の故に汝等、我が爲に愁ふる莫れ、我が爲に苦しむ莫れ』。彼の諸天言はく、『尊者護明よ、唯願はくは尊者よ、慈悲普く覆ひて、亦、更に其餘の諸心を生ずる莫れ、但、往昔の本誓因緣を念ぜよ。億劫の生身に、尊も亦曾て天人の業果を受けたり。往昔造す所の善業の因緣あり、彼の施せる善根法行を憶念して、諸の衆生に於て慈悲心を生じたまへ』と。護明菩薩、諸天に報へて言はく『汝等當に知るべし、一切の衆生は、世間中、及以び生處に於て、但、

【一五】本行願は、菩薩としての前生に於ける行法及び誓願。願は理想、行は之に應ずる實行。

是[一六]有たらしめ、但、是れ生ならしめば、分離を免れず。況んや、復、我に於て分離なからんや。又、諸の衆生の皆悉く無常にして恩愛別離ある、云何ぞ脱するを得ん』と。

是の時諸天、復更に白して言はく、『希有なり、希有なり、尊者護明は思議す可きこと難し。能く[一七]無常の境界の中に於て、捨壽の時に臨みて、心に辯才を得、一種の達解、尊者護明に別異有ることなし』と。又、復、一切自餘の諸天、此の五種の衰相現ずるを見る時、心卽ち憂愁して正念を失へり。護明菩薩、復、更に重ねて諸天衆に告げて言はく、『一生補處の諸菩薩等は、善根增長して諸有[一八]の處を知り、功德の中に於て其の心を寂定にし、苦の來りて逼切するも、諸惱を生ぜず、乃至、諸苦に隨つて行ぜず、能く一切諸衆生の邊に於て大慈悲を起す』と。時に、諸天言はく、『是の如し、是の如し、尊者護明よ、一切衆生は彼の[一九]人間に於て諸の善根を種ゑて此の天宮に生れ、此の處の福盡きて、還、卽ち退下す』と。

護明菩薩、復、天に告げて言はく、『我、是を以ての故に、人天中に是の[二〇]過失有るを見る。我今、此より人間に下生し、諸の世間の一切の衆生の爲に、諸苦を滅盡せん』と。是の時、彼の中に一天女有り、護明菩薩に愛樂戀著し、復更に、別を一天女に告げて言はく、『我等、閻浮提中に至りて我が[二一]大家、護明菩薩の、何處に於て生るるかを觀るべし』と。彼の天女言はく、『我、今亦、閻浮提を樂む、何を以ての故に、我の大家、彼處に生れんと欲す、是の故に我亦、彼の間に在らんを願ふ』と。時に二天女、復、相謂つて言はく、『我も亦、此の大家の爲の故ならずして、往いて彼に生れんを願ふ、何を以ての故に、我が此の大家閻浮提に往かば、則ち無量無邊の衆生有りて諸の善根を種ゑ、中に於て信受して教化を行じ、復、無量無邊の衆生有りて、諸の[二二]福業を修めて、此處に來生すべければなり』と。

【一六】但是有ならしめ、但是生ならしめば、早や分離を免れず。有とは存在の意、生と同義、すべての存在には必ず生れて死するの分離あるをいふ。

【一七】能く無常の境界の中に於て云々。今や死せんとする時に臨みても、猶意識明瞭にして、明智の失せざるをいふ。達解は明智に同じ。

【一八】諸有(Sarva-bhava)。一切の迷執所生の境界にして、普通三有(三界)に分たれ、細かくは二十五有等に分類せらる。

【一九】人間。常識にいはるゝ個體の一人をいふにあらず、衆人の間、卽ち人間社會のことなり。人間の當初の意義は、こゝにあり。

【二〇】是過失とは、いかなる者も生者に必ず死あるをいふ。

【二一】大家。今菩薩を主人としてかく呼ぶなり。

【二二】福業。後世の福を收むべき行業なり。布施を行ずるが如し。

巻の第六

上託兜率品第四の下

[1]爾の時、兜率天衆の中に一天子有り、名けて金團と曰ふ。往昔已來、數曾て下りて閻浮提の地に到る。護明知り已りて金團に告げて言はく、『金團天子よ、汝、數下りて閻浮提中に至れり、汝、應に彼の城邑、聚落、諸王の種族を知るべし、[2]一生の菩薩は、當に何れの家にか生るべき』。金團天子報へて言はく、『善し』。金團說いて言はく、『此の三千大千世界に一菩提道場の處所有り、彼の閻浮の摩伽陀(Magadha)國の境界の內に在り、是れ昔、諸王の阿耨多羅三藐三菩提を成ぜる處なり。尊者護明よ、彼の中に河有り、名けて恒河(Gaṅgā)と爲す。其の河の南岸に一山有り、是、舊と仙人の居停せし處、然して其の彼處を [3]毘闍羅(Vaibhāra)と名け、亦た般荼婆(Pāṇḍava)・毘富羅(Vipada)・耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa)と名く。共に相圍遶して以て眷屬を爲す。彼の山や牢固にして、其の色猶綠摩尼寶の如し。中に聚落有り、名けて山髻(Girivraja)と曰ふ。山を去る遠からずして一大城有り、名けて [4]王舍と爲す。其の城に、往昔一王仙有りて、優荼波梨と名けぬ。種姓ありて以來、常に王治を爲せり。妃は是れ善見(Sudarśana)大王の族にして大夫人たり。其の子王と爲り、婆奚迦(Bāhika)と名く、今現に、摩伽陀國に治在して、彼の優荼王仙の後を繼ぐ。尊者護明よ、閻浮に往生せば、彼の王の爲に長子と作るに堪へん』と。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理有りと雖も、但、彼の王種の父母不淨にして、其の城處の邊、地勢堆阜、高下平かならず、純ら是れ溝坑、土沙、礫石、荆棘、諸草にして、少かに泉池、諸河、流水、樹木、苑囿、花果、園林有るのみ。是の故に汝今更に、別に、餘の刹利種を觀ずべし』。金團天子、復是の言を作すらく、『尊者護明

【一】以下本品の終りまで、方廣大莊嚴經(Lalitavistara)に取材せるものゝ如し。

【二】一生は一生補處の略、一生の後に佛處を補ひて、下生成佛するの謂。

【三】毗閑羅。本經四十八卷に出せる王舍城五山と今とを比較するに、今も亦五山を示すものにして、毗閑羅はそこには毗呵羅とあるも、共に原典の寫字に錯誤ありしものならん。他傳に比すれば Vaibhāra とするを正しとす。

【四】王舍城は Rājagṛha の譯。五山に圍まるるを以て或は五山城ともいふ。

よ、彼の迦尸(Kāśī)國の波羅奈(Bārāṇaśī)城の善光王仙に子有り、名けて善丈夫王と爲す、彼の王は、尊者の爲に父と作るに堪へたり』。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理、然りと雖も、但、迦尸國の善丈夫王に四種の法有りて、邪見に染著す、是の故に、汝今更に別に、其の餘の王種の我が生處に堪ふるを觀ずべし』。金團天子、復是の言を作すらく、『尊者護明よ、憍薩羅(Kauśala)國の[五]舍婆提(Śrāvastī)城に王有り、岐羅耶と名く、是の憍薩羅大國の主、其の身巨力にして多く人民有り、尊者よ、彼の王の爲に子と作るに堪へたり』。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理、然りと雖も、但、彼の國主憍薩羅王は、是れ[六]摩登伽(Mātaṅga)の苗裔種類、父母不淨雜穢にして生れ、兼て上世より來た、是、王種に非ず、小心下賤にして意氣高からず、又、其の家中の資財薄少、七寶の金、銀、瑠璃、碼瑙、眞珠有りと雖も、具足する能はず、是の故に、汝今別に更に、我が爲に諸の刹利の我が生處に堪ふるを觀ぜよ』と。

金團天子、復た、是の言を作すらく、『尊者護明よ、彼の跋蹉(Vatsa)國の拘睒彌(Kauśāmbī)城を千勝と名く、其の王に子有り、名けて百勝と爲す、彼の王、多く象馬七珍を有して、四兵具足す、尊者よ、彼の王の爲に子と作るに堪へん』と。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理、然りと雖も、但、跋蹉王の母、賢良ならず、他の丈夫に從つて是の子を生めり。正しき王種にあらず、然るに、其の彼の王も亦、長く斷見の事を宣說す、是の故に、汝更に餘の刹利を觀ぜよ、我が何れの處に生れんかを』と。

金團天子、復、此の言を作すらく、『此の金剛(Vjji, Vajji)國に一城邑有りて毘耶離(Vaiśālī)と名く、穀米豐饒にして、饑饉有るなく、人民安樂、國土莊嚴にして、譬へば天宮の如く、一種も異ることなし、彼の城の國王、樹王(Drumakiṃnara)の子は、種姓清淨にして穢嫌すべき無し、彼の國の王宮庫藏の内に多く金銀珍寶等の物有り、一切具足して乏少する所無し、尊者よ、彼の王の

【五】舍婆提(Śrāvastī)。或は舍衛城に作る。
【六】摩登伽(Mātaṅga)。賤種の一。或は旃陀羅族の一種ともせらる。屠膾を業とす。

爲に子と作るに堪へん』。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理實に然り、毘耶離主は、上世已來眞に是れ王種なり、但、彼の國人、心性剛强にして各各自ら用ひ、我は是れ王なりと稱して、憍慢熾盛に、放逸自ら高うして其の餘と共にせず、異類相雜はり、又尊卑大小の禮節無し、自ら我解せりと言ひ、自ら我知れりと言ふ、復、王有りと雖も承事を肯ぜず、自法は是他に從つて求めずと云ふ、是の故に汝今更に、餘の處の剎利王種を觀ぜよ、我が何れの家に生れんかを』と。金團天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明、彼の摩波槃提（Mahāvanti）國に優闍耶那（Ujjayinī）城有り、明燈王（Pradyota）の子、名けて滿足と爲すもの、彼の城に居住す、其の王、身體大にして威力有り、諸の左右多く、能く一切の敵國怨家を破れり、尊者よ、彼の王の爲に子と爲るに堪へん』。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理然りと雖も、但、彼の國王に執す可き行、一法だも有るなし、嚴酷暴惡にして、因果を信ぜず、是の故に汝今更に別に、餘の王種姓の我が生處に任ふるを觀ずべし』。金團天子、復、是の言を作す、『尊者護明よ、彼の閻浮提の摩頭羅（Mathurā）城に一大王有り、名けて善臂（Subāla）と曰へり。其の子を稱して自在健將と爲す、尊者よ、彼の王の爲に子と作るに堪へん』。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理然りと雖も、但、彼の國王は邪見の家の生なり、是の如きを以ての故に、一生補處の菩薩大士は、彼の邪見の家に生るるを得ず、是の故に汝今更に別に、餘の王の種姓を觀ぜよ、我が何れの處に生れんかを』。金團天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明よ、此の白象城（Hastināpura）の般紐（Pāṇḍu）王種は、勇健威猛にして憙ぶ可く、端正なること世に雙び有る無し、能く彊隣一切の怨敵を破れり、尊者よ、彼の王の爲に子と作るに堪へたり』と。護明菩薩、金團に報じて言はく、『此の理然りと雖も、但、般紐王は種姓清淨なれど、彼の雜類の爲に擾亂せられたり。何を以ての故に。彼の王の長子を、踰地師絺羅（Yudhiṣṭhira）と名く、是れ梵天法王の子。第二を名けて、毘摩斯那（Bhimasena）と爲す、風神（Vāyu）王の

【七】以下般紐王の五子に關すること、大婆羅多譚に出で、その中樞を爲す英雄たり。就中、中子頞純那は、理想的武士の典型にして、後世神化せらる。猶このこと、巴利、本生經第五卷中にも出づ。

子。第三を名けて頞純那(Arjuna)と爲す、是れ帝釋の子。復、二子有り、別母より生る。一を那拘羅(Nakula)と名け、二を娑呵提婆(Sahadeva)と名く。此の二子は、是れ星宿天阿輸那の子なり。是の故に汝今更に別に、餘の王種姓を觀ずべし、我、何れの處にか生れん』と。

金團天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明、彼の閻浮提、彌湲羅(Mithila)城の彌湲羅種、王を善友(Sumitra)と名く。象馬、車乘、牛羊多饒にして、一切の資生悉く皆具足し、無量の衆寶もて庫藏豐かに盈ち、金銀眞珠未だ嘗て乏少せず、彼の王善友、常に樂んで法行の事を勤修す、尊者よ、彼の王の爲に子と作るに堪へたり』と。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理、實に然り、其の善友王に是の如き具足の法有りと雖も、但、彼の國王、年老衰邁し、更に復國務を營理する能はず、又、其の王今諸子多饒なり、是の故に、汝今更に別に、餘の王種類を觀ずべし、我、何れの處にか生れん』。

金團天子、復、是の言を作すらく、『是等は、竝に是れ中國の王なり、復、更に、別に、邊地の國に、邪見の諸王有り、毘紐海洲に、一國主有り、婆羅門種なり、治化、毘紐の上に在り、月支王と名く、父母の種姓、清淨具足し、兼ねて祭祀諸天の法を解し、四毘陀(Veda)論、皆悉く了知す、尊者よ、彼の王の爲に子と作るに堪へたり』。護明菩薩、金團に報へて言はく、『此の理然りと雖も、但、我が下生、出家成道は、要らず須らく刹利たるべし、彼の婆羅門の家に生るるを欲せず、是の故に汝今、唯、刹利を覓めよ、我、何れの處にか生れん』。

金團天子、復、是の言を作すらく、『我、閻浮一切の諸國に於て、處處の聚落の處處の諸王として、處處の村舍、處處の城邑、處處の刹利として、各諸城に住せり。而して是の刹利として、種種の業を造れり。我、尊者の爲に經歷せし已來、無量の疲極苦惱を生じ、心迷ひ意亂れて更に復餘の處を觀看る能はず。設し、復觀察するも、口に亦是の如く宣說する能はず』。護明菩薩、金團に報へ

て言はく、『實に汝の語の如し、然れども、汝、要らず須らく我が爲に、一の刹帝利、清淨の家の、我が生處に堪ふるを選び覓むべし』。金團天子、復、是の言を作すらく、『我、尊者の爲に苦惱愁憂し、處處觀察して、忽然として一刹利の家を忘失しぬ』。護明菩薩、金團に問うて言はく、『其の名、何とか言ふ』。金團白して言はく、『一刹利有り、元本より已來、大衆に從つて平量安立し、世世轉輪聖王の種、乃至、甘蔗の苗裔已來、子孫相承けて彼の迦毘羅婆蘇都に在り、釋種の生む所、其の王の名を師子頬王と爲し、其の子の名を輸頭檀王と爲す、一切世間の天人の中に大名稱有り、尊者よ、彼の王の爲に子と作るに堪へたり』と。護明菩薩、金團に報へて言はく、『善い哉、善い哉、金團天子、汝、善く諸王家の種を觀察したり、我も亦、此の家に在つて生れんを念ふ、我今深心に汝の說く所の如くせん。金團よ、當に知るべし、我定めて往いて彼の家に生れて子と作らん。金團よ、往昔、一切補處の菩薩の託する所の家は、六十種の功德ありて具足して彼の家に滿てり。何等か六十なる。彼の家、本來清淨の　好種なり(一)。一切の諸聖、恒に彼の家を觀ず(二)。彼の家、一切の惡事を行ぜず(三)。彼の家の所生は、悉く皆清淨なり(四)。彼の家の種姓は、眞正無雜なり(五)。彼の家の體胤は、嫡嫡相承けて斷絕有るなし(六)。彼の家は、昔より王種を斷ぜず(七)。彼の家に生るる一切の諸王は、皆是往昔深く善根を種ゑたり(八)。彼の家に生るる者は、常に諸聖の爲に讃歎せらる(九)。彼の家に生るる者は、大威德を具ふ(一〇)。彼の家、多く端正の婦女有り(一一)。彼の家、多く智慧ある男兒有り(一二)。彼の家の所生は、心性調順なり(一三)。彼の家の所生は、戲調有る無し(一四)。彼の家に生るる者は、畏る可き所無し(一五)。彼の家に生るる者は、曾て怯弱ならず(一六)。彼の家に生るる者は、聰明多智なり(一七)。彼の家に生るる者は、多く工巧を解す(一八)。彼の家に生るる者は、皆過罪を畏る(一九)。彼の家の所生は、世間の工巧と雜合せず、亦、貪財以て活命を爲さず(二〇)。彼の家の所生は、常に朋友を存す(二一)。彼の家の

【八】好種。日種なるをいふ。

所生は、諸蟲、諸獸を殺害して以て自ら活命せず(二二)。彼の家の種姓は、恒に恩義を知る(二三)。彼の家の種族は、能く苦行を修す(二四)。彼の家の所生は、他に隨つて轉ぜず(二五)。彼の家の所生は、曾て恨を懷かず(二六)。彼の家の所生は、癡心を結ばず(二七)。彼の家に生るる者は、怖畏を以て他に隨順せず(二八)。彼の家に生るる者は、他を殺害するを畏る(二九)。彼の家に生るる者は、罪患有る無し(三〇)。彼の家に生るる者は、乞食して多くを得(三一)。彼の家に至る者は、空しく發遣する無し(三二)。彼の家剛强にして、降伏すべきこと難し(三三)。彼の家の法則は、恒に禮律に出づ(三四)。彼の家は常に樂んで衆生に布施す(三五)。彼の家、因果勤功を建立す(三六)。彼の家の所生は、世間に勇健なり(三七)。彼の家は恒常に一切の諸仙諸聖を供養す(三八)。彼の家は恒常に神靈を供養す(三九)。彼の家は恒常に諸天を供養す(四〇)。彼の家は恒常に大人を供養す(四一)。彼の家は歷世に怨讎有るなし(四二)。彼の家の名聲は、威十方に振ふ(四三)。彼の家は一切諸家に最たり(四四)。彼の家に生るる者は、上世已來悉く是れ聖種なり(四五)。彼の家に生るる者は、聖種中に於て最も第一たり(四六)。彼の家に生るる者は、恒に是れ轉輪聖王の種なり(四七)。彼の家に生るる者は、是大威德の種姓なり(四八)。彼の家に生るる者は、多く無量の眷屬有りて圍遶す(四九)。彼の家に生るる者は、有らゆる眷屬も破壞す可らず(五〇)。彼の家に生るる者の、有ゆる眷屬は、一切人に勝る(五一)。彼の家に生るる者は、悉く母に孝養す(五二)。彼の家に生るる者は、皆父に孝順なり(五三)。彼の家に生るる者は、悉く皆一切の沙門を供養す(五四)。彼の家に生るる者は、悉皆諸の婆羅門を供養す(五五)。彼の家に生るる者は、豐饒の五穀もて倉庫盈ち溢る(五六)。彼の家に生るる者は、多く金、銀、硨磲、碼碯有り、一切の資財乏少する所なし(五七)。彼の家に生るる者は、多く奴婢、象馬、牛羊を畜へて一切具足す(五八)。彼の家に生るる者は、曾て他に事へず(五九)。彼の家に生るる者は、是の如き一切の衆事具足して世間中に乏少する所無し

〔六〇〕』

『金剛天子よ、凡そ是の一生補處の菩薩の母胎に處るや、彼の母、若し三十二種の相ありて具足せば、乃ち能く菩薩の胎に在るを受くるに堪ふ。何等を名けて、三十二事と爲すか。一に、彼の母人は正德にして生る。二に、彼の母人は支體具足す。三に、彼の母人は德行缺くるなし。四に、彼の母人は所生に處を得。五に、彼の母人は行を爲すこと庶幾し。六に、彼の母人は種類淸淨なり。七に、彼の母人は端正無比なり。八に、彼の母人は名字德稱あり。九に、彼の母人・身體形容上下相稱ふ。十に、彼の母人は未だ曾て產生せず。十一に、彼の母は大功德有り。十二に、彼の母は恒に樂事を念ふ。十三に、彼の母の心、常に一切の善事に隨順す。十四に、彼の母は邪心有ること無し。十五に、彼の母は身口及び心、自然に調伏す。十六に、彼の母は心に畏るる所無し。十七に、彼の母は多聞〔九〕總持なり。十八に、彼の母は極めて女工に巧なり。十九に、彼の母は心に諂曲無し。二十に、彼の母は心に誑詐無し。二十一に、彼の母人は心に瞋恚有る無し。二十二に、彼の母人は心に嫉妬有る無し。二十三に、彼の母人は心に慳悋有る無し。二十四に、彼の母人は心に急速有る無し。二十五に、彼の母人の心は廻轉すべきこと難し。二十六に、彼の母人の體に至德の相有り。二十七に、彼の母人の心は能く忍辱を懷く。二十八に、彼の母人は心に慚有り愧有り。二十九に、彼の母人の行は〔一〇〕婬・怒、癡薄し。三十に、彼の母人の行に女家の過なし。三十一に、彼の母人は行恭順にして夫に向ふ。三十二に、彼の母の出生は、一切の諸德、一切の諸行、皆悉く具足す。是の如き母人は、乃ち能く一生補處の〔一一〕後身の菩薩を受くるに堪ふ。菩薩、母胎に入らんと欲するの時、〔一二〕鬼宿日を取りて、然る後に乃ち母胎中に入る。其の一生補處の菩薩を受くる胎母たる已前、其の母、必ず須く〔一三〕八關齋を受け、然る後に菩薩彼の胎に入るべし』と。

護明菩薩、復、是の言を作すらく、『我が今の〔一四〕受有は、世間一切の錢財、五欲、快樂の爲の故に、

【九】總持とは、無量の義理を持して、散失せざること。智の作用なり。

【一〇】婬・怒・癡。貪・瞋・癡の舊譯。三毒の煩惱。

【一一】後身の菩薩。最後身の菩薩。輪廻轉生の最後として生れたる菩薩、卽ち今生に佛となりて再び迷の生を受けざる人。

【一二】鬼宿日。印度曆二十八宿中の南方七宿の一たる鬼宿の宿る日、この星宿は國王大臣の運命を司るとせらるゝを以て、王家に生れんとする菩薩が、この日を撰べりとせらるゝなり。

【一三】八關齋。古代印度の民俗信仰として、滿月、新月の前夜、當夜、上弦、下弦の六夜に、齋戒沐浴して月神を祀る風あり、佛教にてはこれを利用して在家信徒の精進日とし(日本の精進日の源流)、この日一日出家修行に模して八戒を守れり、よつて八關齋といふ。八戒は沙彌十戒中より金錢出納等在家生活に於て除き難きものを避けたるものなり。

【一四】受有。三界に生を受けること。

人間に下りて此の一生を受けず、唯、諸の衆生を安樂にせんと欲するが故、苦惱の諸の衆生を哀愍するが故なり。』

爾の時、衆中に一天女有り、其餘の一天女に告げて言はく、『我等の大家護明菩薩は、必ず人間に下らん。我等の此の宮、護明菩薩大士に違離す、云何ぞ我が心をして此の處を樂ましめん』と。第二の天女、即ち之に報へて言はく、『奈何せん、奈何せん、我等、今共に何事を作してか、我等をして人間に往きて、善く彼の家、護明菩薩所生の處を觀るを得しめん』。第三に、復、一天女有りて言はく、『願はくは、我等今、此の天壽を捨てて、我等をして彼の處に往きて生を受けしめよ、何を以ての故に、我等も亦彼の處に至りて、我が護明菩薩と共に同じく生れんを願へばなり』。第四に、復、一天女有りて言はく、『汝等、相共に悔ゆる心を生ずる莫れ、何を以ての故に、我等の大家護明菩薩すら、尚ほ天壽を捨てて人間に生るるを、況んや、復、我等をや』と。更に復、一天女有りて稱言すらく、『尊者護明、今はや閻浮提に下生したまふ、唯願はくは大士よ、我等を忘るる莫れ』。時に、護明菩薩、彼等諸天女に告げて言はく、『汝等、大に苦惱を生ずる莫れ、我前に、已に汝等の爲に、一切の〔一五〕有處皆悉く無常なり。〔一六〕芭蕉の莖の如く、堅實有ること無し。物を借りて用ふるが如し、必ず他に還す可し。我が已に有るに非ざることは、猶、陽焰、幻化、水泡の如し。一切の有處は、皆是れ誑惑なり、愚癡の人のみ、謂ひて常生と言ふ』と。

爾の時、衆中に一天子有り、悵怏として心愁へ、口に復唱言すらく、『此菩薩の所説を觀ずるに、生處は無常不眞なり。咄哉、咄哉、我等、何ぞ假りに此生處を樂しむべき。我等今、護明菩薩を見るに、是の如き功德具足の體もて兜率天に生れ、此の兜率宮の是の如きの福聚、是の如きの端正、是の如きの莊嚴あるに、護明菩薩は捨離して下生す、咄哉、我等、云何ぞ獨此の無常の境に在らんや』。爾の時、復第二の天子有り、彼の第一の初天子に答へて言はく、『善い哉、天子よ、是の如し、是の如

【一五】有處。存在の形式ある處。

【一六】芭蕉、陽炎、幻化、水泡いづれも萬物に永久性なき無常的存在なるを譬喩する語、佛教文學中、常に出づる句。

し、汝の說く所の如し』と。偈を作して言はく、

『我が此の護明大菩薩　往昔諸有の中に有りて
常に愛する所の婦兒　奴僕象馬財珍寶を捨てたり
或は復身骨肉、　頭目髓腦血皮膚を割截せり。
是の如く來り索むるに悉く違はず　或ひは百或ひは千皆施與せり』

爾の時、衆中に復天子有り、偈を說いて言はく、

『咄哉我等の身　此の天宮に在つて生れ
常に今當に墮つべきを恐る　人の死を怖るるも亦然り
何ぞ[一七]生法の中に　福業の盡きざる者有らん
諸の是の無常界や　衆生は悉く命終す』

護明菩薩、諸天に告げて言はく、『汝等天人、須らく知るべし、一切世間は、別離生死を本と爲す。汝等、我が爲に苦み憂愁すること莫れ。何を以ての故に。我、往昔より來かた[一八]凡業を造らず。今、我をして久しく世間に住せしめんと欲するも、終に得可からず。我、過去の佛法僧の邊に於て、諸の善業を種ゑ、常に道心を發して大願を乞ひ求め、今、善報を得て當に菩提を成ずべし。汝、應に歡喜すべし、何ぞ苦惱するを得ん』。時に、彼の諸天、是の語を聞き已りて、各相謂つて言はく、『汝等諸天、護明菩薩大士を熟視せよ、此の護明菩薩大士、今は久しからずして人間に下らん』と。口に復、唱言すらく、『尊者護明、尊者久しからずして人間に生れ、此の兜率宮の有らゆる威德、及び諸の天福は、尊悉く將て去り、尊の人間に受くるは、[一九]末後の有身なり、我等諸天、云何ぞ奉事せん。』護明菩薩、彼の一切の諸天衆に告げて言はく、『我が前に生ぜる所の五種の衰相は、汝等が爲にし、復、無常の因緣を說けり。是の如きの法門は、汝等常に繫念して心に在るべし、忘失せし

【一七】生法。生れ出でたる約束あるもの。

【一八】凡業。凡は聖に對する語にして、向下墮落の途なり。之に反して、聖業は向上解脫の道なり。

【一九】末後の有身。前出註六を參照。

むる勿れ。我今、此處より人間に下生して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、無上最妙の法輪を轉ずべし。汝等諸天、各人間に下りて、身を受けんことを願ふ可し。彼處に生じ已りて、汝等、當に一切の諸の煩惱苦を解脱するを得べし』と。

爾の時、護明菩薩、生家を觀じ已れる時、兜率陀に一天宮有り、名けて高幢(Ucchadhvaja)と曰ふ。縱廣正に等しく六十由旬なり。菩薩、時時、彼の宮中に上りて、兜率天の爲に法要を說けり。是の時、菩薩、彼の宮に上りて安坐し訖已り、兜率の諸天子に告げて言はく、『汝等諸天、應に來つて聚集すべし。我が身久しからずして人間に下らん。我今、一法明門の〔二〇〕入諸法相方便門と名くるを說き、留めて汝を敎化する最後ならんを欲す。汝等、我を憶念するが故に、汝等、若し此の法門を聞かば、應に歡喜を生ずべし』と。時に兜率陀の諸天大衆、菩薩の此の如き語を聞き已り、及び天の玉女、一切の眷屬、皆來りて聚集して彼の宮に上る。護明菩薩、彼天衆の聚會し畢るを見已りて說法を爲さんと欲し、卽時に更に一天宮を化作して、彼の高幢の本、天宮の上に在り。高大廣闊にして四天下を覆ひ、喜ぶ可きの微妙、端正雙少し。威德巍巍として衆寶もて裝飾し、一切欲界天の宮殿中に匹喩するものなし。色界の諸天、彼の化殿を見、自らの宮殿に於て、是の如き心、塚墓の如き想を生じぬ。

時に、護明菩薩、已に過去に於て、實行を行ひ、諸の善根を種ゑ、福聚を成就し、功德具足し、莊嚴を成ぜる所の師子の高座に、昇上りて坐しぬ。護明菩薩、彼の師子高座の上に在り、無量の諸寶の莊嚴間錯し、無量無邊の種種の天衣を彼の座に敷き、種種の妙香もて、以て彼の座を薰じ、無量無邊の寶爐に香を燒き、種種微妙の香花を出して其の地上に散ず。高座の周帀に諸の珍寶有り、百千萬億の莊嚴、光を放ちて彼の宮を顯耀す。彼の宮の上下、寶網羅覆し、彼の羅網に多く金鈴を懸け、彼の諸の金鈴、聲を出すこと微妙なり。彼の大寶宮、復、無量種種の光明を出す。彼の寶

〔二〇〕入諸法相方便門。法相は法性と同義、方便は方法手段、門は道。卽ち諸法の本質に悟入すべき道を示せる敎なり。

〔二一〕波羅蜜。到彼岸又は度と譯す。吾人を運載して彼岸に到らしむる六件の行法をいふ。

〔二二〕一百八法明門。之を數ふれば、次の如く百〇九となる。方廣大莊嚴經にては、四念處の中、第四の法念處を除きて三念處と爲すを以て、百〇八となれども、本經にては、百〇九となる。蓋、最後の灌頂地は、既にその前の從一地至一地智の中に含まるるを以て、これを別出せざるも可なり。然らば最後の灌頂地は全體の總括とも見らるゝなり。

宮殿や、千萬の旛蓋、種種の妙色もて上に映覆す。彼の大宮殿には諸の旒蘇を垂れ、無量無邊百千萬億の諸天玉女、各、種種七寶の音聲を持つて樂を作して讃歎し、菩薩の往昔の無量無邊の功德を說きぬ。護世の四王、百千萬億、左右に在りて彼の宮を守護し、千萬の帝釋、彼の宮を禮拜し、千萬の梵天、彼宮を恭敬す。又、諸の菩薩、百千萬億那由他の衆、彼の宮を護持し、十方の諸佛、萬億那由他數有りて彼の宮を護念す。百千萬億那由他劫に、修行せる所の諸の[二]波羅蜜(Pāramitā)の福報成就し、因緣具足して日夜增長し、無量の功德、悉く皆莊嚴すること、是の如く是の如くにして、說き難く說き難し。彼の大微妙師子高座に菩薩坐し上りて、一切の諸天衆に告げて言はく『汝等諸天、今、此の一百八法明門は、一生補處の菩薩大士の、兜率宮に在り、下つて人間に託生せんと欲する者の、天衆の前に於て要須らず此の一百八法明門を宣暢して說き、諸天に留與して以て憶念と作し、然る後に下生すべし。汝等諸天、今、至心に諦聽し諦受すべし。我今之を說かん。

[三]一百八の法明門とは何ぞや。(1)正信は是れ法明門、堅牢の心を破らざるが故に。(2)淨心は是れ法明門、濁穢なきが故に。(3)歡喜は是れ法明門、安隱の心なるが故に。(4)愛樂は是れ法明門、心を淸淨ならしむるが故に。(5)身行の淨行なるは是れ法明門、三業淨きが故に。(6)口行の淨行は是れ法明門、四惡を斷ずるが故に。(7)意行の淨行は是れ法明門、三毒を斷ずるが故に。(8)念佛は是れ法明門、觀佛淸淨なるが故に。(9)念法は是れ法明門、觀法淸淨なるが故に。(10)念僧は是れ法明門、得道堅牢なるが故に。(11)念施は是れ法明門、果報を望まざるが故に。(12)念戒は是れ法明門、一切の願具足するが故に。(13)念天は是れ法明門、廣大心を發すが故に。(14)慈は是れ法明門、一切生處の善根攝勝るが故に。(15)悲は是れ法明門、衆生を殺害せざるが故に。(16)喜は是れ法明門、一切不喜の事を捨つるが故に。(17)捨は是れ法明門、五欲を厭離するが故に。(18)無常觀は是れ法明門、三界の欲を觀ずるが故に。(19)苦觀は是れ法明門、一切の願を斷ずるが故に。(20)無我觀は是れ法明門、我に染著せざるが故に。

---

(1)正信。三寶に對する不壞の信仰なり。
(4)愛樂。法味愛樂なり。
(5)身行。こゝには殺生、偸盜、邪婬の三業なり。
(6)口行。こゝには妄語、兩舌、惡口、綺語の四惡なり。
(7)意行。こゝには婬、怒、癡の三毒なり。以上(5)—(7)、三業十惡を離るゝを明す。
(8)念佛—(10)念僧。三寶出世間道の信仰。
(11)念施—(13)念天。次第說法に表はるゝ世間道の信仰。合せて六念といふ。
(14)慈—(17)捨。四無量心。
(18)無常觀—(21)寂定觀。四法印。
(22)—(23)慚愧は内心にはぢ、羞恥は外相にはづ。
(26)法行。大法(如法)と小法(隨法)に沿ひて生活(行)すること。
(27)三歸。佛法僧の三寶に歸依すること。
(33)知時。適當の時を知りて語ること。
(45)知名色。「自我」の執を離るゝこと。「我」は名(心的要素)と色(物的要素)の因緣和合せるもの。
(46)因見。万物創造の神ありと信ずる思想。
(48)陰方便。陰は色、受、想、行、識の五陰にて、この五陰

(21)寂定觀は是れ法明門、心意を擾亂せざるが故に。(22)慚愧は是れ法明門、內心寂定なるが故に。(23)羞恥は是れ法明門、外惡滅するが故に。(24)實は是れ法明門、天と人とを誑らざるが故に。(25)眞は是れ法明門、自身を誑らざるが故に。(26)法行は是れ法明門、法行に隨順するが故に。(27)三歸は是れ法明門、三惡道を淨うするが故に。(28)知恩は是れ法明門、善根を捨てざるが故に。(29)報恩は是れ法明門、他を欺負せざるが故に。(30)不自欺は是れ法明門、自ら譽めざるが故に。(31)爲衆生は是れ法明門、他を毀呰せざるが故に。(32)爲法は是れ法明門、如法に行ずるが故に。(33)知時は是れ法明門、言說を輕んぜざるが故に。(34)攝我慢は是れ法明門、智慧滿足するが故に。(35)不生惡心は是れ法明門、自ら護り他を護るが故に。(36)無障礙は是れ法明門、心に疑惑なきが故に。(37)信解は是れ法明門、第一義を決了するが故に。(38)不淨觀は是れ法明門、欲染心を捨つるが故に。(39)不諍鬪は是れ法明門、瞋訟を斷ずるが故に。(40)不癡は是れ法明門、殺生を斷ずるが故に。(41)樂法義は是れ法明門、法義を求むるが故に。(42)愛法明は是れ法明門、法明を得るが故に。(43)求多聞は是れ法明門、法相を正觀するが故に。(44)正方便は是れ法明門、正行を具するが故に。(45)知名色は是れ法明門、諸の障礙を除くが故に。(46)除因見は是れ法明門、解脫を得るが故に。(47)無怨親心は是れ法明門、怨親中に於て平等を生ずるが故に。(48)陰方便は是れ法明門、諸苦を知るが故に。(49)諸大平等は是れ法明門、一切和合の法を斷ずるが故に。(50)諸入は是れ法明門、正道を修するが故に。(51)無生忍は是れ法明門、滅諦を證するが故に。(52)身念處は是れ法明門、諸法寂靜の故に。(53)受念處は是れ法明門、一切諸受を斷ずるが故に。(54)心念處は是れ法明門、心を觀ずること幻化の如きが故に。(55)法念處は是れ法明門、智慧に翳無きが故に。(56)四正勤は是れ法明門、一切の惡を斷じて諸善を成ずるが故に。(57)四如意足は是れ法明門、身心輕きが故に。(58)信根は是れ法明門、他語に隨はざるが故に。(59)精進根は是れ法明門、善く諸智を得るが故に。(60)念根は是れ法明門、善く諸業を作すが故に。(61)定根は是れ法明門、

業によりて苦惑の肉體あり、諸陰互助の因緣によりて苦樂生ず、これを陰方便といふ。

(49)諸大。肉身構成の物的要素として地水火風の四大を擧ぐ、諸大平等とは、その四大が巧みに調節され居る狀態にして、この時肉體健康なりといふ。

(50)諸入。眼、耳、鼻、舌、身、意の六感官(六內入)と、その認識對象となるべき色、聲、香、味、觸、法の六對境(六外入)をいふ、これらの感官を節制する時に誘惑を感ぜず、從つて正道を行ひ得。

(51)無生忍。万物の實性は空にして本來生なく滅なしと覺ること、又その理を聞いて疑ひなきこと、佛敎による確信の本質とせらる。

(52)—(55)身・受・心・法の念處を四念處といふ。

(58)—(62)信根以下の五を五根といふ。

(63)—(67)信力以下の五を五力といふ。

(68)—(74)念覺分以下の七を七覺分又は七覺支といふ。

(75)—(82)正見以下の八を八正道といふ。以上の四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八正道を合して三十七助道品といひ、阿含諸經中に詳說せらるるを以てこゝに

心清淨なるが故に。(62)慧根は是れ法明門、諸法を現見するが故に。(63)信力は是れ法明門、諸魔力を過ぐるが故に。(64)精進力は是れ法明門、不退轉の故に。(65)念力は是れ法明門、他と共ならざるが故に。(66)定力は是れ法明門、一切の念を斷ずるが故に。(67)慧力は是れ法明門、二邊を離るるが故に。(68)念覺分は是れ法明門、如諸法智の故に。(69)擇法覺分は是れ法明門、一切諸法を照明するが故に。(70)精進覺分は是れ法明門、善知覺の故に。(71)喜覺分は是れ法明門、諸定を得るが故に。(72)除覺分は是れ法明門、所作已に辨ずるが故に。(73)定覺分は是れ法明門、一切法の平等を知るが故に。(74)捨覺分は是れ法明門、一切の生を厭離するが故に。(75)正見は是れ法明門、漏盡の聖道を得るが故に。(76)正分別は是れ法明門、一切の分別を斷じて分別無きが故に。(77)正語は是れ法明門、一切の名字音聲語言は響の如しと知るが故に。(78)正業は是れ法明門、業無く報無きが故に。(79)正命は是れ法明門、一切の惡道を除滅するが故に。(80)正行は是れ法明門、彼岸に到るが故に。(81)正念は是れ法明門、一切法を思念せざるが故に。(82)正定は是れ法明門、無散亂の三昧を得るが故に。(83)菩提心は是れ法明門、三寶を斷ぜざるが故に。(84)依倚は是れ法明門、小乘を樂まざるが故に。(85)正信は是れ法明門、最勝の佛法を得るが故に。(86)增進は是れ法明門、一切の諸善根法を成就するが故に、(87)檀度は是れ法明門、念念相好を成就し、佛土を莊嚴し、慳貪の諸衆生を教化するが故に。(88)戒度は是れ法明門、惡道の諸難を遠離して破戒の諸衆生を教化するが故に。(89)忍度は是れ法明門、一切の瞋恚、我慢、諂曲、調戲を捨て、是の如き諸の惡衆生を教化するが故に。(90)精進度は是れ法明門、悉く一切の諸善法を得て、懈怠の諸衆生を教化するが故に。(91)禪度は是れ法明門、一切の禪定及び諸神通を成就し、散亂の諸衆生を教化するが故に。(92)智度は是れ法明門、無明の黑暗及び著諸見を斷じて、愚癡の諸衆生を教化するが故に。(93)方便は是れ法明門、衆生所見の威儀に隨つて教化を示現し、一切諸佛法を成就するが故に。(94)四攝法は是れ法明門、一切の衆生を攝受し、菩提を得已りて、一切衆

は註解を略す。
(83)以下は菩薩道なり。
(87)檀は檀那(Dāna)、即ち施なり。以下の六を六度といふ。
(94)四攝法とは布施・愛語・利益・同事なり。
(101)入無礙辯。法、義、辭、說の四事に通達すること、これを得て法眼備はる、法眼とは萬物を觀じてその無常、無我、空なるを知る智なり。
(102)入一切行。有爲轉變、嫌惜怨讎の中に入り而も自由なる、これを佛行といふ。
(103)成就陀羅尼。陀羅尼は總持と義譯す、無量の義を持して散失せざらしむる智慧のはたらきをいふ。轉じて、簡單なる字句、又は標章の內に佛法の深義を含ましむべく考察せられたるものをもいふ。
(104)得無礙辯。前の入無礙は自利的悟入、今はその悟德を以て他に示す場合。
(105)順忍。よく空、無常、無我なる法性に隨順し得る信仰。
(106)得無生法忍。無生法忍は前に註せり、この忍を得る時、佛教の信力確乎たり、よつて將來に佛たり得ることが保證せらる。受記とはそのことを意味す。
(107)不退轉地。大乘佛教の理想とする極地、在家信者とし

生に法を施すが故に。(95)教化衆生は是れ法明門、自ら受樂せず、疲倦せざるが故に。(96)攝受正法は是れ法明門、一切衆生の諸煩惱を斷ずるが故に。(97)福聚は是れ法明門、一切諸衆生を利益するが故に。(98)修禪は是れ法明門、十力を滿足するが故に。(99)寂定は是れ法明門、如來の三昧具足を成就するが故に。(100)慧見は是れ法明門、智慧成就し滿足するが故に。(101)入無礙辯は是れ法明門、法眼の成就を得るが故に。(102)入一切行は是れ法明門、佛眼の成就を得るが故に。(103)成就陀羅尼は是れ法明門、一切諸佛法を聞いて能く受持するが故に。(104)得無礙辯は是れ法明門、一切衆生をして皆歡喜せしむるが故に。(105)順忍は是れ法明門、一切諸佛法に順ふが故に。(106)得無生法忍は是れ法明門、受記を得るが故に。(107)不退轉地は是れ法明門、往昔の諸佛法を具足するが故に。(108)從一地至一地智は是れ法明門、灌頂もて一切智を成就するが故に。(109)灌頂地は是れ法明門、生・出家より、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得るが故に。』

爾の時、護明菩薩、是の語を說き已りて、彼の一切諸天衆に告げて言はく、『諸天、當に知るべし、此は是、一百八法明門なり、諸天に留與す、汝等受持して心に常に憶念し、忘失せしむる勿れ。』

ては、現生に於て不還果以上に至り得ずとせし原始佛教の信念に萠芽して、在家宗教としての大乘佛教が發展して來れる所に、この不退轉地の意義あり。これは、次の(108)從一地至一地の思想にも、關連す。即ち、不還果は天上に轉生して悟入すといふに對して、これは他方淨土に化生してそこにて更に修行して悟るの意にして、一淨土より一淨土に遊ぶことを從一地至一地といへるなり。この思想更に進化しては園林遊戲地の思想とも、向下化生の菩薩思想ともなり、煩惱卽菩提の思想を積極化する上に重大なる役目をなせり。

(108)灌頂地。佛位のこと。世間の王の卽位にならつてかくいふなり。

俯降王宮品第五

爾の時、護明菩薩、多分過ぎ已りて最勝春初の時に至り、一切の樹木の諸華開敷し、天氣澄清に溫涼調適、百草新たに出でて滑澤和柔に、滋り茂りて光鮮かに、地に遍滿す。正に鬼宿星の合するの時を取りて、彼の諸天の爲に法要を說き、悉く其の心をして愛樂歡喜し踊躍充遍して、自ら勝ふる能はざらしめ、諸天を誡勸して、此の法を行ぜしめ、敎へて一切〔一〕有爲の生老病死を厭離して、無上法を求めしむ。

是の時、護明菩薩大士、彼の天衆を觀ずること師子王の如く、下生せんと欲する時、其の心安穩にして、驚かず怖れず、畏れず亂れず。復更に重ねて諸天衆に告げて言はく『汝等諸天、一切當に知るべし、此れ我が最後に受くる後邊の身なり』と。是の時菩薩、正念一心にして兜率より下る。餘の諸天の如きは、天壽を捨つる時、五欲を離るるが故に大憂苦を生じ、正念を忘失す。菩薩下れる時は、則ち是の如からず。菩薩の下る時は、一切不可思議希有の法を具足す。護明菩薩、天より下る時、時に彼の諸天、菩薩を憶ふが故に一時に號哭すらく『嗚呼苦しい哉、嗚呼苦しい哉、我等既に護明菩薩を失ふ、我、今より去、永く更に復正法を聞くを得じ、我等の功德の利を減損し、生死の根本、今益增長せん』と。時に淨居天、彼の一切諸の天衆に告げて言はく『汝等、今、護明菩薩が下生せんと欲するを見て、時に憂惱を生ずる莫れ。何を以ての故に。彼、下生せん時、必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べく、成じ已りて還た此の天宮に來至し、汝の爲に說法すること、猶、往昔の〔二〕毘婆尸佛、尸棄如來、毘舍浮佛、迦羅迦孫駄佛、迦那迦牟尼佛、迦葉如來の如けん。彼等諸佛は皆此より去りて、汝を憐愍するが故に、悉く各還り來つて此の天宮に到り、

【一】有爲(Saṃskṛta)。因緣によりて作られたるもの〻意。無常にして變化し無我にして實體なきものをいふ、一切の存在現象はこの約束を有す。

【二】毘婆尸佛等。これに釋迦牟尼佛を加へて、未來の彌勒佛に對して、過去七佛といふ。

汝の爲に說法して汝等を攝受したり。今、此の護明菩薩大士も、還、是の如く來つて汝を攝化すること、前の如く異ならざらん』と。

爾の時、護明菩薩大士、夜に於て下生し、當に〔三〕降神して摩耶(Māyā)夫人の胎に入らんとするの時、時に彼の摩耶、其の夜に當りて淨飯王(Suddhodana)に白して言はく『大王當に知るべし。我、今夜より、〔四〕八禁淸淨の齋戒を受けんと欲す。所謂、不殺生、不偸盜、不婬逸、不妄語、不兩舌、不惡口、不無義語なり。又願はくは不貪、不瞋恚、不愚癡、不生邪見ならん。我當に正見すべし。諸是の如き等の禁戒齋法、我、當に受持すべし。我今繫念して恒常に勤行し、諸衆生に於て當に慈心を起すべし』。

時に淨飯王、卽ち摩耶夫人に報へて言く『夫人の心に愛樂する所の如きは、意の隨に行ぜよ、我も亦、國王の位を捨てて汝の所行に隨はん』と。而して偈有りて說かく、

『王、菩薩の母を見て　　座より恭敬して起ち
母の如く姉妹の如く　　心に欲想を行ぜず』

時に護明菩薩、一心正念にして兜率より下り、淨飯王の最大夫人摩耶の右脇に託し、安庠として入りぬ。護明菩薩、正念正知もて、兜率より下りて母胎に入る時、是の時、天、人、魔、梵、沙門、婆羅門等の一切世間は、光明もて普く照さる。復、世界外の黑闇の處は、日月の、是の如く大勢力有り。大威神有るだも、是の如き幽隱を光明照さず德及ぶ能はざるに、此菩薩の光のみは、悉く能く達して彼處を照す。有ゆる一切の衆生、各相謂つて言はく、『云何ぞ此間に忽ちにして衆生有るか』。是の時此の地、六種に震動しぬ。所謂、東湧西沒、西湧東沒、南湧北沒、北湧南沒、邊湧中沒、中湧邊沒なり。是の如く、乃至、起覺吼等の〔五〕十八種の相、悉く皆普く現ず。次いで、復、千の〔六〕須彌山(Sumeru)王有り、皆悉く震動す。千の尼民陀羅山(Nimindhara)王、千の持威德山(Isādhara)

【三】降神。母胎に宿ること。

【四】八禁淸淨齋戒。前品註一三にいへる八關齋を指す、こゝに、所謂等として出せる七戒は十惡の中の身三、口四にて恐らく原經註者の誤りならん。然らずんば、隨宜轉用なり。

【五】十八種相。動・起・踊・震・吼・擊の六種震動に、各單・徧・等の三種あつて、十八種となる。卽ち動・徧動・等徧動の如し。

【六】以下の九山は、須彌山宇宙說に於ける九山八海のそれに當るも、倶舍論等有部系傳とその順序を異にすることに注意すべし。

王、千の佉羅伽陀山(Khadiraka)王、千の毘那耶迦山(Vinalaka)王、千の馬頭山(Aśvakarṇa)王、千の彌尼陀羅山(Yugaṁdhāra ?)王、千の善見山(Sudarśana)王、千の鐵圍山(Cakravaḍa)王、千の大鐵圍山(Mahācakravāḍa)王、是の如き等の山、悉く皆震動す。幷に、また、一切諸餘の小山は、湧沒低昂し、嵬巍峩嵳として大烟氣を出す。四千の大海、及び餘の諸池は、浩汗奔濤して洪波沸湧す。其の四大河たるを【七】恒河(Gaṅgā)、辛頭(Sindhu)、斯多(Sītā)、博叉(Vakṣa)、及び餘の諸水は、皆悉く逆流す。一切の叢林、一切の樹木、一切の藥草、一切の時苗、皆悉く肥濃し、長養し、滋茂す。其下、阿鼻泥黎(Avici-niraya無間地獄)に至るまでの苦惱の衆生は、皆快樂を蒙りぬ。

【八】是の因緣を以て、(1)菩薩の兜率より初て下りて、大光を放ちて一切の世間を照し、幽昏黑闇を悉く明著ならしめたるは、後時に、佛道を成じ已り、四眞諦の智慧の光明を以て、普く一切愚暝の衆生を照さんが爲に、先づ瑞相を作せるなり。(2)菩薩の初めて兜率より下れる時、大地の六種十八相に動き、及び諸山王の大烟氣を出し、四千の大海の濤波を湧沸せるは、是の故は、如來が未來世の諸の惡衆生の煩惱垢濁の淤泥に沒在せるものゝ爲に、佛道を成じ已りて、拔き出して涅槃の岸に置かんと欲するなり。

(3)菩薩、初兜率より下れる時、一切の諸水、皆悉く逆流せるは、是の故は、如來が、未來世の諸の惡衆生の煩惱の流に隨順沒溺するものゝ爲に、佛、道を成じ已りて一切の衆生を說法度脫し、其をして本に反りて、生死の流に逆はしめんとするなり。(4)菩薩、初めて兜率より下れる時、悉く能く一切の樹木藥草叢林を增長し、皆肥膩滋茂せしめたるは、未來世の諸の惡衆生の未だ善根を種ゑざるものに善根を種ゑしめ、已に善根を種ゑたるものに、解脫を得しめんが爲なり。(5)菩薩初めて兜率より下れる時、乃し阿鼻地獄に至るまでの衆生の皆快樂を受けしは、佛、道を成じ已りて、諸の衆生をして苦惱を解脫して快樂を受けしめんとなり。是の因緣を以て、先に於て是等の瑞相を

【七】四大河。佛典中、五大河說と四大河說ありて恒河以外の河名皆異る、これ單に時代の新古によるに非ずして部派傳によるものゝ如し。

【八】以下、降神母胎の六瑞に就いて一々その因緣を擧ぐ。

示現せしたり。(6)又、復、菩薩、兜率より下れる時、右脇より胎に入りしは、——自餘の衆生は産[九]門より入る——佛、成道を得て、諸の衆生の爲に清淨の法を說き、邪を廻して正に入らしめんとて、此は是れ先に於て瑞相を示現せるなり。

菩薩、正念もて兜率より下り、淨飯王第一の大妃、摩耶夫人の右脇に託して住まり已る。是の時大妃、睡眠中に於て夢に一の六牙の白象あるを見る。其の頭は朱色にして[一〇]七支もて地を拄へ、金裝の牙を以て空に乘じて下り、右脇に入る。夫人、夢み已りて、明旦卽ち淨飯王に白して言はく、『大王當に知るべし、我、昨夜に於て是の如き夢を作せしに、我が右脇に入るの時に當つて、快樂の昔より未だ有らざる所を受けぬ、今日より後、我、實に世間の快樂を用ひじ、此夢の瑞相は、誰の占夢師か、能く我が爲に解する』と。

時に淨飯王、一りの宮監內侍の女人を召し、之に告げて言はく、『汝、速疾に來つて外に至り、勅を宣べて、我國師大那摩子（Mahānāma-putra）に語り、急追もて八婆羅門大占夢師、所謂、祭德(Yajñadatta)、鬼宿(Pusya)、自在德(Īśvaradatta)、毘紐德（Viṣṇudatta)、梵德（Brahmadatta)等、幷びに老迦葉（Kāśyapa）の三子を喚び、速かに來らしめよ』と。時に、彼の使人、王に白して言はく、『大王の勅の如く、敢へて違逆せじ』と。是の時使人、大王の命を奉じて、宮門の前に至り、大聲に唱へて言はく、『誰か門前に在る。頗し入宮の婆羅門有りや否や』と。時に彼の門前に、一の當直の婆羅門子有り、姓は[一一]婆陀（Bāda）氏、名は羅耶那（Rāyaṇa）隋に屋室と言ふ。宮監內の使人に報へて言はく、『我此に在り』と。其の使人言はく、『大王勅有り、八大諸婆羅門の能く占夢する者を喚ばしむ、所謂、祭德、迦葉子等なり』と。其の使、傳告し、乃至、國師大那摩子、彼の屋室使人の言を承け、卽便ち八大占夢婆羅門師を召喚して、及び大那摩國師の子と同じく宮中に入る。時に淨飯王、諸の占夢婆羅門等に告げて、是の如きの言を作さく、『昨夜、夫人、此かる異夢有り、是れ何

【九】 産門。女陰の門。

【一〇】 七支。四肢、鼻、兩牙なり、本來なれば今は六牙故十一支とすべし。

【一一】 婆陀羅耶那。吠檀多經の集輯者として、此名の學者あり。恐らくは之を豫想するならん。

の瑞相ぞ、何の徵感か有る』と。時に彼の占夢婆羅門等、王の語を聞き已りて、善く諸相を知り能く夢祥を占ひ、卽ち具に諮りて淨飯王に白して言はく、『大王、善く聽かれよ、夢みる所の瑞相は、我當に具さに說くべし。我が見る所の如くんば、往昔の神仙諸天が、經書典籍に載する所なり』とて、偈を說いて言はく、

『若し母人夢に　日天の右脇に入るを見れば　彼の母の生む所の子は　必ず轉輪王と作らん
若し母人夢に　月天の右脇に入るを見れば　彼の母の生む所の子は　諸王中の最勝たらん
若し母人夢に　白象の右脇に入るを見れば　彼の母の生む所の子は　三界に極みなく尊く
能く諸の衆生を利し　怨敵悉く平等にして　千萬衆を　深煩惱の海より度脫せん』

爾の時、占夢婆羅門師、大王に白して言はく、『夫人の夢みる所、其の相甚だ善し、大王、今、當に自ら夫人の產む所を慶幸すべし。必ず聖子を生まん、彼、後時に於て必ず佛道を成じて、名聞遠く至らん』と。時に淨飯王、諸の占夢婆羅門師の此の頌を說くを聞き已り、心大に歡喜して踊躍無量、自ら勝ふる能はず。時に王、備さに無量の餚膳を辦じ、百味の飮食の啖啜舐嗽すべきもの、諸の麨果等、種種に施設す。彼の婆羅門、自ら恣に噉ひ、飯食し訖る時、淨飯王、復、無量の錢財寶物を將て以用て布施しぬ。

時に淨飯王、此の相師の妃の夢を占觀して、是れ吉祥の瑞相といへるを聞きて後、卽ち其の國、迦毘羅城四門の外、幷に衢道の頭、街巷阡陌に於て、人有つて行く處に、大無遮義會の所を安じ、人來つて須むれば盡く皆布施す。食を須むれば食を與へ、飮を須むれば飮を與へ、衣を須むれば衣を與へ、香を須むれば香を與へ、鬘を須むれば鬘を與へ、塗香、末香、衣服、牀敷、氈褥、房舍、屋宅、牛羊、象馬及び車乘等、是、人の須むる者は、皆悉く之を與へぬ。是の如き等の種種の布施を作して、悉く菩薩を資益せんが爲の故に、是の供養を設けぬ。

爾の時、彼の處に一仙人有り、阿私陀(Asita)と名く。能く外道種種の諸義を立て、以て五欲を捨てて大威神有り大德力有り、五通を具足して常に能く三十三天の集會する所に到り、自在に能く入る。彼の仙、多く南天竺國、[三]遮槃低(Avanti)城の聚落恒河怛(Gaṅgatra?)と名くるに住す。彼を去る遠からずして一叢林有り、名けて增長と曰ふ。是の時仙人、彼の林中に在りて仙道を修學す。摩伽陀國の一切の人民咸く皆謂へらく『此の阿私陀仙は是れ阿羅漢なり』と。摩伽陀國の一切の人民、彼の仙を貴敬して尊重承事す。時に彼の仙人、知解する所有れば悉く以て人に敎へ、自ら知見し已れば他に敎へて見しむ。時に、彼の聚落に一童子有り、那羅陀(Nārada)と名けぬ。彼の那羅陀、年漸く長大して八歲に至る。其母、將て阿私陀仙に付して弟子たらしむ。時に彼の童子、供養し恭敬し尊重して阿私陀仙に師事し、弟子の禮を盡して暫くも休息する無し。時に彼の仙人、增長林に在りて晝夜に精進し、攝心坐禪して那羅陀童子と一に處す。其の那羅陀侍者童子、仙人の後に在りて侍立し、拂子を執りて蚊虻を駈逐す。菩薩、兜率陀天より正念にして下り、淨飯王の宮に至つて夫人の右脇にして胎に入る時、大光明を放つて遍ねく人天一切の世界を照し、復、此の大地に六種十八相の動を具足す。時に阿私陀、未曾有希奇の事、異種の光明を見、復、此の地の六種に震動するを見て、心大いに驚怖し、毛孔悉く竪ち、自ら心に念じて言はく『今、何の緣有つてか、此の大地動くぞ。何の果報有りや』と。時に彼の仙人、少時思惟して默然として住し、正念正定に思惟し、知り已つて心に歡喜を生じ、踊躍無量、自ら勝ふる能はずして、是の唱言を作しぬ、『希有の大聖不可思議なり、世間、當に大富伽羅(pudgala, 人間)を出すべし』と。

菩薩、初め兜率より下る時、母の右脇に入り、受胎し訖り已る時、一天有り、名けて速往と曰ふ。諸の地獄に至りて大聲に唱言すらく『汝諸人の輩よ、一切當に知るべし、菩薩、今、兜率天より下つて母胎に入りたまへり、是の故に、汝等速かに誓願を發して、人間に生れんを願へ』と。地獄の

【三】遮槃低。第九品には阿槃提とせり。

衆生、此の語を聞き已る。有ゆる衆生は往昔已來、曾て善根を種ゑ、復、雜業を造り、惡強きを以ての故に地獄に墮ちぬ。彼等各面り相視見して地獄を厭離し、復、光明を得て身心安樂に、復、速往世間諸天の聲を聞くを得て、地獄身を捨て卽ち人中に生れぬ。有ゆる三千大千世界の諸衆生等、往昔已來、善根を種うる者、皆此の迦毘羅城に來つて、四面に託生せり。

(1)菩薩、[三]母胎に入り訖り已る時、天帝釋及四天王提頭賴吒(Dhṛtarāṣṭra, 持國天)及び毘留勒叉(Virūḍhaka, 增長天)、毘留博叉(Virūpākṣa, 廣目天)、毘沙門(Vaiśramaṇa, 多聞天)等、各相謂つて言はく、『仁者當に知るべし。菩薩已に兜率天より下つて母胎に入在す。我等、今、須く擁護守視すべし。其餘の或は人非人をして菩薩を惱亂し、或は其便を覓めしむる莫れ。今この菩薩は唯これ極大威德の諸天のみ、乃ち能く守護す。是世間人の能く守る所にあらず』と。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來は此の四種の護持を有し、具足して缺くること無き瑞相なり。

(2)世に衆生有り、母胎に入るの時、正念なる能はず。或は母胎に住して、亦、復、專心正念なる能はず。或は、復、生時に、亦、正念ならず。或は衆生有り、母胎に入る時、能く專ら正念し、胎中に住して亦能く正念し、胎を出づるの時、亦能く正念す。或は衆生有り、入胎に正念し、住胎に正念するも、出胎の時、正念する能はず。菩薩は、入胎にも心亦正念し、住胎にも正念し、出胎にも正念す。此は是菩薩未曾有の法なり。如來の佛道を成ずるを得已りて說法敎化せんに、忘るること無く、失ふこと無く、衆生の機根を知りて說きたまふ。此は是の往昔希有の瑞相なり。

(3)菩薩、母胎に在るの時、常に右脇に住して曾て移動せず。自餘の衆生は、不定を以ての故に、或は右脇に至り、或は左脇に至る。是の因緣を以て、其の母患痛して無量の苦を受く。菩薩の胎に在るや、右脇に處して轉ぜず動ぜず、起立坐臥にも母胎を損ぜず。此は是、菩薩未曾有の法なり。如來佛道を成ずるを得已りて菩提法を行じ、悉く成就するを得たまふ。此は是往昔於先ちての瑞相な

【三】以下、菩薩の母胎に在る間に生ぜし十三奇瑞を擧ぐ。

り。

(4)菩薩、胎に在りて驚かず怖れず。大無畏を得て、惡物に染まず、有らゆる不淨の涕唾、膿血、黄白の痰癊も穢汚する能はず。自餘の衆生は、母胎に在るの時、種種不淨なるに、瑠璃寶の天衣を以て裹みて不淨の處に置かんに、亦染汙せざる如く、是の如く、是の如く、菩薩の胎に在るや、一切の不淨も汙さず染めず。此は是菩薩未曾有の法なり。如來の佛道を成ずるを得已りて、一切法に於て不染不著なり。此は是の往昔於先ちての瑞相なり。

(5)菩薩、母胎に在せし時、其の菩薩の母、大快樂を受けて、身、疲乏せざりき。自餘の衆生は、母胎に入りて、或は復九月、或は復十月、母、負重を受けて身體安からず。菩薩の胎に在るや、母若くは行坐し、若くは眠り、若くは起くるに、皆安樂を得て身に苦を受けず。此は是菩薩未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、速に阿耨多羅三藐三菩提を得、正に諸通及び一切智を得たまふ。此は是の往昔於先ちての瑞相なり。

(6)菩薩の胎に在るや、母、禁戒を受けて、心、常に戒行を奉持して行ぜり。自餘の衆生は、母胎に在る時、母、雜行を行ずれども、菩薩の胎に在るや、母、禁戒を持して雜行を行ぜず。此は是、菩薩未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已り、聲聞衆と共に最勝に持戒し、世間中に於て、大名聞——沙門瞿曇(Gautama)は持戒比なく、持戒の分勝る——を出したまふ。此は是の往昔於先ちての瑞相なり。

(7)菩薩の胎に在るや、其の母、欲染の想を生ぜず、欲火の惱亂する所とならず。時に菩薩の母、恒に梵行を行じぬ。自餘の衆生、母胎に入る時は、久しからずして、其の母、欲心の熾盛、前に倍多す。菩薩の胎に在るや。其の菩薩の母、自らの夫の邊に於てすら、猶尙厭離して、婬欲を行ぜず。何に況んや餘人をや。此れ是、菩薩未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、[一四]眼根善く伏

【一四】眼根、耳根乃至、意根の六を六根といふ。認識感官のこと。

し、善く藏し、善く護り、善く覆ひ、善く薫じ、復、能く此に因つて、上に知る所の如く、他の爲に說法す。是の如く、[一四]耳根、鼻根、舌根、身根、意根も、乃至、善く薫ずること、復、能く是の如し。他をして斷ぜしめんが故に、修習說法したまふ。此は是の往昔於先ちての瑞相なり。

(8)菩薩の胎に在るや、其の菩薩の母、異味を貪らず。自餘の衆生は、母胎に在る時、其母、貪り嗜みて、厭足するを知らず。菩薩の胎に在るや、此菩薩の母は寒熱及以び飢渴を患へず、其身を惱まさず。此は是、菩薩未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、[一五]四種の食を知りたまふ。此は是往昔於先ちての瑞相なり。

(9)菩薩の胎に在るや、其菩薩の母、志習し庶幾し樂憙して檀を行せり。自餘の衆生は、母胎に在る時、其の母慳貪にして布施を憙まず、財物を悋惜す。菩薩の胎に在るや、其母、意に樂しんで布施を行じ、心意開解して自家の內に居る。此は是、菩薩未曾有の法なり、如來、佛道を成ずるを得已りて、不慳の法を說きたまふ。此は是の往昔於先ちての瑞相なり。

(10)菩薩の胎に在るや、其菩薩の母、常に慈悲を行じ、能く一切諸の衆生の邊に於て、但、是の[一六]有識有命の類を、悉く皆愍念せり。自餘の衆生の母胎に在るや、其の母仁ならず威德少きが故に、諸の不善を行じて惡口罵詈す。菩薩の胎に在るや、其菩薩の母、恒に一切諸の衆生の邊に於て、大利益安樂の心を作しぬ。此は是、菩薩未曾有の法なり、如來、佛道を成ずるを得已り、能く一切諸の衆生の邊に於て、平等心を行じたまふ。此は是の往昔於先ちての瑞相なり。

(11)菩薩の胎に在るや、其の菩薩の母、前の如く端正にして種種の相貌悉く皆喜ぶ可し。自餘の衆生の母胎に在るや、其の母損瘦して體洪滿せず、氣力の羸弱なること常人に倍す。菩薩の胎に在るや、其の母、常に歡喜の心を生じ、戒行威德、身色最勝、最妙最尊なり。此は是、菩薩未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、[一七]見身巍巍として瞻仰す可らず、體、黃金色にして衆相もて

【一四】眼根、耳根乃至意根の六を六根いふ。認識感官のこと。

【一五】四種食。肉身を養ふ團食、感覺を養ふ觸食、意志を養ふ思食、智識を養ふ識食の四。

【一六】有識有命。有情中の心的作用を有するものをいふ。一般に有情と同義語として用ひらる。

【一七】見身。現在せる肉身、現身に同じ。

莊嚴す。此は是の往昔於先ちての瑞相なり。

(12)菩薩の胎に在るや、其の母、菩薩を觀んと欲する時、卽ち、菩薩の胎中に在りて身體洪滿し、諸根具足するを見ること、譬へば明鏡もて面像を覩すが如し。其母見已りて歡喜踊躍、體に充徧して自ら勝ふる能はず。自餘の衆生は、母胎に在りて、[一八]歌羅邏(kalala)及び[一九]阿浮陀(arbuda)に覆蔽せられて現ずる能はず。菩薩、初、母胎に入れる時、身體充滿し、[二〇]五支五根、皆悉く具足せり。此は是菩薩未曾有の法なり。

(13)菩薩の胎に在るや、其の菩薩の母の見る所の衆生の、若し男、若くは女にして鬼に持せられたらんに、菩薩の母を見るを得ば、一切の魍魎、一切の鬼神、皆悉く遠離し、還つて本心を得。若し、骬、蠱と諸餘の雜病有り、或は痿黃病、或は痰癊病、或は等分病、或は餘の諸病、所謂、白癩、丁瘡、惡腫、疥瘙、消瘦、癰疽、癬瘻、瘿腫、寒熱、眼耳鼻舌咽喉及び頭、一切の諸病に侵惱せらるるもの、彼等衆生、來つて摩耶大夫人の邊に至り、其の大夫人、右手もて頂を摩せば、其の頂を摩し已るや、皆安樂を得て諸病悉く除けり。若し重病あつて、來つて摩耶夫人を見る能はざらんに、摩耶夫人、或は草葉を取り、或は樹葉を取り、或は草莖を取りて、右手もて[二一]摩捋して彼の病人に送らんに、其の病人、此等の諸物を得て、或は食し、或は觸れ、或は身上に置けば、卽ち一切の諸病を斷除するを得、便ち安樂を受けて身體輕便なり。菩薩の胎に在るや、是の如き等の無量無邊の威神德力ある未曾有の法有りき。

樹下誕生品第六の上

爾の時、菩薩の聖母、摩耶、菩薩を懷孕して將に十月に滿ちて生れんとするに垂んとする時、時に彼の摩耶大夫人の父、善覺(Suprabuddha)長者、卽ち使人を遣はして迦毘羅の淨飯王の所に詣らし

【一八】歌羅邏。凝滑と譯す。胎內五位の第一。托胎後初七日間の位にいふ。

【一九】阿浮陀。皰と譯す、胎內五位の第二。托胎後第二の七日間の位にいふ。

【二〇】五支五根。頭と手足、眼、耳、鼻、舌、身(觸覺)の五官。

【二一】捋はなづと訓ず。

め、摩訶僧祇師云はく、摩耶夫人の父を善覺と名くと。大王に奏して言はく、『我が知る所の如くんば、我が女摩耶、王の大夫人は、聖胎を懷藏して威德既に大なりと。若し彼産出せば、我が女の命短く、久しからずして必ず終らん。我が意、我が女摩耶を迎へて、還つて我家に來り、安らけく嵐毘尼(Lumbini)中に止住し、共に相娛樂して父子の情を盡さんことを欲す。唯願はくは大王よ、留難を生ずる莫れ。乞ふ、哀を垂れて放ちて我家に來らしめたまへ、此に於て生産平安し訖りて、即ち送還し奉らん』と。時に淨飯王、善覺の使の是の言を作せるを聞き已るや、即ち有司に敕して、其の迦毘羅城及び提婆陀訶(Devadaha)の兩間の中、道路を平治し、一切の荊棘、沙礫、糞穢、土堆を除却し、香湯を地に灑ぎ、種種雜妙の花香を持て其の地に散じ、又復、摩耶夫人を光飾し、諸種の香、諸種の花鬘、諸種の瓔珞を以て其身を莊嚴し、諸の音聲を備へて倡伎樂を作し、大王の力、大王の威風を持し、諸の宮内一切の婇女を從へて、其父、善覺の家に向はんと欲す。先に於て使を遣はし、彼に報知し、來り迎接せしむ。

是の時、摩耶大夫人、身、安然として大白象の上に端坐す。時に象背上の諸天、微妙の寶帳を化作す。摩耶夫人、寶帳の裏に坐して、其父の家に詣らんとて、提婆陀訶城内に至る。是の時、摩耶夫人、初始て提婆陀訶城に向はんとする時、時に淨飯王、一萬の大力香象を辦具し、皆金鞍を被せ、七寶もて其身を校飾莊嚴し、竝びに悉く精麗備擬して以て摩耶夫人を送る。復、一萬の善好の良馬有り、皆紺青色にして、頭黑きこと烏の如く、皆悉く騣[一]を被り、尾は垂れて地に著く。眞金の鞦轡、鞍鐙留羈、悉く亦金飾し、一切の雜寶もて其身を莊嚴せり。復、一萬の妙好の寶車有り、竝に四馬を駕す。其車の周匝には、幡蓋及び衆寶鈴を張懸し、鏗鏘として相和す。是の如く辦具して、皆摩耶夫人の後に隨ふ。復、二萬の勁勇なる力士有り、一人當千、威猛捷健、端正絕殊にして、能く强怨を破る。身に鎧甲を著け、手に弓箭、刀杖、鬪輪、及び諸の戟矟、種種の戰具を執りて、夫人の後

【一】騣はたてがみなり。

に隨ふ。復更に、別に一萬の寶車有り。十千の妃嬪、皆其上に坐し、諸の瓔珞、種種の衣服を持つて其の身を莊嚴し、左右に摩耶夫人を圍繞す。時に淨飯王、重ねて更に、切に宮監大臣に勅して、好く防衞を加へ、司に非ざる其餘の浪人の、摩耶夫人の車に逼近するを聽さず。及び諸の妃嬪を雜合せしむる勿く、唯童女をして、車を牽いて進奉せしむ。是の如き次第もて、摩耶夫人の象乘、中に處り、一萬の寶車に各各一妃其の上に坐し、左右に圍繞し前後に導從す。摩耶夫人、最も上首たり。其の外に復、一萬の香象、一萬の力士、皆鎧甲を服て、夫人の左右前後に隨從して鹵簿して行き、皆各香象の上に坐す。又復一萬の步行の力士も、亦鎧甲を著け、手に種種の戟れ諸杖を執りて夫人の翼衞す。是の如く莊嚴して、摩耶夫人、父の所に詣り向ひ、無量の象馬、皆悉く嘶鳴す。又、無量の龍頭の大鼓、無量の小鼓、種種の樂器有りて、微妙の音を出し、無量の莊嚴、無量の威德もて、提婆陀訶の城に向ふ。時に彼の善覺大臣長者、自らの眷屬と共に城よりして出で、逆へ前んで、女摩耶夫人を迎へ、又、無量莊嚴の具を持して、夫人の前に引く。

是の時、善覺大臣、妻有り、嵐毘尼(Lumbini)と名く。彼の婦、夫善覺に諮白して言はく、『大聖釋子よ、若しは當に時を知るべし、諸の釋種族、各皆自ら園果樹林有り、遨遊觀瞻して其中に至り、自ら相娛樂す。我が大聖子、今、清淨の園林を造作す可し、我等當に聖子と共に、娛樂して歡樂を受くべし』と。時に善覺釋、摩耶大妃夫人の父、迦毘羅及び提婆陀訶兩城の間に於て、自らの境內に近く、婦の爲に一大園林を造作し、善覺の婦、嵐毘尼と名くるを以て、彼が爲に此の園林を造立せるが故に、是の因緣を以て、卽ち之を名けて嵐毘尼園と爲す。彼の園の樹木、蓊鬱扶疎として世間に比無し。其の中に多く種種の花樹、種種の果樹有り、以て莊嚴を爲す。復、種種の渠流池沼、種種の雜樹有り、無量無邊の摩尼諸寶もて、園苑に徧滿す。

爾の時、善覺釋種大臣、彼の春初二月八日、鬼宿の合時に於て、女摩耶と共に相隨ひて彼の嵐毘

尼園に向ひ、往いて大吉祥地を觀看んと欲す。彼の園に到り已りて、摩耶夫人、寶車より下り、先づ種種微妙の瓔珞を以て、其の身を莊嚴し、復、種種雜寶の薰香を以て塗拭す。衆多の婇女は、伎樂音聲もて前後に圍繞し、安庠として徐歩し、處處を觀看して此の林より復彼の樹に向ひ、是の如く次第に周帀して行く。然るに其の園中に別に一樹有り、波羅叉(Plakṣa)と名く、其の樹安住して上下正等に、枝葉垂布して半綠半青に、翠紫相暉くこと孔雀の項の如し。又、甚だ柔輭にして、迦隣提衣(kācalindika)の如く、其の花香妙にして、聞ぐ者歡喜す。摩耶夫人、安庠として漸次に彼の樹下に至る。

是の時、彼の樹、菩薩の威德力を以ての故に、枝自然に曲り、柔輭に低垂す。摩耶夫人、卽ち右手を擧ぐるや、猶、空中に妙色の虹を出すが如し。安庠[二]頻申して、波羅叉の垂曲せる樹枝を執り、仰いで虛空を觀る。時に菩薩の母、摩耶夫人、地に立つて手を以て波羅叉の樹枝を攀づる時、時に二萬諸天の玉女有り、摩耶大夫人の所に往き詣り、周帀圍繞して十指の掌を合せ、共に摩耶大夫人に白して言はく、

『夫人の今生まん子は、　能く[三]生死の輪を斷ち
上下天人の師として、　決定して二有るなし
彼は是諸天の胎、　能く衆生の苦を拔く
夫人よ倦を辭するなかれ、　我等共に扶持せん』

[四](1)爾の時、菩薩、其の母摩耶夫人の地に立ち、手を以て樹枝を攀づる時を見て、胎に在つて正念に座よりして起つ。自餘の一切諸の衆生の母は、子を生まんと欲する時、身體遍ねく痛み、痛める因緣を以て大苦惱を受け、數坐し數起きて、自ら安んずる能はず。其れ菩薩の母は、熈怡坦然として安靜歡喜し、身に大樂を受く。是の時、摩耶、地に立ち、手を以て波羅叉の樹枝を執り訖り、已りて

【二】頻申(Vijṛmbha)。開口し張開すること。

【三】生死輪。生死に始めなく終りなきこと、輪の初終なきが如し、卽ち無始の輪廻なり。

【四】以下、菩薩誕生時の十五奇瑞を擧ぐ。

即ち菩薩を生む。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、乏しきことなく疲るることなく、勞せず倦まず、能く一切の煩惱の諸根を拔き、一切の諸煩惱の結【五】を割斷すること、猶多羅(tāla)樹頭を截りて、畢竟生ぜざるが如く、【六】無相無形にして、後生の法無し。此は是如來往先ちての瑞相なり。

(2)又、復、一切の諸の衆生等は、苦逼を生ずるが故に、胎内に在りて處處に移動するも、菩薩は然らず。右脇より入りて還た右脇に住まり、胎内に在りて曾て移動せず。及び、出でんとする時、【七】右脇より生れて衆苦の逼切する所と爲らず。是の故に菩薩の此事や、希奇、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、其【八】後際を盡して梵行を修行し、永く畏れ有るなく、常に快樂を得、復、諸の苦無し。此は是如來往先ちての瑞相なり。

(3)菩薩初め母胎の右脇より、正念に生るる時、大光明を放ちて、即時に一切の諸天、及び人、魔、梵、沙門、婆羅門等、一切の世間を悉く皆遍ねく照す。乃至、各共に相謂つて言はく、『云何ぞ此處に、忽ち衆生有る』と。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、無明黑闇の網を裂破し、能く明淨の大智慧光を出す。此は是如來往先ちての瑞相なり。

(4)菩薩、初め右脇より出で已り、正心に憶念す。時に菩薩の母、【九】身體安常にして傷まず損はず、瘡無く痛無く、菩薩の母身、本の如くして異らず。菩薩生るる時、種種に資益す。是の因緣を以て、母に患苦無く、身口及び心に一惱有る無きことは、譬へば、一大身の衆生有りて、大威德有り大氣力有り、地上に臥して宛轉して自ら撲つも、其の地損じ、若は減じ、若は破れざるが如し。是の如く、菩薩の母の右脇に在りて正念に生るる時、其の菩薩の母、是の如き因緣もて、瘡無く損なし。是の時、彼の處に一婦人有り、合掌して菩薩の母に諮白して言はく、『大德夫人よ、兒を生むの時、身體痛苦無きを得たりや不や』と。菩薩の母言はく、『此の大人の威神力を以ての故に、我が身體を

【五】結、煩惱の異名、煩惱は人を生死に止めて解脫を得しめざる結縛なり。

【六】無相無形。肉身の誕生に比せるなり。佛身本來法を以て體とする故、無相無形といふ。を以て直ちに佛身の誕生に比

【七】右脇生。脇より生るゝとは刹帝利姓なるを表はす。左右の中に於て、右を貴ぶは、印度の習慣なれば右脇とせらるゝなり。右脇が刹帝利姓を表はすといふは、吠陀の神話に、婆羅門は梵天の口より生れ、刹帝利はその脇より生れ、毘舍はその股より生れ、首陀はその足より生れたりといふに基く。

【八】後際。成道以後、最後の瞬間に至るまでをいふ。際は終極。

【九】身體安常。安常恐らくは安庠の誤寫ならん。

して痛痒を覺えざらしむ、我、今、身體に缺くる無く減ずる無きは、是の因縁を以てなり』と。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已り、梵行を行じて缺けず減ぜず、具足して少けず。此は是、如來往先ちての瑞相なり。

(5)菩薩、初め母胎より出でし時、苦なく惱なく、安庠として起ち、一切の諸穢も汚染する能はず。或は屎或は尿、黃白の痰癊、或は膿、或は血、皆穢著せず。自餘の衆生の母胎を出づる時は諸惡雜穢す。菩薩は爾らず、彼の諸の衆生類に同じからずして、一切の諸穢も皆染著せず。正心正念に安庠として起ち、胎より出生すること、譬へば、如意琉璃の寶の迦尸迦衣を用つて裹む時、各相染まざるが如し。是の如く、是の如く、菩薩の母胎に在る時、一心正念にして安庠として起ち、清淨に出生して一切の穢無し。乃至、膿血屎尿の臭處も穢さず染ます。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、世間に在り、世間に住まるも、世の有ゆる法、世間の穢濁も汚さず染めず。此は是如來往先ちての瑞相なり。

(6)菩薩、始め母胎より出でし時、時に天帝釋、天の細妙なる憍尸迦衣を將つて自らの手に裹み、先に於て承接して菩薩の身を擎げぬ。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已り、創めて娑婆世界の主と爲れる大梵天王(Mahā brahmā sahampati)、於先ちて如來に說法を勸請す。此は是如來往先の瑞相なり。

(7)菩薩、初め右脇より生れし時、四大天王菩薩を抱持し、將て母前に向ひて其の母に示して言はく、『世の大夫人よ、今、歡喜すべし、夫人子を生みて既に人身を得、諸天だも猶尚歡喜讚歎するを、況んや、復、人に於てをや』と。是の故、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、無量衆多の一切の比丘及び比丘尼、諸の優婆塞及び優婆夷、皆如來に向つて法を聽受し、如來の敎に依りて違はず背かず。此は是、如來往先の瑞相なり。

(8)菩薩の生るるや立ちて地に在り、仰いで母の右脇を觀る時、口に是の言を作す、『我が此の身形は、今日より後、復更に母脇の中に受けず、胎に入つて臥さず。此は是、我が最も末後の身、我當に佛と作るべし』と。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、口に是の言を作したまはく、『我、[一〇]今、生分、一切已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、後有を受けじ』と。此は是如來往先の瑞相なり。

【一〇】生分已盡。煩惱滅盡して解脫の境地に入る時は、現身を以て迷界輪廻の境に於ける最後となし、永遠に更に生死の域に入る事なし。故に生分已盡といふ。解脫に達すべき清淨の行業已に達したれば、梵行已立といふ。更に作すべき事なければ、所作已辦といふ。この後更に生死せざるを以て、不受後有といふ。此の四句は、阿羅漢を形狀する套語なれども、敢て阿羅漢に限らず、一切の聖者に共通すべきなり。

樹下誕生品第六の下

(9)菩薩生れ已るや、人の扶持するなくして卽ち四方に行き、面ごとに各七步し、步步足を擧ぐるや大蓮華を出し、七步を行き已りて四方を觀視し、目未だ曾て瞬かず、口自らに言を出す。先づ東方を觀て、彼の小嬰孩の言の如くならず、自らの句偈に依つて正語正言すらく『世間の中、我れ最勝たり、我れ今日より、生分已に盡く』と。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。餘方も悉く然り。初め生れし時、人の扶持するなくして四方の面に於て各七步を行くは、如來佛道を成ずるを得已りて「七助道菩提法分を得たり。此は是如來往先の瑞相なり。菩薩生れ已りて四方を觀視るは、如來、佛道を成ずるを得已りて、具足して「四無畏の法を得たまふ。此は是如來往先の瑞相なり。菩薩生れ已りて口に自ら『我れ世間に於て最も殊勝たり』と唱言せるは、如來、佛道を成ずるを得已り、一切世間の諸天及び人悉く皆尊重恭敬承事したてまつる。此は是の如來往先の瑞相なり。菩薩生れ已りて口に自ら『我れ生死を斷ず、是れ最後邊なり』と唱言せるは、如來、佛道を成ずるを得已りて、一に、語るが如く行ひたまへり。此は是如來往先の瑞相なり。

(10)菩薩生れ已りて諸の眷屬等、水を求覓めて東西南北に皆悉く馳走し、終に得る能はず。卽ち彼の園に於て、菩薩の母の前に、忽然として自ら二池水を湧出す。一は冷かに、一は煖かなり。菩薩の母、此の二池水を取りて、意の隨に用ふ。又、虛空中より、二水注下す。一は冷かに、一は煖かなり。此の水を取つて菩薩の身を洗浴す。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、「奢摩他(śamatha)・毘婆舍那(vipaśyana)を得て欲事を遠離し、勞苦を假らずして其の資財を求めたまふこと、一切自然なり。此は是如來往先の瑞相なり。

【一】七助道菩提分(sapta-bodhyaṅga)。菩提を成ずる七要素。念(smṛti)、擇法(dharma-pravicaya)、精進(vīrya)、喜(prīti)、輕安(praśrabdhi)、定(samādhi)、捨(upekṣā)の七覺支。

【二】四無畏(catvāri vaiśāradyāni)。佛が何人の前にありても憚るところなく說法し得る四種の自信。一切法智(sarva-dharmābhisaṁbodhi)、一切漏盡知(sarvāsrava-kṣaya-jñāna)、說障道決定無違(antarāyika-dharmānanyathātva-niścita-vyākaraṇa)、說盡苦道(sarva-sampad-adhigamāya-nairyāṇika-pratipat-tathatva)の四。

【三】奢摩他は止、毘婆舍那は觀と譯す。心の散亂を制止して一境に集注するが止、この一境集注の心を以て或る問題を觀察批判するが觀。禪定と智慧といふに同じ。

(11)菩薩初めて生るる時、諸天等しく金牀を持して、菩薩に與へて坐せしむ。坐し已りて、菩薩、其の身を澡浴しぬ。是れ人身なりと雖も、諸天扶持せり。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、彼の四種の蓮華の座を得て、如來を扶持したり。此は是如來往先の瑞相なり。

菩薩初め生るるや、大光明を放ちて一切有らゆる光明を障蔽せり。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、一人の能く如法論もて如來に勝つ者有ることなし。此は是如來往先の瑞相なり。

(12)菩薩の初めて生るるや、身に光明を放ちて日光を障蔽すること、猶蕢星の如し。此は是れ菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、諸の聲聞弟子衆の邊に於て、自在に最上の供養、最上の名聞を獲得したまふ。此は是如來往先の瑞相なり。

(13)菩薩初めて生るるや、一切の樹木、一切の藥草、時に隨つて開敷す。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、諸の衆生あり、未だ信解を得ざるは、卽ち信解を得、已に信解せる者は、復、增長を得たり。此は是如來往先の瑞相なり。

(14)菩薩初めて生るるや、上界の諸天、其の[四]白繖を持す。眞金もて柄と爲し、大さ車輪の如し。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、不瞋を以ての故に解脫を得て離欲饒益し、勞勤苦せずして資財を獲たまふ。此は是往先の瑞相なり。

(15)菩薩の初めて生るるや、上虛空中の一切の諸天、各白拂——悉く衆寶を用て以て其柄と爲す、——を持して菩薩の上を拂ふ。菩薩初めて生るるや、虛空淸淨にして烟雲有る無く塵霧有るなきに、但雷聲を聞く。菩薩の初めて生るるや、上空中に於て諸の雲霧無くして、微細の雨、淸淨の香水有り、[五]八功德を具して、諸の衆生をして皆快樂を受けしむ。菩薩の初めて生るるや、四方の

【四】白繖(sita-chattra)。白い絹傘、

【五】八功德水(aṣṭāṅgopeta-vāri)。甘・冷・軟・輕・淸淨・不臭・飲時不損喉・飮已不傷腸(倶舍論說)の八功德ある水、

空中に微妙の風を起し、清涼にして惱み無く、一切八方、清淨光澤にして烟雲塵埃の翳障有るなし。菩薩の初めて生るるや、上空中に於て、人の作す有る無くして、自然に妙梵音聲を出す。菩薩の初めて生るるや、上空中に於て、自ら種種諸天の音樂、種種の歌聲を出し、種種の花、種種の諸香を雨し、日光に曝すと雖も、萎れしむる能はず。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法なり。如來、佛道を成ずるを得已りて、諸の世間の爲に諸の智慧を以て大神變を現じ、[六]清淨の諸通は世間に比無く、如來を首と爲すなり。此は是如來往先の瑞相なり。

(16)菩薩の初めて生るるや、上虛空に於て、一切の諸天、各無量の優鉢羅花・鉢頭摩華・拘物頭華・分陀利華・諸是の如き等の、種種の雜華を持し、復、雜種微妙の諸香を持し、復、種種衆寶の花鬘を持して菩薩の上に散じ、散じ已りて更に散じ、是の如くして相續しき。菩薩の初めて生るるや、時に五百の諸天玉女有り、諸天華もて熏ずる所の油を持して、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して是の如き言を發さく、『善く菩薩を生みたまへり、疲惓無きや』と。菩薩の初めて生るるや、時に五百の諸天玉女有り、天の塗香を持して菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して是の如きの言を作すらく、『善くも菩薩を生みたまへり、疲惓無きや』と。菩薩の初めて生るる時、五百の諸天玉女有り、天の種種の寶、微妙の衣を持して、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して是の如き言を作すらく、『善く菩薩を生みたまへり、疲惓無きや』と。菩薩の初めて生るるや、時に五百の諸天玉女有り、天の種種の雜寶瓔珞を持して、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して是の如き言を作すらく、『善く菩薩を生みたまへり、疲惓無きや』と。菩薩の初めて生るるや、時に五百の諸天玉女有り、天の種種微妙の音聲を持して、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して是の如き言を作す、『善く菩薩を生みたまへり、疲惓無きや』と。菩薩の初めて生るるや、時に此の大地に、十八相を具して六種に震動し、一切の衆生、皆快樂を受けぬ。彼の時に當つて、一の衆生だ

【六】清淨の諸通。欲望名譽等の爲にせざる神通。

も欲心を生ずる無く、復、瞋恚及以び愚癡も無く、慢無く、怖なく、一の衆生だも惡業を造る者無く、一切の病者は皆悉く愈ゆるを得、飢者は食を得、渴者は飲を得、皆飽滿せしめて乏少する所無く、惛醉せる衆生は、皆醒寤するを得、狂者は正を得、盲者は視を得、聾者は聞を得、[七]完具せざる者は皆具足するを得、貧者は財を得、牢獄に繫閉せられしは皆解脱を得、地獄の衆生は皆休息するを得、畜生の衆生は諸の恐怖を除き、餓鬼の衆生は皆充足するを得たり。菩薩の初めて右脇より生れし時、是の如き等の無量無邊の希奇の事、未曾有の法有りき。

從園還城品第七の上

爾の時、一大臣國師有り、姓は婆私吒(Vaśiṣṭha)、名は摩訶那摩(Mahānāma)。諸の國師婆羅門等と、倶に共に嵐毘尼園に往き詣り、彼の園に至り已りて門外に在りて立つ。時に婆私吒、諸の國師婆羅門に語つて言はく、『汝、此の大地を觀よ、何が故に是の如く震動する。譬へば、船に乘りて水上に在るが如し。日月覆蔽して本の光儀を失ひ、狀晝星の如くにて纔に形影有るのみ。一切の樹木、時に隨つて開敷し、上空中には清淨皦潔にして諸の雲翳無きに、但、雷聲を聞く。又虛空中、澄靜朗曜にして殊妙微細の香雨有り、功德具足し自然に八種の味を含む。又、八方より微妙の風を起し、其の風清涼にして冷煖調適に、一切諸方、悉く皆清淨にして烟雲、塵霧、黵黮有るなし。又、虛空中、人の唱ふる有るなくて、自然にして[一]深梵の聲を聞く。復、虛空中に、種種諸天の音樂を聞き、復、天歌、天讃、天詠を聞き、天の香華を雨らし、日光曝すと雖も萎れしむる能はず。』

時に一國師、彼の大臣婆私吒に報じて言はく、『此の事然りと雖も、怪と爲すに足らず、何を以ての故に、地性是の如し、何の不祥か有らん』と。又、一人言はく、『今、此の大地、[二]六種に震動し、

【七】不完具。不具者のこと。

【一】深梵。深く淸らか。

【二】六種震動。第五品の本文に出づ。

虚空敞晃にして日光を隱蔽すること、猶、從來、晝に星宿を看るが如し、復、天花を雨らし、衆光照ると雖も異らしむる能はず、甚だ希奇なり』と。

　其の婆私吒、彼の國師と共に是事を議せる時、時に彼の園中に一女人有り、嵐毘尼より疾走して出で來り、門外に到る。時に彼の女人、門外に至り已り、婆私吒及以び國師を見て歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はず。婆私吒及國師に語つて言はく『諸釋種の子、汝速に大王の所に往き至るべし』と。是の時、大臣及び國師等、彼の女人の是の如き言を作すを見て、兼て復歡喜して自ら勝ふる能はず、彼の女に問うて言はく『汝、我等をして大王の所に至らしむ、當に何をか聞徹して奏を爲すべき、歡喜か、疑怪か、恐怖か、不祥事か』と。彼の女報へて言はく『汝釋種子、我今汝に一大慶幸歡喜の事を白さん』と。其の摩訶那摩及び國師等、彼の女に問うて言はく『何の喜慶有りや』と。彼の女答へて言はく『國の大夫人、一童子を産めり、端正にして愛すべく、世間に雙少なし、然るに此の童子は、[三]眞に是れ眞天、所以に處處に天花を散じ、天の光明を放つなり』と。時に大臣等、是の語を聞き已りて心大に歡喜し、踊躍充徧して自ら勝ふる能はず。是の時大臣、即ち衆寶妙好の瓔珞を解きて彼の女人に賜ひ、是の如き歡喜の事を聞けるが爲の故に、解きて賜ひ已りて後、更に復、思惟すらく『今、此の女人は、是、王宮内[四]時幸の人、王、是の女を見て、極めて大に愛敬す、我、今、身の瓔珞を解きて賜與せり、後に脫しや患を爲さん』と。卽ち還び收め取り、取り已りて轉持して彼の國師に施し、捨し已りて呪願して是の如き言を作しぬ『今、瓔珞を以て國師に施し、有ゆる功德を彼の女に[五]迴施せん、何の因緣を以てぞ、喜事を聞くが故なり』と。

　時に、彼の大臣たる摩訶那摩、國師婆羅門に語つて言はく『大婆羅門よ、汝今還、大王の所に向つて、是の喜事を奏すべし』と。時に大那摩、彼の婆羅門を發遣し已り、更に復、重ねて彼の女人に問ひて言はく『汝、先きに、我が國の大夫人の產める童子は、是、天似天、天の光明を放つと

【三】眞是。麗本には直是に作り、元明二本に眞是に作る。今、元明二本に從ふ。

【四】時幸。宋元明の三本には所幸に作る。いづれにても可ならん。時幸は時を得て最も幸せらるゝなり。

【五】迴施。一方に施せる功德を、他方に向け廻らすなり。廻向の意義、こゝに見らる。

語れり、汝、復更に何の異相有るを見しや』と。時に彼の女人、大臣に答へて言はく、『唯、願はくは善く聽け、彼の童子は、相貌人に過ぎて大威德有り、摩耶國大夫人をして地に立つの時、童子自然に右脇より出で、國大夫人の胷脇腰身を破らず缺かざらしむるを致せり。童子生るる時、一切の諸天、虛空より好細妙の迦尸迦衣を持し、周匝して童子の身を徧く裹み、持して母の前に向ひて、是の如き語を作しぬ、「國大夫人、當に自ら慶幸して、倍歡喜を生ずべし、何を以ての故ぞ、今大夫人、聖子を產育せり」と。是の童子の初めて出でんと欲する時に當り、仰いで母の脇を觀て、是の言を說けり、「我、今日より、復更に母人の胎を受けじ、此は卽ち是我が[六]最後邊の身なり、是よりして已去、我、當に佛と作るべし」と。卽ち地に立ち、人の扶持するなくして卽ち七步を行くに、足に履まるゝ處、皆蓮華を生じぬ。一切四方を正眼もて觀視て、目暫くも瞬きせず、驚かず怖れず、正しく立ちて東面し、言辭辯淨、字句圓滿、孩童の如きにあらずして、此の言を說く、「諸の世間に於て、我は最勝たり、我當に一切生死の煩惱の根本を濟拔すべし」と。童子、彼に在りて立つ所の地處に、是の童子の身の清淨なるを以ての故に、虛空中より二水注下せり、一は煖かに、一は冷かなり。復、金床を持して童子をして坐せしめ、其の身を澡浴せり。童子生れ已りて身より光明を放ち、日月を障蔽しぬ。上界の諸天、其の白蓋を持せり。眞金もて柄となし、大さ車輪の如くにて、虛空の中に住まれり。復、諸天有り、手づから白拂——衆寶もて柄となす——を持して童子の上に搖かしむ。又、虛空の中に一切の音樂、鼓せずして自ら鳴り、復、無量無邊の微妙の歌詠の聲を聞けり。又、香花を雨らして處處に徧滿し、日光照すと雖も鮮潔常の如く、異ならしむる能はざりき。』

爾の時、大臣摩訶那摩、此の語を聞き已りて卽ち自ら思惟すらく、『希有なり、希有なり、此の惡時に於て、而も大士の世に出興することや、我今應に、自ら淨飯大王の所に往きて、是

【六】最後邊身。迷界に於ける業報による輪廻身として、最後終極なるをいふ。最後は、不生不死の佛身となるを以てなり。

の如き希有の事を奏聞すべし』と。時に、彼の大臣、善く調せる馬を取りて、行くに疾きこと風の如く、寶車を駕馭して嵐毘尼園の門外より發し、徑ちに彼の迦毘羅城に至り、未だ王を見ざるに、在先ちて歡喜の鼓を撾打せんとて、其の身力を盡して之を扣擊しぬ。

時に淨飯王、寶殿の上に坐し、輔相、弼諧、國政を治理する群臣、鄉士、百辟の官僚、或は後に、或は前に、左右圍繞して皆悉く彼の歡喜の鼓聲を聞く。時に、王、驚いて諸の群臣に問ひて言はく、『卿諸臣等、是れ誰か忽然として、敢へて能く我が甘蔗種門の歡喜の鼓を擊ち、其力を盡し打つて、此大聲を出せるか』と。時に守門の臣、前んで王に白して言はく、『大王當に知るべし、王の大臣婆私吒、姓は摩訶那摩、四馬の車に駕して迅疾風の如く、嵐毘尼園の門外より來つて忽ち跳つて車を下り、其身力を盡して卽ち大王歡喜の鼓を擊てり、更に言語無くして、直云ふ、「我今、大王に見えんと欲す」と』。時に淨飯王、臣に語つて言はく、『何の喜事か有る、宜しく速に彼の婆私吒、姓は釋種の大臣摩訶那摩を喚び來り、急に我が前に到れ』と。臣、王の勅を奉じて白して言さく、『大王よ、謹んで敎命に依り、星のごとく速かに往いて、彼の釋大臣、摩訶那摩を喚び、勅して急疾に王の所に到らしめん』と。

時に摩訶那摩、王の勅を聞き已り、卽ち王の前に至りて高聲に唱言すらく、『願はくは王よ、常勝なれ、願はくは王よ、常尊なれ、今、此の言を奉る。身力を增益せよ』と。時に淨飯王、此の語を聞き已りて、大那摩釋種の大臣に告げ、是の如き言を作しぬ、『汝釋大臣、何が故に忽遽速疾にして來り、身力を盡して歡喜の鼓を打てる』と。時に彼の大臣摩訶那摩、卽ち王に報へて言はく、『彼の天臂城、嵐毘尼園に、大王の夫人、中に在つて遊戲し、彼の樹下に於て一童子を生みぬ、身、黃金色にして其の狀天に似たり、乃至、端正にして天の光明を放てり』と。

時に淨飯王、復更に重ねて、審實の相好を問ふらく、『其の事云何ん』と。時に彼の大臣、復、王

に報じて言はく、『夫人地に立ち、乃至、右脇裂けず壞れず、童子生れ已るや、自ら地に立ち、諸天各迦尸迦衣を持して遍ねく其の身を裹み、仰いで母脇を觀て口に是の如く言ひぬ。「我、當に佛と作りて生死苦惱の根本を拔斷すべし」と。澡洗して放光するや、日月を障蔽し、樹木藥草、時に依つて開華し、虛空には諸天、白蓋と拂を持ちて童子の上に搖かし、虛空に雷聲微細の天雨あり、涼風は四もより來り、其の形を見ざる梵響の樂音、鼓せずして自ら[七]鳴り、華は照せども萎まず』とて、上に說く所の如く、一一次第して具さに王に諮白し、『大王、當に知るべし、我、是等の希有の事を見たり、是の故に我今、歡喜の緣を以て歡喜の鼓を擊ち、敢へて徧く告げ知らせり』と。時に彼の大臣、復、諸天の供養せる餘華を持ち、敬んで大王に奉りて是の如く備さに說きぬ。

時に、淨飯王、是の語を聞き已りて大臣に告げて言はく、『汝、既に是の歡喜の事を持して我に白して知らしむ。汝の深心の如くんば、何の願をか求めんと欲する、我當に盡く與へ、意の隨にして違はざるべし』と。其の婆私吒大臣、答へて言はく、『臣、王の恩を蒙りて乏少する所無し』と。時に淨飯王、復、大臣に告ぐらく、『法として當に乞願すべし、必ず當に相與ふべし』と。大臣、復更に重ねて王に白して言はく、『願はくは王よ、歡喜したまへ、臣、王の恩を蒙りて乏少する所無し』と。

時に淨飯王、復、大臣に告げたまはく、『汝今應に王の勅に違ふべからず、要らず須く乞願すべし、我、當に汝に與ふべし』と。時に婆私吒大臣、白して言はく、『大王よ、若し當に必定して歡喜し、臣の願を乞ふべくんば、唯願はくは大王よ、臣に太子の左右に奉事し、時に隨つて給侍するを聽したまへ。所以は何ん、此の童子、今既に生れ已んぬ、必定して還、甘蔗日種轉輪聖王を續いで、苗裔絕えざらん』と。時に淨飯王、大臣に報へて言はく、『善く時を知る者よ、意の樂む所の隨なれ』と。時に淨飯王、諸臣に告げて言はく、『汝等大臣、應當に彼の婆私吒大臣の典掌する所の吉祥なる國法の如く、次第に具錄すべし、缺減せしむる勿れ』と。時に淨飯王、大那摩釋大臣に告げて言は

【七】自鳴。麗本には自唱と作し、三本には自鳴とす。今、三本に從ふ。

く、『大臣よ、汝我が國に來つて、既に是の如き太子を生めり、今當に是の勝上太子の爲に生法を作すべし』と。

時に淨飯王、大威德の力あり、王の威神を以て諸臣百官、左右圍遶して、猶半月の如く左右に侍立し、及び摩訶那摩諸大臣等、發して彼の嵐毘尼園に向ひ、菩薩を迎へんと欲して其の中路に至る。時に淨飯王、摩訶那摩及び大臣に告げて言く、『汝等大臣、我れ生子を聞き、復、是の如き希有の事、未曾有の法を見たり、豈歡喜して自らの憂愁を覆はざらんや』と。摩訶那摩大臣、復、言はく、『大王よ、要らず當に歡喜自慶すべし、愁を懷くべからず。何を以ての故ぞ。天人の生む所、是の如き法、不可思議大希有の事有り。大王聞かざる可けんや。往昔、一婆羅門有り、多虱吒迦華生と名けぬ。彼生れ已りて後、人に從つて學ばず、自然に能く[九]四種の毘陀(Veda)を解けり。又復大王よ、聞かざる可けんや、往昔に於て一頂生(māndhātṛ)の王有り、父の頂より生れ、生れ已りて還た孩童の如く一種なるも、漸漸に長大して四天下に王たり。又復大王よ、聞かざる可けんや、往昔に於て一王有り、毘迦と名く。父の掌より生れて母腹の出に非ず。又復大王よ、聞かざる可けんや、往昔に於て一王有り、留婆(Aurva)と名く。父の䏶より生れぬ。又復大王よ、聞かざる可けんや、往昔に於て王有り、迦輸婆と名く。父の臂より生れぬ。又復大王よ、聞かざる可けんや、大王の先祖に於て、昔より以來、甘蔗王と名け、甘蔗より生れぬ。是等の諸王は、人間に生ると雖も不可思議なり。』

時に淨飯王、復更に摩訶那摩釋大臣に語つて言はく、『汝大那摩よ、彼等諸王は、皆是れ大明にして大威德有り、此は彼に方らず』と。摩訶那摩、歡喜心を以て復王に白して言はく、『大王よ、當に知るべし、此の太子は、必定して彼の一切の諸王に勝らん』と。淨飯王言はく、『何の勝相か有る』。摩訶那摩大臣答へて言はく、『彼等の輩の生と、此の太子の生とを、臣、比べて挍量するに、相の大

【八】異生の王の例は、佛所行讃參照、頂生、留婆のことは、マハーバラタに出づ。

【九】四種の毗陀とは(一)Rgveda(二)Yajur-veda(三)Sāma-veda(四)Atharva-vedaなり。

に勝るを知る』。王、復語つて言はく、『汝戲調する勿れ、所以は何ん、凡そ人の父として、子の他に最も勝るを欲せざる可けんや、或は見聞を多くし、或は智解を廣くし、或は善く修行し、或は禮義を備へ、或は治道を明かにし、或は懃精進する、是の如き者有れば、心則ち歡喜す』と。

時に淨飯王、是の語を說き已りて、漸漸にして彼の嵐毘尼園に至り、彼の園に至り已りて大門の外に在り、卽ち使人を遣はして夫人に白さしめて言はく、『夫人の福德なる善く聖種を生めり。夫人よ、宜しく太子の生處に於て吉祥事を作し、莊嚴を敷設して速かに訖了らしむべし。吾、面り親しく太子を觀視んと欲す。是の子胎に在るや、吾、先には、種種希奇の瑞相未曾有の法を覩ると雖も、但、我今心に、子を愛念するが故に自ら往いて看んと欲す』と。是の時、摩耶國大夫人、童子の爲に、種種に世の應に吉慶の禮と爲すべき所を備辦して、皆悉く訖了るや、卽ち使人を遣はして王に奉報して言はく、『大王よ、時を知ろしめせ、應に是の園に入りたまふべし』と。時に女人有り、淨飯王の已に園內に入るを見て、菩薩を抱持して王の所に將て詣り、是の如き言を作しぬ、『童子、今、父王を敬禮すべし』と。王言はく、『然らず、先づ、我が師、婆羅門を禮し、然る後に我に見えしめよ』。是の時、女人、菩薩を抱持して先づ將て往いて婆羅門の所に詣る。是の時、國師婆羅門等、菩薩を見已りて淨飯王に白し、因りて呪願して言はく、『唯願はくは大王よ、常に尊く常に勝るゝことを、子の勝れたまへるを見るが如かれ、願はくは王釋種の芽葉、常に興らんことを。大王よ、此の子、必ず當に轉輪聖王と作るを得べし』

時に淨飯王、復、國師婆羅門に問うて言はく、『然るを知る所以は』と。是の時國師、復王に白して言はく、『我所見の如くば、毘陀羅論所說の諸相、此子の法に合す、是の事、眞實なり』と。時に淨飯王、復、國師婆羅門に問うて言はく、『若し是の如くば、我が釋氏轉輪聖王、甘蔗の種、必ず當に增長すべし。何を以ての故に。今、世の諸王、其の福德、苦行精勤に於て、皆悉く缺減せり。若

し、今、是の童子を生みて、此等の福力有らんには、昔の劫初の諸王の如く、福德、大力、勇健の相にして具足せば、是卽ち我家、必ず當に興盛して、還、劫初の諸轉輪王の如かるべし。』

時に菩薩の母摩耶夫人、淨飯王幷に國師婆羅門等の面色の熙怡なるを見て、卽便ち淨飯王に諮白して言はく『大王よ、我に轉輪聖王の相貌の云何んを示せ、善い哉、我が爲に略其要を說き、我心をして喜ばしめよ』と。時に淨飯王、國師婆羅門に問うて言はく『仁者大師よ、願はくは爲に、轉輪聖王の形狀相貌を解釋せよ』と。時に彼の國師及び婆羅門、淨飯王及び夫人に報へて言はく、『唯願はくは大王よ、諦かに我が說を聽かれよ。我、先聖の諸論の相傳に從ひて、轉輪王の有ゆる自在功德を悉く具するを說かん。若し、轉輪王の人民を治化するや、彼の轉輪王、必ず能く虛空を飛騰して、行きて地上に徃す。若し時に亢旱せば、念の隨に卽ち雨ふらす。若し王界の內に瞋恚の諸惡衆生有り、更迭ひに相嫌ひて心に恨を懷かば、轉輪王の威德力を以ての故に、國內の衆生、各各歡喜す。轉輪聖王は七寶具足す。所謂、金輪、神珠、象、馬、玉女、主藏、典兵臣等、是を七寶と名く。轉輪聖王の壽命は長遠にして、終に橫死なく、病少く、惱少く、身體の端嚴なる世間に比無し。其の境內に於ける一切の人民、是の王を愛敬すること猶一子の如く、轉輪聖王の人民を愛護することも赤子に過ぐ』と。時に淨飯王、復、國師婆羅門に白して言はく『大婆羅門よ、仁の所說の如くんば、夫、轉輪聖王爲らん者、皆是の事有り〔一〇〕然も我に非じ。』

時に菩薩の母摩耶夫人、復更に重ねて淨飯王に白して言はく『大王よ、是の事未だ怪となすに足らず、所以は何ん。此の童子は、今日、甘蔗種姓、刹利の家に生るるが故に』と。時に淨飯王、復、是の言を作しぬ『希有の事かな、轉輪聖王、人間に生れぬ。但、彼の轉輪聖王の威德、是の如く大に果報の勝業を受けて、我が心に怪を生ぜしむ。往昔、一切の轉輪聖王に、是の如き諸の奇特の相有ることなし、所謂、甘蔗日種姓の王、尼拘羅王(Nipula, Nikula)・憍拘羅王・瞿瞿羅王・或は復、

【一〇】然非我耶。轉輪王の相貌の異常なる事は、能く了解せり。然もそは我に關する事にはあらじといへるなり。之が爲に、耶の疑問辭を加ふ。

我が父、師子頬王、及以びまた我が身に、是の如き奇特の相有ることとなし、其の事云何、復、何の因有りや』と。是の時、國師及び婆羅門、復、更に淨飯王に諮白して言はく、『大王當に知るべし、前有り、後有り、未だ怪と爲すに足らず。大王聞かざるべけんや、往昔に於て、一國王有り、耶耶埏(Yayāti)と名く、一切の功德、悉く皆具足せり。父を婆流と名く。其の一子有り、名けて不流と爲す。不流に子有り、屯頭摩囉と名く。屯頭摩囉に子有り、伽叉福と名く。伽叉福に子有り、阿囉祇不と名く。阿囉祇不に子有り、曼帝隸耶尼(Maitrāyaṇi)と名く。曼帝隸耶尼に子有り、因羅婆毘羅と名く。因羅婆毘羅に子有り、頭疏般那と名く。是の如き等の王、大威德を具して然かも轉輪聖王と作るを得ず。彼等の最後の頭疏般那、一子を生めり、婆羅陀と名けぬ。其の婆羅陀、方に始めて轉輪聖王と作るを得たり。往昔劫初に刹利種有り、摩訶三摩多と名けぬ。天從りして下つて而かも轉輪聖王と作るを得ず。其の後、次第に展轉相承して頂生轉輪聖王に到り、王領、乃至、三十三天、祖父、子孫、苗裔、繼續すれども猶自ら退滅して轉輪聖王と作るを得ず』と。時に淨飯王、復、是の言を作すらく、『大婆羅門、此の言善とたす、何を以ての故に。我亦我が子の、是の如きを得んと欲し、亦我が子の汝の彼の言の如くならんを願へばなり』と。

時に淨飯王、自ら心に思惟すらく、『我、今若し童子を將て城に入らんには、何の輦轝をか作さん』と。時に淨飯王、是の心を生じ已るや、是の時、工巧神の毘首羯摩(Viśvakarman)、即時に七寶の輦轝を化作す。自然にして成り、人作に由らず。端嚴微妙、殊特雙少し。時に淨飯王、即ち嚴勅を出し、勸めて迦毘羅城を修理せしめ、一切の荊棘、沙礫、磽石、糞穢、土塠を灑掃し、耘除し、悪露不馨なるを、悉く淨潔ならしむ。其の迦毘羅の種種の莊嚴、猶乾闥婆城の如く、一種も異ることなし。其の城の有ゆる種種の雜戲、一切の樂人、能く歌ひ能く舞ひて、巧みに幻化を爲す。或は弄珠する有り、或は能く水を出し、或は身を莊嚴して以つて婦女と爲る。是の如く種種の變化の能

【二】磽。地に小石多きをいふ。

くする所、彼等一切皆悉く雲集す。時に、彼の大衆、或は身を踊らして、虚空に擲在する有り、或は復鈴を騰げ、或は復鼓を打ち、或は〔三〕屩屐を著け、或は竿頭に緣り、或は復倒行して首下足上し、或は復反擲すること猶旋輪の如くし、或は虚空上に繩を懸けて走り、或は復槃槃し、或は復跳刀し、諸の是の如き等無量無邊、種種に戯笑し、種種に示現し、或は聲を揚げて大叫大喚するあり、或は復吹指、或は衣裳を弄す。

*爾の時、護世の四大天王、各其の身を變じて婆羅門となり、悉く並に幼年にして、端政なること喜ぶ可し。頭を螺髻に爲し、躬ら菩薩の寶轝を擔ひて行く。是の時、釋天も亦、本形を隱して化して童年の婆羅門子と作り、端政なること前の如し。頭を螺髻に旋らし、身には黄衣を著け、其の左手を用て金の澡瓶を執り、復、右手を以つて寶杌を擎げ持し、菩薩の前に在りて人の行くを斷ち、口に是の言を發す、『卿諸人の輩、宜しく各道を避くべし、最勝の衆生、今城に入らんと欲す』と。

上來の四句は、梵本に再び稱して、以て心に重んずるを明かにす。

爾の時、色界の大梵天王、往昔の偈を述べて菩薩を讃じて言はく、

『天上天下に佛に如くなし　十方世界亦復然り、
世間の有ゆるを我盡く觀ずるに　一切更に佛に如く者無し』

爾の時、菩薩、天臂城の嵐毘尼園より、初めて迦毘羅に入らんと欲す。時に、一切の諸天、道路を灑掃し、復、五千の諸天玉女有りて、各各手内に一金瓶を執り、香水を盛り滿てて以用て地に灑ぎ、菩薩の前に在りて次第して行く。復、五百の諸天玉女有り、各諸天の微妙の掃箒を持して菩薩の前に在り、地を掃ひて行く。復、五百の諸天玉女有り、各諸天の雜寶の香爐を持し、種種微妙の香を焚燒して菩薩の前に在り、菩薩を供養しつつ引道して行く。復、五百の諸天玉女有り、金の寶瓶を持し、妙香を盛り滿てて菩薩の前に在り、引道して行く。復、五百の諸天玉女有り、各各天の

【三】屩。草屝なり。屐は即ち麤履なり。

【*】以下本品の終まで、文段に前後出沒の差あるも、記事、略、方廣大莊嚴經に一致す。大事の記事亦、相似す。

妙多羅樹葉の扇を執持し、菩薩の前に在りて引道して行く。復、五百の諸天玉女有り、各各孔雀王の尾を執持して以て拂と爲し、菩薩の前に在りて引道して行く。復、五百の諸天玉女有り、各各多羅樹葉にて作られたる[一三]筌提を執持し、菩薩の前に在りて引道して行く。復、五百の諸天玉女有り、各各手に諸天の胡牀を執り、菩薩の前に在りて引道して行く。復、五千の諸餘の天女有り、各各金鈴を執り、時時搖り動かし、聲を揚げて吉祥の音を大唱し、菩薩の前に在りて引道して行く。復、二萬五千の香象有り、悉く金の[一四]鞦䩭に金もて鞍[一五]韉と爲し、皆金甲を被せ、一切の挍餝、悉く是れ純金、其の莊具の上を復金網に籠め、菩薩の後に在りて次第して行く。復寶馬有り、其の數二萬、悉く皆靑色にして頭黑きこと烏の如く、[一六]鬉披いて地に垂れ、一切の鞦、䩭、鞍、韉、鐙具は、純金もて莊嚴し、天金の羅網を以て其の上を覆ひ、菩薩の後に隨つて次第して行く。復、二萬の衆寶の妙車有り、駕するに駟馬を以てし、幡蓋もて莊嚴し、天の金羅網を以て其の上を覆ひ、菩薩の後に在りて次第して行く。復、四萬の歩兵壯士有り、皆悉く勇健にして各千に敵し、並に好丈夫にして大筋力有り、能く怨隙を破る。身に甲鎧を被り、手に弓刀を執り、或は鐵輪を把り、或は戟槊を持ち、是の如くに次第して菩薩の後に在り、[一七]翊從して行く。復、無量無邊の色界の最大威德の諸天衆等有り、菩薩の右廂に在りて行く。復、無量無邊の欲界の最大威德の諸天衆等有り、菩薩の左廂に在りて行く。復、無量無邊の龍王、夜叉、犍闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、鳩槃茶、羅刹、毘舍遮等有り、半身を出現し、各各衆雜の妙華を執持し、虛空中に滿ち、菩薩に隨つて行く。復、無量無數無邊億百千萬の諸天神王有り、歡喜踊躍、皆悉く遍滿して自ら勝ふる能はず、聲を揚げて叫喚し、或は叉指を吹き、或は舞ひ或は歌ひて、殊異の音を發し、或は衣裳を弄し、或は手足を弄して諸の戲樂を作し、或は種種の末香、塗香、華鬘、瓔珞、蔓陀羅等の種種の諸華を持し、各自手に擎げて菩薩の上に在り、虛空中に於て行くゆく菩薩に散じ、散じ已りて復散ず。一切

【一三】筌提。或言二遷提一、謂可三遷從二提挈一也。或作二荃提一、言以二荃草一爲レ之也。非二此方物一、出二崑崙山一也。(惠琳音義)
【一四】鞦。筌は一種の香草なり。牛馬の尾にかくる羈、しりがき。
【一五】韉はしたぐら。
【一六】鬉は馬冠也、又馬項上長毛鬣也。(可洪音義)
【一七】翊はつつしむなり。

の諸天、是の菩薩の威徳力を以ての故に、人氣を聞かず。一切の諸人、天色を覩ると雖も亦驚嗟せず、復放逸ならず。

爾の時、一切の釋種眷屬、四種の兵、——車兵、馬兵、象兵、歩兵——を將ゐて菩薩を圍遶し、或は前、或は後、或は左、或は右に、菩薩に從つて行き、迦毘羅城に充塞遍滿す。其の淨飯王は、大王の力、大王の威徳を持つて、無量の鼓、大鼓小鼓を撃ち、復、無量無邊の螺貝を吹く。諸是の如き等の無量無邊の種種異類雜妙の音聲は、菩薩を娛樂し、導引して將に迦毘羅城に入らんとす。

時に迦毘羅に、城を去ること遠からずして一天祠有り、神を增長と名く。彼の神舍の邊に常に無量の諸釋種族有り、童男、童女、跪拜して乞願し、恒に心に稱ふを得たり。時に淨飯王、菩薩を將ゐて還り、彼の天舍に至りて諸臣に告げて言はく『今我が童子に、是の大天神を禮拜せしむべし』と。爾の時乳母、菩薩を抱持して彼の天祠に詣る時、更に別に一の女天神有り、名を無畏と曰ふ。彼の天女の像、其の自の堂より下りて菩薩を迎へ、合掌恭敬して頭面もて菩薩の足を頂禮し、乳母に語りて言はく『是の勝れたる衆生よ、侵毀を生ずる莫れ（此の上の兩句梵本に重ねて稱す。）應に彼をして我を跪拜せしむべからず、我應に彼を禮すべし、何を以ての故に、彼に禮せらるれば、能く人をして面破れて七分ならしむればなり』と。

卷の第九

從園還城品第七の下

爾の時迦毘羅城に諸釋種の五百の大臣有り、皆悉く是れ菩薩に於て眷屬たり。還つて復五百の精舍を造立して菩薩の坐に擬し、菩薩の初めて城に入る時に當つて、各各立つて自家の門前に在り、歡喜の心を以て合掌恭敬して、而して是の言を作さく、『願はくは天中天よ、我が精舍に入れ、願はくは大船師よ、我が精舍に入れ、願はくは身金色なる清淨の衆生よ、我が精舍に入れ、願はくは、一切に歡喜心を施す者よ、我が精舍に入れ、願はくは、名遠く聞えて毀缺ある無き者よ、我が精舍に入れ、願はくは、德最も尊くして無等等なる者よ、我が精舍に入れ』と。時に、淨飯王、是の如き等の五百の親眷の爲に憐愍を生ずるが故に、菩薩を將て次第に歷巡して其の精舍に入り、悉く皆周遍して然る後、始めて將て自が宮に入りぬ。

爾の時、菩薩の生れたる日に當りて、卽ち五百の諸釋種の子有り、同日にして生る。菩薩巍巍として、最も初首たり。復、五百の諸釋種の女有り、亦同日に生る。耶輸陀羅(Yaśodharā)を上首と爲す。復、五百の諸釋の奴僕有りて、亦同日に生る。淨飯王の宮の車匿(Chaṇḍaka)を首と爲す。復、五百の釋種の婢媵有りて、亦同日に生れ淨飯王の宮に、太子に侍衞す。復、五百の鮮白なる馬駒有りて、亦同日に生る。淨飯王の厩の揵陟(Kaṇṭhaka)を首と爲す。復、五百の大香象王有り、色の白きこと雪の如く、齊しく六牙有り。王宮の門に在りて忽然として現はれぬ。復、五百の大巨なる伏藏有り、四面を周匝し迦毘羅を遶りて、自然にして現はれぬ。復、五百の妙好の園林有り、流泉、浴地、種種の花果、皆悉く遍滿し、並に現はれて迦毘羅城に在り、四面に周匝す。悉く是、太子の威德の力の故なり。復、五百の大商賈主有り、諸の錢財を積み、多饒の珍寶を相隨へて、迦毘羅城に來

り詣る。復、五百の微妙の傘蓋、五百の金瓶有り、並に是れ五百の粟散諸王より、使を遣はして送り來り、淨飯王に上つて是の如き言を作す、『今、是の物を以つて、大王に奉獻し、太子を慶賀す』と。復、五千の諸の婆羅門、及び刹利種の大富長者有り。各、己が女を持して將て來つて淨飯王に奉上す。時に淨飯王、凡そ所須の者は皆悉く備具しぬ。

時に淨飯王、自ら心に思惟すらく、『我、太子を生む。今何の名をか作さん』。復、更に思惟すらく『彼が生れたる日に一切の衆事、皆悉く自ら成れり、今我太子の爲に名を立て、名けて成利(Siddhârtha, 悉達多)と爲すべし』と。時に淨飯王、卽ち藏を開いて百億兩の金を出し、成利を供養し、爲に名字を立てぬ。是の故に偈に言はく、

『是の如く王宮の內　衆事悉く豐饒なり　今太子の名を作りて　應當に成利と名くべし』

相師占看品第八の上

時に淨飯王、卽ち相師の占觀を解する者を召し、呼んで前に來らしめ、太子を看しめて是の如き言を作す、「汝、諸の相師婆羅門等よ、是の太子の、我が族中に在りて好たるか惡たるかを占へ、汝等好く吉凶の相を見よ』と。

是の時、諸の相師婆羅門等、王の勅を聞き已りて一心に太子の形容を瞻仰し、各先聖の有ゆる諸論に依つて、共に相量宜す。量宜し訖已つて王に白して言はく、『大王よ、今は、大に衆利を得たり、何を以ての故に。此の太子には大威德有り。是の大衆生、今王家に生れぬ。大王よ、當に知るべし。此の太子の身に、三十二大丈夫の相有り。凡そ一人有りて三十二丈夫の相を具せば、世間中に於て則ち二種の果報有りて差はず、更に餘異無し。何等をか二と爲す。一は、若し家に在りて世樂を受けば、則ち轉輪聖王と作るを得て、四天下に王となり、大地を護持して七寶具足し、乃至、

刀杖を用ひずして人を化し、自然如法に、海内に遍ねからん。若し王位を捨てて出家學道せば、[一]如來應正遍知を成ずるを得、名稱遠く聞えて世界に充滿せん』と。

時に淨飯王、是の記を聞き已りて復更に重ねて婆羅門に問うて言はく『太子の何れの處か、是れ大丈夫の三十二相なる』。婆羅門言はく、『[二]三十二種大人の相とは、一には太子の足下、安立にして皆悉く平滿なり。二には、太子の雙足下に[三]千輻輪の相有り、端正にして中に處り、可喜清淨なり。三には太子の手指纖長なり。四には、太子の[四]足跟圓かに好し。五には太子の[五]足趺高隆なり。六には、太子の手足柔軟なり。七には太子の手足の指間に[六]羅網を具足す。八には太子の腨鹿王の如し。九には、太子正立するに曲らずして二手膝に過ぐ。十には、太子の[七]陰、馬藏の相あり。十一には太子の皮膚、一孔に一毛旋り生ず。十二には、太子の身毛、上に靡く。十三には、太子の皮膚細軟にして[八]兜羅綿（Tūla）の如し。十四には、太子の身毛金色なり。十五には、太子の身體淳淨なり。十六には太子の口中、深好にして喜ぶ可く方正なり。十七には、太子の頰車、方正にして師子王の如し。十八には、太子の兩腋廣闊なり。十九には、太子の身體の上下縱横正等なること、[九]尼拘樹（Nyagrodha）の如し。二十には、太子の[一〇]七處滿好なり。二十一には、四十齒を具す。二十二には、諸齒齊密なり。二十三には、齒、疎缺ならず、[一一]齹ならず。[一二]齵ならず。二十四には、四牙白淨なり。二十五には、身體清淨にして純黃金の色なり。二十六には、聲、梵王の如し。二十七には、舌、廣長大にして柔軟紅薄なり。二十八には、食する所のもの皆上味となる。二十九には、眼目紺青なり。其の三十には、太子の眉、眼、睫、牛王の如し。三十一には、眉間の[一三]白毫、右旋宛轉して、具足し、柔軟、清淨の光鮮かなり。三十二には、頂上の肉髻、高廣平好なり。大王よ、此は是、太子三十二種の大丈夫相、是の如く具足せり。若し一人有りて、此等の丈夫の相を具足せば、是の人の得る所の二種の果報、在家と出家と、上に說く所の如し』と。

【一】　如來應正遍知（Tathāgata-arhat-samyak-sambuddha）。如來、應供、等正覺といふに同じ、三名とも佛位の異稱。

【二】　三十二相。種々異說あるも、本經に出づるものは、Lalitavistara に出づるものに一致す、梵名參照。

【三】　千輻輪相。足裏の紋樣が、千本の輻（車の矢）のある車輪の如きなり。

【四】　跟はきびす。

【五】　趺はあしのかふ。

【六】　羅網。あみ、別傳に水かけ（水鳥の足の）如しとす。その意知るべし。

【七】　陰馬藏、男根が馬のそれの如く、內部に縮み藏れ居るをいふ。

【八】　兜羅綿。すゝきの尾花の如きもの。

【九】　尼拘樹。端直無節、圓滿愛すべく、地を去る三丈餘にして、方に枝葉あり、其の子の微細なる、柳花子の如しといふ。

【一〇】　七處。兩足下、兩掌、兩肩、頂中の七處。

【一一】　齹は齒齊はず、くひちがふ。

【一二】　齵はやへば。

【一三】　白毫。白きうづ毛。

時に淨飯王、諸相師の是の語を說くを聞き已りて心大いに歡喜し、遍體踊躍して、自ら勝ふる能はず。卽ち種種百味の飲食を出して、彼の相師婆羅門等に設け、其をして自恣隨意に飽滿せしめ、復、種種雜妙の衣服、種種の諸寶、及び餘の資財を以て而して布施す。

時に淨飯王、迦毘羅大城の內に於て、四衢の道頭及び諸の街巷の處處に遍滿して無遮會を立て、凡そ所須の物は皆悉く給與す。食を須めば食を與へ、飲を須めば飲を與へ、衣を須めば衣を與へ、香を須めば香を與へ、床敷を須めば床敷を與へ、房舍を須めば房舍を與へ、資財を須めば資財を與へ、馱乘を須めば馱乘を與へ、有ゆる功德は皆悉く迴施して、竝に太子の身を資益する爲にしぬ。

是の時菩薩、天臂城の嵐毘尼園に在りて、母胎より初めて出生する時、正憶正念にして大光明を放ち、世界に遍滿す。又此の大地六種に震動して十八相を備へぬ。爾の時、[一四]地居(Bhāumā)の諸天、諸仙、此の瑞を見已りて歡喜身に遍ねく、自ら持するに勝へず。聲を揚げて叫喚し、大語を發して言はく、『今日閻浮の嵐毘尼中、菩薩出生して一切の天人世間の爲に大安樂を作し、諸の無明黑闇の衆生の爲に大光照を作す』と。時に四天王(Cātur-mahārājā)、彼の地居の諸天諸仙の大聲を發するを聞き已るや、其四天王の所在の諸天、此の語を傳聞して復大に歡喜し大音聲を發し、衣裳を戲弄して是の如き言を作す、「今、人中に於て菩薩の出生せるは、諸世間の安樂明の爲の故なり」と。三十三天(Trāyastriṃśā, 忉利)、四天王の叫喚の音聲を聞き、亦、大に歡喜す。是の如くして乃至、須夜摩天(Suyāmā)は忉利より聞き、兜率陀(Tuṣitā)は夜摩より聞き、化自樂天(Nirmāṇa-ratayā)は兜率より聞き、他化自在(Paranirmitavaśavartina)は化樂より聞き、展轉して、復、色界(Rūpa-dhātu)に至り、梵天(Brahmā)は他化より聞き、梵衆天(Brahmapāriṣadyā)は梵天の處より聞き、梵輔天(Brahmapurohitā)は梵衆天より聞き、大梵天(Mahābrahmāṇā)は梵輔天より聞き、光天(Ābhā)は彼の大梵天より聞き、少光(Parīttābhā)は彼の光天の處より聞き、無量光天

【一四】以下諸神歡呼のことは、初轉法輪奇瑞の傳說より考案せられたるもの。

(Apramāṇabhā)は少光より聞き、光音天(Ābhāsvara)は無量光より聞き、淨天(Śubha)は彼の光音天より聞き、少淨天(Parittaśubha)は淨天の處より聞き、無量淨天(Apramāṇaśubha)は少淨より聞き、遍淨天(Śbhakṛtsnā)は無量淨より聞き、廣天(Vṛhat)は彼の遍淨天より聞き、廣天より少廣天(Prittavṛhat)に到り、少廣天より無量廣(Apramāṇavṛhat)に至り、無量廣より廣果天(Vṛhatphalā)に至り、廣果天より熱天(Tapā)に至り、熱天より無熱天(Atapā)に至り、無熱天より、無比天(Avṛha ?)に至り、無比天より善現天(Sudarśana)に至り、善現天より是の如く次第して、一刹那の頃に乃至阿迦尼吒(Akaniṣṭhā)、一切の諸天に到り、各各唱言すらく、『今日、菩薩、世間に生れて、天人の爲に大安樂を作し、黑暗盲冥の衆生の爲に大燈明と作る』と。

爾の時、一阿私陀仙(Asita)有り、三十三天の上に在りて安居す。彼の諸天の歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、或は衣裳を弄して聲を揚ぐること前の如きを見、見已りて卽ち彼の諸天に問うて言はく、『仁者大德よ、三十三天、今何を以ての故に、歡喜踊躍身中に遍滿して自ら勝ふる能はず、復、大に叫喚して手に衣冠を弄するか』と。是の語を說き已りて、三十三天彼の仙人阿私陀に報へて言はく、『阿私陀仙大德よ、聞かずや、今、人世間、閻浮提の地、北方雪山の下に當りて、釋種の城有り迦毘羅と名く。彼の城に王有り、名けて淨飯と爲す。彼の王の最大夫人、子を生む。極大端正にして喜ぶべく絕殊、身色黃金、頭は傘蓋の如く、鼻高くして圓直、兩臂下垂し、形體端嚴にして六根具足し、處處皆充つること鑄金の【一五】挺の如く、三十二大丈夫の相を具し、八十種の微妙の【一六】好を備ふ。大仙よ、彼の菩薩、決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、成じ已りて決定して無上の淸淨法輪を轉ぜん。而して彼の菩薩、能く一切の天、人、魔、梵、沙門、婆羅門等の諸世間の中に於て、自ら諸通を證し已りて、正法を闡揚せんに、其の法祕密にして、初、中、後ともに善く、義味深妙に、具足して淸淨の梵行を說かん。彼の說法の時、有ゆる一切の諸衆生等、聞法を

【一五】挺は梃に通ず。又鋌に作る。梃はてこにして、鋌はあらがねなり。
【一六】好。相は大なるもの、好は小なるものを指示す。

以ての故に、生法ある者は生法を斷絶し、老法を受くる者は其の老法を斷じ、病法を受くる者は病法を斷ずるを得、死法を受く者は死法を斷ずるを得、憂愁苦惱悉く斷除するを得て、其の根本を滅せん』と。阿私陀仙、彼の三十三天より聞き已りて、心に重信を生じ、即ち彼の天に於て身を隱し、來下して增長林に現ず。

[一七] 爾の時、復、說いて是の如く言ふ有り、『南天竺の地に一城有り、優禪耶尼(Ujjayanī)と名く。城を去る遠からずして、山を頻陀(Vindhya)と名く。其中間に於て更に一山有りて、阿私陀(Asita)と名く。是の時、仙人、彼の山に於て居る。彼の山を以ての故に、即ち仙人を稱して阿私陀と名く。其仙人、忉利天より下りて彼の山に在る時、阿私陀仙、一侍者の那羅陀(Nārada)と名くるを將て、彼の山中より隱身して此迦毘羅城に來り、城を去る遠からずして下りて立ち住り、是の思惟を作しぬ、『我昔、此の迦毘羅城に於て、衆の國師及び婆羅門の、淨飯王の菩薩子を生めりと云へるを聞きぬ。彼は是、天人及び我等の師、輕忽なるを得ず。若し我今、迦毘羅城に於て神通を現じて入らんは、此の理有る無し。何を以ての故に。迦毘羅城は往昔に同じからず。今日、若し往かば應に更に其の餘の異相を現ずべし。我應に彼を敬ひて尊神に事ふる如くすべし。我、寧ろ步行して彼の城内に入らん』と。時に、阿私陀及び其の侍者那羅陀、身ら徒步して共に迦毘羅城に入り、小巷の裏より竊に淨飯王の所に向はんと欲して、宮門の前に到る。時に迦毘羅は、人民稠鬧して、處處に遍滿し、間に空有ることなく、菩薩の爲の故に大莊嚴を作す。

時に諸の大衆、彼の仙人の步行して來りて迦毘羅に入り、復、小巷より淨飯王の宮門に趣向するを見、見已りて無量無邊の人民、雲雨のごとくに集りて仙人に隨逐し、心に驚愕を生じ、怪めども、何の義を以ての故に仙人の此に至るかを敢へて問はず。時に彼の大衆、城内の人民、或は自家の門前に在りて立ち、或は窻邊に在り、或は枸欄に倚り、或は臺頭に在り、或は屋上に在りて、彼の仙

【一七】以下、阿私陀が太子誕生を知りたるに就いての異說を擧ぐ。

人を觀、各相謂つて言はく、『往昔、此の仙、迦毘羅婆城に來入せし時、大神通に乘じ空に騰りて行きて、淨飯大王の宮中に到りしを、今日步行して來つて城に入れるは、我等、何の義を以ての故に步涉して來れるかを知らず』と。

時に阿私陀、淨飯王の宮門の前に至り已り、門に當る人に語つて是の如き言を作しぬ、『我婆羅門は、久來耆耄して猶祖父の如きに、今日の步行、翻つて年少二十の小兒に似、那羅陀童子と來る。其の那羅陀は年始めて八歲なり。汝、我が爲に淨飯王に白すべし』と。時に守門の者、仙人に語つて言はく、『尊者の敎の如く、我當に奉諮すべし』と。即ち宮門に入り、漸漸にして行きて王前に到り、具に以て王に白す。時に淨飯王、此の語を聞き已りて心大に敬仰し、歡喜無量なり。即ち座より起ち、彼の通事守門の人に語つて言はく、『汝、急疾に、仙人を引きて將て來れ、淹遲せしむる勿れ』と。時に守門の者、仙人の所に還りて是の言を作さく、『大仙、時を知れ、宜しく速かに宮に入るべし』と。時に阿私陀彼の語を聞き已るや、即ち侍者那羅陀と共に淨飯王の宮に入る。時に淨飯王、遙かに殿に在りて、阿私陀仙の漸漸にして行き、將に王の所に至らんとするを見、是の時大王、即ち座より起つて仙人の所に詣り、承事迎接して其の腋を扶持し、好最勝最妙第一の希有の寶座を將つて、安置して坐せしめ、坐し已るや禮拜して口に是の言を唱ふらく、『我今恭敬して尊者を禮拜す』と。是の時仙人、口づから即ち淨飯王を呪願して言はく、『唯願はくは、大王よ、常に安樂を得んことを』と。時に淨飯王、仙人に白して言はく、『尊者よ、何を求むるが故に、屈して此に到れる、衣を須つが爲なりや、食を須つが爲なりや、復、其の餘の諸事を求め須つが爲なりや。須つ者は但道へ、我悉く備具して必ず與へて違はざらん』と。時に阿私陀、王に諮白して言はく、『大王よ、當に知るべし。今我が來れるは乏少する所無し。衣食を求めず、一切の諸事、悉く須たざる所。然るに、我今故らに遠くより來れるは、大王の最勝の童子に見えんと欲してなり。大王

の慈恩、願はくは當に我に善勝の童子を示すべし』と。是の時、童子寶座に在りて、睡臥眠寢す。淨飯王、阿私陀に語つて言はく、『尊者大仙よ、少時心を留めよ、童子、今眠りて猶未だ覺悟せず、願はくは、須臾を待て』と。時に阿私陀、卽ち王に白して言はく、『大王、是の如き語を說きて、童子を睡ると稱ふなかれ。何を以ての故に。我等は寤むと雖も、猶睡人の如し。大王の童子は、久來斷除して復眠睡無く、晝夜恒に諸の衆生等の安樂を得んが爲の故に、大利益の故に、而も禪定に入るなり』と。

時に淨飯王、童子の眠、寤むる時の至らんとするを知り、卽ち宮內に入りて勅して宮舍殿堂を莊嚴せしめ、淨水を地に灑ぎ、糞穢を掃除し、香水を重ね灑ぎ、花を其の上に散じ、在在處處　香鑪を安置し、雜　の妙香を燒き、復、種種の繒綵の幡蓋を懸け、諸の旒蘇を垂れ、大寶幢を竪て、復、無量の眞珠の瓔珞、眞珠の羅網、種種の寶鈴を懸けて其上に垂覆し、衆くの雜寶を懸くること猶日月星宿の光の如し。復、種種の妙寶の衣裳を掛くること、喩へば飛天の、手に花瓔を持つが如し。復、雜色、朱紫紅黃の種種の(一八)衆毦を懸く、諸の是の如き等の校飾精麗にして、宮中を莊嚴すること乾闥城(Gandharva-nagara)の如くして、一種も異るなし。復釋種內外の眷屬、最大最勝の威德尊者を召して來つて宮に入らしめ、摩耶夫人と共に一處ならしむ。是の時摩耶、童子の所に詣り、至り已りて手を持つて童子の頭を抱き、仙人に向はしめて仙人の足を禮拜する如くに擬す。是の時童子、威德力の故に其の身自ら轉じて、足、仙人に向ふ。時に淨飯王、更に復共に扶けて童子の頭を迴らし、仙人を拜せしむるに、童子の力の故に、足還、自らに轉じて彼の仙人に向ふ。時に淨飯王、復、童子の頭を迴らして仙人に向はすに、還復足を轉ず。是の如くして三たびに至りぬ。其の阿私陀、遙かに童子を見るに、是の時童子、常光明を放ちて大地を照燭す。童子の威德、端正喜ぶべく、色は純黃金にして頭は寶蓋の如く、鼻直くして圓かに、脩き臂下垂し、支節正等にして缺く

【一八】毦、毛飾也(可洪音義)、罽也、織毛曰罽(慧琳音義)

る無く滅ずる無く、具足して莊嚴す。

時に阿私陀、即ち座より起ちて王に白して言はく、『大王よ、童子の聖頭を將つて、我に廻らし向はす莫れ、何を以ての故に、彼の頭は、我が足を頂禮す合からず。我が頭、應當に彼の足を頂禮すべし』と。復是の言を唱ふらく、『希有なり、希有なり、大人の出世や。最大の希有なり、大人の出世や。我本天より聞く所の者、即ち此童子、眞實なり。定んで是、彼の如くにして異ならず』と。時に阿私陀、衣服を整理して右肩を偏袒ぎ、右膝を地に著けて其兩手を伸し、童子を抱持して其の頂上に安じ、復本座に還る。本座に坐し已りて還童子を下して膝上に置く。是の時、摩耶國大夫人、即ち大仙阿私陀に白して言はく、『仁者尊師よ、當に童子をして大仙の足を禮せしむべし』と。阿私陀仙、夫人に報へて言はく、『國大夫人よ、是の語を作す莫れ、今、是の童子は、應に我を禮すべからず、我及び一切の諸天世人は、應當に足に接して童子を禮拜すべし』と。

時に淨飯王、即ち種種雜妙の珍寶を持て以用て、阿私陀仙に 一九嚫施す。時に、阿私陀、自らの澡罐を持し、水を以て手を洗つて此の施物を受け、受け已りて即ち持して童子に廻らし奉る。時に淨飯王、阿私陀大仙人に白して言はく、『尊者大仙よ、我、此の物を以て尊者に施しぬ、唯願はくは納受せよ』。仙人報へて言はく、『大王、我に施せり、我今、最勝の童子に迴施す』。淨飯王言はく、『我、大仙の 二〇福田勝るを知るが故に、大師を供養せり』。阿私陀仙、復王に報へて言はく、『我今、是の勝因緣を見るが故に、童子に迴施す』。淨飯王言はく、『大聖尊仙、我今、尊師の此の意を解せず』。仙人復言はく、『大王よ、當に知るべし、我今、身心深く自ら此の童子に歸伏す』。淨飯王言はく、『何の因、何の緣ぞや、願はくは爲に解釋せよ』と。時に阿私陀、即ち王に報へて言はく、『大王よ、諦心に善く是の義を聽かれよ。我、當に王の爲に其の本末を說くべし。大王よ、當に知るべし。我昔忉利天の上に在りて、安居行道しき。忽ちにして忉利の一切の諸天の、歡喜踊躍其身に充遍して、自

【一九】嚫は噠嚫(Dakṣiṇa)。即ち布施の略。

【二〇】福田。供養によつて將來の福德の果を收むべき歸依處を、收獲ある田に喩へていふ。

ら勝ふる能はず、衣冠を舞弄して跳擲悦豫せるを見る。我時に彼に於て、卽便ち問ひて言はく、『諸天仁者よ、何の因、何の緣もて、歡喜騰躍して自ら勝ふる能はず、衣冠を執持して舞弄、[二]躑躅するか』と。是の語を作し已るや、忉利の諸天卽ち我に答へて言はく、『大德仙人よ、汝、今知るや不や。下世間、北方地內、雪山の下に於て釋種の城有り、迦毘羅と名く。彼の城に王有り、名けて淨飯と爲す。彼の王の最大第一夫人一童子を產めり。端正にして喜ぶ可く、人の樂み見る所なり。身は黃金色にて、頭圓く鼻直く足滿ち臂長くして、猶金像の如く、三十二大人の相、八十種の好を備具す。必定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、當に無上の淸淨法輪を轉ずべし。今此の童子、相貌具足す。決んで是れ疑無し。今此の童子、自らの神力を以て能く此の世及び過去未來世等を知り、天、人、魔、梵、沙門、婆羅門等の一切の世間を、自ら證知し已りて法相を分別し、乃至、種種の苦惱を略說して、解脫すべき者に解脫を得しむ』と。大王よ、我彼の時に於て是の語を聞き已るが故に、來つて此に至りて童子を觀看るなり』と。

時に淨飯王仙人に報へて言はく、『若し是の如くんば、大に我を憐愍し大に我を饒益して、[三]復憂愁無からん。更に何の法有つてか、四種行を過ぎ、四行過ぎ已りて能勝能最たらん。今此の童子は、旣に人の生む所、能く未來に於て無上道を得んや』と。阿私陀仙、復王に白して言はく、『大王よ、當に知るべし、彼等一切の諸婆羅門は、在在處處に云何んが勝を得て證知するか』と。時に淨飯王復更に仙人に諮白して言はく、『我今、大仙の前に在り、願はくは爲に解說して、我をして樂み聞かしめよ』と。時に[三]阿私陀答へて言はく、『大王よ、我が婆羅門家に相傳する如くんば、四毘陀經に說かく、往昔、一婆羅門有り、名けて羖羊と曰ふ。復婆羅門有り、拔迦利(Bhakkhali)と名く。復婆羅門有り、拔伽婆(Bhārgava)と名く。復婆羅門有り、末檀地と名く。復婆羅門あり、迦吒囉唎と名く。復婆羅門有り、般遮尸棄(Pañcasikhi)と名く。彼等皆阿修羅王の算計の法を得、勝を得、

【二】躑躅。行いて進まず、卽ち足を駐めて進まざるをいふ。

【三】無復憂愁。三本による、麗本には無覆憂愁に作れり。

【三】諸王仙のこと、佛所行讚を參照。

上を得たり。復仙人有り、阿帝利耶(Ātreya)と名く。復一王有り、鉢囉摩檀那と名く。復一王有り、闍那迦(Janaka)と名く。是等の諸人は皆身苦を除滅する方便を得たり。大王よ、當に知るべし。是の如く是の如し。今此の童子は人間に生ると雖も、人に過ぎて勝人の法を得たり。大王よ、復一王有り、娑伽羅(Sagara ?)と名く。大海奔濤して波浪山の如く、甚だ渡るを得難きを、祖にあらず、父にあらず、彼の身能く渡れり。大王よ、諸の是の如き等は、人間に生ると雖も大威德有り、威德を以ての故に諸の天人に過ぎたり』と。

時に淨飯王、仙人に答へて言はく、『若し尊師の宣說する所の如くんば、我疑有ること無し。但、我れ子を愛して其の心狹劣なるが故に驚恐を生ず』と。阿私陀仙、復王に語つて言はく、『大王の有ゆる心の狐疑なるものを、今諸問して悉く爲に之を決すべし』と。時に淨飯王、白して言はく、『大師よ、我實に疑を懷く。彼の往昔に有りし如き、調浮王、多羅求王、知離婆王、達離波王の諸是の如き等は、曾て見るを得ず、曾つて知るを得ず。我が此童子、云何ぞ、此事を知る得、見るを得ん。願はくは因緣を說け』と。時に阿私陀、復王に報へて言はく、『大王よ、我も亦王に是の疑惑有るを知りて。言の無きを得ず。何を以ての故に。大王よ、但、他の說く所の事を聞きて、意を以て消息籌量して之を取り、用て自ら疑を決せよ。凡そ前後の所作たる、諸王には未だ必ずしも一向に證驗有らず。大王よ、彼等諸王子及び父祖は、勝劣同じからず。是の故に大王よ、種姓のみ獨り其の勝を取るべからず。家を以てのみ、獨り其の勝を取るべからず。先生を以ての故に勝り、後は如かずと爲す可からず。或は後出して先生に勝るあり。大王よ、譬へば天曉の時先づ[二四]明相を現はして、然る後に日を出す如し。其の明相を論ずれば、未だ照明する能はず、其の日後に出でて、普ねく大地を光らし一切の闇を破りて遺餘有ることなし。大王よ、世間は是の如く是の如し、或時は生子、父に勝り祖に勝る』と時に淨飯王、仙人に白して言はく、『大德尊師よ、善く譬喩を以て事を證明

【二四】明相。明星のこと。こゝは、前に明星現はれ、後に日出づ、明星前にあれども、日の光に及ばずの喩を以て、後出の先生に勝るに比せるなり。

し、我を慰解して疑を決し、心の大安穩を得しむ、大仙尊師よ、善く我を攝受したまへ』と。時に阿私陀、復王に白して言はく、『大王よ、當に知るべし。我が齒、衰邁して餘殘幾くも無し。今、此の童子は、幼稚の少年、春秋方に盛に、長大成就して、當に山林に向つて出家學道すべし。恨むらくは我朽耄して、慈眼を覩ざるを』と。時に淨飯王、仙人に白して言く、『大仙尊師よ、今是の童子、決んで出家するや』と。阿私陀仙、王に報へて言はく、『大王よ、今は疑慮すべからず』と。時に淨飯王、迴頭顧視して國師の面を看ぬ。時に阿私陀、王に問うて言はく、『大王よ、內心に何の語をか作さんと欲する』。淨飯王言はく、『大德尊仙よ、此の我が國師婆羅門等曾て我に語つて言はく、「今此の童子、必定して轉輪聖王と作るを得べし」と』。阿私陀仙、復王に白して言はく、『大王よ、我が意の如くんば終に虛妄ならず、我が今語る所は、誠實至眞なり』と。時に淨飯王、是の語を聞き已りて復更に白して言はく、『大仙尊師よ、若し審に然らば、乃ち我が心をして更に大に憂愁して、我が心を切割し、肝腸惱沸せしむ』と。時に阿私陀、復王に報へて言はく、『大王の智慧、是の言を作す勿れ、大王よ、往昔、高曾、祖父、[二五]福業を行ぜる功德の緣を以ての故に、衆生を度して彼岸に到るを得たり。是の如き匠導、託して王の兒と作るは、但、獨り人民を治化して安樂を得しめんが爲のみにして、王子と爲るにあらざるなり』と。時に淨飯王、復仙に白して言はく、『大師よ、我が意も亦然り、思惟するに是の如し。今此の童子、我が王世を種ゑ、重擔を荷負して我が憂ふる所に代らば、我老年に到りて出家入山し當に古道を修すべし』と。

時に淨飯王、復仙に白して言はく、『大師よ、我が意は我が子をして常に在らしめんと欲す。云何の方便もて、今の幼年に及んで我を捨てしむる勿き』と。阿私陀仙、復王に白して言はく、『大王よ、我實に是の方便、[二六]障礙を作さしむるを專正に決定して說く能はず』と。時に淨飯王、復仙人に語つて是の如き言を作す、『大師よ、善く聽け。我今當に種種の方便を作し、方便を設け已りて、我が子を

【二五】福業。福德の事業、例せば沙門婆羅門を供養し、貧民に布施するが如きをいふ。

【二六】障礙とは、出家をさふるなり。卽ち出家せしめざる方便を、判然と說く能はずといふなり。

して今の幼稚より盛年に到り及びて、暫くも離るるを聽さず、我を捨てて出家せしめざるべし」と。時阿私陀仙、卽ち王に問うて言はく、『大王よ、今何事に因つての故に、是の如きの語を說くか』と。時に淨飯王、彼の仙人阿私陀に報へて言はく、『尊師よ、當に知るべし、我が國内の有ゆる相師、婆羅門等の如き、皆我に語つて言はく、「若し此の童子在家せば、當に轉輪聖王と作るべし」と。是の因緣を以て、我是の如くに語る』と。阿私陀仙、復王に白して言はく、『大王よ、當に知るべし。彼等相師、皆大に妄語せり。何を以ての故に。是の如き勝相は、是轉輪聖王の相に非ず。今此童子は百の善相、八十の隨形有り、挺特殊好、分明炳著にして、皆悉く具足す』と。

時に淨飯王、仙人に問ひて言はく、『大師よ、何等か是、此童子の〔二七〕八十〔二八〕隨形の好なる』と。時に阿私陀、具さに王に白して言はく、『大王よ、當に知るべし。今此の童子(1)兩手の掌内に金剛の文あり。(2)大王よ、今此の童子の諸指の爪甲、薄くして且つ輭なり。(3)大王よ、今是の童子の諸指の爪甲、其の色赤紅にして猶〔二九〕銅鍱の如し。(4)大王よ、今是の童子の諸指の爪甲、悉く皆潤澤なり。(5)大王よ、今是の童子の諸の指は妙色なり。(6)大王よ、今是の諸の指皆〔三〇〕臁し。(7)大王よ、今是の童子の踝骨現はれず。(8)大王よ、今是の童子の兩膝團圓にして大光液あり。(9)大王よ。今是の童子の進止雍容安詳として徐步す。(10)大王よ、是の童子の行くや師子王の如し。(11)大王よ、是の童子の行くや猶牛王の如し。(12)大王よ是の童子の行くや猶鵞王の如し。(13)大王よ、是の童子の行くや、安詳として徐步すること猶〔三一〕耳璫の如し。(14)大王よ是の童子の行くや、安庠として住まるが如し。(15)大王よ、是の童子の身は形體〔三二〕挺直なり。(16)大王よ是の童子の身は形體柔輭なり。(17)大王よ、是の童子の身は形體滑澤なり。(18)大王よ、是の童子の身は膚體上充す。(19)大王よ、是の童子の身は妙なる薰香を出す。(20)大王よ、是の童子の身は膚體無上なり。(21)大王よ、是の童子の身は膚體整肅なり。(22)大王よ、是の童子の身は支節分解して各自分明なり。(23)大王

【二七】以下八十種のこと、Lalit. にその梵文出づ。
【二八】隨形好。三十、相は主にして、八十種好は之に伴隨するものなれば、隨形好といふ。兩者を合して相好といひ、具備せる容姿を形狀せるなり。
【二九】鍱はいたがねなり。
【三〇】臁はひとし又直しの意。
【三一】耳璫は耳を貫く飾。
【三二】挺は特にぬき出るなり。

よ、是の童子の身は膚體顯現して大梵王の如し、(24)大王よ、是の童子の身は膚體戾ること無し。(25)大王よ、是の童子の身は膚體淸淨にして[三三]黑黯有るなし。(26)大王よ、是の童子の身は諸病有る無し。(27)大王よ、是の童子の身は圓滿正等なり。(28)大王よ、是の童子の身は七處齊滿なり。(29)大王よ、是の童子の身は諸好を具足す。(30)大王よ、是の童子の身は遍體端正なり。(31)大王よ、是の童子の身は行く處淳淨なり。(32)大王よ、是の童子の身は最勝無垢にして諸毛淸淨なり。(33)大王よ是の童子の身は垢障有る無く能く淨光を出す。(34)大王よ、是の童子の身は常に一尋を光らす。(35)大王よ、是の童子の腰は猶[三四]弓弝の如し。(36)大王よ、是の童子の腹は破壞有るなし。(37)大王よ、是の童子の[三五]齎は深隱妙好なり。(38)大王よ是の童子の齎は團圓にして散せず。(39)大王よ、是の童子の齎は猶車輪の如し。(40)大王よ、是の童子の齎は分明にして右旋す。(41)大王よ、是の童子の手は麁ならず澁ならず。(42)大王よ、是の童子の手は兜羅綿の如し。(43)大王よ、是の童子の手は掌心の中の文理畫深なり。(44)大王よ、是の童子の手は文理[三六]册畫して柔軟の光澤あり。(45)大王よ、是の童子の手文は破散せず。(46)大王よ、是の童子の手は有らゆる册文分明に次第す。(47)大王よ、是の童子の兩腕は闊大なり。(48)大王よ、是の童子の頭は猶踝骨の如し。(49)大王よ、是の童子の口脣の色は猶[三七]頻婆羅(bhimba)果の如し。(50)大王よ、是の童子の面は顏貌寂淨なり。(51)大王よ、是の童子の舌は、薄くして且長く、赤銅色の如し。(52)大王よ。是の童子の聲は深くして淸亮なり。

【三三】黯。くろし。或は皯に作る。皯は病の爲に黑氣あるをいふ。

【三四】弝。弓を手に執る處、ゆづか。或は把に作るべし。

【三五】齎は臍に同じ。

【三六】册。簡册にして手文の象が之に似たるをいふ。

【三七】頻婆羅果(Bimba-phala)。林檎に似て、其色鮮明の赤なり、以て婦人の脣色に喩ふ。

卷の第十

相師占看品第八の下

(53)『大王よ、是の童子の音は、言語哀美、清揚にして遠く震ふ。(54)大王よ、是の童子の口は四牙廣大なり。(55)大王よ、是の童子の牙は悉く皆鋒利なり。(56)大王よ、是の童子の牙は缺けず破れず。(57)大王よ、是の童子の鼻は端立圓直にして鸚鵡鳥の如し。(58)大王よ、是の童子の眉は齊平にして密なり。(59)大王よ、是の童子の耳は穿環して垂埵す。(60)大王よ、是の童子の耳は乖かず戻らず。(61)大王よ、是の童子の耳は麁ならず澀ならず。(62)大王よ、是の童子の眼は缺減有る無し。(63)大王よ、是の童子の眼は傷損有るなし。(64)大王よ、是の童子の身は諸根寂定なり。(65)大王よ、是の童子の面額は最勝上なり。(66)大王よ、是の童子の髮は純紺青色なり。(67)大王よ、是の童子の頭髮は色潤澤なり。(68)大王よ、是の童子の髮は麁ならず澀ならず。(69)大王よ、是の童子の髮は稠ならざるも厚し。(70)大王よ、是の童子の髮は齊くして細密なり。(71)大王よ、是の童子の髮は缺けず破れず。(72)大王よ、是の童子の髮は拳卷して旋る。(73)大王よ、是の童子の髮は圓くして右旋し、狀、万(卍)字の如し。(74)大王よ、是の童子の頭は、其の上の肉髻猶山頂の如し。(75)大王よ、是の童子の頭は顱額堅鞕なり。(76)大王よ、是の童子の頂は、若しは人も非人も破壞すべからず。(77)大王よ、是の童子の頂は、巍巍として甚だ高く、人の能く見るもの無し。(本に三好を闕く)。大王よ、若し一人有りて身體に三十二大丈夫の相を具足し、復、是の如き八十種好あらんか、彼の人、一向に決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、菩提を得已りて無上最妙の法輪を轉ぜん』と。

　爾の時、韋者阿私陀仙、王の爲に說き已りて、是の思惟を作しぬ、『今此の童子、幾時出家して佛道を成ずるを得、最上勝妙の法輪を轉ぜん』と。彼、是の如く思惟を作せる時、自心に智を生じて

【一】卍字(Svastika)。吉祥萬德の相とせらる。
【二】顱はひたひ。鞕はかたし。

卽ち能く知見す。今より已去〔三〕三十五年、此の童子、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、無上最勝の法輪を轉ぜんと。時に彼の仙人、此に因りて繫念思惟する時、復自ら已に〔四〕諸根の純熟せるを見、覆つて自ら呵責して是の如く歎き言ひぬ、『嗚呼、嗚呼、我今是の如き童子の法敎の外に在りて、此の時に値はず』と。

是の如く觀じ已りて悲號啼哭し、歔欷哽咽して涙流れて面に滿つ。時に淨飯王、阿私陀仙人の是の如く啼哭し懊惱して自ら勝ふる能はざるを見、王も亦悲哀して聲を失して哭す。摩耶夫人、旣に是を見已りて亦復涙を流して哽塞嗚咽す。彼の諸釋種の大臣眷屬、皆各號咷し、聲を失して叫吼し、宮内の大小、亦悉く悲啼して流涕雨の如し。時に淨飯王、涕涙交も橫はり、潸然として面に滿ちて、阿私陀大仙人に白して言はく、『大德尊師よ、此の童子、初めて生れんとせる時、卽ち五百の釋種童子有り、日を同じうして生れぬ。略說せんに、乃至、五百の童女、日を同じうして生れ、五百の奴僕、五百の婢媵、五百の馬駒、五百の白象の皆悉く六牙あるもの、一時に日を同じうして宮門の外に集り、五百の伏藏自然に湧出し、五百の園林は迦毘羅城の四面に在りて自然に現はれ、五百の商主は諸方より迦毘羅城に來りて、五百の傘蓋、五百の金瓶あり、外方の諸王は、隣境の珠珍を悉く來つて我に送り、復我を跪拜せり。復、一萬の天の諸童女有りて竝びに長者及び婆羅門、刹利の家に在りて生れぬ。大仙尊師よ、童子生るるの日、我が一切の利は、皆悉く成ずるを得、我が心の願は皆滿ちて具足せり。我、國内の善く相を解する諸婆羅門等の吉凶を明むる者を喚びて悉皆召集せしに、彼等是の童子の形容を見て、皆大に歡喜し、踊躍充遍して自ら勝ふる能はざりき。唯、獨り尊師のみ、今童子を見て何故に悲啼し、何故に流涙して、我等眷屬をして狐疑せしむるか。大師よ、我が爲に此の由を辯說せよ。我が童子に、災禍、不祥の事有りと爲すや。そは又自身の〔五〕祟と爲すや、外より來ると爲すや』と。

【三】三十五年。二十九出家、三十五成道の傳によれるなり。本邦在來は、十九出家三十成道の傳を普通とせしが、原始佛敎の研究以來、三十五成道說行はる。

【四】諸根純熟。肉體組織の成熟しきりて凋落に近づけること、卽ち死期近づけること。

【五】祟。鬼神の災禍をいふ。

時に阿私陀、淨飯王の涕涙臉に交はり愁憂悵快たるを見て、王に白して言はく、『大王よ、今は愁ふる勿れ憂ふる勿れ。所以は何ん。我今是れ、童子に災有り變有るを見るに非ず。亦諸餘の苦惱あるを見ず。身の内及び外の不祥を見ず。大王よ、當に知るべし。今、此の童子は長壽、魏魏として大威德有り、端正にして喜ぶ可し。黄白の金容、頂は傘蓋の如く、鼻は截筒の如し。身體洪滿し支節自ら稱ひて、猶金像の如く、身に三十二の丈夫の相有り。大王よ、此童子は兼ねて八十の微妙なる種好有り。大王よ、是の如きの諸相は是轉輪聖王の種に非ず。大王よ、是の如きの相は、皆是諸佛菩薩の相なり。大王よ、是の故に我、童子が決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、無上清淨の法輪を轉じて、彼の諸天、世間人等の爲に說法し、一切の衆生を安樂ならしむるを見る。而して彼の法寶や、初、中、後ともに善く、乃至、清淨の梵行を說かん。若し是の邊に於て法を聽受し已らんか、應に生るべき衆生は卽ち生法を斷じ、應に老ゆべき衆生は卽ち老法を斷じ、應に病むべきは病を斷じ、應に死すべきは死を斷じ、憂悲苦惱の一切の衆生は皆解脫を蒙らん。大王よ、我今、自ら年耆い根熟して衰朽老邁し、爾の時に當つて覩見するを得ずして此の大利を失ふを恨む。是の故に我今、悲惋して自ら傷むのみ。彼の不吉に非ず』と。卽ち、大王の爲に偈を說いて言はく、

『自ら恨む我に大顚倒有りながら　此の得道すべき時に値はざるを
空しく一生を過ぎて聞く所無き　豈是れ我の大利を失ふに非ずや
我今年老い根純熟し　死時將に至らんとす復奢らじ
此の生分に遭逢を得るを念じて　所以に一は喜び一は憂懼す
大王釋種方に興盛にして　此の童子福德の人を誕めり
一切の諸苦に逼らるる世間に　此悉く能く安樂を得しめん』

『大王よ、無量無邊の諸の衆生等、貪、恚、癡の諸火の爲に惱まん時、此、當に能く滅して能く微

【六】惋。驚嘆の貌。

妙甘露の法水を與ふべし。無量無邊の諸の惡衆生が、已に邪見の曠野澤中に入りて正道を見ず迷惑するの時、此、當に能く淳直の涅槃、平坦の好道を與ふべし。無量無邊の諸の苦しめる衆生が、煩惱牢獄の中に閉在するを、此當に能く一切の業縛を解くべし。無量無邊の愚瞑の衆生の、長夜の昏闇に覆翳せらるる重盲を、此當に爲に大智慧眼を生ずべし。無量無邊の染著の衆生の、煩惱の毒箭に射らるるを以て、此當に拔濟して其の苦を免れしむべし。我今、年垂れ身心退敗して、彼の時に此の法を見ざるを慨き恨む。是を以て啼泣するなり。大王よ、優曇華の無量無邊億千萬年に、時に一たび出現するが如く、諸佛も是の如し。無量無邊千萬億劫に、出世や甚だ難し。大王よ、今此の童子は、決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、決定して無上法輪を轉ぜん。我自ら此の時に値はず、今當に彼に背くべきを傷み過む。是故に悲泣す。大王よ、彼等衆生は大に財利を得、大に福業を得ん。若し能く、此の大聖童子の、彼の地方の菩提樹下(Bodhimūla)に在り、坐して[七]四魔を降すを見、能く覩るを得ば、彼等衆生は大に善利を得、大に度脫を得ん。大王よ、若し能く此の大聖童子の、菩提を得已りて漸漸に波羅痆(Bārāṇaśī)國に至り、當に無上最妙の法輪を轉ずるを見ば、一切衆生は大に勝果を獲ん。大王よ、此の童子は莊嚴清淨なり。是の閻浮提の諸聖沙門を、皆悉く教令して阿羅漢を得しめ、其の弟子と作さん。是の故に我は啼く。大王よ、彼等衆生は善く人身を得、善く此の世に來りて、大に財利を得、大に福業を種ゑん。又復童子の三十二天の諸天に圍遶せられ、七寶の梯に乘りて彼處に下るを見て、無量無邊の衆生は禮拜せん。大王よ、王も今亦善く、此の人身を得て、大に財利及以び法利を得たり。若し王、自らの子の得道して天人中に於て是の妙法を說くを見て、證を得ること疑無かるべし』と。

阿私陀問瑞品第九

【七】四魔。生老病死の四、よく人の心を亂すが故に四魔といふ。

時に淨飯王、彼の仙人阿私陀の邊より此の語を聞き已るや、大歡喜を生じ、卽ち座より起ちて衣服を整理し、右膝を地に著けて十指の掌を合し、仙人に向つて歡喜常に倍し未曾有なるを得て、遍身に毛竪ち、其の足を頂禮して却いて一面に住まり、二十具の上妙の衣裳を將つて仙人に布施す。時に阿私陀、施す所の衣の二十具中に於て、唯一具の已が用に稱へる者のみを受けんとて爲に之を受け、一具を受け已るや自餘の諸衣は還持して淨飯王に迴施し、是の言を作す、『大王よ、當に知るべし、我は出家人婆羅門種にして多くの威德無ければ、少欲にして求むる無く應に須く足るを知るべし。大王は國主として賜賚の處寬かなり、財物には限有り、當に任意に用ふること自他已に然るべし。大王よ、童子の母胎に在るや、希有の事、理應に無邊なるべし。生育已前の有ゆる瑞相を唯願はくは大王よ、我が爲に盡く說きたまへ。我聞くを得已らば、是大布施なり。我をして歡喜し、踊躍充遍して自ら勝ふる能はざらしめむ。此は則ち是、我が大に財寶を得たるなり』と。時に淨飯王、仙人に白して言はく、『聖師よ、諦かに聽け、專心に諦かに受けよ。我、聖師の爲に次第して說かん。童子の胎に在るや、希奇の事、未曾有の法あり、及び童子の生るるや、有ゆる異相あり、我悉く之を說かん。大仙尊師よ、我念ずるに、一時童子の母、樓上に在りて妙なる牀敷に臥せしに、睡眠の中に安庠として覺め起きて我れに語つて言はく、「大王よ、我が夢に見し所の事を聽け、今、王に向つて說かん。我、昨夜に於て、夢に一白象の六牙なるあるを見る。身鮮かに頭赤く、七支もて地を拄へて形體端嚴なり。然して、其の六牙は皆是れ金裝、虛空を飛行して北方より來つて我が右脇に入り、入り已るや我が身卽ち快樂を受けぬ。快樂の希有なること、世間中に於て物の喩ふ可き無く、耳にだも曾て聞かず、又快樂の來るや、世間の事に於て我が心樂しまず、又更に、大王と共に一處に樂を受くるを願はず。一切の五欲は、皆悉く捨てんを願ふ」と。

大仙尊師よ、我彼の時に於て、卽ち廣く、諸の婆羅門の能く占相し、善く先典を諳んじ、經に依

り書に據りて變出を敎ふるあるを召喚し、卽ち之に語つて言はく、「我が大夫人、夜に夢見する所、事相前の如し、果報の云何んを、我が爲に解說せよ」と。是の時、一切の諸婆羅門、卽ち先書、諸聖の說く所に依り、此の夢相を占して我に白して言はく、「大王よ、今特意歡喜すべし。是の夢大に善し、大に吉祥有り。此大夫人は、必ずや童子の、世間中に於て大に名聞を得、天下の最尊、一雙[一]匹有ること無きを生まん」と。時に我、是の諸の婆羅門の是の如く語るを聞き已りて、大美食を設け、好き財寶を持し、彼等に布施して之を發遣せり。我、彼の時に於て、此の城內に在りて、有らゆる街陌、四衢の道頭、或は復坊巷の處あるに隨つて大無遮會を立て、有らゆる財寶を皆悉く布施し、食を須むるには食を與へ、乃至、資生、五行、調度、皆滿足せしめ、此の功德を童子に迴施して、其の身を莊嚴せんを願ひぬ。

復次に大師よ、童子の胎に在るや、四天王有り、來りて我が家に至り、四方に在つて各童子の母を嚴に守護せり。復次に大師よ、童子の胎に在るや、童子の母大快樂を受け、身體[二]敷愉にして疲るるなく惓むなかりき。復次に大師よ、童子の胎に在るや、母常に戒を持し、諸根調伏して瞋恨有ること無かりき。復次に大師よ、童子の胎に在るや、童子の母に欲心有るなく、亦曾て欲心の爲に惱まされず、身口に唯清淨の梵行を行じき。

復次に大師よ、童子の胎に在るや、童子の母、寒熱を患へず、飢渴に苦しまざりき。復次に大師よ、童子の胎に在るや、其の母、有らゆる錢財、珍奇の寶物の、人の須むる所の者は、意の恣まに之に與へ、心に歡喜を生じて、慳悋を生ぜざらんを庶幾へり。復次に大師よ、童子の胎に在るや、其の母恒に慈悲を行じて一切の命を憐愍せり。復次に大師よ、童子の胎に在るや、童子の母、端正にして喜ぶ可く、世に雙有る無く、先時の光澤倍更に增進して、轉前に勝れき。復次に大師よ、童子の胎に在るや、其の母、童子を觀んと欲するの時、卽ち童子の胎內に在るを見るに、身體洪滿

【一】三本による、麗本は雙正に作る。

【二】敷愉。和悅して色の美はしきをいふ。

し諸根完具して喜ぶ可きの端正、猶淨鏡もて其の面像を見るが如し。母、此を見已りて大いに歡喜を生じ、踊躍身に遍くして自ら勝ふる能はざりき。

復次に大師よ、童子の胎に在るや、諸の有病の人、來つて童子の母の所に到らんと欲すれば、其の童子の母、手を以て摩觸し、或は草葉を以てし、或は樹葉を持ちて彼の邊に送るに、彼等衆生皆安樂を得、身體に患ひなく諸の苦惱なかりき。大師よ、童子の胎に在るや、是の如き等の無量種種の希奇の事、未曾有の法有りき。

復次に大師よ、時に童子の母、摩耶夫人の父、善覺釋、使を遣はして我に語るらく「大王よ、時を知れ、我が女、懷孕せり。此の勝衆生、威德甚大なり。若し彼出でなば、我が女久しからずして必ず命終を取らん。我が意、今自らの女を喚び來り、我が園、嵐毘尼の中に向つて、我と共に相娛みて快樂を受けんと欲す。亦、是の處に吉祥を保するを得んを願ふ。唯願はくは、大王善く好く發遣せよ」と。我彼の使の是の如く語るを聞已りて、卽時に宣告して駕を嚴にし、摩耶夫人を發遣して、乃至、此の迦毘羅城より彼の天臂に到り、兩城の中間は、一切の荊棘、砂礫、種種の糞穢を耘除して皆清淨ならしめ、香湯を地に灑ぎ諸の妙花を持して其の上に散じ童子の母を餝り、諸の妙香諸種の花鬘を以て其の身を莊嚴し、諸の音樂を作し、王の勢力を持し、王の威神を持し、及び其の宮內の一切の婇女前後に圍遶し、大白象に乘つて善覺の天臂城中に歸向せり。其の童子の母摩耶夫人、遙かに迎へられ來りて、卽ち種種無量無邊の莊嚴の具を持し、相隨ひて共に嵐毘尼園に入りて逍遙娛樂せり。時に、童子の母摩耶夫人、白象より下り、宮內の婇女左右に圍遶し前後に侍衞し、安庠として進んで嵐毘尼園に入り、林樹を觀視して此の樹下よりし、是の如く次第して波羅叉樹の下に到りし時、右手を伸擧して彼の樹枝を攀ぢ、安庠として息へり。是の時童子、其の母摩耶夫人の手に枝を攀づるを見已り、彼の胎中より一心正念に、安庠として徐に起ちて右脇より出づ

るに、其の母の右脇、亦疼痛無く、亦患難無く、勞げず、裂けず。是の時童子、右脇より生るる時、身より大光を放つて世間を照曜せり。大師よ、是を童子の母の胎内に在り、初生の時是の如き等の希奇の事、未曾有の法有りと名く。

復次に大師よ、童子の胎に在るや、憂へず愁へず、其の胎内より安庠として徐に起つに、身體鮮淨にして種種の涕唾、痰癊、屎尿、淤血の穢汙する所と爲らざりき。復次に大師よ、童子の初めて胎内より出でし時、一切の諸天、迦尸迦を以て其の身を纒裹し、懷抱執持して將て母前に向ひ、母に語つて言はく「大徳夫人よ、今應に歡喜すべし、夫人今日、聖子、天人中の尊を生めり」と。復次に大師よ、童子の初めて生るるや、人の扶持するなくて地に住り立ち、四面各七歩を行くに、凡そ履まるゝ處皆蓮華を生ず。四方を顧視して目曾て瞬かず、畏れず驚かずして東面に住り、孩童の呱然として啼叫するに似ず、言音周正に巧妙の辭章もて、是の言を說けり「一切世間に唯我のみ獨り尊し、唯我のみ最も勝れたり、我今當に生老死の根を斷つべし」と。復次に大師よ、童子の生るる時、即ち是の處に於て忽ち二池有り、一は暖かにして一は冷かなり。童子の母が、恣意に取り用ふる隨なり。上界の虛空に復二水流れ、冷暖前の如くにて童子を洗浴せり。復次に大師よ、童子の生るる時眞金の榻有り、童子の身を坐ゑて童子をして浴せしめぬ。復次に大師よ、童子の生るる時身に光明を放ち、一切諸寶の火焰一切の光明を翳障したり。復次に大師よ、童子の生るる時身に光明を放ち、日月の光を蔽ひて、狀星宿の如かりき。復次に大師よ、童子の生るる時、一切の樹木、時に隨つて敷榮し、花果茂盛して、非時の諸樹も、亦復鮮かに開きぬ。復次に大師よ、童子の生るる時、虛空の諸天、其の白蓋の眞金もて柄となせるを持して、童子の上を覆ひぬ。復次に大師よ、童子の生るる時、虛空の諸天、復、白拂の摩尼もて柄となせるを持して、童子の上を拂へり。復次に大師よ、童子の生るる時、虛空淸淨にして雲無く、霧及び諸の烟塵無きに、但、雷聲のみを聞きき。

復次に大師よ、童子の生るる時、虚空に雲無くして細雨を下らし、清淨の妙水、八味具足せり。復、次に大師、童子の生るる時、一切諸方に涼風忽ちにして起り、其の風調適にして惱患を爲さず、諸方清淨にして烟雲及諸の[三]氛翳有ること無かりき。復次に大師よ、童子の生るる時、上空中に於て大梵聲を出す、人の作す所に非ず、自然にして響けり。復次に大師よ、童子の生るる時、童子の上に於て自然にして無量の音聲有り、人の作す所に非ず。復、無量の歌樂の聲を聞けり。復、無量種種の花香を雨らし、日光に照らさるるも常に鮮かにして異らざりき。復次に大師よ、童子の生るる時、上虚空に於て、一切の諸天、種種の天の諸妙花——優鉢羅花・分陀利花・拘物頭華・波頭摩華——を雨らし、復、無量種種の末香を持し、復、無量種種殊妙最勝の華鬘を持して童子の上に散じ、散じ已りて更に散じぬ。復次に大師よ、童子の生るる時、自然に忽ち無量無邊の諸天玉女有り、種種の香及び種種の油、塗香、末香を持し、天の妙衣服、種種の天樂もて、或は歌ひ或は舞ひ、種種の聲を出して漸漸にして行き、摩耶童子の母の前に詣り向ひ、問訊して言はく、「善く童子を生めり、疲惓無きを得るや」と。

復次に大師よ、童子の生るる時、此の大地に於て六種に震動し、十八相を具しき。復次に大師よ、童子の生るる時、三千大千の一切世界の諸の衆生等、一時に樂を受けぬ。復次に大師よ、童子の生るる時、我、一切の大利、種種の吉祥を成就するを得、我が心の願の隨に具足せざるなかりき。復次に大師よ、彼の時、我が臣、婆私吒の子、摩訶那摩、來りて我が邊に向ひて我に語つて言はく、「唯、願はくは大王よ、常尊常勝なれ。國大夫人、清淨最勝の童子を産み生せり」と。

次に人有り、來つて復我に語つて言はく、「唯願はくは大王よ、常に一切に勝れて家室隆盛なれ、諸釋種眷屬の中に於て、復、各五百の童子を生めり」と。次に人有り、來つて復我に語つて言はく、「唯願はくは大王よ、常に一切を滿されよ、今日、釋種眷屬の中に復各五百の童女を生めり」と。

【三】氛。妖氣をいふ。

次に人有り、來つて復我に語つて言はく、「乃至、宮中に一時に五百の奴僕を産み生せり」と。次に人有り、來つて復我に語つて言はく、「乃至、五百の婢媵を産み生せり」と。次に人有り、來つて復我に語つて言はく、「乃至、五百の馬駒を産み生せり」と。次に人有り、來つて乃至、「自然に五百の香象の身の白きこと雲の如く、齊しく六牙有るが、宮門の外に在り」と。次に人有り、來りて、乃至、「五百の金藏の隱伏せるもの、自然に顯現せり」と。次に人有り、來りて、乃至、「此の處、迦毘羅城に、自然にして五百の園林有り、忽爾として出現したり」と。次に人有り、來りて乃至、「他方の五百の商主、多く財寶を齎して此の迦毘羅城に來り至りぬ」。次に人有り、來りて、乃至、「五百の白蓋、五百の金瓶を將つて、粟散諸王より、送り來つて奉獻し、幷に復人を遣はして我に諮白せしめて言はく、「我等皆、大王の敎命を待ち、敎に依つて行はん」と。次に人有り、來つて而も我に語つて言はく、「願はくは王よ、常に勝れたまへ。萬の童女有りて、刹利及び婆羅門の長者の家に在りて生れぬ」と。

大師よ、我、爾の時に於て是の如く思惟すらく、「我、何の乘を作してか、我が童子を將て安隱に迦毘羅城に還り向はん」と。是の時、空中に一の天轝有り、――七寶の成す所、人工もて造れるに非ず、――忽然として現はる。端正にして喜ぶ可く、種種に莊嚴す。大師よ、我、彼の時に於て是の思惟を作さく、「誰か此の轝を負ふものぞ」と。是の時、四方に自然にして四天子有つて來り、來り已るや各各寶轝を擔負し、地を離るること遠からず、空に乘じて行く。我、爾の時に於て、是の童子を將て宮殿に入り、覆ねて復思惟すらく、「今我が童子、何の名をか作さん」と。我更に思惟すらく、「其の生るるの日、我が一切の利、自然にして成れり」と。我、時に知り已りて、便ち名字を作りて悉達多と號けぬ。

大師よ、爾の時、我復此の城内に於て、有らゆる相師の能く吉凶を占ふを、一切召喚して此の童

子を示し、其をして觀看しむ、「汝等一切の諸婆羅門よ、我が爲に好く此の童子を觀よ、何の相貌有りや、復、何の怪か有る」と。而して相師等、我が語を聞き已りて、共に童子を瞻、各各相議して我に報じて言はく、「大王よ、汝大利を得たり。是の如く、童子に大威德有り、大王の家に生れて三十二大人の相を具足す。若し當に人有りて是の如き丈夫の相を具足すべくんば、此人則ち二種の行有らん。若し其れ在家ならば、必定して當に轉輪聖王と作りて四天下に王たり、七寶具足し、乃至、一切の兵戈を用ひずして如法に治化すべし。若し其れ捨家して聖道を修學せば、必ず佛、多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀と作るを得て、名聞遍ねく一切の世間に滿たん」と。

大師よ、我、彼の時に於て、百味の食を將つて彼の一切の諸婆羅門に設け、皆悉く充足自恣せしめ、種種の衣服を布施しぬ。大師よ、我、彼の時に於て、此の城內の有ゆる街巷、四衢の道頭に在りて、皆布施を行じ、食を須むるには食を與へ、資財五行、皆持て施與し、乃至、得る所の諸功德は、童子に廻施しぬ、供養の爲の故に。

大師よ、童子の胎に在り、初めて生るるの時、是の如き等の種種の瑞相、希奇の事、未曾有の法有り。諸の是の如き等の在胎と生法と、我今具さに白して、大師に知らしめ、今、大師に奉じて是の如く布施しぬ。唯願はくは大師よ、領受して歡喜せよ』と。

爾の時、尊者阿私陀仙、童子の父、淨飯王の邊より、此の微妙の諸の瑞相等を聞き、大歡喜を生じて自ら勝ふる能はず、座よりして起つて王に辭して宮を出で、歩して門外に至り、即ち右手を以て那羅陀童子の左臂を執り、門より身を隱して虛空に騰りて行き、南天竺に向ひ、阿盤提聚落に下る時、阿私陀仙、那羅陀童子に語つて是の言を作すらく、『汝、那羅陀童子よ、當に知るべし、佛有りて今、世間に出現したまふ、汝、當に彼の邊に出家學道して梵行を修習すべし。久遠の時、大に利益を得、大に安樂を得ん』と。時に阿私陀、覆び復思惟すらく、『我が滅度の後、有ゆる利養と世

聞の名聞とを、一切皆是の那羅童子悉く收斂して得ん。是の故に、此の那羅童子は、利養に因るが故に世の名聞の故に、其の道行を盡すも精進を得ず、正念を得ず信行を得ず、三寶の邊に於て、此は是佛陀(buddha)、此は是達摩(dharma)、此は是僧伽（saṅgha）と分別する能はず。是の故に、名聞は彼自身を損ぜん』と。

爾の時、尊者阿私陀仙、更に復思惟すらく、『是の淨飯王の悉達童子は、何の國地に在つて、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べき、復、何の處に在つて、清淨無上の法輪を轉ぜん』と。是の如く少時思惟し訖已りて内心に明に知見すらく、『是の童子は其の後、彼の摩伽陀國（Magadha）に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を得、波羅㮈國(Bārāṇasī) に法輪を轉ずべし。我、今に於て當應に此の那羅童子を將て波羅㮈に詣り、一の精舍を造り、安置して立て已らば、晝日に三時、暗夜に三時、彼に向つて其が爲に佛の名號を說きて、「汝、那羅陀よ、佛世に出でぬ、汝、那羅陀よ、佛世に出でぬ」。是の如く三び稱へ、汝應に彼の邊に出家修道して梵行を勤行すべし、汝、後時に當つて大利益有らん、大安樂を得ん」と、敎へん』と。時に阿私陀、是の念を作し已りて、那羅陀を將て波羅㮈に向ひ、爲に精舍を造り、安置し立て已りて、晝夜六時に是の唱言を作す『汝、那羅陀よ、佛世に興れり』と。晝夜六時に是の如く三唱し、『汝、當に出家すべし、乃至、後時に大安樂を得ん』と告げぬ。時に阿私陀、是の如き方便もて世に住すること無量にして、壽終を取りぬ。

時に阿私陀命終の後、其の那羅陀侍者童子、世間中に於て大利養を得、大名聞を得たり。時に那羅陀、世の利養に著し、名聞を貪るが故に、心自ら定らず、增進する能はず。利養を求めて足るを知らざるを以ての故に、此は是佛なりや、此は是法なりや、此は是僧なりやを、自ら念ずる能はず、自ら信ずる能はず、分別する能はず。

彼の阿私陀命終の後、時に淨飯王、諸の國師婆羅門に語つて言はく、『大師よ、當に知るべし。今

此の太子は、既に王宮に生れ、久しからずして必ず當に聖行を行じて聖道を證得せんこと、猶、尊者大阿私陀仙人の授記の如くなるべし。此の言眞實、恐らくは當に虛ならざるべし、必ず應に是の如くなるべし。大師よ、我が王種族、若し嗣立を爲さば、當に大に損減すべし』と。其の婆羅門諸國師、淨飯王に報へて言はく『大王よ、今は是の念を作す莫れ。我が授記の如くんば、此の太子必ず當に定めて轉輪聖王と作るべし、我等の語の如く、終に異る有ることなけん』と。

時に淨飯王、國師に語つて言はく『仁等大師よ、汝今は阿私陀聖師の言や、此の語虛謬なるに非ず』と。時に彼の國師婆羅門等、更に王に報へて言はく『彼の仙人の語、若し其れ虛ならず、是れ實と言はば、大王よ、今應に須らく方便を作すべし。年少の時に及んで、[四]世事を增益して當に太子の何に著するかを觀じ、漸漸に更に加ふべし。是の如くんば則ち彼自ら家居を愛し、山林に向つて苦行を修せざらん』と。

時に淨飯王、復、國師婆羅門に問ひて言はく『此の事云何ん』と。時に國師等、復、王に白して言はく『大王よ、當に知るべし。往古の諸仙、或は風露を飮み、或は花果を食ひ、或は根藥を食ひ、樹皮の衣を著け、少欲知足なるも、彼等諸仙、猶、俗事を愛し、一たび世に著するや尙放逸を生ぜり。況んや、復、太子の日日の習近にて、一切の諸根に自然の染著あるをや。王の勢力を以て功德を具足して家の內に住在せんに、能く捨てて出家せんこと、是の處有る無けん』と。時に淨飯王、復、是の言を作すらく『此の事是の如きこと、大師の語の如し。世間、亦、方便の事有ること、大師の語の如し。但、彼の大仙阿私陀の說くこと必ず虛言せじ。是の故に我が心、常に疑惑を生ず』と。時に淨飯王、是の如き未來の事を思惟して、心に疑ひて猶預し、卽ち群臣、諸釋種族を集めて、之に告げて言はく『我、汝等に勅す。若し太子增長せらるゝ時に、彼の前に向つて、阿私陀授記の事を說く勿れ。所以は何に。太子、若し此の如きの語を聞かば、其を喜びて菩提の心を捨てされば

【四】世事。人間世界の事、卽ち愛欲なり。

なり』と。

時に淨飯王、復更に重ねて諸臣等に告げて言はく、『卿、諸臣等よ、我が太子の爲に、國内の有ゆる禁繫の囚徒は、皆悉く放赦して解脱を得しめ、乃至、一切の諸禽獸等も、亦竝に放捨せよ』と。復、國師婆羅門に告げて言はく、『大師よ、若し有らゆる精進の婆羅門等の、或は百、或は千、聚集する處を知らば、意の隨に須むる所を悉く皆布施し、有らゆる天祠及び神廟堂を皆修治せしめ、法に依つて祭祀し、我が太子の爲に大福を得しめよ』と。爾の時、國師婆羅門等、即ち王の命に依りて、四方より三萬二千の諸婆羅門を召し得て、日ごとに別ちて淨飯王宮に入らしめ、有らゆる資財もて悉く持て布施し、七日を滿つるの夜、有らゆる功徳を太子に迴施して、增進せしめんを願ひぬ。而して偈有りて說かく、

『淨飯王の心大に歡喜す　福徳の太子を生めるを以ての故なり
一切の群臣皆聚集し　天下の囚繫に普ねく放すの恩あり
誕育既に本心に稱適す　慇重に生法を爲作さんと欲し
彼の百千の乳牛犢を持つて　皆金もて角を裝ひ銀もて蹄を飾る
年齒悉く壯にして毛色鮮かに　各各犢を從へて其の後に隨はす
膚體充肥して乳汁多く　一頭一び捋つて十斗を得
更に無量種の珍奇と　錢財と穀帛と諸の雜物とあり
太子を增益せしめんが爲の故に　彼の婆羅門に布施しぬ。』

【五】生法。生育の法。

卷の第十一

姨母養育品第十

爾の時、太子既に誕生して適に七日に滿ちたるを以て、其の太子の母摩耶夫人は、更に諸天の威力を得る能はず。復、太子の在胎に受けたる所の快樂を得る能はず。力薄きを以ての故に其の形羸瘦し、遂に便ち命終す。

或は師有りて言ふ、『摩耶夫人の壽命算數は唯七日に在り。是の故に命終す。然りと雖も、但、往昔來常に是の法有り。其の菩薩生れて七日を滿ち已れば、菩薩の母皆命終す。何を以ての故に。諸の菩薩は幼年に出家す、母は是の事を見て其の心碎裂し、即便ちに命終するを以てなり』と。薩婆多(Sarvāstivādin,說一切有部)師、復此の言を作す『其の菩薩の母は、生みたる所の子を見るに、身體は洪滿し、端正にして喜ぶ可く、世に雙少し。既に是の如き希有の事未曾有の法を覩、歡喜踊躍して身中に遍滿し、自ら勝へざるを以ての故に即便ち命終す』と。

爾の時、摩耶國大夫人、命終の後即便ち往きて忉利天上に生る。彼の天に生れ已るや、即ち勝妙なる無量無邊の諸天の婇女有り、左右に圍遶し前後に翼從し、各各無量無邊の供養の具、曼陀羅等を持ち、菩薩の所に詣りて處處に遍ねく散じ、菩薩を供養せんと欲せるが爲めの故に虛空より下り、漸漸に墜ちて人間の淨飯王宮に到り、王宮に到り已りて淨飯王に語りて、是の言を作す『大王よ、當に知るべし。我善利を得て善く人間に生る。我、往昔に於て、彼の淸淨の衆生なる大王の童子を胎懷し、十月を滿足して快樂を受けたり。今我、三十三天に生れて還快樂を受くること、前の如くして異ならず。彼の樂も此の樂も、一種も殊なる無し。大王よ、今より已往、願はくは我が爲めに大憂苦を受くる莫れ。今より已去、我更た生れじ』と。時に彼の摩耶、即ち天身を以て偈を說きて

言はく、

『一切の怨親に心を平等にし　精進勇猛にして暫くも息む無く
善く眞如實諦の理を思ひ　念に錯亂無く始終有り
形體炳著にて眞金の容あり　諸根寂[一]靜にして善く調御せる
我が子や巧に能く諸法を說かん　善く頂禮を行ぜよ最勝尊に』

爾の時、摩耶、此の偈を說き已るや、卽便ち身を隱して忽然として現ぜず、彼の天宮に還る。時に、淨飯王、其の摩耶國大夫人の命終を見て後、卽便ち諸の釋種の、親しき年德の長者を喚召して皆雲集せしめ、之に告げて言はく『汝等眷屬は竝に是れ國親なり。今是の童子は、嬰孩にして母を失ふ。乳哺の寄、將た誰にか附囑し、敎令養育して存活を得しめん。誰か能く時に依りて看視瞻護せん。誰か能く至心に善く增長せしめん。誰か能く憐愍して愛すること己の生めるが如くして、携抱捧持せん。慈心を以ての故に、功德心の故に、歡喜心の故に』と。時に五百の釋種の新婦有り。彼等新婦、各各唱へて言はく『我能く養育せん、我能く瞻看せん』と。時に釋種の族、彼の婦に語りて言はく『汝等一切、年少盛壯にして意色欲に耽る。汝等は時に依りて養育する能はず。亦復法に依りて慈憐する能はず。唯此の摩訶波闍波提(Mahāprajāpatī)は親しくこれ童子の眞正の姨母なり。是の故に能く童子の身を將息養育するに堪へ、亦復能く大王に奉事するに堪へん』と。彼の諸釋種、一切和合して彼の摩訶波闍波提に、母として養育せんを勸めぬ。

時に淨飯王、卽ち太子を將て姨母摩訶波闍波提に付囑す。これ、太子の親姨母なるを以ての故なり。而して之に告げて言はく『善來、夫人よ、是の如き童子を應に養育すべし、善く須らく護持すべく、應に增長し、時に依りて澡浴せしむべし』と。又、別に三十二女を簡び取りて、養育を助けしむ。八女人を以て太子を擬抱し、八女人を以て太子を洗浴し、八女人を以て太子に乳せしめ　八女

【一】靜。大正藏「諍」に作る。

人を以て其を戲弄せしむ。

其の淨飯王、二子を產生す、一は太子、字は悉達多、二を難陀（Nanda）と名づく。其の白飯王(Śuklodana)にも亦二子有り、第一を難提迦(Nandika)と名づけ、第二を婆提唎迦(Bhadrika or Bhadeyya)と名づく。其の斛飯王(Droṇodana)にも亦二子有り、第一を阿難多(Ānanda)と名づけ、第二を名づけて提婆達多(Devadatta)と爲す。甘露飯王(Amṛtodana)にも亦二子有り、第一を名づけて阿尼盧豆(Aniruddha)と爲し、第二を名づけて摩訶那摩(Mahānāma)と爲す。淨飯王の妹を阿彌多質多囉(Amṛtacitrā ?)隋に甘露味と言ふと名づく、一子を生む、名づけて底沙(Tiṣya)と爲す。

是の時、太子の姨母、摩訶波闍波提、淨飯王に白して是の如き言を作す『謹んで王勅に依り、敢て乖違せじ』と。時に波闍波提、王命に依りて太子を養育す。譬へば(日)月の初一日より十五日に至りて淸淨圓滿なるが如く、太子も亦復是の如く漸漸に增長す。又復、譬へば尼拘陀樹の種の好地を得て漸く增長し後に大樹と成るが如く、太子も是の如く日日に增長しぬ。

其の太子の、出生已來、淨飯王家は、日日に一切の財利、金銀珍寶、二足四足を增長して、乏少する所無し。而して偈を說きて言はく、

『五穀及び財寶、　金銀諸衣服は
或は造り或は造らざるに　自然に充足するを得たり
童子及び慈母には　乳、酪、酥、常に豐に
慈母の少乳なる者も　悉く皆盈ち溢るるを得たり』

時に淨飯王のあらゆる怨讎は、自然に皆悉く平等心を生じ、心を平等にし已りて漸く親厚を生じ、既に親厚を生じて王と同心し、卽便ち牢固、一心一意、同願同行なり。風雨は時に隨ひて諸の災雹なく、亦擾亂なく、少かに種ゑて多く收む。彼の諸の苗稼、一切の藥草、樹木園林は、色に隨

ひて色を長じ、諸香豐足し、味に隨ひて味を具し、限に依りて成熟して終に時を過さず。皆これ太子の威徳力の故なり。一切の城内に懷妊する所の者は、安穩に生むを得、又諸の人民は衆の疫横無く、亦夭死なし。此れ太子の威徳力を以ての故なり。側近の有ゆる一切の人民、長者居士は、各各自ら守りて、相求め及ばず。『此になきを彼に求めん、彼當に我に與ふべし』。『設令、事に因りて須むる所の少多を貸換假借せんに、彼應に多く與ふべし』と――是の念を生ぜず。若干を須むれば即ち若干を與ふ。城内の人民、各各相尊び、父母に孝養し師長に敬事す。是れ太子の威徳力を以ての故なり。亦、往昔の、如法に行を行ぜる一切の諸王の人民士庶は、皆法に依りて行じ、悉く十善を持して具足して行じ、國内に怖無く五穀豐に登り、飢儉を遠離せるが如く、是の如く是の如し。淨飯王國の一切の境内も、飢儉有る無く、亦驚怖無く、五穀豐饒に、一切の人民は如法に行じ、種種に布施して諸の功徳を作し、諸の園林を造り諸の大義を造るに、[二]井泉池渠は皆悉く自らに現はれ、天舍、廟堂、曹局、省府も、皆亦自然にして、人に枉横無く、一切の人民皆並に歡喜すること、猶、天上の如くにして差殊有る無し。太子の威徳力を以ての故に、是の如き諸事、成就せざるなし。偈に說く所の如し。

『人民、尊教に順ひ　慳まず亦惜まず　如法に行ぜざる無く　慈心にして殺を起さず
飢渴は既に解くを得　飲食は皆充足し　一切悉く歡喜し　并に天の如き樂を受く』

時に淨飯王、[三]軫宿の辰を過ぎ、[四]角宿の日を取りて、太子の爲めに衆寶の瓔珞を作る。所謂、手腕指脛の釧鐶、首飾、雜寶勝妙の華鬘、頸鬘、種種の瓔珞、[五]珠璣印文の指環、臂環、腰珮、金縷を帶と爲し、金鈴寶網、種種の摩尼もて、莊嚴具と爲し、靴履革屣は雜寶もて莊嚴し、其の天寶冠は最勝殊妙なり。

復、五百の釋種の諸親あり、太子の爲に各一具を造り、雜妙の瓔珞もて上の如く莊嚴し、作り已

【二】大義。社會奉仕のつとめを爲すをいふ。義倉・義米の義の如し。

【三】軫宿(Hasta)。南方の第七宿、第十四宿日。
【四】角宿(Citrā)。東方の第一宿、第十五宿日。
【五】珠璣。珠はまろきたま、璣はまろからぬたま。

りて將て淨飯王の所に詣り、王に白して言はく、『善い哉、大王よ、我等造る所の此の妙瓔珞もて、七日七夜、唯、願はくは大王よ、此の瓔珞を以て、太子を莊嚴せられよ、當に我等をして空しく疲勞せさらしむべし』と。

[六]時に淨飯王、其の晨朝、鬼宿の日に於て、一國師婆羅門——優陀耶那(Udāyana)と名く、是れ優陀夷(Udāyin)比丘の父なり——并に及び五百の諸婆羅門と共に、皆、この言を唱ふ、「甚だ大に吉祥たり」と。共に太子を將て彼の一園に至る。名づけて無垢淸淨莊嚴(Vimalavyūhanāmodhyāna)といふ。往昔已來、之を貴ぶこと塔の如し。時に彼の園内に復無量無邊百千一切の衆生有り、男子婦人、童男童女、相喚びて雲のごと會し、彼の園に集聚して、太子を觀んと欲す。復更に別に一乘の大車に駕し、種種の瓔珞、金銀、飲食、衣服を載置して悉く充備せしめ、迦毘羅城内の[七]街術、四衢の道頭、及び諸の小巷、諸の是の如き處に大布施を設け、高聲に唱へて言はく、『凡そ須つ所、皆悉く給與せん』と。是の如きの駕、太子の前に在りて行く。復、八千の雜種の音樂有りて種種の聲を作し、虛空には自ら無量無邊の雜妙花の雨を雨らす。復、無量百千の諸女有り、皆、種種諸寶の瓔珞を以て其の身を莊飾して、閣上に在り、或は高臺に在り、或は却敵にあり、或は城頭及び女墻の邊、或は城樓の上、或は窓牖の中に在り、或は堂脊に居し、或は屋頭に立ちて、手に諸華を執りて太子を觀看し、花を以て、太子の前に逆ひ散ず。復、八千の諸天寶女有り、手に掃箒を執りて身體莊嚴せるが、太子の先に在りて道路を掃除す。一切の釋種の眷屬諸親、竝に悉く淨飯王の側、及び太子の前に在り、次第して行く。是の時、摩訶波闍波提、太子を懷抱して膝上に安置し、輦乘の中に坐す。是の如く種種無量無邊の莊嚴、備はり已るや、太子を將引して彼の園に往詣す。

爾の時、國師優陀夷の父、彼の五百の諸婆羅門と共なり。人人各無量無邊の吉祥の言を以て太子を稱讚し、諸の瓔珞を持ちて太子の身に繫く。瓔珞を繫け已るに、太子の身相に皆悉く隱障せられ

【六】以下、離垢天讃歎まで、Lalita. の傳に近し。

【七】術はこみち。

て、彼の瓔珞竝に各昏暗にして、復精光無きこと、猶ほ聚墨の照曜する能はざるが如し。復光顯無きこと、譬へば無價の閻浮檀金の其の邊に於て丸炭を安置せんと欲するが如し。是の如く是の如し。彼の諸瓔珞を太子に繫け已るに、猶ほ晝螢の自ら現ずる能はざるが如く、所有の瓔珞、太子の身に至るに、顯はれず現はれず、照らさず曜かざること、亦復是の如し。

時に彼の人衆、此の太子に、是の如き等の希奇の事、未曾有の法有るを見、各各唱へて言はく、『嗚呼、嗚呼、希有なり、希有なり』と。各各歡笑し、人人手を拍ちて歌舞叫嘯し、衣裳を擲弄す。

時に彼の園内に一天神有り、名づけて離垢といふ。然るに彼の天神、虛空に在りて身を隱し、現はれずして偈を說きて言はく、

『假使此大地　及び城邑聚落　山河諸草木をして　皆閻浮金と成らしむるも
佛の一毛孔の光は　具足せる威德相もて　彼を翳ひて聚墨の如くす
百福の莊嚴に滿てる　瓔珞の光相を滅するも
若し人諸相を具せんに
第一の勝報果は　瓔珞の嚴を須ひず』

時に彼の天神、此の偈を說き已るや、即ち種種無量の天花を持ちて太子の上に散じ、其の本宮に還る。

爾の時、釋種の諸親族等、即ち無價の碎末の栴檀及び細磨せるもの、雜色の[八]牙席、雜種の諸藥を持つて、具に諸器に滿たし、持ちて太子に與へて身を莊嚴せしむ。復、鹿車の眞金もて輿と爲せるもの、種種の船舫の諸の雜野獸、乃至、馬駒の、諸寶にて作せるを持ちて具に太子に施し、恣に嬉戲せしむ。八年を具足して是の如き歡樂もて太子を娛樂し、增長養育す。然るに、世の嬰孩の流涕、不淨なるに似ずして、諸の糞穢無く、亦、呱啼、呻吟、嚬縮せず、飢ゑず渇かず。諸母、養育

【八】牙席。牙皀(ārag-ba-dhū)藥名。

するに常に歡喜を生じぬ。

時に淨飯王、是の思惟を作す、『今我が太子、端正なること雙少きも、未だ其の力を知らず、竟に復、如何。今、試みに其の强弱を驗し看る可し』と。爾の時大王、卽ち諸の無量の釋種の童子と共に同坐して飲食し、一純金の雕鏤の鉢を持ちて歡喜丸を盛り、具足充滿せしめ、復、眞金を以て諸の環鑠を作りて諸の一切衆童子の前に置き、爭ひ食はしめ、又復諸の小白象を聚め、童子と共に相競ひ食はしめ、諸の一切の衆童子に語りて言はく、『汝等當に知るべし、是の如き白象、將に汝の食を奪はんとす』と。時に諸童子、衆の白象と爭はんに、力如かずと斷じ、遂に象をして食はしむ。然る後、始めて太子に語りて知らしむ。『太子よ、汝の食は、今他に奪はる』と。是の時太子、卽ち兩手を以て彼の金鉢を執り、少身力を出して彼の鑠を壞ち、象をして却ぞき頓めて太子に如かざらしむ。

時に淨飯王、復、太子の爲めに多く羝羊を集めて宮內に安置し、太子をして歡喜を生ぜしめん爲めの故に、眞金もて鞍を爲つて、雜寶もて莊飾し、種種の瓔珞を以て其の身を嚴り、金の羅網もて覆ふ。是の時太子、彼の羊車に乘りて園林に至る。及び其の親叔、甘露飯等の自餘の諸釋も、各諸子の爲に諸の羝羊を莊り、具足すること前の如くし、彼の諸童子も亦羊車に乘りて隨意に遊戲しぬ。

習學技藝品第十一

[一]時に淨飯王、其の太子の年已に八歲なるを知り、卽ち百官、群臣、宰相を會して之に告げて言はく、『卿等、當に知るべし。今、我が化內に、誰か最も智有り、誰か技能を具し、種種悉く通じ、太子の爲に師匠と作るに堪へ、敎へて、書及び餘の諸論を學ばしめん』と。時に諸の群臣等、卽ち王に報じて言はく、『大王よ、當に知るべし。今、毘奢婆蜜多羅(Viśvamitra)[二]有り、善く諸論を知り

【一】以下、習書の一段、Lalit. 10 參。

【二】毘奢婆蜜多羅、婆羅族中、有數なる學者の門閥にして、佛教經典中、每に婆羅門學者を表現するものとして用ひらる。

て最勝れ最妙なり。是の如き大師は、太子に種種の書論を敎ふるに堪へん』と。時に淨飯王、卽ち使人を遣はして彼の毘奢婆蜜多羅を召し、之に告げて言はく、『尊者大師よ、汝能く我が爲めに、此の太子に、一切の技藝、諸の書論を敎ふるや不や』と。時に蜜多羅、報じて言はく、『大王よ、謹みて王命に依らん、我今能く堪へん』と。時に淨飯王、心に歡喜を生じ、卽ち好日、善宿、吉時を占ひ、大釋種の耆舊、有德と共に其を莊飾せしめ、一切の禮儀、種種の須ふる所を悉く充備せしめ、復、五百の諸釋種の童を嚴しめて前後左右に周匝圍遶し、更に復別に無量無邊の童男童女有り、太子に隨順して將に學堂に昇らんとす。時に彼の大師毘奢蜜多、遙に太子の威德力の大なるを見て自ら禁ふる能はず。遂に其の身をして座より忽ち起たしめ、身を屈して太子の足を頂禮し、禮拜して起ち已り、四面を顧視して大羞慚を生ず。

　時に蜜多羅、慚愧を生じ已るや、虛空中に一天子有り、名づけて淨妙(Śubhaṅga ?)といふ。兜率宮より、無量無邊の最大の諸天神王の恒常に是の太子を守護する者と共に、彼の虛空中に在りて身を隱して現はれず、而して偈を說きて言はく、

『世間の諸の技藝　及び餘の諸經論を
此の人悉く能く知り　亦能く他に敎示す
是の勝衆生は　世間に隨順するが故に
往昔より久しく習ひ來るも　今師に從ひて學ぶを示す
出世の所有の智　諸諦及び諸力
因緣所生の法の　生じ已りて及び滅無することを
一念にして彼等を知り　名色の現と不現を
猶尚能く證知す　況んや復諸文字をや』

【三】名色(Nāma-rūpa)。心物といはんが如し。名とは名ありて形なき心をいひ、色とは形ある物をいふ。

爾の時天子、此の偈を說き已り、種種の華を以て太子の上に散じ、卽ち本宮に還る。

時に淨飯王、卽ち種種の無價の珍寶を持ちて以用て諸婆羅門に布施し、復、種種百味の飲食を持ちて、衆座の諸婆羅門に施設し、是の太子を將て彼の大師毘奢蜜多に付し、諸の乳母を留めて太子に侍せしめ、卽ち王宮に還る。

爾の時太子、旣に初めて學に就き、好最妙の牛頭栴檀を將て書板と作し、純ら七寶を用て四緣を莊嚴し、天の種種なる殊特の妙香を以て其の背上に塗り、執持して、毘奢蜜多阿闍梨（ācārya, 軌範師）の前に至り、是の言を作す、『尊者、闍梨よ、我に何の書をか教ふる 元、一書を少く。或は復梵天所說の書（brahmī）今の婆羅門書、正しく十四音是なりか。佉盧虱吒書(kharoṣṭhī) 隋に驢脣と言ふ か。富沙迦羅仙人說の書（puṣkarasāri）隋に蓮花と言ふ か。阿迦羅書(aṅga) 隋に節分と言ふ か。懵迦羅書(Vaṅga) 隋に吉祥と云ふ か。耶寐 亡毘の反 尼書(yavanī or yaminī?) 隋に大秦國書と言ふ か。鴦瞿梨書(aṅguliya) 隋に指書と言ふ か。耶那尼迦書(yānanika) 隋に馱乘と言ふ か。娑伽婆書(śakārī) 隋に牸牛と言ふ か。波羅婆尼書(brahmavallī) 隋に樹葉と言ふ か。波流沙書(pūrṣya) 隋に惡言と言ふ か。毘多荼書(vetāḍa) 隋に起屍と言ふ か。陀毘荼國書(drāviḍa) 隋に南天竺と言ふか。脂羅低書(kirāti) 隋に裸形人と言ふか。度其差那婆多書(dakṣiṇavarta) 隋に右旋と言ふ か。優伽書(urga) 隋に嚴熾と言ふ か。僧佉書(saṅkhya) 隋に算計と言ふ か。阿婆勿陀書(avamūrddha) 隋に覆と言ふか。阿㝹盧摩書(anuloma) 隋に順と言ふか。毘耶寐奢羅書(vyāmiśra) 隋に雜と言ふか。陀羅多書(darada) 烏場邊山 か。西瞿耶尼書(aparagodānī) 隋に言無し か。珂沙書(khāsya) 疏勒 か。脂那國書(cīna) 隋大 か。摩那書(māna) 斗升 か。末荼叉羅書(madhyakṣara) 中字 か。毘多悉底書(?) 尺 か。富數波書 (puṣpa) 花 か。提婆書(deva) 天 か。那伽書(nāga) 龍 か。夜叉書(yakṣa) 隋に語無し か。乾闥婆書(gandharva) 天の音聲 か。阿脩羅書(asura) 不飲酒 か。迦婁羅書(garuḍa) 金翅鳥 か。緊那羅書(kiṃnara) 非人 か。摩睺羅伽書 (mahoraga) 大蛇 か。彌伽遮迦書(mṛgacakra) 諸獸の音 か。迦迦婁多書(kākaruta) 烏音 か。浮摩提婆書(bhaumadeva) 地居天 か。安多梨叉提婆書(antarikṣadeva) 虛空天 か。鬱多羅拘盧書(uttarakuru)

須彌の北か。逋婁婆毘提呵書(pūrvavideha)須彌の東か。烏差波書(utkṣepa)擧か。膩差波書(nikṣepa)擲か。婆伽羅書(sāgara)海か。跋闍羅書(vajra)金剛か。梨伽波羅低梨伽書(lekhapratilekha)往復か。毘棄音喋多書(?)食殘か。阿㝹浮多書(adbhuta)未曾有か。奢娑多羅跋多書(śāstrāvarta)如伏轉か。伽那那跋多書(gaṇanāvarta)算轉か。優差波跋多書(utkṣepavarta)擧轉か。尼差波跋多書(nikṣepavarta)擲轉か。波陀梨佉書(pādalikhita)足か。毘拘多羅波陀那地書(dviruttarapadasaṃdhi)從二增上句か。耶婆陀輸多羅書(yāvaddaśattarapadasaṃdhi)增十句以上か。末荼婆哂尼書(madyahāriṇī)中流か。梨沙耶娑多波怛比多書(ṛṣitapasptā)諸仙苦行か。陀羅尼卑叉梨書(dharaṇiprekṣaṇī)觀地か。伽伽那卑麗叉尼書(gaṇanaprekṣaṇī)虛空を觀ずか。薩蒱沙地尼山陀書(sarvauṣadhiniṣyandā)の一切藥果因か。沙羅僧伽阿尼書(sarvasārasaṃgrahaṇī)總覽か。薩婆婁多書(sarvabhūtarutagrahaṇī)一切種音か。』

爾の時、太子、是の書を說き已り、復、蜜多阿闍梨に諮うて言はく『此の書凡そ六十四種有り、未審し、尊は我に何の書をか敎へんと欲する』と。是の時、毘奢婆蜜多羅、太子の、是の書を說くを聞き已りて、內心に歡喜し、悅豫[四]熙怡して密に私慚を懷き、貢高我慢の心を折伏して、太子に向ひ、偈を說きて言はく、

『希有なり淸淨の智慧人　善く諸の世間の法に順じて
自ら已に一切の論に該通し　復更に來りて我が學堂に入ること
是の如き書名我未だ知らざるを　其今悉く皆誦持し得て
これ天人の大尊導たるに　今復更に師を覓めんと欲すること』

爾の時、復、五百の釋種諸臣の童子有り。太子と共俱に齊しく學堂に入り、書を學び字を唱ふるに、是の太子の威德力を以ての故に、復、諸天の神力の加はる有るが故に、諸の音響中に、種種の音を出す。

【四】悅豫。豫は安なり、樂なり。

〔五〕阿(a) 字を唱へし時、『諸行無常(anitya)』と、是の如き聲を出せり。
伊(i) 字を唱へし時、『一切の諸根 (indriya) の門戸、閉塞す』と、是の如き聲を出せり。
優(u) 字を唱へし時、『心に寂定 (upaśama) を得たり』と、是の如き聲を出せり。
啞(e) 字を唱へし時、『諸の〔六〕六入の道、皆、證知するが故に』と、是の如き聲を出せり。
嗚(o) 字を唱へし時、『當に大煩惱の海(ogha 暴流) を渡るを得べし』と、是の如き聲を出せり。
迦(ka) 字を唱へし時、『當に諸有の業報 (karmaphala) の所作を受くべし』と、是の如き聲を出せり。
佉(kha) 字を唱へし時、『一切煩惱の根本を抜く(khaṇati) ことを教へん』と、是の如き聲を出せり。
伽(ga)字を唱へし時、『十二因緣は甚深 (gambhīra) にして越え難し』と、是の如き聲を出せり。
嚧(gha) 字を唱へし時、『諸の無明の蓋の覆翳は甚だ厚し、當に淨く除滅 (ghan) すべし』と、是の如き聲を出せり。
俄(ṅa)字を唱へし時、『如來は當に佛道を成ずるを得已りて餘の諸方に至り、恐怖せる衆生に無畏を施與すべし』と、是の如き聲を出せり。
遮(ca)字を唱へし時、『應に四眞聖諦(catur iryasatyāni) を證知すべし』と、是の如き聲を出せり。
車(cha) 字を唱へし時、『今は應に所有の諂曲、邪惑、意迷を、皆悉く除滅 (chardayati) すべし』と、是の如き聲を出せり。
闍(ja)字を唱へし時、『應に超越して生死(jitimaraṇa)の海を出づべし』と、是の如き聲を出せり。
社(jha) 字を唱へし時、『魔の煩惱幢は當に碎破(jhapeti? 俗語)して倒すべし』と、是の如き聲を出せり。

【五】以下字母、本經は三十六なるも、Lalit. は六十四を擧ぐ、字義又異同あり。

【六】六入。六つの感官、眼・耳・鼻・舌・身なり。原語はṢaḍāyatana 從つて a 字に就ていふべきものゝ如し。これを e 字に配するは如何なるものにや。

若(ña)字を唱へし時、『當に四衆をして皆、教行に順はしむべし』と、是の如き聲を出せり。
吒(ṭa)字を唱へし時、『其れ、諸の凡夫一切の衆生の處處に畏敬する、此を無常と言ふ』と、是の如き聲を出せり。
咤(ṭha) 字を唱へし時、『應に此の咤字を憶念すべし。若し根純熟すれば、諸法を聞かざるも卽ち證知を得ん』と、是の如き聲を出せり。
茶(ḍa) 字を唱へし時、『應に彼の四の如意足を得て、卽ち能く飛行(dīyati) すべし』と、是の如き聲を出せり。
嗏(ḍha) 字を唱へし時、『合歡花の嗏の如き言語を作し、散るとき諸行及び十二緣生滅の法、無常顯現すと唱ふ』と、是の如き聲を出せり。
拏(ṇa)字を唱へし時、『得道の人は利益を受くる時、一微塵等の諸煩惱の散滅せざるなく、他の供に應ずるに堪ふ(dakṣiṇeyya)』と、是の如き聲を出せり。
多(ta)字を唱へし時、『當に苦行(tapas) に向ふべし』と、是の如き聲を出せり。
他(tha) 字を唱へし時、『一切の衆生、其の心は斧の如く、諸塵の境界は猶竹木の如し、當に是の觀を作すべし』と、是の如き聲を作せり。
陀(da)字を唱へし時、『當に布施(dāna)を行じ、諸の善行を行ずべし卽ち和合を得ん』と、是の如き聲を出せり。
咃(dha) 字を唱へし時、『當に法聲(dharmasvara) 有るべし』と、是の如き聲を出せり。
哪(na)字を唱へし時、『當に須らく彼の飲食を用て活命すべし』と、是の如き聲を出せり。
簸(pa)字を唱へし時、『眞如實諦 (paramārtha)』と、是の如き聲を出せり。
頗(pha) 字を唱へし時、『當に成道して妙果(phala) を證するを得べし』と、是の如き聲を出せり。

【七】(原文)唱吒字時、其諸凡夫、一切衆生、處處畏敬、此言無常、出如是聲。

【八】(原文)唱嗏字時、作合歡化如嗏言語、散唱諸行及十二緣生滅之法無常顯現、出如是聲。

婆(ha)字を唱へし時、『一切の縛(bandhana)を解かん』と、是の如き聲を出せり。
嘙(bha)字を唱へし時、『世間の後、更に有(bhava)を受けざるを說かん』と、是の如き聲を出せり。
摩(ma)字を唱へし時、『諸の生死(jātimaraṇa)は、一切の恐怖の、最も畏るべしと爲すと說かん』と、是の如き聲を出せり。
耶(ya)字を唱へし時、『一切諸法の門を開穿し、人の爲めに演說せん』と、是の如き聲を出せり。
囉(ra)字を唱へし時、『當に三寶(trayo ratnāni)有るべし』と、是の如き聲を出せり。
邏(la)字を唱へし時、『諸の愛の枝(latā)を斷たん』と、是の如き聲を出せり。
婆(va)字を唱へし時、『一切身の根本種子を斷たん』と、是の如き聲を出せり。
嗜(śa)字を唱へし時、『奢摩他(śamatha)毘婆舍那(vipaśyana)を得ん』と、是の如き聲を出せり。
沙(ṣa)字を唱へし時、『當に[九]六界(ṣaḍdhātu)を知るべし』と、是の如き聲を出せり。
娑(sa)字を唱へし時、『當に諸智(sarvajñā)を得べし』と、是の如き聲を出せり。
嗬(ha)字を唱へし時、『當に一切諸の煩惱を打ちて却く(hanti)べし』と、是の如き聲を出せり。
爾の時、彼の諸の五百の童子の、是の如く諸字門を唱ふるを作せる時、是の太子の威德力を以ての故に、兼て復、諸天の護持の加はる所、是の如き微密祕奧の諸法門の聲を作せり。
時に淨飯王、又復群臣を集聚めて議して言はく、『卿、諸臣等、一切誰か知る、何處に師有りて、最便の武技、善巧の軍戎、兵仗の智略を、我が悉達太子に教ふるに堪へん』と。時に諸臣等、王に報じて言はく、『大王、當に知るべし、此處に釋有り、名づけて善覺(Suprabuddha?)と爲す。其の善覺の子、羼提提婆(Kṣāntideva)〔隋に忍大と言ふ〕は、太子に兵戎法式を教ふるに堪へん。其の解知する所、一切凡そ二十九種有り。善巧善妙の技術精微に、所作輕使にして勁捷[一〇]勁勇なり。二十九とは、所

【九】六界。地水火風空識の六原素。
【一〇】勁は輕捷なり。

謂、象に騰る。車に跨る。坎を跳る。馬を越ゆ。射妙に。走疾に。志猛性剛。身體輕便。所爲諦審。善能く調習して象を捉へ鈎を[一一]搭つ。巧解安施して象に[一二]羂索を擲つ。又、工に將て養ひ畜生を飲飼す。處分[一三]指撝。善く兵馬を總ぶ。曲直斜正の山川を暗練す。手に拳を握ること牢し。脚の地を蹋むこと穩なり。頭を梳り髻を結ぶに、[一四]靳固甚だ牢し。能く破る。能く開く。能く劈く。能く斬る。射ては虛しく落ちず。[一五]挽鞆無雙。遙に響聲を聞きて射れば卽ち懸著す。放たれし處に箭の入ること甚だ深し。黠慧聰明にして辭淸く辯捷し。謀謨策算して、巧解多知なり。古を討ね今を論じて方便もて善く詐る。諸の是の如き等の、有ゆる兵家の祕要神能、悉く皆、通達す。唯、應に是れ彼は乃ち大王の太子に一切の戎技を教ふるに堪ふ可し』。

時に淨飯王、是の語を聞き已りて心に大に歡喜し、卽ち諸臣に勅して忍天を喚ばしむ。其の忍天至るや、王、之に勅して言はく『羼提提婆よ、汝、能く我が悉達太子に、戎仗の智を教ふるや不や』と。是の時、忍天卽ち王に白して言はく、『臣、甚だ能く教へん』。王復勅して言はく、『汝、若し時を知らば、好く我が子に教へて成就を得しめよ』と。時に淨飯王、太子の遊戲せんと欲するが爲の故に、一園苑を造り、名けて勤劬といふ。是の時太子、彼の苑內に入りて遊戲歡娛し、或は按摩せしめぬ。時に五百の諸釋種の臣、悉く其の兒の爲めに各園苑を造り、以て戲笑に擬し、按摩、遨遊す。時に忍提婆、太子を將引して勤劬園に入り、戎仗の智を教ふ。彼の諸釋種も、各各自ら其の園苑の中に入り、遊戲學習す。時に忍提婆、其の數種の兵戎器仗を將て太子に教へんと欲す。太子見已りて悉く皆棄捨し、卽ち忍天に語りて是の如き言を作す、『汝其の餘の諸釋種の子を教へよ、我は自ら此を解す、更に學ぶを須ひず』と。時に忍提婆、卽ち以て其の餘の釋種に此の戎仗の智を教へぬ。而して彼、學び已るや、久しからずして人人悉く二十九種を成就し、竝に皆通達するを得たり。所謂白象車馬を騰跳し、乃至、強きを挽くこと、一切處に於て、皆、最第一の智、輕便最能の聰明の智

【一一】搭は剳(著也)に作るべし、搭と作すは誤なり、(慧琳音義)

【一二】羂はわななり。

【一三】撝は手にて指揮すること。

【一四】靳はかたし。

【一五】鞆。或は鞕(かたし)に作らる。挽は弓をひくこと、鞕はかたきものを射貫くこと。

慧を成就し得たり。又、是の如き等の諸の王技中の最善最勝なるもの——所謂、書算。諸の計數を解す。印文を彫刻す。宮商律呂。舞歌戲笑。[15]䟐士洽の反𪘂魚洽の反漫談。或は諸珍。瓌奇異寶を造る。衣を染めて色を出す。草葉、種種の諸事を圖畫す。薰香を和合す。或は手筆を弄して、諸書を草正し、能く文章を制す。又復、能く白象の背上に於て能く迴り能く轉ず。鞍を施して馬及び有ゆる象駝の頭頂尾脚に騙る。種種の諸技、並に悉く便ち能くす。又、車邊に於て亦善く巧に弄れて諸の異法を出だし、刀槊弓箭を身中に得悉して意氣[17]容與たり。相撲ちて腕を拗り。搉力して斤を稱げ。按摩[18]槊擲恥皆の反して脛を拗り臂を搦り。能く擲げ、能く走り。乃至、空しからず。及び聲を聞きて射。[19]鞕に入り强を挽くに、箭の連ること雨の如し——太子、此の一切の諸技を皆悉く棄捨して、更に學ぶを肯んぜずして云はく、『我、自ら解せり、何ぞ敎を須ふるを假らん』と。復、諸の王の要法を教習せんと欲す。所謂、天文、祭祠、占察、前事を[20]懸射すること謬語。巧誦、諸獸の音を知る。[21]聲論に達し、諸技を造作し、伎に因りて報答す。呪術雜事の十餘種の名、治化せる古先の一切の書典を太子に教へ、及び自他の釋にも亦是の如くに教へぬ。又復世人が、年を積み月を累ねて學問する所は、或は成ると成らざるとあるに、彼等衆技、一切の諸論を、太子は四年の中に能くし、及び餘の釋種も皆悉く學び得て、通達無礙、一切自在なり。是の時、忍天、卽ち太子の爲めに偈を說きて言はく、

『汝年幼き時に　安庠として學問し　多くの功力を用ひず　須臾にして自ら解す
少日月に學べるもの　他の多年歲なるに勝れ　得たる所の諸の技藝は　成就して悉く人
に過ぎぬ』

【一五】 䟐(或䶜)。𪘂或は唊、喢に作る、䟐𪘂は俳戲人也、(惠琳音義)唊喢は戲謔也、(可洪音義)
【一七】 容與。心のゆるやかなる貌。
【一八】 槊。搦也、つくこと。
【一九】 鞕は堅なり、麗本鞕に造る。
【二〇】 懸射。あらかじめいひあてる義か。
【二一】 聲論。文法のこと。

卷の第十二

遊戲觀矚品第十二

爾の時、太子、王宮に生長す。孩童の時、遊戲して未だ學ばず。年八歲に滿ち、閤を出でて師に詣り、學堂に入りて毘奢蜜及び忍天の所に從ひ、二大尊の邊に諸書幷に一切論兵戎雜術を受讀す。四年を經歷して十二に至るの時、種種の技能、遍ねく皆涉獵し、旣に通達し已りて世間に隨順し、目を悅ばし心に適ひ、情を縱にして放蕩し、聲色を馳逐す。曾て一時、勤劬園に在りて遨遊射戲す。自餘の五百の諸釋種の童も、亦各其の自己の園內に在りて優遊嬉戲す。時に群鴈有りて虛空を行飛す。是の時、童子の提婆達多(Devadatta)、弓を彎きて射、卽ち一鴈に著く。其の鴈射られて、箭を帶びて遂に悉達の園中に墮つ。時に太子、彼の鴈の箭を帶び傷けられて地に墮ちたるを見、見已りて兩手もて安徐として捧取し、取り已りて加趺し、鴈を膝上に安じて、妙滑澤、柔潤なる水波、萬字輪の文ある福德の手――細輭なること、猶芭蕉の嫩葉の如し、――の左手もて擎持し、右手もて箭を拔き、卽ち酥蜜を以て其の瘡を封ず。

是の時、提婆達多童子、使人を遣はし、來りて太子に語りて言はく、『我、一鴈を射、汝の園中に墮ちたり。宜しく速に付し來るべし、彼を留むるを得ず』と。是の時太子、使人に報じて言はく、『鴈、若し命終せば卽ち當に汝に還すべし、若し死せざれば終に得べからず』と。時に提婆達多、復更に重ねて使人を遣はして語りて言はく、『若しは死し、若しは活くるも、決んで、須らく相還すべし、我が手、先に善く巧に射得て、遇、彼を墮落せるを、云何ぞ忽ち留むる』と。太子、報じて言はく、『我已に先に此の鴈を攝受す、然る所以は、我、菩提心を發してより來かた、我皆一切衆生を攝受す。況んや復此の鴈、而も我に屬せざらんや』と。是の因緣を以て、卽便ち相競ひ、諸釋の

宿老、智人を集聚めて、此の事を判決す。

是の時、一淨居諸天有り、身を變じて老宿長者に化作して、釋の會所に入りて是の言を作す、『誰か養育するものは卽ち是攝受せよ、射著のものは卽ち是を放捨せよ』と。時に彼の諸釋の宿老諸人、一時に印可して、高聲に唱へて云はく『是の如し、是の如し、仁者の言の如し』と。此はこれ提婆達多童子の、太子と共に最初に怨讐を構結したる因緣なり。

[一]復、一時有り、其の淨飯王、多くの釋種の諸童子輩と共に幷に太子を將ゐて外に出でて野遊し、田種を觀看る。時に彼の地内の有ゆる作人、赤體にて辛勤し、而して耕墾を事とし、牛を以て彼の[二]犂轜の端に縻繫す。牛、若し行くこと遲ければ時時搖掣す。日長く天熱し、喘痳汗流れて、人牛竝に皆困乏飢渇し、又復身體羸瘦して骸を連ぬ。而して彼の犂もて土を傷いて[三]壞へる下に、皆、蟲ありて出で、人犂の過ぎて後、時に諸の鳥雀競ひて飛び下り來り、此の[四]蟲豸を食ふ。太子、茲に犂牛の疲頓し兼ねて鞭撻せられ、犂轜もて領を研り、鞅繩もて咽を勒め、血、出でて下流し、皮肉を傷破るを見、復、犂人の、日に背を炙かれ、赤體を裸露し、塵土もて身を坌し、烏鳥の飛び來りて爭ひて蟲を拾ひ食ふを見、太子、見已りて大憂愁を起す。譬へば、人有り、家の親族の繫縛せらるるを見る時、大憂愁を生ずるが如く、太子の、彼の諸衆等を憐愍する、亦復是の如し。是の事を見已りて大慈悲を起し、卽ち馬王、犍陟の上より下り、下り已りて安庠として經行し、諸の衆生等に是の如き事有るを思念し、卽ち復唱へて言はく『嗚呼、嗚呼、世間の衆生、極めて諸苦を受く。所謂、生老及以び病死なり。兼ねて復、種種の苦惱を受け、其の中に展轉して離るるを得る能はす。云何ぞ、是の諸の苦を捨てんことを求めざる、云何ぞ、苦を厭ふの寂智を求めざる、云何ぞ、生老病死の苦因を免脱せんことを念ぜざる、我、今、何にか空閑處を得て、是の如き諸苦惱の事を思惟せん』と。

【一】以下、Lal. II. の梵文を參照。大事にまたこの記事あり。
【二】犂。すき、轜は又は楇に作る、くびき。
【三】壞は坺。土をおこすこと。
【四】豸。あしなきむし。

時に淨飯王、田作を觀已り、諸童子と共に還一園に入る。是の時太子、安庠として瞑眄し、處處を經行して寂靜を求めんと欲す。忽ち一處に閻浮樹（jambu）有り、條幹滑澤に、端正たること、憐むべく、鬱翁扶疏として、人の樂み見る所なるを見、見已りて、即ち諸の左右に語りて言はく、『汝等諸人、各我を遠離せよ、我、私に行かんと欲す』と。

是の時太子左右を發遣し、悉く散ぜしめ已りて、漸く樹下に至り、樹下に到り已りて即ち草上に加趺して坐し、諦に心に思惟す、『衆生には生老病死種種の諸苦有り』と。慈悲を發起して即ち心定まるを得。彼の時、即便ち諸欲を離れ、一切諸の不善法を棄捨し、境界を思惟し、境界を分別し、欲界の[五]漏盡きて即ち初禪を得たり――『我が身にも亦、自ら是の如き法有り。未だ此法を免れず、未だ此の輪を度らず』と。

思惟の時に當りて[六]五神仙有り、虛空を飛騰して自在にして行き、大威德有り、大勢力有り。具足して毘陀の論に巧通し、善く諸術を解す。南より北に向ひ、彼の園林の閻浮樹上を經て、而して飛び過ぎんと欲して即ち去る能はず。各相謂つて言はく、『我等往昔去來、自ら恣に須彌をも穿過し、諸の神通を出だして種種に示現し、乃至、毘沙門宮大天王の所に到り、或は阿羅迦槃多城（Alakamanda）に至り、亦、能く彼の城を穿過しぬ。多く、種種の夜叉、諸の惡神等有るも、我亦曾て彼の上を經たり。此の樹端を飛過するや、我、亦曾て經ること無量過度なるも、曾て礙有らず、神通を失せざりしに、今日は誰の威德力を以ての故に我等をして、神通を退失して過ぐるを得る能はざらしむるや』と。

彼等仙人、即ち其の樹を觀て、遂に太子の樹陰の下に在りて、加趺して坐し、威光巍巍、顯赫として觀難きを見、彼等、見已りて是の思惟を作す、『此に坐せるはこれ誰ぞや。將た是、彼の大梵天王世間の主に非ざるか。或は復是れ、彼の吃沙那天（Kṛṣṇa）欲界の主か。或は天帝釋か。或は[七]毘沙

【五】漏。煩惱の異名。

【六】五神仙。五種の神通、即ち天眼・天耳・神足・他心・宿命の通力を有する神仙なり。

門大庫藏主か。或は月天子か。或は日天子か。或は復、これ轉輪聖王か。或は將た此に坐したまふは、これ、佛の世に出現したまふに非ざるか。然り、今此の人の威德甚だ大なり』。

爾の時、彼の林の守護の神（Vanakhaṇḍadevata）、諸仙に告げて言はく、『諸仙人輩よ、此は大梵世間天主に非ず、吃沙那欲界の主に非ず、亦、天帝及び毘沙門庫藏主にも非ず、亦復、是、日月天子にも非ず、此の太子は、悉達多と名づけ、これ淨飯王、釋種の童子なり。諸仙當に知るべし。大梵天王所有の威德、其の吃沙那天主、帝釋、毘沙門王庫藏の主、月天、日天、轉輪聖王の諸威德等を、悉達多太子所有の一毫の威德に比するに、彼の諸威德は十六分中の其の一だも及ばず。是の故汝等、此の樹林に至り、上を飛過せんと欲するも、神通に限有りて度るを得るを能はず』と。

時に彼の諸仙、護林神の是の如き語を聞き已り、虚空より下りて太子の前に住し、各偈を說きて太子を讃歎す。時に一仙人、偈を說きて言はく、

『世間の煩惱の火熾然なるに　是能く法の池水を出生し、
既に是の如き微妙の法を得て　彼の煩惱の火を滅して燼無けん』

復、一仙有り、偈を說きて言はく、

『世間の愚癡甚だ黑暗なるに　此能く智慧の光を出生し
既に是の如き微妙の法を得て　彼の昏盲なる一切世を照さん』

復、一仙有り、偈を說きて言はく、

『憂惱の曠野大澤の中に　此の大駄乘のみ能く致るに勝へん
既に是の如き微妙の法を得て　能く三有の諸衆生を度せん』

復、一仙有り、偈を說きて言はく、

『一切の世間は煩惱に纏はるるに　此能く方便もて解脱せしめん

【七】毘沙門大庫藏主。毘沙門は、吠陀にありては、暗黑界に住する惡靈の主とせらるるも、四天王說成りて北方に配せらるゝや、その金銀の產地なる點より、富財神として信仰せられ、マハーバーラタ譚の中に、その意を見る。佛典にては A.VII.50 に施財の記事あり。世記經類に、富財神としての記事多し。

既に是の如き微妙の法を得て　能く一切諸結の羂を脱せん』

復、一仙有り、偈を說きて言はく、

『世間所有の生死の痾を　此の大醫師は能く救療せん
既に是の如き微妙の法を得て　能く一切生死の　疣を治せん』

時に諸の仙人、各偈を說きて、太子を歎じ已り、接足頂禮して右に遶ること三匝し、虛空を飛騰して相隨つて去りぬ。

時に淨飯王、須臾の間太子を見ず、心內に卽ち不喜不樂を生じ、人に問うて言はく、『我が太子、今何處にか在る。此の上の兩句を梵本は重ねて稱す。忽然として見えず』と。是時、諸臣、東西南北に交橫馳走して、太子を尋ね覓むるに、所在を知る莫し。時に一大臣、遙に太子の彼の閻浮樹の陰の下に在りて思惟坐禪するを見、復、一切の樹影の悉く移れるに、唯、閻浮の陰のみ獨り太子を覆ふを見る。時に彼の大臣、太子の是の希奇難思議の事有るを見るや、卽ち大に歡喜し、踊躍充遍して自ら勝ふる能はず。急疾に奔馳し、走りて王の所に詣り、至り已りて長跪し、見たる所の事に依りて卽ち偈を說きて言はく、

『大王よ、太子今　閻浮樹の陰の下に在りて端坐し
伽趺思惟して三昧に入り　光明の照曜すること日山の如し
此は實に眞にこれ大丈夫　樹影卓然として移動せず
唯願はくは大王自ら觀察せよ　太子の相貌と坐の云何んかを
譬へば猶ほ大梵諸天王のごとく　亦忉利の天帝釋の如く
威神巍巍として光顯爀し　遍ねく彼の諸樹林を照す』

時に淨飯王、聞き已りて卽ち閻浮樹の所に詣り、遙に太子の彼の樹間に在りて結加趺坐するを見る

【八】疣或は肬、小腫也、いぼ。

に、譬へば、黑夜に山の頂頭を視るに、大聚火光の猛明の炎を出し、盛德顯著にして炳照巍巍たるが如く、重雲の間に忽ちにして明月を出すが如く、亦、暗室に大淨燈を然すが如し。時に王、見已りて大希有奇特の心を生じ、遍體戰悼して身毛悉く竪ち、卽ち頭頂もて太子の足を禮して、歡喜踊躍し、而して是の言を作す『善い哉、善い哉、我が此の太子、大に威德有り』と。偈を說き讚じて曰はく、

『夜の大火聚の山頂の如く　秋の明月の雲間に敞るるに似たり
今太子の坐して思惟するを見て　覺えず毛張り身戰慄す』

時に淨飯王、偈を說き讚じ已りて、更に復太子の足を頂禮し、重ねて偈を說きて言はく、

『我今再度此の身を屈し　千輻勝妙の足を頂禮す
生れしより已來今日に至り　忽ち復坐して思惟するを見るを得たり』

時に、笭蹄を擎げ挾む小兒有り、大王に隨順して啾唧として戲笑す。一大臣有り、彼の小兒を咄して是の如き言を作す『汝、小兒輩、幸に唱叫する勿れ』と。時に諸小兒、彼の臣に報じて言はく、『何の故に我等の喧適を聽さざる』と。爾の時、大臣、卽ち偈頌を以て彼の一切の諸小兒に答へて言はく、

『日光は極熱猛盛なりとも　彼の樹の陰涼を迴らす能はず
復最妙なる一尋の光有りて　盛德の世間に匹ぶもの有る無し
思惟して樹下に端坐し　動かず搖がず須彌の如き
悉達太子は內深心より　此の樹陰を樂んで當に捨てざるべし』

捔術爭婚品第十三の上

【九】啾唧、小兒の戲譁なり。

爾の時、太子漸く長成に向ひ、年十九に至る。時に淨飯王、太子の爲めに三時殿を造る。一は暖殿、以て隆冬に擬し、第二は凉殿、夏暑に擬し、其の第三殿は用て春秋二時の寢息に擬す。冬の坐に擬せるは、殿一向に煖、夏の坐に擬せるは、殿一向に凉、春秋二時の坐に擬せるは、其殿調適にして溫和處平、不寒不熱なり。復、宮内後園の中に、水を堰き渠を流し、池沼を造作し、種種衆雜の名花、所謂、優鉢羅花、波頭摩花・拘物頭華・分陀利華を栽蒔す。太子の喜樂を作さんが爲の故なり。

復、無量無邊の諸人有り、各自の職司は太子に侍衞す。或は復人有り、太子を按摩す。或は復人有り、太子を柔輭にす。或は復人有り、諸の香油を以て太子に塗茶す。或は復人有り、洗浴の時、太子を揩拭す。或は復人の澡浴の時、香湯を供する者有り。或は髮を染め、頭髻を梳る者有り。或は復人の、鏡を執りて照らす者有り。或は塗香を執り、或は眼藥を執り、或は復熏衣香を執る者有り。或は牛黃を執り、或は華鬘を執り、或は復、種種の雜色微妙の衣服を執りて太子の前に立ち、常に太子の著を供奉せんと擬する者有り。其の衣は、悉くこれ迦尸迦衣なり。執り已りて躬を曲げ、須ふれば卽ち進む。其の太子の父、輸頭檀王の所著の衣は、裏若し迦尸迦なれば、外表は則ち其の餘の諸物を用ふれども、太子は然らず。所服の衣は、内外悉く迦尸迦を用て作る。太子の左右、及び執作人、僮僕男女、諸の後從等は、皆悉く餧ふに[一]粳粮の飯、雜肉の[二]虀醬、或は[三]臛、或は[四]羹を以てすれど、太子一身には別に、妙香、好美の粳粮、精細に揀擇せる羹臛、雜[五]籑、百味の[六]蘭餚、種種の[七]珍羞、及び諸の餅果を置き、是の如き無量を、日別恒常に晝夜に修營し、各皆新造して以て太子に擬す。又、白蓋を持て太子の上を覆ふ。或は夜戲の零露と風霜と、或は復、晝遊の塵埃と日照とを畏るるなり。

時に淨飯王、既に太子の年漸く大に向ふを見、心中に復、阿私陀仙授記の語を憶ひ、諸の耆舊釋

【一】粳は秔、うるしね、粮は糧、かて。
【二】虀は齏、なます。醬はひしほ又はみそ。
【三】臛。あつもの。
【四】羹。あつもの又はすひもの。
【五】籑。すすむ、又そなへもの。
【六】蘭。香氣ある草。餚は肴なり。
【七】羞。そなへたる滋味。

種大臣を集めて、是の言を作さく、『汝等親族、曾て聞き知れりや否や。我が此の太子、初生の時、諸の解相及び婆羅門、阿私陀等を召したるに、皆、之に記して言はく、『其れ若し在家ならば、定めて當に轉輪聖王と作るを得べく、若し捨てて出家せば、必ず無上道を成就するを得ん』と。而して我等、今、何の方便を作してか、此の童子をして出家せざるを得しめん』と。諸釋の親族、即ち王に報じて言はく、『大王、今當に速に太子の爲めに、別に宮室を造り、諸の婇女をして娛樂嬉戲せしむべし。是、則ち太子は捨てて出家せざらん』と。而して偈有りて說く。

『阿私陀の記する所　決定して移動する無し
諸釋は殿を立つることを勸め　出家せざらしめんを望めり』

『是の如く方便せば、我等釋種は興盛を得て、能く一切をして恭敬尊重せしめ、栗散諸王の爲めに欺かれざるべし』と。

時に淨飯王、復、釋種の諸親族に語りて言はく、『汝等、當に觀るべし、誰が釋の女か、我が太子悉達の與に妃と爲すに堪へん』と。爾の時、五百の諸釋種の族、各各唱へて言はく、『我が女は太子の爲めに、妃と作るに堪ふ』と。上の兩句は、梵本悉く再稱すれど、今は略す。 時に淨飯王、復、自ら思惟す、『若し我、今日、太子と共に、是の如く籌量せずして、忽ちに他女を取りて其が與に妃と作し、脫し稱可せずんば、則ち違負を成さん。若し我、今、太子と共に語論せんも、太子の意深くして、終に道ふを肯んぜざらん。我今狐疑す。何の方便をか作さん』と。復。更に思惟す、『我今、種種の雜寶を以て、無憂器を作り、持て太子に與へ、太子をして用て諸の女人に施さしめ、密に使を遣はし、覘ひて其の意を觀察せしめ、太子の眼目の瞻矚の誰が邊に在るかを看て、我即ち娉取して其の爲に妃と作すべし』と。

時に淨飯王、即ち雜寶玩弄の無憂の器を造作せしむ。所謂、金銀もて種種に雜飾す。作り已り

て、即ち迦毘羅城に於て鐸を振りて唱へて言はく、『今より已去、七日に至る來た、我が太子、釋種一切の諸女を見んと欲す、見已りて、一切雜寶の種種玩弄の無憂の器を施さんと欲す。城内の有ゆる一切の諸女、悉く我が宮門に來集すべし』と。

爾の時、太子、六日已に過ぎて第七日に至り、先に出でて王宮の門前に在り、筌蹄に據りて坐す。是の時、城内の一切の諸女、皆、種種雜寶の瓔珞を以て各其の身を嚴り、宮門に來集して太子に見えんと欲し、後に種種諸寶の無憂の器を受け取らんと欲す。是の時、太子、諸女の來るを見、即ち種種の寶器を持して彼等諸女に施與す。四方より來りて太子を見る者、是の太子の威德の大なるを以ての故に、諸女、正しく太子を看る能はず、但、寶器を取り、各低頭して速に疾く過ぐ。寶器、盡き已りて最後に一〔八〕婆私吒(Vasiṣṭha)族の釋種大臣たる摩訶那摩(Mahānāma)有り。其の女を名づけて耶輸陀羅(Yośodharā)と爲す。前後に侍從する衆多の婢媵に圍遶せられて來り、遙に太子を見て峨峨として睛を注ぎ、目を擧げて雅歩し、瞻觀直眄して目斜に〔九〕闚ず、漸進〔一〇〕前趍して來りて太子に近づくに、舊の相識の如くして曾て愧顏無く、即ち太子に白して是の如き言を作す、『太子、今我に雜寶の無憂器を與へ來るべし』と。太子、報じて言はく、『汝の來るや既に遲し、皆悉く施し盡せり』と。彼の女、復更に太子に白して言さく、『我に何の過有りてか、汝今我を欺きて、寶器を與へざる』と。太子、答へて言はく、『我、汝を欺かず、但、汝後に來りて、自ら及ばざるのみ』と。是の時太子の指邊に一の所著の印環有り。價、百千に直る。指より脫して耶輸陀羅に與ふ。耶輸陀羅、太子に白して言はく、『我、汝の邊に於て、止、爾に許の物に直ひすべけんや』。太子、報じて言はく、『我が著する所の自餘の瓔珞、意に任せて取れ』と。彼の女、白して言はく、『今我豈、太子を剝脫すべけんや、只太子の身を莊嚴すべきのみ』と。太子に語りて是の言を作し已るや、心に喜歡せずして即ち迴還して去りぬ。

〔八〕婆私吒。婆羅門族學者の門地にして、毗奢蜜多家と相并んで、常に佛典中に見ゆ。こゝは刹帝利族に此名を用ふれども、恐らくはその背後に婆羅門學者の門地を豫想すべし。

〔九〕闚、音はけい、少しく視る。

〔一〇〕趍は趨なり。

爾の時、世尊、成道の後、尊者優陀夷（Udāyin）、佛に白して言さく、『世尊、云何ぞ、如來の王宮に在せる時、身の一切の無價の瓔珞を將て、脱して持つて耶輸陀羅に施與して、能く彼の心に歡喜を生ぜしめたまはざりしや』と。佛、尊者優陀夷に告げて言はく、『汝、優陀夷よ、至心に諦聽せよ、我當に之を說くべし。耶輸陀羅は、但に今世に共に瓔珞を與へて歡喜せざらしむるのみに非ず、其の往昔來曾て少緣に因りて瞋恨を生ぜるが故に、復、多種の珍寶を布施すと雖も猶ほ歡喜せざるなり』と。優陀夷言さく『甚だ奇なるかな、世尊、此の事は云何、願はくは我が爲めに說き給へ。』

〔二〕爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『我念ふに往昔無量世の時、迦尸國（Kāśi）內波羅㮈城に時に一王有り、邪倒の見を信じて治化を行へり。彼の王に子有り、〔三〕少罪僁を造る。父王、驅擯して國界を出でしむ。漸漸に行きて一天寺中に至り、婦と共に相隨ひて居停して住す。時に彼の王子、將つ所の食粮、皆、悉く罄盡く。王子、遊獵して諸蟲を殺捕し、以用て活命す。所獵の處に一鼉蟲を見、趁りて之を殺し、卽ち其皮を剝ぎて水中に內れて煮るに、その熟するに向はんとして、汁便ち渴盡く。是の時王子、其婦に語りて言はく、『肉は未だ好く熟せず、卿、更に水を取れ』と。彼の王子の婦、卽便ち水を取らんとす。婦の去りて已後、王子、飢うること急にして、忍耐する能はず。卽ち鼉肉を食して一切悉く盡き、片殘をも留めず。時に王子の婦、水を取りて迴還り、其の夫に問ひて言はく、『此中の鼉肉は、今何處にか在る』。王子報じて言はく、『鼉、忽然として活き、今已に走り去れり』。其婦信ぜず、『何ぞ忽ちにして是の如けん、鼉は煮え已りて熟す、云何ぞ能く走らん』と。婦、心に信ぜずして心に思念す、『必ず、これ我が夫の飢うること急にして食ひ盡し、我を誑りて走れりと言ふならん』と。情懷瞋恨して心常に歡ばず。後、數年にして、其の父、命

【二】大事卷二、六四頁以下にこの本生話出づ。
【三】僁。俗の愆、あやまり。

終す。時に諸大臣即ち王子を迎へ、灌頂して王と爲す。既に王と作り訖りて、得る所の衆寶、及び諸の奇珍、種種の衣裳、無物、皆、悉く妃に與ふ。其の妃、納むと雖も而も面顔色の悦ばざること前の如し。爾の時彼の王、其の妃に語りて言はく、「我が一切の寶、無價の物は、以持て妃に賜ふ、何の故に顔色の歡悦ならざること、前の如くにして異らざるや」と。時に其夫人、即ち偈頌を說いて以て王に報じて言はく、

「最勝の大王聽きたまへ
往昔遊獵の時　箭を執り或は刀を持ちて　野鼬を射殺して死なしめ
皮を剝ぎて煮　熟せんとするや　我をして水を取つて添へしむ
肉を食して殘りを留めず　而して我を誑りて走れりと言へり」

優陀夷に告ぐ、これ、汝當に知るべし。爾の時の王とは、我が身これなり。其の王后とは、今日の耶輸陀羅これなり。我、爾の時に於て少許の犯觸後時に續き、多く財寶を以て與へて和適を望めども、而も恨を懷きて猶ほ喜歡せざりき。今日も亦然り。無量諸種の錢帛を將てすと雖も、亦、其の心をして歡喜せしむる能はず」。

時に淨飯王所遣の密使の太子を察する者、一心に太子の眼目の瞻矚する所、諸女と相當語對する所を覩、而して彼の密使委悉皆知り、知り已りて即時に王の所に往詣し、王に白して言はく、『大王、當に知るべし、釋大臣摩訶那摩なるもの有り。其女、後に來りて太子と共に語り、數番往復して兼ねて且つ微笑し、停住すること少時、調戲言語す。太子、彼の女の二顔倶に悅び、彼此答對して四目相當せり』と。

時に淨飯王、彼の密覩の是の如く語るを聞き已り、心內に思惟すらく、『太子の意、彼の女を得んと

欲するならん』と。時に淨飯王、好吉宿の良善の日を看て、卽ち國師婆羅門を喚び來り、釋種摩訶那摩大臣の家に向ひて、是の言を作さしむ、『卿に女有るを知る、今、我が太子の與に妃と作すべし』と。此時、國師、王の語を聞き已り、卽ち釋種の摩訶那摩大臣の家に詣り、是の如きの言を作す、『摩訶那摩よ、王の勅是の如し』と。時に釋大臣、國師に報じて言はく、『我が釋迦の法、相承是の如し、[一三]若し技能の、一切に勝る者有らば、彼の人の邊に、卽ち女を嫁し與へん。若し技能無くんば、女を與ふるを得じ。大王の太子、深宮に生長し、耽湎嬉戲して未だ曾て學習せず、技能有ること無く、弓射、天文、兵書、戎仗、一切の戰鬪、捔力、拳捷、悉く未だ工みに閑はず、我、何の故にか、今、無藝の人の邊に、女を嫁し與へん』と。是の時、國師、是の語を聞き已り、還りて王の所に至り、是の如き語を將て具に王に白す。

時に淨飯王、此の言を聞き已り心に愁惱を懷き是の如く思惟す、『摩訶那摩の此の語や如法なり、我に向ひて實論し、一の虛妄無し』と。是の念を作すと雖も、而も、王の內心、悵怏默然として迷悶して住す。其の狀、坐禪思惟するに如似たり。

太子、是の時、父王の面の容色を失し、悵怏として歡ばず、猶ほ坐禪思惟と一種なるが如きを見、此事を見已りて漸く王の所に至り、王に問うて言はく、『未審し父王よ、何の緣を以ての故に、是の如く愁惱し、獨坐して思惟したまふか』と。是語を作し已るや、時に淨飯王、太子に答へて言はく、『子、須らく我に是の如き事を問ふべからず』と。太子再問す。父王、重ねて止む。太子、是の如く三問す、『父王、大王よ、要らず須らく我に報じて、所以に我が心の疑を解きたまふべし』と。時に淨飯王、三たび太子の是の如き事を問ふを見、卽ち太子に向ひて、前の所說の如くす。太子、知り已りて、父王に問うて言はく、『父王よ、頗し父王の城內に、人の能く出でて我と共に技藝を試むもの有るを知りたまふや以不や』と。時に淨飯王、是の語を聞き已りて卽ち大に歡喜し、踊躍身に遍ねくして

【一三】妙齡の女子が、一定の日を期して、國內の武藝に達せるものに競技を求め、その最勝のものを以て、夫とするは、古代印度に於て行はれたる一種の結婚法なり。之をスヴァムバラ(Svayambara)といひ、頗る華麗且つ壯快なる儀式なりき、

自ら勝ふる能はず。即ち更に重ねて太子に審問して、是の如き言を作す、『善い哉、太子、汝、實に能く諸技藝を捔するや不や』。太子、答へて言はく、『大王よ、善く聽きたまへ、我、今、實に能くす。大王よ、但、當に速に諸釋種の一切の童子を集め、我と共に諸有の技藝を捔試せしむべし』と。時に淨飯王、勅して迦毘羅城內の街巷四衢の道頭に、悉く鐸を振りて大聲に唱令せしむ、『今より以去、計して七日に至らば、我の儲宮、悉達太子、今、其の有ゆる諸技を出さんと欲す、若を解する者有らば、悉く聚取して共に捔試し看しめよ』と。時に六日過ぎて第七日に至り、五百の釋種の諸童子等、悉達を首と爲し、並に皆聚集す。聚集し訖已りて相共に城を出で、一寛地の是の諸童子の技能を出す處に至る。時に釋大臣、即ち好く耶輸陀羅を莊嚴し、上勝の〔四〕垜を爲し、是の如き言を作す『誰か能く善く一切の技藝に通ずる、最勝上者に、即ち此女を以て、其が與に妻と作さん』と。時に淨飯王、諸釋種の耆舊長德と共に先んじて至る。復、無量無邊の雜姓の男子女人、童男童女有り。皆、悉く聚集し、彼の試場たる寛地の所に詣り、太子及び諸釋種の一切童子の技能を捔試し、誰か最も勝となるかを觀んと欲す。是の時諸の釋種童子の文學に快き者有り、先づ太子と共に、手筆を試む。時に釋種有り、相共に謂つて言はく、『今は宜しく毘奢蜜多をして、爲めに試師と作らしむべし』。即ち之に語りて言はく、『汝、諸童子の內、手筆の誰が勝れるか、或は復、快書、疾書、善書、解多種書を觀察すべし』と。爾の時、毘奢蜜多大師、先づ太子の諸書中に於て最勝最上なるを知り、熙怡微笑して偈を說きて言はく、

『一切の人間及び天上　乾陀、修羅、迦樓羅の
所有の文字諸の書典を　太子は遍歷して皆通達す
我が身及以び汝等輩は　此の如き書籍の名だも知らず
人間の悉く解せるを我試み來れり　定んで知る其の勝や汝等の如かざるを』

〔四〕垜は垜、射的をかけおく處　或は埒に作る。興人、土を積むを以て埒といふとぞ。

頭の時、彼等釋種の徒衆、詳に共に齊しく淨飯王に白して言はく、『我今已に知る、大王の太子の、書典中に於て最も勝上たるを。算計須らく試むべし、誰か明なるを知るを得ん』と。是の時、衆中に一の最大算計の師有り、[一五]頞誰那（Arjuna）と名づく。一切の算計に最第一たり。時に釋衆は頞誰那を喚び來り、將て往いて試驗せしめんとし、語りて言はく、『尊者よ、汝、好く諸童子の中に、誰か算計の最第一たるかを觀看よ』と。時に太子の算や、一釋種の明了なる童子をして、對して算籌を下さしむるに、而も供なる能はず。更に二童子下すも猶ほ供ならず。三童子下すも亦供なる能はず。乃至、一十の童子倶に下すも、而も亦供ならず。二十、三十、四十、五十、一百が、共に下すも亦供ならず。二百、三百、乃至、四百、五百が、一時に盡く下すも、猶尙ほ供ならず。是の時太子、是の如き言を作す『汝等、今算せよ、我當に下すを爲すべし』と。時に一釋種の童子算を唱へ太子下すを爲す。算し得る能はず。太子復言はく、『二人雙び計せよ』と。復、及ぶ能はず。太子復言ふ『乃至一百、一時に共に計せよ』と。猶ほ及ぶ能はず。太子復言はく『汝等、何ぞ是の如く相競ふを假らん。但此等の輩、一切一時に各自に計唱せよ、我當に下すを爲すべし』と。時に諸釋種の五百の童子、一時に倶に唱ふ。太子、共が爲めに一時に齊しく下すに、上に數へたるが如く、一より起りて、乃至、數を盡くすも、太子は錯らず、亦復亂れず、安詳審諦に、次第して下す。彼等一切の諸釋童子は、力を盡して共に算するも、悉達太子の萬分の一にだも及逮ぶ能はず。時に頞誰那國大算師、心に密に驚き怪しみ、極めて歡喜を生じ、而して偈を說きて言はく、

『善い哉や捷利にして深く憶持し　分明に唱下して錯有る無く
五百の釋童の算を解すと稱するもの　一時に共に對して當る能はず。
是の如き智慧正念の心より　算計すること疾速に甚だ深奧
是の等算師や天下を計し　巨海の渧數をも悉く應に知るべし

【一五】頞誰那。大婆羅書五王子の中子にして、後に神位を取れる英雄は、この名なり。本經の此の名は、この大文學を豫想すべし。

汝等默然として且つ聲を禁め　須らく彼と與に相捔競すべからず
其れ既に是の如き術を解知す　應に我と共に相校量するを得べし』

時に彼の釋衆一切、皆希有の心を生じ、坐より起ちて、十指掌を合し、太子を頂禮して謂ふ、『悉達多太子大勝す、眞實に大勝す』と。同聲に、復、淨飯王に白して言はく、『善い哉や、大王、大に善利を得たり。善く人間に生れたまへり。大王よ、今や是の如き聰睿大福德の子、智慧の子を生む。舌根、是の如く輕便囀滑にして、口業を成就す』と。時に淨飯王、熙怡微笑し、太子に語りて言はく、『善い哉や、太子、汝今、能く此の頞誰那大算の師と、世間の方便智を計算して、能く相入るを得るや不や』と。是時、太子、父王に答へて言はく、『大王よ我能くせん』と。時に淨飯王、太子に語りて言はく、『汝、若し能くせば、當に自ら時を知るべし』と。

時に頞誰那大計算師、太子に語りて言はく、『仁者太子よ、汝、億上の算數を知るや以不や』。太子、答へて言はく、『我、甚だ之を知る』。時に頞誰那算師、復言はく、『汝の知るは云何、我が爲に之を說け』と。太子答へて言はく、『凡そ億の中に入る算計數は、汝等、諦に聽け、我今之を說くべし、一百の百千、是を拘致(koṭi)隋に千萬と數ふ。と名づけ、其の百拘致を阿由多(ayuta)隋に十億と數ふ。と名づけ、百阿由多を那由他(nayuta)隋に千億と數ふ。と名づけ、百那由他を波羅由他(prayuta)隋に十萬億と數ふ。と名づけ、百波羅由他を恒迦羅(kaṃkara)隋に千萬億と數ふ。と名づけ、百恒迦羅を頻婆羅(vimbara or bimbara)隋に十兆と數ふ。と名づけ、百頻婆羅を阿芻婆(akṣobhya)隋に千兆と數ふ。と名づけ、百阿芻婆を毘婆娑(vivāha)隋に十萬兆と數ふ。と名づけ、百毘婆娑を鬱僧伽(utsaṅga)隋に千萬兆と數ふ。と名づけ、百鬱僧伽を婆訶那(vāhana)隋に十京と數ふ。と名づけ、百婆訶那を那伽婆羅(uāgabala)隋に千京と數ふ。と名づけ、百那伽婆羅を帝致婆羅(ṭiṭila, ṭiṭibha or ṭiṭibala ?)隋に十萬京と數ふ。と名づけ、百帝致婆羅を卑婆娑他那波若帝(vyavasthāuaprajñapti)隋に千萬京と數ふ。と名づけ、百卑婆娑他那波若帝を醯兜奚羅(hetuhila)隋に十垓と數ふ。と名づけ、百醯兜奚羅を迦

羅逋多(karaphu or karabha) 隋に千咳と數ふ。 と名づけ、百迦羅逋多を醯都因陀羅陀(hetuindriya) 隋に萬咳と數ふ。 と名づけ、百醯都因陀羅陀を三蔓多羅婆(samāptalambha) 隋に十萬咳と數ふ。 と名づけ、百三蔓多羅婆を伽那那伽尼多(gaṇanāgati) 隋に十秭と數ふ。 と名づけ、百伽那那伽尼多を尼摩羅闍(nivaraṇa or nimba-raja) 隋に千秭と數ふ。 と名づけ、百尼摩羅闍を目陀婆羅(mudrābala) 隋に十萬秭と數ふ。 と名づけ、百目陀婆羅を阿伽目陀(agramudra) 隋に千萬秭と數ふ。 と名づけ、百阿伽目陀を薩婆婆羅(sarvabala) 隋に十壤と數ふ。 と名づけ、百薩婆婆羅を毘薩闍波帝(visaṃjñāvati) 隋に千壤と數ふ。 と名づけ、百毘薩闍波帝を薩婆薩若(sarvasañjñā) 隋に十萬壤と數ふ。 と名づけ、百薩婆薩若を毘浮登伽摩(vibhūtigama) 隋に千萬壤と數ふ。 と名づけ、百毘浮登伽摩を婆羅極叉(tallakṣa or balākṣa) 隋に十溝と數ふ。 と名づく。是の如き算計の數に入りて、其の須彌山も、若し斤兩銖分を算知せんと欲せば、悉く知るを得べし。此より以上に復一算有り、陀婆闍伽尼民那(dhvajāgrāramaṇi)と名く。此の已上に復算計有り。奢槃尼(dhvajāgrani-śrāvaṇi)と名づく。此の已上に復算有り。波羅那陀(praṇāda ?)と名づく。此の上に復算有り、伊吒(iṭṭā)と名づく。此の上に復算有り、迦樓沙吒啤多(karṣṭuvitā ?ḳuṭṭāvitā)と名く。此の上に復算有り、薩婆尼差波(sarva-ṇikṣepa ? sarvaṇikṣepatā)と名づく。此の計に至り、恒河沙等の一切の算數、總覽して收め盡す。此の上に復算計の數有り、阿伽娑婆(agrasāra or agrasabha ?)と名く。此の數は一恒河沙の億百千萬の恒河沙の數計を數へ、取りて悉く皆、總て此に入る。而して此の上に復、更に計有り、波羅摩菟毘婆奢(paramāṇu-vipāśya ? paramāṇu-rajaḥ-praveśa)と名づく。

時に頞誰那大計算師、太子に語りて言はく、『是の如く已に知る。其の微塵數算の計に入ること、更に復云何。今亦須らく知るべし』。太子答へて言はく、『汝等、諦に聽け、我今之を說かん。凡そ七微塵(aṇuraja)は一牕塵(abraja)を成す。七牕塵を合して一兎塵(śaśaraja)を成す。七兎塵を合して一羊塵(aviraja)を成す。七羊塵を合して一牛塵(goraja)を成す。七牛塵を合して一蟣(likṣā)を成す。

七蟣を合して一虱を成す。七虱を合して一芥子(yūka)を成す。七芥子を合して一大麥(yava)を成す。七大麥を合して一指節(aṅguliparva)を成す。七指節を累ねて半尺(ardha vitasti ?)を成す。兩半尺を合して一尺(vitasti)を成す。二尺は一肘(hasta)。四肘は一弓(dhanu)。五弓は一杖。其の二十杖を名づけて一息と爲す。其の八十息を拘盧奢(krośa)と名づく。八拘盧奢を一由旬(yojana)と名づく。此衆中に於て誰か能く知る有りや。幾許の微塵もて、一由旬を成すかを』。隋の數計に依れば三百八十四里一百三十步を得。

時に頞誰那大算計師、太子に報じて言はく、『大德仁者よ、我だも尙ほ是の如きの數を知らず、我今說くを聞かば、猶ほ迷悶を生ぜん。況んや復自餘の少智少聞愚癡の人をや。然りと雖も、唯願はくは太子よ、我等の爲めに、幾許の微塵の一由旬を成すかを說きたまへ』。

卷の第十三

捔術爭婚品第十三の下

爾の時、太子、頞誰那大算師に報じて言はく『汝等、諦に聽け。其の一由旬(yojana)は、微塵(rajas)の多少漸漸積滿して一阿閦婆(akṣobhya)。是の如く更に復、一那由他。更に復、二十億那由他百千。復、六十億百千。復、三十二億。復、五百千。復、一百千、是の如き等の數の微塵の多少、總計して此の一由旬を足滿す。是の如く次第に展轉して、由旬の大小を數ふれば、此の閻浮提は、縱廣正等にして七千由旬、西瞿耶尼は八千由旬、東弗婆提は九千由旬、北鬱單越は十千由旬なり。是の一の三千大千世界由旬の數や、縱廣是の如く、大小を次第す。此の由旬に依りて是の如くして、若干百由旬、若干千由旬、若干百千由旬を計取す。其の一由旬に、復、若干微塵の數有り。總計して得べし。所以は何ん。[一]此の計數や、一切の數に過ぐ。故に——不可得數、不可計知の諸微塵等を、算計すと名く、三千大千世界の內に之有る所の者なり。

時に頞誰那大算計師、及び諸釋種一切の宗族、大歡喜を生じて踊躍すること無量、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず。身上に唯一箇の單衣を留めて餘衣は悉く解き、以て太子に施し、復、無量無邊の瓔珞を脫して太子に散施し、讚歎して言はく『善い哉、善い哉、太子、甚深にして快知し快解す』と。是の如く次第に算計の中に於て太子復勝ちぬ。所謂、書數智計の淵玄なる、太子、無比なり。彼等諸釋、而も是の言を作さく『我等已に知りぬ。今此の太子の書算の中に於て、最勝無比なるを。其の次に、戎仗兵法を須らく試むべし、これ誰か最も勝るるぞ、是れ誰か最も勝るゝぞ』と。

[二]爾の時、彼の諸釋種の宗族、其の姓中の一大臣、娑訶提婆(Sahadeva)と名づくるを推して、置い

【一】(譯文極めて逐語的なり)。

【二】以下、弓術競技のこと。又Lalit・に一致す。

て證察と爲し、之に白して言はく、『大德和上よ、願はくは好く心を用ひて何の童子か武技の中に最も勝妙なるかを觀よ。——所謂、不空、及び鬪聲等、射遠、射剛、挽强、牽臂なり』。爾の時、戲場に、阿難陀(Ānanda)童子の爲めに鐵鼓(ayasmayī bherī lakṣam)を置立安施す。射所を去ること二拘盧奢、以て其の表と爲す。提婆達多童子の射る所は、鐵鼓を四拘盧奢に安置し、乃至、難陀(Nanda)童子の爲めに鐵鼓を六拘盧奢に安置し、大臣婆私吒氏摩訶那摩の爲めに、鐵鼓を八拘盧奢に安置す。是の如く次第に、自餘の童子各相去り、遠及び近に隨ひて射表を安置し、悉達太子の爲めに十拘盧奢に安置し、牢剛なる鐵鼓を以て射表と爲す。

時に阿難陀弓を彎き、彼の二拘盧舍に置く所の鐵鼓を射て、纔に中つるを得たり。及以び外の更に遠きは、則ち過ぐる能はず。提婆達多童子の所射は、四拘盧奢安置の鼓、射て卽ち著きしも、更に過ぐる能はず。摩訶那摩大臣の所射は八拘盧奢の鐵鼓、著くを得しも遠く過ぐる能はず。是の諸釋子、各所立の鐵鼓、遠近悉く皆射著せしも、其の分已外は越過する能はず。爾の時、次第して悉達太子の射んと欲するに至り、有司、所奉の弓を進上す。太子、暫く手を以て施張せんと欲し、弓の强弱を按じ、弦の牢[三]斫を[四]拼くや、其の弓及び弦、時に應じて碎斷す。悉達太子、卽便ち問うて言はく、『此の城內に、誰か好弓の我が牽挽に堪へ、我が氣力に禁ふる有りや』時に淨飯王、心に歡喜を懷き、卽ち報じて言はく、『有り』。太子、問うて言はく、『大王よ、有りと言ふは、今、何處にか在る』。王、太子に報ずらく、『汝の祖父を師子頰と名づく。彼に一弓有り。現に天寺に在り。常に香華を以て之を供養す。然るに彼の弓や、一切城內の釋種眷屬は、乃至、彼の弓を[五]施張する能はず。況んや復牽挽するをや』。太子語りて言はく、『大王よ、速かに疾く、弓を取りて來らしめよ』。是の時、使人、彼の弓を將て來り、旣に衆中に至り、先づ一切の釋種諸童子輩に持授するに、之を執る所の者、施張する能はず。況んや復挽かんと欲するをや。其の後、次に將て摩訶那摩大臣

【三】斫、慧琳音義に肕(かたし)也と註す。

【四】拼は抨(はじく)、彈に同じ。

【五】施張の施、音、以豉切、延の義、可洪音義に拖に作る。拖は曳也挽也。又、引也。拖又は拕(ひく)、或は扡(牽、ひく)にも作らる。拖の方、この條下に適すべきか。

に付與す。時に彼の大臣、其の有ゆる一切の身力を盡して、彼の弓の弦を施張する能はず。況んや復牽挽するをや。然る後、乃ち將て太子に奉進す。太子執り已り、安坐して搖かず、微かに少力を用ひて身體を動かさず、左手もて弓を執り、右手にて弦を捋み、指を以て纔に挽くに、拼きて聲を作し、彼の聲、迦毘羅城に遍滿す。城内の有ゆる一切の人民、悉く皆恐怖し、各各問うて言はく、『此はこれ何の聲ぞ』と。或は復人有り、他より聞きて言はく、『悉達太子、其の祖父、師子頰王所用の弓を取り、暫く施張し牽挽して聲を作す』と。此の因緣の爲に、淨飯大王、無量無邊の諸物を將て、用て太子に供ふ。

是の時、太子、彼の弓を施張し、右手に箭を取り、是の如き微妙の身力を出現して彼の箭を牽挽し、平胸にして射、阿難陀及び提婆達、乃至、大臣摩訶那摩、三人等の鼓を過ぎ、其の箭、十拘盧奢に安置せらるる處に射逮び、皆悉く洞過して虛空に沒す。爾の時、諸天虛空に在りて、偈を說いて言はく、

『是の最勝善地の中に　往昔の諸佛の座に坐して　摩伽陀國の人民衆が、　今利箭と善勝弓
とを覩る如く　六度成就し智慧力もて　一切の諸怨敵　天魔[6]煩惱及び陰等を降伏し
當に　常樂我淨[7]の因を得べし
菩提の眞實道を退かず　永く生死苦の根栽を斷じ　病老憂患悉く蠲除し　彼の涅槃微妙
の智を證せん』

爾の時、諸天、是の偈を說き已り、各、種種の天の妙雜花を將て太子の上に散じ、散じ已るや忽然として身を沒して現ぜず。是の時、太子が射たる所の箭を、天主帝釋、虛空中より、秉執りて、將て三十三天に向ひ、天上に至り已るや此の箭の爲めの故に、彼の天中に箭節を建立し、常に吉日を以て諸天衆集し、諸の香華を以て此の箭を供養しぬ。乃ち今に至るも、諸天に猶ほ此の箭節の日有

【六】天魔・煩惱魔・陰魔に死魔を加へて、四魔といふ。
【七】常・樂・我・淨は涅槃の屬性なり。之を現象界に見るを四顚倒といふ。

り。

爾の時、釋種の諸眷屬等、復是の言を作す、『悉達太子の射技最も遠く、已に衆人に勝る。今、更に須らく射御の物を試むべし、これ誰か能く過ぎん』と。是の時、彼の地を相去る遠からず、自然にして多羅(tāla)樹の行有り。其の中に或は諸釋の童子有り。一箭射を用て即ち一多羅樹を穿過し、或は二多羅樹を穿過し、或は三、或は四、及び五を過ぐる者有り。

是の時、太子、箭を執りて一射し、即便ち七多羅樹を穿過し、彼の箭、七多羅樹を穿ち已りて、箭便ち地に墮ち、碎けて百段となる。時に諸釋種、復更に別に鐵の猪の形を立つ。其の內に、或は釋種の童子の、箭を執りて一の鐵猪形を射て過ぎ、或は二、三、四及五を過ぐる者有り。太子箭を執りて一射し、便ち七の鐵猪を穿ちて過ぎ、七猪を過ぎ已りて、彼の箭地に入りて黃泉に至る。其の箭の穿つて地に入れる處、即ち一井を成す。今に於て人民、常に箭井(śarakūpa)と稱す。

[八]時に諸釋の族、復更に七口の鐵甕を立て、中に滿して水を盛る。其の中に、或は釋種童子の、箭鏃を熱燒して極めて猛赤ならしめ、用て一鐵甕を射て徹す。或は二、或は三、止、四、五に至る。太子、彼の燒熱せる赤箭を執りて一射し、便ち七の鐵の水甕を過ぐ。甕を去る遠からずして即ち一大娑羅(sāla)樹林有り、其の箭過ぎ已りて悉く彼の林を燒き、一時に蕩盡す。

時に諸釋の族、復是の言を作す、『射御の技能は、太子已に勝る。今復斫りて一下に斷つべきを試みん』と。其の中、或は諸の釋種の子に、手に利劍を執り、一下して一多羅樹を斫り斷つあり。或は二、或は三、乃至四、五なり。太子の手、利劍を執り已るや、一下して七多羅樹を斫り斷つ。彼の七根の多羅樹は、復、斫らると雖も其の樹倒れず。彼の諸釋種、是の如き言を作す、『太子、一樹を斫りて徹する能はず』と。是の時、色界淨居の諸天、即便ち化して大猛威風を作し、彼の樹を吹き倒す。其の次に難陀、一束の竹を將て太子の前に來る。其の內に密に按摩所用の鐵棒を置きて中

【八】以下、擲力の前まで、Lalit.に欠く。

に著け、以て太子に奉る。太子、此の一束の竹を見、其の間に鐵棒の有るを謂はず。多力を用ひず、左手に劍を執り、一下して[九]剗斷すること、譬へば壯士の、手に利刀を執りて一莖の竹を斫り、或は一箭を斫るが如し。是の如く是の如し。太子の彼の按摩の鐵棒を剗り、謂ひて竹束と言ひ、左手に劍に執り、多力を用ひず、一下して斬斫し、時に隨つて徹過す。

時に諸釋種、復此の言を作す、『已に斬斫を試むるに、太子最勝なり。今復更に須らく、諸象の披を作すべし。跳擲上下、誰か復能く爲す』と。其の中に復諸種の童子有りて、象の鼻前より象背に跳上し、或は童子有りて脚より跳上し、或は童子有りて尾より跳上す。其の跳上する時、或は手に麁大の鐵棒を執持し、或は鐵輪を執り、或は鐵[一〇]排を執り、或は戟槊を執り、或は長刀を執り、左に執りて跳上し、上り已りて右接し、即ち以て地に擲つ。太子の跳る時、[一一]偝立却走し、脚象牙を蹋みて象頂に上り、左手に種種の諸器を執持し、或は棒、或は輪、或は排、或は槊、及以び長刀、左に執りて右に擲げ、右に執りて左に擲げ、而して地に投ず。

諸釋種の族、既に及ぶ能はず。復此の言を作す、『今、須らく馬上に更に共に相試むべし』と。其の中、或は釋種の童子有り、手に槊を執りて騰り、或は箭を執りて跳り、一馬より第二馬に騎りて、槊を槊め刀を弄ぶ。或は復箭を以て指環を射るに、或は遇中するあり、或は著せざる者有り、或は釋子有り、二馬を跳過して第三馬に騎り、乃至射て著し、及以び著せざるあり。或は三馬を跳り、跳り已りて即便ち第四馬に騎り、射て著し、著せず。或は第四馬を跳りて第五馬に騎り、及び著し、著せず。太子、是の時、手に槊を執り、或は弓箭を執り、六馬を跳過して第七馬に騎り、箭もて射て、乃至、頭髮毛端、皆悉く著するを得たり。

是の如く次第に、或は車上に於て輕便を示現し、或は[一二]筋陟を現し、是の如く種種に、或は音聲を試み、或は歌舞を試み、或は[一三]相嘲を試み、或は漫話、戲謔の言談を試み、或は染衣を試み、或

【九】剗を可洪音義に伐草也と註す。惠麟音義には芟に作り、除草也、亦斫也と註す。

【一〇】排は(棑たて)の誤。可洪音義には梁に作り、盾軍器也と註す。

【一一】偝或は背に作る、同義なり。

【一二】陡は阧。筋阧(もんどり)惠麟音義に佌徒鯠徒也と註す。

【一三】嘲。惠麟音義にいふ、「又作啁 竹交反、嘲謔、啁調也、周相戲調也」。即ちたはむれて互にいひあふをいふ。

は珍寶及び眞珠等を造り、或は草葉に畫き、雜香を和合し、博奕、樗蒲、圍碁、雙六、握槊、投壺、擲絶、跳坑、種種の諸技、皆悉く備さに現ず。是の如き技能、試むる所の者、而も一切處に、太子皆勝れり。

[一四]時に諸釋種、復是の言を作す、『我等今、悉達太子が一切の技能に悉く皆精勝なるを知る。今、須らく相撲つべし。誰か能くするを知るを得ん』と。是の時太子、却いて一面に坐す。其の諸釋種一切の童子、雙雙に出でて各各相撲つ。是の如くして次第に三十二[一五]黠まで、諸童子等相撲つて各休み、却きて一面に住す。次に阿難陀、忽ち前著し來りて太子に對し、共に相撲んと欲す。太子、始めに手もて難陀を執らんと欲するや、太子の身力及び威德力に、彼禁へずして卽便ち地に倒る。其の後、次ぎ至りて提婆達多童子前行し、貢高の心、我慢の心、曾て悉達太子に比敷せざるを以て、太子と共に威力を捔競せんと欲し、太子と共に一種齊等ならんと欲し、挺身起出して彼の戲場を巡り、太子に面向して疾走し來り、太子を撲たんと欲す。爾の時太子、急ならず緩ならず、安詳として心を用ひ、右手に提婆達多童子を執持して行き、其の身を擎擧げて、足地に著かず、三たび試場を遶り、三たび空に旋し、其の貢高を降伏せんと欲するが爲の故に、害心を生ぜずして慈悲を起し、安徐として撲ちて地上に臥せ、其の身體をして損ぜず傷かざらしむ。太子復言はく、『咄、汝等輩、人人の我と共に相撲つを假らず。汝の一切、一時に盡く來りて我と相撲つを饒さん。』爾の時、彼の諸釋種の童子、一切皆憍慢の心を起し、竝に各奔り來り太子に走り向ひて之を撲たんと欲す。是の諸童子や、各手を以て觸るるに、彼等、是の太子の身力、復、威德力を以て、各各禁へず、皆、悉く地に倒る。爾の時、彼の釋の一切、皆、奇特の心を生じ、各、相謂つて言はく、『希有なるかな、希有なるかな、生れてより已來、曾て學習せずして、今日乃ち是の如き等の種種の諸技を出せることよ』と。時に彼の場内の有ゆる人民の之を觀看る者、悉く呼呼叫喚の聲を唱へ、或は種種諸異の

【一四】捔力競技のこと、又 Lalit. に出づ。文一致。

【一五】黠はくみ。慧麟音義に註していふ、部也、類也。

音聲を出し、珠瓔珞及び衣服等を弄びぬ。上には虚空の無量諸天、同じく一音を以て偈を說いて言はく、

『十方一切の世界中の　有ゆる勇健の諸力士
悉く皆力敵すること調達(＝提婆達多)の如きも、　太子の聖一毛にだも及ばず
大人の威德力は無邊なり　暫く手を以て觸るれば皆地に倒る
聖者の威神力は廣大なり　汝等云何ぞ比方せんと欲する
假使不動なる須彌山も　大小の鐵圍甚だ牢固なるも
幷に及び十方の諸山等も　一觸して能く碎くること微塵の如けん
鐵等の强靭なる金剛珠　及以び諸餘の一切の寶を
大智力能く碎きて粉の如くせん。　況んや復此の少力の人を撲つをや』

〔一六〕爾の時、諸天此の偈を說き已り、種種の華を將て太子の上に散じ、虚空中に身を隱して現ぜず。是の如く次第に、悉達太子、一切處に勝れぬ。時に淨飯王、其の太子の有ゆる技能、皆、悉く彼の一切諸人に勝るるを、自眼もて既に見、心に復證知して、踊躍喜歡、其の體に遍滿し、心意適悅して自ら勝ふる能はず。尊上心を以て、勅して白象の瓔珞莊嚴、排具悉く竟れるを喚び、是の言を作す、『我が息太子、此の白象に乘れ、將に城内に入らんとす』と。彼の大白象を太子の乘に擬して、城内より出でしむ。

是の時、提婆達多童子、城多より入り、此の白象を見て人に問ひて言はく、『此の象は誰が許ぞ、何處に將らんと欲するや』と。其の人報じて言はく、『將に城を出でんとするに、悉達の乘に擬せんと欲し、城内に入らんと欲す』と。時に提婆達多、釋の意氣、種姓の尊豪を以て我慢興盛し、身力の强きに倚りて、縱逸放蕩に、諸の忌憚無く兼ねて復妬嫉あり、彼の象の前の少許の地を走り、便

【一六】提婆達多が白象を打殺せること、大事、卷二、七四頁に出づ。又方廣大莊嚴にも出づ、共に簡なり。

ち左手を以て象の鼻を執り、右手もて額を築き、一下して地に倒す。宛轉すること三匝にして遂に即ち命終す。白象の地に臥すや、彼の城門の衆人の往來を塞ぎ、出入を通ぜず道路塡咽す。調達過ぎ已りて、後に又復、童子の至る有り、名けて難陀（Sundarananda）と曰ふ。相續きて來り、城内に入らんと欲し、此の白象の臥して、城門に在りて死し已り、大身もて道路を塞ぎ、諸人民の過ぎて行くを得る能はさるを見、即ち諸人に問ふらく、『誰か是の事を作せる』と。人輩答へて言はく、『此の大白象は、提婆達多の爲に殺さる、左手もて鼻を執り、右手もて額を築き、一下して地に倒すや、三旋して命終せり』と。難陀の思惟すらく、『提婆達多童子、其の自身の力を試みて以て白象を殺す、但此の象身、極大極麁にして城門を汙泥し、人の出入を妨ぐ』と。即ち右手を以て彼の象尾を執り、牽き取りて門を離すこと、七步許なる可し。其の難陀の後、次に太子來りて城内に入らんと欲し、此の白象の城門に在るを見、見已りて諸の行人に借問して言はく、『誰か是の象を殺せる』。衆人の報じて言はく、『提婆達多、一築して殺す』と。太子復問ふ、『誰か牽いて門を離せる』。衆人復言ふ、『難陀童子、其の右手を以て彼の象尾を執り、牽いて門を離して七步に至る』と。太子、復言はく、『善い哉、難陀の作せる事、善なり』と。太子、思惟すらく、『彼等二人、能く其の自らの氣力を示現すと雖も、但、此の象身、甚大麁壯、後に壞爛して、臭、此の城に熏ぜん』。是の如き思惟を作し訖り、已りて左手もて象を擧げ、右手を以て承け、空中より城外に擲置するや、七重の牆を越え、七重の塹を度り、既に擲過し已りて城を離るること一拘盧奢有るべし。而して象の地に墜つるや、即ち大坑を成す。乃至、今に諸人相傳へ、此處を詺けて、象墮坑と爲すは、即ち此は是なり。

爾の時、無量無邊百千の諸衆生等、一時に唱へて言はく、『希有なり、希有なり、是の如き事や。甚だ大に怪むべし』と。各各皆唱ふ、『善い哉善い哉、大人、大士、希有なり希奇なり、未だ曾て聞

見せず』と。而して偈を說きて言はく、

『調達は白象を槊殺し已り　難陀は七歩牽きて門を離し
　太子は手に擎げて虛空に在ること　土塊を以て城外に擲ぐるが如し』

爾の時、大臣摩訶那摩、太子の一切技藝に勝妙智能なること最も上首たるを見、是の言を作す、『唯、願はくは太子よ、我が懺悔を受けたまへ、我、先時に謂つて言はく、「太子、多種の技巧藝能を解せず」と。我をして心疑ひて女を嫁し與へざらしめき。我今已に知る。願はくは我が女を受けて用以て妃と爲したまへ』と。爾の時太子、良善の日及び吉宿の時を占し、自の家資に稱ひて具度を辦じ、大王の勢を持し、大王の威を將て、用て耶輸陀羅を迎へ納れ、諸の瓔珞を以て其の身を莊嚴す。又復五百の婇女と共に、相隨ひて往き、迎へ取りて宮に入り、共に相娛樂し、五欲の樂を受けぬ。是の故に偈に言ふ、

『耶輸陀羅大臣の女　名聞は國を蓋ひて遠近に知らる　吉日を占卜し取りて妃と爲し　迎へ將て來りて宮殿の內に入る
　太子共と共に慾樂を受け　歡娛縱逸して厭くを知らず　猶ほ天主憍尸迦(Kauśika)の
　彼の舍脂夫人(Śaci-devi)と共に戲るる如し』

一七 爾の時、世尊、成道を得已り、尊者優陀夷、佛に白して言さく、『世尊、如來、云何ぞ往昔の時、初め耶輸陀羅を納れんと欲し給ふや、其の大家に生れしを以ての故に取らず、種姓の大なるを以ての故に而も取らず、富貴多財なるを以ての故に取らず、端正華色なるを以ての故に取らで、唯、技藝を出だして、彼の耶輸陀羅を取り得て、用以て妃と爲し給へるや』と。是の時、佛、優陀夷に答へて言はく、『汝、優陀夷よ、至心に善く聽け。但に今日、耶輸陀羅を、我が取れる時のみ、大姓尊

【一七】以下の本生話、大事のアマラー本生に一致す。

豪を以ての故に取らず、乃至、端正の爲めの故に取らずして、唯、技藝を用て之を取得せるには非ず。往昔にも亦然りき』と。優陀夷、言さく、『世尊、此の事云何ん、願はくは、爲めに之を說き給へ』。爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『我念ふに、往昔無量無邊の世を過ぎて、時に波羅㮈城に一工巧鐵作(karmāra)の師有り。其に一女有り。端嚴喜ぶべし。身體正等、面目廣平、世に雙び少なき所、多人敬愛す。爾の時、彼の國の波羅㮈城に、[一八]一長者有り。其の子、喜ぶべく、端正なること、前に說く所の如く異るなし。而して一時、其の長者の子、彼の工巧鐵師の女の、樓上に在りて牕內に面を現はし、外に向ひて觀看るを見、彼の長者の子、是の女を見已りて、卽ち愛心を生じぬ。彼の長者の子、私に心の中に、此の女を記し已りて、速に往きて家に歸り、其の父母に告げて、是の如き言を作せり、「某工巧の家に、一女有り、我が意に貪愛し、取りて妻と爲さんと欲す」。彼の子の父母、其の兒に報じて言はく、「汝、今須らく此の工巧鐵師の女を取りて、我が門を汙辱すべからず。我當に別に、長者の女、或は大臣の女、或は居士の女を覓め、汝に與へて妻と爲すべし」。彼の長者の子、是の如き言を作す、「我、永く餘人の女を用て、以て我が妻と爲さず。我が意、唯、此の工巧鐵師の女を取らんと欲す。我、若し此の女を妻と爲すを得ずんば、必ず自ら身を害し、終に用て活きじ」と。時に長者の子の父母、心に愁へて、兒の命を沒せんことを畏れ、卽ち彼の工巧鐵師を喚び來りて其の家に至らしめ、而して之に語りて言はく、「汝の所有の女を、今我が子に嫁し與へて妻と爲すべし」。工巧鐵師、是の如き言を作す、「我今工巧に非ざる者と、共に婚姻を作さじ」。其の長者の子の父母、答へて言はく、「仁者、何ぞ工巧の人を用て、婚を作すことを爲る。汝の女の、飢寒辛苦して衣食に豐ならざるを愁ふる莫れ」。鐵師、復言はく、「是の如きを知ると雖も、但我今、同類の人を覓む。若し工巧を解せば、我、彼に女を與へん。假令、大資財の具無きも、但、彼に工巧の技有るを取り、家の辦ずる所に隨つて、我卽ち當に與ふべし」。時に長者の子の父母、彼の是の

【一八】 大事は長者子を Jīva-kacola 村の Malangaḍh 婆羅門とせり。

如く言ふを聞き已り、即ち其の子に語ること、前の所說の如し。時に長者の子、既に彼の女と共に心意相當り、兼ねて復、工巧の事を足り解す。精心細意もて、快く即ち針を作り、即ち別時に於て多針を造作し、油脂を以て洗ひて善好く明淨にし、一大束を作りて竹筒中に置き、工巧鐵師の家に詣り向ひ、近巷に至り已るや道頭に在りて、此の偈頌を唱へ、以て其の針を賣る。偈に言はく、

「不澀滑澤の鐵　光明に洗ひて清淨
巧人の造作する所　誰か能く此の針を買ふ」

爾の時、彼の家の工巧の女、樓上の牕門の內に在り、長者の子の偈を說きて針を賣るを聞き、聞き已りて即ち復、此の偈を以て長者の子に答へて言はく、

「咄なる哉狂顚の人　汝甚だ心意無し
忽ち鐵師の舍に來りて　而して針を賣らんと唱ふとは」

時に長者の子、更に復偈を說き、彼の女に報じて言はく、

「喜ぶべき端正の女　我實に顚狂せるに非ず
性はこれ巧智の人　善能く針を造りて作せり
汝の父若し我の　妙に是の如き事を解するを知らば
必ず汝を將て我に妻はし　兼ねて無量の財を送らん」

爾の時、鐵師工巧の女、長者の子の是の如く語るを聞き已り、速に疾く其の父母の前に往き、是の如き言を作す「願はくは爺孃、外に一人有り、上の如く偈を說きて、父母に向ひて善く針を造ることを解すと陳べて、高聲に唱說するを聽け」と。時に彼の工巧鐵師父母、即ち彼の長者の子を喚び來り、入りて家內に至らせ、而して之に問ひて言はく「善い哉、童子、汝、實に善く針を造作することを解せりや」。童子、報じて言はく「我、甚だ能く爲す」。鐵師、復言はく「汝の針を出し來

れ、我試に觀看ん」。時に長者の子、竹筒の裏より一針を拔き出し、彼の鐵師に示すらく、「此をこれ、汝看よ」と。時に彼の鐵師、旣に針を見已りて是の如き言を作す、「善い哉、童子、汝巧に針を作り、大に能く孔を穿てり」と。時に彼の童子、鐵師に語りて言はく、「此の針は是にあらず、竹筒の出す所、別に更に復、此に勝れたる者有り」とて、更に一針を出して彼の鐵師に示す。鐵師看已り、復讃歎して言はく、「大に能善く穿てり」。童子、復言はく、「此は好たるに非ず、更に勝れたる者有り」とて、第三に、別に復更に一針を出し、以て鐵師に示す。鐵師、前の如く美言もて稱讃すらく、「善し、能く善く穿てり」と。童子、復言はく、「此も亦未だ精ならず、更に勝れたる者有り」とて、第四に更に一針を出し、以て示す。鐵師、看已りて復讃歎して言はく、「大に能く造作し、大に能く鑽孔せり」。童子、復言はく、「此は猶ほ未だ善ならず」とて、更に一針を出して示現す。鐵師、看已りて復言はく、「善く作り、善く穿てり」。童子、復言はく、「此は巧なる者に非ず」とて、第六に復、一針を出して以て示す。鐵師、復言はく、「此は實に最勝最妙、善く穿てり」。時に長者の子、還彼の針を取りて手上に置き、一一次第して水中に下し著くるに、而も針悉く浮びぬ。時に彼の鐵師、是の希有未曾見の事を覩、歡喜踊躍して長者の子に向ひ、偈を說きて言はく、

「我未だ曾て聞見せず　能く是の如き針を造れるを
今歡喜心を以て　女を嫁して汝に與へん」

爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、「優陀夷よ、爾の時の長者の子を知らんと欲せば、今の我が身これなり。工巧の女は今の耶輸陀羅これなり。爾の時に當り、我、彼を取りて以て妻と爲す時、大家を以てせず、種姓を以てせず、乃至、端正なるを以ての故に取らず。但、工巧の試驗を以ての故に得たり。今亦復然り、耶輸陀羅は、種姓と端正を以ての故に得ず、乃至、工巧を以て得たり」。

常飾納妃品第十四の上

爾の時、釋種の有ゆる童子、皆悉く端正殊妙なること喜ぶべく、世間に雙少く、多く衆人に樂見せられ、並に皆、先づ一切の諸技に通じて、能く勝る有るなし。所謂、書、畫、算計、造印、及び聲を聞きて著する諸の神射等、一切悉く解し、捷利巧智、聰明黠慧なり。彼の童子の內にて、其の悉達多、最も初首たり。第二は難陀、第三は即ちこれ提婆達多なり。唯、此の童子三人を除いては、餘に更に勝る無し。

時に迦毘羅城內に一釋種大臣有り、姓は檀荼（Daṇḍa）氏、名は波尼（Paṇi）といふ。彼の臣、大富にして錢帛豐饒し資財備具す。如法にして得、理に違ひて求めずして、五穀七珍、積みて山丘の如く、二足四足、象馬牛羊、奴婢僕僮、作使受雇、衆事自ら滿ち、皆悉く充盈す。復更に別に、無量無邊の金、銀、琉璃、摩尼、眞珠、車渠、碼碯、珊瑚、琥珀有り。是の如き等の寶、須ふるに心に稱ひ、乏少する所なし。彼の大臣の家內は、猶ほ毘沙門宮の如くにて、異り有るなし。

時に彼の波尼に一女有り、瞿多彌(Gautami)と名づく。彼の女、端正喜ぶべく雙少し。短からず長からず、肥えず瘦せず、白からず黑からず、偉ならず纖ならず。幼年に處在して國內の寶たり。

時に淨飯王、其の化內の釋の大臣檀荼波尼に、是の如き女有るを聞き、聞き已りて良善宿の日を選擇し、即ち國師諸婆羅門を喚び、波尼大臣の家に向ひて是の如き言を作さしむ、『聞く、汝に女有りて瞿多彌と名く。彼の女を、今、我が太子悉達に與へて妃と爲すべし』と。

其の難陀の父、復、大臣檀荼波尼に女有り、悉達太子に求娉せられて妃たらんと欲すと聞き、聞き已りて亦使人を遣はし、彼の檀荼大臣に語りて是の如き言を作す、『汝が瞿多彌は、我が子難陀に與へて妻と作すべし。若し與へずば、我、必ず汝を損ぜん』と。

提婆達多、復、檀荼波尼大臣に女有り、悉達太子に求娉せられて妃と作らんと欲すと聞き、彼も亦使を遣はし、檀荼に語りて言はく、『汝の瞿多彌を、今、娉嫁して我に與へ、妻と作すべし。若し我に與へずば、我、當に汝の爲めに大禍を生ぜん』と。

爾の時、檀荼波尼大臣、是の如く思惟す、『此等の三人の釋種童子は、皆、悉く端正喜ぶべく、無雙なり。一切の技能、並に各具足するも、悉達太子は最も第一たり。其の次に難陀は復第二たり。提婆達多は即ちこれ第三なり。我が唯一女を、今、若し偏に悉達太子に與へなば、彼の二童子、必ず當に我が爲めに大怨讐を作すべし。若し難陀に與へなば、則ち悉達及以提婆に嫌隟[一]を作されん。若し提婆達多童子に與ふれば、則ち悉達及以難陀に怨惡を搆造せられん』。是の時、檀荼波尼大臣、是の如く悅ばず、憂惱して愁を懷き、顏色怡ばず、思惟して坐して自ら念ずらく、『我、今、何の方便をか作さん』と。時に瞿多彌、父の是の如く默然として坐するを見、其の父の邊に至りて是の言を作す『阿爺、今、何の故に樂まず、憂愁して坐する』と。是の語を作し已るや、其の父、女瞿多彌に報じて言はく、『汝、瞿多彌、此の事を問ふ莫れ、爾の知る所に非ず』。其の女、第二に復父に問ひて言ふ。其の父、又報ずらく、『爾の聞く所に非ず』と。第三に復問ふも又報ずること前の如し。乃至、第四に、其の女重ねて問ふ、『阿爺、必定して須らく女に語りて知らしむべし、藏隱するを得ざれ』と。爾の時、檀荼波尼大臣、女の慇懃に顧問して已まざるを以て、第四に、乃ち其の女に是の言を報ふらく『汝、瞿多彌よ、三たび我に問へり。汝、今諦かに聽け。我、當に之を說くべし。今、淨飯王、使を遣はして語るらく、「我、汝に女の瞿多彌と名づくる有るを知る。我が太子に嫁し與へて妃と爲すべし」と。難陀童子、復、使を遣はし來り、「瞿多彌を索めて持て婦と作さんと欲す、若し與へずば、我、必ず當に汝を損すべし」と。提婆達多も亦、使人を遣はし、「瞿多彌を索めて婦と作すを得んと欲す。若し與へずば、我、要らず當に禍を生ずべし」と。彼の三使人、是の如く汝

【一】 隟、古文の隙の字。

を索む。我、聞きて愁悶し、是の思惟を作す、『一太子に與へなば、則ち二童子は我ために怨を作さん』と。是の故に我今、悵快して樂しまず、愁を懷きて坐するのみ』と。時に瞿多彌、其の父に語りて言はく、『阿爺、愁ふる莫れ。我、當に自ら智慧方便を作し、必ず一人をして我が爲めに主と作らしむべし。事理や然りと雖も、阿爺、但且らく女の寬恣を放せ、我、當に自ら嫁すべし』。

爾の時、檀荼波尼大臣、瞿多彌の是の言を作すを聞き已り、卽ち王に奏して知らしめ、然る後、乃ち迦毘羅城の四衢の道頭に、鈴を振りて告げて白はく、『一切の遠近よ、今日より後、第七日に至り、釋種に女有り、瞿多彌と名づく。當に自ら嫁を求むべし。誰にても取らんと欲する者は、六日を過して後、第七日に至り、當に共に集聚すべし』と。此の語を聞き已り、第七日に至り、五百の釋種の諸童子輩、悉達を首と爲し、皆悉く宮門に在りて集聚す。

時に淨飯王、諸の耆舊釋種大臣を將ゐ、復、無量無邊の人衆、若しくは男若しくは女、童男童女有り、竝に皆集聚して王の宮門に在り。是の時、悉達の有ゆる左右、自餘の童子の有ゆる左右、皆共に、瞿多彌女の誰を取りて夫と作すかを觀看る。

爾の時、釋氏の女瞿多彌、六日已に過ぎて第七日に至り、晨朝時に澡浴淸淨にし、好種種微妙の香を將て用つて其の身に塗り、種種雜色の衣服を著し、種種の瓔珞もて其の身を莊嚴し、復、種種の香華の鬘を著し、多く侍從を將ゐて左右に圍遶せられ、復、乳母及び諸の宮監有りて部領導引し、前後に遮擁し、漸く宮門に至りて安庠として行き、宮門の內に入る。彼の諸の釋種の童子、難陀、提婆達多を最も上首と爲し、皆、晨朝に香湯もて沐浴し、種種の香を以て用つて其の身に塗り、莊嚴の事、前に說く所の如し。唯、悉達が、身を莊嚴せずして常服を服し、唯、耳璫と、頭上に三重の細金の華鬘とを著けたるのみなるを除く。

時に瞿多彌に一乳母有り、瞿多彌に語りて是の如き言を作す、『女よ、誰を取りて以て夫主と爲さ

んと欲するか』と。其の瞿多彌、次第に五百童子を觀看て乳母に報じて言はく、『阿母、當に知るべし。此の諸童子、極めて大に瓔珞もて、其の身を莊嚴すること、猶ほ婦女の如し。我が女人の意情の下に見る所は、此の相怯弱にして、これ、男兒大丈夫の相に非ず、此はこれ婦女媚惑の飾なり。男兒は其の身を莊嚴するを假らず。丈夫の相には自ら服飾有り。悉達太子は自身に威光あり、瓔珞を以て其の身を莊嚴せず。外物を假り用つて容飾と爲すに非ずして、自ら內潤丈夫の相有り。是の故に我が心、彼の悉達を以て、我が夫と爲さんを樂む』。

時に瞿多彌、右手に須摩那（sumanā）鬘を執持し、遍ねく大衆を歷て悉達の所に向ひ、到り已りて立住し、此の華鬘を將て悉達の頸に繋け、擐ぬき已りて項を抱き、是の言を作す、『悉達太子よ、我、今汝を取りて、以て我が夫と爲さん』と。悉達答へて言はく、『是の如く、是の如し、汝の言ふ所の如くせよ』と。是の時悉達、還つて復一須摩那鬘を將て、彼の女瞿多彌の頸に繋け、是の如き語を作す、『我今汝を取りて用以て妃と爲さん、汝、今應當に我が妃と作るべし』。

時に淨飯王、是の如き希有の事を見、心に歡喜を生じて踊躍すること無量、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず。時に其の衆中の有ゆる人民、或は心中に悉達を愛する者有り。彼等一切、高聲に唱喚して跳躑蹦轉し、大叫大呼、大歡大喜して、珠璣、衣冠、服飾を舞弄す。自餘の諸釋の五百の童子、及び其の左右、彼等の眷屬に圍遶せらるるもの、面、顏色を失ひて慘慘として光無く、皆悉く歡ばず、低頭〔三〕赧愧して各悵怏を懷き、四散して還る。

是の時悉達、意に稱へる有ゆる珍寶資財、衆雜廣營の種種の禮事、辦具せざる無し。復、種種妙好の瓔珞を以て、瞿多彌の身を莊嚴顯飾し、卽ち使を遣はし、五百の婇女を將て圍遶して宮內に迎へ入れて妃となし、娛樂して五欲の樂を受けぬ。

【三】赧は赧なり、顏あからむ。

卷の第十四

常飾納妃品第十四の下

【一】爾の時、世尊、後に於て最初の成道を得已りたまへる時、優陀夷卽ち佛に白して言はく、『未だ審ならず、世尊、往昔の時、瞿多彌釋種の女と、何の因緣有りてか、乃ち能く彼をして餘の童子を捨てて直に如來を取り、用以て夫と爲して心に娛樂せしめたまひしや。云何ぞ爾るを得たりしや』と。時に佛、彼の優陀夷に告げて言はく、『汝、優陀夷よ、至心に諦に聽け。其の瞿多彌釋種の女は、但に今世に餘の釋童を嫌ひて我を樂めるに非ず、過去世の時にも、亦復是の如く、彼等諸釋の童子を用ひず、我を取りて夫と爲せるなり』。時に優陀夷、卽ち佛に白して言はく、『唯然り、世尊、願はくは我が爲めに說き給へ、此の事云何。我今聞かんことを樂ふ』と。

爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『我念ふに、往昔、雪山の下に、多く雜類の無量無邊の諸獸有りて群遊し、各各相隨ひて取るが任に食せり。時に彼の獸中に一牸虎【二】（vyāghrī）有り。端正雙少く、諸獸の中に於て比類する者無し。彼の虎、是の如く、毛色光鮮なり。無量の諸獸、求覓めて取りて對と爲さんと欲するが爲めに、各各皆言はく、「汝、我に屬して來れ、汝、我に屬して來れ」と。復諸獸有り。自ら相謂つて言はく、「汝等、且らく待て、共に相爭ふ莫れ、彼の牸虎が自ら誰を選び取りて、卽ち爲に偶と作すかを聽け、彼の獸は卽ちこれ我等の王なり」と。時に諸獸の中に一牛王有り、牸虎に向ひて偈を說いて言はく、

『世人皆我が【三】糞を取り　持用て地に塗りて淸淨と爲す
是の故に端正なる賢牸虎　應に我を取り以て夫と爲すべし』

是の時、牸虎、彼の牛王に向ひて偈を說いて答へて言はく、

【一】以下、瞿多彌婚姻の本生を明す。この本生と小異のもの、大事に出づ。但し耶輸陀羅に關す。

【二】牸。めす。

【三】印度の古俗信仰にこのことあり。

『汝の項[四]頷[五]は甚だ高大　　止だ車を駕し及び犂を挽くに堪ふ
云何ぞ是の醜たる身形を將て　　忽[六]ち我が爲めに夫主と作らんと欲する』
是の時、復一大白象有り、牸虎に向ひて偈を說いて言はく、
『我はこれ雪山の大象王なり　　戰鬪に我を用ひて勝たざる無し
我既に是の大威力有り　　汝今何ぞ我が妻と作らざる』
是の時、牸虎[七]、復偈を以て彼の白象に答へて言はく、
「汝若し師子王を見聞せば　　膽懾ぢ驚怖して馳奔して走り
屎尿を遺失し狼藉して去らん　　云何ぞ我が夫たるを得るに堪へん」
爾の時、彼の中に一師子諸獸の王有り、彼の牸虎に向ひ、偈を說いて言はく、
「汝今我が此の形容を觀よ　　前分は闊大にして後は纖細なり
山中に在りて自ら恣に活き　　復能く餘の衆生を存恤す
我はこれ一切諸獸の王なり　　更に能く我に勝る者有る無し
若し我を見及び聲を聞く有れば　　諸獸悉く皆奔りて住まらず
我今是の如く力猛壯なり　　威神甚大にして論ずべからず
是の故に賢虎汝當に知るべし　　乃ち我が爲めに婦と作るべし」
時に彼の牸虎、師子王に向ひて偈を說いて言はく、
「大力勇猛及び威神あり　　身體形容極めて端正
是の如く我今夫を得已る　　必ず當に頂戴して奉承すべし」』
爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、「汝、優陀夷よ、應當に悟解すべし。彼の時の師子諸獸の王とは、卽ち我が身是なり。時に彼の牸虎とは、今の瞿多彌釋女是なり。時に彼の諸獸とは、現今の

【四】項。うなじ。
【五】領。うなじ。頷領の熟語は經中三處に見ゆ。
【六】麗本は「忽」とす。
【七】大正藏「獸虎」とす。以下同じ。

五百の釋童子是なり。彼の時に當りて、其の瞿多彌は、已に諸獸を嫌ひて意に願樂せず。我の偈を説くを聞きて卽ち我が妻と作れり。今日も亦然り。諸釋種の五百の童子を捨て、旣に嫌薄し已りて我を取りて夫と爲しぬ。』

時に淨飯王、其の太子の爲に三等の宮を立つ。太子を安置するに擬せんとするを以ての故に。第一の宮内の有ゆる婇女は、初夜に當りて太子に侍衞し、第二の宮内の其の諸婇女は、夜半時に於て太子に供承し、第三の宮内の諸婇女輩は、後夜時に於て太子に侍奉す。其の第一宮は、耶輸陀羅を最も上首と爲し、二萬の婇女、圍遶侍立す。第二宮の中は摩奴陀羅(Manadhara)（隋に意持と言ふ）上首たり。——[八]諸師復言ふ、『此の意持妃は唯其の名を聞くも、現在及び往緣の事を見ず』と——第三宮内は、卽ち瞿多彌上首たり。是の如く次第に太子に侍御する諸婇女等、合して六萬有り。——復師有りて言ふ、『太子に侍する者、諸婇女等は、合して十萬有り、以て三宮と爲す。二萬は悉くこれ釋利利種、餘す所の八萬は、竝にこれ衆雜異姓の諸女なり』と。

時に淨飯王、阿私陀仙人の所説を念ふ。故に宮内に復更に別に一大好殿を造る。猶ほ秋雲の靉靆光潤なるが如く、作事微妙にして實に思議し難く、一切時に順ひて快樂を受く。鈎欄閤道は一切正等にして偏頗有る無し。何を以ての故に。太子の處處遊行して、諸の濁穢を見んことを恐畏してなり。

復、宮内に、諸雜の音聲を色別置立せしむ。各各千數なり。其の中、所謂一千の[九]箜篌、一千具の[一〇]箏、一千の五絃、一千の小鼓、一千具の[一一]筑、一千張の琴、一千の琵琶、一千の細鼓、一千の太鼓、一千具の笛、一千の銅鈸、一千具の簫、一千の篳篥、一千具の[一二]箎、一千具の螺、諸の是の如き等の一切の音聲、種別一千なり。一千種の歌、一千種の舞あり。其の手及び聲、常に宮内に於て晝夜に絕えざること、猶ほ大雲の内に隱隱甚深の聲を出す如し。

【八】諸師とは、他の部派の傳説を引くなり。

【九】箜篌。くだらごと。二十三絃の樂器。抱きて兩手にて齊しく奏す。

【一〇】箏。十三絃のこと。

【一一】筑。瑟或は箏に似たる絃器。竹にて鼓す。

【一二】箎。可洪音義にいふ。直知反、樂器也、正作箎。慧琳音義によりて、又け篪に作るを知る。七孔ある管、卽ちふえなり。

是の如く、太子、最妙最勝の婇女百千の中に在りて、前後に圍遶せられ、諸の快樂を受け、恭敬侍養せらる。一切皆種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴し、復金の釧、七寶の璖環を以て、手臂に串きて音聲を作す。猶帝釋の諸の玉女を受くるが如し。娛樂歌舞、最勝最妙に、語言姿媚もて、相[13]囑し相笑ひ、相抱き相鳴き、相觀相[14]眄め、或は傾側して顧み、或は項を斜にして看、工に顰眉を解し、巧に[15]頰陜に閑ひ、五色綺靡、四目[16]㛹娟、能く太子をして歡娛受樂せしめ、遠涉して宮外に出でて遊ぶを須ひざること、帝釋天の玉女と娛樂するが如し。是の如く、是の如く、太子、女寶の中に在りて諸の歡樂を受く。乃至、其の中の諸婇女等、巧に五慾を解し、常に能く[17]沃弱にして太子をして歡ばしめ、更に出でて宮外に至るを聽さず。

時に、淨飯王、太子の諸功德を增さんが爲の故に苦行を建立し、一切の諸邪惡法を斷ちて一切の善を行じ、諸物を布施して衆の福業を造り、備さに苦行を行じ、此の善根を以て太子に迴資し、諸功德を增長せしめんが爲の故に出家する莫らんことを願ふ。是の故に偈に言はく、

『大王、太子を增長せんが故に　復私陀の授記の因を以て
苦行し調伏して諸非を捨て　恒に智臣と共に坐して思念す』

是の如き次第もて、太子、父王の宮內に在りて唯獨り一人のみ五慾を具足し、娛樂逍遙し、嬉戲自恣し、十年を足滿するも、曾て外出せず。

[18]爾の時、南方摩伽陀(Magadha)國に一大王有り、姓は𤜶連尼(Śreṇika)、名は頻婆娑羅(Bimbisāra)なり。怨敵を畏懼して心內恒に愁へ、群臣を集聚して常に相議論し、是の如き語を作す、『汝等諸臣、出入去來に境の內外を觀、更に一人の我に勝る有らしむる莫れ、若し我に勝らば、恐らくは彼の人來りて我が王位を奪はん』と。時に諸臣等、卽ち兩人を差はして境界を巡らしむ。時に彼の

【一三】囑或は矚(みつめる)に作らる。
【一四】眄は眄の俗字。ながしめに見る。
【一五】陜。すがむ。
【一六】㛹或は便に作る。㛹娟は美好也、便は媚好貌也。
【一七】沃。わかくかほよし。沃弱は柔順也、美也。又沃を麗本に泼に作る。
【一八】この物語は、頻王が嘗て太子が出家してその城下に至りし時に面語せる言葉を、こゝに出家前に流用したるものならん。

二人、王勅を聞き已りて自ら境內及び隣界の首を歷り、周匝して還らんと欲して、人有りて言ふを聞く、『此より已北に一最大高峻の雪山有り、彼の山麓下に別の種姓有り、稱して釋迦と爲す。族內に初めて新に一童子を產めり。其の人端正にして善く生地を得、兼ねて彼の姓氏は第一特尊にして眷屬豪强に、衆事具足す。身に三十二丈夫の相有り、亦復八十種好を備ふ。彼の生れし日、諸の解相婆羅門等有りて以て其に記を授くらく、「今此の童子、身體に三十二相八十種好を具有し、炳著分明なり。其れ若し家に在らば必定して轉輪聖王と作るを得、四天下を總べ、〔一九〕十善もて民を化し、七寶充備し、兵仗を用ひずして自然に歸降せしめん。若し捨てて出家せば、當に佛、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀と作るを得て、十號具足し、乃至、淸淨の梵行を說くべし」と。』

時に彼の使人、履涉して迴還し、卽ち其の王頻婆娑羅王に向ひて、是の事――乃至梵行、上の所說の如きを白し、『是の故に大王、其の幼年なるに及びて速に當に兵を起して彼の童子を滅し、後來に我等大王の位を奪はしむる莫れ』と。是の語を作し已るや、摩伽陀王、頻婆娑羅、卽ち彼の二使人に告げて言はく、『卿等二人、是の說を作す莫れ。何を以ての故に、若し汝の言の如く、脫し彼の童子、必定して轉輪聖王と作るを得て如法に治化せば、我、當に敬奉して伏接隨從し、彼の威神に依りて我等樂を受け、安隱に治化すべし。若し彼、捨家して佛と作るを得ば、慈悲憐愍もて衆生を度脫せん。我等、其の爲めに〔二〇〕聲聞受法の弟子と作らん。今、是の如き二種の果報福德因緣を觀じて、害を彼に加ふる心を興すべからず』。

時に淨飯王、其の太子所住の宮院に於て、周匝して別に更に子城を造立し、唯一門を置き、名づけて野獸と爲す。彼の門下の關に、〔二一〕機發を安施し、開閉の時、五百人有りて扶持擁衞して、方に開闔するを得、其の門の聲動、半由旬に聞ゆ。次に第二重中院の宮閤に、亦一門を開く。其の關の鍵鑰に皆機發を安じ、開閉の時、三百人有り、其の聲、一拘盧奢に聞徹す。次に內宮の太子の坐殿

〔一九〕十善とは、殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・兩舌・惡口・貪欲・瞋恚・邪見せざるをいふ。

〔二〇〕聲聞。說法の聲を聞くこと。

〔二一〕機發は觸れる事によりてひらきおこるしかけならん。

に至るに、復一門あり、鍵鑰もて關を累ぎ、機發を安じ、開閉繫接するに二百人有り、二二禦備轉嚴かなること、人間の比に非ず、其の聲、聞えて半拘盧奢に及ぶ。彼の三門の內外、悉く壯士を羅ねて防守す。身に鎧甲の精鋭牢强なるを著け、手に並に種種の戎具を執持す。所謂、弓箭、鉞斧、長刀、劍戟、三叉、鐵槌、鐵棒、鬪輪、槊矛もて二三宮闈を禁衞す。是の如く警むること嚴なるは、太子の二四椒房を捨離して踰越出家し、山藪に逃竄せんを恐畏してなり。

空聲勸厭品第十五

爾の時、虚空に一天子有り、名づけて作瓶（Ghaṭīkāra）といふ。彼の天、此の太子の十年宮內に在りて五慾の樂を受くるを見、是の思惟を作す『此の護明菩薩大士、縱に極めて多時、彼の宮內に在りて諸の五慾を受け、貪著を爲す莫きも、是の五慾の故に心醉荒迷、情放盈溢す。百年も迅速なり、時、人を待たず。護明菩薩、今、須らく覺察して、早く應に捐棄捨俗して出家すべし。我若し先づ彼の爲めに厭離の相を作さずんば、則ち彼躭湎し、未だ醒寤して出家の心を發すこと有らじ。我今當應に其の事を讃助すべし。成就の爲めの故なり』。作瓶天子、卽ち夜半に於て偈を說いて言はく、

身自ら縛を被りつつ他を解かんと欲するは　譬へば盲人の群瞽を引くが若く
己が身解脫して乃ち彼を免れしむるは　猶有目の能く人を導くが如し
善い哉仁今年盛なる時　宜しく速に出家して願を滿たしめ　應當に天人等を利益すべし」
五欲の行者は厭ふべからず　一六塵に沒溺して境捨て難し
唯出家もて大智を行ずるのみありて　乃ち能く此の五慾を厭離す　是の故に仁今捐棄すべし』

【二二】禦は當なり。
【二三】闈。宮中の小門。
【二四】椒房。皇后にいふ。椒を以て壁に塗り、その溫煖を取るを以てなり。

【一】六塵。六境（ṣaḍgocara）に同じ。色・聲・香・味・觸・法の六境、よく人心をけがすを以て、塵と名く。

衆生多く煩惱の患有り　仁當に爲めに大醫師
妙種種の法藥を說くの王と作りて　速疾に將て涅槃の岸に向ふべし」
無明の黑暗に障蔽せられ　諸見の羅網は種種に纒へり
速に智慧の大燈明を然して　早く天人をして淨眼を得しめよ」

爾の時空中の作瓶天子此の偈を說き已るや、威神感動もて因緣を發勸し、復、太子の宿世の善根福德力を以ての故に、彼の宮內の婇女伎兒が作せる所の音聲歌曲をして、五慾の事に順はず、唯、涅槃住持信解微妙の聲を傳へて、自然にして述べしめ、偈を說いて言はく、

[二]「世間の事は無常(acira)なり　猶ほ雲(nabha)の電(sthāyi)を出す如し
尊者(āyu)よ今や時至る　應に捨家し出家すべし」
一切の[三]行の無常なること　[四]瓦坏瓶器(āmakumbha)の如く
他物を借りて用ふるが如く　乾土を積める城(paṃśu-nagara)の如し」
久しからずして便ち破壞するは　猶夏の泥壁の如し
河の兩岸の砂の如く(nadikūla ivā savālukam)　[五]緣生は久しき能はず」
猶ほ燈(pradīpa)の炎(arci)を出すが如く　生じ已りて速に還滅す
風の暫くも住まる無き如く　急疾にして曾て停らず」
恒常に[六]眞實無し　猶ほ芭蕉の[七]心の如く　幻化して人意を誑かし　[八]空拳をもて小兒を誘ふ(如し)」

[九]「一切の諸行は　皆悉く[一〇]因緣より生ず　各各因緣有るも　愚癡の輩(bālajana)は覺らず
猶ほ人の繩(rajju)を索むるが如し　[一一]手と木と因緣を成す」

【二】以下五句二十偈諸法の無常にして恒久の存在性なきを明す。中に就て十一喩あり。以下、梵文 Lalitavistara. 第十三章(印度版 p. 208. l.13.-p. 215. l. 3)に一致す。
【三】行(saṃskāra)。こゝには一切の現象を意味す。
【四】坏、未だ燒かざる瓦。
【五】緣生(pratītya-samutpāda)。一切萬物は緣によつて生じたるものなれば緣生といはる。
【六】眞實無し(niḥsṛta)。眞實の存在性なし。實體なし。
【七】芭蕉の心(kadalīskandha)。芭蕉は大樹をなせど、皮のみにして心なきを、諸法の實體なきに喩ふ。
【八】空拳(ritta-muṣṭi)。持たずして與ふと言ひて誘ふなり梵文は炬拳(ulkāmuṣṭi)とす。
【九】以下、十七偈。諸法因緣生の故に空なるを明す。
【一〇】因緣(pratyaya)。原因條件等の意にて、萬物の成立する法則なり。萬物はその成立條件の相關的合成の上に成立つとするが、佛敎の根本思想なり。次の喩にて就いていへば、繩は「人の手」と「木」(材料)を條件として成り、芽は子を、子は芽を條件とす、而して子なくして芽生ぜず、芽を生ぜざるものを子と稱せず、子

子(vja)に因りて芽(ankura)を生ずるが如し　子を離れて芽は生ぜず　二相離れては成ぜず　復常にも無常にもあらず」
諸行は癡に因りて生ずるも　彼は無明に住せず　無明(avidyā)も亦彼に非ず　本性來[一二]空寂なり」
[一三]生滅に體無きが故に　印(mudrā)の印文(mudrasaṅkrānti)をなすが如し　彼に非ず彼を離るるに非ず　諸行も亦是の如し」
[一四]眼は色を離れず　識は眼と色の因より生ず　此の三は相離れず　三も亦眞實ならず」
[一五]淨不淨の法を空ぜよ　眼等の分別より生ずればなり
此の顚倒(viparīta)分別は　皆悉く識に由りて生ず」
若し巧智の人有り　識の生ずる所を推求せば
[一六]彼の去來無きを知り　[一七]我の幻化の如きを知らん」
兩木(araṇi cottararāṇi)火を出すに　[一八]第三は手に因るが如し　若し此の三因無くんば、則ち火用を得ず」
若し智もて推求せば　彼亦去來無く　諸方を尋求し已りて　火の來去を見ず」
[一九]陰・入・諸界等は　貪・癡・業に因りて生ず　[二〇]和合は衆生に因る　眞如(paramārtha)に衆生無し」
咽喉・脣・口・舌(kaṇṭha-oṣṭha-tā͘ukā-jivha)より　諸の文字(akṣara)を出すも　字はこれ咽喉に非ず　亦彼等を離るるに非ず」
彼等和合するが故に　出語・智に隨ふも　語言(vāca)は智に在らず　亦復色・形無し」
生處及び滅處を　智人も求めて得ず　觀ずる所悉く空寂　語言(vāha)や響聲(pratiśr-

の子たる所以は芽を生ずるにあり、よつて「二離れて成ぜず」といふ。
【一一】 木 Lalitavistar には muñja とせり、草の一種にて繩の材料なり、今の木も材料を示す、猶此の下二句にて一偈をなすも梵文は猶二句分を有す、本經原本に脱せしならん。
【一二】 本性來空寂(śūnya eta prakṛti nirīhakā)。「空」は万物の因緣所生の故に實體なきを云ひ、寂は煩惱の刺激より解放されある狀態をいふ。
【一三】 生滅に體なし。生滅すべきものありて生滅するに非ず、唯だ因緣によつて別法の生ずるに過ぎざる故に、生滅に體なしといふ。然らば前法と後法と全然關係なきかといへば、印によつて印文あるが如く、前法によつて後法あり、前後二法同體に非ざるも、而も二者に離るべからざる關係あり。
【一四】 眼(cakṣu)と色(rūpa)と識(vijñāna)。この三は一認識の成立する三條件なり。而してこの三互に相關する性なければ、認識成立せざる故に、「相離れず」といひ、而もこの三も亦因緣によつて成立てるものなれば、「眞實ならず」といふ。因みに色には種々の

utaka)の如し」
木に因り諸絃に因り　人智の三・合するが故に　箜篌(tuṇavīṇa)より聲を出すも　彼の聲(śabda)は三處に無し」
若し智慧の人有り　彼の聲の去來を求めて　諸方を求覓め已るも　去來や得可らず」
因あり及び緣あるものより　諸行は是の如くにして生ず
諦了有るの人は　空觀する(darśanācchūnya)こと應に是の如くなるべし」
陰・入・及び諸界の　內外悉く皆寂(śūnya)　我を一切處に求むるも　虛空(ākāśa)の形無きが如し」
二一是の如き諸の法相を　仁は定光佛に於て　往昔已に證知したり　今天人の爲めに說け」
顚倒の分別の故に　欲等の火に焚燒せらる
應に慈悲の雲を起して　甘露の法雨(dhārāmamṛta)を施すべし」
仁昔億劫に於て　施を念じ及び戒を持し
「我無上道(bhodhimuttama)を得ば、　二二聖財を諸世に分たん」といへり」
尊者往昔を念へ　聖財を　二三貧窮に施し(daridra)　聖財を以將て攝し　二四調御して慳惜する莫りしを」
仁昔淨戒(śīla)を持し　窮することと急たるも財を偷まざりき
願はくは甘露の門(amṛta-dvāra)を開きて　諸衆生の爲めに說け」
往昔の行を憶念して　當に地獄(nirayadvāra)の門を閉ぢ
善く解脫の路を開くべくんば　戒行の心願(śīlavato cintitaṃ)成らん」

義あるも、今は眼によつて認識せらるゝものゝ一切を呼ぶ。
【一五】　淨不淨(śubhāśubhā)。淨不淨の執着は、眼耳鼻舌身意の誤れる分別より生ず。物には本來それ自身として淨不淨なく、その性は空なり。(空は無にあらず、淨不の何れにも非ざるをいふ)。
【一六】　去來(gatāgatam)。生滅變化をいふ。
【一七】　我の幻化(māyā)。自我の存在は幻の如くして實體なし。
【一八】　第三は手に因る(hast-avyāyāmatrayebhi)。雨木より出でたる火が、次いで手に因つて他に移さるゝ時に、火の功用が現はるゝとなり。
【一九】　陰(skandha)入(āyatana)界(dhātu)。は五蘊・十二入・十八界をいふ。五蘊は色受想行識なり。十二入は六根六境なり。十八界は十二入に六識を加ふ。以て萬法を攝する目とす。
【二〇】　和合(sāmagrī)。貪癡等と陰界入と相屬すること。
【二一】　以下、一五偈。菩薩往昔の本行を述べて出離を勸む。擧ぐるに定光發心と六度行修あり。
【二二】　聖財(ārya-dhana)。七聖財。信・戒・慚・愧・聞・捨・慧の七は、成佛の資なるが故に

往昔忍辱(kṣānti)を修し　他の毀罵等を聞くも
忍辱を建立せるが故に　諸行の悉く空なるを觀ぜり」
此の往行を念ずるが故に　世間に瞋恚多ければ
教へて忍辱に住せしめよ　彼の願力を捨つる莫れ」
仁者・精進(vīrya)を行じて　當に我が淨智を得　煩惱の海に在りて　衆を度して彼岸に到るべし」

往昔の願を念じて　衆を[25]四苦の河(caturodhaira)より拔き　大精進力を出して　厄難等を度脫せしめよ」

往昔禪(dhyāna)を修習して　爲に諸煩惱(kileśa)を斷ぜり　[26]諸根の不調なる者を、教令調伏せるが故に」

仁　往昔を念ぜよ　衆の煩惱に在るを愍み　寂靜の諸慧等もて　彼の諸根を調伏せしを」
仁昔智慧(prajña)を修し、煩惱の暗を破り　衆の無明に在るを愍れみ　[27]眞如眼を開示せんを願へり」
仁往昔を念ぜよ　衆生の煩惱瞑きために　[28]無濁穢の明を開きたりしを」
仁最勝の智慧もて　應に諸の衆生を愍れみ　方便もて教へて出でしむべし」

[29]三界の生老病の火熾に　飢渴の熱炎曾て休まず
應に世の爲めに大橋と作り　濟度して彼岸に歸到せしむべし
衆生の煩惱の海に流轉するは　猶ほ蜂(bhramara)の竹孔の間に在るが如し」
[30]三有の循復は秋雲(śarad-abhra)の如し　上下往還して止息する無し

聖財といふ。
【二三】貧窮(hīna ;duḥkhita)。成佛の資なきもの。
【二四】調御(sārathi)。惡象を調ふる如く、人々の惡心を調ふること。
【二五】四苦。生老病死の四苦。
【二六】諸根の不調(bhāvitendriyā)。眼耳等六根の欲に於て調はざること。
【二七】眞如眼。法眼に同じ、法性眞如の理を見る眼、卽ち智慧なり、又信仰なり。
【二八】無濁穢の明。煩惱に汚れざる智慧。
【二九】以下百十句。三界の輪轉綿りなきと、五欲の賴むべからざると、老病死の迫れるを說きて、早く出離すべきを勸む。梵文 p. 204. l. 8–203. l. 10 に一致す。
【三〇】三有の循復。三界の存在界に輪廻轉生すること。梵本は三有の不堅固なるは(adhruvaṃ tribhavaṃ)とす。

亦戲場(naṭaraṅga)の諸の幻化の如く　又山川の逝く水流に似たり」
衆の生老病死も亦然り　或は[三一]天人三悪道に生る
[三二]諸有の欲癡は自在ならず　五道(pañcagati)に展轉して覺知する無きこと　猶ほ[三三]陶師の旋火輪の如し」
處處の[三四]五欲に自ら纒縛すること　猶ほ飛鳥の羅網を犯す如く　亦獵師の黐膠を布くが如し
他の財寶を貪りて厭足無きは　魚の餌を呑みて釣鈎に遇ふが如し
諍競し忿怒して怨讐を結び　煩惱染著して諸苦を受く」
五欲の過患は利刀の如く　亦妙器に毒藥を盛れるが如し」
應に棄捨すること糞穢の如かるべし　貪著愛戀せば正心を失ふ」
是れ諸有の相續生して　欲垢を增長して曾て斷ぜざるに因りて
六塵境界の炎の熾盛なること　猶ほ乾草の猛火に燒かるるが如し」
速に起ちて捨離し早く出家せよ　智人の諸欲の境を觀察して
畏る可きこと猶ほ猛火坑(agnikhada)の如く　亦[三五]魁膾居の刀机の如し」
亦深泥(mahāpaṅka)の忽ち人を溺らす如く　利刀に蜜を塗り(asi-sindhu-samā madhudhi-gdha)舌を將て舐るが如く　蛇頭に觸れ及び(sarpisara)[三六]屏を攪す如し(mīṭ ghoṭāstatha)
聖人の欲を觀ずるも亦復然り」
箭の如く槊の如く劍戟の如く　毒もて射たる肉の食ふ可き難きが如し　一切の怨讐は慾を首と爲す。
五慾の功德は水月(udakacandra)の如く　影(prativimbha)の如く亦山谷の響(girighośa-

【三一】 天人三悪道(devapura t i-apāya)。合せて五道といふ。三悪道は地獄、餓鬼、畜生の三にて、極悪の業に酬ゐて受くるが故に三悪道といふ。
【三二】 諸有(sarva-bhavāḥ)。一切の存在、分ちて三有とし、細別して二十五有等とす。
【三三】 陶師の旋火輪(kumbhakarasya cakrabhami)。轆轤のこと。
【三四】 五欲(pañca kāma-guṇa)。色聲香味觸の五境はよく欲を興起せしむる素材となるが故に、五欲材といひ、略して五欲といふ。
【三五】 魁膾居。西域記に屠釣魁膾とあり。魁膾は肉を切る人。居は生物を殺す人。
【三六】 攪屏、屏は厠也、厠をかきみだすこと。

pratibhāsa)の如く
亦戯場の衆幻師の如く　猶ほ夢(māyamarīci)の裏に衆事を見る如し。
智人(ārya-jña)の慾を見るも亦復然り』
境界の諸塵は悉く空誑　怖畏して自在を得る能はず
譬へば陽炎の實有る無き如く　亦水上に聚まれる浮漚の如し
此の事皆分別より生ず　智人應に是の如き等を觀ずべし』
凡そ人の世に處するや、年少き時は　端正喜ぶ可く諸慾に著するも、
年老い頭鬚白きに至るに及び　衆の爲に棄薄せらるること枯河の如し』
富貴饒財にして多放逸なる　是の如きの人は多く慾を樂しむも
後に財を失ひて貧窮に苦しみ　自在ならざるを以て慾を捨つ』
樹の多饒たる華果の故に　衆人競ひ來りて採り摘まんと欲する如く
人の布施を喜ぶも亦復然り　他に歸投せられて厭足無し』
それ人財盡き年老至り　他に乞求するや人これを見るを喜ばず、
色美しく財多く氣力充つるや　人喜んで見るを愛し聚集りて樂しむ』
財盡きて行乞すれば人喜ばず　年過ぎて背を僂め手に杖を執れば
雹に折れたる樹の如く人の愛するなし　是の如く畏るべきは衰老の法なり
汝當に速に出でて正覺を求め　自ら證り已りて後人の爲に説くべし』
老病は諸人體を痩損す　[三七]摩樓迦(mālu-latā)の大樹を遶ふがごとし
衰老せる身力に精進無く　乾枯すること猶ほ朽爛の木の如し』
老は好色を奪ひて惡色を生じ　怡悅せる顏面も皮膚皺む

【三七】摩樓迦。慧琳音義二六に遊子藤とせり、蔓草の一種。

老は華色を壞して悴色と爲し　欲樂より樂を奪ひて無樂ならしむ』
老は威勢を奪ひて命終に至り　衆病の到ること鹿の穽に投ずる如し
汝世間の百病を見已り　速に解脫方便の處を說け』
猶ほ冬天の風雪雨の　樹木の輭枝柯を摧折する如く
世間の老病多種至るや　諸根の損瘦すること亦復然り』
老の至るや人をして倉庫を盡さしむ　世間の歎苦は老に過ぎたるは莫し
死命の鬼は人の氣を奪ひて去ること　日の山に沒して復現れざるが如し』
死命は人をして恩愛より離れしめ　人をして憎嫉して喜び會はざらしむ
恩愛せる人と共に合せんと欲すれば　忽ちにして失すること葉の大水に墮つるが如し』
死の至るや人をして自由ならざらしむ　命の去るや水に漂へる一草の如し
人の彼の世に到るは件有ること無く　其の業緣に隨ひて有を受く』
死命鬼の無量衆を飲むこと　猶ほ[三八]摩竭(makara)の海舟を呑むが如く
[三九]金翅鳥(garuḍa)の大龍を噉ふがごとく　猛火の乾草澤を燒くが如し』
是の如きの苦惱逼切し已る　大士は往昔弘誓を起せり
彼の願力を念ぜよ今時至る　慾を捨てて應に速に出家すべし』
[四〇]憶へ往昔檀　戒忍及び精進　寂靜の禪と智等を行ぜるは　他の爲にして自の爲ならざり
き　時至り今や願滿つ　速に出でて復他を脫せしめよ』
仁は昔諸珍　金銀及び瓔珞を施し　恒に無遮會を立して　他の須むる所の願ひに隨ひ
子を乞へば其に子を與へ　孫を索むれば卽ち孫を與へ　女を求むれば他に女を與へ

【三八】摩竭。神話上の巨魚なり。
【三九】金翅鳥。神話上の巨鳥にして、常に龍を取りて噉ふといふ。
【四〇】以下終りまで、本生を說きて出離を勸む。梵文は Lalitavistara 第十三章、印度版 p. 199-204. 1.5 を參照せよ。

位を乞へば王位を捨て　資財を乞ふも違せざりき』
仁昔一王と作り　名づけて大聞德(Viśrutaśriya)と爲す　復一大德王たり　尼民陀羅
(Nimindhara)と名づけ　復阿私陀(Asita)と名づけ　復名づけて師子(Siṃha ?)と爲す
是等の諸王輩は　千種の財を布施しぬ』
昔復大王有り　常思諸法(Dharmacinti)と名づく　復一大德王あり　名づけて眞實行
(Sucintitartha)と爲す　此等は法を思惟しぬ』
往昔大王有り　精進にして聞月と名づく　復一王子有り　名づけて福業光(Vīryapuṇy=
araśmi)といふ　大威德を庶幾し　至り得て恩義を知れり』
仁昔一大王たり　名づけて月色仙(Candrarūpa)と爲し　復健猛將(Śūra)と名づけ　次
に實增長(Subhāvita)と名づけ　次に求善言(Gaveṣita)と名づけ　次に有善意(Sumati)
と名づけ　次に調伏根(Sūrata)と名づく
是の如き等の諸王は　法のままに大精進を行じぬ』
仁往昔より作し來りて　仁昔大王と作る　名づけて月光(Candraprabhā)と爲し　其
の次に勝行(Viśeṣagāmi)と名づけ　其の次に蓮勇(Reṇu)と名づけ　其の次に方主(Bhū-
ddiśamprati)と名づけ　其の次に健施(Pradānaśūra)と名づけ　次に迦尸王(Kāśi)と名づ
け　次に寶髻王(Ratnacūḍa)と名づく　是の如き諸大王は　即ち仁とこれ異るに非ず
種種の珍寶貨を　來り乞へば皆隨ひて與へたり』
仁彼の世に財施しぬ　今は法財を捨せんを勸む　仁昔過去に　佛を見しこと　[四二]恒沙の如
し』
彼の諸佛世尊を　仁悉く曾て供養し　無量の供養の具を　布施して慳悋する無く　衆

【四二】 恒沙の如し(Gaṅgāvālukopama)。恒河の砂の數の如くに多し。

生の解脱の故に　道を求めて休息せず　今正に是れ其の時なり　速に出でて家に住する莫れ』

仁昔初めて佛を覩たるを　名づけて不空見(Amodhadarśin)といふ　[四一]毘耆迦(Viśākhā?)の華を持ち　喜心にて彼を供養しぬ』

往昔に一佛有り　毘盧遮那(Vairocana)と名づく　一時歡喜して視たり』

往昔一佛有り　名づけて微妙音(Dundubhi)といふ　一呵梨勒(harītakī)を以て　彼の世尊を供養しぬ』

往昔一佛有り　名づけて白栴檀(Candana)といふ　彼の佛前に立ち　[四三]暗に一草莖を然せり』

往昔一佛有り　名づけて蓮兎(Reṇu)と曰ふ　大城に入らんとする時　一掬の末香(cūrṇa)を散ぜり』

次の佛を法主(Dharmeśvara)と名づく　[四四]法を説くに唱ふらく「善哉」と　法言快談を聞きて　仁稱すらく「說や　[四五]無量なり　尊應に供養すべし」と』

其の次に一佛を覩たり　名づけて普示現(Samantadarśin)と曰ふ　仁見て彼を讃歎す

其の次に一佛有り　名づけて熾盛分(Mahārci-skandha)と曰ふ　仁歡喜を以ての故に、彼の佛身を觀察し　又金華鬘(suvarṇamālā)を將て　彼の佛を供養せり　今彼を憶念すべし、　心をして忘失せしむる忽れ』

其の次に一佛有り　名づけて[四六]光相幢と曰ふ　一掬の小豆(mudga)を持し　用て彼の佛を供養せり』

往昔一佛有り　號名を智幢(Jñānaketu)といふ　仁[四七]輸迦華(aśoka-puṣpa)を持し　以て彼

【四一】毘耆迦、不明。梵文には Silapuṣpa とせり。

【四三】(原文)暗然一草莖。(梵文、tṛṇolka gṛhma dhār tā dṛṣṭva candana gṛham)。

【四四】(梵文には後三句を缺く)。

【四五】說。宋元明三本に虛に作る。

【四六】光相幢。方廣大莊嚴經五には光幢とするも、同梵本は Dharma-dhvaja(法幢)とせり。

【四七】方廣大莊嚴及び同梵本は、無憂花なる佛名とせり。

の佛を供養せり」
次に復一佛有り　名づけて調伏車(Yogayānasārathi)と曰ふ　仁彼の佛を見已り、　前に
立ちて讃歎せり」
次の佛を寶勝(Ratnaśikhī)と名づく　前に無量の燈(dīpa)を然し　妙無量の[四八]樂を施しぬ」
佛の一切勝(Sarvâbhibhū)と名くるに　曾て眞珠の瓔((mukt' āhāri)を施しぬ」
次に大海佛(Sāgara)を見　諸蓮華(padma)を布施せり」
蓮華藏佛(Padmagarbha)に至り　大帳蓋(vitāna)を布施せり」
師子雨佛(Siṃhuvarṣa)の邊に　曾て輭草の[四九]鋪(saṃstara)を施せり」
娑羅王佛(Sārendrarāja)には　諸の須つ所を布施し」
敷華佛(Puṣpita)の前に至りて　微妙の乳(kṣīra)を布施し」
耶輸陀佛(Yaśodatta)の所には　拘陀羅華(kuruṇtha-puṣpa)を施し
實見佛(Satyadarśin)を覩已りて　歡喜して食(bhājana 皿、bhojana 食)を布施せり」
昔佛智山(Jñānameru)と名づく　身を屈して(kāyu praṇābhi)彼の佛を禮せり」
佛有り龍德(Nāgadattu)と名づく　彼の佛に己が子を施せり」
高飛空行佛(Atyuccagābhī)に　曾て栴檀末(candana)を施せり」
次の佛を[五〇]帝沙(Tiṣya)と名づく　珠寶及び赤花をもて、　曾て彼の佛を供養せり」
大莊嚴佛(Mahāvyūha)を見て　瞻蔔香華を持て、彼の佛を供養せり」
曾て光王佛(Raśmirāja)を見　衆寶(ratna)を持て供養せり」
昔釋迦文(Śākyamuni)を見　妙多の銀花を持て、　彼の佛を供養せり」
其の次の帝釋相(Indraketu)を　見已りて喜びて讃歎せり」

【四八】方廣大莊嚴及び同梵本は、樂を藥(aṣadhi)とせり。

【四九】鋪。或は敷に作る。しきもの。

【五〇】帝沙佛。上記梵本に缺。

昔佛有り名づけて曰へり　廣大日天面(Sūryānanu)と　多く衆華嚴(avataṃsaka)を持て
彼の世尊を供養せり』
其の次に復佛有り　號して[五一]爲勝尊と名づく　妙多の銀華を持て　彼の佛の上を莊嚴せり』
往昔如來有り　名づけて龍勝(Nāgābhibhū)といふ　然燈して彼の佛を照らせり』
富沙(Pusya, 梵 Puṣya)如來の邊には　曾て白氎敷(sanstara)を施せり』
藥師王佛(Bhaiṣajyarāja)の邊には　寶蓋(ratnacchatri)を持て供養せり』
佛あり[五二]大牟尼(Mahāmuni)と名づけ』
復師子相佛(Siṃhaketu)有り　世尊に勝功德あり　寶網(ratnajali)を持て供養せり』
佛有り迦葉(Kāśyapa)と名づく　雜音聲(sarvavādi)もて供養せり』
昔佛あり解脫(Muktva)と名づく　雜末香(gandha-cūrṇa)もて供養せり』
寶相佛世尊光相(Arciketu,)をば　天華もて供養し』
阿芻婆諸佛(Akṣobhyarāja)には　[五三]坐像轝(kūṭāgari)を勸請し』
世間王尊佛(Lokapūjita)をば　供養するに華鬘(mālya)を以てしぬ』
尸棄佛世尊(Tagaraśikhin)をば　王位を捨てて(rājatyāgi)布施せり』
佛有り難降(Durjaya)と名づく　一切香(sarvagandhi)もて供養せり』
大然尊佛(Mahāpradīpa)の邊には　自身の體を布施(ātmatyāgi)し』
蓮花上佛(Padmottara)の前には　諸瓔珞(bhūṣaṇa)を布施し』
法幢如來(Dharmaketu)の上には　諸の妙花香(vicitrapuṣpa)を散じ』
然燈世尊(Dīpaṃkāri)の邊には　五青蓮(utpala)を施し奉れり』

【五一】方廣大莊嚴及同本には、爲勝尊を妙意佛(Sumati)とせり。爲勝は意勝の誤か。

【五二】同上二本に缺く。

【五三】坐像轝。明本等に坐象輿とせるを正しとす。象背(kūṭa)に載する輿なり。

是の如き等の諸佛　自餘は量り有るなし　說き難く不思議なり
往昔の諸世の中に　仁並に曾て供養せり』
復無量種の　最妙の供養の具を持て　彼の過去佛に供へ　疲惓の心有るなかりき』
今彼の供養を念じ　往の諸佛を思惟して　諸の衆生輩の爲に　慈と解脫を生ぜんが故に
覺悟して家を戀ふる莫れ』
尊は過世時に於て　然燈佛の所に在り　彼の佛を供養し已り　[五四]上無生を逮得し、　及び
[五五]五神通を獲　復[五六]順法忍を證れり』
後に仁尊者は　佛を供養すること前に勝れ　僧祇數僧祇
是の如き諸劫數　彼の諸劫皆盡き　諸佛も亦滅度したまひぬ』
仁が往昔の諸身　彼の世中に受けし所の　種族及び名字も　亦皆悉く滅して無し』
諸行の法は常にあらず　世間の相は不定なり　速に空誑の境を捨てて　疾く早く城を出
づべし』
生老病死の隨ふや　當り難く甚だ畏るべし　猶ほ[五七]劫火起りて　炎熾として世間を燒
かんが如し』
無常の火も亦然り　一切の世を燒盡す　是の如く諸苦逼る　云何ぞ暫くも停るべけん』
應に諸衆生を觀ずべし　沒して煩惱の暗に在るも　愚癡にして慧眼なく　自ら覺知する
能はず』
大精進の心を發し　功德をして圓滿ならしめよ　諸の衆生輩の爲めに　速に出でて家に
住する勿れ』
時に彼の宮內の諸婇女等、音聲を作せる時、其音聲の內に、皆、是の如き諸法の聲を出だし、太

【五四】上無生。梵本には無上の忍辱を逮得し(labdhn kṣ-anti uttamā)とあり。

【五五】五神通(abhijñā pañca)。佛は六神通を完成し、佛地以前は五神通とする例によるならん。前に詳註せり。

【五六】順法忍(ānulomika)。忍は忍可決定の義、法に順じて、法の理を、實の如くに、確實に悟ること。

【五七】劫火(kalpa-jāla)。劫は宇宙の生起より壞滅に至る一周期間をいひ、その壞滅に際する時は、宇宙に洞然として大火起り、万物を燒盡すといふ。

子をして、世間を厭離し、心に覺悟を生ぜしめんと欲しぬ。

出逢老人品第十六

爾の時、作瓶天子(Ghaṭikāra-devaputra)、太子をして出でて園林に向ひ、好惡を觀看て、厭心を發さしめんと欲するが故に、漸く彼の宮中を捨離せしむ。是の時、宮中の有ゆる婇女、諸の音聲歌唱を作し、[一]疲極、自然に次第し、更に復、園林の功徳を讃歎す。其の音に稱へ言ふ、『聖子、諦に聽け。園林の地や甚だ愛樂すべし。所謂、其の地、青輭の草を布き、樹木喜ぶべく、枝葉[二]扶疎に、華果敷榮し、蓊鬱として滋茂す。復、諸の鳥有り。所謂、種種の鴻鶴、孔雀、鸚鵡、鴝鵒及び[三]拘翅羅(kokila)、鴛鴦等の鳥、是の如き微妙の聲を出す。』

爾の時、太子、是の聲を聞き已るや、出遊の心を發し、卽ち馭者を喚んで之に謂ひて言はく、『汝、善馭者よ、今、速に疾く[四]賢直の好車を嚴飾莊校すべし、我今、彼の園林に向ひて善地を觀看んと欲す』と。是の時馭者、此の語を聞き已りて太子に白して言はく、『謹んで教命に依り、敢て違する有らじ』と。是の時、馭者、速に疾く卽ち淨飯王に奏して言はく、『大王、當に知るべし、太子、今出でて園林に向ひ、善地を觀看んと欲す』と。時に淨飯王、勅を出だして、迦毗羅城に宣令し、一切の內外悉く灑掃して、淸淨に莊嚴せしめ、土堆、砂礫、瓦石、穢濁、糞聚を除却して、皆、端平ならしめ、妙香湯を以て地上に灑散して諸の塵埃を滅し、又、香泥を以て用て其の地に塗り、復、種種の香華を持つて諸の街巷に散上し、處處に皆雜妙の好香を燒き、其の諸の街巷、四衢の道頭に、瓶に滿てる水を置き、諸の雜華を安んじ、芭蕉樹を以て處處を莊嚴し、諸樹の間に雜色の幢を懸け、復、樹上には、或は寶物を以て、或は綵絲を以て、蓋と作し幢と作し、用て樹を莊嚴し、樹間に復、眞珠の瓔珞、七寶の羅網を懸けて其の上を覆ひ、其の羅網の目の節節に、復、金銀の寶鈴を懸く。

【一】極。つかる。
【二】扶疎(疎は疏)。枝葉の盛なる貌。
【三】鵓鴣。
【四】賢直。恐らくは堅直の傳寫の訛なるべし。或は賢は實の誤か。

風に和して吹動し、微妙の聲を出す。或は七寶を以て、日月の像、及び諸天の形を作し、各、瓔珞を持つて羅網の間に閙ふ。羅網の間に於て、又復、更に白猫牛尾及び[五]雜旄等を懸けたり。

時に淨飯王、是の如く敎勅して、雜妙に迦毗羅城を莊嚴し、精麗なること猶ほ乾闥婆城の如くにして、一種も異なし。城を莊嚴し已るや、復園林を飾り、沙石及び諸の糞穢を除却し、乃至[六]交珞に衆の寶鈴を懸くること、上に說く所の如し。其の諸樹の中に、男名ある者は男の瓔珞を以て之を莊嚴し、若し女名の者は女の瓔珞を以て之を莊嚴す。復、打鼓振鈴して遍ねく城内の人に告げしめて言はく、『汝等、悉く皆、道上より、或は老、或は病、或は復、死亡、盲聾、瘖瘂、六根の殘缺して具足せざる者を除却して、悉く驅逐せしめ、但、この心意の好喜せざる所、及び吉祥ならざるものを、並に除擯し、太子をして路に之を見しむる勿れ』と。

是の時、馭者、車乘を莊飾し、善調馬を駕し、悉く嚴備し已りて、太子に白して言はく、『聖子、當に知るべし、今、已に駕は車馬を被り訖りぬ、正にこれ行く時なり、乘りて出でて善地を觀看たまふべし』と。爾の時、太子、座より起ちて、輦乘の所に至り、寶車に登上し、上り已りて大王の威神を秉持し、巍巍たる勢力もて、城の東門より引導して出で、園林に向ひて福地を觀看んと欲す。

是の時、作瓶天子、街巷の前にて、正しく太子に當りて、變身して一老弊の人と化作す。傴僂低頭して口齒疎缺に、鬚髮は霜の如くにして、形容黑皺に、膚色[七]黧黮にして脊を曲げて傍行し、唯、骨と皮とのみにて、肌肉有る無く、咽下は寬緩し、牛の[八]頟を垂るるが如く、身體萎摧して唯杖の力を仰ぎ、上氣苦嗽して喘息聲麁、喉内の吼鳴すること猶ほ鋸を挽くが如く、四支は[九]戰挑して行歩安からず。或は倒れ、或は扶け、杖を取りて正と爲り、是の如き相貌もて太子の前に在り、路に順ひて行く。太子、彼の老人の身體の、是の如く戰慄し、不祥たる衰相、上に說く所の如くに

【五】旄。羽毛の飾。
【六】珞。或は絡に作る。
【七】黧、黮。共にくろし。
【八】頟は胡、たれにく。
【九】挑は掉、ふるふ。

て、太子の先に於て困苦匍匐するを見、太子、見已りて、即ち馭者に問ふらく、『此はこれ何人ぞや、身體〔一〇〕皺赧に肉少く皮寛み、眼赤くして涕流れ、極めて大いに醜陋なり、獨、爾く鄙惡にして餘人に似ず。兼ねて其の頭顱は、髪稀にして脱落す、我が見る所の如くんば、餘人は然らず、又復、眼は深くして衆と特に異り、口齒缺破して觀瞻すべき無し』と。即ち馭者に向ひ、偈を說いて言はく、

『善く駕乘を馭する汝今聽け　此はこれ何人ぞ我が前に在るは
身體不正にして頭髪稀なり　生來然りと爲すや老の至りしと爲すや』

爾の時、馭者、作瓶天子の神力を被れるに因り、太子に白して言はく、『大聖太子、此の如きの人は、世に名づけて老と爲す』。太子、復、馭者に問うて言はく、『世間の中、何者をか老と名づくる』。馭者即事に太子に報へて言はく、『凡そ老と名づくるは、此の人、衰耄の逼る所と爲り、諸根漸く敗れて覺知する所無く、氣力、〔一一〕綿微に身體羸瘦し、既に苦處に到りて親屬に駈はれ、所能なきが故に依怙を知らず、兼ねて且つ此の人、亦、久しき能はず、朝に非れば則ち夕に、其の命、將に終らんとす、是の因緣を以ての故に老壞と名づく』と。即ち太子の爲めに、偈を說きて言はく、

『此の老は名づけて大苦惱と爲す　〔一二〕劫は美色及び娛樂を奪ひ
諸根は毀壞して所念を失ひ　支節擧動心に隨はず』

爾の時、太子、此の偈を聞き已りて馭者に問ひて言はく、『此の人は、これ獨り一家の法が、其をして此の如くならしむると爲すや、當に一切諸世間の相が、悉く皆、斯の如くなるべしと爲すや』。是の時、馭者、太子に報へて言はく、『聖子、當に知るべし、此の人、獨自一家の法が、其をして斯の如からしめたるに非ず、但これ一切世間の衆生に、皆、此の法有り』。太子、復、彼の馭者に問ひて言はく、『我が今の此の身も、亦、當に是の如く老法を受くべきか』。馭者、答へて言はく、『是の如し、是の如し、大聖太子、貴賤殊なりと雖も、凡てこれ生有あるもの、悉く皆、未だ是の如き老法

【一〇】赧は赧、あからむ。
【一一】綿は緜、微小なり。
【一二】劫は劫波（kalpa）の略、譯して時といふ。

を過ぎず、卽ち今、人、身に是の如き老弊の相を具有するも、但、未だ現はれざるのみ』。太子、復、馭者に問うて言はく、『若し我が此の身も、是の老老の法を離れず、未だ是の醜陋衰惡の相あるを過ぎずば、我、今、假にも彼の園林に向ひて遨遊戲笑せじ、宜しく速に駕を廻らして、宮中に還り入るべし、我當に、何の方便をなしてか、斯の苦を免るるを得んを思惟すべし』。是の時 馭者、太子に答へて言はく、『聖子の勅の如くにして、我、敢て違せじ』と。卽ち車乘を廻らし、還りて城に入る。

是の時、太子、其の宮内に至り、本座の上に坐し、正念もて思惟すらく、『我も亦當に老ゆべし、老法、未だ過ぎず、如何ぞ縱逸にして自ら身心を放さん』と。時に淨飯王、馭者に問うて言はく、『汝、善馭者、今、太子に從ひ、宮内より出でて園中に至り、遊戲觀看、恣情極目もて觀樂せりや以不や』。其の馭者、跪づきて王に報へて言はく、『大王、當に知るべし、太子出遊して半道に至り、駕を勅し迴還して園苑に到らず』。時に淨飯王、馭者に問ひて言はく、『太子、何の故に園林に到らずして中道にして返れる』。馭者答へて言はく、『大王、當に知るべし、太子、園林に向ひて遊戲せんと欲し、始め半路に至るや、忽ち道傍に一老人を見る、乃至、身體戰慄して杖を拄へ、或は倒れ或は起ち、正行する能はず、太子、是の如く彼の人を見已るや、卽ち勅して車を迴し、還りて宮内に入り、加趺して坐し、正念もて思惟したまへり』と。時に淨飯王、卽ち心に念言すらく、『希有なるかな、希有なるかな、此の形相や、阿私陀仙授記の語言は、必定して眞實なり、決んで、太子の捨家し出家せんことを恐る。我、今、宜しく應に更に太子の爲めに、五欲を增益すべし、若しそれ、廣く五欲の事を見、〔一三〕心眼を充足し、情迷に染著せば、捨して出家せずして我が意に稱適せん』と。時に、淨飯王、卽ち悉達の爲めに、種種五欲の諸事を加足し、悉く增廣せしめ、太子の心をして愛樂に著して、出家を聽さざらしむ。而して偈有りて說かく、

【一三】心眼。肉眼に對する心眼にあらず。心と眼となり、心の眼には非ず。

『彼の宮内の中に多く樂を受け　出でて遊戯せんと欲して老人を見るや
還りて宮内に入りて心に憂愁すらく　「嗚呼我未だ此の老を脫せず」と
父王此の語言を聞き已り　心思に子の捨てて出家せんことを畏れ
五欲及び宮人を增益して　恩愛に著し王位を紹がしめんとす』

爾の時太子、宮内に在りて五欲を充足し、娛樂遊戯して疑難有るなく、尊重貴勝なること、唯獨一人なり。

淨飯王夢品第十七

爾の時、作瓶天子、神通力を以て太子をして出家心を發さしめんと欲し、卽ち其の夜に、淨飯王に七種の夢相を與へぬ。時に淨飯王、床上に眠臥し、睡夢の裏に是の如き相を見る。第一の所謂夢見は、一の大なる帝釋幢（Indradhvaja）有り、其の幢の周匝に無量無邊の人有り、擧げて迦毗羅城の東門より出づ。第二の所謂夢見は、太子、十大象に乘り、衆車を駕馭して迦毗羅城の南門より出づ。第三の所謂夢見は、太子、駟馬車に駕して其の上に端坐し、迦毗羅城の西門より出づ。第四の所謂夢見は、雜寶もて一輪を莊嚴し、迦毗羅城の北門より出づ。第五の所謂夢見は、太子、迦毗羅城の中央の大街衢に在り、手に一搥を執りて大鼓を[一]撾打す。第六の夢見は、此の迦毗羅城の處中に一高樓有り、太子、上に坐し、四面に無量の諸寶を散擲し、而して其の四方に復無量無邊億數の諸の衆生有り、來りて此の寶を將ち去る。第七の夢見は、此の迦毗羅の城外遠からずして、六人有りて聲を擧げて大いに哭し、號咷流涙し、各、兩手を以て自ら頭髮を拔き、地に宛轉す。

時に淨飯王、夢裏に是の如きの相を見、心に大に惶怖し、恐畏して毛は豎ち、遍體戰慄して驚悸疑怪し、忽然として寤め、覺め已りて卽ち所當の宮內諸大臣を喚び來り、而も彼等に勅して是の如き言を作す、『卿等、知るや不や、我、今夜、夢に是の如き大恐怖事を見たり』とて、七種の次第、前に列する所の如くに、皆悉く之を說き、復、勅して語り言ふ、『汝等、善く此等の諸夢を持ちて忘失せしむる莫れ、明日殿に坐せんに、衆の內にて我に奏して知らしむべし』と。而して諸臣等、王勅を聞き已りて卽ち王に白して言はく、『謹んで王勅の如くし、實に敢て違はじ』。天曉けて王坐するや、卽ち衆中に於て具に夜夢を以て王に諮奏して知らしむ。時に淨飯王、臣の白すを聞き已り、

【一】撾。うつ。

即ち國内の善解占夢の諸婆羅門を召し、而して之に告げて言はく、『汝等大智、我が夢むる所を解け、何の果報ありて、我の夢むること是の如きか』とて、前に說く所の如くにす。彼等大智諸婆羅門、王勅を聞き已り、各共に思惟して可否を量宜し、王に白して言はく、『大王、當に知るべし、我等、未だ曾て是の如き夢を聞かず、我等、聞き已りて心意迷荒し、此の夢に何の果報有るを知らず』と。時に淨飯王、諸の占夢婆羅門等の是の如き語を作すを聞き、心に復憂愁して是の如き念を作す、『或は我が太子、轉輪聖王と作るを得ざるか、復は得已りて、還、轉輪王の位より墜落する莫きか、今、我が心內、極めて大に憂愁す、誰か能く我が此の如き疑結を決せん』。

爾の時、作瓶天子、淨居宮殿の內に在り、遙に淨飯大王の是の如く憂愁して樂しまざるを見、見已りて忽然として、彼の天宮より身を隱して來り、化して一婆羅門身と作る。頭に螺髻有り、鹿を以て冠と爲し、智慧聰明、端正盛少、黑き鹿皮を著けて衣服と爲し、立ちて淨飯王宮の門外に在り、是の如き言を唱ふ『我、能善く、淨飯王の夢を解き、所疑を決斷せん』と。時に門に當る人、婆羅門の此の語を作すを聞き已り、速に疾く淨飯王の所に往詣し、長跪して淨飯王に諮白して言さく、『大王よ、當に知るべし、門外に一婆羅門有りて立ち、口に是の言を稱ふ「我、善能く一切の諸夢を解く」と』。時に淨飯王、即便ち勅して此の婆羅門を喚び、宮中に入らしめ、入り已るや歡喜し、即ち勅を宣して彼の婆羅門に問ひ、是の如き言を作す『汝、巧智慧大婆羅門よ、今、知るや不や、我、昨夕夜半の時に、是の如き等の七種の夢相を見たり。第一は、一帝釋の幢有り、無量無邊百千の人民、左右を圍遶して共に此の幢を擧げ、迦毗羅城の東門より出づるを見、乃至、此の迦毗羅城を去ること道里遠からずして六人有り、聲を擧げて大いに哭し、手を以て髮を拔けり。我今恐怖し、心意[二]迴遑す。夢相既に然り、未だ善惡を知らず。汝、我が爲めに一一之を解くべし』と。時に淨飯王、是の說を作し已りて默然として住し、其の解釋を聽く。

【二】迴遑は失心の貌。用例に滿堂變容迴遑如失。又、君心與我懷、離別便迴遑などあり。

爾の時、作瓶天子、即ち王に白して言さく、『大王よ、當に知るべし、王の夢に見たる所の、一帝釋の幢に無量無邊の人民有り、左右を圍遶して共に此の幢を擧げ、城の東門よりして將に出でんとせしとは、此はこれ、大王の悉達太子、無量百千の諸天の與に、左右を圍遶せられて、當に[三]太子を捨て宮閤の內より城を踰えて出家すべし。此夢はこれ彼が先に於ける瑞相なり。又復大王の見たる所の、太子、十香象に乘りて衆車を駕馭し、城の南門より出で行けるとは、彼、出家し已りて即便ち[四]薩婆若(sarvajña)及以び[五]十力を證得せん。此の夢はこれ彼が先に於ける瑞相なり。又復大王の見たる所の、太子、駟馬車に乘じて城の西門より出で行きしとは、彼出家し已りて薩婆若を證し、具足して四無所畏を得ん。此の夢はこれ彼が先に於ける瑞相なり。又復大王の夢みし所の、雜寶もて一輪を莊嚴し、城の北門より出で行けるとは、彼出家し已りて阿耨多羅三藐三菩提を證得し、後、天と人との前に於て無上微妙の法輪を轉ぜん。此の夢はこれ彼が先に於ける瑞相なり。又復大王の夢みし所の、太子、迦毗羅城の中央の四衢道の內に在りて手に一槌を取り、大鼓を擊てるとは、彼出家し已り、菩提を證得して法輪を轉ぜん時、諸天各各聲を揚げて唱言し、其の音、上りて乃至梵天に徹し、傳へて相告知し、響、色界に遍ねからん。此の夢はこれ彼が先に於ける瑞相なり。又復大王の夢みし所の、太子迦毗羅城の處中の樓上に在りて坐し、四面に種種の寶を散擲せりとは、彼、阿耨多羅三藐三菩提を成じ已り、諸の天人八部衆の前に於て、當に是の如き衆妙の法寶――所謂、[六]四念處及び四正勤、四如意足、五根、五力、七覺、八道の種種諸法――を散ぜん。此の夢はこれ彼が先に於ける瑞相なり。又復大王の夢みし所の、此の迦毗羅城を去る、其の外遠からずして六人有り、聲を擧げて大いに哭し、手もて髮を拔けるを見たりとは、太子出家して阿耨多羅三藐三菩提を得べく、菩提を得已るや、彼の時に諸の[七]六師有り、其の心は應に大憂惱を生ずべし。所謂、富蘭那迦葉(Purṇa-kāśyapa)・摩婆迦羅瞿奢子(Maskari-Goṣālīputra)・阿耆那只奢甘婆

【三】　太子。恐らくは大王の誤。

【四】　薩婆若。一切智と譯す、佛智のこと。

【五】　次の四無畏と共に、佛菩薩に具はる德相なり。こゝに佛の十力、四無畏あり。十力は主として智慧の力用にして、四無畏は說法に關するものなり。

【六】　四念處乃至八道を三十七助道品といふ。原始佛敎の實行條目の總括なり。

【七】　六師、六師外道これなり。釋尊の當時、毗舍離城王舍城附近に於て、成立宗敎に反對して、新に旗幟を掲げたる思想團體の長にして、是等は佛敎より見て外道なるのみならず、婆羅門敎より見て、一層多くの外道なり。その主張の槪要は、長阿含中の沙門果經(寂志果經)の中に載せらる。

羅(Ajita-keśakambala)・波羅浮多迦吒耶那(Prakudha-kātyāyana)・删闍夷鞞耶私致只子(Sañjayi-Vairatiputra)・尼乾陀若低子(Nirgrāntha Jñatiputra)等なり。此の夢はこれ彼が先に於ける瑞相なり。』

爾の時、作瓶天子、淨飯王の爲めに夢を解說し已り、大王に白して言はく『大王よ、宜しく應に心に歡喜を生ずべし、恐怖を懷き、憂畏して樂まざる勿れ。何を以ての故に、此の夢は吉祥なり、善果報を獲ん。須らく自ら慶幸すべし、愼しみて慮有る莫かれ』と。是の如く淨飯王を安慰し已り、忽然として現ぜず。時に淨飯王、婆羅門の是の如く夢を解し、說きて吉祥の善果報と云へるを聞き已り、即ち太子の爲めに、更に重ねて五欲の具を增加し、太子の心をして染著戀愛せしめ、出家せざるを望む。爾の時、太子宮內に在りて意を恣にして五欲の事を受くること、思議すべからず。

道見病人品第十八

爾の時、作瓶天子、復、更に思惟すらく『此の護明菩薩大士、彼の宮內に在りて五欲に著し、放逸情蕩にして已に多時を經たり。世間は無常なり、盛年失ひ易し。護明菩薩、應當に早く宮內を捨てて出家すべし。我今、先づ其が爲めに勸請覺悟を[一]相作して、速に厭離せしむべし』と。是の如く念じ已るや、作瓶天子の神通力の故に、亦、是の護明菩薩大士の宿福因緣にて、宮內に坐して忽然發心し、園林に出でて觀看遊戲せんと欲す。

爾の時、太子、馭者を召喚して之に告げて言ひて謂く『善馭者、汝、速かに疾く好車を莊嚴すべし、我、城を出で園苑に向ひ、遊戲して目を悅ばし、叢林を觀看んと欲す』と。是の時、馭者、太子に白して言はく、『聖子の勅の如くして、我、敢て違はじ』と。馭者、旣に太子の是の如き敎令の

【一】相作。原文には作相と作す。恐らくは顚倒なるべきを以て、今之を相作に改めたり。

語を聞き已り、卽ち往いて淨飯王に奏白して言はく、『大王、當に知るべし、太子、今、出でて園林に向ひ、善地を觀看んと欲す』と。時に淨飯王、勅を出だして國內の人民に宣令し、悉く迦毗羅城を莊嚴し、掃灑し、淸淨ならしめ、並に一切の諸草、沙礫、荊棘、朽木、土埠、糞穢臭の處を除却せしめ、皆、平坦ならしめ、乃至、園內の有ゆる女名の樹木には、還女の瓔珞の具を以て、之を莊嚴し、男名の樹木は、男の瓔珞を以て、用て校飾し、乃至、道上に、太子の前に於て、或は老、或は病の出現するを聽さず、太子をして見已りて厭離の想を生ぜしむる莫し。

是の時、馭者、車を莊校し已り、太子に言を進む『已に車を嚴しめ訖る、唯願はくは、聖子、善く自ら時を知ろしめたまへ』と。是の時、太子、卽ち寶車に乘り、乘り已りて大王の威神を執持し、巍巍たる盛德もて、城の南門より、漸漸にして出で、園林に向つて觀矚嬉戲せんと欲す。

爾の時、作瓶天子、卽ち太子の前路に於て、化して一病患人と作り、連骸困苦、水注腹腫して、大苦惱を受け、身體羸瘦、臂脛纖細、痿黃少色、喘氣微弱、命、須臾に在り、糞穢の中に臥し、宛轉呻喚して起擧する能はず。語らんと欲して口を開き、纔かに聲を出すを得、唱へていふ、『叩頭して乞ふ、我を扶けて坐せしめよ。』

是の時、太子、彼の病人の、乃至、口に言ひて、『我を扶けて起たしめよ』と唱ふるを見、太子、彼の病患の人を見已り、馭者に問ふて言ひて謂はく、『善馭者、此はこれ何人ぞ。腹肚極めて大きく、猶ほ大釜の如し。喘息の時、身遍ねく戰慄し、臂脛纖軟、身體尫羸にして痿黃無色なり、或は復、稱へて「嗚呼阿孃」と言ひ、或は復、稱へて「嗚呼阿爺」と言ひ、悲切酸楚にして見聞するに忍びず。他身に託するに依つて、方に能く起止す』と。時に作瓶天子、神通力を以て、馭者をして太子に報ぜしめて言はく、『願はくは聖子聽け、此を病人と名づく』と。太子、復、彼の馭者に問うて言はく、『病人と稱するは、此はこれ何の名ぞ。』馭者報じて言はく、『大聖太子、此の人の身體善

く安隱ならず、威德已に盡きて困篤無力に、死時至らんとして歸依するに處無く、父母倂に亡せて告訴するに處無し。已に歸依無く告訴無きが故に、此の人久しからずして、自ら應に命終すべし。活くるを求め得んと欲して、極めて大いに困苦するも、必らず當に濟はれざるべし。差ゆる日を望み覓むるも、是の處有ること無く、唯、時を待つのみ。大聖太子、是の因緣を以ての故に、病と名づくる也』と。而して偈有りて說かく、

『太子、馭者に問ひて言はく　此の人何の故に是の苦を受くる
馭者、太子に報じ奉るらく　四大調はざるが故に病生ず、と』

太子、復、馭者に問ひて言はく、『此の人の獨り[二]一家の法なるべしと爲すや、一切世間の衆生に悉く是の法有るべしと爲すや』と。馭者、報じて言はく、『此の病の法は、獨り一家のみに非ず、一切の天人衆生の雜類、皆、悉く未だ免れず』。太子、復、言はく、『我も、亦此の病法を、未だ過ぎず未だ脫せず。會らず當に彼に似て此の如き事を成すべし。嗚呼、畏るべし』と。太子、卽ち其の馭者に告げて言ひて謂はく、『汝馭者、若し我が此の身、是の病を脫せず、玆の病法を具して、度するを得難くば、我今、假にも彼の園林に至りて遊戲して樂を受けじ。車駕を廻らし、還りて宮中に入るべし。我、當に思惟すべし』と。馭者、答へて言はく、『太子の勅の如くせん』と。

是の時、馭者、旣に敎を受け已り、車を廻らして宮に向ふ。是の時、太子、還りて宮內に入り、端坐して思惟すらく、『我も亦病むべし。病法、未だ現はれざるも、豈に情を縱にするを得んや』と。

時に淨飯王、馭者に問うて言はく、『太子、園に遊びて歡樂を受けしや不や』。馭者報じて言はく、『大王、當に知るべし。太子、城外に向ひて出遊し、池沼を觀看んと欲して、而して半路にして、一病人の、乃至、口に「願はくは我を扶けて起たしめよ」と言へるを見、見已りて卽ち勅し、車を廻ら

【二】一家の法。その人特有の事項。

して還り、宮中に靜坐して思惟[三]繫念す』と。時に淨飯王、是の語を聞き已りて心内に思憶すらく、『阿私陀仙授記の語は、決定して眞實なり。太子、復、家を捨て出家する莫らんや。我今、太子の爲めに、更に五慾の事を加へて、太子を増長し、五慾に著して、捨てて出家せざらしむべし』と。時に淨飯王、卽ち太子に五慾の具を益して、復、倍増長す。而して偈有りて說かく、

『太子久しく宮閤の中に住り　出でて園に向ひて五慾を受けんと欲し
路に一瘦贏の病者を見て　便ち慾を厭離せんとの想を生じて廻り
端坐して老患の因を思惟す　「我今未だ超えず何ぞ樂を得ん」と
さはれ、[四]色、聲、香、味等、諸觸は　最妙最勝なり厭ふべからず
大士昔に行ぜる善業の緣もて　今極樂を受くること比有るなし。』

是の如き次第にて、太子、宮内に在るの時、具足して五慾の功德を受け、晝夜絕ゆる無し。

路逢死屍品第十九

爾の時、作瓶天子、復、一時に於て、是の如き念を發す、『此の護明菩薩大士、宮内に在りて、極意歡娛す。今、時已に到る。護明菩薩、宜しく早く出家すべし。我、今、彼の大士の爲めの故に勸請し、出でて五慾を厭離し、捨家出家せしむべし』と。是の時、作瓶天子、心に、護明を勸發せんと欲するが故に、作意して、宮内より出でて彼の園林に向ひ善地を觀看しむ。

是の時、太子、馭者に告げて言ひて謂はく、『善馭者、汝、速かに駟馬の寶車を駕すべし。我、城を出でて園に詣り、遊戲せんと欲す』。是の時、馭者、太子の命を聞き、卽ち疾く往き、淨飯王に奏して言はく、『大王、當に知るべし、太子、出でて園林を觀看んと欲す』。時に淨飯王、勅して迦毘羅城を莊嚴し、街巷を掃灑し、荊棘、沙礫、朽木、土[一]坧、糞穢、瓦石を、皆悉く淨除せしめ、乃至、

【三】繫念。念を一つにかくること。卽ち一事に專心なるなり。

【四】色聲香味等諸觸は五欲材なり、今大王之を增益するを以て、太子厭はんとして厭ふを得ず。而も佛傳記者は、之を以て太子の前生の福業によるものとせるなり。此偈、太子の人間生活に對する心中の煩悶を、頗る能くあらはすものあり。

【一】坧（かたきつち）。或は堆に作る。

園内の有ゆる諸樹の、是れ女名なるは女の瓔珞もて嚴り、男の名字なるは男の瓔珞もて飾り、復鈴鐸を振りて是の如き言を唱ふ、『更に一人の不祥ありて、太子の前に在りて、或は老、或は病、乃至、太子の眼に見ての後、厭離を生ぜしむる莫れ』と。是の時、馭者、卽ち太子の爲めに好車を嚴備し訖已り、進み上つて太子に白して言はく、『聖子、善く聽きたまへ、車を莊校し訖りぬ、唯、願はくは、時を知ろしめせ』と。太子、車に坐し、威神大德もて、城の西門より出で、外に向ひて園林を觀看んとす。

時に、作瓶天子、太子の前に於て、化して一屍と作り、臥して牀上に在り、衆人舁きて行く。復、種種妙色の[二]芻衣を以て、其の上に張施して斗帳と作し、別に無量無邊の姻親有り、左右前後に圍遶して哭泣す。或は散髪なる有り、或は胷を搥つ有り、或は復、頭を拍ちて兩臂を交横するあり、或は復、二手に塵土を取りて、持つて面頭を坌し、或は種種悲咽の音聲を出だし、涙の下ること雨の如く、大叫號慟して、酸哽すること聞き難し。太子、之を覩て心懷慘惻し、馭者に問ひて言ひて謂はく、『善馭者、此はこれ阿誰ぞ、牀上に臥し、種種の華を以て莊嚴圍遶し、乃至、雜色の芻摩の衣服もて斗帳と作し、人、舁きて行き、大衆周匝して[三]稱寃叫哭するは』と。偈を說き問ひて言はく、

『王子、妙色にして身端正なり　問ふらく、善馭者よ此はこれ誰ぞ
牀上に臥して四人[四]轝せ諸親圍遶して叫喚して哭するは』

爾の時、作瓶天子、神通力を以て、善馭者をして太子に報ぜしめて言はく、『大聖太子、此を死屍と名づく』と。太子、復、善馭者に問ひて言はく、『死屍とはこれ何ぞや』。馭者、報じて言はく、『大聖太子、此の人は已に、世間の命を捨てて威德有る無く、今、木石に同じく、猶ほ牆壁の如くして別異有る無し。一切の親族知識を捐棄し、唯獨り精神のみ、自ら彼の世に向ふ。今より已後、

【二】芻衣は次出の芻摩衣の略、kṣuma の音寫にて、麻布のこと。

【三】寃は枉也、曲也、屈也、亦不理也(慧琳音義)

【四】轝は輿。のする、おふ。而して四人にて棺輿を擧ぐ。[illegible]を以て四人轝といひ、死者を第五人と呼ぶ習慣なり。

復、更に、父母兄弟妻子眷屬を見ず。是の如き眷屬も、生死別離して更に重ねて見る無し。故に死屍と名づく』と。太子に向ひて偈を說いて言はく、

『已に心意等の諸根を捨て　屍骸に識無く木石の如し
諸親號咷して暫し圍遶すれども　恩愛は此に長く別離す』

太子、復、善馭者に問ひ、言つて謂はく、『善馭者よ、我も亦　此の死法有りや以不や。我、已に超えたりや、未だしや』。馭者報じて言はく、『大聖太子、太子の尊身も此の死法に於て、亦、未だ免脫せず。世間一切の、若しくは天、若しくは人の、有ゆる親族眷屬識知に、各各是の別離の事ありて、彼は此を見ず、此は彼を見ず』と。而して偈を說いて言はく、

『一切の衆生此に業を盡すや　天人貴賤も平等にして均し
善惡の諸世間に處すと雖も　無常の至る時には異有ること無し』

爾の時、太子、此を說くを聞き已り、馭者に報じて言はく、『若し我の此の身も、同じく是の死有りて、死法未だ過ぎず、我、卽し、今、天及以び天中の所有る眷屬を見るを得ず、彼等も叉亦、我を見ずんば、我、今、何ぞ假にも彼の園林に向ひて、遊戲して快樂せん。速に車を廻らし、還りて宮內に入るべし、我、當に思惟すべし』と。是の時、馭者、太子の命じて是の如く言へるを聞き已り、卽ち車駕を廻らして、還りて宮中に向へり。

爾の時、太子、宮內に至り已りて端坐して思惟すらく、『我、當に必ず死すべし。既に未だ死法を超越するを得る能はず』とて、繫念し、默然として、是の如く世間果報の無常に會歸するを思惟す。而して太子が、初めて宮に入らんとせる時、一の無智愚癡の相師有り、立ちて大王の宮門の外に在り。太子の面顏、上下の形容、丈夫の相を熟視瞻仰し、大聲もて唱言すらく、『汝諸人輩、一切、當に知るべし。今日より後、七日に至る內に、此の太子に、七寶自然に成就して來應せん』と。

時に淨飯王、馭者に問うて言はく、『汝、善馭者、太子を引導して園林の中に至り、頗る心に稱ふを得て、歡樂を受けたりや不や』。馭者、長跪して王に報じて言はく、『大王、當に知るべし、太子、今、出でて園林に至らざりき』。時に淨飯王、馭者に問ひて言はく、『太子、何の故に園林に至らざりしか』。馭者、白して言はく、『大王、善く聽きたまへ。太子の宮を出づるや、其の中道に、一死人の臥して牀上に在り、四人にて扛舁げ[五]、乃至、親屬の圍遶して哭泣せるを見、見已りて卽ち迴還して宮內に入り、思惟して樂まず』と。時に淨飯王、此の語を聞き已りて心內に思惟すらく、『阿私陀仙の記せる所は、必ず實ならん。太子、復、我を捨てて出家する莫らんや。我、今、更に太子の與の五慾の事を增益し、其に染著せしめて、出家せしむる勿るべし』と。時に淨飯王、其の太子の與に、服玩を增加し、種種に充足す。而して偈有りて說かく、

『無量劫海[六]の功德行もて　太子、命終の人を見たるを以て
心大いに悵怏して憂愁を懐き　還りて宮內に入り當に死すべきを思ふ
昔より此の城の宮殿の妙なるに置かれ　太子年盛にして極めて端嚴
五慾心に稱ひ甚だ自ら娯む　猶ほ千目[七]の歡喜苑に在るがごとし』

是の如き次第にて、太子、宮內に在りて具足して五欲を受け、意を恣にして歡喜しぬ。

耶輸陀羅夢品第二十の上

爾の時、作瓶天子、太子の出でて死屍を觀、迴りて世間五慾の事を厭離し、宮內に還りて坐せるを見、六日を經たる後、復、更に是の如く重ねて思惟して言はく、『此の護明菩薩大士、五慾に著するを以て、心迷ひ、放逸にして肯て棄捐せず。今や、時、已に至れり。護明菩薩、應に須らく速に疾く捨離して出家すべし。我、今、爲めに勸請の緣を作すべし』と。時に作瓶天子、太子に出家

【五】扛。かかへあぐ。舁。かきあぐ。

【六】無量劫海。海は數量の無限に集れるをいふ語、卽ち無限の長時間の間の意。こゝには死人を見て發悟せるを前生無限時に修めたる功德の力によるとするなり。

【七】千目（Sahasranetra, Sahasrakau ,Sahasrākṣa）。吠陀以來呼ばれたる帝釋天の異名にて、雜阿含卷四十には、その前生聰明にて、よく一坐間に千種義を思惟せる故に、この名ありとせり。歡喜園（Nandana）は、その住所の園林なり、

の心を發さしめん爲めの故に、亦是の作瓶天子の宿福因緣の感動より、自ら太子をして意を興し、園林の內に向ひて遊ばんと欲せしむ。

爾の時、太子、馭者を召喚し、之に勅し、言つて謂はく、『善馭者よ、急ぎ駕乘を嚴しめよ。我、園に入らんと欲す』と。馭者、命を受け、卽ち往きて淨飯王に啓奏して言はく、『大王、當に知るべし。太子、今、出でて園林に向ひ、遊戲觀看せんと欲す』と。時に淨飯王、勅して、迦毘羅城を淸淨にし、種種に莊嚴せしむること、前の如くにして異らず。乃至、鐸を振りて城內に告げて言はく、『一人――老病及び死、六根不具――をも、太子の前に在り、太子をして、見て厭離の心を生ぜしむる莫れ』と。馭者、敎を受けて［一］好寶の車を進む。太子、時を知りて卽ち車上に坐し、威德尊重にして、城の北門より駕を引きて去る。

爾の時、作瓶天子、神通力を以て、車を去ること遠からず、太子の前に於て化して一人と作り、鬚髮を剃除し、［二］僧伽梨(saṃghāṭi)を著し、右肩を偏袒ぬぎ、右に錫杖を執り、左掌に鉢を擎げ、路に在りて行く。太子、見已り、馭者に問ひて言ひて謂はく、『善馭者よ、此はこれ何人ぞ。我が前に在りて威儀整肅、行歩徐庠、一尋を直視して左右を觀ず、執心持行すること餘人に似ず。剃髮剪髭、衣色は純赤にして樹皮を以て染め、［三］白衣に同じからず、鉢の色、紺光にして猶ほ［四］石黛の如し』と。時に作瓶天子、神通力を以て、彼の馭者をして太子に白さしめて言はく、『大聖太子、此の人を名づけて出家の人と爲す』と。太子、復、彼の馭者に問うて言はく、『出家と稱するは、これ何の行をか行ずる』。馭者、報じて言はく、「大聖太子、此の人、恒常に善法の行を行じ、非行を遠離し、善く平等を行じ、善く布施を行じ、善く諸根を調へ、善く自身を伏し、善く［五］無畏を與へ、能く一切諸衆生の邊に於て大慈悲を生じ、善く諸衆生を恐怖せず、善く諸衆生を殺害せず、善能く諸衆生を護念す。太子、是の如きを以ての故に名づけて出家と爲す』。太子、復、彼の馭者に問うて

【一】好寶。麗本には好賢に作り、三本には好寶に作る。今三本に從ふ。

【二】僧伽梨。上着。

【三】白衣。俗人のこと、白衣を著くるを以てなり。

【四】黛。青黑色。

【五】無畏。生老病死等の法に就いて畏れなきこと。施無畏といふは、この無畏を與ふるをいふ。

言はく、『汝善馭者よ、此の人は善能く諸業を造作す。何を以ての故に。法行と言ふは、此はこれ善行なり。乃至、善能く衆生を害せず。是の故に汝、今、車を將て彼の出家人の邊に向へ』と。馭者、命を承けて、太子に白して言はく、『太子の勅の如くにせん』と。即ち車を引きて出家人の所に向ふ。是の時、太子、至り已りて彼の出家人に諮問し、是の如き言を作す、『尊者、大士よ、汝はこれ何人ぞ』と。時に作瓶天子、神通力を以て、彼の出家剃髪の人をして、太子に報ぜしめて言はく、『太子よ、我、今、名づけて出家の人と爲す』。太子、復、問ふ、『仁者、何故に出家人と名づくる』。彼、復、報じて言はく、『太子よ、我は一切世間の諸行の盡くこれ無常なるを見、是の如く觀じ已りて一切世俗の衆事を捨て、親族を遠離して解脱を求めんが故に、捨家出家して是の思惟を作す、「何の方便を行じてか能く諸命を活さん」と。此の事、知り足りて善く法行を行じ、乃至、善能く一切諸命を殺害することを行ぜず。太子よ、是の如きを以ての故に、我を出家と名づく』。太子、又言はく、『仁者よ、爲す所の此の業や大に善し。汝、若し能く一切諸行はこれ無常の法なりと觀じて、能く知ること是の如く、乃至、善く一切衆生に、怖畏無きをば與へ、心に能く諸衆生を殺害することを起さず、又能く活命して共に安隱を施さんには』と。而して偈有り、言はく、

『世間はこれ滅法なりと觀見し　無盡の涅槃處を欲求して
怨親に已に平等心を作し　世間に欲等の事を行はず
山林及び樹下に隨依し　或は復塚間の露地に居し
一切諸の有爲を捨てて　諦に眞如を觀じ食を乞ひて活く』

爾の時、太子、法を敬せんが爲めの故に車より下り、徒歩して彼の出家人の所に向ひ、頭面もて彼の出家人を頂禮し、三匝圍遶して還車に上りて坐し、即ち馭者を勸めて宮中に迴還せしむ。是の

【六】法行。如法の行。理想に相應する實行。

【七】諸行。世間に現象せることがら。

【八】有爲(saṁskṛta)。因緣によりて造られたるもの、即ち生滅起廢する約束あるもの。

【九】眞如。一切のあるがまゝのすがたをいふ。

時、宮内に一婦人有り、名づけて【一〇】鹿女(Mṛgajā)といふ。遙かに、太子の歸り來りて宮に入るを見、欲心に因りて、偈を說きて言はく、

『淨飯大王や快樂を受け　摩訶波闍や憂愁無からん
宮内の婇女は極めて姝妍なるも　誰か能く此の聖子の處に當らん』

爾の時、太子、是の所說の偈頌の聲を聞き已り、遍體戰慄し、涙の下ること雨の如し。心内に【一一】涅槃の樂を愛樂し、清淨の諸根もて涅槃に趣向して、是の言を作す、『我、今、應當に彼の涅槃の樂を取るべし。我、今、應當に彼の涅槃を證すべし。我、今、應當に彼の涅槃を行ずべし。我、今、應當に彼の涅槃に住すべし』と、

爾の時、淨飯王、宮殿内に在り、諸臣百官左右を圍遶す。太子、忽然、入りて王の邊に到り、十指掌を合し、躬を曲げて立ち、父王に白して言はく、『唯願はくは大王、今、我に聽すべし。我、出家して涅槃を志求せんと欲す。大王、當に知るべし、一切の衆生に、皆別離有り』と。時に淨飯王、其の太子の是の言を作すを聞き已り、象の搖るがせる樹の如くに、遍體戰動し、支節【一二】怡解し、涙下りて目に盈ち、語聲嗚咽して太子に報じて言はく、『我が子、太子よ、此意且らく停めよ。子よ、今は、此はこれ出家の時に非ず。我も亦、曾て年少の時諸根の動く時を經たるも、而も亦、未だ世間の衆患を見ず、法行を行ぜず。又、亦、未だ曾て諸惡欲を見て、而も苦行を行ぜず。子が是の心を起せるは、甚だ堪忍ならず。我が子、童子よ、年少の時は心意未だ定らず、諸根未だ伏せず。而かも彼の【一三】阿蘭若(āraṇya)に住せんと欲するも、時に苦行に堪へざらん。我が子、童子よ、我が年の老ゆるを待て。我、若し時至らば、法行を行ぜんと欲す。我、常に國を捨て、子に王位を付し、空閑の處に入りて苦行を行ずべし。我が子、童子よ、若し子にして反逆して我が心に順はず、我が語言に違ひて法行を生じなば、子は現世に於て不善の法を得、以て尊の語に違はん。是故に我が子

【一〇】有部毘奈耶巻第十八、等には、太子三妃の一とし、Mahāvastu II.P.157は、Mṛgīとし、Dhammapada. A. I. P. 85には、Kisāgotamiとせり。

【一一】涅槃。鹿女の偈中に、快樂の語あり、また憂愁無しの語あり。是等の語は、涅槃の意義と相通ずるものなるを以て、單なる世俗的の語が、深思の太子に涅槃妙樂の意義を與へしめたるなり。

【一二】怡。やはらぐ。

【一三】阿蘭若。森林の義、轉じて修行處の意味をも寓せり。蓋し森林は空閑寂靜にして、淨行を修するに適するを以てなり。

よ、此の精進心を、且急に捨離して宮中に住し、意を家內に安んじて俗法を行ぜよ。我が子、童子よ、凡そ世間の人は、先づ須らく五慾の樂を受け、然る後に發意して、出家心に向ふべし』と。太子、報じて言はく、『大王、今は子が出家心を障ふるを得べからず。何を以ての故に。譬へば、人有り、彼の梵燒熾然せる猛焰の火宅の中より、走り出んと欲せば、此はこれ健人なり、遮斷すべからざるが如し。大王、諸の生有る者は會ず別離有り。若し人、世間の中に、皆別離有りと覺知して、而も別離の法を捐つる能はずんば、これ善利に非ず。又、人有り、事を作して成らず、死時、將に至らんとするに、疾く爲さざるは、これ善智に非ざるが如し』と。卽ち父王の爲めに偈を說きて言はく、

『若し一切の決んで無常にして　諸有る法の終に散壞するを視ば
寧ろ世間の諸親に別るるを忍ばん　死命至らんと欲す事須らく成すべし。』

時に淨飯王、更に復、慇懃に、重ねて太子に語るらく、『我が子、童子よ、決定して我を捨てて出家するを得ざれ』と。又諸大臣も、昔の世論に依りて、各見る所を以て太子を諫めて言はく、『大聖太子、聞かざる可けんや、劫初已來、韋陀論（Veda）中、昔の諸王輩は、年少の時は、各自境に在りて如法に治化し、年老ゆるの時に至りて、[四]嫡胄相承け、各、世子を將て以て王位を紹がしめ、然る後、山に向ひて法行を修行せり。是の義を以ての故に、大聖太子、獨り先王の法に違ふを得ざれ』と。時に淨飯王、諸大臣の是の語を作すを聞き已り、淚の下ること雨の如く、一心に太子の面を諦觀して、眼睛瞬がず。是の時、太子、心內に狐疑し、憂愁して樂しまず、還りて宮中に入る。太子、宮に至るや、諸の婇女等、遙かに太子を見て皆悉く歡喜し、坐より起ちて、或は手に合掌し、或は面に嬌姿し、或は舞ひ或は歌ひ、或は身もて承奉す。太子の坐せるを見て、各、欲心を以て、妖態熾盛に、太子を圍遶して相共に娛樂すること、自在天の宮內に在りて、威德巍巍衆相顯赫とし

【四】嫡は正也。胄は連續也。緒也。

て歡樂するが如く、亦然り。
爾の時、太子、以て、同生の、諸相諸好の一齊に等しきものと共に、恒常に莊嚴して日夜に遊戲す。又、太子の是の如き諸相の、顯赫炳著なるを見て、心に是の如き希有の想を生ず『此はこれ月天(Candra)の、自ら地に下れるなり』と。彼等婇女、太子の是の如き相貌を見、極めて羨心を起し、或は復、眉を揚げ、或は復、目視する有り、或は口に一五詧言し、或は手もて相招くに、是の太子の威神力を以ての故に、其の欲心をして熾盛なる能はず、復、笑ふ能はざらしむ。
太子、亦、父王の邊より出づ。時に淨飯王、卽ち馭者を喚び、而して之に告げて言ひて謂はく、『善馭者よ、太子は彼の園林に至らざるか』と。馭者報じて言はく、『大王、當に知るべし。太子、彼の園林の中に向はんと欲し、其の半道に於て一人有り、鬚髮を剃除し、身に染衣を服し、杖を執り鉢を持てるを見、彼の人を見已りて車を廻らして宮に入り、端坐して思惟す』と。爾の時、淨飯王、是の語を聞き已り、是の如く思惟す『大仙阿私陀の言は虛妄ならず。定めて恐らくは、太子、捨家出家せん。我、今、更に五慾を增益して、其をして染著して出家せしむる勿らしむべし』と。時に淨飯王、更に五慾を加へ、宮內に住して、心に快樂を受け、出家するを許さざらしむ。重ねて偈を說いて言はく、

『太子道に出家の人を見たり　身體に著くる衣は樹皮もて染めたり
覩已りて無上道を志求し　深心に唯出家に在らんを樂へり
老病死の苦の無邊なるを觀　又出家の乞食して活くるを見
世間を厭離して　一六三患を捨て　解脫を慕樂し　一七無爲を求めぬ
生老病死の諸瘡疣　太子彼等の苦を離れんと欲して
道上に彼の出家の者を見るや　心大喜を生ずらく「此はこれ眞なり」と。

【一五】詧はあきらかにす。察と同じ。一本切に作らる。或は諞(ヘン)(よくものいふ)、又は[illegible](リャク)(ほむる)の誤か。
【一六】三患。老病死の三。
【一七】無爲(asaṃskṛta)は、前出の有爲に對す、因緣所生の範疇を脫して生滅變化せざるもの。

貪等諸恚の根を捨てんと欲し　「我應に鬚髮を剃除して山藪に入るべし」と
太子、至眞の法を求めんと欲し　彼の沙門を見て大に喜歡す
善馴馬調御の車に乘りて　三界を出でんと欲するが故に苑を觀つ
半路に彼の俗服を捨てたるを見て　心に「此はこれ上菩提なり」と喜びぬ』

爾の時、淨飯王、更に太子の爲めに、廣く五欲を設け、所有の功德、事事に加益して悉く增多せしむ。復、舊宮城廓の外に、四面に、周匝して、守護牢防のために、別に更に崇巨なる高壘を築き、舊院を遶りて、坑塹極めて深し。その〔一八〕埤堞の頭に、種種の七寶の羅網を安置し、羅網の節目に悉く鳴鈴を懸け、宮閤の門扉に嚴しく禁衞を加へ、晨夕の出入開闔の時に大聲有らしめ、四遠の門外に聞徹す。復、無量の兵車象馬及び人の團體を置き、相捉へて、皆、鞍甲を被り、悉く精牢ならしむ。其の次に、復、宮院の外に、無量百千の壯士を安置す。形容端正にして喜ぶべきこと雙無し。悉く能く、他の有ゆる怨敵を破す。身に甲冑を帶び、手に三叉、弓箭、長刀、戟、〔一九〕矟、〔二〇〕鑹棒を執り、諸の是の如き等の種種の武仗もて、太子の內外城門を防護す。復、宮內をして、嚴かに約勅を加へしめ、諸婇女等、晝夜に停まる莫く、諸の音樂を奏して、一切娛樂の事を顯現し、有ゆる女人の幻惑の能を悉く皆顯現し、慾の枷鎖を以て、慾心に著け、捨てて出家する勿らしむ。

【一八】埤はかきね。堞は女牆なり。

【一九】矟（馬上にて用ふるほこ）或は槊に作る。

【二〇】鑹（小さき矟）、或は鑽（小さき矟）に作る。

卷の第十六

耶輸陀羅夢品第二十の下

爾の時、國師に一子有り、優陀夷(Udāyin) 隋に聰辨と言ふ。名く。聰明の智慧ありて衆の論に辯巧なり。時に淨飯王、即ち彼の優陀夷を喚び來らしめ、來り已りや、王、是の如き言を作す、『汝優陀夷は黠慧多智なり。今、往いて悉達太子に侍し、方便力を以て、我が太子に教へて、心、安穩に、宮中を愛樂せしめ、厭離捨欲して出家せしむる勿るべし』と。時に淨飯王、更に復、一切釋種の眷屬を召喚し、聚集めて之に語つて言はく『汝等宗族、我、意に疑ひ慮る、悉達は決んで家に住まり居らじ。汝等今は我を佐助くるに、何の方便を作してか、其をして離れざらしめん』と。時に諸の釋種、大王に報へて言はく、『我等、詳かに共に太子を守護せば、其れ何の力有つてか、能く强ひて出家せんや』と。

爾の時、淨飯王及び諸の釋種、迦毘羅城の東門の外に於て、五百の勇健なる童子を安置しぬ。善能く兵を用ひ、巧みに神射を解し、多く方便有り。悉く皆、大力なること猶壯士の如く、力敵雙び少し、一一の童子に五百車有りて自ら圍遶し、一一の車邊に、復五百の勁捷なる壯夫有りて各圍遶す。是の如く次第して南西北門も亦、復、是の如し。乃至、各五百人の防有ること、上に說く所の如し。復、宿老たる諸の釋大臣有り、悉く皆各十字の街巷、四衢の道頭に住して、遞ひに共に悉達太子を守護しぬ。時に淨飯王、別に五百の最勝壯健なる諸釋の侍官を置き、其身に悉く皆鎧甲を帶持し、象に乘り馬に乘りて、四面に淨飯王宮を圍遶し、各、閤門の內外に在つて通夜持更す。(一)

爾の時、國大夫人、摩訶波闍波提・憍曇彌、宮內に在り、婇女を集聚めて之に語つて言はく、『汝

【一】持更。更は定めある夜の時をいふ。初更、二更、乃至、五更の如し。持更は夜中の時間を通して、警戒するなり。即ち夜番。

等當に知るべし、今より已去、晝夜に睡る莫く、諸の明寶を將つて、高幢の上に置き、夜を暗からしむる勿れ。又、復、處處に別に蘇油香燈、蠟燭を燃し、恒に火を覆はしめて、滅無ならしむる勿れ。諸門の管鑰は、好く牢く關閉して、時に非ずして、人をして横に開からしむるを得され。身體莊嚴に、皆瓔珞を著け、各手を連ぬること、猶ほ鉤鎖相捉へて住まる如くし、太子を圍遶して、浪に行くを聽す莫れ。若くは弓刀を執り、或は叉棒を持ち、或は戟槊を拄へ、是の如く坐立して、或は執し或は對して、種種の器仗もて、晝夜に心を用ひ、太子の行動　覺らさらしむる勿れ。彼れ若し出家せば、我が宮、空虚にして娛樂すべき無けん』と。

時に、優陀夷國師の子、太子に侍衞し、儲宮の內に內つて太子を見るに、殿中に住在して思惟して坐し、宮內の婇女皆悉く默然たり。是の如きを見已るや、彼の諸女に語つて、是の如き言を作さく、『汝等一切、巧みに談論を解し、語言戲謔の善く人意を承け、態を變じて歡を爲し、端正怡ぶべく、世間に比無し。各自ら是の如き伎能有るに、今日云何んぞ默然として住して、忘失すべけんや。是の如き功能は、應當に彼の[二]北鬱單越國土の作せる莊嚴事の如くなるべし。又、復、汝等は、北方毘沙門天護世大王の爲に、妃后と作るに堪へたり、況や、復、人間の宮內に堪へざらんや。汝等婇女、豈此太子をして離慾せしむ可けんや。若し汝等の如くあらば、猶能く眞正の聖人をして五欲を行ぜしめん、況や、復、今日此の釋迦太子をして、世間に染著せしむる能はざらんや。汝等、婇女、能く、美言を作し、怒を廻して喜ばしめ、巧みに他の心を取る。婦人の身に有せる方便幻惑の術は、假ひ女人たりとも、亦能く慾を行ぜしめむ、況や、復、男兒の汝等に、著せさらんや。若し世間の人、汝等と共に一處に同ずるを得て、能く慾を行ぜざらんこと、終に是處無けん』と。而して偈を說いて言はく、

「汝等婇女の輩　大いに方便の力有り

【二】北鬱單越國 Uttara-kuru。須彌山說を中心として、北方にありと想像せらるゝ人間世界、

巧みに能く他を幻惑して　善く汝の境界を示す
假ひ離欲の人たる　眞正の諸仙等たりとも
汝を見るを得たらんには　必ず應に欲心を生ずべし
況や復此の太子にして　汝等の娛樂するを見て
能く五欲を行せざらんこと　終に是處有ること無けん』

是の如く汝等、自らの境界中に、巧みに方便を解す。我汝等を見るに、具足して皆是の如き方便あり、遂に王太子をして、汝等の邊に於て、欲心染著せしむる能はずば、我甚悅ばず。汝等更に人意を加へて、巧みに方便を出し、悉達太子をして見已りて汝等の邊に於て、別に欲心を生じて、厭離せしむる勿らしむ可し。汝等婇女、聞かざる可けんや。昔、迦尸國に一の仙人有り。提波耶那(Dīpāyana)（隋に誕上生と言ふ。）と名けたり。孫陀梨(Sundarī)婬女に誑惑せられたり。而るに彼の仙人や、天の如くに異ることとなく、諸天すら猶、尙、奈何ともする能はざりしに、孫陀梨婬女に惑はされしが故に、彼に隨つて步行し、來りて城中に入れり。又、復、往昔、一仙人有り、名を獨角(Ekaśṛ-ṅga)仙人の子と爲す。生小已來、未だ欲事を經ず。彼の時に當つて一婬女有り名けて、商多(Śāntā)（隋に寂定と言ふ。）と曰へり。彼の仙を誑惑して遂に禪及び五神通を失はしめたり。又、復、昔、仙人有り、名を毘商蜜多（Viśām-itra）（隋に化友と言ふ。）と曰へり。[三]多時苦行し、十年を經て噉食する所無し。彼の時に當つて一婬女有り、彌迦那（?Mṛgaṇā）（隋に一者と言ふ。）と名けたり。極大端正なり。彼の仙、亦、復、其れに誑惑せられたり。諸是の如き等の大神仙人も、多くは諸婬婦女に誑惑し牽取せられて、世慾の事を敎行せるあり。況や、復、今日の悉達太子は、盛壯少年、身體柔輭、大王の子として善く諸事を解す。汝等至心に承事供奉し、汝等に於て染著の心を生ぜしめ、其をして王の繼胤を斷たしむる勿れ』と。

【三】巴利語藏本に、文を友とせり、友の寫誤。

彼等婇女、國師の子、優陀夷の邊に於て是語を聞き已り、太子に向つて種種の巧媚幻惑を示現し、勝妙の欲心を生じ增上せしむ。或は婇女の舞形を示現する有り。或は婇女の微妙の聲を出して唱翊歌讃するあり。或は音樂を作し、或は可笑奇異の面形を出し、或は百種の語言辭句を造り、或は復、太子の前に於て【四】逶迤巧妙の行步を示現する有り。或は復、雜異種種の妙好の鮮華を將以つて太子に奉ずる有り。或は種種百和の香を作つて太子の身に塗り、或は口中に於て指を吹きて、種種の鳥聲を造作し、或は復、諮白して是の如き言を作す『聖種王子、願はくは我等が作す所の、種種の世俗の慾情、語言、嘲調を聞きたまへ』と。而るに王太子、宮內に在りて是の如き等、諸種の欲戲を聞くや、是の思惟を作す『世間の中は苦に逼らる。所謂、生老及び病死等なり。憹患既に然るを、彼等の苦を厭離し捨して、歸依の處を求むるを知らず。我、今、云何が巧みに方便を作し、能く此等世間の諸苦、生老病死を捨てんか』と。又、復、彼等諸の婇女輩、多種に歌舞音聲、或は復、種種諸妙の欲事を示現す。而かも彼の悉達太子、見已りて希有戀著の心を生ぜず。時に宮女中に一婇女有り、自らの手に一の末利（Mallikā, 素馨）華鬘を將ち、前み出でて太子の頸下に繫く。而るに太子の眼、熟視して瞬かず、彼の女人を觀て、卽ち還自ら末利の華鬘を解き、解き已りて手に持して、聰牖中より外に擲棄す。時に國師の子、優陀夷、太子の端坐して正念に思惟し、世間有爲の境界に著せず、又妙の色聲香を染愛せざるを見、是の如く見已るや、其の優陀夷——聰明の智慧もて巧みに種種殊方の善論を解せり——太子を諫めて言はく、『大聖太子、我、大王の勅を被り、來つて、此に至り、太子と友として娛しむ。我、今、諮白せん。願はくは太子聽きたまへ。我、太子の、世事中に於て心意動かさるを以て、偈を說いて言はん。

我友の相を略說せんに　惡は諫め善は行はんを勸め
厄難は相救濟する　是を眞の善友と名く』

【四】逶迤は自得の貌。

時に優陀夷、此の偈を說き已りて、復、是の言を作すらく、『大聖太子、我、今、旣にこれ聖子の友たり。諸事の好惡、須く共に平量すべし。異を見て默然として我を捨てんと欲するは、名けて友と爲さず。是の故に、我、今、太子に向つて諮白する所有らんと欲す。友の如き心に依つて、唯願はくは領納したまへ。太子、當今、盛壯年少なり。我、今、太子の心を觀着るに、善事を作さずして而も諸婇女等を捨離せんと欲し、其の邊を嫌恨せり、何の惡む可きことか有る。[五]凡そ心を繫縛せば是に隨順せんなり。愛著の情は欲態を本と爲し、婦女の體は唯丈夫の敬重を以て歡びと爲す。若し太子の心、必ず五欲の事に愛著せず、世間の富貴榮華を是れ難らば、但、當に以て口にのみ美言善語して、宮人を慰喩し、其の意をして悅ばしむべし』と。而して偈を說いて言はく、

『婦人は敬是れ樂しみ　敬を樂の最上と爲す。
敬無くして唯色のみ有るは　樹に花有る無き如し。』

爾の時、太子、國師の子優陀夷の邊より、是の語を聞き已るや、卽ち種種の善巧の語言、哀愁の聲を作す。猶、雲陰に隱隱たる雷震の微妙の聲の如く、猶、善美和合の音聲の柔輭なるが如くして、優陀夷に報答して言はく、『汝優陀夷よ、我も亦汝の我が良朋たり、我が善友たるを知る。好心開發して、我が意を諫曉せよ。我、今、亦、汝の意の我に向つて親密厚重なるを知る。我、今、亦、汝の心に違逆せじ。汝、今、我に是の如き過有るを見たり。我、今、汝に順はん。但し我は是れ世間五欲の樂を知らざるに非ず。我、世諦一切の諸事を見るに、了達分明なり。我、世間の無常敗壞を以て、是の義を以ての故に、此に畏る可きに處して心意樂しまざるなり』と。而して偈を說いて言はく、

『世の榮は快樂なりと雖も　生老病死有り
此の四種若し無くんば　我が心誰ぞ樂しまざらん』

【五】凡繫縛心、隨順是也。心に牽かるゝ所あらば、それに順隨して、違ふなきを可とすの意。

是の時、太子、是の偈を說き已り、復、更に重ねて優陀夷に語つて言はく『汝、優陀夷よ、當に此諸の婇女等を觀るべし。既に老に盛壯の色を奪はれ已れば、各相視て意、喜樂せず、況や癡人の是の處に於て、愛樂の心を生ぜんと欲する有らんや』と 而して偈を說いて言はく、

『生老病死の法よ　此の生老病に住し
若し住して樂心を生ぜば　鳥獸と共に異る無けん』

爾の時、太子、國師の子優陀夷等と共に、往復來去して言論するの時、日遂に沒するに至りぬ。太子、既に日光の沒するを見已りて、便ち宮中に入りて諸の婇女と共に五欲を行じ、快樂歡喜して、相共に聚集し、圍遶して住す。其の太子の妃、耶輸陀羅、即ち是の夜に於て、便ち娠める有るを覺ゆ。又其の夜に當つて、太子の姨母、憍曇姓氏、摩訶波闍波提、眠中に夢に一白牛王の城中に在りて、聲を揚げて吼喚し、安庠として行くに、一人の能く彼の前に當つて障礙を作す有るなきを見ぬ。又、復、其の夜、淨飯大王も、亦夢に、城內の處中に、一の帝釋幢を竪立し、多くの雜種の衆寶を以て莊嚴し、復、種種の瓔珞を持つて校飾し、莊嚴なること、猶、須彌山王の、地より踊出して虛空に在るが如し。彼の帝釋幢の其の中に、又、復、大光明を出し、四方皆悉く周匝し照耀す。又、復、四方に大雲を興起し、俱に來つて帝釋幢の上に至り、大雨を降り注ぎ、霶霈として彼の帝釋幢を灌洗す。又、空中に於て、種種の無量無邊の妙華の雨を雨らす。其の帝釋幢の周匝に、復、無量の種種微妙の音聲有り、作さずして自ら鳴る。更に、復、一の鮮白なる傘蓋有り。衆寶を竿と爲し、黃金を子と爲す。端正喜ぶ可く、自然に帝釋幢上の四方を覆ふ。復、四大天王及び諸の眷屬有り。城中に來向し、門を開きて彼の帝釋幢を將て出づ。

爾の時、其の夜、耶輸陀羅、疲極睡眠して知曉する所無し。臥夢に二十種の畏る可きの事有るを睹見し、心戰き身動き、恐怖して安んぜず。疑怪驚愕して、忽然として寤む。時に、太子、耶輸陀に問う

て言はく、『汝、耶輸陀よ、何が故に是の如く驚怖戰悸し、氣喘ぎ心忪き、忽爾として起くること、何が故に是の如きか。汝、耶輸陀よ、今は、又、尸陀林[六]（Śītavana, 寒林）に在らず。又、復、諸の屍に遶らされず。亦、山に在らず、曠野に居らず。今、此の城内は、無量無邊の兵仗もて、守護して王宮に在り。此の處深牢にして野獸を懼れず。亦、復、盜賊の來り驚かすを慮はず。此の中安樂にしてこれ無畏の處なるに、我、今、汝、耶輸陀羅が心大いに驚怖し、心大いに憂愁し、心に疑畏を生じ、忽然として覺寤せるを見る。此の事、何に因れるか』と。

爾の時、太子の妃、耶輸陀、涙下ること雨の如く、恐怖悲咽し、太子に報へて言はく、『大聖太子、我、今夜に於て、夢に是の如き二十種の變を見ぬ。唯、願はくは諦かに聽きたまへ。我、當に之を說くべし。聖子、(1)我、向に、一切の大地の周匝して震動するを夢見ぬ。(2)聖子、次に復、帝釋幢有りて地に崩倒するを夢見ぬ。(3)聖子、次に復、虛空の日月、及び諸星宿の、悉皆墮落するを夢見ぬ。(4)聖子、次に復、一の最大鮮潔の傘蓋有り、これ我が從來依蔭の處、我を守護せる者、我を憐愍せる者なり。而るに彼の姊生の、車匿（Chandaka）の子、忽ち壯力を以て、我より奪ひて將ち行くを夢見ぬ。(5)聖子、次に復、我が頭の髮髻、彼の諸寶に莊嚴せられし者、刀截して去るを夢見ぬ。(6)聖子、次に、復、我が身體上の有ゆる瓔珞、水の爲に漂はさるるを夢見ぬ。(7)聖子、次に、復、我の身形、微妙端正なりしが、忽ち醜陋と成るを夢見ぬ。(8)聖子、次に、復、我の身體上の有ゆる手足、自然に墮落するを夢見ぬ。(9)聖子、次に、復、我が此の身形、忽然として赤露[七]するを夢見ぬ。(10)聖子、次に、復、我の從來、常に坐せる牀に我坐し、時に聖子に承事せしに、彼の牀忽然として自ら地に[八]蹈るを夢見ぬ(11)聖子、次に、復、我が常に聖子と共に眠臥受樂せし所の牀、彼の牀の四脚、並びに皆摧折するを夢見ぬ。(12)聖子、次に復、一の衆寶所成の大山有り、纖利の[九]四楞、無量高峻なるが、火を被りて燒かれ、崩頽して地に墮つるを夢見ぬ。(13)聖子、次に、復、淨飯大

【六】尸陀林。死屍を棄つる林。寒林と譯す。宛も我が鳥邊野の如し。

【七】赤露。裸體のこと。

【八】蹈或は塌（おつ）に作る。可洪音義には搨（倒也）に作る。

【九】四楞。四つ角。

王の宮內に、一の微妙の樹有り、風に吹倒さるるを夢見ぬ。(14)聖子、次に、復、朗月の團圓にして衆星圍遶せるが、此の宮中に在りて忽然として沒するを夢見ぬ。(15)聖子、次に、復、淨日の照明にして、千光圍遶せるが、此の宮內に在りて忽然として沒し、彼、隱沒せる後、世間黑暗にして光明有る無きを夢見ぬ。(16)聖子、次に、復、此の宮城內に一火炬有り、出でて城外に向ふを夢見ぬ。(17)聖子、次に、復、此の城を、從來護る所の神、遍體を種種の瓔珞もて莊嚴し、喜ぶ可く端正なりしが、彼れ忽ち悲啼して、聲を擧げて大いに哭し、門外に住まり在るを夢見ぬ。(18)聖子、次に、復、迦毘羅城忽ち曠野と爲り、畏る可きこと夜の如く、心樂しむに處なきを夢見ぬ。(19)次に、復、迦毘羅城の有らゆる諸池、水悉く皆濁り、有らゆる樹林の華果枝葉、並びに皆墮落し、遍く地に散じて觀瞻すべき無きを夢見ぬ。(20)聖子、次に、復、有らゆる壯士、手に刀杖を執り、身に甲鎧を著け、四方を周匝して交橫馳走するを夢見ぬ。聖子、我、是の如き二十種の夢を見、心大いに恐怖し、驚疑して安んぜず。此れ何の徵祥ぞ。凶たるか、吉たるか。是れ何の果報ぞ。復、我が身の壽命、盡きんと欲するが爲か。聖子と恩愛別離するが爲か。是の故に我今、心撞搗するが如く、戰動忙怕して、自ら持する能はず、睡眠中に於て忽然として驚起せるなり』と。

爾の時、太子、此の語を聞き已りて、自ら心に思惟すらく『我、今、久しからずして、世を捨て家を出でん。是の故に今、此の耶輸陀羅、是の如き大恐怖の夢を見たるなり』と。是の時、太子、卽ち其の妃耶輸陀に報へて言はく『妃、耶輸陀よ、汝、彼の一千の帝釋幢の、崩倒して地に臥すを見ると雖も、汝に於て何をか傷まん。設ひ復、一千の日月及び諸の星辰の地に墮落するを見るも、汝、亦、何をか苦しまん。千の傘を、婢生車匿、力め揭げて將て行くを見ると雖も、旣に是れ夢に奪ふのみ。白日に闘するに非ず。汝の心何ぞ亂れん、憂愁を假らざれ。汝善大妃よ、驚く莫れ。怖るる勿れ、分別を作す莫れ。世間法中、自ら是の如き虛妄の夢有り。懷愁すべからず。但、當に安

穩に常に依つて睡眠すべし、汝、善大妃よ、年時嫩少に、身體柔輭なり。爾かく憂惟を爲さば、恐らくは疲勞せんことを畏る』と。耶輸陀羅、受樂の身、未だ曾て苦を經ざるを以て、旣に太子の是の如く語るを聞き已りて、還、臥して眠りぬ。太子、耶輸陀を安恤慰喩せんと欲するが爲の故に、五欲の樂を以て共に相娛樂して、更に同じく睡眠す。

爾の時、太子其の夜に、自ら復五大夢を見たり。第一夢には、此大地を席きて持用つて槍と作し、須彌山を以て安じて頭枕と爲し、東方の大海に左手の臂を安んじ、西方の大海に右手の臂を安んじ、南方の大海に兩足を安置するを見ぬ。第二夢には、一草莖有り、名けて建立と曰ふ。臍より出で、其の頭、上りて阿迦膩吒(Akanistha有頂天)に至ると見る。第三夢には、四つの飛鳥あり。種種の色を作し、四方より來り、太子の兩足の下に在りて、自然に變じて純一の白色となるを見る。第四夢には四つの白獸有り、頭は皆黑色にして、足より已上、乃至膝頭まで、太子の脚を舐るを見ぬ。第五夢には、一の糞山有り、高大峻廣なり。太子、自身に彼の山上に在り、周匝經行して、彼の糞の汙染する所と爲らざるを見ぬ。

捨宮出家品第二十一の上

爾の時、太子宮內に在りて、夜睡眠の時、一の宿衞守宮の臣有り。諸の一切持更の人に告げて言はく、『汝、諸人の輩、更を行ふ時、宜しく、各、是の如く、金毘羅(Kumbhira)金毘羅は隋に可畏と言ふ。を喚び、或は目帝羅(Mucilinda ?)目帝羅は隋に可解脫と言ふ。を喚び、或は鴦伽那(Aṅgaṇa ?)鴦伽那は隋に落藏と言ふ。を喚ぶべし。汝等人輩、此に在りや不やと。彼等報へて言はん、我等、此に在りと』是の時、大臣、復更に彼の諸人の輩に語つて言はく、『汝等竝びに、宜しく心を用ひて持更すべし。汝等、竝びに宜しく心を用ひて持更すべし。今夜已に深く、有らゆる諸類、或は水中に住し、或は陸地に居り、或は樹上に

【一】金毘羅、目帝羅、鴦伽那の三は、夜叉の名。

在り、或は窟間に處り、或は山谷の傍に、或は屋舍の裏に、皆悉く疲乏して睡眠に染著す。汝等諸人、今夜の持更には、悉く器仗を執り、共に門閤を守りて、應に警愼して、好く制持を加ふべし。自餘の[二]鋪に當つて、持更するの人、睡眠せしむる莫れ。大王、嚴重に是の如き勅有り。何を以ての故に。太子の此の城邑を捨てて剃髮出家するを恐畏してなり。若し宮內に保すれば、此の聖太子、必ず當に轉輪聖王と作りて、四天下を統ぶるを得べしと、大仙國師は、是の如く授記せりと』。是の語を作せる時、初夜已に過ぎて半夜に至る。漏刻の人、大いに唱へて言はく『我が聖大家、恒常に尊勝なれ、願はくは我が大家、長命吉安なれ』と。初分已に過ぎ、次で中夜に入り、漏刻未だ半ならず。爾の時、色界の淨居諸天、下り來つて迦毘羅城に至る。是の時、城內の有ゆる人民皆悉く迷悶して沈重に睡眠す。淨飯王の身、幷びに諸左右、及び太子の廐の當馬の諸臣、宮人、婇女、皆悉く迷惑疲乏して重眠す。是の時、衆中に一天子有り、名けて[三]法行（Dharmacārin）と曰ふ。宮內に來至し、神通力を以て、諸婇女の身體の服飾を縱橫に不正ならしむ。或は復、褰袒して其の中に收斂する能はず。或は諸婇女の鼾有り、或は手を以て頤頷を拄へて眠り、或は婇女有り、箜篌を擲却し、一邊に置きて身倚臥し、或は婇女有り、其の兩臂を以て、鼓を抱きて眠り、或は兩手を以て腮中に內著し、其の半身露出して其の中に睡り、或は各兩臂を以て相抱きて眠る有り。或は婇女有り、目睫交らず、睛瞳[四]睆睆として熟視して眠り。或は婇女有り、諸の瓔珞に倚り、[五]垂嚲して眠り、或は宮人有り、形容端正にして從來俯仰に具さに羞慚を知り、一切の功能皆悉く備足せしに、今は重睡の因緣に纒はるるを以て放氣して聲を出し、大小麁細の臭處、[六]蓬勃として都て覺知せず。或は身の諸瓔珞の具を脫する有り。或は諸の雜華鬘を擲却する有り。或は衣裳を棄てて、目を張りて眠ること、猶死屍の如くにて一種も異ることなく、傍人これを觀看て、[七]活想を作さざるあり。或は仰臥して長く手脚を展べ、口を張りて眠る有り。或は手脚を亂擲し、一邊に交橫して

【二】鋪。第十四卷の輭草鋪の鋪、一本敷に作れるに參照せば、しきものの意なり。

【三】法行の梵名は Lalita-vistara に依る。

【四】睆（窮め視る、みわたす）。可洪音義に開眼臥也と爲す。

【五】嚲、垂れ下る貌。

【六】蓬勃。盛なるにいふ。

【七】活想。活きたる人と想ふこと。

眠るあり。或は拳縮まり、手臂胯膝綟綟して眠るあり。或は地に立ち壁に倚りて眠る有り、身體掉動して猶醉人の如し。或は頭を覆ひ鼾睡して眠る有り。或は蹲坐して項を縮めて眠る有り。或は面孔青白、色を失し、極醜にして眠る有り。或は婇女あり。細腰鼓を以て、項上に懸け、腋に絡ひて眠り。或は婇女あり、箜篌を以て項に[八]搭けて眠り。或は婇女あり、[九]齩齒[一〇]齰齰と鳴喚して眠り、或は垂頭[一一]寱語して眠る有り。或は伏面、猶、塚間の死屍の如くして眠る有り。或は大小の便利、不淨を失して眠る有り。

爾の時、太子、忽然として寤め、其の宮内を觀るに、蠟燭及び燈、或は拳の如く麁に、或は臂の如く大に、顯赫朗耀、極甚光明なり。諸の宮人の是の如く、睡臥するを見るに、或は銅鈸、笙、瑟、笳、簫、琴筑、琵琶、竽笛、螺貝を執り、口に白沫を出し、鼻涕涎流す。是の如き等の種種の相貌を見、見已つて太子是の思惟を作す『婦人の形容は、ただ是の如き耳。不淨惡露、何の貪る可きか有らん。外に粉脂を飾り、瓔珞、衣服、華鬘、釵釧もて、假りに身を莊嚴す。癡人は知らずして、横りに誑惑せられ、色境界に於て妄りに慾心を生ずるも、若し智人有りて、正念に婦人の身體を觀察せば、體性是の如く空にして主有ること無く、猶、夢幻の如し。是の中應さに、人の放逸にして貪を生ずるを得可きこと有るなかるべし。邪念を以ての故に、無明に縛せらる』と。而して偈を說いて言はく、

『世間の不淨衆の惑迷は　婦人の體性に過ぐるもの無し
衣服瓔珞莊嚴の故に　愚癡は是の邊に欲貪を生ず
人有り能く是の如き觀を作さば　――「幻の如く夢の如く眞實に非ず」と――
速かに無明を捨てて放逸なる勿れ　必ずや解脱功德の身を得ん』

爾の時、太子、更に復、專念に是の如く思惟す、『咄哉、世間や、是の大患有り、咄哉、畏る可

【八】搭。可洪音義に正しくは褡にして、横被也と爲し、慧琳音義に𢶍(著也)に作り、搭を非也といふ。
【九】齩。かむ。
【一〇】齰。かみならす。
【一一】寱(ねごと)。或は譫(ねごと)に作る。

し、何の貪る可きか有らん』。慈哀の心を以て、衆生を愍れむが故に、聲を擧げて大いに哭す。此の處繫縛なり、愚癡の人は、猶、屠兒の如く、諸命を割斷す。此の處不淨なり、愚癡の人の妄りに愛樂を生ずるは、畫缾中に、糞屎を盛り滿つるが如し。此の處虛假なり。愚癡の人の埋沒沈滯するは、猶、溺泥の諸象を溺らすが如し。此の處臭穢なり、愚癡の人の以て香美と爲すは、猶〔二〕猪の厠溷の中に在るが如し。此の處容誑なり、愚癡の人の横に染著を生ずるは、猶、狗の無肉の骨頭を抱くが如し。此の處損害なり、愚癡の人の爭ひ競うて投入するは、猶、飛蛾の奔つて燈燭に赴くが如し。此の處有毒なり、愚癡の人の貪著愛好するは、猶、魚鼈の餌鈎を呑食するが如し。此の處萎黃たり、愚癡の人の樂著親近するは、濕生の華の水を離れて日に曝さるるが如し。此の處危脆なり、愚癡の人の行來履涉するは、猶、老牛の深泥に入在するが如し。此の處懸嶮なり、愚癡の人の墜墮沒陷するは、猶、盲者の大峻崖より落つるが如し。此の處循環す、愚癡の人の生死に流轉するは、猶、瓦匠の〔三〕旋器の輪の如し。此の處纏綿す、愚癡の人其の繫縛を被るは、犬の枷に著して自在を得ざるが如し。此の處無潤なり、愚癡の人の炙られて乾枯するは、猶夏天盛熱の草に旱するが如し。此の處衰耗なり、愚癡の人の日に消滅に就くは、猶、月虧けて漸く將に末に至らんとするが如し。此の處無利なり、愚癡の人の善根の用て盡すは、猶、博戲して他に錢財を輸るが如し』と。

爾の時、太子、是の如く諸の婇女の身を觀察し、復更に思惟すらく、『我、今、分明に是の如き相を見たり。應當に歡喜すべし。勇猛勤劬し、精進の心を發して福德を增長し、弘誓の願を起して、世間を濟拔し、無救の衆生に爲に救護と作り、養育無き者に爲に歸依と作り、無舍の衆生に爲に室宅と作らん。今、辦ずる所の事、已に我前に現はれぬ。久しからずして決ず當に斯の志を果すを得べし。何を以ての故に。此の諸の婇女、皆羞慚を捨てて、重眠睡に著すればたり』と。

爾の時、作瓶天子、夜半の時に於て、既に太子の睡眠已に覺めたるを見、安庠として至つて太子

【二】猪。豕なり。

【三】旋器。轆轤。

の所に向ひ、太子に白して言さく、『太子や、往昔、眞實の事を成就具足せり。又、復、太子や、昔、人間に在りて、是の如き心を發しぬ。「願はくは、我、身を捨てて、兜率天に生れん」と。太子の彼の願や、時節已に過ぎぬ。又復、昔時、兜率天に在りて、「願はくは人間に生れて、母胎を受けん」と。彼の願成滿して、胎に在りし時、「願はくは早く生出せん」と。彼の願、亦畢りて「生れ已りて增長して宮中に在り、童子として樂を受け、遊戲自在ならん」と。彼の願又過ぎて「弱冠の時精勤して諸の技藝を學ぶを得んと欲す」と。彼願已に成り「壯年には心を縱まにして世樂を受けんと欲す」と。彼の願現に驗あり。宜しく久しく耽るべからず。今日、一切の諸天諸人、願はくは太子をして捨離出家して、聖道を修學せしめよ」と。』

爾の時、太子、彼の作瓶天子の是の如く語るを聞き已り、卽ち自ら其の八千億斤の金價の衆寶もて作る所の革屣を著け、脚に串ち已り、起たんと欲して迴顧し、其の坐する所の合榻寶牀を觀て、是の如き大語言を發して云はく『此はこれ我が身が最後に五慾を受けたるの處、今より已後、當に更に受けざるべし。此は是れ我が身最後に五欲を受けたるの處、今より已後、當に更に受けざるべし』と。

爾の時、太子、右手を擧げて、衆寶もて成ぜられたる羅網の幃帳を褰げ、宮中より出で、安庠として徐歩し、始めて少地を行きて殿内に在り、東面して立ち、十指の掌を合して、至心に一切の諸佛を念じ、念じ已りて頭を擧げ、仰いで虛空及び諸星宿を瞻ぬ。

爾の時、護世四大天王、及び天帝釋は、太子の出家の時至れるを知り各其力に隨ひ、辦具して來らんと欲す。爾の時、提頭賴吒天王、主領所部の乾闥婆等の一切眷屬、百千萬衆、前後に導從し、諸の音樂を作して東方より來り、迦毘羅城を三匝圍遶して地上に下り、却いて其の方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して太子に面向す。

爾の時、毘留勒叉天王、主領所部の鳩槃荼等の一切眷屬、百千萬衆、前後に導從し、手に寶缾を執り、種種微妙の香湯を盛り滿て、南方より來りて迦毘羅城を三匝圍遶し、地上に下りて、却いて其の方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して太子に面向す。

爾の時、毘留博叉天王、主領所部の諸龍王等の一切の眷屬、百千萬衆、前後に導從し、手に種種の妙眞[一四]珠寶を執り、復、種種諸雜の珍寶を持し、兼ねて種種の香雲、華雲、及以び寶雲を起し、復、微妙柔輭の香風を起し、西方より來りて迦毘羅城を三匝圍遶し、地上に下りて却いて其の方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して太子に面向す。

爾の時、毘沙門天王、主領所部の諸夜叉等の一切の眷屬、百千萬衆、前後に導從し、手に火珠を執り、或は燈燭を執り、或は火炬を執りて、猛燄を熾盛にし、身に鎧甲を著け、或は弓、刀、箭、槊、器杖及び鉾、戟等を執り、北方より來りて迦毘羅城を三匝圍遶し、地上に下りて却いて其の方に住まり、十指の掌に合し、低頭曲躬して太子に面向す。

爾の時、天主釋提桓因、其の眷屬の一切の諸天百千萬衆と與に前後に導從し、天の華鬘、末香、塗香を將ち、或は、復、旛、幢、寶蓋を執持し、或は種種の諸妙瓔珞を執り、彼の三十三天より來りて迦毘羅城を三匝圍遶し、却いて上方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して太子に面向す。

爾の時、太子、諸方を觀見、仰いで虛空及び諸星宿を瞻、幷びに護世の四大天王が、諸の上妙の種種の瓔珞を以て身體を莊嚴し、頭に天冠を戴き、次第にして行き、安庠として徐歩す。乾闥婆及び鳩槃荼、一切の諸龍幷びに夜叉等、百千の眷屬と共に左右に圍遶し、各其の方たる東西南北より來りて此に至り、方に依りて面たり住するを觀、又、天主釋提桓因が、百千の諸天眷屬を將領し、前後閉塞して虛空に在り、周匝して集聚するを見、復、鬼星の已に月と合するを見。時に、諸天等、唱大聲して言はく「大聖太子、鬼宿已に合し、今や時至りぬ。勝法を求めんと欲せば、此に

【一四】寶、宋元明の三本は貫に造る。

住る莫れ。人王師子、時や至りぬ。速疾に棄捨出家したまへ』と。諸天、是の如く更に復佐助して、此の言を讃唱す、『速かに出でよ、住る莫れ』と。

爾の時、太子、仰いで虚空を瞻、是の如く思惟す、『今、中夜靜かに、鬼宿已に合し、諸天大衆、地及び虚空、並びに皆佐助す。決定して、我、今、時至ること虚しからず。宜しく出家すべし』と。太子、是の如く心に思惟し已るや、卽ち同日に生れたる奴子、車匿を喚び、告げて言はく、『車匿、汝、速疾に來つて我に違ふ莫れ。急ぎ、我と同日に生れし馬王乾陟(Kaṇṭhaka)に被帶し、將ゐて前著し來れ。我が家の有らゆる眷屬、一釋種の子にだも、彼馬聲を聞かしむる勿れ』と。是の時、車匿、太子の是の如き言を聞き已り、仰いで虚空を瞻て是の如く思惟す、『今、始めて中夜なるに』と。心に卽ち疑を生じ、遍體戰慄し、身毛皆竪ち、悚懼して安んぜず。太子に白して言さく、『大聖太子云何ぞ、中夜に我をして乾陟馬王に被帶せしむるか。何の恐怖か有る。何の怨敵か有る。何の急疾か有る。或は復城外に、或は今城内に、好惡有りや』と。是の時、太子、車匿に語つて言ひて謂はく、『汝、車匿、我今急疾に、怨敵を恐怖し、諸苦に逼らる。汝、那んぞ知るを得ん。但、速に我と同日に生れし馬王乾陟に被帶して、時に疾く將ゐ來れ』と。

卷の第十七

捨宮出家品第二十一の下

爾の時、車匿、既に太子の是の如き語を聞き已り、自心に思惟すらく、『聖子、今は決らず出家せんと欲す、肯へて住まりたまはざるなり』と。是の如く念じ已りて、故に大聲大言大語を發して、太子に問うて言はく、『望むらくは宮人をして覺知せしめよ。太子聖子は、恒常に諸時節に作す所の事、常に時に依順することを知りたまふ。今は是れ何の時ぞや、而も喚んで馬を索めたまふ。聖子、若し往いて園林に詣り、善地を觀看て遊戲せんと欲したまはば、此れ其の時に非ず。何ぞ馬を用ふることを爲ん。聖子、今日怨讎有る無し。復、違逆反叛の人無し。四方安靜にして、復、人の擾攘離亂する有る無し。邊疆一切逃亡有る無く、外方の隣邦も、亦侵奪して聖子と鬪戰せんと欲する者無し。聖子は、一切の大地を覆蓋して唯一無二なり。今、何んぞ馬王乾陟を須ふることを假らんや。聖子、今日、此の宮内に處し、諸婇女等共に相圍遶し、歡娛受樂すること、猶、天主の歡喜園中に、釋提桓因の諸天女と共に、周匝圍遶するが如し。聖子も亦然り。此の宮内寶林の上に在つて坐したまふ。何ぞ馬を用ひん。但、願はくは心を安んじ、此の百千婇女の中に於て、音聲娛樂を作すを聽いて住まりたまへ』と。是の時、車匿、口に是の如く言ひ、又復、手を以て諸の婇女の頭髮を拔きて寤めしめ、又脚を以て彼の婇女の身を蹋む。但、彼の婇女は、覺らず知らず。上の、諸天の神通力を以ての故なり。爾の時、太子心内に疑を生じ、衆人の覺るを畏れ、私密かに細聲もて此の偈を以て車匿に告げて言はく、

『同生の車匿汝當に知るべし　我宮内を觀るに塚墓の如し
亦蛆蟲穴に似て異ること無く　羅刹と同じく共に居るが如し

東西南北狼藉して眠り　又受胎の初の泡水に類す
車匿よ我五欲の苦を見て　心意此の宮に在るを願はず
幷びに諸方に遊ぶも我喜ばず　老病及び死屍を見るを以てなり
車匿よ速かに揵陟を將て來れ　我今決らず出家し去らんを欲す

爾の時、車匿、太子の是の如き言を聞き已り、猶、猛獸の毒箭に著きて大苦惱を生ずるが如く、大聲に哭して太子に白して言さく、『聖子、今、諸尊を捨つ可きか』と。太子報へて言はく、『善生車匿よ、我、勝上の處を求めんと欲す。寧ろ現前の諸尊親族を捨つるも、未來の我及び眷屬をして、死命鬼口の中に入らしむる勿らん』と。更に、車匿の爲に、偈を說いて言はく、

『我當に涅槃を求むるが故に　寧ろ親族を捨てて出家に向ふべし
未來の死鬼は人を劫奪す　命一たび口に入らば悉く盡されん』

爾の時、車匿、重ねて、太子の是の如き言を聞き已り、復更に慇懃に、太子に白して言さく、『大聖太子、一切の世人謂つて言はく、太子は、決定して大轉輪王と作るを得んと。云何ぞ捨を欲し給ふか』。太子、又、車匿の此の言を斷ずらく、『咄、汝、車匿よ、是の如く語る莫れ。我、昔、兜率天上に在りて、此の處に勝りき。曾て天王と作り、悉く彼の三十三天を領せり。我、是の時に於て、猶ほ彼の處の樂を樂しまず。何を以ての故に、生死無常の患を見るを以ての故なり。況や、復、今日、此の人間をや。少時、此の人境界に在るも、多く患濁有り。此の王位に處り、復、世を治めて暫時自在なりと雖も、而も病死の怖を離るるを得ず。但、世間中、死命鬼治世の處有るのみ。彼の諸王は、卽ち自在安樂を得る能はず』と。車匿、復更に、太子に報へて言さく、『大聖太子、復、太子は世位を用ひずと雖も、但、淨飯王は、今已に年老い、太子は盛壯なり。大王をして、心に苦惱を生ぜしめたまふ勿れ』。太子報へて言はく、『善生車匿よ、我、今、此の大父王の邊に於て、心に

愛敬を生じ、父い我を愛するが如く、我も倍父を愛せり。大王は奇特に親族を敬愛したまへり、我も亦諸の親族を捨つるを欲せず。我、親眷に於て、亦復、諸餘の異心を作さず。但、我は諸有の中に、生死の苦を受くるを大畏し、大怖し、大驚して、今日、解脫の法を求めんと欲するが故に、暫く愛重する所の親を捨離せん。當來の世中、能く諸眷屬を愍れみ救護せんが故に、又、未來世に相離れざらんが故に』と。

爾の時、車匿、太子に白して言さく、『大聖太子、心決定したまへりや、要ず俗を捨てて出家を求むべきや』。太子報へて言はく、『善生車匿よ、我、已に要を立てぬ』。車匿、又、言さく、『何事の爲の故に』。太子答へて言はく、『我は世間の無常にして過ぐるを見るが故に、意に專ら彼の勝處を求めんと欲するのみ』。車匿、復、問ふらく、『何の緣を以ての故に、彼の勝處を覓めたまふか』。太子答へて言はく、『若し世間をして、生無く、死無く、老無く、病無く、愛に別離無く、怨憎に會無からしめば、王位を得已つて、諸功德を受くるも、無常有る無く、境界眞實にして、一たび人中に生れば、濁穢有る無けん。若し、是の如くんば、我をして此の處に於て心樂しましむべし。汝、善車匿よ、我が心に違ふ勿れ。我已に汝に勅せり。急速に、我と同日に生れし馬王、乾陟を被帶せよ』。車匿白して言さく、『太子の勅の如く、敢へて違ふこと有らじ』と。其の車匿、太子の是の如く敕して語言するを聞き已りて、亦、太子深心の意を識りぬ。亦復先に、淨飯王の勅の嚴しく、制禁の重きを知るも、但だ、諸天の神力加はるを以ての故に、心を發して乾陟を取りて、太子の前に將て來らんと欲す。而して偈有りて說くらく、

『車匿は天神力の加はりしを以て　忍んで大王敕命の制に違ひ
　兼て菩薩の昔願滿てるを以て　發意して遂に馬を取つて莊嚴しぬ

爾の時、車匿、即ち廐中に至り、櫪上に於て乾陟を搦め取り、即ち純金を以て迦毘遮（? kava-

（鐙）と作し、七寶もて莊嚴し、馬口を串[一]き、牽き出して槽より離し、別に餘橛に繫ぎ、其の背を刮刷す。先づ柔輭輕細の物を以て背上に屜[二]き、金にて成せる七寶莊嚴の鞍韉を以て被ひ、上に金網を覆ふ。是の如く具足して馬を被帶し已り、卽ち牽き將て太子の前に向ふ。是の時、乾陟、同生の馬王、遙かに太子の身力の壯んなるを見るが故に、遍體歡喜して、大鳴聲を出す。時に、其の乾陟馬王、吼喚して聲を出せる時、半由旬に聞ゆ。時に、首陀會一切の諸天は、神力を以ての故に、此の馬聲を隱沒して聞えざらしむ。人あり、太子を障礙して出家するを得ざらんを恐畏してなり。

是の時、太子、歡喜踊躍其の體に遍滿し、卽ち右手の柔輭網縵の手指、猶ほ蓮華葉の如く、赤色なること紫礦の如きを以て、馬王の脊背の上を摩拭し、敕語して言はく『汝、同日に生れし乾陟馬王よ、我、今、甘露の法を求めんと欲す。汝、須からく努力すべし。是の如き善行もて、人の我が障礙を作す有らしむる勿れ。汝、善乾陟、鬪戰の時だも、尙死力を出して他に勝んと欲せるが故に、今日、我がために善く佐助を爲して、出世の樂を求めよ。世間の樂は暫時の歡喜のみ。久しからずして還失し、大憂惱を生ぜん。法の爲に力を出すは、此の事甚だ難し。我、今、一切世間の爲に、解脫を求めんと欲するが故に、出家修道す。汝、善く努力して勇猛筋を出し、捷疾に行け。我、今、出家して、諸世間及び汝等輩の爲に、大利益を作さん』と。

爾の時、太子、正念にして地に立ち、大弘願を發して是の如き言を作さく『これ我が最後の在家の乘なり、我、今よりして去、更に復是の如きの乘に乘らじ』と。誓願を發し已りて、鞦を控へて卽ち乾陟馬の上に乘り、乘り已るや、重ねて、乾陟馬に語つて言はく『汝、乾陟馬よ、努力して、我を最後の負荷として負へ、我、今、諸天人世間の爲に、利益を作さんが故に、發心出家す』と。是の時、太子、亦、乾陟馬王の鞍上に坐するの時、一切無量の阿脩羅衆、迦婁羅、緊那羅、摩睺羅伽、羅刹衆、毘舍遮、地居の諸天及び首陀會、乃至、阿迦膩吒天等、乾陟馬王に隨逐して行く。是の時、諸

【一】串は穿。
【二】屜は屣（くつしき、しきわら）

天手に白蓋を持ち、復、種種諸寶もて莊嚴せる蓋柄を以て周匝し、諸の衆寶、眞珠の羅網を以て其の上に懸け、其の網目の間に悉く金鈴を懸け、擎持して以て太子の上を覆ふ。是の時、太子、乹陟馬に乘り、漸くにして宮門に向ふ。乹陟の行く時、蹄足の聲一俱盧奢に聞ゆ。首陀會天、神通力を以て、彼の鳴聲を隱して遠くに聞えしめず。太子の出家を障礙する有らんを畏れてなり。

是の時、太子出家の時、其の虛空中に一夜叉有り、名を鉢足と曰ふ。彼の鉢足等の諸夜叉衆、虛空中に在り、各手を以て馬の四足を承け、安徐として行く。太子の初め發足出家せんと欲するや、一天子有り、是の如きの言を唱へぬ、『願はくは善吉利なれ、大法船師、今、無量の衆生を煩惱海より度脫せんと欲す』。復、一天有り、是の如き言を唱ふらく、『願はくは障礙無かれ、大聖世尊、今、出家して死海を渡らんと欲す』と。

是の時、太子、車匿に語つて言はく、『善生車匿よ、汝、今、我が前に在つて行き、我に道を示現し、宮內の門を出づべし』と。彼の門の關鑰、開かんと欲るの時、其の聲常に一拘盧奢に聞ゆるに、此時、人の門に至りて彼の關鑰を開くに非ずして、自らにして其の開けし時、首陀會天、神通力を以て彼の聲を隱蔽し、人をして聞かしめず。太子出家の時、諸の障礙有らんを恐畏れてなり。是の時、車匿、太子に白して言さく、『大聖太子、宮門已に開けり』と。太子報へて言はく、『門已に開けり。決定して我が心に願ひを求むる所の利、必ず當に成ずるを得べし、疑慮有る莫れ』と。

爾の時、車匿、太子に白して言さく、『大聖太子、希有甚奇なり、此の宮門、以前に開く時は、大いに氣力を用ひて、方に開くを得たり。聖子、今至り已れば卽ち開けぬ。大聖太子、亦、門邊に至れば、譬へば猛風の彼の雲隊を吹きて、兩邊に開散するが如し』と。是の時、太子、內宮門より外に出で已りて、是の唱言を作すらく、『これ我が最後に宮門に出づるなり、今より已去、當に更に出でざるべし』と。

爾の時、太子、宮より出で已り、安庠として毘耶離門(? Viśāla, 大門)に至る。其の門邊に一の夜叉將有り、名を善入と曰ふ。其の五百夜叉の眷屬と共に、既に太子の安庠として徐歩して門に向つて來るを見、見已つて各共に相謂つて言はく、『今、此の悉達大聖太子、夜半非時に、門下に來向す。我等、今、彼の爲にせんと欲するや否や』と。時に、夜叉衆、各相謂つて言はく、『我等、太子の爲に門を開き、彼の意に稱ふ隨に、東西に行動す可し。設し、彼が心の如く、所願成就して、甘露の道を得、既に自證し已らば、復、天人世間の爲に、當に大利益を作すべし』と。是の時、善入夜叉の將、急疾に彼の毘耶離門を開く。其の門、已前に開闢せし時は、其の聲鳴徹して半由旬に至りしが、時に淨居天、神通力を以て門聲を隱蔽し、諸人をして其の響を聞くを得しめず。太子の爲に、出家の障を作さんを恐れてなり。

太子、此の迦毘羅城の毘耶離門より初めて出でし時、彼の門の有らゆる守門の諸將、或は關鑰を執捉する者あり。彼等諸人、或は睡眠に著して、太子の彼の宮を出づる時を覺らず。或は復、是れ、彼の諸夜叉神に迷惑せられ、或は是れ諸天神力に迷惑せられて、有らゆる最愼の善持更人も、彼等一切、悉く重睡眠して、人の出づるを覺らず。

爾の時、欲界の魔王波旬(Pāpiyān)、太子の初めて出家せるを見る時、太子を恐怖せんと欲するが爲の故に、神通力を以て諸聲を化作す。謂はゆる、虛空に大雲を出現し、雲中、復更に大雷聲及び霹靂聲を出し、更に復、諸の大水河を化作し、大石を吹きて太子の前に出沒奔流す。復、大山を作す、其の山高峻にして大崖岸を現はす。又復大猛火聚の燄赫熾燃たるを化作す。

爾の時、淨居諸天、神通力を以て彼の大雲を隱し、雷電霹靂、一切の諸聲、及び彼の大山、河石、高峻の崖岸、猛火を皆現ぜざらしめ、彼の魔王波旬を將つて、無量百千由旬の外に擲著し、太子の出家を障礙する勿らしむ。

爾の時、太子、城門より出でて外邊に至り已り、身を廻して迦毘羅城を觀看、師子吼を出して是の如き言を唱へぬ、『我、今、寧ろ自ら身形を擲棄して、大石崖より墮ち、諸の毒藥を飲みて命終を取るとも、亦、飲食せじ。若し、我、未だ心の願求の隨に、衆生を生死海より度脱するを得ずんば、我は終に迦毘羅城に入らじ』と。其の諸天、太子の是の如く師子吼する聲を聞きて、皆悉く隨喜す。

爾の時、太子、此の師子吼の聲を出せし時、迦毘羅城を守護する有ゆる諸鬼神等、或は城門を守り、或は牆壁を守り、或は敵樓を守り、皆悉く是の如きの言を大唱す、『是の如し、是の如し。願はくは太子の出したまへる師子無畏吼聲の如く、成就滿足せんことを』と。歡喜心を以て、各兩手を擧げて、太子に語つて言はく、『大勇健兒、出で已り、廻りて迦毘羅城を觀よ』と。是の時、太子、此の言を聞き已りて、驚かず恐れず、歡喜心を以て、身毛皆竪ち、更に是の言を作すらく、『此の城、我、今、終に廻り入らじ。若し、我、甘露の句、諸聖の歎ずる所を得、已に生死、煩惱の流を斷じ、涅槃道を證せば、然る後に乃ち入らん』と。太子城外にて此の師子吼言を出して、要誓すらく、『彼の眞實眞如菩提を證して、然る後に還、來つて城に入りて敎花せん』。此の聲を出せし處、後に在つて諸人、塔を造作し、名けて太子出師子吼と曰ふ。而して彼の處に有る所の一の最大尼拘陀樹(nyagrodha)、彼の樹に神有り、其の神、偈を以て太子に語つて言はく、

『若し人樹木を伐らんと欲せば　　要は必ず其の根本を盡すべし
【三】物頭を斫らば須く斷絕すべく　　水を渡らば彼岸に達せしむ可し
【四】言語一び竟りぬ虛しきを得ざれ　　作怨亦訖りて復喜ぶ莫けん

爾の時、太子、偈を以て彼の護樹神に報じて言はく、

『雪山の處所は動移す可く　　海水は或は其をして枯竭せしむべく

【三】物頭の頭は接尾語ならん。
【四】(原文)言語一竟不得虛、作怨亦訖莫復喜。前句は、一旦誓ひし言語は虛しかるべきにあらずといふなり。後句の意味判然せず。太子の出城修道に對する障碍者は、既に退轉して、障碍に對する喜を掬する時期なからんの意か。

虚空は地に崩落せしむ可きも　我が吐ける言語は終に虚ならじ」
其の時、淨居諸天、偈を說いて言はく、
「此の處今大藥王を出しぬ　當に衆生の煩惱毒を治すべし
若し愛箭に射らるるあらば　此の匠今悉く能く拔除せん」
此の處今大醫尊を出して　善く一切衆生の患を治す
若し人老病死の[五]疹有らば　此に設くる療治悉く能く愈さん」
此の處今大智炬を出して　彼の顚倒癡の衆生を燭らす
所在の黑暝黑闇の中　卽ち皆大光照を覩見せん」
此　處今大顯赫を出して　能く世間の爲に大明を作し
智圓滿の慧眼光を以て　普ねく十方諸境界を照さん」
此の處今大船師を出して　未度の衆生類を度すべし
牢く裝へる方便智の舟艤もて　無量億の天人を濟度せん」
此の處今大商主を出し　一切をして大磧を度せしめんと欲す
有らゆる迷惑せる無量衆を　示導して正路より行かしめん」
此の處今是の大王を出しぬ　世間の法王、無上の王
法幢、大法相を建立して　是法及び非法を知らしめん」
此の處今是の大導を出して　能く一切の諸世間を伏す
其の未だ調伏せざる諸天人も　一切當に能く善く調伏すべし」
此の處今是の大王を出しぬ　出世の法主、無上の主
當に微妙の大法輪を轉じて　一切諸の外道を摧伏すべし」

【五】疹。熱病。

此の處今是の大覺を出して　當に世間未だ覺めざる者を覺ますべし
其の諸の煩惱纒を被る有らんに　能く一切の縛を斷じて脫れしめん」
此の處今大帝幢を出しぬ　當に無邊の大法雨を雨らすべし
十力具足して世に雙無く　能く一切諸外道を降さん」
此の處、今、大白象に乘りて　無明遠廣の磧を渡るを得
利智の金剛杵を執持して　當に外道一切の邪を破るべし」
此の處今大梵王を出して　世間一切の衆を憐愍し
愚騃[六]衆生の輩を利せんが爲に　當に大法鍾、螺、鼓を鳴すべし」
此の處今是の大龍を出し　當に世間に大法雨を雨らすべし
三界諸の衆生を潤益して　其の熱惱せる諸の邪病を除かん」

爾の時、淨居諸天、此の偈を說き已るや、卽ち口に『南無尊者、大丈夫身』と稱言し、太子を禮拜し、太子に隨つて行く。時に淨居天、各、先業の果報に隨つて得る所の微妙の身、威德勇猛、志力精進にして、作し難きを已に作し、太子の爲に、身より光明を放ち、暗瞑を滅除して道路を顯示すること、譬へば重雲あらんに、日、中より出でて大光明を放つが如し。是の如く、是の如く淨居諸天が、其の身體より諸の光明を放ちて、太子の爲に道路を示現するも、亦復是の如し。

爾の時、欲界の諸天子等、皆各端正喜ぶ可き摩那婆(Mānava, 儒童)の身と化作して、太子の前に在り、太子を平坦の道路に引導し、大梵天王は、諸の梵衆眷屬と共に圍繞し、太子の右邊に在りて行き、忉利天王は、諸の釋衆三十三天の眷屬と共に圍繞し、太子の左邊に在りて行く。

四大天王は、各、種種微妙の瓔珞を以て其の身を莊嚴し、妙天冠を以て其の首を莊嚴し、諸の瓔珞を垂れ、復、無量の乾闥婆衆、鳩槃荼衆、諸の龍、夜叉、無量百千と共に、左右に圍繞し、身に

【六】騃。おろか。

は種種堅牢の鎧甲を帶び、手には弓箭を執り、或は利劍を執り、或は長刀を執り、或は鐵棒を執り、或は矛戟を執り、或は三叉を執り、槊を執り、鉤を執り、[七]排楯を擎持し、太子の前に在りて、引導して行き、太子に語つて言はく、『大聖太子、此の道より速に行きたまへ、往まる莫れ』と。

上虚空中に復、無量無邊の諸天、百千億衆有り、歡喜踊躍其の身に遍滿して、自ら勝ふる能はず。天、水、陸に生ぜる所の花を以て太子の上に散じ、幷に栴檀(candana)、諸妙沈水、多伽羅(tagara)等の天の諸末香と、自餘の更に、種種の雜香と有りて、太子の上に散ず。復、塗香、末香、燒香有り。太子の行く時、各各手に持つて太子の上に散じぬ。以用て太子を供養せんが故なり。

爾の時、太子の宮内の有らゆる婇女、睡り寤めて、忽然として唱へて言はく、『太子を見ず、太子を見ず』と。耶輸陀羅、既に臥牀を覩るに、獨自の一身にして太子を見ず。大いに唱叫して、是の如き言を作す、『嗚呼、嗚呼、我等今、聖子に[八]誑逗せらる』と。卽ち大いに叫喚し、身を以て地に投げ、塵土を把撮して、以て頭上に散じ、又、兩手を擧げて、自ら髮毛を拔き、身の諸の瓔珞を拗折打破して以て地に摸ち、手の指爪を以て、四支身體の皮肉を[九]劚裂し、著くる所の衣服は皆悉く擘毀し、聲を擧げて大いに哭し、種種酸楚の痛言を出し、又諸餘の種種苦惱の逼切を以て、自身の支體を[一〇]縈纏しぬ。

爾の時、宮内の婇女侍人、淨飯王に奏して、是の如き言を作すらく、『大王、當に知るべし、今夜、睡寤めて太子を見ず』と。其の當馬の人、既に乾陟を失ひ、亦復淨飯王に諮奏して言はく、『大王、當に知るべし、今夜厩上、亦復馬王乾陟を見ず』と。時に淨飯王、此の語を聞き已りて大聲に叫喚し、口に唱言すらく、『嗚呼、嗚呼、我が愛する所の子よ』と。是の如く唱へ已りて、悶絕して地に倒る。傍臣手に栴檀の冷水を持し、以て其の上に灑ぐ。少時くして還蘇りて其の本心に復り、然る後に防守の城將を召喚して、之に勅して言はく、『卿等速疾に四兵を莊嚴し、善く鎧甲を著し、速

【七】排は棑、たての誤か。

【八】誑はあざむく。逗はまげる。

【九】劚。又は㔉、擢なり。劚裂は打破也。(可洪音義)

【一〇】縈はとりまく、からまる、

に太子を求めて所在を知らしめよ』と。時に彼の防衛守城の將軍、王の是の如く嚴重に敕するを聞き已り、宮内より出でて、徧ねく諸餘の大征將に告げて言はく、『汝等諸將、各當に知るべし。淨飯大王、是の如き敕有り、『所在の境界の百官大臣、其の我が封祿を受食するある者、或は我に依つて活命するある者、是の如き人の輩、皆悉く集聚して、速疾に分頭して行いて太子を求めよ。若し見るを得ば、善言もて慰喩し、彼の山林谿谷に住まるを聽くこと勿く、迎へ將て迴還れ』と』。

爾の時、百官諸群臣等、彼の防衛守城の將軍の、是の如く言ふを聞き已り、即時に、各、迦毘羅城内外の衢道に於て、鈴を振つて告げて言はく、『汝等一切の所有臣民、淨飯大王の國土封祿を食む者、及び大王に依つて活命する者、諸臣百官悉く皆速に迦毘羅城を出でて、太子を求むるを爲せ。若し見るを得ば、慰喩して宮中に還り入らしめよ』と。

爾の時、釋種の諸臣百官、幷に及び一切迦毘羅城の所居の人民、其食祿有るものも、及び食まざる者も、皆城より出でて、行きて太子を求む。爾の時、守城の大臣、徧ねく行く所の諸人に、是の如き言を告げ已り、漸次に太子の當馬大臣の家に至り、彼の當馬の臣に告げて、是の如く言ひぬ、『淨飯王、敕したまへり。速に太子を求めて、城を出で行け』と。彼の大臣言はく、『我は太子の居たまふ處に行くを得ざるべし』と。時に彼の守城の大臣、重ねて更に是の如き言を語るらく、『淨飯大王、是の如く嚴かに敕りしたまへり、有らゆる太子の侍衛左右、悉く皆禁縛せよ』と。彼の當馬の臣、是の如く報へて言はく、『仁者、若し我を縛せんと欲せば、且く先づ、自ら汝の有らゆる眷屬、妻兒、兄弟、姉妹、姑姨、舅氏を縛して、皆禁縛す合し』と。時に彼の城内の大衆人民、皆悉く出でて太子を求めて行きぬ。爾の時、太子に諸天の神威力の[一]障あるを以ての故に、太子を求覓むれども見るを得る能はず。

【一】障はおほひ、さゝへ、まもり。

爾の時、太子、迦毘羅城の門より出で已り、其の車匿に敕して、是の如き言を作して謂はく、『汝、車匿よ、我、今、汝に語らん。汝、我が前に於て引導し、直ちに羅摩村(Rāma-grāma)に向つて行け』と。是の時、車匿、太子に白して言さく、『太子の敕の如くし、敢へて違ふこと有らじ』と。引き前みて、直ちに羅摩村の邊に向ふ。其の馬、乹陟、輕便にして行くこと疾く、足を擧ぐること安穩に、夜半より行きて明星の出づる時に至り、行くこと十二由旬なり。――摩訶僧祇師(Mahāsaṅghika, 大衆部)、是の如く言ふ、『馬、半夜に行くこと十二由旬なり』と。或は復、諸師、是の如き言を作す、『夜半より起き、明星の出づるに至りて百由旬を行き、一聚落に至る、彌尼迦(Maineyya)と名く』と。――日出る時に至り、跋伽婆(Bhārgava)仙人の居處に到り、彼處に到り已りて、車匿に問ひて言つて謂はく、『汝、車匿よ、此は何處の所ぞ』。爾の時、車匿、太子に報へて言さく、『大聖太子、此の處所は羅摩村を去ること、勢 遙遠ならず』と。

爾の時、太子、此の樹林の、乃往仙人の居りし處、幷びに諸の鳥、獸、流水、井、泉、池、渠、河等を見て、其の車匿、及び馬乹陟の行來已に乏るるを知り、車匿に告げて言はく、『汝、善車匿よ、今、若し時を知らば、宜しく此の處に於て、停下して歇息すべし』と。是の時、太子、其の馬王乹陟より下りて、口に是の如く大弘誓願を稱へぬ、『此は、今、是、我が最後の所乘を下れる處なり。此は、今、是、我が最後の所乘を下れる處なり』と。是の時、太子、乹陟を下り訖り、美しき言語を以て車匿を慰喩して、是の如き言を作したまはく、『車匿よ、世に僕使有り、其の心、復、孝にして大家に向ふと雖も、而も自由無し。復、僕使有り、心は自由なりと雖も、而も孝順無し。復、僕使有り、心孝順ならず、兼ねて、且、力無し。復、僕使有り、心 孝 順にして、復、大力有り。善

【一】 彌尼迦、大莊嚴經に彌尼國とし、同梵本に Maineyya とす。本經のは、Maineka なるべし。

生、車匿よ。汝が今日の如きは、希有、希得なり、恭敬、孝順の好心もて我に向ひ、復、大力有り。車匿よ、我、今、汝に向つて、亦、大いに歡喜す。是の如き業を以て、汝、我が邊に於て、心大いに孝順に、大いに我を愛敬す。是の如く我を愛して、汝が今我に事ふるは、利を求むるの故ならず。凡そ世間の事や、富貴の人には、還、愛著ありて他に事ふるを求む。汝が今我に事ふるは、其の義然らず。世に又人有り、富貴の時を見て、他に事へんと欲するは、物を求むるが爲の故なり。亦、貧賤を見ては、卽ち復背き捨つれど、汝は今然らず』と。而して偈を說いて言はく、

『兒を畜ふは家を立てんが爲　父に事ふるは養育に答ふるなり
利の爲に田作を營むも　皆以て報を求むる爲なり』

爾の時、車匿、此の偈を聞き已り、太子に問うて言さく、『大聖太子、凡そこれ奴僕は、富貴の人の有らゆる諸事に、心を發して作さんと欲するに向つて、一一に所以を借問する能はず。但、我今日、既に聖子の來つて此の山に入るを見るのみ。是の故に敢へて聖子に諮問せんと欲す。何の緣を以ての故に、是の如き心を發して、此に來至したまふか』と。是の時、太子、車匿に報へて言はく、『汝、善車匿、我、汝に語らんと欲す。汝、今亦復何ぞ知るを用ふべき』。車匿、復言さく、『大聖太子、我は是れ賤しと雖も、交も聖子と同日に生れ、是れ聖子の奴として聖子に隨順し、意に違逆したてまつらず』と。是の時、太子、車匿に語つて言はく、『汝、善車匿よ、我今汝に語らん、汝能く作すや不や』。其の車匿言さく、『大聖太子、我今既に是れ聖子の奴僕として、親しく聖子に事ふ、何ぞ敢へて作さざらんや』と。太子、復言はく、『汝、善車匿、我、今、聖王の位を棄捨せるは、其の他を[二]餘りに畏怖せるを以ての故にあらず。唯、解脫を求めて繫縛を離れんが故なり。車匿よ、我今是の如き王位を取りて、心に歡喜せず。車匿よ、一切の王位は、是れ大恐怖なり。我今內心に是の如く明かに見る。車匿よ、我、出家に是の如き利あるを見るが故に、彼を割斷し來りて山林に入

【二】餘畏怖他の他は、次の文に、一切の王位は大恐怖といへるより見れば、王位にあらず。畏怖すべき人を指す。

る。復更に生死の爲に拘はるる莫けん。我今生死を解脱するを求めんと欲す。汝、善車匿よ、今は迴還し、馬乾陟を將て王宮に歸向すべし。我今、出家の心意已に決す』と。而して偈を說いて言はく、

『復更に多くの言語を假らずして　　我意に汝を愛する心を識知せよ
我は以て親愛を割捨し來りぬ　　汝今速かに乾陟を將て去れ』

爾の時、車匿、太子に白して言さく、『大聖太子、凡そ人出家せんには、四種の事を見て、然る後に捨離す。云何が四と爲す。或は身、年老ゆるなり、或は復、病を帶ぶるなり、或は時に孤獨なるなり、或は資財無きなり。而るに聖子は、今此の四種の中、現に一だも有る無し。又、復、聖子初めて生れし時、一切の解相の婆羅門等、占觀を能くせる諸巧智あるの人、多く經書を讀み善く衆論を解せる人、昔、曾て授記すらく、『是の如き童子は、必ず當に轉輪聖王と作るを得て、四天下を統べ、大地主と作りて、七寶を具足すべし。彼の七寶とは、謂はゆる輪寶、珠寶、象寶、馬寶、女寶、主藏臣寶、主兵臣寶なり。是の如くして、復、一千聖子の、悉く皆勇健にして能く他の怨を破るを生まん。彼の轉輪王や、此の大地、一切海等を統べ、法の如く降伏して、治化するを得ん』と。聖子、若し金輪寶を得る時、[三]此の寶は天成にして人の作る所に非ず、端正喜ぶ可し。虛空中に於て前に在りて行き、王が空に乘るに當りて、彼の寶輪を逐ひ、諸の親族等、左右に圍繞して、空より飛行せん。是の時、身、轉輪王の位に當つて、大功德を受けん。是の時、聖子、明月珠摩尼の寶を以て、夜暗の時に於て七由旬を照さんに、其の地周匝して光明を得ん。是の時、聖子、是の如く無量に、王位の樂を受けん。大聖太子よ、仁、今、若し白象に乘らん時、其の象の七支、皆地に拄へ、其の六つの白牙、皆悉く金を以て裝校鏤飾し、金の[四]鞍韉を被、[五]鞦靷隱起し、金の瓔珞を以て其の上を嚴服し、復、羅網を以て之を彌覆し、神通を具足して飛騰自在ならん。是の象に乘り已

【三】この以下、車匿、七寶具足の快樂を述べて、太子の意を翻さんとす。
【四】韉。したぐら。
【五】鞦は牛馬の尾にかくる緖、しりがき。靷はくつは。

りて、亦能く遍ねく此の大地を行くに堪へん。聖子、是の時、彼の王位を受けて、甚大快樂ならん。又復、若し當來の世、彼の馬王に乘らんに、其の馬王や、徧體は紺青、頭は烏黑色に、騣尾甚だ長く、金の鞍韉を被、鏤寶の鞦靷、純金の瓔珞もて、其の身を莊嚴し、金の網羅を以て其の上を彌覆し、彼の馬、神通自在無礙にして、善能く虛空を飛躍して行かん。若し行かんと欲する時、聖子、上に乘り、此の大地を行きて、周匝能く徧ねからん。聖子、爾の時、是の王位を受けて、甚大快樂ならん』

『又復、聖子、若し當來の世に、女寶を得ん時、眼目端正に、面首憐れむべく、行歩安庠として最勝最妙なること、猶ほ天の玉女の、當に自ら出現すべきが如し。聖子、其の時、具足して受くる、自恣五欲の轉輪王位や、甚大豐樂ならん。又、復、聖子、若し當來の世に主藏寶を得ば、彼の主藏の臣、天眼を得るが故に、能く地より金銀藏等の一切の諸寶を出し、將つて聖子に與へん。爾の時、當に五欲具足の功德を受くべし』。

『又復、聖子、若し當來の世に主兵寶を得ば、其の主兵の臣、善巧多智、聰明利根、閑ひ解して便ち能く四兵衆を領し、一念の頃に太子の心を知りて、皆悉く能く鎧甲を著け、一切具足して、乏少する所なく、部分して將て往き、聖子の邊に詣りて、意の隨に用ひしめん。聖子、爾の時、其の王位を受けて、甚大快樂ならん』。

『又復、聖子、若し當來の世に具さに是の如き七種の寶を得ば、爾の時に當つて、此の間の大地并びに諸の四海、一切の山河及び林泉等の屬せざるあるなく、其の諸の怨敵、一切の天下、悉く來つて歸降し、既に降伏し周ねくして、處として畏れあるなく、處として疑あることなけん。一切の人民悉く各豐足して、賓せざる有ること無く、險難の處も、亦、刀杖兵戈を須用ひずして如法に行き、既に如法に行きて天下を治化せん。爾の時、太子、聖王位を受けて、快樂極り無からん』。

爾の時、太子、是の如き等の諸の語言するを聞き已りて、還復車匿に報問して言はく、『汝、善車

【六】騣。たてがみ。

匿よ、其の相師等、諸婆羅門は、唯、是の如く我に記を授けしのみなるか。復更に餘の授記有りと爲すか』と。是の時、車匿、太子に報へて言さく、『更に其の餘に別に授記の事有り』と。太子、問うて言はく、『これ何なる授記ぞ』。車匿、答へて言さく、『彼の諸の相師、婆羅門等、復授記して言はく、「此の童子、若し王位を捨てて出家せば、必定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、菩提を成じ已りて、即ち無上微妙の法輪を轉ぜん」と』。

爾の時、太子、車匿に語つて言はく、『汝、車匿よ、愼しんで妄語する莫れ、應に眞實なるべし。彼の時に當つて、阿私陀仙、一向に我に授記せり「此の童子、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成じて、當に無上法輪を轉ずべし」と』。是の時、車匿、是の語を聞き已るや、心驚きて戰き怖ぢ、身毛徧ねく竪ちて、太子に白して言さく、『大聖太子、能く是の如き授記の語を憶えたまへりや。此の記は、釋等諸眷屬の輩のみ、私竊かに聞きて、聖子をして此の記を知るを得しむる勿らしめたり。聖子の、菩提心を發すを恐畏れてなり』と。是の時、太子、車匿に語つて言はく、『車匿よ、我昔、彼の兜率天より下りて母胎に入り、及び胎中に在りての有らゆる諸事も、我が心に憶持して、猶尙忘れず、況や復、生れ已りて我に授けたる記を忘れんこと、終に是の理無し。車匿よ、諸天、復我に是の如き言を語れり「仁者太子、速疾に出家せよ、必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を得、菩提を成じ已りて、決定して無上の法輪を轉ずべし」と。車匿、是の故に、我は、決定して、當に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得べく、決定して當に無上法輪を轉ずべきを知る。車匿よ、我今、實言もて汝に向つて說かん。車匿よ、我今、寧ろ刀もて身肉を割かれ、寧ろ毒を食つて死し、寧ろ大火に入り、寧ろ大崖に投じ、寧ろ自刎して死せんとも、我今終に、未だ生死の法を免離するを得ずんば、還家に向はじ。何を以ての故に。是の如き世間五欲の境界は、皆悉く無常にして、久しく停住せず、これ破壞の法なればなり。』

卷の第十八

剃髮染衣品第二十二の下

爾の時、太子、手を以てその天冠の頭髻より、天の無價の摩尼寶を解き、車匿に付與して、是の如きの言を作す、『車匿よ、我今汝に、この摩尼寶を與ふ。汝この寶を將て、我が父淨飯大王に還り、王邊に至り已りて無量に頂禮せよ。汝、我が意を知れ、我、汝に付囑す。汝、當に我を信ずべし。我今汝をして、この寶を將て還らしむるは、父王の邊に至りて、啓白して一切の愁苦を除かしめんとなり。復、好く我が爲に父王に諮啓して、是の如きの言を作せ、「我今人に欺かれしを以て、忽ちに父王の足下を捨離するにあらず。又、亦、嗔恨の心を以ての故ならず。亦復、資財を求覓めんが爲ならず。又亦、封祿少きを以ての故ならず。亦、天上に生れんを欲し求むるにあらず。唯、一切の諸衆生等が、不正の路に在り、黑暗に迷惑し、邪淫にして行くを見て、光明と作らんと欲し、是の如き生死の法を除かんと欲し、世間を利益するの句、愁憂なき處を求めんと欲し、無常有漏の行を斷ぜんと欲して、出家を求むるのみ。大慈の父王、我、是の如く樂んで家を出るが故に、應に憂愁すべからず」と。』而して偈を說いて曰はく、

『假恩愛をして久しく共に處らしむるも　時至れば會に必ず別離あり
この無常須臾の間を見て　是の故に我今解脫を求む』

爾の時、太子、此の偈を說き已り、是の如き言を作す、『我今、此の憂苦を離れんと欲するが故に、棄捨して出家す。是の故に、我が父大王に、愁憂すべからずと諮啓せよ。若し世に人あり、[一]憂愁に緣るが故に、五欲に縛著せられなば、彼等諸人は、應に須らく憂愁すべし。所以は何に。世、多く人あり。父の子を生むや、財を求めんが爲の故に、所以に養育すれども、父母に報ゆるに、法

【一】緣憂愁故。この一句無きを可とすべきに似たり。前後の文より見るに、若し五欲に縛著せらるゝならば、別離を憂愁すべきも、法財の爲にせば、愁憂すべきにあらずといふにあり。

財を施すもの、世の子に有り難し。若し父王にして意に、是の如き心――「我が子、今、出家の時に非ず」――を作さんか、唯、願はん、「父王、是の如く念ずる莫れ」と。凡そ法を求めんもの、時節あるなし。所以は何に。人の世間に居るや、命に限齊なし。是の如きを知らば、この故に智人は、決んで須らく、[二]捨てて勝上の行處を求むべし。此は是、我が心決定の語なり。譬へば人あり、死命の怨と共に同じく一室に處り、我が壽長しと言はんに、是の處あることなきが如し。車匿よ、汝、我が父、淨飯王の邊に至りて、是の如き等の多種の語言を作し、王の意をして定まらしめよ。汝、彼處に至らば、善く是の如き方便慰喩を作し、我を憶はしむる莫れ。車匿よ、然りと雖も、我復汝に語らん。若し我が父、淨飯王の邊に至らば、但、我が惡逆の事、德行なき處を說け。「太子は是の如く、恩義あるなし、愛著の心なし」と。我が孝順の處を說く莫れ。所以は何に。已に愛を捨つるが故に、卽ち一切の憶念憂愁を捨てたればなり」と。

爾の時、車匿、太子が是の如き等の諸語言を作すを聞き已りて、遍體熱惱し、滿面に涙流れ、十指の掌を合して太子に向ひ、是の言を作すらく、『大聖太子、太子の敎の如し、但、前に言ふ所は、諸親族及び父王の邊に於て、大いに憂愁を生じて我が意喜ばず、心情斷絕すること、大象王の沒して深泥に在り、自ら出る能はざるが如かりき。是の語を聞き已りて、誰か涙流れざらん』と。復、是の言を作す、『精進の心や、餘人の聞說すら猶大いに驚かんに、況んや我車匿は、小より來、聖子と共に日を同じくし、時を一にし、倶に愛敬の心を長じて、相樂しんで已まざりしをや』と。而して偈を說いて言ふ、

『假使鐵を用つて持つて心を作さんも　是の如く誓語を言ふを聞きて
人誰か心酸楚毒せざらん　況んや我愛し戀ふる同日の生なるをや』

爾の時、車匿、是の偈を說き已りて聖子に白して言さく、『我、馬王と聖子の乘とを將て、彼の諸

【二】捨とは捨家棄欲のこと。

天の神通力を以ての故に、强ひて我が心を遣たしめて、與に來らしめらるるのみ。我が自らの意に非ず。我、今、云何ぞ能く聖子の、是の出家の事を斷ぜん。我今既に是れ同日生の奴、及び此の馬王も、一種も異るなし。豈、能く聖子に違離して、須臾だも獨り宮に還らんや。終に是の處なけん。聖子も亦我が乾陟を放ちて、家に向つて復り、我をして此の憂悲愛別の語を傳へ、大父王に向つて、是の如き事を說かしむべからず。聖子も今、亦、老父王に背捨して、自ら出家すべからず。彼の法は是に非ず。更に法の絕妙、越殊なること、[三]是の尊に過ぐるもの、能く所生の父母に孝養せんに勝るあるなし。亦、乳哺の姨母、摩訶波闍波提を捨つべからず。是を以て論ずるに、聖子も亦恩義なきの人と成りて、舊の育養の時を憶はず。聖子、正妃耶輸陀羅は、貞潔の女、諸德具足す。亦、復、棄捨して相離るべからず。然りと雖も、若し聖子、今、一切の釋種の親族を捨離すとも、我、今、既に是れ同日生の奴なり、亦、放つべからず。但、是れ聖子が足の踰まん地に、我常に隨順して、備捨するを得ざらん。大聖太子、是の故に、我、今、意中に、此の熾然たる憂悲の火に燒かるる心情を將て、迴りて城に向ふに忍びず。而して聖子を放ちて、此の處、空閑なる林野に獨り在き、我をして自ら返りて、脫し城邑に至らしめば、淨飯大王、我を責めて何とか言はん。又復聖子、既に家に還らず、我、獨り去る時は、聖子の有ゆる朋友智識、幷びに及び宮內の婇女妃后は、我に問うて何とか言はん。聖子、復、我に語りて是の言を作したまへり、「汝、今我が惡辭毀辱、非法の事を將て、眷屬に向ひて說き、我が眷屬をして、我を遺忘し、我を憎惡せしめよ」と。而も我、何ぞ敢て此の毀辱の言を妄說して、我が心、自慚し、自羞し、自愧し、自恥せざるべけんや。我の心意及以び口舌に、若し聖子の惡言を說かんと欲するが爲に、我が妄言もて聖子を說かんと欲すと雖も、誰か當に我が妄言の事を信ずべき。聖子、譬へば人有り、彼の月天の種種の惡事、毀辱の言を說くも、人の聞く有ること叵きが如し。此の如き事は、能く信ずるや以不や。但、聖子は、

【三】是尊とは所生の父母をいふ。

今恒常に慈悲の心を行ずるに習へるを、聖子が此の言を囑託するは善ならず。聖子は旣に大慈悲の行を行じ、恒常に美言もて衆生を慰喩せるを、今、諸親を捨つるは、此は是善に非ず。是の故に、善い哉、聖子、心を迴らし家に向ひて樂を受けたまへ』と。

爾の時、太子、其の車匿の是の如き、憂悲苦惱の語を見、聞き已りて、復、彼の車匿に報じて言はく、『汝、今、應に須らく別離の苦を捨てて、憂惱を作す莫るべし。何を以ての故に。一切衆生に、生有り老有り、悉く別離有り。車匿よ、一切衆生所有の愛著染惑の心は、其の胎内に在りて養育せるもの、皆悉くこれ虛なり。會には別離有り、彼はこれ我に非ず、我はこれ彼に非ず』と。而して偈を說いて言はく、

『譬へば大樹に衆鳥の群る如し　各諸方より來りて共に宿れど
後日別れ飛びて各自ら去る　衆生の離別も亦復然り
猶ほ盛夏の大雲を起すが如し　暫らく聚まり以て復還離散す
衆生離別の法皆爾り　須臾聚合して復分離す
旣に相隨ひ來りて此の間に生れ　今は各本に歸還す
我と汝とに異有りと言ふ勿れ　剩へ彼此去住の情を作すをや
一切の去來に依る所なし　但衆生に愛著有るに隨ふ
强く自他を分別するの意を作すは　猶ほ樹木の枝と葉と莖との如し
各別に色と形容と有るも　これ本來染汙なきに緣る
況んや復無常の衆生の類は　譬へば樹蔓に果蓏を生ずる如し
其の熟時に隨ひて則ち墮落す　人命の脩短も亦是の如し
長年も促壽も死すれば終に無し　往昔の一切諸仙人は

恒に是の如く無常の事を說けり　設ひ壽命をして八大劫ならしむるも
無常敗壞の時に至れば　必ず死すること更に疑慮有る無し
猶ほ諸方より各自ら來り　河に至りて同じく共に水を飮まんと欲し
或は復船に上りて彼岸に渡り　既に岸上に至れば還復分るるが如し
父母の子を生むも亦復然り　幷びに及び眷屬諸朋黨も
少小のとき同じく一處に在りと雖も　長大すれば須臾に各別離す
復業果にて——同じく家を共にすと雖も　其の苦樂の報を受くるや等しからず
無常の事催促するに至るに及びては、各相捨てて親疎無し』

爾の時、太子、此の偈を說き已り、車匿に告げて言はく、『善生車匿よ、是の故に、汝今、自心を惱すこと莫く、決定して還去せよ。所以は何に。汝、今、止、大家を愛著するが爲に、捨つる能はずば、汝、若し家に到るも、還り來つて我を覓めよ。若し汝迴りて迦毘羅城に至り、我が親族の我の爲めに愁ふる者を見ば、汝、彼等に告げて是の如き言を作せ、「汝等眷屬は、太子の邊に於て、宜しく應に愛著の心を割捨すべし。何を以ての故に、我、今、彼に要誓の言有るを知ればなり」と』。

爾の時、太子、卽ち此の偈を說き、車匿に囑して言はく

『假使我今身の血肉と　幷びに及び支節と筋と脈と皮と
一切磨滅し盡く消亡するも　或は復性命全く保たざるも
我若し此の重擔を捨て　諸苦を越渡して本源に達せず
未だ證解脫坐道場せずんば　終に虛爾還つて相見えじ』

爾の時、車匿、既に太子の此の偈を說きたまふを聞き已り、卽ち自身を以て四たび地に布き、其の兩手を持ちて、前著して太子の兩足を抱き、是の言を作さく、『善い哉、聖子、今、乞ふらくは、

歡喜して、是の如き苦切の誓言を作します莫れ。大聖太子、我、何の力有り、何の神德有りてか、能く聖子をして本宮に廻還せしめん。但、我、此より獨り自ら家に向はば、聖子の眷屬は、必ず當に我を打つべく、或は復、聖子の父王淨飯幷びに及び姨母摩訶波闍波提は、必ず當に我に、「我が妙梵聲、聰慧の子を、汝、今、將ゐて何處に向つてか擲げ來れる」と問ふべし』。

爾の時、太子、車匿に報じて言はく、『車匿よ、是の言を作す莫れ、是の言を作す莫れ。我の父母及び諸眷屬は、汝の此より、獨り自ら廻還するを見るも、終に汝を打たじ。所以は何ぞ。我が眷屬等は、一切、悉く皆汝を愛念すればなり。車匿よ、速に起て、速に起て。上來論ずる所に、此の如き法有り。世に若し人有り、愛する所の人の言語意氣を將て、彼に向つて道ふ時には、必ず賞賜を得るなり。汝決定して、須らく速かに還りて家に至るべし。我の父王、汝の還れるを見已りて、心に穌醒を得ん。然も我が父王は、我の捨家せるを見、道の出家を聞いて、大いに苦逼を生じ、父王の身及び諸の眷屬は、一切號咷して悲咽哭泣し、城內の大小、一切の人民も、我が爲めの故に重き苦惱を生ぜんも、彼等、若し汝の還るを見るを得ば、心、少しく喜歡せん』と。

爾の時、車匿、地より起ちて、十指の掌を合せ、涙下ること流るる如く、聲を擧げて大いに哭し、太子に白して言さく、『是の如きを以ての故に、我今、聖子を將ゐて家に還り、大王の種姓を斷絕せしむる勿らんと欲す』と。是の時、車匿、地より起ち已るや、馬王乾陟は、前膝胡跪し、舌を出だして太子の二足を舐め、兩眼より涙を流す。是の時、車匿、太子に白して言さく、『大聖太子、此の馬は、復、是、畜生の身なりと雖も、猶倘ほ慈悲あり、涙を垂れて泣く。況んや復、聖子の諸眷屬の、心に、當に何の殃をか見るべきぞ。唯、願はくは、聖子、正しく、此の乾陟馬王を觀たまへ。今、聖子の家に還らんと欲せざるを見、是を以て胡跪して、前の兩膝を屈し、口を開きて舌を出だし、聖子の足を舐め、慈哀の心を以て、二目より涙下れり』と。

爾の時、太子、諸の功德萬字莊嚴の千輻相輪あり、猶ほ芭蕉の如く、內心柔輭なる金色の右掌の網縵ある手指を以て、其の馬王乾陟の頂上を摩し、之に語りて言はく、『乾陟よ、汝、今、具さに馬事を作し、大負の重任を度し得たるを以て、今より已後、汝、乾陟馬、家に還りて自ら養へ。此は今是、我が最後の、家よりせる騎乘の務めなり、大遠路を行くこと、汝が今日我を濟ふを得たるに賴れり。乾陟よ、汝、今、憂惱を生ずる莫れ、泣く莫れ、悲しむ莫れ。汝の載せたる所の我は、當に大報を得べし。我、今、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲す。後に證せん時に、當に甘露を將て、分布して汝に與ふべし』と。而して偈有りて說かく、

『太子右の羅網の指の　萬字千輻の輪相の現ぜる
金色柔輭淸淨なる手を以て　用て馬王乾陟の頭を摩し
猶ほ兩人の對して語言するが如し　汝同日生の馬乾陟よ
悲啼に過ぎて懊惱を生ずる勿れ　汝が作せる馬の功已に訖了れり
我若し甘露味を證するに當りて　我を負載すべき所の者に
密敎甚深の法を分別し　彼に報答して終に虛しからざらん』

爾の時、車匿、太子に白して言さく、『大聖太子、今日、已に、廣大王位を得たり。聖子は一切諸相玉女の寶を具足し、莊嚴する所の宮は、普ねく皆自餘の多種五欲の事を顯現して、最勝最妙なること、人間に辨じ難きを、今已に之を得たるに、何の故に、聖子、此の妙樂を捨てて、諸獸百鳥の充滿する曠野の內を愛したまふや。又復、是の處、多く惡賤恐怖の事有るに、獨行獨坐して諸樂を遠離し、云何ぞ心に悅しみたまふか』。太子、報じて言はく、『汝、善車匿よ、語る所は虛ならず。其の理然りと雖も、汝、今、諦かに聽け、我、汝の爲に說かん。世間の五慾は、會ず無常に歸し、究竟の法に非ず、心に安んずべからず。若し得るとも、還失ふことは速疾にして、流の暫くも停住

せざるごとく、草上の露の、久からずして消散し、猶空拳もて小兒を誑むく如く、芭蕉の心の眞實有ること無きが如く、秋雲の起るや乍ち布きて還收まる如く、閃たる電光の忽ち出でて還滅するが如く、水上の沫の常に定まること有る無きが如く、熱き陽炎の人を誑惑するが如し』と。而して偈を説いて言はく、

『諸の五欲の事は　猶ほ魁膾【四】の机の如く
刀刃に蜜を塗れる如く　他の器用を借るが如し
新死を哭泣するが如く　夢に快樂を見　寤めて後覺むるも還無きが如し
猶ほ劖【五】もて貫く人の如く　樹の果子の熟して　久しからずして當に地に墮つべきが如く
惡人の刀仗の　怨を殺して慈心無きが如し
猶ほ肉臠を割くもの　當に大苦惱を受くべきが如く
大火炬を執りて　愼しまずして身を燒くが如し
妙色の人天の果は　久長に樂を受け已るも　心に厭離有る無く　已に得て復能く求む
猶ほ人の熱にて渴して　更に復鹹水を飮むが如し
諸の五欲等を求めて　厭離せざるも亦然り
是の故に若し智人は　諸の五欲を離れんと欲すること　猶ほ毒蛇の頭の如くにし
若し長壽命を求めば　遠離すること毒藥の如く　亦大火聚の如し
若し智慧ある人は　應當に遠く捨離すべし
諸有の生死は　一切堅實ならず
念念に暫くも停まらず　世法は應に是の如くなるべし
壽命に自由無く　決んで死鬼に至り向ふ

【四】魁膾。肉を切る人。

【五】劖(けづる、かる)は丳(くし、くしさす)。惠琳は今の炙肉丳也といふ。

是の如く思量し已りて　世間に住する莫れ』

爾の時、太子、此の偈を說き已り、車匿に告げて言はく、『車匿よ、五欲の事は、是の如き等の多種の過患有り。車匿よ、王位も亦然り。種種の苦と衆の患とを以て雜亂す。我是の如き畏るべき相を見るが故に、寧ろ此の曠野の中に往し、諸の飛禽走獸盜賊と共に、恐怖の處に獨起獨行して、欲樂を遠離するなり。我が意、此を樂むも、彼は願ふ所に非ず。車匿よ、汝、我の是の如き語を作すを聞き已りて、復、我が此の大事に違する莫れ。車匿よ、我、是の如き法行の內に、當に法眼を開くべし。汝、須らく隨喜すべし、應に我を障ふべからず』。是の時、車匿、太子に白して言さく、『大聖太子、太子、若し定めて是の心を作さば、我、今、敢て聖子の勅に違せじ、聖子の敎への如く、我、還りて家に向はん』。爾の時、太子、車匿を讃じて言はく、『善い哉、善い哉、大善車匿よ、汝、今、是の如く我が意に順從せば、大善利を獲ん。汝の作す事や善し』と。

是の時、太子、身上の有ゆる諸寶瓔珞を、皆、悉く自ら解き、口に、是の如き大弘願を作して言はく、『此はこれ、我が、今、最後の在家莊嚴の身飾なり。此はこれ、今、我が最後の在家莊嚴の身飾なり』。解き已りて、手づから持將て車匿に付し、車匿に付し已りて、復、是の言を作したまふ、『車匿よ、汝、此等の諸寶瓔珞を將て、歸りて我が諸眷屬等に付與せよ』。是の時、車匿、卽ち彼等諸寶瓔珞を取り、受け已りて、更に太子に問ひて言さく、『聖子、若し我、家に至り、此の瓔珞を將つて聖子の諸眷屬に付せん時、設し彼の眷屬、我に問ひて言はん、「車匿よ、汝今、何が故に我が太子を將つて、送りて他國に至り、捨てて獨來れる。車匿よ、悉達太子は、復、更に我等に何事をか囑託せる」と。彼等、若し、我に是の如き事を問はば、當に何の報をか作すべき』。太子、又、言はく、『車匿よ、汝、若し家に至り、我が爲に、父王淨飯、幷びに及び姨母摩訶波闍波提と自餘の尊者一切の眷屬を頂禮し、悉く皆問訊せよ。車匿よ、我が爲に、淨飯大王に諮啓して是の如き言を

作せ、「我、今、實に父王の恩の深きを知るも、但、我、阿耨多羅三藐三菩提を證せんが爲の故に、所以に違離す。若し證するを得已らば、卽ち當に家に還りて大王を見奉つらん」と。又別に我が爲に、姨母摩訶波闍波提國大夫人に諮白せよ、「我が爲の故に、大憂惱を生ずる勿れ。聖子は、必ず大善利を成ずるを得て、廻還して、母と共に歡喜して相見えん」と。又、我が宮內の一切の婇女及び諸親族、時年童子幷びに餘の諸釋に、是の如き言を作せ、「我、今、無明の暗網を破らんと欲す。當に智明を得べし。智明を得已らば、我、當に廻還して、迦毘羅に入るべし」と』。

爾の時、太子、車匿の邊より、摩尼もて雜飾莊嚴せる七寶の把刀を牽取し、自ら右手を以て彼の刀を執り、鞘より拔き出し、卽ち左手を以て、紺青の優鉢羅(Utpala 青蓮)色の螺髻の髮を攬捉し、右手に自ら持てる利刀もて割取し、左手を以て擎けて空中に擲置す。時に天帝釋、希有の心を以て大歡喜を生じ、太子の髻を捧げて地に墮ちしめず、天の妙衣を以て承受接取す。爾の時、諸天、彼の勝上天の諸供具を以て、之を供養しぬ。

爾の時、淨居諸天の大衆、太子を去ること近からず遠からずして、一華鬘の須曼那(sumana)と名づくる有り。其の須曼那華、下りて一淨髮師と化作し、利剃刀を執り、太子を去ること遠からずして立つ。太子、見已りて是の如きの言を作して謂はく、『淨髮師よ、汝、我が爲に淨髮するや以不や』。其の淨髮師、太子に報じて言さく、『我、甚だ能く爲ん』。太子報じて言はく、『汝、若し能くせば、今、時を知るべし』。爾の時、彼の化淨髮の師、卽ち利刀を以て、[六]無見頂相紺螺の髻髮を剃る。頭を剃る時に當り、帝釋天王、希有の心を生じ、落つる所の髮を、一毛も地に墜墮ちしめず、一一悉く天衣を以て之を承け、受け已り、將つて三十三天に向ひ、而して之を供養しぬ。此より已來、諸天上をして因りて節名供養菩薩髮髻冠節を立てしめ、今に至りて斷たず。

爾の時、太子、自ら其の身の一切の瓔珞及以び天冠を解き、髮鬚を剃去し、剪落既に訖りて體上

【六】無見頂相。三十二相の一、前に詳出せり。

を觀るに、猶天衣有り。見已りて念言したまはく、『此の衣は、これ出家の服に非ず。出家の人は、山間に在り。誰か能く我に　袈裟色衣(kaṣāya-vastra)を與ふるぞ。出家の法の如く、山林に居在せんには、如法の衣を須つ』と。時に淨居天、太子の心に、是の如く念ずるを知り已り、時に應じて、化して獵師の形と作り、身に袈裟染色(kaṣāya-varṇa)の衣を著し、手に弓箭を執り、漸漸に來りて太子の前に至り、相去る遠からずして默然として住す。是の時、太子、彼の獵師の身に袈裟を著し、手に弓箭を執れるを見、見已りて卽ち語りて、是の如き言を作したまはく、『山野の仁者、汝能く、我に此の袈裟色衣を與ふるや已不や。汝、若し、我に與へなば、我、當に汝に迦尸迦衣(kāśika-vastra)を與ふべし。此の衣は、價百千億金に直し、復、種種栴檀香等の熏修する所たり。汝、何ぞ是の麁弊の衣服、袈裟色を用ふる事を爲ん。是の如き迦尸迦衣を取るべし』と、而して偈を說いて言はく、

『此はこれ解脫せる聖人の衣なり　若し弓箭を執らんには著くべからず
汝歡喜心を發して我に施せ　我と天衣を博ふるを惜む莫れ』

爾の時、獵師、菩薩に報じて言さく、『善い哉、仁者、我今汝に與へて、實に恪惜まず』。是の時、化人、卽ち菩薩に袈裟の衣を與へ、菩薩より迦尸迦衣の價數百千金に直し、復、種種の栴檀を以て熏ぜられたるを取る。菩薩、爾の時、心に大いに歡喜し、袈裟衣を受け、深く自ら慶幸し、卽ち身上の迦尸迦衣を脫して彼の獵師に與へぬ。時に淨居天所化の人、菩薩の邊より、迦尸迦微妙の衣を取り已り、卽ち其の地に於て神通を以て虛空中に飛上し、一念の如き頃に、還りて梵天に至り、彼の妙衣を供養せんと欲するが爲の故に、菩薩の前に於て、天の神通を以て、空に乘じて行きぬ。菩薩見已り、大歡喜、希有勝上、奇特の心を生じ、此の袈裟染色衣の邊に、復、更に、倍、殷重至到、歡喜の心を生じぬ。

【七】袈裟は色の名なり。木欄色。

【八】博、交換也。

爾の時、菩薩、頭を剃り訖り、身に袈裟染色衣を著くるを得て、形容改變し、既に嚴整し訖れるを以て、口に是の如き大弘誓の言を發したまふ、『我、今、始めて眞の出家と名づくる也』と。是の時、菩薩、車匿を遣りて還し、涙滿面に流れつつ、以て車匿を送り、分別し訖了りて、獨一無雙、體上、既に袈裟色服を披、安庠として徐歩し、跋伽婆仙人の居處に向ひたまふ。是の時、車匿、躬を曲げて菩薩の兩足を頂禮し、菩薩を圍遶すること三匝にして廻る。車匿、既に菩薩が割意して家に還るを肯んぜず、兼ねて其の身體に袈裟衣を著し、頭に天冠無く、鬚髮悉く剪りて、身體に復諸寶瓔珞幷びに及び微妙の迦尸迦衣無く、是の如き一切の種種悉く無きを見、既に遙に見已りて、兩手を上擧し、大叫して聲を盡し、天に號んで哭し、身を投げて地に撲ち、心意悶絶し、良久しくして乃ち蘇り、蘇り已りて還起ち、諦觀して地に立ち、菩薩の行くを視て、更に復聲を擧げ、寃を稱して哭し、其の兩手を以て乹陟の項を抱き、悲咽哽塞し、大聲に呼嗟し、良久しく哭し已りて、菩薩の心意迴らず、冀望すべき無きを觀見し、諸の瓔珞及以び衣裳を將ち、幷びに馬王乹陟を牽き、迴返つて、家に向ひて歸らんと欲す。此れ是の身還るも、實に心より捨てしに非ず。其の道路を行くや、或は時に思惟し、或は聲を擧げて哭し、或は復悶絶して地に躃倒し、或處には直立して前行する能はず、或處には思慕して樂しまずして坐す。車匿、是の如くにして、心に愁惱を懷き、多種に自ら諸の苦相を現じ已り、漸漸にして次いで迦毘羅城に到る。其乹陟馬も數數頭を迴らし、菩薩を觀看し、聲を作して鳴喚し、車匿の後を逐ひて涙を下して行く。其の馬、已前には多く氣力足り、歡喜縱逸なりしも、菩薩の家を捨てて出家し、鬚髮を剃れるを見たるを以ての故に、苦逼憂愁し、恒常に懊惱して身形羸瘦、氣力消盡す。假使、此の馬、瓔珞もて莊嚴するも、心菩薩に離別せるを以ての故に、威神有る無く、威德有る無く、迴顧して數觀、菩薩を占看して大聲を作し、涙下りて面に滿ち、悲鳴して行く。路上に在るや水草を食せず。飢渇の逼るを以て、行歩羸弱、威力威

神、悉く皆減損して、復行く能はず。其の眼中の涙、恒常に乾かず。菩薩の初騎には、發して到れる所、止、半夜に行きしが、今、苦逼り身羸弱するを以ての故に、廻還八日にして、始めて家に至るを得たり。而して偈有りて言ふ、

『菩薩の初出には半夜に行きしが　車匿辭別して乾陟を牽くや
苦逼ること切にして威勢を失ふを以て　廻還八日にして乃ち家に到りぬ』

車匿等還品第二十三の上

爾の時、車匿、馬乾陟を將て太子に別辭し、廻還し歸りて迦毘羅城に至る。初めて入る時に當つて、譬へば、人有り、空宅に入るが如く、其の迦毘羅城の內外、四面周匝、或は復園林、或は復泉池、或は復渠河、或は復苑囿は、太子の捨て行きて出家せるを以ての故に、威神有ること無く凋悴枯竭す。其の迦毘羅城內の所居の人民、大小、遙かに車匿の馬王乾陟を將領して還歸せるを見るも、太子を見ず。見ざるを以ての故に、悉く車匿及び乾陟の後に隨ひ、次第に行きて車匿に諮うて言はく、『悉達太子、今、何處にか在る』。是の時、車匿、流涙滿面、哭泣哽咽して言ふことを得る能はず。時に彼の城內の一切の人民、悲泣啼哭し、車匿及以び乾陟に隨逐し、行けば則ち隨つて行き、心に疑惑を生じて車匿に問うて是の如き言を作す、『其の王子は、今何處にか在る。我が國內に於て大歡喜を生ぜるに、汝今何處にか捨離し來れる』。是の時、車匿、隨つて行き、隨つて彼の諸人に報じて言はく、『我、實に敢て聖子に捨背せるにあらず、彼の聖子、自宮を捐棄して俗衣の形を捨て、幷びに我及び馬乾陟を發遣して來り還らしめ、太子、獨り自ら山に在りて出家せり』。是の時、城內の一切の人民、此の語を聞き已り、心に奇特希有の事を生じ、讃助して未曾有の法なりと言ひ、各對面して共に相謂つて言はく、『悉達太子、行じ難きを能く行ず』と。時に、彼の城內の一

切人民、口に是の如く彼の言を稱說すと雖も、其の淚の下ること猶ほ流水の如し。復各身を呵して是の如き言を作す、『咄、我も、今は共に其に隨ひ、相逐うて出家すべし。彼處に至つて人師子[一]の徒步にて行くを看ば、我今寧ろ應に彼に至つて隨つて行き、一日も聖子と離別して活命を存せしむる勿るべし。所以は何に。此の城、今は彼の聖子無きが故に、威神有ること無く、勢力有ること無し。此の城に太子無きを以ての故に寂寞たること、今は曠野と異ること無し。彼の所居の處は、太子の威神力有るを以ての故に、山澤叢林も、還、聚落と成らん』と。而して偈有りて說かく、

『城內の人民此の言を聞き　口に稱ふらく「希有なるかな是の如き事や
此は悉達無くして曠野と成り　彼は太子有りて國城の如けん」』

爾の時、馬王乾陟、鳴喚す。城內所有の一切の人民、悉く自家に在りて、各其の聲を聞き、聞き已るや一切所有の人民及び兩宮內の諸婇女等、是の如き心を作して謂つて言はく、『太子、廻還して城に入りしならん』と。是の時、人民及以び宮內所有の婇女、或は聰牖を開き、或は門簾を撥げ、歡喜心を以て遙かに太子を望む。時に彼の人民及び宮婇女は、唯馬王及以び車匿の、太子に離別して獨自にして來れるを見、見已りて各還聰門戶を閉ぢ、退いて家內に入りて稱寃大哭す。

時に淨飯王、愛の苦惱の身に逼切するを以ての故に、思惟して悉達太子を見んと欲し、卽ち齋堂に入り、潔戒淨心、苦行を修持し、憂愁悵怏として、內心に日夜守を一切の諸天諸神に求め、復、種種の方便因緣を作す。子を見て以て心を慰めんを欲求するが故なり。爾の時、車匿、苦惱憂悲し、淚下ること雨の如く、手に乾陟を執り、幷びに及び太子纓身の瓔珞と無價の寶冠とを擎持し、將て淨飯王宮に入る。譬へば、王子の戰鬪場に於て怨敵に殺され、其の左右に從へるもの、馬と瓔珞とを將て、王宮に入るが如し。是の如く、是の如く、其の奴、車匿、太子に離別し、馬と服玩とを將て、淚を雨らして大王の宮中に入るも、亦復是の如し。車匿入る時、其の馬乾陟、淨飯王の宮門の

【一】人師子は人中の師子なり。人中の王者、大人の意。

外に在り、門内に入りて太子を觀瞻せんと欲し、坐臥の處を左右行動して、太子を見ず、涙の下ること流の如く、地を爮きて大鳴す。譬へば、人あり、大衆中に於て、苦惱の事を說くが如し。時に淨飯王の宮内の有ゆる種種の諸鳥、孔雀、鸚鵡、鸜鵒、命命、倶翅羅等の種種の諸鳥、乹陟の聲を聞き、亦、謂つて言はく、『これ太子の家に歸りしならん』と。彼等歡喜し、各自、聲を出だし、和雅に鳴く。是の如く、乹陟聲を作し已るや、有ゆる大王の廐内の餘馬も、乹陟の聲を聞き、亦、『太子、家に向ひて歸來せるなり』と謂ひ、一切歡喜し、皆、悉く鳴喚す。其の淨飯王宮内の婇女衆多百千、摩訶波闍波提等、復、太子の宮内の婇女六萬餘人、及び其の大妃耶輸陀羅等、太子を念ずるが故に大いに憂惱を生じ、塵涙滿面、各、本容に任せて復洗梳せず、身體衣裳、皆悉く垢膩のままにて、諸の一切の妙好瓔珞を捨て、憂愁悵怏して心意安からず、或は哭し、或は啼き、或は思惟して坐す。乹陟の鳴くを聞いて各相謂つて言はく、『是の如く、乹陟の是の鳴聲を作すは、決定してこれ我が太子の家に歸れること、疑有る無けん』。彼等、既に乹陟の聲を聞き已り、心大いに歡喜渴仰し、太子を見んと欲するが故に、摩訶波闍波提、耶輸陀羅等、多千の婇女、各自房に在り或は樓上に在り、或は殿中に在り、或は室内に在るが、太子を見んと欲して渴仰して忽ち起ち、急走集聚して、車匿及び乹陟の邊に向ふ。彼の諸婇女、唯、車匿と馬乹陟の、太子に離別し、來りて宮に向ふのみなるを見、彼、既に見已りて、各兩手を擧げ、叫喚大哭して流涙滿面、口に太子の種種の諸徳を唱ふ。而して偈有りて說く、

『彼等婇女心苦しむこと切　渴仰して太子の還るを見んと欲し
忽ち車匿と馬との空しく廻れるを覩て　涙下滿面叫喚して哭し
瓔珞妙衣服を解きて絕ち　頭髮を散被し、身は瘦羸し
各兩手を擧げ望を承くる無きに　啼號して眠らず、天曉に徹しぬ』

【三】爮。或は跑（足にて地をかく）。

卷の第十九

車匿等還品第二十三の中

爾の時、摩訶波闍波提及び瞿多彌は、既に太子の【一】髻裏の明珠、傘蓋、横刀、并びに摩尼寶もて莊嚴せる蠅拂、自餘の瓔珞、乾陟馬王及び車匿等を見、是の如く見已りて、心に大いに驚怖し、各兩手を擧げて身體を搥拍し、憂愁して車匿に問うて言はく、『今我が愛する所の子、悉達多は、何處に留在し、汝自ら廻還せるや』。車匿報じて言はく、『國太皇后、悉達太子は五欲を棄捨し、道を求めんが爲めの故に出家して山に入り、親族を遠離して剃髮染衣し、思惟苦行したまふ』。是の時、摩訶波闍波提、車匿の是の如く語るを聞き已り、譬へば【二】牸牛の其の犢子を失へる如く、悲泣號哭して自ら勝ふる能はず。其の摩訶波闍波提、車匿より、太子の語を聞くや亦復是の如く、即ち兩手を擧げ、心、驚怖に裂け、口に大唱して言はく、『嗚呼我が子よ、嗚呼我が子よ』と。涙滿面に流れ、遍體戰慄し、忽然悶絕して身躃れ倒仆れて、土中に宛轉すること、魚の水より出でて陸地に在り、跳躑苦惱するが如く、摩訶波闍波提も亦復是の如く、地に躃れて宛轉し、嗚【三】噎して語り、車匿に問うて言はく、『車匿よ、我今、自身に過有り、及び心口に失ありて、汝に、【四】負持するを見ず。汝今何の故に、忽ち我が子を將つて曠野に擲棄すること、猶木を【五】擺つるが如く、汝、我が子を將つて彼の林內に置きて、種種の諸惡蟲獸と共に恐怖の中に獨自に住ましめ、汝棄捨し來りて我が子を憐れまず、而も身背けるか』。車匿、報じて言はく、『國大夫人、奴身、敢て太子を棄捨せず。夫人、太子は自ら奴を棄捨したまへり。太子は、我に乾陟馬王及び諸瓔珞を付し、來り廻還して、速に疾く家に向はしむ。大夫人の心に憂愁を生ぜんを畏れ、安隱にして惱患無きを得しめんとの故なり』。時に彼の宮中の諸婇女等、各啼哭し、口に唱へて『嗚呼阿爺』と言ひ、或は復唱へて『嗚呼兄弟』と言ひ、

【一】髻裏明珠。髻裏に明珠をつゝむは、印度の貴族間に行はれしものなるを察せしむ。法華經の有名なる譬喩は、事實に基づけるを知る。

【二】牸はめうし。

【三】噎はむせぶ。

【四】持。或は特 作らる。

【五】擺。兩手振擊也、ふるふ。おす。

或は復唱へて『嗚呼大家』と言ひ、或は復唱へて『嗚呼我が夫』と言ひ、【六】此の種種愛戀の酸言を以て、欲染の根本より叫喚して身を苦しめ、或は婇女の目を轉じて哭する有り、或は婇女の相視て哭する有り、或は婇女の身を廻らして哭する有り、或は婇女の頭を擧げて哭する有り、或は面目を相覩て哭する有り、或は兩手にて肚を拍ちて哭する有り、或は兩手にて心を撫して哭する有り、或は兩臂を以て相交へて哭し、或は兩手を擧げ頭を拍ちて哭し、或は灰土を以て頭を坌して哭し、或は髮を散じ面を覆ひて哭する有り、或は鬢髮を拔き低頭して哭し、或は兩手を擧げ天を仰ぎて哭し、或は婇女の、悲苦を以ての故に、東西南北に交横に馳走して、猶ほ野鹿の毒箭に射られたるが如き有り、或は婇女の、衣を以て面を覆ひ、叫喚して哭する有り、或は婇女の、遍體戰慄して、猶風の芭蕉樹の葉を吹くが如く、低昂して哭する有り、或は地に倒れ悶絕して知らず、少かに餘命有りて、纔かに聲を出して哭する有り、或は婇女の、魚を水より出だして、陸地に、擲置するに、宛轉して臥し、微かに喘息あるが如く、劣餘の殘命もて、【七】綿惙して哭する有り、或は婇女の、猗樹を掘りて倒せるが如く、臥して地に在り、宛轉して哭する有り。諸の是の如き等の、種種の苦惱、以て身を逼切して太子を號哭す。

是の時、車匿、及び馬乾陟、幷びに彼の無量百千の婇女の哭泣する聲は、聞く得べからず。摩訶波闍波提、流涙悶絕し、少しく蘇りて即便ち太子を大哭し、口に是の言を唱ふ『嗚呼我が子よ、嗚呼我が子よ。汝の身は、本時より、種種の香を以て摩塗拂拭し、威神大德にして用て莊嚴せり。今は云何ぞ山谷に在りて、諸の蚊虻、細小の毒蟲に、汝の身を、【八】唼嗽せられ能く此の苦を忍んで曠野に住せん。嗚呼我が子よ、汝の身は恒に迦尸迦衣薰香を以て覆はれしに、今、云何ぞ麁澀の臭衣もて能く身に著くるに忍びん。嗚呼我が子よ、汝、家に在るの時、清淨の妙香、百味の作せる種種の餚饍、潔白の食のみにて、自餘の惡雜を曾て口に向けざりしに、今云何ぞ、麁澀冷淡の食飲

【六】（原文）以此種種愛戀酸言、欲染根本叫喚苦身。

【七】綿。つらなる、ながくして絕えず。惙は憂也、亦意不定也、うれふ、つかる。

【八】唼はすする、くらふ。嗽はすふ。

を食するに忍びん。或は飯、或は麨、或は麪、或は漿を、云何ぞ、空しく此を餐ふも、能く下すを得ん。嗚呼、我が子よ、宮内に在りては、細滑なる牀敷、柔輭なる氈褥あり、或は天衣を覆り、或は復、兩邊に倚枕を挾置し、或は臥し或は偃して、隨意自在なりしに、今、云何ぞ赤露の地、或は棘針の叢、麁草の上に在りて、臥眠するを得るに忍びん、嗚呼我が子よ、家に在りし時、或は奴婢有り、或は左右有りて、恒常に供承し、哀愍の心もて、或は身を倚する有り、或は胡跪する有り、或は地に立つ有りて、汝に向ひて面覲し、而して奉事して乏少する所無きを得たるに、今、云何ぞ瞋恚の人の、或は貧窮なる有り、或は焦煎なる有りて、汝に向ひて慈無きに、汝、何ぞ能く覲じて、其の意氣を取らん。嗚呼我が子よ、家内に在るや、妙華色の喜ぶべく端正なる婇女の群隊を以て、左右に圍遶し、而して快樂を受けたるに、汝、今、云何ぞ、山曠に在りて猶野獸の如く、恒常に恐怖し、獨坐獨行して、心に乃ち娛樂せん。嗚呼我が子、善生羅網に覆はれたる長直の脚指、柔輭なる脚【九】踝踹脛は猶鹿王の如く、掌底柔輭にして蓮華の華の如く、二輪莊嚴して分明顯著なりしに、今、汝、云何ぞ、是の如き脚跡にて徒跣にて地を蹈まん。或は棘針有り、或は沙礫有り、或は時は氷凍し、或時は炎埃なるを、何ぞ東西に此を將つて行涉するに忍びん』と。

是の時、摩訶波闍波提、是の如き等の無量無邊諸種の語言を作して、太子を哭し已り、心薄く穌醒し、本念に復するを得て、地より起ち、車匿に言つて言はく、『車匿よ、此の事已に然り。我が子、悉達、路を行くの時、汝に向つて何をか囑せる。車匿よ、我が子所有の、柔輭靑色紺黑の頭髮を、復、誰か割れりや。車匿よ、我が子の頭髮、今何處にか在る』。車匿、報じて言はく、『國大夫人、妃子、悉達は我に語を囑して言はく、「車匿よ、汝、我が家に至り、我が爲めに、慇懃に我が母、摩訶波闍波提を再拜し問訊し、若し再拜し已らば是の如き言を作し、大母に諮啓せよ。願はくは大いに愁ふる莫く、苦惱を生ずる莫く、我を憶ふ莫かれ、子は久しからずして、心の如くに願ふ

【九】踝はくろぶし。踹はくびす。この前後の文は既出三十二相の下を參。

所を得、得ば卽ち廻還して、大母に奉覲せん」とて、其の聖子、手にて自ら刀を拔き、左に頭髻を執り、右手に刀を持ちて、自ら割截し、虛空に擲ぐるや、諸天接取して、將に梵天に還る。供養せんが爲の故なり』是の時、摩訶波闍波提、既に車匿の是の語を作すを聞き已り、復更に重ねて太子の髮髻を哭す『嗚呼、我が子の頭髮、甚だ長くして柔輭、螺髻は極めて能く端正に、一一の毛孔に一毛旋生して亂れず斷ぜず、王冠を著し、王位を受くるに堪へたるを、汝、今、何ぞ割截して擲棄するを忍べる。嗚呼、我が子の兩臂は甚だ長く、行步庠序として師子王の如く、兩目圓滿にして猶牛王の如く、身體は金色に〔一〇〕胸髆は寬大に、聲音隱隱として鼓の如く雷の如し。是の如き人は、何ぞ出家して山野に居在するに堪へん。今、我が此の地に福相有ることなし、若し是の人にして如法の行を行じて此の地に倒れ已らんか、復起ちて世の爲に主と作る能はじ。我、一切有德の人の諸功德の具するが、法王の世に出現するに値ひ、諸大衆をして安隱快樂ならしめんを願ふ』而して偈有りて說かく、

『必ずそれ此の地に福有ること無くば、　應に是の智慧の人を生ずべからず
既に是の如き功德身を現ぜり。　應當に世の爲に聖主と作るべし』

爾の時、耶輸陀羅、大聲に叫哭し、一たび瞋り、一たび罵り、雜種の語音もて車匿を呵責し、是の如き言を作す「車匿よ、我、婦女人、年少にして、夜半に睡眠沈重にして覺知する所無かりき。汝、今、我が心中に愛する所の如意の聖夫を把り、將て何處にか置ける。車匿よ、此を去る近きか、遠きか。我の聖主、善大丈夫と、幷びに汝と及び馬と、三、平等に行きて、車匿と乾陟と、唯二は獨り來りて我が前に在るも、我が心所愛の聖主を見ず。是の故に、我、今、身心戰慄す。車匿よ、汝は善人に非ず、我を潤益せず。車匿よ、我今、要言す、假使、酷暴梏瞋　怨家なりとも、猶尙、是の如く損害せんこと、汝が、今日、我を躓頓するに似る能はじ。車匿よ、汝の如きは、これ我が

【一〇】髆。かたぼね。

歸依する所のもの、應に我を覆護すべく、應に我を養育すべきに、汝、今、云何ぞ、我、夜半に惛亂睡眠するを見て、汝、私かに竊偷し、我が聖主を將て何處に向ひて著せるか。車匿よ、卽ち、汝は今これ最大の怨讎なり。作す所の事、今、已に訖了る。汝、復、何ぞ懊惱啼哭するを須ひん。汝宜しく面を拭ふべし。何ぞ用つて强ひて悲しみ、虛しく目に涙を灑ぐか。車匿よ、汝の不善の業は、今や作し已竟りぬ。哀を須ふるを假らざれ。車匿よ、汝は我が聖夫の善友たるを以て、禁節の入出に行く可きは則ち行き、不可なれば則ち制せるを、今、反りて相從ひ、我が聖主をして、意に隨つて出でしめたり。車匿よ、汝を用つて何をか爲ん。汝、今、是の不善事を作し已り、應に須らく歡喜すべし。我、汝が、今大いに果報を獲、大いに福利を得るを知る。車匿よ、凡そ世間の人、寧ろ智有るを取らん、以て怨家爲りとも。愚癡を將つて共に朋友と作らざらん。車匿よ、汝は我が夫の處に於て友たりと雖も、汝が作せる事や、曾て思惟だもせざりき。所以は何に、車匿よ、汝、我が家に於て、今、已に不利益の事を造作しぬ。汝は今、應當に大慶幸を生ずべし。車匿よ、此の諸宮殿は、高峻莊嚴にして猶雲隊の如く、復、種種瓔珞を以て厠塡し、財寶充滿するも、今、汝の爲めの故に悉く皆空虛たり』卽ち車匿に向ひ偈を說きて言はく、

『凡そ人は寧ろ智慧の怨に近づくとも　愚癡を取りて朋友と作す莫らん
汝か事を作すに思審せざるに由り　我が合家をして苦惱に煎らしむ』

爾の時、耶輸陀羅、是の偈を說き已り、重ねて車匿に語りて、是の如き言を作す『車匿よ、我、今、何ぞ心に憂愁せざるを得ん。向には我が夫の、若し相對するに當りてや、今日、此等の諸婇女輩の如く、色の白きこと雪の如く、脣の赤きこと朱の如く、喜ぶ可きこと雙少なく、端正第一にして、身の瓔珞を解き、妙衣裳を脫して、應に須らく、共に同じく諸欲樂を受くべかりしに、誰か知らん、一朝にして忽ち孤寡と成り、主無きを以ての故に、眼の淚晝夜に、恒に水流の如く、啼哭呼

【一】寧取有智以爲怨家。梵文をそのまゝに譯せるが爲ならん。句に顚倒あり。次の偈に智の慧怨といへるに徵すれば、以て怨家たりとも有智を取らんの意なる事明なるを以て、文の如く句讀せり。

號して常に斷絕する無からんとは。車匿よ、又此の乾陟も、我と長夜に恒に怨憎を作して、利益を爲さず。我の夜半に睡眠して知らざるを見、我が心中所愛の主を負ひて、城より出でたり。此馬の作業は、極深不善なり。何の故に、今、我が前に在りて苦痛して鳴き、聲をして大王の宮內に遍滿せしむる。其の先に、我が聖子を將て出でし時、此不善の馬よ、何故に默然として、氣を飲みて行ける。若し初め去る時、是の如く鳴喚せば、彼の時、即ち應に其の聲響を聞きて、諸人睡より覺むべく、我も今亦、應に是の如き大苦惱の事を見ざるべし。此の不善の馬よ、假使、箭にて射、穴を其の身に穿つとも、或は杖を以て殺すとも、應に出で行きて山林に向ふべからざりしなり。是の故に、此の馬、我が家の爲めに利益を作さず。正に少鞭杖を畏懼するを以ての故に、我が心內所愛の最上聖主丈夫を將て、出でて山藪に向へり。我が今の此の宮は、主無きを以ての故に、堂殿房室、聚落城隍、國邑街衢、樓閣牕牖、門閤欄楯、曲尺琅玕、半月殿形の微妙殊勝、最上華麗なるも、今、悉く空虛なり。此の馬王惡乾陟の爲の故に、我が皇閨をして、猶曠野の如く、擧目灑地、處として食るべき無からしめたり』。耶輸陀羅、是の如き多種に苦切、痛楚、悲泣、酸哽の言を作す時、聞見すべからず、迷悶して暫らく停る。

其の車匿、耶輸陀羅の是の言を作すを聞き已り、低頭屛息、十指掌を合し、淚を垂れて大哭し、聖子の妃、耶輸陀羅に報じて、是の如き言を作す『妃、今、應に乾陟を呵責すべからず。亦復、我を瞋罵す合らず。我、過失無し。我及び乾陟は、實に罪咎無し。妃の聖夫の、初始めて去れる夜、我、多種衆諸の障礙を作し、所謂唱叫せり。我、爾の時に、大聲もて妃を喚び、種種の語を以て是の如き言を作せり『大妃、速に起きませ、大妃、速かに寤めませ、今夜此の宮より、妃の愛する所の夫は、我及び乾陟を將ゐて去らんと欲したまふ」と』手に頭髮を執り、一一出して耶輸陀羅に示す『此頭髮は、爾の時、我、某婇女より拔き取りぬ。此はこれ某甲婇女の頭髮、此はこれ某乙婇

女の頭髮なり』とて、各各名を稱へ、而して告げて彼に語るらく、『爾の時、覺めざりき。自餘の婇女、一切悉然りき。是の乾陟馬も、聖子の去らんとせる時、亦障礙を作し、一千餘遍、聲を出だして鳴喚し、蹄を以て地を蹹み、前むも却くも、共に行かず、又、以て車に頷づき、鼻を張りて震吼せり。此の馬、鳴く時、其の聲の聞ゆる所、半由旬に至り、其の蹄聲は一拘盧舍に聞えたり。我、爾の時、唱へて妃に語り、「妃の所愛は、今夜去つべし」と言へるも、妃及び其の餘の諸婇女等、自ら是の如き等の聲を覺知せず。又、是れ、諸天の神力もて、隱沒して聞くを得しめざりしなり。大妃、須らく知るべし。我及び乾陟は、實に敢て聖子を將て去らず。是の如く測度して、妃の聖主が、我が語を取りしや不やを知れ。聖子にして、若し我の語に依りて行ぜば、終に是の事無きなり』即ち妃に向ひ、偈を說きて言はく、

『我今眼に涙の流るるに忍びず　合掌低頭して更に諮白す
妃實に馬を呵責す合らず　幷に及び我が邊をも瞋るを得ざれ』

『大妃、我昔、亦、淨飯大王の舊、「一切左右、善く用心を加へて、太子を守護せよ」との嚴勅ありしを知る。我先に、是の如き教の有るを知ると雖も、但、自由ならず、諸天の力強くして我が心意を迷はし、作さんと欲する所の事、心に從ふを得ざりき。聖子の所行は、竝びに天神の力なり、「宜しく出家すべし」と唱ふるや、爾の時、城門自らに開けたりしと心に念へり。彼の諸宮門は、從來、各多千人の衆有りて、心放逸ならで、諸門を守護せしに、彼等、皆、睡眠に著して覺めず。聖子の初めて宮門を出づるの時や、日の初めて昇るが如く、大淨光を放つて一切の暗を破りぬ。我、爾の時に、自ら、此はこれ諸天の所作なりと知れり。大妃、我、爾の時に、聖子の城を出でて路を行くの時、我、最も前に在り、徒歩して走りぬ。我、爾の時、身の乏るるを知らざりき。大妃、此の乾陟馬も、路を行く時、脚、地を蹹まず、猶ほ人有つて舁きて將て行くが如くなりき。其の聲

【三二】頷はうなづく。

【三三】唱宜出家。頗る簡潔なりと雖も、前に長々しく叙述せるに參照すれば、天神が出家せよと唱へたるなり。爾時心念、城門自開の二句も簡單なれども、常時を追懷するに、城門自然に開けたりと思はれたりの意味なるべし。

を作す時も、亦遠く聞えず。大妃、我、爾の時、私かに心に思念して、亦此は是、諸天の所作なりと知りぬ。大妃、我、爾の時、聖子如法にして沙門の衣たる袈裟色服を樂み、他より乞ひて取り、其の自身の衣を、解きて他に付與し、髻髮を割截し、虚空中に擲ぐるに、而も地に落ちず、諸天接取せり。我、爾の時、心に念じて、これ諸天の所作なりと知りぬ。大妃、是の如くなるを以ての故に、妃、今、應に我が輩の邊に瞋恨を生ずべからず。所以は何に、我に由らざるが故に、亦、馬の聖子を將て出づるに關せざるなり。』

爾の時、大妃耶輸陀羅、地上に臥して少時思惟し、種種の語を以て悲啼號哭して、是の如き言を作す『嗚呼我が主よ、何の故にか、今、我、如法に行じ孝順に夫に向へるに、我を捨て去り、彼に向ひて法行を求めんとは欲する。彼に正法無し、其の、法行に隨ふ能はざるを以ての故なり。嗚呼我が主よ、彼を聞かざるべけんや。往昔の諸王は、山林に向つて法を求めんと欲せる時、婦及び兒を將ゐ相隨へて去りしも、彼等諸王は、聖道を妨げらるる無く、亦成就するを得たり。嗚呼我が主よ、彼、豈に是の如き法有るを知らざらんや。諸人だも、猶尙、婦と共に頭を剃り、出家修道し、精勤苦行し、好馬を將つて、諸天を祭祀し、無遮會を作し、未來世に、二人同じく上妙の果報を受けたり。若し韋陀論中の說法を知らば、何の故に、今獨り我が邊に、法の慳惜を作して、共に法を行せず、咄咄、空しく往きて、徒らに人中に生くるぞ。若し世間の、共に婦人に恩愛の情有るを知らば、云何ぞ棄捨して、彼の三十三天に生れ、玉女を貪らんと欲するか。我が意、今、是の如きの事を見る、彼の天の玉女は何の貪るべきか有らん、何の端正か有らん、何の五欲歡樂の事情か有らん。若し其れ彼の快樂を貪らずんば、云何ぞ此の王位の威神功德と及與び我等諸婇女輩とを捨て、既に棄捨し已りて出家し、空閑なる山林に入りて、苦行を行ぜんと欲するぞ。我、今、天上の果報を取らず、亦、天の玉女の身を羨まず、我が心に足るて知る我に是の力有り、我此に在りて天に

生るるを用ひず。但、此處に於て苦行を修行し、是の如き願を乞はん、「若しは人間に在るも、若しは天上に在るも、唯、願はくは、伏して汝の如き主に事へんことを」と。彼の心、決定して、是の如く一四剛鞕に、若し我等を捨て、空山閑靜の林野に入らば、我が心も亦然り、堅固にして轉ぜざること石の如く異る無く、最牢最實ならん。若し、我が今の如きは、夫無きの婦として、自の主の、家より出でて行きて山林に至るを見るを以て、我をして孤單、獨り空室に在らしむ。何ぞ、心をして破裂せざらしむるを得ん」。卽ち偈を說いて言はく、

『我今身心甚だ大剛　鐵と石との如く異有る無し

主は捨てて山に入り宮內は空し　何の故に我今心破れざらん』

爾の時、耶輸陀羅、是の如き因緣より、太子の爲めに苦惱逼切し、心迷悶し、忽然として地に躃れ、須臾にして還起ち、或時は聲を擧げて悲哀號哭し、或時は默して住し、低頭して思惟し、或時は忽ち驚きて狂言慢語すらく、『彼の我が夫や、今何方にか去れる。彼の我が聖主、今何處にか停り、我をして一五孤煢、宮內に獨居せしめ、我を棄て、我を捐て、我を捨背して行ける。我、今日より聖子を得ずんば、本牀に臥せず、亦、復、香湯を以て澡浴せず、亦、復、更に自身を莊嚴せず、一六揩摩拭せず、脂粉もて塗らず、又更に雜色の衣服を著けじ。今より已後、雜種諸瓔珞の具を著けず、香華を以て身に熏佩せず、美食を食せず、美漿を飲まず、一切の酒等、悉く皆飮まじ。常に食せる勝食も、今は更に食せじ。頭上の素髮、更に嚴治せじ。家に在りと雖も、恒常に山林の想を作し、苦行を行ぜん。乃至、彼の最上勝の大丈夫を見ざれば、我、一切の諸園、林池、泉水、殿堂を見るも、悉く塵土に滿ちて、猶ほ曠野の如く、一種も異るなけん。迦毘羅の聖子無きを以ての故に、一切の宮閣、一切の樓觀、悉く精光無くして、猶ほ沙礦の如けん』と。此の憂愁苦惱の心を以ての故に、自ら持する能はずして、正念を失し、復、愧恥なく、復、羞慚無く、其の耶輸陀羅　臥して地

【一四】鞕は鞭、或は硬に作る。かたし。

【一五】煢は煢、ひとりもの。

【一六】揩、摩拭すること。

上に在り、是の如き苦惱を作し、宛轉狂語せるの時、宮內の有ゆる諸婇女等、悉く皆聲を同じくして、叫喚大哭し、流涙面に滿ちぬ。而して偈有りて說かく、

『是の如き苦惱彼に逼切し　婇女及び妃耶輸陀羅
各各相觀て眼に涙の流ること　猶ほ盛夏に大雨を降らすが如し』

爾の時、車匿、耶輸陀羅の是の如き諸の苦惱を作すを見已り、諫めて言はく、「大妃、是の如き酸切の懊惱を生ずる莫れ。大いに悲苦する莫れ。應に須く暫く停めて、聖子を憶ふ莫るべし。聖子の出でし時、人間に在りと雖も天と異る無く、威神氣力、天と殊ならざりき。聖子の出でし時、諸天圍遶せり。右邊は則ちこれ諸梵天王及び梵の眷屬、左邊は帝釋及び諸の三十三天の眷屬なりき。其の東方に提頭賴吒、乾闥婆王有り。其の南方に毘婁勒叉、鳩槃茶王有り。其の西方に毘婁博叉、及び諸龍王有り。其の北方に毘沙門天及び領する諸夜叉有りて、左右圍遶し、其の身、悉く金剛の鎧甲を著し、或は弓箭を執り、或は戟槊を執り、或は、復聖子の前に在りて道路を示現し、或は、復、後に在りて聖子を防衛し、或は左に在り、或は、復[七]右に在りて、隨從して行けり。其の虛空中に、常に無量の諸天、玉女、百千萬衆有り、悉く大いに歡喜して、其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず、天の雜華を將て聖子の上に散じ、散じ已りて復散ぜり。是の時、聖子、彼等諸天玉女を見て、心內に亦復喜ばず、樂しまず、愛せず、瞋らず、取らず、觸れざりき。其れ聖子の情は、是の如く、彼等の用ふる所に著せず。國母大妃よ、聖子の出でし時、諸天は是の如く神通を示現し、有ゆる諸事もて聖子を供養しき。我、今、一一に具說すべきこと難し」。

是の語を說き已はるや、時に、第二妃、瞿姨聖女は、譬へば大樹の枝の折れて下垂し、自ら擧がる能はざる如く、瞿姨聖女も、太子の爲めに大苦惱を受け、其の心煩毒し、彼の憂愁の爲めに、熱火に燒かれ、遍體戰慄して地上に臥し、宛轉大哭して口に是の言を唱ふ、「嗚呼我が主、心常に歡喜

【七】大正藏右を左右とせり。

しき。嗚呼我が主、面、滿月の如かりき。嗚呼我が主、端正にして雙少かりき。嗚呼我が主、最上最勝にして諸相具足しき。嗚呼我が主、清淨の身は世間に比無く、支節缺けずして、次第して善く生ぜること、猶ほ金像の如かりき。嗚呼我が主、功德最勝なりき。嗚呼我が主、大慈大悲にして天人の供する所なりき。嗚呼我が主、勇健多力なること[一八]那羅延(Nārāyaṇa)の如く、怨敵有る無く、能く彼を降伏したりき。嗚呼我が主、梵音微妙にして、聲を出せば、猶ほ迦陵頻伽の如かりき。嗚呼我が主、名稱遠く聞えき。嗚呼我が主、百種の莊嚴福德の聚にして、天人世に與に等濟しき無かりき。嗚呼我が主、功德圓滿にして、諸仙の見る者、悉く皆歡喜しき。嗚呼我が主、名は上下四方[一九]四維に聞え、悉く皆尊び、遍ねく供養の聚たること、智慧林の如かりき、嗚呼我が主、世間中に於て舌味最上なりき。嗚呼我が主、口脣紅赤にして頻婆果(bimba)の如かりき。嗚呼我が主、雙目紺睒にして青蓮花の如かりき。嗚呼我が主、口の四十齒清淨潔白にして、乳の如く、練の如く、雪の如く、霜の如かりき。嗚呼我が主、鼻、高隆にして直く、猶ほ鬱金の[二〇]鋋のごとかりき。嗚呼我が主、眉間の白毫、正しく住して清淨なりき。嗚呼我が主、[二一]兩髆は團厚、寬廣、齊平、腰は細くして纖長、猶ほ[二二]弓弝の如く、手足柔軟なりき。嗚呼我が主、[二三]髀脛臂肘は猶ほ象鼻の如く、手足正等にして、爪は皆紅赤なりき。嗚呼我が主、此の瓔珞は、吉星吉宿の日を看て作せる所、大淨飯王、之を造作せる時、大歡喜を生じたるに、今、何の故ぞや、乃ち別離を得たる。我も今、亦復、此の瓔珞を見るを憙しまず』。時に翟多彌、苦惱の心を以て、數數恐怖し、數數驚惶すること、猶ほ野鹿の他に駈逐せられて圍の內に落ちんに、手に刀槊、或は復弓箭を執り、用て其の身を射るや、大苦痛を受けて、東西に馳走し、四方を觀察すれど、能く救護して免脫せしむべき無きが如し。時に、翟多彌の心も、亦復然り。語言は正しからず、宮內に在りて自ら殿中を討ね、東西南北に求覓めて得ず、悲叫泣聲して涙滿面に流れ、救護有ること無く、大苦惱を受く。復、大いに

【一八】那羅延、婆羅門教の天即ち神の名。毘溼拏の異名。

【一九】四維、四隅のこと。

【二〇】鋋(短き矛)、或は挺(てこ)に作る。

【二一】髆はかたぼね。

【二二】弝はゆづか。

【二三】髀はもも。

唱へて言はく、『聖子の此に在るや、此の處、猶ほ忉利天宮の如く、一種も異なる無く、諸物具足し、亦、帝釋の威德巍巍、光明熾盛なるが如かりしに、今や、悉く失せ盡しぬ。今、聖子忽然として無きを以ての故に、其の城、猶ほ〔二四〕尸陀林（Sita-vana）の如く、或は山澤の如く、或は曠野の如し。我、此の宮殿の中に在りて、聖子と共に無比の樂を受け、大歡喜を生じて厭離有ること無かりしを、今は聖子無くして、意樂著せず。譬へば、魚鼈の水中より出でて、陸地に居在する如く、暫くの樂も有る無し。何に況んや意樂をや。我も亦是の如し。聖子無きが故に、何ぞ心を樂しむ有らん。猶ほ、春を過ぎたる諸蜂に樂無きが如し。華無きを以ての故に、彼の林に著せず、彼の樹を貪らず。我も今亦然り。聖子無きが故に、此の室內に何の歡樂か有らん。嗚呼我が主、坐起の處、恒に音聲を作し、宮中の婇女、歡喜心を以て、大歌舞を作せしを、今、此の宮殿は、一種も殊ならざるに、我をして忽ち憂苦を生じ、心意歡ばざらしむ。何に況んや伎樂をや。嗚呼我が主、身に微妙種種の香華を著し、瓔珞もて自ら嚴り、塗香、末香、時に隨ひて供足して、乏少する所無く、應に正しく樂を受け、稱心歡喜すべきに、云何ぞ忽然棄捨して去れる。譬へば虛空の大雲隊を起し、閃電雷鳴して大雹雨を放てるが、忽然として現ぜざるが如し。聖子も亦然り。次で王位を受けて、應に須らく樂を受け、短乏する所無かるべきに、棄捨して去りぬ。必ず、我、往昔、精妙に施し已りて、心に還悔を生じ、心に悔いたるを以ての故に、今是の報を得るならん。果報を受くること、無量深善なりしと雖も、忽然として復失ひ、〔二五〕悔業を以ての故に、今寡身と成る。我、今、薄福にして、是の如き最上の勝人を失ふ。咄、此の恩愛や、會して多時無く、須臾にして便ち失ふ。猶ほ戲場に大歡樂を作して、忽然に還散するが如く、現事も此の如し。又、傳へ聞道く、往昔、王仙、寂靜を修習し、諸根を制伏し、禪定を證せんとて、彼の空林に至り、一切の殺を斷じて身專ら善行し、諸の妙藥及び甘果を食し、隱れて山藪に處するに、婦の相隨へると共に梵行を行じたりと。

〔二四〕尸陀林、死屍を委棄する處、卽ち塚間のこと。

〔二五〕悔業。前節に見ゆる如く、宿世に於て上善の施を行じて、このめでたき果報を受けたりと雖も、後にその施を悔いたるが爲に、この果報を全くするを得じとなり。

今、彼、何の縁ぞ、獨り山野に向ひて自ら精勤するか』と。
時に瞿多彌、乾陟の頭を抱き、聲を擧げて大哭すらく『嗚呼、乾陟、慈無き馬よ、汝と一時同生の聖子は、今何處にか在る。汝復何の故に、夜半に將ゐて去り、我に語りて知らせざりしぞ』。車匿を呵責して、是の言を作す『咄、汝、車匿よ、特に慈心無し。我、既に睡眠せば、何の故にか喚ばざりし。此は既にこれ、我が心中に愛せる所、今、忽ち捨て去るに、汝、何を以ての故に我に語りて知らせず、我をして久長に獨り眠り獨り坐して、眞實に大苦せしむるぞ。咄、汝、車匿よ、我の爲めに論說せよ。聖子の去る時、云何にして行き、復、誰か將引し、此の宮に在るを、これ誰か導き出し、行きて何方に向ひ、今、何所に至りしか』。妃瞿多彌、是の如く車匿を呵叱して責め已り、復更に、和輭に車匿に語りて言はく『事既に以て然り。汝善車匿よ、汝、親しく送り來りて、聖子の處を知らん。汝、我等を將ゐて、彼の所に往詣せよ。我等の身も當に聖子に隨つて、苦行を修習し、專精に求道して、還、來生は聖子と共に同じく天上に生ぜんことを望む』と。
爾の時、車匿、瞿多彌の是の如く種種に瞋りつ喜びつする言を聞き已り、心に悵怏を生じ、倍更に憂惱し、苦痛熾盛に其の身に逼切し、涙滿面に流るるも、强ひて自ら抑忍し、安庠として瞿多彌の心を慰喩し、是の如き言を作す『願はくは、妃、善く聽き、但、憂愁する莫れ。亦復須らく是の如く哭泣すべからず。計るに、應に、久しからずして聖子を見るを得べし。所以は何ぞ。聖子の我を遣はし還す時に當つて、我に語りて言はく「汝車匿よ、去りて宮內に至り、我が爲めに、一切眷屬、幷びに我が妃等、及び諸釋種童子知親を問訊せよ。我、故らに汝を遣はし、迴還して宮に向はしむ。彼等を慰喩し、我が爲めに彼に語りて、是の如き言を作せ『我今已に貪恚癡の網を除き、久しからずして當に知慧等覺を成じ、成じ已らば、卽許に迴り返還りて、迦毘羅城に入るべし』」と。我、聖子の、決んで利智を得、稱心等願して迴還せんこと、疑はざるを知る。定めて知る、是の如き最

勝の衆生の虛妄を語らざるを』と。

時に、淨飯王、是の如く苦惱し、其の宮裏に諸天を祭祀せんとて、所作已に辦ずるや、遙かに太子の宮閤の內に、大叫哭の聲を聞き、王、卽ち自らの宮殿より出づ。是の時、車匿、卽ち太子の瓔珞傘蓋、幷びに馬乾陟を將て、牽きて王前に詣り、一一、太子より承けし命を顯示し、恩重の囑の故に、頭面もて淨飯王の足を頂禮し、涕淚交流れ、嗚咽滿面、具さに依つて奏知す。時に淨飯王、其の太子の諸寶瓔珞、幷びに及び傘蓋、馬乾陟等を見、兼ねて復、太子の囑せる所の恩慈の言語を聞き、覺えず忽然大叫唱呼し、勢を失して大哭し、是の如き言を作す、『嗚呼我が子、中心に愛する所よ。誰か是の如きを期せん』と。時に、淨飯王、太子を念ずるが故に憂苦身に切り、迷悶して地に倒れ、醒覺する所無し。而して偈有りて說かく、

『王、菩薩の誓願の重きを聞き　及び車匿、乾陟の還れるを見
　忽然迷悶して自ら身を撲つこと　猶ほ帝釋の喜幢の折るるが如し』

爾の時、淨飯王宮の有ゆる釋種諸親族等、淨飯王の身撲ちて地に倒れたるを見て、彼等皆悉く大いに憂苦を生じ、心暫くも樂しむこと無く、各自聲を擧げて、號咷して哭し、口に種種悲苦の言を唱へ、大叫大呼すること、上に說く所の如し。

時に迦毘羅城內の有ゆる人民、大も小も、其の、聖太子に別離せるを以ての故に、各各[二六]冤と稱して大聲に哭し、太子を思念す。是の如き次第もて、諸眷屬等、齊しく共に淨飯王を慰喩す。時に、淨飯王、太子を憶ふが故に、憂惱の心、暫らくも捨つる能はず。諸親族等、或は言說もて王に開解する者有り、或は王を扶けて起坐せしむる有り。而も王は坐すと雖も少時にして還倒れ、悶絕して醒めず。或は時に暫らく穌し、啼淚滿面にして、車匿に敕して是の如き言を作す、『汝、車匿よ、何の故に太子をして宮に還らしめざる』と。時に其の車匿、卽ち王に白して言はく、『大王、當に知

【二六】冤は古文に怨に作る。枉也、曲也、屈也、亦不理也。（惠琳）

るべし、我亦大いに慇懃の方便を作し、聖子をして意を降して歸還せしめんと欲せしも　但、聖子の心は、世間中所有の俗法に染著する所無く、一切棄捨して樂心有る無し。即ち我に語りて言はく、「汝、我を諫むる莫れ。我今一切の五欲を用ひず、一切の眷屬國城を棄捨して、唯、山林泉流の靜處を樂しむ」と』。時に、淨飯王、重ねて、車匿の是の語を作すを聞き已り、兼ねて、太子の諸瓔珞の地上に具在するを見て、身、即ち頂禮し、滿面に涙流れて大聲に哭し、車匿に語りて言はく、『我今力窮まりて、復意氣無く、手足悉く折れて、猶ほ杌株の如し。我今此の愛子に別離せるが故に、樹の枝無くして唯根幹のみ在るが如し。外の諸國に、今は輕欺せられん。又我單身にして、能く作す所無し。樹の雹を被りて、諸小兒の戲弄する所と爲るが如し。嗚呼、我が子、最上最勝、微妙の丈夫、喜ぶ可き形容、端正にして匹無き、柔輭の童子よ。心願に違離して、何の故に出家し、五欲を棄捨し、心に樂しむ所のもの、我に背きて去れるぞ。嗚呼、我が子、諸相具足し、百福莊嚴して、一一の相中、皆、竝びに悉く備はりき。嗚呼、我が子、身體の諸好、皆悉く遍滿したりき。嗚呼、我が子、諸婇女の睡眠して覺めざるを伺ひ、忽然として出でぬ。嗚呼、我が子、昔、宮内に在るや、我に一の愁無かりき。嗚呼、我が子諸王家の勝なりしを。嗚呼、我が子、上世以來、恒に諸王の上族中に在りて生れしを。嗚呼、我が子、何の故に、忽ち王位を捨てて出家せる。嗚呼、我が子、恒に多人の喜びて見る所たり。若しくは男、若しくは女、老嫗も、丈夫も、眼もて瞻視する時、歡悅せざる無かりしを。嗚呼、我が子、善巧多智なりき。嗚呼、我が子四方及び諸七寶と、一切の眷屬とを棄捨して、獨自出家しぬ。嗚呼、我が子、猶、白象の大樹木を破るが如く、宮に背きて出家しぬ。嗚呼、我が子、汝の宮を出でし時、所有る城門は、開き難く閉ぢ難く、設し開閉する時は、其の聲遠く徹するに、云何ぞ今は、我をして聞かざらしめし。決んで當に諸天が、彼の響を隱蔽せるなるべし。嗚呼、我が子、今、此の處所、迦毘羅城の諸釋種子は、望むべき所無

し。汝、悉達が、捨して出家せるを以ての故に。嗚呼、我が子、迦毘羅城の諸釋種子の有ゆる資財、金銀珍寶、穀麥の倉庫、自餘の錢物を、能く棄捨するを得たること、猶、涕唾の如くにして、背いて出家しぬ。嗚呼、我が子、我、汝の爲めを以て、春夏秋冬諸時の殿を造れるを、汝今、云何ぞ棄捨して行き、曠野無人の處を娛樂し、唯、諸獸と山林を樂と爲るか。嗚呼、我が子、昔諸仙は、〔二七〕二種に授記しぬ。是の因緣を以て、我昔、歡喜其の身に遍滿して、自ら勝ふる能はず。我、爾の時に於て、覺えず兒の二足を頂禮せしを。嗚呼、我が子、汝今出家して、護城の諸神、悉く皆此の城を棄捨して去りぬ。嗚呼、我が子、面の圓かなること月の如かりき。嗚呼、我が子、牙齒白淨に、目は牛王の如かりき、嗚呼、我が子、昔、汝の語を聞き、心に歡喜を生ぜしを、今日憶想して、反つて憂苦を成す。嗚呼、我が子、恒に妙好の多伽羅香、栴檀、沈水、牛頭栴檀を以て、用て其の身に塗り、種種の瓔珞もて、莊嚴せる所の身、末香、薰香、燒香に薰ぜられし柔軟の體、今忽ちに見えず。嗚呼、我が子、愛戀の心、我が皮、肉、筋、脈、骨髓に徹して、中に在りて住せしに、今、忽ちに捨して出で、山林の間に入りぬ。』

【二七】 二種授記。阿私陀仙人が、若し在家せば轉輪聖王とならん、若し出家せば、佛陀と爲らんと、二種に豫言せるをいふ。

車匿等還品第二十三の下

時に、淨飯王、復是の言を作す、『我今心に願ふ。諸衆生を護る　[一]四方護世神王よ。今、我が子の利益を成さんが爲めの故に、恒に相佐助せよ。千眼の天王、[二]舍脂(Saci)の夫、大力天王なる天上の帝釋、及び左右を圍遶する諸天衆よ。願はくは我が子の有らゆる心求の爲めに、願はくは佐助を作せ。又、世の諸神、風神、水神、火神、地神、四方四維の彼等諸神よ、皆、佐助を作せ。汝、最勝者、無上丈夫よ、何の故に四大天下を棄捨せる。彼の我が子は、今、捐てて出家し、無上極妙の聖果を志慕す。其の欲求する所を、願はくは速に成就し、阿耨多羅三藐三菩提道を、早く證明せしめよ。』

其の淨飯王、地上に臥し、種種の語を以て乾陟を呵責し、是の如き言を作す、『汝、不善の馬よ、從來、多種に、我が爲に愛樂の事を作せる所なるに、今日、何に緣りてか、忽ち饒益せずして、是の如く、釋種の家を損害するか。我の太子、恒常に汝を愛し、我が心と合して、常に歡喜を作せるに、汝、今、是の如し。[三]汝、須らく覆滅すべし。汝、我を將ゐて、太子の處に向ふ可し。我、愛子と共に、共に苦行を行ぜん。我今、所愛の子に離別せるが故に、命、須臾に在り、久しく存活せじ』。而して偈を說いて言はく、

『乾陟汝馬速疾に行き　我を將ゐて彼に詣り、還迴返せよ
我に子無きが故に命活き難く　重病人の醫を得ざるが如し』

時に淨飯王、是の語を說き已り、愛子に因るが故に、苦切に逼られ、臥して地に在り。是の如き等の苦惱を受くる事を作し、聲を擧げて大いに哭し、乍ち撲ち乍ち起ち、言音哽咽す。爾の時、一

【一】四方護世神王。四天王のこと。
【二】千眼は帝釋天、舍脂はその夫人。
【三】汝宜覆滅。馬乾陟に對する呪詛なり。呪詛せしめ、又希求せしめ、以て王の心の悶えを叙する。

智慧大臣幷びに及び國師婆羅門等有り、淨飯王の地に宛轉し、左に倒れ右に扶け、心、大いに愁毒し、悲苦纒迫して意暫くも歡ばず、身心一時に大熱惱を生ぜるを見て、其等は、王の意を開解せんと欲するが故に、故らに、顏色自ら憂愁無きを現じ、共に王に白して言はく、『大王、今、宜しく諸の憂愁苦惱を捨つべし。自心を定めて、須らく健想を作すべし。應に是の如く悶絶して自ら撲ち、猶ほ凡人の涕泣流涙するが如くたるべからず。所以は何ぞや。大王、當に知るべし、昔の如き、過去に多く諸王あり、王位を棄捨すること萎める華鬘の如く、偕[四]きて山に入れり。又復大王、太子悉達の宿緣は、當に是の如き業報を受くべきなり。大王、今應に往昔、阿私陀仙の其の記を預授し、大王に白して、「彼の童子は、拘むるに人天の果報幷びに及び轉輪聖王の位を以て、之を期待するも、貪愛をして暫くも世に住まらしむべからず」と言へり。大王、今、若し決定して太子を喚び還さんと欲せば、但、我等二人に敕して去らしめよ。當に王命に隨つて、終に敢て違せざるべし』と。時に淨飯王、卽ち之に報じて言はく、『汝等二人、若し時を知らば、速疾に往きて、太子の邊に至るべし。若し爾らずば、我今身命、吉祥有ること無く、諸苦惱の纒逼する所とならん』。是の時、大臣幷及び國師婆羅門等、淨飯王の是の如き勅を聞き已り、卽ち共に發して行き、太子の所に詣らんとして、偈を說いて言はく、

『太子應に是の如き業を受くべし　王當に昔の阿私陀の言を念ずべし
記すらく「彼天も轉輪聖王すらも貪らず　寧ろ人間の五欲の樂を樂しまんや」と』

時に彼の大臣及び國師等、是の語を說き已りて相與俱に行く。其の馬、乾陟、處處に上の如き苦切呵責の言を聞き已り、意甚だ憂愁して大熱惱を生じ、熱惱を以ての故に、暫時も歡ぶこと無く、心既に歡ばず、卽便ち命盡き、命盡きたる後、時に應じて三十三天に上生す。既に彼の天に生れ、後に、如來の成道を得已れるを知り、卽ち彼の天を捨て來りて、中天竺國の那波城に下生す。其の

【四】偕。麗本には偕に作り、宋元明三本には背に作る。

城は一婆羅門種有り、具に六法を行ず。即ち彼の家の爲めに子息となり、乃至、漸く大にして如來の邊に至る。如來、彼、往昔の時馬身と作り、命終して天に生れしを知り、時に、佛、即ち彼の馬の因縁を説きたまふや、既に法を聞き已り、漏盡解脱して般涅槃に入れり。

觀諸異道品第二十四

〔一〕爾の時、太子自ら手に刀を執り、頭髻を割き、鬚髮を剃除し、身に袈裟を著く。即時、無量百千の諸天、大歡喜を生じて、其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず、歡喜心を以て、齊しく聲を出して叫び、大歌大嘯し、諸衣裳を弄し、口に大唱して言はく、『悉達太子、今已に出家す。悉達太子、今已に出家す。それ、定んで、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、得已らば一切〔二〕生法の衆生は、當に彼の生法を解脱するを得べく、乃至、應に苦惱別離を受くる諸衆生等は、悉く此の繫縛より解脱するを得べし』。爾の時、菩薩の割髻せる處に、其の後、塔を起てて割髻塔と名け、菩薩の身に袈裟を著けし處に、後、塔を起て敕受袈裟塔と稱し、車匿、乾陟の、辭別迴還して宮に向ひし處に、後、塔を起てて車匿乾陟迴還の塔と名けぬ。

菩薩、路を行くや、諦視徐行して、人有りて借問するも、默然として答へず。彼等人民、各相語りて、『此の仙人は必ず釋種の子ならん』と言へり。此に因りて〔三〕釋迦牟尼の名を得たり。

爾の時、菩薩、自心に發起して是の如く思惟す、『我今既已に王位を捨て、自らの眷屬境界、國城を捨てて悔を生ず可らず。此の事の成り已るは、これ滅相の法なればなり』。是の如く念じ已りて、心轉た勇猛なり。

爾の時、菩薩、彼の阿尼彌迦聚落(Anumai-neyya)より、漸漸に毘耶離(Vaiśali)に向はんと欲す。中路に一仙人の居處あり、彼の舊仙人は、跋伽婆(Bhārgava)と言ふ 隋に瓦師と名く。菩薩、彼の仙人

【一】本品は、前とはその材料とする佛傳書を異にするものゝ如し。初文の記事に、前と重複を見るのみならず、後に出家處を阿尼彌迦（前は羅摩、又は彌尼迦とす）とせるなど注意せらる。

【二】生法(Jati-dharma)、生死すべき約束。

【三】Śākya-muni。釋迦種族の聖人の意、義によりて、古來釋迦を能仁と譯し、牟尼を寂默と譯し、以て慈悲と智慧とを具備せるの稱と爲す。蓋し、牟尼尊重の思想は古代よりあり、今は語義によつて是の如き敷衍の説を立てたるなり。

の處に入る時、光明顯赫として彼の山林を照す。菩薩、既に諸瓔珞の具を除き、并びに一切の迦尸迦衣を捨てたるに、直ちに是の身威より猶ほ光を出して、彼の山林の諸仙人の眼を耀かしぬ。

而して偈有りて說かく、

『菩薩象王師子のごとく行くや　妙衣及び瓔珞を除捨して
直ちに袈裟鹿法服を著くるも　身猶ほ彼の諸仙を威耀しぬ』

時に、其の林內の有ゆる持行婆羅門仙、行住し、坐臥し、或は手もて執持し、威儀に隨つて住せり。彼等一切、菩薩の面に向ひて恭敬心を起し、受樂尊重し、或は復、疑を生じて菩薩を瞻仰す。然るに彼の林內に、諸の耆舊婆羅門の仙有り、或は華果、藥木、草根を取る。其の餘の他行して未だ集聚せざるもの、彼等未だ見ざれば、疑心を生ぜず。但、遠く遙かに菩薩の聲を聞き、既に聲を聞き已りて心に驚き、速疾に林中の本住せる處に來還して、應に所作すべきもの、更に復作さず、應に所取すべきもの、更に復取らず、其の餘の華果及び藥草根を、設し已に取れるもの、亦悉く之を捨て、但、心に速かに菩薩の前に來らんと欲す。時に彼の林內所有の諸鳥、所謂、鴻、鶴、鵝、鴨、鸚鵡、鸜鵒、鴛鴦、命命、孔雀及び迦陵伽、俱翅羅等の一切諸鳥——彼等諸鳥は、菩薩の林中に入るを見已り、各各自ら和雅の音を出し、微妙の聲を作す。又彼の林中所有の蟲獸、其等一切も、悉く水草を捨てて食せず飮まず、歡喜して來つて菩薩の前に向ふ。是の時、彼の林の諸婆羅門は、祭祀の爲めの故に、諸牸牛を【四】𤛓りて乳汁を取る。彼等牸牛は、復、【五】捋り訖ると雖も、其の乳汁は猶ほ更に初の如く、自然に流下す。時に、彼の一切諸婆羅門、各相謂ひて言はく、『曾て聞く、八婆娑婆大（? Aṣṭa Vasanta-vayanti, 主夜神）有りと、此の人は、これ其の一に非ざる莫きか』。或は、復言ふ有り、『諸の婁宿天（Aśvin）とは、此はこれ其の一ならん。何を以ての故に。【六】其の來りて此の林中に入りしより、此の林、光を放ちて皆悉く明耀すること、日の初めて出でて世間を照す

【四】𤛓は犨、ちちしぼる。
【五】捋は指先にてとる、つまむ。
【六】其、大正藏、自。

が如くなればなり』。而して偈を說いて言はく、

『或は八婆娑の此は是一か　或は二婁宿[七]中の一天か
若し不ずば此の林何の故に光りて　譬へば世間に日の初めて照るが如くなる』

爾の時、彼等諸婆羅門の仙法を修習して彼の林に居るもの、林の出せる供養の具に隨ひ、是の如き等の諸の供養の具を將て、菩薩に請ひ、各一心に、齊しく足を頂禮し、同じく共に白して言さく、『善く來たまへり、聖者。我等諸仙は、聖者の此處に住せんことを請はんと欲す。此處の所有の華果、樹林、藥草根葉、流泉冷水は、時に隨つて納受して用に充つべきに堪ふ。此はこれ古仙所居の處、解脫を求めんと欲するに、安心を得易し、此處は空閑にして、經行[八]寂靜なればなり』。爾の時、菩薩、辭采音句、美麗觀るべく、聲は隱隱として深く、猶ほ雷鼓の如き微妙の語を以て、堪受する所に隨つて、問訊相謝ゆ。是の時、諸仙の衆中に、一婆羅門仙有り、居林苦行の法に善巧なり。彼、菩薩の好容儀を見已り、別に更に一婆羅門に告げて言はく、『仁者知るや不や、此の天童子は、人心を洞識し、善く方便を解す。何を以ての故に。凡そ世間の人は、各相謂ひて言はく、「我、諸子を生めり、應當に養育すべし。諸子長成せば、則ち能く我が爲めに、家計を興立し、販賣求財し、生活を造作せん。我、當時に於て、智を求め道を求めん。若し他に債を負はば、悉く償ひて了らしめん」と。是の如く思惟して、諸恩愛の故に諸子を養育するも、此は則ち然らず。他の爲めに道を求めて自らの死を計らず、自利を求めざればなり』。時に彼の衆中に、復更に、別に一婆羅門有り、彼の已前の婆羅門に告げて言はく、『仁者、仁者、是の如し、是の如し、汝の言ふ所の如し。世間の人は、自ら覺知せず、自ら辨了せず、常に足るを知らず。但、言はく、「我、今須らく是の如く辨ずべし、明日、復須らく是の如く辦ずべし、我が行法の時は、猶尙未だ至らず」と。是の如く一切諸世間の人は、迷惑を以ての故に既に此の世の自利を辦ぜず。然も未來世も、亦復諸利を成就するを

【七】二婁宿。日神 Sūrya と Saṃjñā との間に生れたる雙生兒とせらる。

【八】經行。散策すること。心靜かに聖句等を念誦して彷徨すること。

【九】采。あやもやう。

得ず』と。

爾の時、菩薩、兜率天より下來の時、釋種の胎に入り、生を受けんとするの日、彼の時、先、其の跋伽婆仙人の林中所居の處に、自然に、二の金色の樹を涌出す。時に、彼の二樹、高峻長大なり。而して彼の二樹、菩薩出家の夜に當り、忽然として地に沒して一時に現はれず。其の跋伽婆仙人、彼の二樹の同夜に沒して現はれざるを見已り、心に大いに憂惱し、悵怏低頭して思惟念言すらく、『必ず、我が衰時の相貌の至る所ならん、或は復、更に惡相の來る有らんか』と。菩薩、彼の跋伽仙人の是の如く憂愁低頭して悵怏し、心歡樂せざるを見、漸く彼の邊に至り、仙に白して言はく、『尊者、何の故に顏色憂愁し、低頭して坐するか』。時に彼の仙人、菩薩に報じて言はく、『天善童子、此の我が居處に、往昔以來、二金樹有り、地より涌出せり。彼の樹、高峻にして嚴麗觀るべかりき。我、彼の樹を見るに、今忽ち現はれず。其の沒せるを以ての故に、我今憂愁して心意樂しまず、是の如く低頭し思惟して坐するのみ』。菩薩、卽ち彼の仙人に問ひて言はく、『尊者よ、彼等二樹の出で來りてより幾時なるか』。仙人答へて言はく、『今に到る已來、二十九年なり』。菩薩、又問ふ、『彼の樹の滅沒してより、爾來幾時なるか』。仙人報じて言はく、『昨夜半の時、始めて沒して現はれず』。菩薩卽ち彼の仙人に語りて言はく、『彼の二樹は、これ我が福力果報の故に生ぜるなり。若し我が轉輪聖王と作るに當りては、我、此處に於て一善地園林の所を作らん。我今旣に、それ捨離出家せり。是の義を以ての故に、彼の樹、昨夜、沒して現はれざるなり。是の因緣を以て、尊者よ、復、自ら憂愁を生ずる勿れ』。爾の時、菩薩、彼等一切諸仙に、左右に圍遶せられ、前み行きて彼の所居の處に至り、隨意に遊行し、種種の坐起、安禪苦行、精進求道の處を觀看す。時に彼の林內に、一仙人あり、恒に苦行を修せしが、菩薩の後に在りて、隨逐して行く。

爾の時、菩薩、彼の林中に入り、仙人居坐の處に至り已り、東西南北に、彼の中に行住坐臥せる

苦行の居所を觀看す。彼等に最勝の處を求めんと欲せるが故に、彼等諸仙人に問ひて言はく、『我、今、始めて入り、求道未だ久しからず。是の故に、我、諸仙に借問せんと欲す。唯願はくは、如法に我が爲めに、汝の此の法行を解說せよ。我、曾て未だ知らず。汝等示現して、我が爲めに宣說せよ。我、聞くを得已りて、如法に奉行し、此處に利を求むる眞實の行者として、汝等所有の苦行の如く、我も亦依行せん』。彼等諸仙、菩薩に答へて言はく、『仁、我等に一切苦行及び求道の法を問ふ。我等、仁の爲めに、次第して解釋せん。凡そ苦行を行ずるや、此の衆の內に、或は菜を食する有り、或は菓を食する有り、或は尼拘陀樹の枝を食する者、或は頭拘羅樹(dukūla)の枝を食する者、或は迦尼迦羅[10](kaṇikāra)の枝を食する者、或は、復、止、一樹の枝を食し、或は牛糞を食し、或は麻滓雜果藕根を食し、或は雜種の諸樹の輭枝を食し、或は水を飲みて用て活命し、或は[11]蜣蜋の如くして自ら活命し、或は復麞鹿の如く草を食ひて以て活命する有り、或は、地に立ちて用て心に稱ふ有り、或は地に坐して消適を稱する有り、或は四口食を食して活命し、或は復、麻を持ちて衣と作す者有り、或は羖羊毛もて衣と作す者、或は草を衣となし、或は野蠶の綿を以て衣と作し、或は龍鬚草もて以用て衣と作し、或は莎草を以て持ちて衣と作し、或は鹿皮もて作り、或は故破皮を以て衣と作し、或は亂髮もて作り、或は[12]毛毯もて作り、或は死人の幡を來て衣と作し、或は糞掃の衣なり。或は復、裸形にて棘刺の上に臥し、或は板上に臥し、或は株上に臥し、或は杵上に臥し、或は復、尸陀林中に住し、或は蟻垤に住すること猶ほ蛇居の如く、或は露地に住し、或は復、水に入り、或は復、火に事へ、或は日を逐ひて轉じ、或は兩手を擧げて安然として立住し、或は地に蹲坐し、或は洗梳せずして身を塵土に坌れ、或は復、螺髻し、或は頭髮を拔き、或は髭髯を拔く。然るに我等輩は、是の如き行を以て、自ら住持し已り、次に或は時を觀し、思惟して行じ、或は復、願ひて天上に生れんと欲求し、或は復、人間に生れんと欲求する有り。苦行を以ての故に、然る後

【一〇】學名Pterospermum Acerifolium.

【一一】蜣蜋。くそむし。

【一二】毯或は毦に作り、或は毦に作る。毦は布弊反、毛布をいふ。

に其の身始めて安樂を得。所以は何ぞ。法を求むるは甚だ難く、要ず苦行を修するを以て根本と爲す」と。而して偈を說いて言はく、

「是の如く苦行を修習する時　自ら三十三天の報有り
苦行精進の後に樂を得　是の故に苦を諸樂の因と爲す」

爾の時、菩薩、諸仙の是の如く苦行して、而かも眼に未だ其の法を極處を見ざるを聞き、心に喜歡せず。而して、此の言の未だこれ眞善ならざるを知り、還つて聲を緩くして、彼の仙人に報じて言はく、「我今、汝の法を觀看するに、然も苦の滅すべきありと雖も、而も後の果報は、更に去く所無く、唯當に天に生ずべし。又、その一切諸天の宮殿の所有の果報は、是無常の法なり。上の如き少果報を行ずるを以ての故に、是の如く苦行して、既に所愛の親族を捐捨するを須ち、復、世間の一切の諸樂を去り、苦行を行じて、遠く諸樂を離れ、樂を求むるを以ての故に、乃ち更に大牢獄中に入らん」と。而して偈を說いて言はく、

「汝は愛親及び世樂を捨て　苦行を行じて天に生れんと欲し
復謂ひて此は出昇なりと言ふと雖も　未來に還つて獄に入るを覺らざるなり」

爾の時、菩薩、此の偈を說き已りて、復、是の言を作す、「若し當に人有りて、苦の身に逼るが爲に勝處を悕求し、天上に生ぜんと欲すべけんも、天中に五欲の樂を受くるを以ての故に厭離を知らず、未來世に於て、煩惱に患害せらるるを免れじ。彼等仙人は、苦行を以ての故に、還、大苦を求むるなり。この諸衆生、命終の時、大怖を見るが故に、後の好生を求むるも、生を求むるを以ての故に、還復、彼の無常を離れじ。所以は何に。何處の世間にも、諸の恐怖有るに、還復、彼の處に染著すればなり。所以に、此の世に於て、苦の切逼の故に、天に生れて樂を受けんを求め欲するが故に、悕望渇仰して彼に生れんを願ひ求むるも、所作未だ辦ぜずして、還復、無利益の處に墮せん。

而も、亦、苦を厭離する行を求めず、亦、苦身を離るるの決を求めずして、勝處の天上樂に過るを欲し覓めんとは、若し有智の人は、此の五欲を離れて、漸漸に須らく勝上の處を覓むること、足歩の前むが如くにして、以て勝處を證すべく、更に須らく彼に過ぐる最勝處を求むべし。若しそれ、身を苦しめて以て法を得んは、此れ苦身の法にしてこれを非法と名づく。若し身を苦しむるが故に天上に樂を得ば、これ、行法に因りて非法を得たるなり。但、此の身動は、心に由るが故に行ず。是の故に、應當に先づ心を調すべく、其の身を苦しむる莫れ』。而して偈を說いて言はく、

『此の身の動く時は心に由りて轉ず　應に先づ心を調すべく身を苦しむる莫れ
　身は木石の如く知る所無し　何の故に心に隨ひて體を困しむるぞ』

爾の時、菩薩、復、是の言を作したまはく、前に說く所の若く、斷食に因りて當に福を得べくんば、それ野獸等は應に大福を得べし。又復、貧人は其の先業の果報微淺にして、深く德本を植ゑざるを以ての故に、資財乏少す。猶ほ世間の無功德の人の、常に地上一切の神祇に功德の水を求め、以て身を澡浴し、心の所願の如きを得べきを望むも、其の事、然らざるが如し』。爾の時、彼の諸苦行師等、菩薩に白して言さく、『明智なる仁者は、仁は、此處に何等の患をか見る』。菩薩、彼の苦行師に答へて言はく、『汝、今、此の苦行の事を行ずるも、後日、還、來りて此の〔三〕有處に入らん』。其の苦行師、復、更に、詳かに共に菩薩に問ひて言さく、『我が此の處に、是の如き法行有り』。菩薩報じて言はく、『云何ぞ、此の如き苦行が、還、有處に入るを知るを得ん。汝等の此の行は、究竟入に非ず、無畏處に非ず』。時に苦行師、復、更に重ねて、菩薩に白して言さく、『大德仁者、唯、願はくは仁者、是の如き說をなす莫れ。我、今、此居に行く所の道路は、これ無畏處にして大功德有り。若し、人、此の道路に依りて行かば、此の惡形を捨てて勝妙の身を得ん』。菩薩報じて言はく、『惡形を捨てて後に妙身を得と雖も、而も實に未だこれ有を離るゝ法ならず。今、身を苦しむる

【三】有處。所着有執の處、卽ち迷の存在をいふ。

に由りて、後身を得んに、然も彼の後身も亦未だ苦を離れず。所以は何に。復、多種の苦行を行ずと雖も、樂を望み欲し求めて、苦を離れざればなり』。其の苦行師、復、更に理を執り、菩薩に白して言さく、『仁者、然らず。苦行するを以て、後に還苦を得るにあらず。但、我等、此の身を苦しむるを以ての故に、後世決定して快樂を得ん』。菩薩、復、答ふ、『此の如きの言、亦これ無智なり。何を以ての故に。譬へば人有り、利を求めんと欲して、其の內に而も大失有るを知らざるが如し。失を知りて、故に利を求めんと欲するは、此、智人に非ざるを以てなり。

爾の時、彼に一婆羅門在り、衆中に在りて高聲に唱へて言はく、『希有なり、希有なり、此の王子は、これ眞實の智なり。譬へば人有り、美飲食の雜毒を和せるを得んが如し。誰か樂んで噉はんと欲せん。是の如く、此の事も後に樂を得と雖も、而も未だ有爲の生老病死の法を離れず。此、豈、これ、還、後生を求むるに非ざらんや』。爾の時菩薩、復、是の言を作したまはく、『苦なり、苦なり、世間は、死命鬼を憎みて、復、後生のこの大癡駭を求む』。苦行師の言さく、『善い哉、王子、仁、愼しみて此の行を深く諦觀する莫れ。此の行は、過去の無量の大德、共に此の行を行ぜり。此の居處に、往昔、無量の諸王仙等百千萬億、此の苦行を行じ、共に後世の樂を求めたり』。菩薩又言はく、『汝、今言ふ千萬歲の如きは、希有なり大癡なり。嗚呼妄語なり。此の處に、大德、苦行を以ての故に、境界を分別して後世の樂を求め、未來世に於て生死の有を受けて曾て知足せず、煩惱の中に於て所作を作さずして其の中に展轉す。それ、世間に樂を求むるを以ての故に、反りて多く苦を得たり』。時に苦行師、復、此の言を作す、『仁者王子、此の境界の主、彌亡私の反陀梨汝の反羅城(Mithilā)、其の王、無遮の會を作し、諸天を祭祀せんと欲して、衆生を殺害すること其數少からず、後に樂を受けんことを求めたり』。菩薩、復言はく、『凡そ殺害を以て法を得ば、行と名くべきか』。其の苦行師、又復白して言さく、『我の相承し來れる諸天を祭祀するの法用は是の如し』。菩薩、報じて

言はく、『何ぞ他を苦しむる有るを名けて法と爲さん。塵の身を坌す有らんに、還つて塵を將て拭ひて能く淨むるを得んや。血の身に塗る有らんに、還つて血を以て洗ふ、豈能く淨むるを得んや。非法を行ずる有りて當に法を得べきこと、是の處有ること無し』。苦行師の言さく、『實に是の處あり』。菩薩、又言はく、『何の因緣か有る』。苦行師言さく、『[一四]韋陀論に依れば、往仙の所說なり』。菩薩又言はく、『此はこれ何の義ぞ』。苦行師言さく、『若し諸人有り、諸天を祭祀する、是を名づけて法と爲す』。菩薩、又言はく、『我、且く、汝に世間の近法を問はん。若し人、羊を殺して天を祭祀し已り、如法なるを得とせば、何の故に、所愛の親族を殺して、而も天を祭祀せざるか。是の故に、我知る、羊を殺して祭祀するも、功德有ること無し。汝が雜法を行ずる、意欲や是の如し』。

爾の時、菩薩、遙かに、此の坐處を去ること遠からずして一叢樹有り、尸陀林の如くなるを見、菩薩見已りて、彼の苦行諸師等に告げて言はく、『尊者よ、但、彼の地の處所を看よ。何の苦行とか名くる。彼の林下に、或は死屍有り、諸鳥の食する所たり。或は死屍有り、白骨として聚るを、今、現に見る。或は死屍有り、火を以て焚燒して一聚骨と成る。或は死屍有り、樹上に懸著し、或は死屍有り、其の眷屬に殺害せられたるを、其の座を莊嚴し、法に依りて葬り、後に慙愧を生ず。或は死屍有り、眷屬圍遶し、相送り來りて尸陀林中に向ひ、地に安置し訖りて還舍に歸る』。其の苦行師又復、更に言さく、『仁者王子、然り、その、彼處の尸陀林は、四輩共同して、簡選有ること無く、平等に身を施す福德の地にして、名けて曠野と爲す。此處の地方に身を布施せんもの、苦力を用ひずして速かに天上に生じ、世の勝處を求めて速かに樂を受くるを得。或は仁者有り、身は絕崖に投じ、或は燒き、或は施して、天上に生る』。菩薩、復、言はく、『若し、當に是の如く行を修行する者にして後に富貴を求むとは、嗚呼大癡なり、嗚呼無常なり、而して後世を求めて多く怨讎有り、後に富貴を求むるは、嗚呼大苦にして、還、大苦を求むるなり。彼等、癡愚無智の人、大火聚に入

【一四】韋陀論。婆羅門教は祭祀儀禮を以て、如法の行と爲し、之が爲に殺生を爲せり。四吠陀中のヤジュル、ヴェーダは、この供犧に關する聖典なり。されば供犧祭祀は、婆羅門教に取りて、法なり。こゝは佛教の供犧觀を、頗るよく表明するものなり。慈忍を以て必須とせる佛教が、供犧を認容すべきにあらず。

り大蛇の口に入る』。菩薩、是の如き辯才の舌もて、諸仙人に向つて解脱の言を說き、微妙の語を作して是の如く說く時、日將に沒に向はんとす。

是の時、菩薩、彼の仙人所居の處に還り、一夜停宿し、後日天の曉くるや、更に餘處に行くに、彼等諸仙、菩薩の後に隨つて次第に行く。爾の時、菩薩、少時行き已りて彼の諸仙の後に隨ひて行くを見、菩薩見已りて、卽便ち一樹下に依りて坐するに、彼等諸仙、菩薩を圍遶して或は坐し或は起つ。是の時、彼の諸衆仙の中の最老の仙人、菩薩に向つて希有の心を生じ、之に白して言さく、『仁者王子、汝、我が所住の處に來至してより、時に彼の地方、自ら莊嚴せるに、仁者出で已るや、彼處は今の如く、卽ち曠野と成れり。是の義を以ての故に、唯、願はくは我が所坐の處を捨つる莫れ。何を以ての故に。凡そ、人の疾く天上に生るるを得んと欲して、此の福地に在りて修行する者、久しからずして卽ち生れて天上に向はん。是の故に仁者、應に此の是の如き微妙なる、先聖所行の淸淨の所を捨てて、餘處に行くべからず』。而して偈を說いて言さく、

『仁の來るや我が林威德嚴かなるに　今去るや忽然曠野と成れり
是の故に應に相棄背すべからず　人の、命を愛して身を捨つる莫きが如くに』

爾の時、諸仙、是の偈を說き已り、卽ち更に白して言さく、『仁者王子、今、此處に在りて、恩義有ること無き鄙惡の人を見[一五]ざるを得たりや。或は、雜行に墮せる人を見、或は、復、不淨行の人を見たりや。若し是の如くならずんば、仁者、何の故に、我が居停せる處を樂まざるか。我等諸仙は、仁者に隨ひて善友と作り、隨順して逆らはず、敎を奉じて隨行せんと欲し、仁者と共に勝妙の處を求めんと欲す。假、[一六]歳星をして仁者と共に居らしめんも、猶ほ勝處を得ん。何に況んや我等苦行の諸仙をや』。爾の時、菩薩、彼の諸仙の上首の同じく解脱を求めんを請欲するを得、其の意を見已りて、卽ち自心に本、誓願する所を說き、兼ねて、復、彼等苦行の一切諸仙を讃歎し、之に語り

【一五】得不見。こゝは、この林中に、恩義を知らざるものなし、雜行に墮せる人なし、不淨行の人なし。何が故にこゝに居住せざるといふ義なるを以て、不見の不は、恐らくは誤ならん。これ無きを可とすべし。

【一六】歳星 Brhaspati。祈禱主、もと火神Agniの尊稱。リグ、ヴェーダに出る造化神。

て言はく、『仁者諸仙よ、今、已に無礙の辯を得、而して身、久來に行ひ習ふことを法の如く、內心淨きが故に、能く未だ曾て識る所ならざる人の邊に於て、大慇重敬念の心を生ず。今、若し捨てんと欲するや、猶ほ親愛の如く、乃ち大愁を生ず。其の事、然りと雖も、但、仁者輩の所求の法は、生天の果の爲なり。我は然らざる也。我、今、乃ち解脫を志求せんと欲して、有を取るを欲せず。我が意願、決定して是の如し。我、心に旣に是の如き相を觀じ已りて、汝等所居の處を見るも、心に願樂せず。一は還らんことを欲求し、一は去らんことを欲求す。此の二甚だ遠し。然も我、亦、此處を樂まざるに非ず。又亦、復、他人を憎疾せず、亦、他人の過咎を見るに非ず。而も、此に住せずして捨背して行く也。然れども汝等輩、皆、法に住して、昔の仙聖の言說する所あるに隨ひ、汝等一切、皆、悉く已に大仙の法を得たり』。是の時、彼等諸仙人、菩薩所求の解脫の勝上なるを見、菩薩の所に於て、更に慇重愛敬の心想を生じぬ。

爾の時、彼の衆中に、一梵志仙人有り、恒に灰の中、或は編椽の上に臥し、身に死屍の糞掃の衣服を著け、耳目靑黃、鼻長く身は白く、手に軍持(kuṇḍi, 壺)を執る。菩薩の是の如き語を說くを聞き已り、菩薩の面に向ひ、歡喜して以て報じ、菩薩を歎じて言さく、『仁者の語る所、極大微妙、最上の誓願なり。汝、今、乃ち能く年少の時、未だ五欲を受けざるに、諸の過患を見、若しくは天に生ぜんと欲するものを、渴仰せずして、豈に能く天上の後患を知るを得んやといふ。是の如く觀じ已りて、解脫を求めなば、彼の人、久しからずして便ち解脫を得ん。若し當に、仁者に是の如き意有り、決定して彼の解脫を欲求すべくば、汝今、宜しく應に速かに疾く行くべし。此を去ること遠からずして、一仙人住止の處有り、(一七)日穿藏と名く。彼に一仙有り、阿羅邏(Āraḍa)と名く。彼の仙、已に決定正智淸淨の眼を得たり。仁者、彼の邊に至りて諸問すべく、應に至眞方便の行路を聞くべし。仁者、若し此の方便を聞かば、必ず彼の眞に至らん。我が意に觀るが如くんば、仁者の所見

【一七】三本には自穿藏とす。他の佛傳に見えざれば、梵名不明なり。

は、必ず彼に過ぎん。如今、仁者の心想及び身、一切の相貌は、決定して當に諸智の彼岸に度るべく、往昔の諸仙人等にも勝りて、未だ曾て證せざる者を、今悉く之を得ん』。爾の時、菩薩、彼の梵志仙人等に報じて言はく、『願はくは仁者所述の如くんば可なり』。是の時、菩薩、彼の仙人の慇懃たる勸請を捨て、之に背きて行き、阿羅邏の所に向はんと意欲す。而して偈有りて說かく、

『摩訶釋種の聖王子は　善巧の美語もて諸仙を慰め
決して阿羅邏の邊に前向せんと欲し　有らゆる諸仙は還自ら住せり』

王使往還品第二十五の上

爾の時、國師大婆羅門及び一大臣、二人齊しく共に淨飯王の悲哀涕淚啼號の勅を受け已り、即便ち賢善なる好車を莊備し、駕馭して立ち、大王の威德勢力を奉承し、所住の城迦毘羅より出で、出で已りて菩薩の脚跡を尋ね逐ひ、速疾に行きて、漸漸に彼の跋伽婆仙人の住處に至る。其の跋伽婆、遙かに、使の來りて漸く將に近きに向はんとするを見、即ち起ちて前み迎へ、口に唱へて言はく、『善來仁者、云何ぞ忽ち屈して、此の間に來到せる。願はくは且らく消息し、少時停止し、此の草鋪の上に〔一〕解歇して暫らく坐せよ。我、當に具さに甘果冷水を辦ずべし。隨意に飲食せよ』と。時に二使人、即便ち彼の跋伽婆仙人の足を頂禮し、禮し已るや却退して一面に坐し、安隱に坐し已るや、其の跋伽婆、種種に王の二使人を慰勞す。

爾の時、大臣、即便ち跋伽婆を逆へ止め、語りて之に問ひて言はく、『大仙尊師よ、彼等今、彼の甘蔗種大淨飯王の勅命を被りて來る、我が身は即ちこれ彼の王の大臣なり』。國師を指し示して、『此はこれ彼の王國の尊師大婆羅門なり。彼の甘蔗王に一太子有り、悉達多と字く。生老病死を畏るるを以ての故に解脫を欲求し、宮を捨てて山に入りぬ。其の已に此處に至ると道ふを傳聞し、我等、

【一】歇。やすむ。

彼を求めんが故に、來りて此に至る』。是の語を作し已るや、跋伽婆仙、卽便ち彼の二人に報じて言はく、『實に此の事有り。然るに其の脩臂にして功德具足せる勝上の丈夫、曾て此處に至り、此處に至り已りて、我が所修の行法を問へり。我、實に依りて說きしに、彼既に知り已りて卽ち云はく、「此れ人間に勝ると雖も、其の後、還來りて生死中に入る。これ究竟解脫の處に非ず」とて、嫌へるが故に捨し去り、生死を出離解脫せんことを欲求し、今は進みて阿羅邏仙人の居所に向へり』。而して偈を說いて言はく、

『脩臂の丈夫の功德具せるが　此に至りて我が法を聞きて眞に非ずとし
　至極の大涅槃を欲求して　我に背きて今阿藍の所に向へり』

爾の時、二使たる大臣、國師婆羅門等、跋伽婆仙人の語を聞き已り、至孝心より、淨飯王を慇重に敬ふを以ての故に、疲乏を覺えず、懈勌有る無く、甘果を食せず、水漿を飮まず、跋伽婆仙人の語に依りて、卽ち共に相尋ねて菩薩の處に向ひ、彼等、漸く菩薩の邊に至到し、遙かに菩薩の林中に在り、一樹の下に草を鋪きて坐するを見るに、其の一切の諸寶瓔珞を除ける身體より光を放ち、巍巍顯赫として自ら莊嚴すること、譬へば重雲の中に忽然日出でて、天下を照耀し、林樹の間に滿つるが如し。見已りて相與に車より下り、安庠として徒步し、菩薩の邊に向ひ、至り已りて菩薩の足を頂禮し、口に同じく唱へて言はく、『唯願はくは聖子、一切常勝なれ』。更に自ら前み立ちて、菩薩の邊に近づく。爾の時、菩薩、彼等を慰勞し、彼等の能く堪受する所に隨つて、勞謝の語言もて慰問し已るや、菩薩命じて相近づきて坐せしむ。二使坐し已りて、菩薩に白して言さく、『大智太子、聖子の父淨飯大王は、心に聖子を愛敬するを以ての故に、大いに苦惱を受く。所以は何。聖子の宮を出でし日に當り、大王聞き已りて、立地に自ら撲ち、迷悶して絕し、全く覺醒せず。水を以て灑噴せるに、良久しくして乃ち蘇り、既に本心に復せるも流淚滿面なりき。聖子を憶念するや

【二】脩臂。長き臂にて三十二相の一。

【三】懈勌。懈はおこたる、勌は倦にて、うむ、つかる。

其の狀是の如し。今、我等を遣はして、聖子の邊に來らしむ。唯願はくは聖子、正しく是の如く勅せるを正心專聽したまへ、「我、以て、汝の正意に法を樂むを知る。我、以て、汝の我が宮に住せず、必ず應に出家して無上道を求むべきを知る。其の理然りと雖も、但、今はこれ、汝が入山の時に非ず。我、旣に、汝の非時の入山を見る。是の故に、我今憂愁苦毒し、全身の然さるること、猶ほ猛火の大林を焚燒するが如し。汝、今、且らく意を割き、還り來りて我が宮に入り、暫らく汝の愛法の心を捨て、我が愛重を受くべし。若し此の如くば、これ汝は法行なり。[四]若し汝、我が目下に還り至らずば、今、我が受くる苦の是の如くに增長せんこと、譬へば、大河の長遠流注せるが、一時の頃に於て兩岸崩頽し、其の水塡められて忽然に斷絕するが如く、又、猛風の大雲陣を吹くが如く、譬へば、熱天に火もて乾草を燒くが如く、譬へば[五]旱月の諸泉を煎凋するが如く、譬へば雹の盛春の苗稼を摧くが如からん。善子よ、我が今の心も亦是の如し。汝を憶念し恩愛するが爲を以ての故に、心、大いに沸惱し、煎燒破碎す。是の故に、汝、且らく迴還して宮に向ひ、王位を享受して天下を治化せよ。後に於て、若し善惡の事有るを見ば、當に汝の心の任に入山求法すべし」と。』

【四】（原文）若汝不還、至我目下、今我受苦、如是增長。

【五】旱月、夏季のこと。

巻の第二十一

王使往還品第二十五の下

『時に淨飯王、復、是の如く言ふ「我が智慧の子、汝今、諸親族の邊に愛戀の心無しと雖も、但、我が意を取りて、還り來りて家に向ひ、我をして、今、汝の爲の故に、憂愁懊惱して命終を取らしむる勿れ。善子よ、凡そ人の法行を行ずるものは、皆、一切衆生の邊に慈悲心を生ず。是の如くにして乃ち名づけて法行を爲すを得。豈に但、獨自にして身深山に入るを始めて法行と名づけんや。所以は何に。我昔曾て聞けり。往古より已來、或は諸人有り。自己の家に在りて、瓔珞を脫せず、種種に身を嚴り、長く鬚髮を養ふも功德を具足し、解脫を求むるが故に、家内に在りて亦能く解脫の法を得たり。凡そ是く、解脫の行法を修習せんことは、唯、智慧及び精進に須つ。此の如きは卽ちこれ解脫の正因なり。汝、今、我に違ひて山に入らば、此の如きは乃ちこれ、五欲を避くる驚畏の法なり。然もそれ、彼等諸人の家に在りて、諸の瓔珞を以て自身を莊嚴しつつ解脫を得たるもの、今、當に汝の爲めに略して之を說くべし。昔、仁者の名づけて隨常といへるあり、仁者力金剛、仁者多有、仁者流行、仁者大富、仁者邊大といへるあり。又、復、毘提訶(Videha)國王の能生耶耶底王(Yayâti)（隋に行行といふ。）と名くるあり、仁者淨仙、又羅摩王(Râma)（隋に作喜といふ。）といへるあり。是の如き等の無量無邊の在家諸王ありて、悉く解脫を得たり。汝今、須らく家中に在りて、解脫の法を求むるを知るべし。亦、能く、未だ必ずしも出家せざるを得しめよ。是の故に、汝、速に來りて家に還り、二種の願――一に、汝は五欲の樂を受くるを得、二に、我が心をして常に喜歡を得しむ――を滿すべし。凡そ世間の人の王位を受くる者にして、若し心をして、願ふが如き功能を得しめば、是を眞の王と名づく。我、今、能く汝の爲めに此の願を滿てん。王位は捨て難きに、我、汝の爲め

の故に、此の捨て難き事を能く捨てて汝に與へ、汝の[一]頂に灌がん。汝、若し是の如き因緣を建立せば、則ち我は歡喜し、便卽ち辭退し、世を捨てて出家し、山に入りて道を求めん」と。而して偈を說いて言はく、

『王位は親密にして實に捐て難きも、　今悉く割斷して持つて汝に付し
汝の世間を治むるに堪ふるを見るが故に、　我は歡喜を生じて卽ち山に入らん』

爾の時、大臣、幷びに及び國師婆羅門等、淨飯王の是の如き口勅と、所說の偈とを宣し、悉く委曲を具して菩薩に語り已り、復更に別に三種の事意を以て、菩薩を諫めて言はく、『大智なる聖子、これは是、聖子の父王淨飯の、流淚嗚咽して、我等に向ひて勅せる酸切の語なり。是の故に聖子、今、父王の是の如き苦勅を聞かば、應に父勅を供養恭敬すべきに堪へん。違逆するを得ざれ。聖子の父王は、今、大深苦の河に沒溺し、人の能く智岸に拔出する無きを以て、唯、聖子の能く救護を作して、彼の苦を拔くに堪ふる有るのみ。猶ほ、最極深の水に墜ちては、唯、大船師のみ、乃ち能く拔出するが如く、是の如く是の如し。聖子の父王は、今、深大の苦惱海に沒し、更に人の能く拔出する者有ること無きを以て、唯、聖子のみ、能く拔出せん。又復聖子が小嬰孩の時、增長養育せるは、唯、憍曇彌にして、兼ねてそは復、これ聖子の姨母なり。孤寡にして其をして命終せしむる莫れ。今、聖子を億念するが爲めの故に、大苦惱を受くること、譬へば牸牛の犢子を失へるが故に、悲喚して鳴くが如く、是の如く是の如し。彼の憍曇彌も、眼に聖子を見ざるを以ての故に、悲苦嗚咽し、常恒に啼哭す。是の故に聖子應に捨離すべからず。復、往昔養育せる恩あるを以て、猶ほ彼の牛の其の子を愛戀するが如し。幷びに及び宮內の婦女眷屬も、亦然かく苦を受け、又、迦毘羅城內の一切の釋種、男女、人民、大小も、聖子を愛する心の煎迫するが爲めの故に、苦惱の火に燒然せらる。是の故に聖子、今、家に還りて彼等を見ること、譬へば大地の焚燒せらるる時、在上諸天

【一】頂に灌ぐ。王位につく儀式を灌頂といふ。

の大甘雨を降らして、彼の燋熱苦劇の火を滅するが如くなるべし』。

爾の時、菩薩、父王の使の是の如き語を聞き已り、少時思惟し、以て身心口の喘氣を調し已り、使人に報じて言はく、『我も亦久しく、人の父が子に向ひて、皆、愛心有るを知る。我、我が父淨飯大王の我が邊に向ひて、極めて大いに憐念し、憶戀し著心するを知るも、我今、但、世間の生老病死に自身の沒せらるを怖畏するを以て、豈能く沈めるを救はんや。度脫を求めんと欲するが故に、彼の諸眷屬を捨離するのみ。誰か復、樂んで此の親愛を捨て、恒に相見るを得んことを欲せざるべけんや。若し世間の中に愛別離無からば、誰か世を樂しまざらん。復久しく住して、諸親と共に聚まると雖も、會ふものは當に別離すべし。是の故に、我今、一切所愛の親族及以び父母を捨てて、菩提を志求す。汝の言ふ所のごとく、我を愛するに因るが故に、父王をして大苦惱を生ぜしむるを致すも、我は此の言を聞き、實に是の如き恩愛に戀著せず。所以は何ぞや。譬へば人有りて、睡眠中に於て、夢に親愛の聚集合會するを見、覺めて還別離するが如し。若し是の凡人にして方便を解せず、心に苦惱を生ぜば、こはこれ無識愚癡の衆生なり。若し智有る人は、能く自ら、親愛の合會も、猶ほ路を行くに、道上にて伴を結び、相與共に行き、近遠に隨逐して、所至の處に到り、各、散じて本に還るが如しと思惟す。是の事を以ての故に、親愛眷屬の聚集に離有ること、何ぞ愁惱すべけん。又、前世の時に、曾て眷屬と爲りしが、捨て已りて此に來り、此處の眷屬を捨てて後世に至り、後世に捨て已りて復後世に至らん。是の如く展轉して、更互に相捨つ。此の諸の眷屬の愛戀の心は、何處より來り、去りて何處にか至る。凡そ世間の人、初受胎より一切處に至りて、是の如く念念刹那の時間に、悉く皆、死命鬼の逐ふ有り。此の如くば、何れかこれ時なる、非時なる。而も今、乃ち我に語らく、「我が子、卽ち今、山に入りて求道するの時に非ず」と。[二]何ぞ況んや、家に在りて五欲を受くるの時に、若し我に時と非時とを問ふべくば、今當に之を略すべし、所以は何

【二】何況在家受五欲時、若當問我、時非時者、今當略之。前後の文體より見るに、厭離の心を起して求道の途に向ふ我に對して、時に非ずといはゞ、況んや五欲を受けつゝある時は勿論時にあらざる事となる。そは論ずるを待たず。而も念死命鬼に逐はるゝ人間には、時と非時との區別なしといふにあり。

ぞ。彼の死命鬼は、一切時に諸の衆生を攝して、攝せざる時なし。是の故に、我は今、彼の生老病死を離るることを欲求す。是の如きを以ての故に、時と非時と無し』。菩薩、復、言はく、『[三]若し我が父、子を喚んで、「但、來れ。我、必ず子に灌頂王位を與ふべし」といふべくんば、我が父、必ず大弘願の心有り、是の如き難事を、易く能く我に與ふるに、惜むべし、道に於て我をして修せざらしむ。但、我、此の王位を受くるを欲せず。親愛の繫縛は解脱の道に非ず。譬へば、患人の美食を思はざるが如し。云何ぞ智人は、是の世の樂を貪らん。其れ智想なき愚癡の身――[四]大に苦惱有り――なるが故に乃ち能く此の王位を受くるのみ。既に王位に居て放逸自在に、酒色に耽荒して捨離する能はずんば、譬へば金屋の猛火に熾然ゆるが如く、譬へば美漿に諸の毒藥を和するが如く、譬へば花沼に蛟龍の有るが如く、是の如く是の如く、王位の快樂や、意の娛樂する所、諸患隨逐するを覺らず知らざるなり。是の因緣を以て、我今樂まず。亦、是れ法に非ず』。而して偈を說いて言はく、

『譬へば金屋の火の熾盛なるが如く　食の甘美なるに毒藥の和するが如く
滿池の花に蛟龍有るが如く　王位の樂を受けば、後に大に苦しむ』

爾の時、菩薩、是の偈を說き已りて、復是の言を作したまはく、『是の如きを以ての故に、往昔の諸王は、王位を得已るや、年少の時治化受樂し、後、老年に至りて五欲を厭離し、宮殿を棄捨して、便ち山林に入りき。凡そ人は、寧ろ當に山林に在りて草を食して活命すべし、宮殿に居て五欲の樂を受けざれ。黑蛇を養ふが如く、後に其の殃を受けん。初、樂を受くる時、患害を知らざるも、後時に瞋發するや、遂に便ち人を螫す。寧ろ居家を捨てて、山林に入れ。山林を捨てて、還た家居に入ることなかれ。何を以ての故に。先聖の譏嫌する所爲るが故に。我今既に善家に生るるを得たり、應に善法を修すべし、癡人の如く不善法を行じ、自縱恣心なる莫らん。既に鬚髮を剃りて袈裟

【三】若當我父、喚子但來、我必典子、灌頂王位、我父必有大弘願心。如是難事、易能與我。――父王が我に王位を與ふべしと言ふは、父王の心に大願あるが爲に、捨てがたき位を退きたまふものなれば、その慈心には大に感動す。而も修道に及ばざるは惜しむべしといふなり。

【四】大有苦惱。句に顚倒あるを以て、そのまゝにては解し難し。王位に、大に苦惱ある事を知らざる愚癡の身なるが故に、之を受くといふなり。

衣を著す、山林に止住して修道學問せん。而して彼れ、後に於て袈裟衣を捨てて慚愧を懐かずば、是を無羞愚癡の人と名づく。或は貪の爲の故に、或は瞋の爲の故に、或は癡の爲の故に、或は他を畏るるが爲に、是の如く反退するなり。我、今、天帝釋の宮を羨まず、況んや復、還りて自己の宅に入らんと欲せんや。譬へば人有り、已に美食を得、食し訖りて已後、此の食を吐變し、之を地に棄つるが如し、復還、喫せんと欲するも、得べしや以不や。是の如く、是の如し。若し人、彼の五欲を捨てて出家しつつ、或は諸の緣の爲に、還りて家に入らんと欲するも、亦復是の如し。譬へば人有り、已に火宅を離れしが、還入り來らんと欲するが如く、是の如く、是の如し。已に俗の患を見、白衣の形を捨てて入山修道せるが、迴還するも亦爾り』。而して偈を說いて言はく、

『人火宅を捨てて走り　後時に忽ち復更に迴還するが如く
既に俗の患を見て離れて出家しつつ　林より反歸せんことも亦是の如し。』

爾の時、菩薩、此の偈を說き已り、二使に告げて言はく『汝等、前に父王の所說を稱しぬ、「往昔、諸王、家に在りて法を修し、解脫を得たり」とは、此の事、然らず。何を以ての故に、此の二事、因緣相乖き、甚だ大いに懸遠すればなり。所以は何ぞ。解脫を求むる人は、其の心、寂定にして、微妙の處に、即ち居停するを得。若し宮中に在れば五欲情蕩す、外に出でて民を治めば、須らく鞭捶を行じて、罪罰を瞋責すべし。是の心中に於て解脫を求むること、是の處有ること無けん。若し人、意に無爲寂定を樂はば、彼は則ち世間の王位を貪らず。設ひ位に在らん時も、應に須らく捨離すべし。若し王位を樂はば、其の人の心意、寂靜なる能はず。若しは寂定を樂ふと、復、世務を貪ると、此の二相乖き、天地懸遠す。譬へば水火の共に居るを得ざるが如く、是の如く是の如し。解脫の法を求めて、復、五欲に著すること、終に是の處無し。是の故に、我今決定して知る、彼の往昔の諸王、王位を捨て已りて、然る後、乃ち寂定の法を得たるを。若し王位に居て教化する

の時や、其の知未だ成らず、且らく、心を用ひて民を治理することを學ぶのみ、必ずしも專らに解脫の法を求めざるなり。其の事然りと雖も、彼等諸王は、各其の意に隨ひ、或は解脫を求め、或は五欲を受けぬ。我は今然らず。彼等を學ばず、亦復曾て此の如き心を發さず。我今已に、家に住するの欲鎖を斷じ、解脫を得んとして、復、世間の五欲に貪著せず、豈に家に還るを得んや』と。

時に二使人、菩薩の是の如き等の無染著を說ける言と、專正決定至眞の語とを聞き、更に復、詳らかに共に菩薩に白して言さく『大聖王子、今、無上の法を求めんと誓願するは、此はこれ眞實にして、道理無きに非ざるも、但、此の如くに行ずるは、今、未だ是れ時ならず。所以は何ぞ。聖子の父王、今、是の如き憂愁苦惱を受く。是の故に聖子、此の心に違背するは、これ正法に非ず』とて、偈を說きて言はく、

『今法藏を求むるは實にこれ利なり　正理有りと雖も未だ時に合はず
父王愁毒して心を切割す　孝德既に乖く、これ何の道ぞや』

爾の時、二使、此の偈を說き已り、重ねて聖子に白して、是の如き言を作さく、『大聖王子、我が見る所の如くんば、此の意は、これ法行を細觀するに非ず。世の財利及以び五欲に於て、巧方便に非ず。所以は何ぞ。聖子は今、未だ曾て因を見ざるに、云何ぞ果を求むる。現に果報を得つつ、便ち捨背して、云何ぞ方に未來を求む。大聖王子、凡そ、是の世間一切の書典は、各各皆自ら悉檀[五](siddhānta)有り。[六](1)「或は人有りて「未來世有り」と言ひ、或は人有りて「未來世無し」と言ふ。」(3)「然も此の義の中、人多く疑ふ有り。」(5)「是の故に聖子、果報を得たるを以て、現在に且らく受けよ。若し來世無くんば、何ぞ須らく精勤して、彼の解脫を求むべけんや。」(2)「復、人有りて言はく、『決定して世間に善有り惡有りて、未來世に受く』と。」是の義を以ての故に、精勤修行して解脫道を求むる、是を名づけて癡と爲す。若し諸根をして、決定して破壞せしめば、親愛は別離し、怨憎

【五】悉檀、成就と譯す。宗要の意。
【六】この一段は、主として無因自然外道の說を擧げたるものなり。中に、來世あり善惡ありの思想を交へて、意義の通徹を欠く。或は錯亂あらん。若し(一)(二)(三)(四)(五)の順序を追うて讀む時は、無因自然說の主張を明了ならしむるを得べし。

は聚會し、境界相合して自然に生老病死を捨離せん。何ぞ假にも、勤動の方便を作すべけんや。(4)「當に知るべし、此の義に實有ること無し。」又、胎に在るの時、手足胸背、腹肚髮爪、諸節支脈は、自然にして成ず。或は復、人有り、身を成ずるを得已り、還復破壞す。或は人有りて言はく、「既に破壞し已りて、還た自然に成ず」と。故に先典中に是の如き語有り、「棘針の頭の尖なるは、これ誰か磨造せる。鳥獸の色の雜なるは、これ誰か之を畫ける。此の義は自然にして、人の所作無し。亦復、得んと欲して、卽ち成すべからず。世間の諸物、心に隨ひて卽ち廻轉せしむるを得ず」と。而して偈有りて說かく、

『棘刺の頭の尖れるはこれ誰か磨ける　鳥獸の雜色は復誰か畫ける
各其業に隨ひて展轉して變ず　世間に造作の人有ること無し

[七]復、人有りて言はく、「世間の作者は、一切皆、自在天(Maheśvara)に由りて作らる。若し自然ならば、人、亦、何ぞ勤動して業を作すを須ひん。是れ流轉に因りて自ら來り、其の去る時に及び、還これ彼は流轉に因りて自ら去らざる可けんや」。[八]復、人有りて言はく、「分別を以ての故に、則ち我相生ず。故に有を受く。有の盡くるも亦然り。若し有を受くるの時、勤求を假らずして自然に受けば、若し有の盡くる時も自然にして盡き、亦、滅するを假らざらん」と。復、人有りて言ふ、「世間に人身を受けんと欲する時、其の父、他人の債を負はずば則便ち生るるを得ん。天に生れ、仙に生るるも、一切悉く然り。若し此の三處に、債負はざれば、此の人、勤動もて求むるを用ひず、自然にして彼處に解脫を得」と。是の如く次第に、諸經典中の各の悉檀に、自ら是の如く、各解脫を得るを說く。それ智有る人、精勤して勝處を求めんと欲する時、必ず其の心を損す。是の故に、我知る。聖子、若し解脫を求めんと欲せば、理に依り法に依りて、應に是の如く、解脫の路を求むること、古の書典、悉檀の所說の如くなるべし。若し是の如くせば、必定して常に得べきこと、

【七】こゝは大自在天外道の說を擧ぐ。前の無因自然說に對して、一切を自在天に歸せしむる一因思想なり。
【八】分別による我相の對立より、一切の有を導き來るこの思想は、佛教の唯識說に近し。

疑有ること無けん。聖子、慈父淨飯大王が、聖子の爲の故に、愛心の苦を受くるを、當に除愈するを得べし。聖子、今や宮に還るの時なり、意中に、若しは宮殿の患厭を見たまはんも、此事、亦復思惟すべからず。何を以ての故に。昔、諸王仙、家を棄捨し已りて山林の中に至り、後還迴りて自家の宮中に向へり。彼の王と言ふは、各名號有り。所謂、菴婆梨沙王(Ambarisa)(隋に虛空裔といふ。)は、家を捨離し已りて山林中に在るや、諸臣百官、開諫曉喩し、左右前後を圍遶して還れり。その羅摩王(隋に能喜といふ。)は、既に大地が、諸惡人に毀敗せられ、各相奪ひ、迭ひに相殺害するを見、心に看るに忍びずして、山より出で來り、如法に擁護せり。又復往昔、毘耶離城に一大王有り、徒盧摩(Druma)(隋に樹といふ。)と名く。亦山林中より下りて本國に來り、世間を護持せり。往昔、又、一梵仙王有り。婆枳(居波の反。)梨低(隋に離言といふ。)、又羅枳提婆王(隋に喜天といふ。)、達摩耶舍王(隋に法稱といふ。)と名く。諸の是の如き等の梵仙諸王、無量無邊、各山林を捨てて、本宮に還來し、大地を綏撫せり。是の故に聖子、此の往昔諸王の本事を聞きて、今、若し宮に還らば、患苦有ること無けん」と。而して偈を說きて言はく、

『是の如き名稱ある諸王等　各綵女を捨てて山林に入り
後並びに山を棄てて本宮に還りぬ　聖子今迴るも何の過か有らん』

爾の時、菩薩、彼の二使の是の如き語を聞き已り、彼の大臣、并びに及び國師婆羅門に告げて言はく、「有無の義、疑と不疑とは、我、自ら知るのみ。但、此の二義、所有の眞理の、隱なると顯なると、我これを忍受す。それ傳聞には、既に因緣無し。何に因りてか信ずべき。若し、智有るの人は、應に、他の虛說に依りて行ぜざるべし。猶、盲人の道路を行かんと欲するが如し。既に導者無ければ眞實を見ず。云何ぞ行くを得ん。心に自ら、若しくは善と非善とを決せざれば、彼の盲癡人は、假令、淨法をも、心に不淨と見ん。無智なるを以ての故なり。我、今、寧ろ精進の心を發さん。

未だ果報に甘從するを得ずして、長く苦惱を受くと雖も、實に五欲の淤泥に在りて迷沒沈溺し、諸聖の譏訶する所と爲りて、暫くも快樂を受くるに忍びず。又、汝等言ふ、『往昔已來、虛空箭王及び能作喜は、並びに山林より還りて家に入れり』と。彼等諸王を、我は取りて解脫法中に於て用つて證明と爲さず。何を以ての故に。(八)彼等諸王は、其の學ぶ所、神通を盡せるを以ての故に、別に更に苦行の法有ること無し。是の故に、彼等は迴反して宮に還れり。汝等、今、是の心を作す莫れ。我は當に誓を立つべし、「假使、日月、地に墮落し、此の雪山の王、本所を移離するも、我、若し未だ正法の寶を得ずんば、世事を貪るの故にして、凡夫の身を以て還りて本宮に入らんこと、是の處有ること無けん。我今、寧ろ、熾盛猛炎なる大熱火坑に入るも、自利を得ずして還りて宮に入らんこと、是の處有ること無けん」と。』

爾の時、菩薩、此の誓を作し已り、座より起ちて、此の林を捨棄し、彼の二人に背きて、獨自に行く。時に彼の二使、菩薩の是の如き言を聞き已り、復、決定して諸親族を捨てて、是の如き願を發せるを見、必ず迴らざるを知りて、身を擧げて自ら撲ち、地より起ち、流涙滿面、大聲に哭し、菩薩に隨ひて行き、菩薩に近づかんと欲す。是の時、菩薩、威德甚だ大にして、彼等二人は逼るを得る能はず。猶、日光の彼等の目に耀くが如くにて、菩薩の身を覩見する能はず。爾の時、使人、復更に重ねて、菩薩に是の言を諮る、『唯、願はくは聖子、是の如き剛鞕の志意を作す莫れ。願はくは、我等が戀慕の心を定めたまへ。我等の愛心、既に未だ除斷せず。聖子を棄捨して去るに忍びず』。彼等二人、菩薩を愛するが故に、兼ねて復重意もて淨飯王に向ふ。是の因緣を以て菩薩の後に隨ひ、東西に行き、或は住し、或は看、或は行き、或は走る。時に彼の二人、更に復別に四人に敎ふ、『身を隱して菩薩の後に隨ひ左右に行け、汝等人輩、聖子に離るること莫く、何處に到るかを看よ』と。是の如く敎へ已る。是に彼の二人、心中に愁毒し、大苦惱を受けて啼哭叫喚し、各相問うて言ふ、

【八】其所學盡神通。彼等諸王は、その學んで得たる神通は既に盡きて、而もその上更に苦修練行せんとの意なし。故に退轉せるなり。

『我等今、云何ぞ城に至つて、大王の面に見えん。大王の心情や、聖子の爲の故に大いに苦惱を受く、我等が此の言、云何ぞ奏するを得ん。若し王の邊に至らば、復何の語を作してか、能く王の心を解かん』と。而して偈有りて說かく、

『彼等二使は聖子の　決定して還りて自宮に至らざるを知り
別に四人を遣はし後を逐ひて行かしむ　自ら廻りて王を見云何が說かん』

問阿羅邏品第二十六の上

爾の時、菩薩、其の父王の大臣、使人、幷びに及び國師婆羅門を捨てたる時、兩り俱に流涙す。既に分別し已りて、漸漸に前行し、安庠として毘舍離城に向ひ、未だ彼の城に至らず、其の中路に、一仙人修道の所有り。名は阿羅邏（Āraḍa）、姓は迦藍（Kālāma）氏なり。時に彼の仙人に一弟子有り、遙に菩薩の向ひて已に來れるを見、見已りて大希有の心を生ず。生れてより未だ曾て斯かる事を覩見せず。見已りて、速に疾く走りて、其の師の所坐の處に向ひ、至り已りて、彼の諸の同學等、摩那婆（mānava 儒童）の邊に向ひ、大聲に彼等の姓名を唱喚し、各各自ら、仁者跋伽婆（Bhārgava?）、仁者寶多羅摩、仁者設摩（Śarman）と言ひ、諸の是の如きの類の摩那婆等に、皆、悉く告げて言はく、『汝等、今各心に喜歡すべし。應に祭祀の法を捨離すべし。今、此處に、遠方の客、大德の仁有りて來る。應に迎接すべし。然も、此の仁は、已に能く諸結煩惱を厭離して、最上至眞の解脫を求めんと欲す。即ちこれ釋主淨飯王の子なり。諸相端嚴にして猶金柱の如く、身光明曜、巍巍堂堂たり。脩臂下垂して手は膝を過ぎ、足趺は下に千輻輪を躡み、行步安庠として牛王を視るが如く、圓光の威德は、猶、日輪の如し。身は、黃金のごとく、袈裟服を衣、我等の福利、最上の尊たり。漸漸に自ら來りて我等の邊に向ふ。我等、今應に須らく具を辦じ、力の所有に隨ひて

供養承事し、虧少せしむる勿く、恭敬尊重して頂戴奉迎すべし』。

爾の時、彼の摩那婆、即ち偈頌を以て菩薩を歎じて言はく、

『安庠善巧能く行歩し　顧眄猶大牛王の如く
衆相滿足して身を莊嚴し　一切の諸毛皆上に靡く
足下の圓林は千輻を具し　眉間に宛轉する妙白毫
脩臂洪直にして自在に垂る　此はこれ人中の大師子なり』

爾の時、彼の摩那婆、口に此の偈を説いて菩薩を歎じ已り、重ねて彼の諸摩那婆に告げて言はく、『汝等、一切の諸摩那婆よ、共に相隨ひて師の所に向ひ、此事を諮白すべし』。是の時、彼の諸摩那婆等、即便ち相隨ひて其の師阿羅邏の邊に往詣し、到り已りて、師に、前の如き等の事を委具諮白して、言語既に訖る。

爾の時、菩薩、安庠として行き、忽然として阿羅邏の邊に來至す。其の阿羅邏仙人、遙に菩薩の近づき來るを見、見已りて、覺えず大聲もて告げて言はく、『善來、聖子』と。菩薩、前みて阿羅邏の所に至り、二人對面し、相共に、少病少惱なりや、安隱なりや已不やを問訊し、相慰問し訖りて、其の阿羅邏、菩薩を請じて、草鋪の上に坐せしむ。而して偈有りて説かく、

『二人相見て大いに喜歡し　各各少病惱なりやを問訊し
相對語言して時未だ幾ならず　淸淨の草座を即便ち鋪く』

爾の時、菩薩、草鋪に坐し已るや、其の阿羅邏、諦心もて菩薩の身を觀察し、上下を觀じ已りて、大歡喜、希有の事を生じ、即ち菩薩に對して、美音辭を以て往來談説し、菩薩を稱讚して是の如き言を作す、『仁者瞿曇、我久しく、仁者丈夫が、能く王位を捨てて、踰城出家し、親愛染穢の羈網を割絶すること、譬へば大象の牢鐵鏁、或は靭皮繩を斷じ、頓絶しての後に、自在に走出して、心の

行く所に隨ふが如きを承聞す。是の如く是の如し。仁者、今日、乃ち能く猛心もて、宮を捨てて山に入り、一切處に於て知足少欲にして、大いに智慧有り。仁者瞿曇、既に是の如き希有の事、世間の富貴、果報功能を得、得已りて能く棄て、山林に剃落す。此、實に辦じ難し。往昔、諸王は、王位を得、果報具足して備に五欲を受け、年老の時に至りて、世子を喚び、王位を付囑して、灌頂して王と爲し、後に方に宮內を捨てて出で、山林に至りて、行じて道を求めたりと雖も、彼は難しと爲さず、亦希有にも非ず。我が見る所の如くんば、仁は今、年少、五欲を受けずして是の富貴功德の事を捨て、能く心を辦じ、此に來りて道を求め、既に是の如き不可思議大聖の王位、最勝の境界を得たり。正に盛年の時、能く心意を斂めて、諸欲に著せず、解脫を志求して、縛著を被らず、諸根境界の染する所と爲らず、能く中に一切の諸患有るを知りて、諸有に纏遶せられざるなり。何を以ての故に。往昔、王有り、名づけて頂生（Māndhātṛ）といふ。彼の王、已に四天下を統ぶるを得るも、猶足るを知らず、騰上して彼の三十三天に至り、帝釋の半坐を得て坐し、其の內心、足るを知らざるを以ての故に、五欲の境界を、即便ち失盡して、地に墮落せり。復一王有り、那睺沙（Nahuṣa）と名づく。亦、四天下を王として領するを得、還復、上りて三十三天に至り、諸天を治化して猶尚足らず、亦、王位を失ひて、地に墮落せり。諸の是の如き類、羅摩王（Rāma）、陀盧呼彌王、阿沙羅吒迦王等の、又多くの諸轉輪聖王有り。王位を得て足るを知らざるを以ての故に、皆、境界を失ひ、富貴王位を、悉く皆滅盡す。世間に人の、境界を得已りて心に足るを知る者無きこと、猶、大火の薪を得て熾盛なるが如し』。其の阿羅邏、是の語を作し已るや、菩薩、報じて言はく、『仁者、大仙、我、世間の是の如き相を見已り、復、一切は、猶、芭蕉の心內牢ならず、後に還破壞するが如きを觀、境界を得ては足るを知らざるを恐るるを以て、自利を求めずして欲事を厭離す。我、是を知り已り、正路を尋求して處處に遊行すること、猶、人有りて、曠野を行き、伴を失ひて路に

迷ひ、心、諸方に惑ふのみみて、導師を得ず、導を求むるを以ての故に、處處に遊行するが如し。今、我も亦然り』。爾の時、菩薩、是の語を作し已れる時、阿羅邏、更に復菩薩に諮白して言さく、『仁者、瞿曇、我久しく大士の心相を見るに、仁、解脱に於て大器と作るに堪へん』。

爾の時、衆中に一摩那婆有り、これ阿羅邏仙人の弟子なり。合掌して師に白し、菩薩を歎じて是の如き言を作す、『希有なり此の人、思議すべからず、能く此の心を辦ぜざることや。往昔の諸王は、年少の時、宮内に坐して當に五欲を受け、後に年を得て頭白の老時に、各、太子を喚んで王位を付囑し、灌頂して王と爲し、後、捨家して山林に入り、行を行じ道を修めて、王仙たるを得たり。此は然らず。盛年少壯、正にこれ快意して、五欲を受くるの時、少病少惱にして氣力充足し、頭髮烏黑に、身體柔軟、勇猛具足して乏少する所無く、父王の年は老いたるに、王位を貪らずして世間を厭離し、果報を貪らずして、能く出家して、山に入りて道を求むることよ』と。

時に阿羅邏、菩薩に白して言ふ、『仁者、發心して何事をか求めんと欲し、何の道をか辦へんと欲して、乃ち能く發心して、此處に來れる』。菩薩、報じて言はく、『尊者大師、我、此の世間の衆生を見るに、生老病死の爲に纏縛せられて、自ら出づる能はざるを以て、今、是の如き精勤の心を發せり』。時に阿羅邏、復、此の言を作す、『仁者瞿曇、乃ち能く是の如き慧眼を生じ・是の如き想を發す。此の義眞實なり、所以は何に』とて、偈を說きて言はく、

『一切法の勝は唯行ずるあるのみ　清淨寂定にして不過なる心を
恩愛に染著するは最怨家たり　諸有の恐怖はこれ老死なり』

爾の時、阿藍、是の語を說き已る。而して彼の衆に、一摩那婆有り、これ阿羅邏仙人の弟子なり。菩薩に白して言さく、『仁者、今、親愛眷屬を捨てて、背きて此に來れるは、何の心意有りてか』と。菩薩、報じて言はく、『世界の有らゆる集聚合會には、決して別離有り。我、是の如く知るが故に、

此の意を發し、至眞を求めんと欲す』。時に阿羅邏仙人、重ねて更に菩薩に白して言さく、『仁者、今已に解脱を得たり。所以は何に。衆生の沒する所の此の泥は渡り難く、世間を縛する所は此れは牢强の繩なるに、仁者、已に能く獨り此の心を辦じたり。我、當に此の解脱の法門を說くべし。所謂、愛心をば、仁、須らく遠離すべし。愛心と言ふは、これ世間中の大惡蛟龍なり、心水の內に居止停住して一切の利を失ふ。是の如くたるを以ての故に、我今、世間の人を觀知するに、これ正行に非ず。その能く正行の法を取るは、唯、智有る人のみ。愛染を遠離して應に須らく發心し、有相を見るを斷じて無相を作すべし』。菩薩、答へて言はく、『大仙尊者、我是の語を受けて尊の言ふ所の如くせん』。阿羅邏仙、復、菩薩に問ふらく、『仁、云何が受くる』。菩薩、報じて言はく、『世間の人、相を作すを以て縛せらる。其の相縛とは、凡そ是れ、父母の子を生みて養育するは、家を立てんが爲の故なり。兒息を養育せば、能く增長して我が家を成就すること有り。是の因緣を以ての故に、父母は子を養ふ。若し因緣無ければ、自許の眷屬も、猶親近せず。況んや復、他人をや。凡そ親近の人は、利を貪求するが故に、人に昵むも、終に覓むる處なけん』。阿羅邏仙、復更に讚じて言さく、『善い哉、仁者、今已に世間の諸法を知る、瞿曇沙門、乃ち爾く明かに、一切の諸智を證す』。

時に彼の衆に一摩那婆有り、亦これ阿羅邏仙人の弟子なり。菩薩に白して言さく、『仁者瞿曇、仁は今已にこの最上の樂を得たり。何を以ての故に。能く漸く一切の愛相を離れ、卽ち世間の諸無惱の法を得たればなり。所以は何ぞ。我、世間を見るに、人の、能く婦兒を怜まず、財物を求めず、兩手を擧げて世間を哭せざるもの有ること少し。人の、少欲ならざるを以て、厭足を知らず、資財を愛惜し、常に貪心を起して世利に染著し、家家盡く皆、手を擧げて大哭する有るを見ること多し』。而して偈を說いて言はく、

『世間に知足の人を見ること罕なり　少欲にして求むる無ければ苦を受けず

有らゆる恩愛に哭泣する者は　　多くこれ貪著して資財を聚む』

時に阿羅邏、菩薩に白して言さく、『希有なるかな、仁者瞿曇、是の如き廣大の智慧や。是故に仁、今是の勇猛を辦じ、諸根を制伏し、諸の欲染を増長せしめず、牽く所と爲る勿れ』。是の時、菩薩、尊者阿羅邏に問うて言はく、『大仙尊者、諸根は何の故に是の如く不定なる。降伏せんと欲せば、方便は云何。唯、願はくは尊者、我が爲めに解說せよ』。其の阿羅邏仙人、報じて言さく、『沙門大士、凡そ人の世に在るや、生を厭離せんと欲せば、我今當に大士の爲に、方便の相を略說すべし、大士諦かに聽け』。而して偈有りて說かく、

『大尊仙人阿羅邏　　菩薩の神智心を發遣せんと
　自己の論の悉檀中に於て　　分別要略して宣說す』

『瞿曇大士、凡そ諸根の體相及び根境界を除かんと欲せば、應に須らく是の如く思量分別すべし。何を以ての故に。是の諸根等は、一切の境界を旣に分別して知る。悉く須らく損捨すべし。乃至、諸根境界の内に諸の愛染有り。彼の愛の染する所、卽ち能く著せしむ。此の著を以ての故に、卽ち衆生をして世間に沈沒して、出づるを得る能はざらしむ。諸凡夫人が、貪愛繫縛等の苦を受くるは、一切皆境界に由るが故に、是の如き等の事を得るなり。大士、當に知るべし、何の因緣にて爾るかを』と。而して偈を說きて言はく、

『山羊の殺さるるは聲を作すに因り　　飛蛾の燈に投ずるは火色に由り
　水魚の鉤に懸るは餌を呑むが爲にして　　世人の死に趣くは境に牽かるるを以てなり』

爾の時、菩薩、此の偈を聞き已り、復、更に問うて言はく、『尊者、今、諸根を調伏する方便相貌を說けり。因緣と共に生じて、體性虛空に、誑惑無實たること、猶火坑の如く、猶夢幻の如く、草上の露の如し。我、今、心想もて以て是の如く知る』。時に阿羅邏仙人、復、菩薩大士に問ふ、『仁、

此の意を發し、至眞を求めんと欲す』。時に阿羅邏仙人、重ねて更に菩薩に白して言さく、『仁者、今已に解脱を得たり。所以は何に。衆生の沒する所の此の泥は渡り難く、世間を縛する所は此れは牢强の繩なるに、仁者、已に能く獨り此の心を辨じたり。我、當に此の解脱の法門を說くべし。所謂、愛心をば、仁、須らく遠離すべし。愛心と言ふは、これ世間中の大惡蚖龍なり、心水の內に居止停住して一切の利を失ふ。是の如くたるを以ての故に、我今、世間の人を觀知するに、これ正行に非ず。その能く正行の法を取るは、唯、智有る人のみ。愛染を遠離して應に須らく發心し、有相を見るを斷じて無相を作すべし』。菩薩、答へて言はく、『大仙尊者、我是の語を受けて尊の言ふ所の如くせん』。阿羅邏仙、復、菩薩に問ふらく、『仁、云何が受くる』。菩薩、報じて言はく、『世間の人、相を作すを以て縛せらる。其の相縛とは、凡そ是れ、父母の子を生みて養育するは、家を立てんが爲の故なり。兒息を養育せば、能く增長して我が家を成就すること有り。是の因緣を以ての故に、父母は子を養ふ。若し因緣無ければ、自許の眷屬も、猶親近せず。況んや復、他人をや。凡そ親近の人は、利を貪求するが故に、人に眤むも、終に覓むる處なけん』。阿羅邏仙、復更に讚じて言さく、『善い哉、仁者、今已に世間の諸法を知る、瞿曇沙門、乃ち爾く明かに、一切の諸智を證す』。

時に彼の衆に一摩那婆有り、亦これ阿羅邏仙人の弟子なり。菩薩に白して言さく、『仁者瞿曇、仁は今已にこの最上の樂を得たり。何を以ての故に。能く漸く一切の愛相を離れ、卽ち世間の諸無惱の法を得たればなり。所以は何ぞ。我、世間を見るに、人の、能く婦兒を怜れまず、財物を求めず、兩手を擧げて世間を哭せざるもの有ること少し。人の、少欲ならざるを以て、厭足を知らず、資財を愛惜し、常に貪心を起して世利に染著し、家家盡く皆、手を擧げて大哭する有るを見ること多し』。而して偈を說いて言はく、

『世間に知足の人を見ること罕たり　少欲にして求むる無ければ苦を受けず

有らゆる恩愛に哭泣する者は　　多くこれ貪著して資財を聚む』

時に阿羅邏、菩薩に白して言さく、『希有なるかな、仁者瞿曇、是の如き廣大の智慧や。是故に仁、今是の勇猛を辦じ、諸根を制伏し、諸の欲染を增長せしめず、牽く所と爲る勿れ』。是の時、菩薩、尊者阿羅邏に問うて言はく、『大仙尊者、諸根は何の故に是の如く不定なる。降伏せんと欲せば、方便は云何。唯、願はくは尊者、我が爲めに解說せよ』。其の阿羅邏仙人、報じて言さく、『沙門大士、凡そ人の世に在るや、生を厭離せんと欲せば、我今當に大士の爲に、方便の相を略說すべし、大士諦かに聽け』。而して偈有りて說かく、

『大尊仙人阿羅邏　　菩薩の神智心を發遣せんと
自己の論の悉檀中に於て　　分別要略して宣說す』

『瞿曇大士、凡そ諸根の體相及び根境界を除かんと欲せば、應に須らく是の如く思量分別すべし。何を以ての故に。是の諸根等は、一切の境界を旣に分別して知る。悉く須らく損捨すべし。乃至、諸根境界の內に諸の愛染有り。彼の愛の染する所、卽ち能く著せしむ。此の著を以ての故に、卽ち衆生をして世間に沈沒して、出づるを得る能はざらしむ。諸凡夫人が、貪愛繫縛等の苦を受くるは、一切皆境界に由るが故に、是の如き等の事を得るなり。大士、當に知るべし、何の因緣にて爾るかを』と。而して偈を說きて言はく、

『山羊の殺さるるは聲を作すに因り　　飛蛾の燈に投ずるは火色に由り
水魚の鉤に懸るは餌を吞むが爲にして　　世人の死に趣くは境に牽かるるを以てなり』

爾の時、菩薩、此の偈を聞き已り、復、更に問うて言はく、『尊者、今、諸根を調伏する方便相貌を說けり。因緣と共に生じて、體性虛空に、誑惑無實たること、猶火坑の如く、猶夢幻の如く、草上の露の如し。我、今、心想もて以て是の如く知る』。時に阿羅邏仙人、復、菩薩大士に問ふ、『仁、

何の故に、諸境界の内に利益の想無しと言ふか』。菩薩、報じて言はく、『凡そ、人の諸の境界に依りて住して果報を受けんと欲すること、猶、人有りて屋舍を造立し、日光を蔽ひ、或は風雨を避けんと欲するが如く、人の渇を以ての故に水を求むるが如く、又、人の飢うるが故に食を求覓むるが如く、人の垢穢なるが故に身を洗浴せんと欲するが如く、人の露形なるが故に衣を求めて體を覆ふが如く、人の困乏するが故に乘騎を求め、寒を除くを得んと欲するが故に暖を求め、熱を除くを得んと欲するが故に凉を求め、疲勞を去らんと欲するが故に床鋪に坐する如し。是の如き等の事、諸の求むる所は、皆、苦の來りて身に逼るが爲の故に、所以に推求すること、猶、病める人の患重きが爲の故に、方に良醫を覓むるが如し。世間の人、一切悉く皆是の如く悕望す』。

時に阿羅邏、讃じて言さく、『瞿曇、希有なり、此の心。大德、云何ぞ世間中に、能く是の如く速疾に、卽ち無常の想を生ずるを作せしか。希有なり、希有なり。能く眞實を見たり。大德は利根聰敏にして悟り易し。若し能く是の如く明了に見るを、是を眞見と名く。若し異りて見るを、これを誑惑と名く。仁の言はるゝ如く、飢の爲に食を求め、風雨を避藏して、此の寒熱暫らく奪ひ易きを以ての故に、世間の人心、卽ち樂想を生ずるなり』。又復、歎じて言さく、『仁者瞿曇は、眞にこれ法橋なり、大器を任持せん。我、先づ弟子の法を受くるに堪ふるや不やを觀じ、若し能く受くるに堪へば、然る後に、爲に種種の諸論を說くを、傳聞すと雖も、我が見る所の如くんば、仁者、今日、卽ち復然らず。俯仰云爲、深く進止を得て、觀を須ゐるを假らず。我が論の中に眞實の義有るが如きは、盡く仁の爲めに說かん』。

爾の時、菩薩、阿羅邏仙の是の如く語るを聞き已り、大歡喜を生じ、重ねて問うて言はく、『尊者大仙、今日、未だ我の孝心を知らずして忽ち我が爲めに是の如き妙說を作す。我是の相を知りて、未だ卽ち益せずと雖も、今已に利を得たり。所以は何ぞ。譬へば人有り、色を見んと欲して光明を

得たるが如し、人、遠く行かんに須らく善導を得べきが如し、彼岸に渡らんに須らく船師を得べきが如し。尊者今日、我心を顯示すること、亦復是の如し。唯願はくは尊者、更に我が爲に尊者の知る所を說け。云何が生老病死を度脱せんかを』。

卷の第二十二

問阿羅邏品第二十六の下

爾の時、尊者阿羅邏仙人、善く菩薩の心に至德有るを知り、更に己が論の決定悉檀を述べんとて、偈を說いて言さく、

『瞿曇沙門善く諦かに聽け　我が論中に說ける總悉檀は
如今煩惱の中に在りと雖も　如後自然に還つて解脫す』

爾の時、阿羅邏、是の偈を說き已り、是の如き言を作す、[一]『凡そ衆生は、此に二義有り。一には本性(prakṛiti)、二には變化(vikāra)なり。此の二種を合して總じて衆生(sattva)と名く。本性と言ふは、卽ちこれ五大(pañca-bhūtāni)なり。此の五大とは、所謂、地・水・火・風・空なり。我(ātma or puruṣa) 及び無相(prakṛiti or animitta)を本體性と名く。變化と言ふは、諸根(indriyāni) と、境界(viṣyāni)と、手(pāṇi)・足(pada)・語言(vāc)・動轉(pāyu)・來去(upastha)と、及以び心識(manas)と、此を變化と名く。若し是の如き諸境界を知るを、知境界(kṣetrajñā)と名く。能く彼の諸境界を知ると言ふは、これ、我、能く知るなり。我を思惟するは、これ智人の說なり』而して偈を說いて言はく、

『若し能く諸根塵を識る有らば　是を善く彼の境界を知ると名く
一切の境界を知ると言ふは　智慧人の說を思惟して知るなり』

爾の時、阿羅邏、是の如き言を作す、『我を思惟するは、其の人卽ちこれ、迦毘羅仙[二](Kapila)、及び其の弟子、以て、自ら此の意の境界を度量せり。波闍波提[三](Prajāpati)仙人の子、名けて深意といふ。所見亦然り。人の數數生老病死して諸の苦毒を受くるが如きを、深く諦かに知り已りて

【一】 阿羅邏仙人の所說は、數論の二十五諦說なり。我(Puruṣa)及無相(Prakṛti)といふは、根本の二大原理なり。諸根といふは、眼・耳・鼻・舌・身の五知根なり。境界といふは、色・聲・香・味・觸の五唯なり。手・足・語言・動轉・來去といふは、五作根に當る。心識といふは、心根なり。以上に五大を加へて、二十五諦と爲す。而して以下の記事は、正しく馬鳴の佛所行讚に材料を得たるものなるべく、記事殆んど一致す。記入の梵語は、その梵本 Buddha-carita より得たり。

【二】 數論の開祖の名。

【三】 波闍波提。迦毘羅の異名。

他の爲に解說し、其をして遠離せしめぬ。此の理を思惟せば、應當に一切の無相を了知すべし』。又復、說いて言はく、『煩惱(tṛṣṇā)に因る者は、所謂無智(ajñāna)にして、諸業(karma)に愛著す。是の如き等の業は煩惱の因に屬す。此の煩惱の因に則ち四種有り。此に人の生死を解脫する能はざるは、其の未だ諸煩惱を離れざるを以ての故なり。四種とは云何。一には無信、二には著我、三には有疑、四には無定、餘殘有るを以て卽ち無方便に、深く世間に著して、恒常に墮落す。是の如きを以ての故に處處に生を受くるなり。無信(pipratyaya)と言ふは、常に顚倒を行じ、應に是の如く知るべきを反りて知らず。是を無信と名づく。著我(ahaṃkāra)と言ふは、此はこれ我と云ひ、彼はこれ非我と稱し、我は是の如くに說き、我は是の如くに受け、我行じ、我住し、我の相なり、我の身なりといふ。是の如きを我と名け、自ら覺知せざる、是を著我と名く。有疑(saṃdeha)と言ふは、此はこれ一切を惑疑せざるを以て、止、是の一物、猶ほ泥團の如くなる、是を名けて疑と爲す。無定(abhisamplava)といふは、是の如く是の如し、是を是とするも亦然り、是を非とするも亦然りとし、心意覺想、一切の諸業に、是は衆、是は我、是は彼、是は此とする、是を無定と名く。又餘殘(aviśeṣa)とは、未だ勝處を知らず、未だ始覺を覺せず、未だ自性を證せずして、始めて證知すとするが故に、是を餘殘と名くと』。又復、說いて言はく、『無方便(anupāya)とは、卽ち是智無く、智無きを以ての故に方便を解せず。方便無きが故に顯示する能はず。是の義を以ての故に無方便と名く。又染著(saṃga)とは、謂はく、無智の人、見聞觸覺して卽ち染著を生じ、或時は、意著し身著し語著し、或は意業もて、一切の境界に著し、應に著せざるべき處に、而も之に惑著する、之を名けて著と爲す。又墮落(abhyavapāta)とは、我はこれ彼處、彼處はこれ我、若し是の如き思惟念有るをば、是を墮落と名く。是の因緣を以て煩惱に墮する、是を無德と名け、是を無智と名け、是を五處の苦惱無樂と名く。此の無樂の處は、所謂黑暗・愚癡・大癡と、二雜住と有り。是を五處と名づ

く。黑暗(tamas)といふは、所謂嬾惰(ālasya)なり。愚癡(moha)といふは、所謂生死なり。大癡(mahā-moha)といふは、所謂行欲(kāma)なり。所以は何に。此の處、假使大德有る人も、猶ほ迷惑し、醒悟することを知らず。故に大癡と名く。二雜住(tāmisra ca andha)とは、所謂瞋恚(akrodha)なり。復、二雜住とは、所謂懈怠(viṣāda)なり。無明の衆生は、是の如く修せず、迷沒して此の五處所に染著し、煩惱苦海の中に住し、生死の流に順ひ、我は見(draṣṭṛ)、我は聞き(śrotṛ)、我は證し(mantṛ)、我は作し(kāryam)、我は他をして作さしめ(kāraṇa)、我是の如くにして至る。是の如きの心、是の如きの意を以ての故に　煩惱海に輪迴沒溺し、是の如きの四種、煩惱中に纒遶裹結して因果無しといふ。大德瞿曇、仁、應當に是の如き諸事を知るべし』。而して偈を說いて言はく、

『若し人正見知を得んと欲せば　四禪清淨解脫の處に
心若し彼の智を覺了し已れば　諸の眞聖及び非眞を知る
上の如く分別して應當に宣すべし　是の故に名けて四禪解と爲す
能く諸の行及び無行を捨てなば　此に卽ち字句名(vyañjana, pada, nāma)無きを知る
是を以て彼處の大梵天は　世間に諸梵行を說く
若し能く此の梵行を行ずれば　卽ち當に梵宮に生ずるを得べし』

爾の時、菩薩、阿羅邏の是の如き語を聞き已り、復更に重ねて、其の方便行を問ふらく、『若し方便を行じて所至の處、及以び梵行修行の當に行ずべき行　處行　法を、尊者よ、我が爲に一切解說せよ』。爾の時、阿羅邏、已が總論、義例、宗體に依りて、一切、皆、菩薩に向ひて說かく、『仁者瞿曇、凡そ修行せんと欲せば、應に宮宅を捨てて、出家の儀により、乞食して活命し弘大の誓を發し、戒行を修持し知足に住し、隨所に衣食臥具を辦ずるに堪へ、閑靜なる住處に獨行獨坐し、諸論中に智の知見する所の如く、貪欲・瞋恚・愚癡の過咎を見已りて遠離し、諸欲の最快樂を受くるを厭惡し、

諸根を調伏して禪定に入るべし。爾の時に當りて、諸欲を遠離し諸患を遠離し、空閑の處に離分別を生ずれば、即ち[四]初禪(prathāma-dhyāna)を得るなり。初禪を得已りて還復思惟し、是の如く分別して漸漸に樂を得、既に樂を得已りて是の寂定に住し、還此の寂定の力に依因りて意に重ねて欲瞋恚等を厭離し、既に數厭離して心轉喜歡し、既に喜歡を加ふれば智を增長し、是の時、即ち大梵宮(mahābrahmā-vimāna)に生ずるを得、彼處に生じ已りて還更に是の如く思惟分別して、此の亂我の智を還復棄捨し、既に喜捨し已りて、第二禪(dvitīyadhyāna)を得、大歡喜を生ず。歡喜を得已りて、心の大歡喜に逼らるるを見、轉勝上を求めて即ち光音(Ābhāsvarā)に至る。光音天に至りて受樂の處を見、彼處に至り已りて喜樂を厭離す。既に喜樂を離れて即ち三禪(tṛtīyadhyāna)を得、三禪中に到りて、即ち轉遍淨諸天(Śubha-kṛtsnā)に勝下して、一向に樂を受く。若し能く是の如く樂を得已りて捨し、受けず著せず、即ち諸の苦樂の處を遠離して第四禪(Caturthadhyāna)を得、既に苦樂及び攀緣心を離れて一切皆捨つ。復、人有り、自慢心を以ての故に解脫の相を求め、四禪の果報を出過するを得んと欲するが故に、內に此の四禪の法を思惟し、廣果天(Vṛhat-phalā)中に、受くる所の果報は、此はこれ麁智もて思惟して之を觀じたるなり」と、又、是の如くに言ふ。「彼の人、是の如き事を思惟し已りて三昧(samādhi)より起ち、其の色身に諸の過患有るを見、色身を捨てて上勝智を求めんと欲するが故に、是の心を發し、彼の人、是の如く諸禪を捨て已り、進みて勝處を求めて此の心を發し、前所說の如く、諸の欲事を捨て、是の如く麁色身を捨離せんが故に、厭離心を發す。彼の時、即ち、身中の有らゆる虛空無邊の分別を得、此の一切の色相、又は色相內、及び樹木等、有らゆる諸物に於て、悉く皆[五]無邊虛空なりと分別し、是の如き等の一切色處を、無邊空(ākāśānantyāyatana)なりと明了に分別するを得已り、即ち勝處を證す」と』而して偈有りて說かく、

【四】初禪乃至四禪を梵天等に配することは、古く阿含中にその萌芽を存す。その四空定と共に體系的に諸天に配して纏むることは、阿毘達磨の功となすべく、今の所記の如く數論自體にこの思想ありしやは疑はし。恐らくは阿毘曇の說を受けて、佛が數論よりも一步出でゝ覺證せることを示さんとせるものならん。

【五】無邊空は禪定中の一悟境にして、梵天に對配せらる四禪を出でて得とする所に、數論の無神論的立場を示す。この境地は、阿羅邏所證の窮極なると共に、數論に關係なき佛世來の古傳なり。今はこれを數論思想に關聯せしむるところに、佛傳記者の手腕を見る。

『是の如き微妙の大梵處は　一切無相にして常に無言なり
智人は彼の解脱の因を說き　即ち此を名けて涅槃の果と爲す』

爾の時、阿羅邏、是の語を說き已り、菩薩に白して言さく、『仁者瞿曇、此は即ちこれ我が解脱の處、及び其の方便なり。我、今、仁の爲めに顯示し已訖る。仁、若し、心意に此の法を喜樂せば、我が所說の如く、仁、領受すべし』。而して偈を說いて言はく、

『是の如き淸淨解脱の法を　我今知り已りて復廣く宣す
仁者心意に若し喜歡せば　唯願はくは此に依りて領納して受けよ』

時に阿羅邏、復、更に說きて言はく、『乃ち往昔の時、耆沙仙人（隋に求勝といふ）、毘踰闍那仙人（隋に離別老といふ）、波羅奢羅(Paraśara)仙人（隋に他諍といふ）等、及び餘の諸仙、皆共に是の解脱の法を稱說し、亦復、同じく此の解脱法に乘じて解脱を得たり。仁者は旣にこれ大智の丈夫なり。此の法を行ずるに堪へ、此の法を行じ已りて、能く善處の解脱の報果を得ん』。

爾の時、菩薩、阿羅邏仙人所說の梵行の法を聞き、受持して行じ、沙門の行を欲し、沙門の果を求めんが故に、此の法を行じて即便ち證知しぬ。而して菩薩、阿羅邏の口下より說法を聞き已り、此の法を信行して違はず背かず、亦復『我、先に自る知る』と言はず。但、受持し已りて此の法を思惟し、增進して更に堅固の智心を發し、勝處を求めて旣に勝處を見、亦、慢を生じて彼の仙を譏毀せず、但、自ら思惟すらく、『獨、阿羅邏に此の信行有るのみに非ず、我も今亦是の如き信行有り。獨、阿羅邏に精進行、正念三昧、及び諸智等有るのみに非ず、我も亦これ、乃至、智等有り。我、今、阿羅邏所知證の如き法を求め已り、他に向ひて說きて分別顯示し、及び勝處を作すべし』。爾の時、菩薩、阿羅邏所說の法行を、皆悉く證し已り、知見して行ず。然るに菩薩、彼等の諸の法を聞き、多く勤勞無くして、須臾の時頃に盡く之を得、行ぜる如く能く說き、宣通顯示して、一種

も異る無し。

爾の時、菩薩、卽ち更に前みて阿羅邏の邊に至り、是の如き言を作す、『尊者阿羅邏、尊、能く是の如く、法智を自證して、他人に向ひて說けり。所謂、[六]無想の處に生るるを求むることなり』と。是の語を作し已るや、時に、阿羅邏、菩薩に報じて言はく、『長老瞿曇、是の如き法智は、我、自ら證し已り、他に向ひて顯說し、宣通開示す』と。菩薩、復言はく、『我、尊者より此の法を聞き已り、尊の所說の如くに、我、信知し行じて已に此の法を證したり。若し智有るものの知行の境界は、亦、應に此の如き法を捨てざるべし。但、我の見る所は、此の法、妙なりと雖も未だ究竟を盡さず。所以は何に。我、意に是の如く觀察思惟す。此の法、猶ほ變動するの時有らん。但、此の境界や、本性是の如しと知り已れば、[七]此の智は、是と雖も、無智なり、更に、別の其の餘の諸法を生ぜんと欲す。然も尊者、說きて「我、清淨解脫を得たり」と言ふと雖も、若し是の因緣の法を分別して觀ずるに、緣に遇へば還生ずるをもて、眞の解脫に非ず。猶ほ種子を時ならざるに種ゑ、地中に藏在する如し。若し未だ時に順はず水雨有ること無くば、芽は則ち生ぜざらんも、若し時に依りて種ゑ、潤澤調適ならば、諸緣具足和合して則ち生ぜん。今、此も亦然り。但、無智を以て愛業に著する、是の如き等の法を捨し已りて分別し、「我、解脫せり」といふも、但、我に著する有り、皆、悉く須らく捨すべきなり。——卽便ち是を捨するとは、無智と愛等と業と合する無き處なり、——此等を捨て已れば、前に勝るを得と雖も、未だ眞處に至らず、但、分別有我の處を行ずるのみ。彼等[八]微細の三事會ず有り。彼の微細の諸煩惱を以ての故に、復、更に別に[九]不用の處有り。壽命長遠の分別の故に、我、解脫を得たりと言ふ』。而して偈を說いて言はく、

『諸過患の微細なるに因るが故に　所以に不用處の身を受く
壽命劫數既に久長なれば　便卽ち「我解脫を得たり」と說く』

【六】無想之處は、四空定の第二たる識處定を行ぜるものの生るべき天。

【七】此智雖是無智。「この智はこれ無智なりと雖も」と訓ずべきも、こゝは智は智なれども、一段上より見る時は、畢竟無智の意なれば、「此の智は是と雖も無智なり」と訓ぜり。

【八】微細三事。無智と愛と業との三事の隱伏微細なるをいふ。

【九】不用之處は、四空定の第三たる無所有處定を行ぜるものの生るべき天なり。

菩薩、復言はく、「尊の前に『我、已に我を捨つ』と說けるが如き、既に自ら稱して、『我、已に我を捨てたり』と言ふも、是、則ち眞實に我を捨てたりと名けず。若し分別に依りて未だ解脫せざるものは、彼に患累有ること無しと言ふべからず。是を以て當に知るべし。患累有る處には、亦、解脫無我の處を得たりと言ふべからず。我の患有ること、異と作すべからず。猶ほ火色と熱とのごとし。熱は色を離れず、色は熱を離れず。此の二、各、體は先に無きを以ての故に合す。若し有れば、是の處有ること無し。我の如きも既に然り。一切諸患、悉く皆是の如し。此に解脫し已るも、彼處に至りて還復縛せらる。智を以て境界を取るが爲の故に、彼、色を滅し已りて但識有り。彼、我の識を知る、卽ち是を有と名く。是の有を以ての故に、解脫と名けず。これ我が悉檀なり。境界の大小、是の如く彼を知れば、還、是の如く勝處の所を求むるを得。是の義を以ての故に、何ぞ須らく分別すべき。此の我と非我とを、木の如く壁の如く、重重に相捨てよ。既に各重重に智有るが故に、故に我思惟す。悉く須らく一切の境界を放捨して、自利を得しむべし」。而して偈を說いて言はく、

『重重次第に悉く皆捐てよ　是を乃ち名づけて境界を捨つと爲す
一切の根塵を悉く放つが故に　是を自利及び利人と名くるなり』

爾の時、阿羅邏の徒衆の中に一弟子有り、菩薩に白して言さく、『大德瞿曇、今來りて此に至る、我等の住處は悉く好器を成じ、又復、八種の自在を得』。菩薩、報じて言はく、『此處に云何ぞ、自在有ることを得ん』。時に阿羅邏、弟子を止めて言はく、『汝、今、且らく此の事を思量する莫かれ、所以は何に。自在と言ふは、諸事中に於て能く決定を作し、他人と共ならず等侶有る無く、內身に自ら寂定を證して得たるが故に、乃ち歡喜を生ずるなり』。菩薩、報じて言はく、『此の事は然らず』。阿羅邏言さく、『其の義云何』。菩薩、卽ち言はく、『是の如く是の如し』。阿羅邏言さく、『仁者、但、

說きたまへ、此の語を秘する莫れ』。菩薩、報じて言はく、『若し尊者に依らば、此の行、還有ることと無しと說き言ふや』。阿羅邏の言さく、『仁者、何の故に此の問を立つるか、何處に疑有るか』。菩薩、報じて言はく、『我、今、心に已に厭離生ぜるが故に、眞正を問はんと欲す』。阿羅邏言さく、『仁者翟曇、聞くを得んと欲せば、我、當に爲に說くべし。凡そ世間を開化せんと欲するは、卽ち我これ也。唯、名字有るのみ。不生不老、不退不還、無邊無中、無前無後、是を名けて我と爲す。自在に能く輪轉に入りて生死の內に在り、亦、暫くも住せず。彼の法と非法と、彼の天と彼の人と、及び諸有の趣に、彼能く遠く行き、彼能く乘と作る。彼の乘に乘れば、能く深有海を渡りて流轉去來し、能く生死を作し、亦、能く變化すること自在最勝、最妙最大にして、能く世の主と作り、一切を攝化す』。菩薩、問ひて言はく、『是の如く化する者、これ有りや以不や』。阿羅邏言さく、『我、仁者の問ふ所の音聲を觀ずるに、必ず此の如き義を受けざるを欲するならん。或は當に、仁者、意に貪樂せざるべし』。菩薩、報じて言はく、『我に、患有ること無し』。阿羅邏言さく、『大德翟曇、疑心を作す勿れ、意の樂む所に隨へ。但、自ら、向ふ所の義を論說し、善く思惟して入り、以て自ら明照せよ。若し自ら見知して他に誑かれず、他の教を受けず、他の義に隨はずして、是の如く證する者を、自利を得たりと名く。餘人は能はざるなり。若し不定の心より、諸論師に隨ひて義意を取らば、其の智滅損せん。仁者、聞き已りて眞正に思惟し、各各讀誦し、深義を觀察して審かに自ら證知せよ。知り已りて疑有らば、意に隨ひて我に問へ。我、當に爲めに說くべし』。菩薩、復問ひたまふ、『尊者の言ふ所の、能く世を化作して自在を得とは、此の義の中に於て我が心に疑有り』。阿羅邏言さく、『仁者の意の如きは、此の義然らず』。菩薩、復、言はく、『我、是の如く見る』。阿羅邏言さく、『何に因りて是の如きか』。菩薩、復、言はく、『此の緣唯一なり。所以は何に。若し自在に此の世を化作せば、則ち次第に依りて相生じ、來者を現見するを得ず。其の煩惱輪は、應に是の

如く次第して轉ずべからず。亦、應に衆生は、心に利を喜ばずして、自然に得べし。應に一の衆生も、恚を雜ふるを得ざるべし。應に諸の世人は自在を供養すること、父の如く母の如く、自餘の諸天は、供養を得ざるべし。其の貧窮の人は、應に彼所有の毀辱善惡の業を說かざるべし。悉く應に彼に在るべし。應に諸の衆生は、依著するに處無かるべし。應に求むる處無かるべし。應に所作無かるべし。世人は應に是の如く自在有り、自在無しと思惟せざるべし。世人、是の如く有無を分別して、應に諸業を作し、作さざるべし。應に自然の果報を得べし。彼の自在天、若し苦行を行じて自在を成ずるを得は、世間も亦、應に共に此の業を受くべし。一切も亦應に俱に自在と名くべし。若し彼、因無くして自在を作さば、處として人として、自在ならざるに非ざる無けん。彼、若し是の自在を建立するに非ざれば、亦、有と名けず。豈に自在を建立すと言ふを得べけんや』。其の阿羅邏、菩薩を讃じて言はく、『大德瞿曇、智慧深遠、善能く顯示し、諸論を承受し、總言總體、悉く智力を以て、分別して能く知る。是の故に平等に、諸悉檀、眞實の路を見る。願はくは我が爲めに說きたまへ、疲勞を辭し、法寶を慳惜する莫かれ』。菩薩復、言はく、『我今、應當に尊者を供養すべし』。阿羅邏言さく、『師に多種有り。仁者の供養、何に由りてか遍ねくすべき。然るに今、仁者は旣に上首たり、亦能く彼等を供養するに堪ふべし』。菩薩、復、言はく、『尊者、但、當に我が爲めに此の如き等の義を解說すべし』。阿羅邏言さく、『彼等は實に一切世間に勝る、未だ彼等の先生有らじ。仁者、善く意に深く自ら思惟せよ。業前に在りと爲すや、身前に在りと爲すや』。菩薩、報じて言はく、『此の義云何』。阿羅邏の言さく、『此はこれ大患なり。所以は何に。若し業前に在りて身は先ならずんば、應に身を受けざるべく、身には當に業無かるべし。業は自ら生ぜず、誰か此の業を造れる。若し身前に在りて、業先ならずんば、應に業有ること無かるべし。若し業有ること無くんば、何の故に復衆生の身を受くること有らん。誰か復、能く世を開化するもの有らん。彼應に一定常存の三

界所縛を損せざるべし。是の諸衆生の生本より、能く生ぜる自身、若し自在なる能はずんば、その一切人の愛樂する所の身は、應に自ら具辨すべし。若し自ら具せば、一切處に於て應當に自ら有るべし』。菩薩、報じて言はく、『我、患人の醫師の療を求むる如し、我、今亦復此の義を難ぜず』。

爾の時、衆中に一苦行有り、これ阿羅邏仙人の弟子なり。菩薩に白して言さく、『善い哉瞿曇、尊師の語言や。唯、願はくは仁者、其の義を難ずる莫れ。此の如きの義は、計して爭ふべからず。若しそれ爭はば、これ利益に非ず。仁、但、受け取りて尊師說の如くなれ』。菩薩、報じて言はく、『我、難ぜざるなり。但、彼の相承の來れる所を知りて、須つてその義を知らんと欲するのみ』。彼の仙人言さく、『此の因縁に隨ひ、仁者、受持して其の眞義を取れ。若し疑を生じて心中に諍論せんと欲せば、これ大非法なり、未來に罪を得ん』。時に彼の苦行仙人の弟子、即ち偈を說きて言はく、

『凡そ人聽受諸禀の時　心意亂れざれば義乃ち定まる
若し疑を持し諂曲を懷かば　これ則ち爭競して人の非を覓めん
二の彼過を求むれば即ち怨を爲し　兩の怨相爭ひて口に惡を言ふ
智者は口業の過を斷ぜんと欲し　理を說きて相競の心を作さず
論議して勝を求むるこれを貪と名く　名を爭ひて他を伏せば人を恥ぢしむ
多言にして過を顯はすはこれ大患　諂意にして義を聽けば自憍を成す
慢心と瞋恚とは其の罪增し　各是非を說きて相毀呰す
作すべきを作さず作すべからざるを作し　二相競ふが故にこれ大怨たり』

爾の時、菩薩、是の偈を聞き已りて彼の仙に語りて言はく、『實に此の如きあり、相爭競するの過は[一〇]非道なること言無し。但、我、本來相承成就の事を尋ねんと欲せるのみ、故に窮盡せしに非ず』。是の語を說き已るや、時に彼の仙人、心に猶ほ忍ばず。阿羅邏言さく、『大德瞿曇、解脫

【一〇】非道言無。言無の二字は、言語せざるにあらず、何と言ふべきかを知らずの意なるべし。

の道路を、仁は憎むや。此の如き事緣は、本來に非ず』。菩薩、報じて言はく、『若し彼の解脫を求めんと欲する時は、須らく是の如くに求むべし』。爾の時、阿羅邏仙人の弟子、復、是の言を作す、『沙門瞿曇、仁は此を離れて解脫を求めんとせば、徒らに身を損ぜんのみ』。菩薩、報じて言はく、『人は世間の無常の樂を求むる故にだも、猶尙乏しき有り。況んや復、不還の解脫を求めんと欲するをや』。時に阿羅邏仙人の弟子、復、更に白して言さく、『仁者、今既に還來せずと言ふ、常に行くべきや』。菩薩、報じて言はく、『今、行かんとする處は、既にこれ意に樂むなり、今、彼處に至らば、復何ぞ還るべき』。阿羅邏言さく、『行きて彼に至る莫く、還りて此に來る莫きこと、[一]得ざるべきか』。菩薩、報じて言はく、『希有なり、此の事。尊者、前には、「後に有を受く」と說けるに、何の故に復「更に還らず」と言ふか』。阿羅邏言さく、『實に然り、仁者、これ大希有なり。彼の眞如寂靜の體は、無始無終にして邊際有る無く、初も無く後も無し。其の行を定めず、形を盡すべからず。然も、無相師禪定主者――大梵天は是なり――の建立する所なり』。菩薩、復言はく、『我、今更に大仙尊者に問はん。若し劫盡きん時、此の諸大地及以び叢林、須彌山等、帝釋の宮殿、悉く劫火に焚燒せられん。爾の時、彼の天、復何處に在らんか。これ誰ぞ、字は誰ぞや、云何が語言せん。功德果報、云何が住せん。又、劫、盡きん時、諸物は皆盡きんに、彼のみ何ぞ燒けざる』。爾の時、阿羅邏、默然として微笑す。

時に阿羅邏仙人の弟子、菩薩に白して言さく、『仁者の智慧、今、既に最も勝る。仁者は自ら過去一切諸仙の、正道を得たるを知らざるべけんや。所謂、尊者波羅奢羅仙人(Parāśara)・頗羅墮仙人(Bhāradvāja)・阿須梨耶仙人(Āsurya)・跋陀那仙人・迦姤婆陀那仙人・陀那達多仙人(Dānadatta)・達利多耶那仙人・般遮羅波帝仙人(Pañcālapati)・阿沙陀仙人(Āṣidha)・跋摩達多仙人(Varmadatta)・那侯沙(Nahuṣa)王の子耶耶埞仙人(Yayāti)・韶波梨仙人・波羅婆遮那仙人・脾提阿仙人・闍那迦仙人

【一】可不得乎、阿羅邏の意は、往還を絶せる境地に至り得ざるかといふにあり。菩薩の答は、汝の最後の境地は、未だ往還を絶せずといふなり。

(Janaka)・阿槃底國(Avanti)羅低提婆仙人・闍祁沙毘耶仙人(Jaigisavya)・提毘羅仙人・毘陀呵毘耶仙人・婆奴仙人・提婆耶那仙人・泥沙多那耶仙人・耶若多那仙人・尼耶薄都仙人・呵梨低仙人・跋闍羅婆睺仙人、諸の是の如き等の一切の仙人は、皆、日光に入りて正路を取れり』。

爾の時、菩薩、彼の仙に報じて言はく、『今既に、日光に入りて解脱を求むといふは、此の義これ何に。我、【三】今應當に彼の諸有を禮すべきも、我實に、是の如き自在を用ひざるなり』。是の時、菩薩、是の語を作し已り、内に自ら、『阿羅邏の法はこれ究竟に非ず』と思惟して、心に喜歡せざりき。時に阿羅邏仙人の弟子、量度して既に菩薩の心を知り已り、卽ち座より起ちて菩薩に白して言さく、『仁者、今此の法の已外に於て、意に更に勝解脱を求めんと欲するや』。菩薩、報じて言はく、「我が意、當に是の如きの法――地無く、水無く、火無く、風無く、及び虚空なく、色無く、聲無く、香無く、味無く、觸無く、相無く、安無く、畏無く、死無く、病無く、老無く、生無く、無有にして無有に非ざる、無常にして無常に非ざる、語言の說に非ず、邊際有ること無きを證すべきを願へり」。而して偈を說いて言はく、

『本より生 老病死の過　幷びに及び地水火風空無くして、
三世に湛然たるを、師教無くして　常 淨自然に證して解脫せん』

爾の時、羅邏仙人、是の語を聞き已りて菩薩に白して言さく、『仁者瞿曇、我今あらゆる自證の法もて、以て他人に向つて宣揚顯說す。仁者も今亦自ら此の法を證して他人に向つて說け。我が解する所の法は、仁者も亦解せり。我の如きは、今日、此の衆の師と作る。仁者も亦、是の如きの師たるに堪ふ。瞿曇、今、我と共に心を同じくすべし。我等二人、此の大衆を領して、教化顯示せん』。

是の時、羅邏、名は師たりと雖も、但、菩薩と平等の行分を取り、自ら半座を以て菩薩に分與し、菩薩を供養し、菩薩の意の堪ふる所に隨つて供養の具を須ひ、大歡喜を生ずること最勝最妙に、心

【三】我は是等の諸仙に對して、禮敬を缺く事はせざらん。さはれ、之を究竟とはせずの意なり。

熙怡して其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず。爾の時菩薩、是の如く思惟したまはく、『此の法は、人をして涅槃に至るを得しむる能はず。亦復、諸欲を遠離し、煩惱を越度する能はず。寂定にして諸漏を盡し、神通を得る能はず。又復、自覺覺他して沙門の行を作す能はず。諸惡煩惱を滅除する能はず。所以は何に。此の法を行ずれば、唯非想に生じて而も諸業を爲す。故に知んぬ、此の法はこれ究竟至極の果に非ざることを』と。是の念を作し已り、即便ち羅邏に背捨して行く。而して偈有りて言ふ、

『菩薩此の諸法を思惟し　其の心に甚だ大歡喜せず
究竟して好く出昇するに非ざるを知り　即ち羅邏に背きて行き去る』

爾の時、羅邏仙人の徒衆、即ち菩薩と共に分別して相辭し、是の如き言を作す、『唯願はくは、仁者、行を行ずるの處、常に吉祥を得んことを』と。

答羅摩子品第二十七

爾の時、此の閻浮提地に、復更に別に一大導師有り、名けて羅摩（Rāma）と言へり。其の命已に終りて、彼の徒衆の主は即ち摩の長子なり。名けて優陀羅羅摩子（Udraka-Rāmaputra）といひ、彼の衆を主領す。其の優陀羅、常に彼の衆の爲に、[一]非想非非想に生る法を說き、王舍城に近き一の阿蘭若林中に住す。是の時、菩薩、遙かに其の名の前の羅邏所說の法に勝るを聞き、聞き已りて思惟す、『我今、應當に優陀羅羅摩子の邊に至りて梵行を行ずべし』と。爾の時、菩薩、阿羅邏の居處より出でて安庠として行き、恒河を渡り、借問して既に知り、即ち其の所に到りて、之に白して言はく、『仁者優陀、我、仁の邊に於て、敎誨を受け梵行を行ぜんと欲す』。時に優陀羅、菩薩に告げて言さく、『大德瞿曇、我が觀る所の如くんば、瞿曇を見るに既にこれ智人なり。我が法を受け梵行を行ずるに堪へん。若

【一】非想非非想處は、四空定の第四定を行ぜるものの生る境なり。

し法を受けて、梵行を行ぜんと欲する時は、須らく我が法の清淨業果に順うて、行報を得べし』。爾の時、菩薩、優陀羅羅摩子の邊に於て、法を受け行を行じ、沙門の法、沙門の事を求むるが故に、恭敬合掌して白して言はく、『仁者、仁者所行の法の何の境界に至るかを未だ審かにせず、我が爲めに解說せよ』。其の優陀羅、菩薩に告げて言さく、『大德瞿曇、凡そ相及び非相を取るは、此はこれ、大患、大癰、大瘡、大癡、大闇なり。若し細かに思惟せば、卽ち彼の微妙の有體を受くるを得ん。能く是の如き次第の解を作せば、此を寂定微妙最勝最上の解脫と名く。其の解脫の果は、謂はく非想非非想處に至る。我、此の最勝の妙法を行ず』。其の優陀羅、又復更に言さく、『此の非想非非想處に勝れる寂定は、過去の世に無く、現在既に無く、當來も亦無けん。此の行は、最勝最妙最上なり、我、此の行を行ず』。爾の時、菩薩、此の法を聞き已り、思惟すること久しからずして、卽ち此の法を證す。是の時、菩薩、彼の邊從り、口の出す所に隨ひ、聞き已りて心に信じ、彼の語に隨順して是の念を作す、『此の如き法は、我も亦得べく、我も亦知るべし。實語にして虛無し、我、今見るべき所は、卽ち能く見知るべき所は卽ち知るを得たり』と。復、彼の優陀羅に語りて言はく、『但、仁者のみに非ず。昔は父羅摩のみ獨り信行有りしが、我も今、亦是の如き信行有り。彼に獨り精進、正念、禪定、智慧有るのみに非ず、我も今亦乃至智慧有り。我今は、彼の法行を行じ、羅摩を學び、自ら法を證し已りて他の爲めに顯說す。彼の法を知れるが故に、彼の法を見たるが故に、更に勝れたるを求めんと欲す』。爾の時、菩薩、是の法を證し已り、優陀羅羅摩子に白して言はく、『仁者の父は、昔、此の非想非非想處に於て、自ら證し知見して、他に向ひて說けりや』。優陀羅言さく、『大德瞿曇、我が父、是の如し』。菩薩、報じて言はく、『仁者優陀、我今已に通じ、證知奉行す』。其の優陀羅、菩薩に白して言さく、『大德瞿曇、若しそれ然らば、仁と我が父羅摩とは異無し。大德瞿曇、仁、今若し此等の諸法を知り已りて奉行せば、我が父羅摩仙人の如く、此の大衆

を領して教示宣通すべし』。

時に優陀羅、既に自ら行を修して梵行を闕かず。但、菩薩を取りて、同行建立せんとて、『菩薩若し同じく法智増上せば、供養の最勝なるをもて、菩薩を供養して心に歡喜を生じ、自ら勝ふる能はざらん』。爾の時、菩薩、優陀羅に語りて是の如き言を作したまはく、『仁者よ、此の法は、究竟して諸欲を解脱し、煩惱を滅し、寂定一心に諸の結漏を盡し、及び諸神通あり、沙門の行を成じて大涅槃に到る能はず。是の法は還び生死に迴入せん。所以は何に。既に非想非非想處に生ぜんも、報盡くれば還煩惱に迴入すればなり』。是の語を作し已るや、其の優陀羅、菩薩に白して言さく、『大德瞿曇、聞知せざる可けんや。我が父羅摩は、此の法を證せりと雖も、而も一切處に於て覺らず知らず。已に非想非非想に生ずるも、故に而も還來して生死に入るとは、是の處有ること無けん。後生を取らず、亦復、生の處所を見ざればなり』。其の優陀羅、是の如き寂靜の法、奢摩他（Samatha。）の行を得たりと雖も、最上の勝法を辦求せず。唯、口に稱して言ふ、『我が父羅摩、是の如き說を作す』と。菩薩、是の如く思惟し、『此の法は、これ究竟に非ず。我今、應に此の法に專著すべからず』とて、優陀羅を捨てて、卽便ち背きて行く。而して偈有りて說かく、

『菩薩思惟して此の法を觀じ　「羅摩往昔復行ぜりと雖も
既に解脱究竟乘に非ず」とて　卽便ち背行して捨て去りぬ』

勸受世利品第二十八の上

爾の時、菩薩、優陀羅羅摩子の處より辭別して行き、安庠として漸く至りて般荼婆山（Pāṇḍava）（隋に黃白色と言ふ）に向ひ、彼の山に到り已るや、山麓の間に平整の處を求め、一樹下に加趺して坐し、端身住心、正念不動なり。譬へば人あり、頭上に火の燃ゆるを、急疾速に滅して地に擲つが如し。是

の時、菩薩、心に煩惱の邊際を斷除せんことを求むること、亦復是の如し。爾の時、菩薩、内心に是の如く思惟籌量す、『我、何の時にか、當に此の大煩惱の聚を散ずるを得べき。我、何の時にか、當に此の大愚癡の藏を破りて、阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べき。又諸の衆生、生死に沒在せるを、復何の時にか、悉く解脱せしめん』。是の如く念じ已りて威德儼然たり。時に彼の山中に多く雜人有り、或は草柴を取り、乾牛糞を拾ひ、或は復捕獵し、耕墾して田を作り、或は放牧する人、及び道路を行く。彼等諸人、遙かに菩薩の般荼婆山の樹下に在りて坐するを見るに、猶ほ雜寶妙金の象の光の如し。見已りて各希有の想を生じ、共に相謂つて言はく、『汝諸仁者、此は常人に非ず、何方より來りて此處に到れるか』。或は言はく、『此はこれ般荼山神なり』。或は言はく、『此はこれ般荼婆山所居の仙人なり』。或は言はく、『此はこれ何處の神明か』。或は言はく、『此はこれ毘富羅山(Vipula)所護の神なり』。或は言はく、『此はこれ耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa)守護の神なり』。或は言はく、『此はこれ、大地の神の地より涌出せるなり』。或は復、言ふ有り、『此は是、虛空上界の天子の此に來下せるなり。我等、是くの如く、心に各疑を懷く。何を以ての故に。此の神の身體、光明熾盛、威德巍巍として、遍ねく此の山を照らすこと、猶ほ日月の光明の遍ねく諸娑羅樹(sālāḥ)を照して、花悉く開敷するが如し。此はこれ人に非ず。人の光明は、是の如き事を顯現する能はざればなり』と。

卷の第二十三

勸受世利品第二十八の中

爾の時、菩薩、是の夜を過ぎ已り、晨朝時に於て正しく衣服を著し、般荼山より安庠として行き、王舍城に至り、食を乞はんが爲の故に、諸陰等の苦、空、無常なるを觀じ、無餘大涅槃を求めんと欲するが故に、地を視る一尋、諸根を調伏し、染著せる處を皆悉く除斷して汙を點ぜしめず。復、是の念を作したまふ、『我今食を乞はんに、鉢器(pātra)有る無し。若し我食を得んに、何處にか盛らん』と。是の時、菩薩、左右前後に器を求めて未だ得ず。忽ち一處に、大花池有るを見、見已りて卽ち傍なる一人に語りて言はく、『仁者よ、汝、我に此の中池の蓮の藕葉を乞ふべし』。彼の人聞き已りて、卽便ち池に入り、彼の藕葉を取り、以て菩薩に奉る。是の時、菩薩、彼の藕葉を受け、城に向ひて食を乞ふ。

時に王舍城の內外の人民、菩薩を觀見すること是の如く詳審に、復、菩薩の威神巍巍たるを見、見已りて各大希有心を生じ、共に相謂つて言はく、『此は是、三目の大自在天の此に來至せるなり』と。其の中、或は遠くに行く諸人の、事を營まんと欲するが故に他方に至る有り、彼等、既に菩薩を見るや、還迴りて菩薩の所に向ふ。或は復人有り、事を造作せんと欲し、中道にして既に菩薩の形容を見、便ち其の業を捨てて來りて菩薩に向ふ。若しくは坐する人有り、菩薩を見已りて覺えず自ら起ち、疾速に來詣して菩薩の所に向ふ。或は復人、十指掌を合して恭敬一心に菩薩に向ふ者あり、或は復、頭を以て菩薩を禮する者あり、或は復、微妙の音聲を以て菩薩に白して『善來善來』と言ふ有り。

時に王舍城の有らゆる人民にして菩薩を見る者、一人として、歡喜愛樂の心を生ぜざる有ること

【一】無餘大涅槃は、有餘大涅槃に對す、前業の苦果たる身體の全く滅して、業果の餘すなき完全なる涅槃をいふ。

無し。其の王舍城の、或は多舌にして亂言綺語する人、彼等諸人も、菩薩の前に在るや默然として住し、菩薩に隨つて行く。又王舍城の周匝四方の或は男、或は女、丈夫、婦人の餘を營まんと欲する者、悉く捨てて來り看、希有心を生じ、菩薩を觀看して眼目瞬かず、觀る所の菩薩の支節面額、眉目肩項、手足行歩、一一の處に各各皆愛樂し、更に其の餘處の相を看る能はず。

爾の時、菩薩、盛壯なる少年として、喜ぶ可く端正に、興樂花艷、花色の時に宮を捨てて出家し、眉間の毫相は宛轉して右旋し、眉は細くして脩揚に、目は寬にして長廣なり、威德其の體に遍滿し、光明は巍巍堂堂として普ねく遠近を照し、手足の羅網は皆悉く普ねく其の二十の指を縵にし、善能く一切の天人を治化す。菩薩の威神は世間に比ひなし。而して偈有りて說かく、

『菩薩の道路の上を行くや　有らゆる一切諸の看る人
但身の一分の光を覩　見已りて即便ち愛著を生ず
雙眉細揚にして初月のごとく　兩目靑紺にして牛王に似
身體常に大光明を放ち　諸の手足の指に羅網有り
觀者微妙の色を見るを以て　衆人覺えず後に隨つて行き
此の殊妙なる相の莊嚴を看て　各各心に大歡喜を生ず』

爾の時、王舍の守護城神は、菩薩に是の威儀有るを見、心に驚怖を生じ、戰慄して安んぜず。謂つて言はく、『此は是、何處の大神ぞ、來りて我が此の間の坐處を奪はんと欲する』。爾の時、菩薩、彼の無量無邊の人衆の左右に圍遶し、或は後に、或は前に、諸人觀看するを以て、安庠として徐ろに歩み、漸漸に行きて王舍城に向ひ、食を乞はんと欲す。擧動俯仰、進止雍容、〔二〕躡足〔三〕前趍、遲からず疾からず、專注平視し、諸根を斂攝し、臂肘〔四〕膞齊、衣披整肅、擎げたる蓮荷の器、其の葉萎まず、寂定一心、人、見て歡喜すること最上最勝、奢摩他を得て柔輭調和すること、制伏せる象の

〔二〕躡。踵ぐ。
〔三〕趍。俗の趨の字。
〔四〕膞。脯に同じ。ひとし、直し。

如く、濁穢有る無きこと、猶ほ淸淨池のごとく、身を離るること一尋にして、常光の明照すること、娑羅樹の衆花の開敷せるが如く、金象形の地より涌出せるがごとく、具足圓滿せる諸相の莊嚴は、夜の虛空に衆星の圍遶せるが如く、菩薩の日月は世間に朗らかなり。

時に王舍城に、諸人輩有り。彼等皆悉く大歡喜を生じ希有心を發し、菩薩の街巷裏を行くを見て、城內の商賈、估販の交關、一切自ら停まりて復市買せず。若し店舍に在りて醉亂心迷せるは、悉く醍醐を得て復飲酒せず、各一切の讌會音聲を捨てて、奔走して皆來りて菩薩の所に向ひ、或は復左右に隨逐して觀、或は復前に在りて迴顧して視、或は復後に在りて菩薩に順つて行く。

其の王舍城の無量無邊の諸婦女等、或は門側に倚り、或は牕間に立ち、或は樓中に在り、或は屋上に居し、舊と作せる生活を今悉く爲さず、並びに事緣を廢して遙かに菩薩を觀、家家に戶より出でて、各各喜歡し、共に相謂つて言はく、『今、此は是誰ぞ、何より來到せる。是は誰の種族ぞ、其の名字は誰ぞや。是の如く端正にして喜ぶべき行動は、我等昔來未だ曾て見るを得ざりき。或は復沙門か、或は婆羅門か、相貌是の如くして容止異常なり』と。稱歎の聲、城の內外に遍ねし。

爾の時、摩伽陀國、王舍城の主、姓は施尼氏(Śreṇika)、名は[五]頻頭娑羅(Bimbisāra)未だ王と作らざる時、曾て[六]五願を乞へり。『一に、願はくは我、年少の時、早く王位を得ん。二に、若し王位を得たる已後、願はくは我が化內に佛世尊有りて、天下に出現したまはんを。三に、若し佛の世に出現したまはん時、願はくは我、自身に承事供養せんを。四に、若し承事し得たる已後、唯、願はくは我が爲めに應の如くに說法したまはんを。五に、佛若し我が爲めに法を說きたまはば、我、法を聞き已りて、願はくは誹毀する莫く、法を證するを得已りて、依りて奉行せんを』と。

爾の時、頻頭娑羅王、高樓上に在り、諸大臣の與に圍遶せられて坐し、遙かに菩薩の諸大衆に前後導從せられ、安庠として行きて王舍城に入るを見、頻頭娑羅、既に菩薩を覩るや、心に大疑を生

【五】頻頭娑羅は、孔雀王統大阿育王の父の名なり。こゝはその姓を施尼氏とせるより見るも、五願を抱けるより見るも、頻毘娑羅又は頻婆娑羅ならざるべからず。蓋、佛傳作者が之を混交せるなり。

【六】頻王五願のこと、巴利律大品一・四・三等に出づるも、皆成佛後に佛の化を受けたる時の告白とせり。本經又第四十四卷に再記するより見るに、この記事に就ても、本經が二種の佛傳を合糅せるを知る。

じ、即ち樓より下りて宮門外に出で、菩薩の身を見るに、威儀擧動、端正にして匹無く、乃至、猶、夜空の衆星の如く、諸の觀者の愛樂する所と爲り、摩尼寶の內外の光明、表裏に洞徹するが如く、菩薩の身も、亦復、是の如く威德熾盛にして、照耀すること巍巍たり。時に頻頭王、菩薩の是の如き相を見已り、諸臣に勅して言はく、『我、生れてより已來、未だ曾て人の是の如き形貌を見ず。身色面目、頂額廣平、皎潔分明に、顯赫照曜すること、蓮花葉の水中に在りて、水の點著する所と爲らざるが如く、是の身の威德、毛は悉く右旋し、眉間の毫相は琉璃の如くに淨く、亦白珂の如く、亦、泡乳の如く、色炎光具、滿月輪の如く、其の二足趺の蹈地の千輻、歩擧がれば文現はれ、跡、差移せず、怖れず驚かず、戰かず慄れず、智慧安靜にして、猶ほ須彌の如し。何所より來りてか、忽然此に至り、端正喜ぶべく、此を歷て遊行する。汝諸臣下、應當に觀看すべし。此は誰の種姓にして、誰の兒子なる、何國土の生にして、名字は何等ぞ』。爾の時、彼の諸大臣衆等、或は說いて『此は是天王』と言ふ有り、或は『帝釋』と言ひ、或は復『これ大龍王』と言ふ有り、或は復、『毘摩質多阿修羅王(Vemacitra-asurinda)』と言ふ有り、或は復『此は是婆梨阿修羅王(Bali-a.)』と言ふ有り、或は復、『これ毘沙門護世神王』と言ふ有り、或は復、『此は是日天』と言ふ有り、或は『月天』と言ひ、或は復、『大自在天』と言ふ有り、或は復、『此は是梵天』といふ有り。復、更に餘の諸占相婆羅門有りて言はく、『大王當に知るべし。我等が論の先後に說く所の如くんば、此の人は必ず轉輪聖王と成らん。何を以ての故に。今、此の大士の身體に、一切諸相遍滿すればなり』と。爾の時、諸臣大衆の中に別に一臣有り、王に白して言はく、『大王當に知るべし。實に斯の事有り。所以は何に。此を去る遠からず、十由旬外、正に北方雪山の下に在りて一種姓の有り、稱して釋氏と爲す。然るに彼の釋氏に一國界有り、名けて迦毘羅婆蘇都といふ。彼の國土中に一王有りて治む、名けて淨飯と爲す。是れ釋種の王なり。彼の王、子を生む。字は悉達多。既に釋種の生として姓は瞿曇氏な

【七】端正可喜、歷此遊行の二句、原文、名字何等の次に置けるも、今、文意を通じ易からしむるために此に置けり。

【八】先後の後字、恐くは既の誤か。

り。其の彼の太子、初生の日、父王卽便ち解相婆羅門等を召集して、相を占せしめし時、諸相師旣に占看し訖りて、大王に白して言はく、「大王當に知るべし。今、此の太子、二種の相を具す。若し家に在らば、必ず當に轉輪聖王を成就して四天下に王となり、大地を守護し、乃至、如法に世間を治化すべし。若し王位を捨てなば、必定して多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を成じて、名十方に遍ねきを得ん」と。大王、當に知るべし。此は必ずこれ彼の太子なること疑はじ。所以は何に。其の人現に今、鬚髮を剃除して、身は黃金色、袈裟衣を著け、國を捨てて出家し、遊行して此に到れるなり」と。而して偈を說いて言はく、

『彼の國の相師此の言を說く　「王位に居らずんば定めて佛と作らん」と
　斯れ決んでこれ彼の釋種の子が　出家苦行して菩提を求むるならん』

爾の時、大臣、是の語を說き已る。是の時、其の王頻頭娑羅、內心に思惟すらく、『我が如きは、往昔、曾て誓願を發せり。若し是の如くんば、我が願成るを得ん』と。時に頻頭王、二臣に勅して言はく、『卿、若し知らば、速に彼に往き、此の出家の人の、何方に居停し、何地に在るかを看よ。汝等驗し已らば、速に我に報じて知らしめよ。然る後、我、當に自ら彼に至りて、觀看供養し、未だ聞かざることを諮受せん』と。時に彼の二臣、王勅を奉じ已り、卽便ち相共に菩薩の向ふ所に隨逐して行き、暫くも捨離せず。

爾の時、菩薩、王舍城に在り、食を乞ふ時、彼の大衆の處處に充滿するを見、內心に是の如き方便を思惟すらく、『此の諸の大衆は、歸依有ること無く、救無く護無く、常に生老病死の爲めに纒はれて、畏れず驚かず、怖れず恐れず、亦復、究竟道を求むることを知らず、導師有ること無く、愚迷惛闇にして、煩惱に沒溺し、癡にして智有ること無く、日日に滅損し、諸陰の苦空無常なるに染著して厭離するを知らず』。爾の時、菩薩、是の念を作し已り、慈悲心を起して倍更に精進勇猛を增

加し、其の意を折伏して是の念言を作す、『我、今、當に一切世間の歸依處と作るべし。我、當に苦惱の世間を救護すべし。當に世間の爲めに、生老病死の盡くる處を說くべし』と。爾の時、菩薩、目を擧げて、唯、前一犂軛の距離を觀、默然として諦視し、徐徐に動步して容儀を齊整し、遍ねく王舍城を次第して乞食し、既に食を得已るや、王舍城より庠序として出で、漸漸に彼の般茶婆山に至る。其の山麓下に一泉池有り。彼の水邊に坐して正念に安置し、麤細を得るに隨ひて法の如く之を噉ひ、食ひ訖りて衣を斂め、手足を洗ひ、卽便ち進んで般茶の頂頭上に上り已りて、山の南に向ひて觀看し、林樹の妙好なる枝條の蓊鬱扶踈たり、饒くの諸鳥獸の飛走遊戲し、花果泉流するを求覓め、好樹間を擇びて草鋪を安施し、東面に向つて端身正心に結果加趺し、儼然として坐すること、猶、師子の孔穴中に入りて畏れず驚かざる如く、袈裟服を著するや、其の光顯赫して巍巍堂堂、熾盛に照曜して日の初出の如し。而して偈有りて說かく、

『彼の山蓊鬱として樹林饒く　鳥獸相娛しみて諸樂を受く
　身に袈裟を披たる人中の月者　光明熾盛にして日初の如し』

爾の時、菩薩、彼の樹下に坐して是の如く思惟す、『我、今、此處に學するに、更に[九]人有る無く、[一〇]富伽羅無く、[一一]衆生無く、壽者無く、[一二]命者無く、[一三]禪兜無く、[一四]摩㝹闍無く、[一五]摩那婆無く、[一六]養育者無し。此の五陰は一切皆空にて命無く識無し。一切の諸法は、唯、假名の衆生と名くる有るのみ』。

爾の時、頻頭婆羅王の使はせる二臣、菩薩に隨逐して恒に捨離せず。其の一臣は、菩薩を去ることと遠からずして前に坐し、一臣は、速に摩伽陀國頻頭王の邊に還り、到り已りて長跪し、王に白して言はく、『大王、當に知るべし。彼の出家人は、王舍城より飯食を乞ひ訖りて般茶山に到り――乃至、端身にして南面して坐すること前に說く所の如し――大王、今、若し觀んと欲せば、宜しく須らく疾く往くべし』と。

【九】Puruṣa。人者、丈夫。
【一〇】Pudgala。數取趣。
【一一】Sattva。衆生。
【一二】Jīva。命者。
【一三】Jantu。生者。
【一四】Manuja。意生。
【一五】Mānavaka。儒童。
【一六】Poṣa。養育者。以上はいづれも我（Ātman）の別名にして、今これらのものなくして一切皆空なりとするは、いはゆる「無我說」を示す。而してこゝの記述の大乘的なることは、特に注意を要す。

爾の時、頻頭娑羅王、其の使人の是の如き語を聞き已り、即便ち賢善の好車を裝束し、其の上に坐して嚴駕して往き、般茶婆に向ふ。時に頻頭王、旣に彼の山に至り、遙に菩薩の喜ぶ可く端正なるを見、心に甚だ愛樂し、乃至、猶ほ夜空の衆星の如く、暗山の頭の大猛火聚の如く、大雲裏に電光の出閃するが如く、摩伽陀王の菩薩が彼の樹下に在るを見るも亦復是の如し。見已りて大希有の心を生じ、歡喜體に遍ねく身毛皆豎ち、乘を下り徒歩して菩薩の邊に詣り、到り已りて問訊し、菩薩に白して言さく、『少病少惱にして、四大安きか』と。而して偈有りて說かく、

『王、菩薩の帝釋の如く　身光明曜なるを見て心に喜歡し
起居を問訊すらく「四大和するや　少病少惱にして身に患無きや」と』

爾の時、菩薩微妙の口、和輭の語言、梵天の如き音を以て、辯才字句、不染不著にして、摩伽王頻頭娑羅に告げ、慰勞問訊して是の如き言を作したまふ『善治大王、大吉大祥、何より遠來せるか。坐して憩息すべし。何事を營求せんとて此に詣れるか』と。爾の時、頻頭娑羅王、菩薩の是の如き語を聞き已りて、菩薩の前に進み、一石上に在りて安隱に坐す。王、菩薩の意を度量せんと欲するが故に、菩薩に白して言さく、『仁者、今若し疲勞を辭せずば、我心內に疑ふ所を諮問せんと欲す、唯、願はくは仁者、我が爲に決斷せよ』。即便ち問ひて言はく、『仁者は何ぞ、天たりや、龍たりや、梵たりや、釋たりや、人たりや、神たりや』と。爾の時、菩薩、憍慢貪欲恚心無く、一切煩惱の諸刺を除斷せるを以て、不諂曲の語もて摩伽陀頻頭王に報じて言はく、『大王よ、當に知るべし、我は天に非ず、龍に非ず、梵に非ず、我はこれ人なり。大王よ、我、寂靜を求むるを以ての故に、所以に出家せり』と。時に摩伽王頻頭娑羅、菩薩に白して言さく、『仁者比丘、我、今、仁を見て甚だ大いに歡喜す。是の故に我今、問を發する有らんと欲す。我、仁者を愛敬するが爲めの故に、一言を說かんと欲す。唯、願はくは聽受したまへ。所以は何に、仁、今、壯少、正に盛年に在り、端正雙無く身

體微妙にして、當に嬉戲遊縱すべきに堪ふる時なるに、今、何の爲めに是の如き意を發し、行じて沙門と作り、王宮を厭離して空山に獨坐するぞ。又、仁者の身、是の如き相貌には、止、赤栴檀香を塗るべし。應に此の袈裟の服を著くべからず。仁の二手は、乃ち世間を指劃治化し、百味、前に盈てて時に隨ひて飲噉すべし。豈に器を執りて、他に從つて乞行すべけんや』と。而して偈を說いて言さく、

『仁の身には赤檀末を塗るべし　應に此の弊袈裟を服るべからず
　手指は正しく世間を　撝すべし　豈に他より食を乞ひて活くべけんや』

時に頻頭王、是の語を說き已りて、菩薩に白して言さく『仁、今、若し父を愛敬するが爲めの故に王位を取らず、捨てて出家すとならば　我今請ふ、仁、我が境界に在りて五欲を受けよ。種種の須むる所、當に仁の意に隨ふべく、財を須めば財を、及び諸婇女を與へん。若し我を佐助せば、我、當に仁と國を分ちて半治すべし。我が境に居りて我が王位を受くべし、我、仁に承事して乏少せしめじ。何を以ての故に。仁者沙門は、身體柔輭なり。應に空閑なる蘭若に住すべからず。若し草鋪に坐して地上に在らば、仁者の身を損じて恐畏らくは病を成さん。但、少時を經て仁の父衰敗せば、還りて自ら本國の王位を受くべし。是の故に仁、今、若し我を愛念し、我を憐愍せば、我、王位を受けて我が境中に住せよ。如しそれ仁者、大種姓を稱して我が境の狹く土地の穢雜なるを嫌はば、我及び群臣、諸の百官等、更に別に、仁の爲めに他國を開拓して寬廣ならしめ、仁と共に治めん。又我、願はくは仁者の貴族と共に因緣を作し、親厚の眷屬たるを得ん。願はくは疑を生じ、謂ひて實に非ずと爲さざれ』と。而して偈を說いて言さく、

『仁者若し大種姓を稱して　我が境の狹きを嫌ひ停まるを肯ぜずば
我諸臣及び百官と共に　當に更に吞併して寬廣ならしむべし』

【七】撝、指撝也。

時に摩伽王、是の語を說き已り、更に復重ねて菩薩に白して言さく、「我、仁の邊に愛敬の心、尊重の心有り。仁者、今既に食を乞ひて活身す。但、當に努力めて寬廣の意を發し、法を受け財を受け五欲の樂を受くべし。所以は何に。此の三種を受けて宮中に在り、諸婇女を觀て歡娛受樂せば、亦能く人をして現世の報を得しむ。未來も亦然り。若し人、此の三種の法を受けず、但、一事を捨つるも、彼の人、現世にも或は復未來にも、終に能く果報を具足するを得ず。設しそれ、之を受くるも、必ず缺減有らん。是の故に、仁者、若し心を弘廣にせば、所以もて應に須らく、具足して此三種の樂を受くべし。三樂を受けんが故に、年少時の端正の果報を用て、法を受け財を受け及び諸欲を受けよ。世間の丈夫、欲を受くるの時、生子繼立す、此は是大財なり。この故に仁者、空しく過ぎしむる勿れ。又復、仁者是の如き臂髀は、弓弩を牽くに堪ふ、斯の如き一世を徒らに損ぜしむる莫かれ。又復、往昔、頂生の王は、勇健を以ての故に、四天下及び忉利宮に王たり、是の如く仁者、當に此の事に堪ふべし。所以は何に。我、今、亦、一切の諸衆生を憐愍するが爲の故に、是の如く勸請す。我、亦、自の王位の爲ならざるが故に、仁者に勸請す。我、今、仁の身體の端正なるを見て、悲酸流涙し情懷忍びず。是が爲めに倍更に希有の心を生ず。所以に、慇懃に是の如く苦請す。仁、今、盛年なり、且らく世欲を行じ、後に衰老して法を行ずべきの時を待つて、乃ち家を捨つべし。又復、仁者、先祖以來、自種姓の內にては、年老の時に到れば乃ち國法に依り、王化の事を以て其の太子或は復大臣に付し、方に始めて位を捨てて、出家入山せり。又復、仁者、往昔の諸仙、是の如き說を作せり。「凡そ[一八]年少の時には先づ欲事を行じ、中年には財を求めて以て自ら養ひ活き、老耄の時に至つては、乃ち棄捐して法を修學すべし。是の如くして、乃ち能く一切を建立す。又、人、年少にして諸欲を行ぜず、財を求覓めざれば、此は是身の怨、亦名けて賊と爲す。諸根を毀敗して、攝受するを得難し」と。又復、仁者、假使年少にして法を求めんと欲せん時は、但、

【一八】印度の理想生活とせらるゝものは、(一)學生期、(二)家居期、(三)森居期、(四)乞士期を經るにあり。こゝの年少、中年、老耄の三期は、彼の四期を豫想するものあり。

諸根の爲に五欲に牽著せらる。老時に至らば、內心に思惟し衆事を斷絕して能く諸根を攝し、心に慚愧を生じて意は寂靜なるを得ん。又復、仁者世間の少年は、正に放逸の時なり。遠道を見ず、過失有ること多し。中年の時に至れば血氣漸く弱り、放逸已に過ぐ。譬へば人、行きて曠野を度るに、止りて歎息し、「我、已に此の處所を越えたり」と言ふが如し。是の故に、仁、今正に年少の時、正に放逸の時なり。宜の多少に隨ひて、願はくは且らく欲を受けよ。又復、仁者、年少の時は、諸根迴らし難し。仁者、若し法事を行ぜんと欲して法を愛樂せば、仁の家法に依りて諸天を祭祀せよ。祭祀に因るが故に、亦、天に生るるを得ん。家內に在りて自身を莊嚴し、金銀諸寶もて兩臂を挍飾し、衆寶は光を放ちて猶ほ明燈の如くにせよ。又復、仁者、往昔の諸王は頭に寶冠を戴き、身體を嚴飾し、常に家內に在りて諸天を祭祀し、法行を行じ、無遮會を立し、或は山に入りて大仙の行を行じ、解脫を求むる有りき。仁者、今既に彼等を學ばば、時に順ひて行じたまへ』と。

其の摩伽王、是の如き種種の譬喩語言もて、方便して將つて菩薩を勸請せんと欲しぬ。爾の時、菩薩、摩伽王の是の如き語を聞き已りて、怖れず驚かず、怪まず異とせず、猶山王の如く、身心不動に、寂然として安住し、諸根を守攝して餘意を生ぜず、三業淸淨にして彼の王に報へて言はく、

而して偈有りて說く、

『摩伽陀王の菩薩を諫むるや　猶、諸朋友の利して相教ふるごとし
菩薩は淸淨なる三業もて行じ　花の水に著せざるが如くに彼に報へぬ』

『摩伽大王よ、吐辭善からず。此の說は猶ほ無智の人の語の如し。天下王法の言たるに稱はず。王若し我に眞正の心有らば、此の語は實誠に深利益に非ず、亦、我を愍れむに非ず。我を甚だ損ぜん。世に惡人有り、慈心の有ること無きは、猶、富貴怯弱の人の如し。若し世間を利益せんと欲せば、應當に彼の往昔より相承し來れる事を教示すべし。是を朋友と名け、是を增長と名く。凡そ、人若

し厄難に至るを見るも、相捨離せずして、三業の等同なる、是を知識と名く。我が意、是の如し。富貴の時、誰か能く朋友知識と作らざらん。若し人財を得んに、法に依りて處分し、散失せしめざる、是を知識と名く。是の人、久しき後に能く財寶を用つて教授せん時、彼、その語を取らず、或は先業を以て自ら財を失ふも、後に悔を生ぜざらん。王若し我が與に知識の意を爲し、我を愛敬せば、是の事を顯示せよ。我、或は王を歎じ、或は王を歎ぜざらん』と。爾の時、菩薩、是の語を作し已り、更に復王の爲めに、是の如き言を說きたまへり。『大王よ、當に知るべし。我今道を求むるは、止、生老病死を怖畏するが爲なり。是の義を以ての故に、解脫を求めんと欲して、故に此の形を受くるなり。親族眷屬は、實に、愛戀すべく敬すべく、捨て難し。流涙滿面、啼泣懊惱して、或は我が爲の故に命を捨てんものを、我已に棄背して此處に來至せり。然もそれ、世間五欲の事に、貪惜染著するは、多く不善に因る。又復、大王よ、我今實に彼の毒蛇を畏れず、亦復、天雷霹靂を畏れず、亦復、猛火炎の大風に吹かれて野澤を燒くをも畏れず、但、五欲の境界に逼まらるるを畏る。何を以ての故に。大王よ、當に知るべし。諸欲の無常なるは、猶、劫賊の如くして諸功德を盜む。五欲の虛空にして眞なきことは、猶、幻化の世間に現はるるや、觀看して實と謂ふも體これ誑惑なるを、世人知らずして強て心を以て著する如し。況んや復、正しく其の五欲を行ずるをや』と。

爾の時、菩薩、卽ち偈を說いて言はく、

『五欲は無常にして功德を害し　六塵は空幻にして衆生を損ず
世間の果報は本より人を誑く　智者誰か能く暫くも停住せん
愚癡は天上も意に滿たず　況んや復人間にして心に稱ふを得んや
欲穢に染著して覺知せざるは　猶ほ猛火の乾草を然すが如し
往昔頂生の聖王主は　四域を降伏して金輪を飛ばし

復帝釋の半座を得て居せしも　忽ち貪心を起して便ち墮落せり
假使盡く此の大地に王たらんも　心は猶更に他方を攝せんと欲す
世人嗜欲して厭くを知らざることは　巨海の諸流水を納るるが如し

爾の時、菩薩、此の語を說き已り、復、更に告げて言はく、『大王よ、當に知るべし。往昔、一轉輪聖王有り、其の王の名を那睺沙王といふ。四天下及び忉利天を統べ、總天人を化して猶足るを知らず。是の義を以ての故に、還、世間に墮せり。又復、伊羅轉輪聖王も、亦復是の如く、四天下及び忉利天に王たりしも、足るを知らざりしが故に命終を取れり。又復婆梨阿修羅王は、既に王位を得、因りて帝釋と共に鬪戰して如かず、遂に侵奪せられぬ。帝釋は得已り、又復轉じて彼の那睺沙轉輪王の爲に奪はれぬ。那睺沙王は、既に獲得し已りて、還復更に天帝釋に奪はれたり。是の如く天人の境界は、翻覆して竝びに皆無常なり。誰か功德勝れて、彼の邊に至らん。若し智有らん人は、能く是の如く思惟觀察を作さん。「無常の境界は、變易して須臾なり、云何ぞ信ずべけん」。唯、山林に居住する諸仙の、諸藥草の根果花葉を食し、身に樹皮を著し、或は復、諸死獸の毛革を衣、形體尫羸して、唯、皮骨在るのみなる有りて、世間の一切諸苦を度脫出離して、解脫涅槃無爲を希求せんと欲す。若し五欲を縱にして纏逼せられなば、墜墮して世間に還り來らん。有智の人、誰か此を貪樂せん。若し五欲に著せば、自ら怨を求むるが如し』と。爾の時、菩薩、更に偈を說いて言はく、

『山谷に居住する諸仙輩の　果を食し水を飲み樹皮を衣るは
復蹤髻し身體羸ると雖も　解脫離欲を規求するが故なり
彼等は自ら制伏する能はずして　猶ほ五欲に牽かるるも
是の如き無常の諸欲の怨に　有智の人は應に著すべからず』

爾の時、菩薩、是の語を說き已り、復更に告げて言はく、『大王よ、當に知るべし。欲界の內や、現味を取らんと欲するが故に和合を作し、彼を得已りて後に而も足るを知らず。若し無智の者は、現に諸欲を受けつつ、足るを知らざるが故に大苦惱を受け、復、來世に於て更に其の殃を受く。是の故に、智人は欲想を取らず。是を以て智者は、[一九]黑業法を行ずるある人を見て大苦を受く。自ら安隱ならんと欲せば、作莫く樂莫く、一切の諸欲を、當に須らく捨離すべし。若し集會する有らば卽ち離別を知れ。欲を縱にし情を恣にせば、卽ち心放逸となる。放逸若し增さば、便ち不善を造す。不善成就すれば、卽ち[二〇]泥犁(niraya)に墮す。過去世の時に大苦行を作し、現に諸欲を得るも、諸欲を得て後に、勤劬保持して守護する能はざれば、還、當に失落すべし。又復、大王よ、是の如き諸欲、若し智有るものは、是の思惟を作す、「世間の人天は猶ほ假借の如し。旣に常物に非ず。何の故にか、心に此の天人の一切の果報を貪らん、草上の露の如く、毒蛇の頭の如く、彼の空林の死屍骸骨の如く、又[二一]婦女初胎の肉摶の如く、夢の如く幻の如く、猶火聚の如し。是の如き種種多諸の患殃は、恒に一切に苦惱逼迫を爲す。智人は當に愛樂著心せざるべし。又復、大王よ、諸論に說くが如し。乃ち往昔の時、寐擗羅(Mithilā)城內に、一瞽王有り、其の王を名けて提頭賴吒王(Dhṛtarāṣṭra)といふ。目無しと雖も多く諸子を育てて[二二]一百人に滿ち、竝びに才智有り。王の弟に、別に復、子五人有り。伯叔弟兄、一百五に足る。其の父、各沒するや、國王と作らんを爭ひ、報ぜんと欲せる緣を以て、相殺害し盡せり。又復、大王よ、檀茶迦(Daṇḍaka)の空曠なる野澤の火に燒かれし時の如し。其の頞誰那(Arjuna)、諸雜類を殺せり。又復、彼の須彌山下に阿修羅有り、然も其の兄弟、各貪の爲の故に一玉女を愛し、二人相爭ひて自ら鬪戰し、傷害して倶に死せるが如し。又世間屠膾の所は諸木を竪立し、雜類諸畜生の形を懸けて、宰戮を行ずるが如し。諸欲や是の如し、智者云何ぞ心に貪樂せん』と。便ち偈を說いて言はく、

【一九】黑業は惡業なり。黑は白に對す。白は善、黑は惡に譬へらる。

【二〇】泥犁。地獄と譯す。

【二一】婦女初胎の肉團は忽ちにして形を變じ次第に嬰兒の形に近づく。諸欲の常に變化して一定せざるも此の如し。

【二二】一百人、五人。提頭賴吒王の一百王子と、他の五王子との戰鬪は、有名なる大婆羅多譚 Mahābhārata の骨格を爲す。

『往昔修羅の兩兄弟は　一玉女の爲めに自ら相殘へり
骨肉の憐愛も染著より憎む　智人は觀知して欲を貪らず

菩薩、又言はく『大王よ、當に知るべし。或は復、人有り、五欲の爲の故に、或は天に生れんと欲し、或は人間に生れんとし、既に生るるを得已るや、五欲に著するが故に、身を投じて水に〔二三〕透らし、或は復、火に赴く。是の如き無常、誑惑の境界に、五欲の爲の故に、自ら怨讐を求む。何の意か戀樂せん』と。又、偈を說いて言はく、

『癡人は愛欲の故に貧窮し　繫縛傷殺して諸苦を受く
意に此の欲を望みて衆事を成し　力盡きて後世の殃なるを覺せず』

菩薩、復言はく『摩伽陀王よ、我、五欲の是の如き種種多諸の過患を知る。王よ、今是の五欲を以て我に勸むべからず。我、今、〔二四〕無畏の道路を行かんと欲す。王、若しこれ、我が眞好の善友ならば、應當に數數我を勸諫し、是の如き言を作すべし、「仁の發せる所の弘誓の大願、願はくは早く成就し、速に煩惱を離れよ」と。何を以ての故に。我、既に他人に趁逐せられずして山林に入りぬ。亦復、怨敵の爲めに駈られず、亦、他に王位を奪はれて走れるに非ず。又亦、往昔の古仙を求めて還退せんと欲せず。是の故に我今、王の語を取らず。又復、大王よ、若し人有りて瞋毒ある蛇頭を執り、既に放捨し已りて、復還び捉へんと欲すること、有り得べしや不や。猛火炬を、手を燒けるを以て放ち、放ち已りて更に捉ふる如し。是の如し、是の如し。我、已に彼の五欲を捨てて出家せるを、今復還び取るも、亦復是の如し。又復、大王よ、譬へば明眼有目の人の如し。豈、盲瞎の人を羨むべきや不や。譬へば、解脫無事の人の如し。豈、牢獄に繫縛せらるる有事の人を羨むべきや不や。譬へば、饒財巨富の人の如し。豈、貧窮飢凍乞索の人を羨むべきや不や。譬へば明了黠慧の人の如し、豈、狂顚の人を羨むべきや不や。然も、その彼等、猶羨むべき有らんも、我今已に、是

〔二三〕透は跳也、投水も赴火も生天を目的とする苦行にて、生天の目的は五欲を滿すにあり。

〔二四〕無畏の道路。解脫への道。

の如き五欲を離れて、一の貪るべき無し。又復、大王よ、王の、前に「我が境界に住し、我が五欲を受け、意に隨つて娛樂せよ、我、多財并及びに婇女を與へん」と言へるが如き、大王當に知るべし、我今、世間の五欲、上に說く所の如き一切の諸事を取らず。又復、大王よ、我、本宮に在るや、五欲多饒なりしを、已に能く六萬の婇女を棄捨して出家入山せり。大王當に知るべし、諸欲は是の如く、無量無邊の患害有り、人を牽きて直ちに大地獄中に向ひ、餘報復來りて畜生餓鬼に身を現ず。又、一切の善根を離れて聖人の讚美する所と爲らず。又復、大王よ、世間の諸欲は、猶、浮雲の暫らくも住する有る無きが如く、猛風の起るや須臾も停らざるが如く、山水の流るるや奔濤迅急なるが如し。又復、大王よ、若し人、愚癡にして五欲に耽染し、[三五]本際を知らざる生死に沈淪し、煩惱に縛せられて解くを得る能はざること、遠行の人の困苦疲極して、乃ち鹹水を飲みて更に其渴を增すが如し。是の如く是の如く、五欲を受くる人の其の患を知らざる、亦復是の如し。又復、大王よ、我、今、要說せん。若し當に人有り、天の五欲、及以び人間の上妙の五欲を得て清淨具足ならんに、是等の諸欲は、一人にて得已るも厭足を知らず、更に復增長して諸處に尋求すべし。又復、大王よ、王の前に言へるが如し「我と共に摩伽陀國を治化せば、我、當に減半して天下を分治すべし」と。或は復、說きて言はく「我が王位を受けなば、我、悉く捨てて與へて、我も亦承事し、或は復、兵を興し、境土を開拓して、清淨寬廣莊嚴ならしめん」と。又復、大王よ、我は今、已に彼の四天下の、一切豐足して乏少する所無きを捨てたり。舊、七寶有りしを、棄捨して出家せり。我今、豈更に此の一國の細少なる王位を、貪羨することをせんや。又復、大王よ、譬へば、大海の娑伽(Sāgara)龍王の果報の如し。既に大海水を得、停りて以て宮殿と爲し、寬博具足し七寶もて莊嚴せるに、豈復牛跡の水を貪るべけんや。大王よ、當に知るべし、是の如く、是の如く、我、今、既に勇猛心を發し、四天下の七寶の宮觀を捨てて、染衣剃髮して出家入山せるに、今若し、還び世間の王位を貪らんも、亦復是の如し。

【三五】原文。本際不知沈淪生死は、沈淪於不知本際之生死の直譯體なり。

勸受世利品第二十八の下

爾の時、菩薩、復、王に告げて言はく、『王の前に說けるが如きは、「仁者比丘、身體柔輭なり。蘭若の空閑林中に住して、草鋪の上に眠臥坐止するなかれ」と。大王、當に知るべし、我、自宮に在るや、妙種種の諸寶を以て床と爲し、偃亞して坐せるを、既に厭離し已り、棄捨して出家せり。所以は何に。大王、須らく識るべし。此の身は危脆にして、敗壞し、無常にして牢固の形に非ず、是破散の法なり。地の有る處の隨に、之を捨て行くこと、猶、泥摶の如く一種も異なし。又復、大王よ、若し智有る人は、既に擲てる死屍を、還、拾ふべきや不や。若し更に收めんと欲せんこと、終に是の處無けん。又復、大王よ、王の、前に言へるが如く、若し我が邊に於て憐愍を生ぜば、應に須らく隨喜すべし。而るを忽ち我の乞食活命するを嫌ふは、此の事然らず。大王よ、當に知るべし。我を慈愛せば、是の心を作す莫かれ。何を以ての故に。我は今、生老病死の苦患の海を過ぎんと欲して、行を行じて道に入れり。是の故に、此の比丘の形を作すは、寂滅安樂の處を求めんが爲の故なり。此の毀好の服形を須ひ受けんと要するは、又未來世に、一切の諸過患を除かんと欲するが故なり。大王よ、當に知るべし。若し復人有つて、現在世に彼の五欲の功德果報を受けて深く愛に著せんに、彼等諸人や、事須らく憐愍すべし。若し當に人有つて、現世中に於て寂定安樂の心を得ざるべくんば、其の未來生に決んで諸苦を受けん、彼等衆生の心や、須らく憐愍すべし。又復、大王よ、我今、煩惱の苦を驚畏するが故に、捨てて出家し、寂定涅槃眞實を求めんと欲す。假使、我をして帝釋の天宮を得しめんも、意亦樂しまず。況んや復、人間の麁弊なる果報をや』と。而して偈を說きて言はく、

「我煩惱の箭に射られ　寂滅の膏藥を求めて塗らんと欲す
設使天帝釋の宮を得たらんも　意に猶貪らず況んや王位をや」

菩薩、復言はく、『大王よ、當に知るべし。王の前に「凡そ天下の人、世間に在るや、一切須らく三時の利を取るべし」と言へるが如きは、我が意もて、此を觀ずる如くんば、此は則ち是れ眞利益の言にあらず。所以は何に。財を求めて多を得んも、會必ず盡くる有り。欲を求め欲を轉じて厭足するの時無し。若し法を求むと言はば、此は是眞の利なり。利に深淺有るも、要必ず須らく求むべし。之を求むれば則ち功能五種有り』と。而して偈を說きて言はく、

「若し生老病死の患無ければ　此は是眞實の大丈夫なり
財を求め欲を嗜むは悉く世情なり　我二求を捨てて唯法を取る」

菩薩、復言はく、『大王、當に知るべし。王の前に、「但、且らく民を治めて王位を取れ。乃至、未だ老いず、正しく少年の時は、且らく、彼の五欲の法道を受くべし」と言へるが如きは、此も亦然らず。何を以ての故に。若し少年の時にして是常住ならば、一切の衆生に、當に老有ること無かるべく、在在處處に、應に彼の死命の鬼の爲に、念念に牽かれざるべし。諸の衆生に壽命定めなきを以て、是の故に智人、若し寂定解脫の法を求めば、世間の王位、五欲の樂を取るを得べからず。是の故に、一切、若しくは少年に在り、若しくは中年に在り、或は復、老年ならんも、但、須らく速に應に辨ぜらるべきものを求めて、早く辨ずるを得しむべきなり。解脫を欲求し、或は禪を求めんに、淹遲せしむる莫く、宜しく速に疾く作すべし。又復、大王よ、王の前に、「須らく家法に依りて祭祀を作し、及び布施を行じ、意に隨ひて彼の未來世の諸果報を規求すべし」と言へるが如きは、大王よ、當に知るべし、我今、是の如き樂を取らず。若し苦の來り逼ること切なるが爲の故に、求めて樂を得ば、此れ眞の樂に非ず。凡、人は、後世の果報を求めて諸天幷びに及び火

神を祭祀せんに、必ず須らく他の衆生の命を殺害すべし。此は則ち理に非ず。所以は何に。若し人慈を行ぜば、應に他の身、命根を損害せざるべきなり。假使一切の諸天及び火神を祭祀するに、衆生を殺害して、彼の常樂定の果報を得んも、猶尙、命を殺害して用つて祭祀すべからず。況んや復、一切所得の果報は、皆これ無常にして破壞盡滅し、牢固の法に非ざるをや。又復、大王よ、凡、人、解脱の法を行ぜんと欲せば、別利有ること無く、或は行を行ずる無く、或は持戒する無く、或は禪定無きも、猶尙、他の命を損害して、未來の利益果報を求むべからず。又諸凡夫の世間に在るや、殺生を以ての故に、假使、安樂の果を得んも、此も亦不善なり。所以は何に。慈無きを以ての故に。況んや復、未來に善報を得んを望まんに、終に是の處無けん』と。而して偈を說きて言はく、

『假使人生れて世間に在り　他の命を殺害して以て樂を得んも
智者は此を非善なりと稱說す　況んや復來世に人天を求むるをや』

爾の時、摩伽陀國の頻頭娑羅王、菩薩の是の如き語を聞き已りて、便ち希有奇特の心を生じ、菩薩の前に在りて、慈悲を以ての故に是の如き言を作す『善い哉、善い哉、沙門瞿曇、大いに難行苦行の德有り、世間中に於て、能く諸欲を捨てたり。仁者比丘、何方より忽然として來り、何の聚落にか生れたる。是は何の種姓ぞ。父母は何處に、自の名字は誰ぞや』と。是の語を作し已りて至心に諦聽す。爾の時、菩薩、正心に直視し、溫和の言氣もて、王に報へて言はく『大王よ、當に知るべし。此を去る北方、雪山の下に大聚落有り、名けて釋種といふ。彼に一城有り、名けて迦毘羅婆蘇都（隋に黃頭居處といふ）と爲す。彼の城に一釋種の王有り、號して淨飯と名く。是れ我が父、我はこれ其の子なり。母を摩耶（隋に幻といふ）と名く。我が名は悉達（隋に成利といふ）なり』と。時に頻頭王、此の語を聞き已りて、泣涕悲啼し、少時頃を經て、面淚を拭ひ已りて、菩薩に白して言さく『希有なり、比丘、既に是の如き大種姓の家に生れて、云何ぞ、此の林內に在りて獨行するや。諸獸猛惡にして、畏るべく

怖るべし。此の林は不善なり。獨自に娛樂して伴侶有ることなきに、云何ぞ住して坐起自ら安きを得ん』と。爾の時、菩薩、頻頭王に報へて言はく、『大王よ、當に知るべし。我は今、諸惡禽獸を畏れず、亦復、驚かず怖れず怯ぢず。設、來らんと欲するも、亦復、我が一毛をだも動かす能はじ。大王、當に知るべし。我今、唯、生老病死に逼切せらるるを畏るるが故に、來りて此の諸惡獸中の驚畏なる林內に在り、獨一無伴にして自ら娛樂す。大王よ、當に知るべし。老は最も畏るべし。所以は何に。老の來逼する時、能く年少盛壯を奪ひて將つて去り、身形を摧折し、腰脊は傴僂となり、行步する能はざること、猶枯樹の如し。誰か喜樂して看ん。此は最も畏るべし。又復、大王よ、それ病の來るは、是を畏るべしと名く。所以は何に。平健の時には、不知不覺なるも、一朝痛切なれば宛轉呻吟し、花色充鮮なるも忽然悴滅し、煩寃楚毒、眠坐不安なり、是の時に當りて、誰か能く代らんものぞ。臥して牀枕に在り、勢は、心に從はず。是の因緣を以て病は最も畏るべし。又復、大王よ、死は最も畏るべし。所以は何に。死の來らん日には、我が壽命を滅じ、忽ち撮りて將て去る。復、力、能く四天下を統べ、金輪もて摧伏し、七寶前に導くと雖も、利刃强兵もて能く遮制し、爭奪せんこと得可らず。是の義を以ての故に、死は最も人を怖れしむ』と。爾の時、頻頭娑羅王、復、更に重ねて菩薩に問ひて言さく、『大聖太子よ、仁は今何をか求むる』。菩薩、報じて言はく、『摩伽大王よ、我の今求むるは、唯是、阿耨多羅三藐三菩提なり。得已れば當に無上の法輪を轉ずべし。是の故に求むるのみ』と。時に頻頭王、菩薩に白して言さく、『大聖太子よ、我が所見の如くんば、仁の心や、勇猛なり。勤劬精進して決定して阿耨多羅三藐三菩提を成するを得んこと、終に疑有る無し。又決んで能く無上の法輪を轉ぜん。善い哉太子、我今仁を見たり。善い哉太子よ、我仁の名を聞けり。善い哉太子よ、仁は善く出家せり。仁は釋種の子なり。我今日より、當に常に承事すべし。大聖太子よ、我今仁に請ふ。恒常に日日、我が宮に來至したまへ。願はくは數、我を見ん

ことを。仁の須ふる所の〔一〕四種の事は、我當に供養して乏少せしめざるべし』と。時に頻頭王、是の語を作し已るや、菩薩、報じて言はく、『大王、當に知るべし。我、今より久しからずして此より移去し、更に餘方に詣らん』と。時に頻頭王、是の語を聞き已るや、十指掌を合して菩薩に白して言さく、『大聖太子よ、仁の心に求むる所、唯願はくは諸魔の障礙有ること莫く、獲んと規する所、願はくは早く成辦せんことを。仁釋種の子よ。願はくは、仁、若し阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、我は仁の邊に於て恭敬供養し、仁の身を見已りて、即ち當に仁の爲めに、聲聞如法の弟子と作るべし』と。即便ち偈を說きて讃歎して言さく、

『我レ頻頭王合掌して讃ず　　唯願はくは太子の道の速に成ぜんことを
若し所作辦じて今の言を憶はば　　諸衆生の爲めに憐愍を賜へ』

爾の時、菩薩、是の語を聞き已りて、即ち王に報じて言はく、『善い哉大王、願はくは王の言の如く、作す所の誓願、彼此倶に善なれ』と。時に頻頭王、十指掌を合して、一心に頂禮し、菩薩に白して言さく、『善い哉太子、今、我が爲めに懺悔を受くべし。我、無智なるを以て、大聖を惱亂せり。太子の欲を離れたまへるを、以て不淨と爲し、我が心は欲に染せるを以て、淨爲りと欲ひぬ。唯、願はくは恕量して、我が此の罪を除きたまへ』と。爾の時、菩薩、熙怡として微笑し、頻頭王に報じて是の如き言を作したまへり、『善い哉大王よ、是の如く是の如し。我は以て、王の清淨なる懺悔を受く。願はくは王よ、安樂に、少病少惱に、身心を謹愼して更に放逸なる莫く、恒に善法を行じて非法を捨離せよ。若し是の如くば、王は安隱を得、多く吉利を受けん』と。是の時、菩薩、頻頭婆羅王の心を慰喩し、法義の說の故に其をして歡喜せしめ、勸請教示し、顯說宣揚して、座より起つて漸く餘處に行きたまへり。

時に頻頭王、即ち前みて菩薩の二足を頂禮し、圍遶三匝して、地に立ちて住し、面を菩薩に向

〔一〕四種事。出家必須の衣服、飲食、臥具、湯藥の四。

け、觀瞻すること少時にして、卽ち彼處より迴還して宮に到りぬ。而して偈有りて說かく、

『菩薩は頻頭の說を印可す　「我成道するを得ば當に王を度すべし」と
大聖を思惟して行くゆく喜歡し　覺えず山より本國に還りぬ』

精進苦行品第二十九の上

爾の時、菩薩、般荼婆山林より出で、安庠として徒歩し、伽耶(Gaya)城に向ひ、既に彼に到り已るや、伽耶尸梨沙(Gayaśīrṣa)山〔隋に象頭山といふ。〕に登上し、身心を攝し、諸惡を滅除せんと欲して彼の山に上り已るや、平整の處を選び、一樹下に在りて草を鋪きて坐したまふ。是の時、菩薩、內心に〔一〕三種の譬喩を思惟す。悉くこれ世間希有の事にして、未だ曾て說けるを聞かず、未だ曾て覩見せず、未だ曾て證知せざるものなり。何等をか三となす。『一には所謂若しくは沙門、若しくは婆羅門有り、復、身體に欲を行ぜずと雖も、而も其の彼等所有の欲中、一切の心意の欲愛、欲惱、欲熱、欲著の滅すること盡きず、未だ正定を得ずして、猶、我相有り、自ら一身をのみ度する彼等沙門及び婆羅門は、恒に苦惱を受け、意に喜ばず心樂まず、知見する能はず、又復、上仁の法を得ず、亦、無畏の處を證する能はざるなり。然も其の彼等は、我相無くして獨り身のみを度せず、苦惱を受けずと雖も、意に不喜不樂を受けずと雖も、猶ほ法、及び無畏の處を知見し證する能はざるなり。譬へば人有り、生濕の木、幷及に〔二〕濕糞を取りて水上に置き、中に就きて火を攢るが如し。人有り、故もて彼岸より來り、其に就きて火を乞はんに、然も是の如きの人、生濕の木、濕糞の水上より、力を出して火を攢り、能く火を得て、彼の人に與ふる有らんや不や　若し能く得んこと、終に是の處無けん。火既に出でざるに、彼の人、從つて求めんも、何にか得んや。是の如く是の如し。若し沙門及び婆羅門有り、欲を行ぜずと雖も、乃至、法を知見し證する能はず』。此は卽ち是、初第一

〔一〕 三種譬喩。第一の譬喩、第二の譬喩は、共に未得正定、猶有我相、自度一身のもの、及び無我相、不獨度身のものが、法及び無畏處を知證せざるを、生濕の木、水上の濕糞より、火を得がたきに譬へ、第三の譬は得自利及以利他のものが法及び無畏處を證得するを、乾燥の木及び乾糞より、火を得易きに譬ふ。第一第二は二乘なり、第三は菩薩なり。火を他に與ふるを主眼とせるに注意すべし。

〔二〕 濕糞。牛糞を乾かして燃料とす。今はその乾かざるもの。

の譬喩、世に未だ曾て有らず、亦、未だ曾て聞かざるなり。

爾の時、菩薩、復、更に第二に思惟念言すらく、『若し諸沙門及び婆羅門、身を禁制して欲を行ぜずと雖も、彼等所有の欲中、意の貪、熱、惱、及び著の滅すること盡きず、未だ正定を得ずして、猶、我相有りて、自ら一身をのみ度せば、徒らに苦惱を受け、喜ばず樂まず、上仁の法、無畏の處を知見し證する能はず。又復、彼等、我相無くして、獨り身のみを度せず、苦惱を受けず、及び心意に不喜樂を受けずと雖も、上仁の法、及び無畏の處を知見し證する能はず。譬へば人有り、生濕[三]の木を取りて、地上に置き、攢りて火を出さんと欲するが如し。亦復、人有り、來從して火を乞はんに、其の此の人に向ひ、生濕の木より、攢りて火を求めんと欲するも、能く火を得て、彼の人に與へんや不や。若し能く得んこと、是の處有ること無けん。是の如く是の如し。是の諸沙門及び婆羅門等、欲を行ぜずと雖も、乃至、法を知見し、證する能はず』。此の第二喩も、世に未だ有るを聞かず。

爾の時、菩薩、復、更に第三に思惟念言すらく、『若し諸沙門及び婆羅門、身を禁節し、欲を行ぜず、彼等所有の欲中、意の愛、惱、熱、及び著、滅盡して正定ならば、此等の沙門、婆羅門等は、自利及以び利他を得て心中に喜樂し、能く知り能く見て上仁の法を得、無畏の處を證せん。譬へば人有り、乾燥せる木、及以び乾糞を取りて地上に置き、攢りて火を出さんと欲し、亦復、人有り、還、此岸より、共に向ひて火を乞はんに、その是の人、少功夫を以て卽便ち火を得、持て彼の人に與ふるが如し。是の如く是の如し。若し沙門及び婆羅門有り、欲を離れて行じ、彼等設し、欲中の意の愛、惱、熱を、皆滅する有らば、乃至、彼の上仁の法を得、無畏の處を證せん』と。此は是、菩薩、第三の譬喩、自らの意念より生じ、悉く是、世間の未だ曾て聞見せざるものなり。

爾の時、菩薩、彼の伽耶尸梨沙山より下り、摩伽陀の聚落內に來り、次第して行き、人に借問し

【三】生濕木。第二者は第一者と同一內容のものなるに關はらず、譬喩に於て、生濕の木のみにして、水上の濕糞なきは、その程度の差を示すものなり。第一を聲聞とせば、第二は緣覺なり。共に不獨度身の上に、やゝ利他の一面を見るも、第三の如く、自他の利を明了に規定せず。

て言はく、『此處に何なる功德の行ずべきか有る。何なる非法の宜しく須らく除斷すべきか有る。我、今、最上の寂定最妙の音辭を求めんと欲す』と。是の如く、前行して伽耶の南に至るに、一聚落有り、其の聚落を優婁頻螺(Urubilbā)と名く。彼處に至るに及び、日は以に食時なり。菩薩、衣を著けて彼の聚落に入り、一陶家に詣り從ひて瓦器を乞ひ、得已りて手に持ち、彼の聚落を歷し、次第して食を乞ひて、一村主長者の家に到る。然るに其の長者を、難提迦(Nandika)隋に自喜といふ。と名く。彼の家に至り已るや、却いて一面に立ち、默然として住す。其の難提迦、自喜村主に一善女有り、須闍多(Sujātā)隋に善生といふ。と名く。彼の女は端正喜ぶべきこと雙無く、諸世人の樂見する所たり。其善生女、遙かに菩薩の、手に瓦器を持ちて默然立住し、食を乞ひ求めんと欲するを見、善生見已るや、其二乳より自然に汁出づ。時に善生女、菩薩に問ひて言さく、『最勝なる仁者、仁はこれ誰の子ぞ。これ何の種姓ぞ。名字は云何。父母は何處ぞ。今、何をか求めんと欲する。仁者、云何ぞ何の神異か有る。今我一見して、我が兩乳をして汁を自然に流れしむ』と。爾の時、菩薩報へて言はく、『善姉よ、我名は悉達、此の名はこれ我が父母の所立なり。我、今、阿耨多羅三藐三菩提を欲求す。得已らば當に無上の法輪を轉ずべし』と。時に善生女、是の語を聞き已り、菩薩の手より瓦器を取りて自家中に入り、香美甘味の飲食、并びに及び種種の餅果、羹臛【四】を滿て盛りて、瓦器の中に溢れしめ、卽ち出でて胡跪し、菩薩に授け奉りて口に是の言を作す『最勝なる仁者、我、願はくは恒常に仁者に供養し、衣服、飲食、臥具、湯藥の四事、須むる所を悉く充足せしめん。唯願はくは仁者、慈悲もて納受したまへ。我、仁者が父母の立名を觀じ、復、仁者の精進勇猛、至意專心なるを見るに、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を成就し、決定して無上法輪を轉ずべきこと、眞實にして疑はず。仁者若し菩提の道を成ぜん時は、當に我が家に來りて我が供養を受け、我を度脫すべし。當に仁が聲聞弟子と作るべし』と。是の時、菩薩報へて言はく、『善姉よ、當に願ふ所の如くす

【四】羹臛。肉のあつもの。

べし』既に食を受け已りて、卽便ち捨てて行く。

爾の時、菩薩、善生女より食を乞ひ得已り、空靜の處にて、如法に食し、食し已りて經行[五]し、漸く一處に到るに、地方平整にして淸淨喜ぶ可く、心に樂みて觀んと欲す。樹林蓊鬱として枝條繁茂し、多饒なる花果、淸淨なる流渠、香美なる諸水、河池泉沼、映發交横し、種種豐饒にて乏少する所無く、彼等諸水は淺からず深からず、澄淸晈潔にして度り易く取り易く、其の內に毒惡の諸蟲有ることなく、妙好の禽獸を周匝具足し、聚落を離れ去ること、近からず遙かならず、往來乞求に、疲無く乏無く、其の間の道陌、土地坦平にして下からず高からず、行き易く渉り易し。若し當に人有り、無上最勝の利益を欲求せんに、得易く成じ易く、速に辦じ速に證すべし。兼ねて蚊虻及び諸蟲蝎を絶ち、又喧鬧ならず、晝は行人の往來擾亂少なく、夜は音響を斷ちて安靜淸閑に、冷煖調和し、風雨節に順じて、道を修し、禪定もて心を修むべきに堪ふ。

又往昔の時、一王仙有り、名けて伽耶(Gaya)〔隋に象といふ〕といふ。中に在りて停住せり。これは彼の王仙の舊城居處なり。爾の時、菩薩、此の地を見已りて是の如く思惟す『此の中の地勢、快好方平なり。暫く觀て、卽便ち人の樂む所と爲り、乃至、道を修し禪を行ずべきに堪ふ。若し丈夫有り、無上最勝の利を求め、諸惡を斷ぜんと欲せば、此の地に安止して住するに足り堪ふ。我、今、既に諸惡を摧伏し、諸善根を修せんと欲す。宜しく應に停止して此處に坐し、以て菩提を求めて必ず成就せしむべし』と。菩薩、是の如く心に思惟し已り、卽便ち草を取り、鋪きて此の地に坐し、禪を修習せんと欲す。既に坐定まり已るや、心に是の如く念ず『諸衆生をして解脱を求めしむれば、悉く種種衆雜の苦行を行ず。所謂、或は諸衆生輩有り、一手を懸け住めて以て世間一切の諸事を捨つ。有爲法の故なり。彼等、是の如き苦行の人、或は食を乞ふ時缸[六]口の內より食を受けず、或は小口の鉢內より食を受け取らざる有り。或は兩羊の間より食を受け取らざる有り。或は人の糞穢せ

【五】經行。經策、散步、徘徊等に同じ。

【六】缸はかめなり。

る間より食を受け取らざる有り。或は杖に挂る人の邊より食を受け取らざる有り。或は刀杖を執る人の邊より其施食を受けず。是の如く、[七]碓間より、及び婦人の不淨の來る時を知れば、從つて食を受けず。或は婦人懷妊の時を見るや、亦復、其の邊より食を受けず。或は人家に不淨の業有るを知れば、從つて食を受けず。或は酒に醉へる人の邊より其食を受け取らざる有り。或は兩人食を喫する時に、亦復、其の邊より食を受けざる有り。食を受けんとする時、狗の前に來る有れば、亦食を受けず。又食を受くる時、其の上に或は蚊虻等の來る有りて不淨穢惡なれば、亦從つて受けず。或は復、人有り、唱呼して、「來れ汝に食を與へん」と喚べば、亦從つて受けず。人有り唱へて、「汝、住れ、食を與へん」といふも亦從つて受けず。或は人唱へて、「我は食施をなさん、汝當に待つて取るべし」と言ふも、亦從つて受けず。人有りて、故に、爲に食を造作するも、亦從つて受けず。或は復、人有りて、諸天を祭祀せる殘餘の食も、亦從つて受けず。食內に若し沙糖石蜜有るも、亦從つて受けず。蘇油等有るも、亦從つて受けず。食內に或は乳酪等の物有るも、亦從つて受けず。食內 若し魚雜肉等有るも、亦從つて受けず。或は食內に[八]興渠(guggula)臭熏の諸辛味等有るも、亦從つて受けず。或は復、止一家の食を受けて一口に齊りて止め、或は二家を受けて、兩口に至りて止め、乃至、或は七家の食を受け、還復、七口を食して止め、或は復、一日、止一時に食し、或は復、一日兩時に食し、或は復、一日半に始めて食を喫し、或は三日を經て乃ち一食を喫し、或時は一日に少許を食し、或時は兩日に亦少許を食し、乃至、七日に亦少許を食し、或は唯菜を食し、或は唯稗根を食し、或は復、唯、樹の嫩き枝條を食し、或は唯、酪を食し、或は復、唯、[九]迦尼迦羅樹(kaṇikāra)の枝柯を食し、或は復、時有りては純ら羊糞を食し、或は復、時有りては純ら牛糞を、或は[一〇]烏麻(umā)滓を食し、或は果子を食し、或は諸種一切の草根を食し、或は藕根を食し、或は種種の草の嫩き枝條を食す。或は復、唯、空しく水を飲み以て活命する有

【七】碓間。碓はつきうす。大正藏に碓とするは誤り、方廣大莊嚴經の同類の記事に「鬪杵臼……卽止不行乞」とあり、碓をつける家よりは食を乞はずといふを、略餘せるなり。

【八】興渠。五辛の一。

【九】迦尼迦羅。學名 Pterospermum acerifolium. 四時黃金色の花をつく。

【一〇】烏麻。亞麻のこと、烏麻滓は草滓（あくそ）なり。

り。或は宜しきに隨ひ、得る所の多少、卽ち以て活命する有り。或は復、野獸の草を食し、以て活命を學ぶ有り。或る時には、地に立ちて卓然として住し、或は復、一定に坐して移らざる有り。或は復、四支、地に柱著し、口を以て食を受くるあり。或は唯、純草の衣を著する有り。或は唯、塚間の弊衣を著する有り。或は復、種種の草衣を著する有り。或は復、憍奢耶衣を著する有り。或は白桃の皮を以て衣となし、或は龍鬚を以て衣と作し、或は復、諸畜生の皮を以て衣と作す有り。或は復、故畜生皮を用て衣と作す有り。或は諸の毛毯を以て衣と作す有り。或は諸畜生の皮を破り、條となして衣を作る有り。或は復、糞掃を以て衣と作す有り。或は躶形なる有り。或は棘上に臥し、或は板上に臥し、或は復、摩尼の上に臥す有り。或は椽上に臥し、或は塚間に臥し、或は蟻垤の内に猶蛇の如くに居し、或は露地に臥し、或は復、水に事へ、或は復、火に事へ、或は日を逐うて轉じ、或は其の兩臂を擧げて住する有り。或は蹲坐する有り。或は復、沙土烟塵を用て以て身に塗坌し、正立して住する有り。或は頭首面目を梳洗せず、髮は螺髻の如く、拳攣して住し、或は復、髮を拔き、或は髭鬚を拔き、或は復、泉池井河渠源の諸神、地神、樹神、林神、山神、石神、夜叉、羅刹、羅睺（隋に語言といふ）阿修羅王、婆梨（隋に鈎といふ）阿修羅王、毘摩質多羅（隋に妙織といふ）睒婆利等の阿修羅王に事ふる有り。或は歲星に事へ、或は醫藥王仙人に事ふる有り。或は婆羅墮仙人に事へ、或は復、瞿曇仙人に事ふる有り。或は毘沙門天王に事へ、或は復、童子の天(Kumāra)、或は自在天に事ふる有り。或は復、日に事へ、或は復、月に事へ、或は復、那羅延天(Nārāyana)、或は帝釋天に事ふる有り。或は梵天に事へ、或は護世の四大諸天に事ふ。是の如く各事へて、歡喜せしめ已り、從つて願を乞ひ求め、願を稱へ得已りて、各解脫を求む』。菩薩、既に彼等の是の如く解脫を邪求するを觀じ、見已りて發心し、畏るべき極苦の行を行ぜんと欲す。而して偈有りて說く、

『菩薩既に尼連河(Nairañjanā)に至り　清淨心を以て岸邊に坐し

【二】邪求。苦行によつて求むるは、中道にあらず。誤れるを以て、邪行といふ。こゝに掲げらるゝ苦行の種々相は、印度に於ては珍とするに足らず。

諸の求道の眞ならざるが爲の故に　大苦を行じて彼の邪を化せんと欲す』

爾の時、菩薩、是の如く觀察して專正に思惟し、坐し訖りて口を合し、齒を以て相柱へ、舌もて上腭を築き、一念に攝心し、是の如く繫念して身意を調伏し、齒と舌と腭とを以て、攝心繫念して修習する時、腋下に汗流る。菩薩、既に汗の是の如く流るるを見、更に復、重ねて勇猛なる精進を發し、心に著する所無く、錯まらず、亂れず、寂靜心に住して一定不動なり。是の如く最上に身意口を苦しめ、悉く皆不動ならしむ。是の時、復、是の如き念言をなす、『我今、不動三昧に入るべし』と。

爾の時、菩薩、口よりの喘息及び鼻氣を悉く皆滅除す。口鼻滅し已りて、卽時に便ち兩耳孔の中より大風聲を出す。其の風聲の氣は、猶ほ酥を攢めて大甕裏に在り、酪を搖攪して大音聲を出すが如く、是の如く是の如し。菩薩が、其の口鼻の氣を閉ぢて出でしめざる時、兩耳孔より風氣聲を出すも、亦復、是の如し。菩薩、復、念ずらく『我、今已に精進の心を發し、染著する處無く、懈怠を捨て、乃至、是の如く、最上に苦行し最上に難行す』と。重ねて復、思惟すらく『我、更に不動三昧に入るべし』と。

爾の時、菩薩、既に身及び口意を寂定し已り、還、口鼻及び耳の喘息を止めて、一切皆杜づ。既に口鼻耳を悉く寂定し已るや、內風壯大にして出づるを得ざるが故に、氣、頂を衝く。譬へば、勇健最大力の人、好利斧を取りて他の腦を打棒するが如し。是の如く是の如し。菩薩、其の口鼻及び耳より、氣を閉ぢて出さず、內風壯んなるが故に腦を打つ聲も、亦復、是の如し。菩薩、復、念ずらく『我、今、已に精進の心を發し、染著する處無く、懈怠を捨て、乃至、是の如く最上に苦行し、最勝に苦行す』と。是を思惟し已りて、卽便ち更に不動三昧に入る。

爾の時、菩薩、口鼻耳及び頂より喘息を一切皆停め、其をして出でしめず、乃至、遮止して出づ

るを得ざるが故に、內風强盛にして兩肋間に在り、迴轉して鼓動す。譬へば屠兒の如し。或屠兒子は、善く牛を殺すことを解す。彼の屠等、或は利劍を執り、或は利刀を捉りて牛肚を破り、或は復、肋を破る。是の如く是の如し。菩薩、乃至、內風强きが故に兩肋間に轉じて穿破するの聲も、亦復、是の如し。是を思惟し已り、乃至更に精進の心を發す『最勝の苦行して、我今、還、不動三昧に入らん』と。

爾の時、菩薩、口鼻耳より氣を閉ぢて出さざれば、內風强きが故に身をして熱惱せしめぬ。譬へば最大二壯力士が一弱人を取るに、各一臂を執りて、其を將て彼の大火聚の上に向ひ、或は惱まし、或は炙る如し。是の如く是の如し。菩薩、內氣の出でざるを以ての故に、身に熱惱を受くるも、亦復、是の如し。是を思惟し已り、乃至、更に精進の心を發し、一切に著する無く、已に懈怠を捨て、正念を得て、心散亂せず、一切寂靜にして身口及び意並びに正受を得たり。是の如く勝妙最上に苦行しぬ。

爾の時、上界に諸天の來る有り、菩薩の是の如き苦行を見、各相謂ひて言はく『今、此の悉達大智太子、已に命終を取る』と。彼の衆中に、復更に別に其の餘の天子有り、共に相謂ひて言はく、『此の悉達太子、現に今、其の命未だ終らざるも、始めて盡を取らんとす』と。或は復、更に諸天子有りて言はく『此の悉達大聖太子、現に今死せず。後にも亦終らざらん。何を以ての故に。此の太子は、これ阿羅漢なり。凡そ羅漢には、是の如き行有り。須らく之を怪しむべからず』と。

爾の時、菩薩、彼の蘭若、心を用ふる所の處に在りて苦行を作す時、卽ち最大の苦行を成ずるを得たり。是の時、菩薩の坐處の四面周帀、有らゆる隣比の聚落の諸人、皆來りて菩薩の是の如く苦行するを見て、是の如きの言を作す『此の沙門、旣に大苦行を行ぜり。是の故に名を立てて大沙門といふ』と。大沙門の名は、彼の唱に起る。是の義を以ての故に、此の名稱有り。

爾の時、菩薩、復、更に是の如く思惟す、『世間に或は沙門有り、或は婆羅門あり、食を制限するが故に行を建立し、各清淨を守る。彼等、或は復唯、麥を食し、或は煮麥を食し、或は麥屑を食し、或は麥を以て種種の諸食を作し、以て活命す。是の如く更に復、或は烏麻を食し、或は粳米を食し、或は小豆を食し、或は大豆を食し、乃至、或は純大豆の飯を、或は大豆の汁を、或は大豆の屑を食し、或は大豆を以て種種の食を作し、持用て活命す。或は沙門及び婆羅門有り、一切の食を斷じ、淨行を建立す。我も今、亦、一切の食を斷じて、苦行を行ずべし』と。菩薩、是の如く內心に思惟す。

爾の時、彼處に忽ち諸天有り、身を隱し現ぜずして菩薩の所に來り、菩薩に白して言はく、『大聖仁者、願はくは是の如く、是の念を思惟し、全く斷じて、一切食せざるを得んと欲する莫かれ。所以は何に。仁、今若し、一切の食を斷じて、行を行ぜんと欲せば、我等諸天、各一切の天味を將て下り來り、仁者の毛孔の中に入れ、仁者をして命を存活するを得しめん。又復仁者、身を損害せざれ』と。爾の時、菩薩、此の語を聞き已り、是の如く思惟す『我、今、既に一切人に語りて、『我は全く一切の諸食を噉はじ』と言へり。而して今、諸天、自ら其身を隱し、天味を將て來り、我が毛孔に入れ、我をして活命せしめんと。此は則ちこれ我が最大の妄語にして、一切を誑惑す』と。是の如く念じ已りて、彼の天に告げて言はく『汝等諸天此の心有りと雖も、是の事然らず』と。

爾の時、菩薩、彼の諸天の是の如き意を斷じ已るや、日に別に止一粒の烏麻、或は一粳米、小豆大豆、[三]菉豆赤豆、大麥小麥を食し、是の如くして日日、各別に一粒なり。是の時、菩薩、復、更に思惟すらく、『我は今、手掌を以て少少の汁飲を盛り取りて、命を活かすべし。或は小豆の臛赤豆豌豆、綠豆の臛等なり』と。

爾の時、彼の聚落を去る遠からず、其の中に一の最大種姓の婆羅門有り、斯那耶那 (Senāyana)

【三】菉。或は綠に作らる。

隋に將兵將といふと名く。彼の婆羅門、摩伽陀國頻頭王の邊より一聚落を得、以て封邑と爲す。其の邑は卽ち優婁頻螺聚落と相近し。彼の婆羅門封邑を得已るや、還字を立てて斯那耶那と名けたり。復、更に別に一婆羅門有り、名けて提婆(Deva)隋に天といふといふ。彼の婆羅門の生地は、彼の迦毘羅城に在り、一事を經營して、漸漸に行きて斯那耶那村邑に至りて住し、少日客と爲る。是の時、提婆婆羅門、更に別の事を經營し、因りて行き、漸く菩薩の住林に至る。時に其の提婆婆羅門、菩薩の林に在りて大苦行を行ずるを見、見已りて卽ち識り、是の如き言を作す『此はこれ我が國の悉達太子なり、乃ち能く是の如き大苦行を行ず』と。彼は菩薩の是の如く苦行するを見、心に大いに歡喜しぬ。

爾の時、菩薩、彼の提婆婆羅門の、心を菩薩に向け、歡喜を生ぜるを見已り、卽ち提婆婆羅門に告げて言はく、『大婆羅門よ、汝能く我が爲めに少許の食を辦じ我を活かすや已不や。若しは小豆の臛にあれ、大豆、菉豆、赤豆等の羹にあれ、我、之を食ひて持用つて活命せん』。彼の婆羅門、心狹劣なるが故に、少見少知にして廣大の意無きも、布施を行ぜんと欲して、此の語を述可し、菩薩に報へて言さく、『大聖太子、是の如きの食、我、能く之を辦ぜん』と。彼の婆羅門、六年中に於て日に別に上の如き所須の食を以て菩薩に供へ、菩薩は日日此の食を受け取り、法に依りて食し、以て身命を活かしぬ。

爾の時、菩薩、但、手掌を以て日に別に從つて受け、少許を得るに隨つて命を活かす。或は小豆の臛及び赤豆等なり。是の時菩薩、食を受くること既に少く、掌の容るる所に隨ふ。上の所說の如く、諸豆汁の食なり。菩薩、是の如く彼の食を食し已り、身體羸瘦、喘息甚だ弱りて、八九十の衰朽せる老公の、全く氣力無く、手脚不隨なるが如し。是の如く是の如く、菩薩の支節連骸も亦然り。菩薩、是の如く食飲を減少し、精勤苦行して、身體皮膚の皆悉く皺赧なること、譬へば苦瓠の如し。未だ好く成熟せざるに、其の蔕を割斷して日中に置けば、炙られて萎黃し、其の色以に

熟するも、肌は枯れ皮は皺み、片片自ら離れて枯頭骨の如し。是の如く是の如く、菩薩の髑髏も猶是と異なる無し。菩薩、旣に食を進むる少きを以ての故に、其の兩眼の睛、深遠に陷入して、猶、井底の水に星宿を望見するが如く、是の如く是の如く、菩薩の兩眼も、之を視るに纔かに現はること、亦復、是の如し。又復、菩薩、少食なるを以ての故に、其の兩脅肋、離離相遠かり、唯皮裹有るのみ。譬へば牛舍、或は復、羊舍の上に椽木を著けたるがごとし。

　時に彼の聚落の有らゆる羊子、牛子、馬子、彼の林に行きて、菩薩の是の如き苦行を見、見已りて、各各大歡喜を生じ、希有の心を發し、恒常に承事して菩薩を供養しぬ。

卷の第二十五

精進苦行品第二十九の下

爾の時、淨飯大王、盛春の時至り、遊戯觀看して諸園林を見たまふに、新に枝葉を出し、種種の雜卉、衆花開敷して清淨莊嚴に、其內に遍滿し、水中の鵝、雁、鴻、鵠、鴛鴦、諸池に充溢し、樹上、復、鸜鵒、鸚鵡及び拘翅羅、或は諸の孔雀、迦維頻伽、命命鳥等有りて、自ら相娛樂し、或は復、命喚して微妙の聲を作す。時に淨飯王、是の聲を聞き已りて長歔歎息し、淚を揮つて言はく、『嗚呼、我兒悉達太子、忽然我を捨てて奄ちに六年を經るも、既にそれ出家して我をして見ざらしむ。咄哉、我今獨り用つて此に活くるも、復、何爲るかを知らん。我今、子、悉達を見ざるが故に、此處に在つて諸の婇女の中に左右圍遶せられ、復、晝夜に諸の音聲、箜篌、琵琶、琴瑟、鼓吹、種種の音樂を作すと雖も、我今、此の上妙の五欲を受くるに、我が子、云何ぞ獨り、自ら彼の山林曠野、無人衆の內に在りて、種種の野獸——虎、狼、師子、及び白象等の一切の諸獸に圍遶せらるるぞ。或は復、諸獸、各、爪牙を以て自ら相殘害し、齩噉して食はんに、汝が彼處に在るを、誰か復知るを得ん。或は死せるか、或は生くるか、寂として消息なし。其の淨飯王の心地、是の如く憶念し愁憂し苦惱して樂しまず。

爾の時、菩薩、彼の優婁頻螺の聚落に在りて苦行を行ずる時、羸瘦困弊、起つて行動せんと欲するも、力身に勝へず、立てば便ち地に倒る。爾の時、彼の處の地居諸天、此の事を見已りて謂つて言はく、『菩薩の身命、將に終らんとす』と。心內に憂愁して傳へて相告げ語る、『悉達太子、今、忽ちに命終す』と。時に彼の地居諸天衆の中に、一天子有り、速疾に淨飯王の所に往詣し、既に彼に到り已りて、淨飯王に白して是の如き言を作す、『大王、當に知るべし。大王の太子、悉達仁者は、

四天下幷及びに七寶を捨てて出家入山し苦行するの時、今已に命終しぬ』と。其の天衆中、復更に別に、一地居天有り、速に王の所に往きて、王に白して言はく、『大王、當に知るべし。悉達未だ命終せずと雖も、但其の餘命は七日に過ぎず』と。

爾の時、淨飯大王、既に諸天の是の如く語るを聞き已りて、子を念ふが爲の故に憂愁苦惱し、心を逼切して大唱して言はく『嗚呼、我子、何が故に獨り空林に於て死せるか、人身を得と雖も五欲を受けざるに、復、無上の法味をも證せざるか』と。是の語を作し已りて身心迷亂し、悶絶して地に躃る。時に淨飯王の諸釋種族、悉く此の聲を聞き、聞き已りて悉く各奔集して、淨飯王の宮に往詣し、到り已りて淨飯王の心を安慰して、是の如き言を作す『大王よ、是の如き苦惱を作す莫れ。又、復、大王が現今の身體、極めて甚だ羸瘦す。此の事に因つて命終を取ること莫れ』と。淨飯王言はく、『今日、此の處の迦毘羅城に、是の我が親族、眷屬、品類、凡そ幾數有つて此の城に居住するか』と。爾の時、彼等一切の釋種、即ち王に白して言はく、『大王、當に知るべし。今、釋の總數、一切凡そ九萬九千有り』と。時に淨飯王、復、是の言を作すらく、『汝等眷屬、若し我が命をして全活せしめんと欲せば、速疾に我が悉達太子の居停する處を示せ』と。是の時、一切の諸釋種等、咸、共に報へて言はく、「大王、當に知るべし。大王よ。乃ち、此の大地及び諸山林、鐵圍山等の大海須彌を捉へ、一手を以て擧げて他方に擲つべきか、斯に是の理あらんも、悉達をして煩惱未盡ならしめんと欲し、若しは當に一切の天上、世間の人物を聚集して、太子を將ゐて來り、家に向はしめんと欲すること、終に是の處無からん』と。爾の時、釋氏の國師の子を優陀夷(Udayin)と名く。淨飯王に白して是の如き言を作すらく、『大王、當に知るべし。我今、能く悉達太子、出家の處に往きて、其の意を慰喩し、將ゐて宮に迴向せん』と。其の淨飯王、是の語を聞き已りて即便ち彼の國師の子に報へて言はく、『善優陀夷、汝能く太子の邊に詣り向はば、或は復、太子、汝の語を取りて

歸來して家に向ひ、汝と共に一處に速疾に還り來らん。若し、其の太子、肯ひて來らざる時は汝が[一]永き一形、我が面を見ること莫れ。所以は何に。汝の此の言を發する、我が意を解くと雖も、若し子來らずして、我、汝の面を見ば、承望を以ての故に、更に倍我が憂愁を增長すればなり』と。

爾の時、國師の子、優陀夷、駕を嚴めて、即ち迦毘羅より出で、徑ちに往いて彼の優婁頻螺聚落の所、尼連河の邊に向ふ。既に彼に到り已りて、其の優陀夷、初先に[二]憍陳如(Kauṇḍinya)等五人の彼に在るを遙見し、見已りて即ち憍陳如に問うて言はく、『仁、憍陳如よ、悉達太子は今何處に在はすか』。時に憍陳如、即便ち彼の優陀夷に報へて言はく、『悉達太子は、今已に林に入つて苦行を修行したまふ』と。時に優陀夷、復、重ねて問うて言はく、『其の親侍する者の名字、是れ誰ぞや』。是の憍陳如、即ち之に報へて言はく、『汝、優陀夷、若し知らんと欲せば、其の人の名を[三]阿奢踰時(Aśvajit)といふ。隋に調馬と爲す』と。時に優陀夷、即便ち進んで阿奢踰時に語つて、是の如き言を作さく、『阿奢踰時、汝、今、太子の所に往詣し、我が語る所の如く、我が爲に通じて道へ。仁が父、使有り、來つて此に到り、相見ゆるを得んと欲す』と。時に調馬、優陀夷に報へて言はく、『我實に、敢へて太子の邊に向つて此の語を通達せじ。所以は何に。太子の苦行、已に六年を過ぐれど、出家より來、曾て面を將つて生地に向け、迦毘羅城邑に對して坐せず。何を以ての故に。生の患を厭ふが故なり。汝優陀夷、自ら林に入つて、面り太子を見て、父王が使する所の言語を對論すべし』と。

時に優陀夷、自ら林中に入りて、菩薩の地上に臥すを見るに、頭より足に至るまで、皆塵坌を被りて威光有ること無く、地と同色にして身體瘦削し、復、肌膚無く、唯骨皮の身を裹む有るのみ。眼は深く却陷して井底の星の如く、遍體屈折し節節離解す。其の優陀夷、菩薩の是の如き身形を見て、即ち兩手を擧げて大いに唱叫し、稱喚號哭すらく、『嗚呼嗚呼、我が釋種の子、今日、忽ち是の如き厄難に至る。本時は是の如く端正喜ぶ可く、是の如く妙色なりしを、今、此る身と成りて土

【一】永き一形。身體のあらん限り、即ち一生涯の意。

【二】憍陳如。太子が出家入山せる時、父王が從屬して共に修行せしめし五士の一人、後に出家して比丘となり、五比丘の第一に位す。

【三】阿奢踰時。五比丘の一人にして、他には馬勝と譯す。舍利弗、目連が歸佛するに至れる因緣は、この比丘の風貌に打たれてなり。

と異ることなく、旣に復、解脫安樂を得ずして、是の如きの妙身を徒勞損害したまふ』と。

爾の時、菩薩、優陀夷の號叫する聲を聞き已り、卽便ち問ひて言はく、『此は是れ誰ぞや。內心に乃ち爾かく憂愁懊惱して火に燒かるるが如く、啼哭して語るは』と。時に優陀夷、菩薩に報へて言さく、『大聖太子、我は是、太子が本國の國師の子、名を優陀夷と爲す者、卽ち我が身是なり。太子の父、淨飯大王、我をして此に來つて太子を參迎せしむ』と。菩薩報へて言はく、『汝、優陀夷、我今、此の煩惱の使を須ひず。我は唯、涅槃の使を得んと欲するのみ。父王の此の生死の使を欲せず』と。

時に優陀夷、復、更に、菩薩に諮請して言さく、『大聖太子、仁、今、何等の誓願を建立してか、乃ち爾かく牢固なる』と。菩薩、卽ち優陀夷に報へて言はく、『唯、願はくは、我が身の此の地に在りて破碎すること、猶烏麻の實、白芥及以び微塵の如くならん。若し我、自利利人を得ずんば、其の精進心を終に放捨して懈怠を生ぜじ。我、今、身心に誓願すること是の如し』と。時に優陀夷、菩薩に白して言さく、『大聖太子、我、太子の父王の前より是誓言——我をして決定して太子と共に相隨つて城に入らしめん——を受けぬ。今日、太子に若し是の如き殷重の誓願——儻し或は未だ自利利人を得ずして命盡を取らんや——有らんには、我當に云何んぞ敢へて太子を捨てて本誓願に違ひ、面を將つて空しく迦毘羅城に入るべき』と。

爾の時、菩薩、復更に重ねて優陀夷に語つて言はく、『汝優陀夷よ、我今此の苦行の處に在り、儻し我未だ自利を成就するを得ずして、其の中道に於て命終せば、汝優陀夷、我が屍靈を取りて、本出でたる門より、扶舁して迦毘羅城に將ち入れ。汝、復、我が爲に彼の一切迦毘羅城內外の人民に語つて、是の如き言を作せ、「此は卽ち是彼の精進の人、異語無きもの、誓願を立てて正意正心なりし者の骸骨の體なり」と。汝、優陀夷、更に復我が爲に、我が父王の問訊する所の語に答へ、汝、

我が父に諮して是の如き言を作せ、「大王、當に知るべし。王子已に勤精進を發ししが故に、今已に命を捨てぬ、懈怠に因るには非ず。如實語者、今既に命を捨てぬ、是虚誑に非ず」と。汝、優陀夷よ、我今然りと雖も、但我、此の林中に在りて、夜、是の如きを夢みぬ、無量の諸天、身を隱して我が邊りに來り、我が足を頂禮して我に白して言さく、「悉達太子、汝今當に大歡喜を生ずべし。今よりして已去七日の内に至り、汝、必ず最大利益を剋成せん」と。汝、優陀夷、我が此の夢を得たるは、終に空しからじ。汝、優陀夷、今家に還る可し。我、汝が我と友と作るを用ひず』と。爾の時、優陀夷、既に菩薩の是の如く誓ふを聞き已り、菩薩の所に於て復望心無し。即ち菩薩坐せる處の林中より、獨自にして出で、出で已りて迦毘羅城に還り至り、淨飯王に見え、到り已りて即ち淨飯王に白して言はく、『大王、當に知るべし。王子悉達は、平安勇猛、存活して死にたまはず』と。淨飯王言はく、『若し我が太子、安隱にして死せずんば、我更に何をか愁へん』と。此の語を聞き已りて心大いに歡喜す。

爾の時、欲界の魔王、波旬(Pāpiyān)、菩薩の爲に擾亂を生ぜんと欲するが故に、彼の六年の苦行の内に於て、恒常に密に菩薩の左右に近づき、其の便を伺ひ求めしも、微毫の過失だも得る能はず。即ち偈を說いて言はく、

『阿蘭若の處既に精好　樹木叢林甚だ觀る可し
優婁頻螺聚落の東　尼連禪河岸の隣側』
彼處を選擇して地を得已り　誓願牢固として跏趺を結び
大精進勇猛心を發すらく　「我今決定して解脫を得ん」と』
魔王波旬彼に來詣し　詐りて美語以て白して言はく
『唯願はくは仁者の壽命長かれ　命長ければ乃ち能く法を行ずるを得』

命長ければ方に自利を得　　自利し已りて後悔心無し
仁今身體甚だ尫羸　　定めて命盡を取ること當に久しからざる可し」
眞實に仁今や千分死し　　福德もて悕ふに或は一分存せん
但多くの布施もて天に承事し　　諸の火神に於て祭祀を修せよ」
此の如きは或は大功德を得ん　　用つて禪定を學ぶも何の爲にかせん
嗏出家を求むるの道は甚だ難く　　自心を調伏するも亦易からず」
魔王是の如く菩薩に向ひ　　種種の諸語もて稱揚す
菩薩時に微妙の言以て　　音聲巧密に彼に報ふらく
「波旬よ不善なる汝は放逸なり　　自利を求むるが故に世間を行くのみ
汝は此の福德心に於て　　終に微塵等も求覓むるなし」
若し福德を求めんと欲せば　　豈是の如き言を發吐す可けんや
我は死苦を觀ずる猶生の如し　　實に一念を盡くるを怖るる無し」
若し諸の衆生皆滅沒せんも　　我が心終に暫時も迴らじ
今や欲海に架して大橋を建て　　精進勇猛に梵行を修せん」
風災天下に起るが所以に　　尙能く一切の流を乾竭せしむ
況んや此の身內津血の間　　其の汁寧んぞ枯涸せざるを得ん」
脂髓の潤澤先づ竭きて　　然る後に皮肉方に乃ち乾かん
肉消え皮立ち氣力微かにして　　心意乃ち寂定なるを得可し」
一切の精進を增長せんには　　唯だ三昧門に入ること有るのみ

我今此の行を行ぜんと欲する時　此の勝覺の處に至るを得んを望む』
所以に此の身命を惜まず　汝須らく我が内の淨心を知るべし
我が心に今此の至誠有り　智慧の莊嚴甚だ牢固なり』
世間に、未だ見ず、人輩有りて　能く我が此の精進を斷ずるに堪ふるを
我は寧ろ死の爲に命を奪はれて休まむも　長年を用つて在家に活きじ』
丈夫は寧ろ當に鬪戰して死すべし　終に命在して他に降るを爲さじ
健兒既に能く他を降伏せば　降し已つて更に復何の畏るる所ぞ』
唯健のみ能く諸怨敵を破る　我當に久しからずして汝魔を降すべし
汝の軍第一は是欲貪なり　第二は名けて不歡喜と爲す』
第三は飢渴寒熱等にして　愛著は是れ第四軍と名く』
第五は卽ち彼の睡及び眠　驚怖恐畏は是れ第六』
第七は是れ狐疑惑なり　瞋恚忿怒は第八軍
競利及び爭名は第九にして　愚癡無知は是れ第十なり』
自譽矜高は第十一にて　十二は恒常に他人を毀るなり
波旬よ汝等の眷屬然り　軍馬悉く皆黑暗を行く』
【四】其れ此の惡行に墮する有る者は　是れ彼の沙門婆羅門なり
汝の軍は恒常に世間を行きて　一切の天人類を迷惑せしむ』
我今汝が彼の軍馬を見れば　妙智慧を以て勝兵を嚴にし
悉く能く降伏して餘なからしめ　盡く汝の大軍衆を破らんこと
猶水の坏瓶器を破るが如く　汝の軍を消散せんこと亦復然らん』

【四】其有墮此惡行者、是彼沙門婆羅門。惡魔の誘惑によつて、惡行に墮するものは、彼等沙門婆羅門にして、我は然らず。是等の沙門婆羅門は、汝惡魔の軍として、一切の天人を迷惑せしむといふ意味なるべし。次の長行に自利を求めしが故に、大苦を受けし沙門婆羅門を擧ぐるに徵して、之を知る。

我が心正念にして安きこと山の如し　　智慧も方便も皆成就し
無放逸の心もて行を行ず　　汝何ぞ能く我が瑕疵を得ん』

爾の時、菩薩、復、是の如き思惟を作して念言したまはく、『若し沙門及び婆羅門有りて、過去世の時に自利を求めしが故に、大苦を受けて或は心喜ばず、或は復、身心悉く皆喜ばず。是の如くにして、彼の諸沙門及び婆羅門の受くる所、此の苦のみに過ぎざりき。我の如きは、今、自利益を求むるが故に、今、此身意及び心に不喜等の苦を受けぬ。若し復、來世、諸沙門及び婆羅門有りて、自利の爲の故に受くる所の身心一切の苦も、此に過ぎじ。我の如きは、今、自利益を求むるが故に、身心に苦を受けて、唯、未だ上人の法を證得せず、未だ知見を得ず、增益を證せず。更に復何れの道にてか、菩提を取らん』と。菩薩、更に復是の如く思惟したまはく、『我は念ふ、昔、父王の宮內に在りて作田を觀し時、一の涼冷なる閻浮樹の蔭に値ひ、我、彼を見已りて彼の蔭下に坐し、一切諸の欲染心を捨離し、一切の不善の法を厭薄し、分別心を起して寂定を樂み、喜樂を生じて初禪を證得せり。我今復、彼の禪定を念ずべし。此の路、應に菩提の道に向ふべし』と。菩薩是の如く思惟し、念じ已りて如法に正觀一心にして、彼の寂定に入り、此の道に因つて菩提に至らんを望みぬ。即ち偈を說いて言はく、

『此の法既に是離慾に非ず　　亦復正しく菩提に趣くに非ず
又解脫の勝因に非ず　　但是身心の苦の本
若し我今に於て修學を欲せば　　應當に昔彼の閻浮樹の下蔭に坐して
作田を觀しが如くすべくば　　染を離れて四禪定を獲證せん』

爾の時、菩薩、復是の如き思惟を作して念言したまはく、『彼の樂のみ、唯、諸欲及び不善法に遠ざかる　我今豈、彼の樂を知らざるべけんや。我今乃ち、彼の樂を證すべきが故に、爲に一切の智

見を成就せんと欲す』と。菩薩、更に復是の如く思惟したまはく、『我、樂を成就し知見せんと欲せば、應に樂を生ずるを得べけんも、但我羸瘦して氣力有るなし。豈、身瘦無力を以ての故に、能く彼の樂を得可けんや。我今身に力を求めんが爲の故に、麁食を食ふ可し。或は復、煮豆、或は䴵、或は麨、或は油、或は酥もて此の身に塗り、然る後、暖水の澡浴を求めん』と。

爾の時、菩薩、彼の侍者婆羅門に語つて言はく、『提婆仁者よ、我、今より更に前の如き飮食もて活命するを用ひず。我が意、此の食に勝るを求め、食ひて以て活命せんと欲す。或は麨、䴵、煮豆等を飮食し、或は酥油脂もて此の身に塗り、及び暖水に浴せんと欲す。汝、能く、我が爲に此の事を辦ずるや不や』と。是の時、提婆、菩薩に白して言さく、『我に今是の如き諸事有る無し。又、我が家は貧にして此等の諸物を辦ずるに堪ふる能はず。兼ねて復、我今、若しは、卽ち仁の與に、亦、未だ卒かに得ず。仁、但誓を立てよ。我、仁の爲に方便して求覓むべし』と。菩薩問ひて言はく、『汝、今我をして何の誓を作さしむるか』。是の時、提婆、菩薩に白して言さく、『若し仁、苦行の訖了らん時、心願の滿つるを得ん。仁、彼の時に於て、仁、法分を分てよ。復、我が家に至りて、當に我が食を受くべし』。菩薩報へて言はく、『汝の所願の如くせん』と。爾の時、提婆婆羅門、菩薩の是の如く其を印可するを聞き已るや、卽便ち菩薩を奉辭して去り、還、彼の斯那耶邪婆羅門の家に詣り向ひ、到り已りて彼の婆羅門に語つて言はく、『仁者、庶幾くは、復、法行を樂しめ。今、此の聚落より相去ること遠からずして、一の沙門有り、大苦行を行ず。彼は食はざる來、年月淹かに久しく、今、食を求めんと欲す。或は飯、麨、䴵、酥、脂、蜜等、或は復、煮豆なり。及び身に油を塗り、幷に澡浴すべし。仁者、今、彼が與に之を辦ずべし』と。

爾の時、軍將斯那耶邪婆羅門の家に二女有り、一を難陀（隋に喜と言ふ。）と名け、二を婆羅（隋に力と言ふ。）と名く。然して彼の二女、極大端正、喜ぶ可きこと比ひ無く、世間に雙び少なし。彼の二女、往昔、曾

て聞けり。『此を去る北方雪山の下に、一の釋種の聚落の處所有り、名けて迦毘羅婆蘇都と曰ふ。彼の城の内に一釋王有り、名けて淨飯と爲す。彼の王の第一最大夫人を、名けて摩耶と爲す。而して彼の夫人、一太子を生めり。極甚端正、喜ぶ可く絶殊にして、容貌非常、身は黄金色にして、頭頂の上圓きこと猶傘蓋の如く、鼻は鸚鵡の如く、臂は長くして膝に至り、一切の身體、悉く皆正等に、諸根充備すること猶金象の如く、三十二大人の相を具足して其身を莊嚴し、周匝して八十種好を滿す。時に彼の太子、既に誕生し已るや、將ゐて相師婆羅門の所に向ひて占看せしむ。其記に云はく、『此の太子、若し在家せば必ず當に轉輪聖王と作りて四天下を治め、大地主と作るを得べし。是の時、具さに七寶を得、正法もて世間を治化せん。若し捨てて出家せば、必ず多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀を成じて名稱遠く聞えん』と。彼の二女、此の如き語を聞き已りて、早く曾て父に諮りて、是の如き言を作せり『今は既に聞きぬ、是の如き釋種の其の子の端正、喜ぶ可きこと雙び無しと。彼の太子こそ、我が夫主と作す可けれ』と。

爾の時、軍將斯那耶那、彼の提婆婆羅門の邊より、菩薩の此の消息を傳聞し已り、二女に語つて言はく『汝姉妹等の心願應に成る可し。所以の者は何ぞ。汝等、今、速に彼の最大沙門苦行の處に往詣せよ。何を以ての故に。汝彼に至り已りて、彼の沙門に布施し及び食せんを請ひて尊重供養し、油幷びに酥を奉り、以用て身に塗り、然る後に別に暖水の澡浴を供へよ。是の如き因緣もて、後に應に汝等の心願を成ずるを得べし』と。

爾の時、軍將の二女、父の是の如く敕するを聞き已り、家の常に所有せる食及び油酥等を將つて、菩薩苦行の處に至り、到り已りて菩薩の足を頂禮し、齎らす所の食を將つて菩薩に奉上し、是の如き言を作さく『大善尊者よ、願はくは我が此に奉る所の食を食ひたまへ』と。

爾の時、菩薩、彼の二女より食を受け已り、意の隨に食ひ、酥と油とを取りて其の身に塗摩し、

然る後に暖水を以用て澡浴す。是の時、菩薩、彼の油酥を以つて用て身に塗摩するに、各毛孔に随つて悉く其の體に入ること、譬へば土聚に、或は復、疎沙に、酥及び油を瀉ぐに、悉く皆浸入して、並びに復現はれざる如し。是の如く是の如く、菩薩の身體に塗る所の酥油は、皆悉く入り盡して、並びに復現はれず。菩薩、是の時、猶未だ本形の身相に復るを得ず。

爾の時、菩薩、飯食已に訖りて、彼の二女に告げて是の如き言を作したまはく、『汝姉妹等、此の功徳に藉りて何の願をか求めんと欲する』と。時に彼の二女、菩薩に白して言さく、『大善尊者、我等、昔、聞きぬ。一釋種有りて一太子を生めり。喜ぶ可きの端正、世に雙び無き所と。我、彼の人の我が夫と作らんを願ふ』。菩薩報へて言はく、『汝、姉妹等、我は即ち是彼の釋種太子なり。我、今より去、願はくは更に五欲の樂を受けざらん。我、當來に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲し、無上法輪を轉ぜんを願ひ欲す』と。

爾の時、彼の女姉妹二人、此の語を聞き已りて菩薩に白して言さく、『大聖仁者、此の事若し然らば、仁者は必定して彼の阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ん。成じ已らば、當に我等の家に至りて、願はくは我等を見たまふべし。我等當に尊者の爲に、聲聞の弟子と作るべし』と。菩薩、復、彼の二女に報へて言はく、『是の如く、是の如く、汝姉妹二人の所願の如くせん』と。此よりして已去、彼の二女、日別に食を送りて、以て菩薩に與へ、并びに酥油を將つて、先以て菩薩の身に塗摩し、然る後、別に暖水を以て菩薩の身體を洗浴し、乃至、漸漸に菩薩をして本身の飾相に復らしむ。

爾の時、菩薩、彼の二女に告げて、是の如き言を作したまはく、『汝姉妹等、今よりして已去、別意を作す莫く、息身の法を將つて、但、我に食を送れ。何を以ての故に。我、今より後、若し當に、女人の身根と兩ながら相觸るべきこと、是の處有る無く、我が意樂まず、我が意然らず』と。

是の時、一牧羊の子有り。菩薩の苦行を以ての故に、身大いに瘦損せるを見、彼の羊子、菩薩の

是の如き大精勤苦を見て、菩薩に向つて心に歡喜を生じ、卽便ち長跪して菩薩に白して言さく、『大聖尊者、我、今、意に尊者に承事して、供養尊重せんと欲す。未だ審かにせず、尊者、納受したまふや不や』と。菩薩報へて言はく、『若し時を知らば、汝が作さんとする所、是の如く早く辦ぜよ』。時に彼の羊子、卽ち菩薩の身體を塗摩せんが爲に、羊の乳汁を將つて菩薩に奉上し、以用て食と爲す。又、菩薩の爲に尼拘陀大樹の枝を折り、地上に挿して蔭涼を作る。時に彼の折る所の尼拘陀の枝は、菩薩の威神力を以ての故に、卽ち地より生じて更に枝柯葉華子等を著け、皆悉く具足す。時の人之を見て、彼の樹を喚んで「羊子の種うる所の尼拘陀樹」と爲す。

爾の時、菩薩、麁食を食ふ時、彼の[五]五仙人、共に相謂つて言はく、『悉達太子、今已に禪を失ひて其の本性に復りぬ。何ぞ況んや持戒を失はざらんや。此今、是の懈怠を成すの人、寂定を得ずして心に憒亂を生ぜん』と。彼等、是の如く平量し訖已るや、菩薩の邊に於て、疲倦の心、誹謗の心を生じ、菩薩を捨離して別れて他に行き、漸く波羅捺國(Vārāṇasī)に至り向ひ、鹿野園(Mṛgadāva)に入つて禪定を修しぬ。而して偈有りて說かく、

『彼等苦行の五仙人は　菩薩の麁食を噉ふを見て
謂言へらく「禪定の行有る無く　放逸にして自ら五大の身を養ふ」と』

向菩提樹品第三十の上

爾の時、菩薩、彼の麁食を求めんと欲するの時、止身をして少しく氣力を得しめんと欲せるのみ。是の時に當りて、彼の善生村主の女、初始めて菩薩を見てより已來、彼の日より起りて、菩薩の爲に、布施の熟食幷びに器皿を作る。若しくは他に布施し、或は復、前に於て未だ日中に至らざるに、若しは沙門、若しは婆羅門の乞食し來るを見れば、乞ふ所の熟食併に及び食器を悉く布施し、復、

【五】五仙人。故鄕より遣はして、菩薩に隨從して、共に修行せる五士。後に歸佛して、五比丘となれり。

心口に是の如きの願を念ず。『此の施食に藉る有らゆる功徳を、彼の釋種太子苦行する所の者に廻施せん。願はくは成就して早く諸通を得しめよ。願はくは速に菩提の妙果を成就せよ。願はくは苦行をして心の所願の如く悉く具足して滿ぜしめよ』と。是の如く、食幷びに器を布施行して、六年を經過す。

爾の時、菩薩、六年既に滿ちて、春二月十六日に至れる時、內心に自ら是の如き思惟を作す、『我今、應に是の如き食を將つて、食ひ已りて阿耨多羅三藐三菩提を證すべからず。我今、更に阿誰の邊よりしてか、美好の身を求めん。誰か能く我に彼が如き美食を與へ、我をして食ひ已りて卽ち阿耨多羅三藐三菩提を證取せしむる』と。時に菩薩、心に是の如き思惟を作す時、一天子有り、菩薩の心に是の如く思惟するを知りて、速に善生村主の二女の邊に往詣し、彼處に至り已りて卽ち之に告げて言はく、『汝善生女、汝若し時を知らば、菩薩、今、好美の食を求めんと欲す。菩薩、今、最上の美食を須ち、美食を食ひ已りて然る後、阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲す。汝等、今、彼の爲に備さに十六分の妙好の乳糜を辦足すべし』と。

是の時、善生村主の二女、彼の天の是の如く告ぐるを聞き已り、歡喜踊躍、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず。速疾に一千の牸牛を集聚して、乳を𤛓り取り、轉じて更に將つて五百の牸牛に飲ましめ、更に別日に、此の五百牛を𤛓り、轉じて乳を持ち將ちて、二百五十の牸牛に飲ましめ、後日、此の二百五十の牸牛の乳を𤛓りて、還更に百二十五牛に飲ましめ、後日、此の一百二十五の牸牛の乳を𤛓りて六十牛に飲ましめ、後日、此の六十牛の乳を𤛓りて三十牛に飲ましめ、後日、此の三十牛の乳を𤛓りて十五牛に飲ましめ、後日、此の十五牛の乳を𤛓り、一分の淨好の粳米を著けて、菩薩の爲に上乳糜を煮る。其の彼の二女、乳糜を煮る時、種種の相を現じぬ。或は復、滿花の瓶相を出し、或は功德河水淵の相を現じ、或は時に萬字の相を現じ、或は功德千輻輪の相を現じ、或は

復解領の牛相を現じ、或は象王、龍王の相を現じ、或は魚相を現じ、或は時に復、大丈夫の相を現じ、或は復、帝釋の形相を現じ、或は時に梵王の形相を現ずる有り、或は復、乳糜の上に向ひて涌沸し、上ること半多羅(tala)樹に至り、須臾にして還下るを現出し、或は、乳糜の上に向ひて高さ一多羅樹に至り、訖已つて還下るを現じ、或は、高き一丈夫の狀を現出し、還、彼の器に入るに、一滴も彼の器を離れて餘處に落つる有るなし。乳糜を煮る時、別に、一りの善く【一】海算數を解する占相師有り、彼の處に來り至りて、其の乳糜の是の如き種種の相貌を出現するを見、善く占觀し已りて是の如き語を作す、『希有なり、希有なり、是、誰か此の乳糜を得て食ふか。彼の人、食ひ已りて久しからずして甘露の妙藥を證せん』と。

爾の時、菩薩、二月二十三日に至り、晨朝時に齊整に衣を著けて、優婁頻螺聚落に向つて行いて乞食せんと欲し、漸漸にして難提迦(Nandikā)村に至り、彼の村に至り已るや、村主の家の大門の外に在りて默然として立つ。食を求めんと欲するが故なり。是の時、善生村主の女、菩薩の其の門の邊に在り、默然として食を求むるを見、見已りて卽便ち一の金鉢を取り、蜜を和せる乳糜を盛り貯へ、安置して其の鉢中に滿て、自手もて執持して菩薩の前に向ひ、到り已りて卽ち住り、菩薩に白して言さく、『唯願はくは尊者、我が此の鉢の蜜を和せる乳糜を受けたまへ、我を憐愍するが故に』と。

爾の時、菩薩、彼の乳糜の蜜を調和せるを見て、內心に是の如く思惟して念言すらく、『我、今、好き封瘡の藥を得たり。是の故に、我今、應に須らく、精進の行を强發すべし。甘露及び正法を證せんと欲するが故に。又我、久來、此の法體及び是の法行を失へり。今日應に須らく道路を生ずべきが故に、我今、是の誓願の相を發しぬ。我、是の意を辦ずるに、我が今日の如く此の蜜を和せる所の功德の乳糜、時に依つて奉持せる【二】摶食を、法に依つて食ひ已りて、我、應に須らく死命鬼界を

【一】解海算數。海水の量を計算するほどの計算家。

【二】摶食。識食に對す。肉體を養ふ有形の食物のこと。

度り、彼の死命鬼軍の衆を伏して、彼岸に度るべし』と。

菩薩、是の如く思惟し、念じ已りて、彼の乳糜を受けて、善生村主の女に問ひて言はく、『善姉仁者よ、我若し、此の乳糜を食ひ訖れる後、此の鉢器を將つて付囑して誰に與へんか』と。善生女言さく、『仁者に付與せん』と。菩薩、復言はく、『我に、是の如き器は用有る處なし』。善生女言さく、『仁者、意の思念の作す所の隨なれ。又我、從來、他に食を布施するや、恒常に備さに辦じ、幷びに器をも布施せり』と。爾の時、菩薩、彼の食を受け已るや、優婁頻螺聚落より正念にして出で、安庠として漸く尼連河の岸に至り、到り已りて卽便ち得る所の食を持て一邊の清淨の地に安置し、衣を脫して彼の河中に入り、澡浴して身の熱氣を除きぬ。菩薩の身體を澡浴せる時、虛空の諸天、天の種種の微妙の香末を以て、彼の水に和して雨らし、種種に雜へ下して水上に雨らす。

爾の時、彼の處の尼連禪河は、諸の末香、種種の衆花を以つて水上に彌滿し、合雜して流る。是の時、菩薩、彼の水中に於て既に澡浴し已るや、其の袈裟を取りて水中に濯ぎ、出し捩ぢて曬乾し、體上に著けて彼の水を渡らんと欲するに、波流は湍疾に、身體は尫羸にして越ゆるを得る能はず。兼ねて復、六年精勤苦行して、身力劣弱、彼の河の岸に濟るを得る能はず。爾の時彼の河に一大樹有り、[三]頞誰那(Arjuna)(隋に公者と言ふ。)と名く。彼の樹の神を[四]柯俱婆(Kakubha)(隋に小峰と言ふ。)と名け、住して彼の樹に依る。時に彼の樹神、諸の瓔珞もて莊嚴せる臂を以つて菩薩を引向す。是の時、菩薩、樹神の手を執りて彼の河を渡るを得たり。菩薩の浴せる河內の香水を、一切の諸天各各分取して、將つて宮殿に還り、此の功德吉祥水を以ての故に、將つて自らの宮に灑ぎぬ。

爾の時、彼の河尼連禪の主に一龍女有り、尼連茶耶(隋に不寡と言ふ。)と名く。地より踊出し、手に莊嚴せる天の妙[五]筌提を執り、菩薩に奉獻す。菩薩受け已りて卽ち其の上に坐し、其の上に坐し已りて、彼の善生村主の女の獻ぜる所の乳糜を取りて、意の如く飽食し、悉皆淨盡す。菩薩、既に彼の乳糜

【三】頞誰那。學名 pentaptera

【四】柯俱婆、普通、柯俱陀 kakudha に造り、學名 jerminalia arjuna と呼び、頞誰那樹の一種なれども、こゝには直ちに樹神の名とす。而してこの傳は Mahāvastu III. p. 313 にのみ見え、そこには今と同じく kakubha とせり。

【五】筌提。又は荃提に作らる。荃草にて作らるるが爲なり。又遷提に作らる、提攣に遷り從ふを以てなり。

を食し已るや、過去世に[六]檀を行ぜる福報業力の熏ぜるに緣るが故に、身體の相好、平復して舊の如く、端正喜ぶ可く、圓滿具足して缺減有る無し。

爾の時、菩薩、彼の糜を食し訖り、金の鉢器を以て河中に棄擲す。時に海龍王、大希有、奇特の心を生じ、復、菩薩の世に現じ難きが爲の故に、彼の金器を取りて擬して供養せんと欲し、將つて自宮に向ふ。是の時、天主釋提桓因、卽ち其の身を化して金翅鳥と作り、[七]金剛寶觜もて、海龍の邊より金鉢を奪ひ取りて、忉利宮三十三天に向ひ、恒に自ら供養しぬ。今に於て、彼處の三十三天に節を立てて、名けて供養菩薩金鉢器節と爲し、彼よりして已來、今に至つて斷えず。

爾の時、菩薩、糜を食し訖るや、座よりして起ち、安庠として漸漸に菩提樹に向ふ。彼の笭提は、其の龍王の女、還、自ら收攝し、將つて自宮に歸る。供養の爲の故なり。而して偈有りて說かく。

『菩薩如法に乳糜を食しぬ　是れ彼の善生女の獻ぜる所
食し訖りて歡喜して道樹に向ひ　決定して菩提を證取せんと欲しぬ』

【六】檀は檀那(dāna)。卽ち布施の略。

【七】觜は嘴と同字か。

卷の第二十六

向菩提樹品第三十の中

爾の時、菩薩、河にて澡浴し、乳糜を食して休らふに、身體の光儀、平復して本の如く、威力自在、安庠として菩提樹に面向す。時に是の行歩を作すに、猶ほ往昔の諸菩薩の行の如し。所謂、漸漸調柔して行歩意に喜び、來る者は隨つて施し、行歩の安住たること猶ほ須彌山王の如く、巍巍として行く。恐畏なくして行き、濁亂せずして行き、心に足るを知つて行き、急疾ならずして行き、遲緩ならずして行き、蹶失せずして行き、兩足周正に相揩れずして行き、相逼らずして行き、星速ならずして行き、身を搖がさずして行き、安隱にして行き、淸淨にして行き、精妙にして行き、患害なくして行き、師子王のごとく行き、大龍王のごとく行き、大牛王のごとく行き、雁王の如くに行き、象王の如くに行き、恇怯ならずして行き、疑滯無くして行き、怪悞なくして行き、廣寬博にして行き、那羅延のごとくに行き、地に觸れずして行き、千輻相輪、地に下つて行き、脚の足指は網縵の羅する所、甲は赤銅の如き色澤なるを以て行き、行歩大地を振遍して行き、行歩猶大山の谷響の如き聲を出して行き、行歩の時、坑坎あるの處、皆悉く平正自然ならしめて行き、地上の有らゆる土沙礫石、皆除きて行き、足の網縵より放てる光明に觸れたる罪類の衆生、安住して動かざるを以て、善行して行き、行歩淸淨にして妙蓮華を生じ、彼の蓮華臺上を蹈んで行く。往昔に淨善行を行ぜるを以ての故に、此の行を得たり。往昔の諸佛、師子高座の上に坐せる行を承けて行き、心意の牢固なること金剛の如くにして行き、一切諸趣の稠林を閉塞して、堂堂として行き、能く一切諸趣の衆生の爲に安樂を生じて行き、一切の魔幢を摧折して行き、一切の魔力を破壞して行き、一切の魔氣を摧壓して行き、一切の魔威を打碎して行き、一切の魔業を滅削して行き、一切

の魔衆を消散して行き、一切の魔勢を墮落して行き、一切の魔行を捐捨して行き、一切の魔軍を殺害して行き、一切の魔網を割斷して行き、諸の非法一切の邪衆を伏し、如法に外道を攝受して行き、煩惱の翳暗を照朗して行き、煩惱の朋友を散助して行き、威力、釋天、梵天、大自在天、護世の諸天を覆蔽して無畏にして行き、此の三千大千世界に於て、〔一〕唯自一人のみ獨尊として行き、他より學ばずして自證の道分明にして行き、一切種智を證せんと欲して行き、正念正意、知足正行、行を行じて行き、生老病死を滅せんと欲して行き、彼の〔二〕常樂我淨、微妙最勝無畏の處に趣向せんと欲し、涅槃の城門に入らんと欲して行き、是の如きの行有る菩薩として行き、面は正しく彼の菩提の樹に向ひ、直視して行く。

〔三〕爾の時、菩薩、復是の如き思惟を作して念言すらく、『我、今、此の菩提道場に至る、何の座を作してか阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲する』と。即ち自ら草上に坐すべきを覺知す。是の時、淨居の諸天子等、菩薩に白して言さく、『是の如く是の如し、大聖仁者、有らゆる過去の諸佛如來の阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲せる者、皆悉く鋪草の上に坐して正覺を取れり』と。

爾の時、菩薩、復是の如き思惟を作す、『誰か能く我に是の如きの草を與ふる』と。心に思惟し已りて、左右前後を四顧觀看す。是の時、忉利の帝釋天王、天智を以て菩薩の心を知り已り、即ち其の身を化して草を刈る人と爲り、菩薩を去ること近からず遠からず、右邊にして立ち、草を刈り取る。其の草(kuśa)は青緑にして、顏色猶孔雀王の項の如く、柔輭滑澤にして手に觸るる時、猶微細の迦尸迦衣の如し。其の狀是の如く、色妙にして香ばしく、右旋宛轉す。爾の時、菩薩、彼の人の已れを去ること遠からずして、右邊に在りて是の如き等の草を刈るを見、見已りて漸漸に彼の人の邊りに至り、到り已りて寛緩に彼の人に問ひて言はく、『賢善なる仁者、汝の名字は何ん』。彼の人報へて言はく、『我は吉利(Svastika)と名く』と。菩薩、既に彼の人の名を聞き已りて、是の如く思

〔一〕唯自一人獨尊。唯我獨尊の意義こゝに見らる。

〔二〕常樂我淨。大涅槃經に於ける重要なる標語にして、涅槃、佛性、法身の屬性なり。現象界の屬性たる無常・苦・無我・不淨の四に正反對なり。

〔三〕以下、聲を讃ずる一段まで、Lalita-vistara 十九章の中に、一致する梵文あり。

惟す、『我、今、自身の吉利を求め、亦、他人の爲に以て吉利求をめんと欲す。此を吉利と名け、我が前に在り。我今、決ず當に阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べし』と。

菩薩、是の如く心に思惟し已りて、更に是の如き美妙の音響を出し、彼の人に語つて言ふ。其の語や、猶、過去一切の諸菩薩等の微妙の音聲の如し。所謂、實語虛しく發せざるの言、眞正の言を用つて、清亮の聲、濁澤の聲、妙聲、喜聲、聞きて承奉すべき聲、聞きて違はざるべきの聲、聞きて流麗なる聲、化聲、道聲、〔四〕謇吃せざる聲、縮呻せざる聲、麁澀ならざる聲、雙破せざる聲、軟滑澤の聲、甜淡美の聲、分明的的、遙かに耳に入るの聲、聞きて心口意皆悉く喜ぶ聲、聞き已つて欲、癡、瞋恚、鬪諍、忿怒を除滅し、皆悉く清淨を得しむるの聲、聞くに迦羅頻伽鳥の如き聲、命命鳥の聲、雷のごと隱隱たる聲、諸音樂の歌讃し詠ずるが如き聲、深遠にして高き聲、無障礙の聲、鼻より出づるに非ざる聲、清淨の聲、眞正の聲、實語の聲、梵天の如き聲、海波の如き聲、山の崩るるが如き聲、震動の聲、諸天王に讃歎せらるる如き聲、諸阿修羅の諷詠する美聲、深くして底を得難き斷魔力の聲、一切の諸外道を降伏する聲、師子の聲、駛風の聲、象王の聲、雲の磨るが如き聲、能く十方佛刹土に至る聲、諸の所化の衆生に告ぐる聲、急疾ならざる聲、遲緩ならざる聲、停住せざる聲、缺減せざる聲、濁穢ならざる聲、一切を合する聲、諸聲に入る聲、解脫の聲、繫縛なき聲、染著なき聲、語義を合する聲、時に依つて語る聲、時を過たざる聲、巧みに能く八千萬億の法門を宣說する聲、壅塞する無き聲、止息せざる聲、能く一切の諸聲を攝する聲、心に隨つて能く一切の願を滿たす聲、能く一切の安樂を生ずる聲、一切の解脫を示現する聲、一切の諸道路を流通する聲、衆中に說く時、衆外に出でず、諸の大衆をして歡喜せしむるの聲、聲出づるの時、一切の諸佛法に順ずる聲を出す。

菩薩は此の是の如き衆聲を以て、彼の草を刈る人に告げて、是の如き言を作さく、『仁者、汝、能

【四】謇。どもる。

く、我に草を與ふるや不や』と。其の化人報へて言はく、『我、能く與へん』と。是の時、帝釋の化作せる所の人、卽便ち草を刈りて以て菩薩に奉る。其の草淨妙なり。菩薩、卽ち彼の草の一把を取り、手に自ら執持す。菩薩、彼の草を取る時に當つて、其の地卽便ち六種に震動す。是の時、菩薩、此の草を將つて安庠として菩提樹下(bodhi-mūla)に面向す。

爾の時、菩薩、草を持つて行く時、中路に忽ち五百の青雀有り。十方より來つて菩薩を右遶し、三匝し訖已りて菩薩に從つて行く。又復、五百の拘翅羅鳥、四方より來つて前の如く圍遶す。又復、五百の孔雀來り、乃至、略說せんに、五百の白鵝、五百の鴻鶴、五百の白鷗、五百の迦羅頻伽鳥、幷びに其の五百の命命鳥、皆悉く六牙なる五百の白象、頭耳烏黑に、鬉尾悉く朱にして長く披散せる五百の白馬、幷びに皆斛領の猶黑雲の如くなる五百の牛王あり。

是の時、復、五百の童子、五百の童女有り、各、種種諸の妙瓔珞を以て其の身を莊嚴す。五百の天子、五百の天女あり。五百の寶瓶もて諸の香花を以て其の中に滿て、又、種種諸の妙香水を盛り、人の執持する無くして自然に空を行く。

又、世間中の有らゆる一切吉祥の事、皆四方より雲雨のごとく來り、各菩薩の右邊に在りて圍遶し、三匝を經已りて菩薩に隨つて行く。又、世間中の有らゆる樹木、一切の藥草は、菩薩の行く時、根より悉く伏して菩薩に向ふ。又復、四方より微妙涼冷調和の風、諸の翳障を吹いて皆悉く清淨にし、雲無く霧無く、烟無く塵無くして虛空中に上る。復、無量千萬の諸天有り、菩薩の菩提樹に向ふ時に當つて、悉く隨つて行き、皆、各一時に歡喜踊躍し、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず、歌唱し叫喚し、或は口に呼嘯して種種の聲を作し、其の天衣及び寶瓔珞を弄す。又復、聲を出して是の如き言を作す、『今、此の閻浮に佛世尊有りて世に出現す』と。復、無量の淨居諸天有り、來つて菩薩の左右前後に在り、菩薩を頂禮して是の如くに白して言さく、『大聖尊者、仁、昔、長夜、恒

常に乞願したまひ、今日の所願以て成就するを得たまへり。世間の有らゆる一切の諸天は、仁の爲に吉祥の事を作し、能く仁の與に吉祥の相を作すに堪ふ。又復、能く仁の心願を成さば、彼等悉く來つて菩薩の前に在らん』と。菩薩の菩提樹に面向する時相隨つて進み、菩薩の菩提樹下に至らんと欲するや、是の時、其の地六種に震動す。

又、復、菩薩行步の時、師子の步むが如く、龍王の步むが如く、牛王の步み、白雁王の步むが如く、象王の步むが如し。怖畏無くして行き、障礙無くして行き、染著無くして行き、一切を除滅し、毛竪たずして行き、人に降伏する無き往昔の善行、禪定、眞正最勝にして行き、最上最妙、諸怨を伏して行き、一切の不利益を斷絕して行き、無上の法寶を取らんと欲するが故に行き、無上の樂を取つて攝受せんが故に行き、最上の寂定を取らんと欲するが故に行く。行步の時、地上の有らゆる一切の衆生、地の動く聲を聞く。地居の諸天、阿修羅等、一切の諸龍、諸乾闥婆、一切の諸鳥、四足、人等、皆悉く彼の震動の聲を聞き、心に疑怪を生じ、處處を觀看して、謂へらく『何の異事有り、何の因緣有つてか、大地是の如く湧沒搖動する』と。

[五] 爾の時、彼の地に一龍王有り、名を[六]迦荼(Kāla)（隨に黑色といふ。）と曰ひぬ。其の龍、長壽にして劫數を經歷し、曾て往昔の多くの諸佛に見え來りぬ。又龍の日月は晝夜甚長し。睡眠未だ久しからずして大地の動くを見、復、震ふ聲を聞くや、卽便ち驚き寤め、寤め已りて忽ち起き、速疾に自らの宮殿よりして出で、外に出でて四方を觀看する時、迦荼龍王、四方を觀已りて自らの居處を見るに、相去ること遠からずして一菩薩有り、安庠として行く。時に彼の龍王此の菩薩を見るに、預先の瑞相、猶過去の諸大菩薩が、發心して菩提樹下に向はんと欲するが如く、一種も異ること無し。是の相を見已りて更に疑心無く、決定して此の菩薩大士の當に阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べきを知り、大歡喜を生じて卽便ち偈を說き、一心に合掌して讚歎して言はく、

【五】以下龍王龍妃に關すること、南北諸傳に多出するも、Lalitavistara 10 の記事最も一致す。

【六】迦荼は Divyāvadāna に Kālika とするも、今は巴利法句經註等により Kāla とせり。

『威德巍巍たり大仁者　我曾て過去の時に
諸の菩薩有つて此の中に來れるを見しが如くに　仁も今亦然り異る有る無し
今仁者の斯の處に到れるを見るに　決定して佛と作らんこと必ず疑無し』
世尊の徒歩甚だ安庠に　先づ右脚を擧げて行動し
諸方を觀て心に諦視す　應當に定めて佛世尊と作るべし』
仁今此の吉祥の邊より　一把の草を乞うて手に執持し
正面して道樹に趣向す　決定して今三佛陀と作らん』
諸方四面の涼冷の風　猶牛王の如き聲響を作し
又諸鳥有り來つて翼從し　前後左右に四面を圍む』
世間黑闇にして晝夜昏く　無明愚癡に覆はる
仁聖、丈夫を成就し已りて　必ず大光を出して普ねく照明せん』
又復靈異の諸獸來りて　百千萬衆前後に遶り
彼が如く輪廻して右に旋轉す　仁今決定して世尊と作らん』
又復象馬の諸畜生　幷びに諸の幢蓋等しく來り至りて
星速急疾に菩薩に向ふ　決めて知んぬ當に佛世尊と作るべきを』
又復一切の淨居天　其の清淨莊嚴の體を持つて
躬を曲げて仁者を頂禮す　知る仁決めて佛世尊と作らんを』
仁今此の有漏の心を將つて　又一切煩惱に逼らる
今彼の結惑を除滅するを得て　必ずや無上勝の菩提を成ぜん』
仁今微妙の法を具足して　甚深測り難く不思議なり

證し已りて俯仰し行歩寛かなり　是の故に我が心に疑滯無し』
仁今種種皆如法に　說く所最上にして更に過なし
一切の天人に等倫無し　是の故に我が心に疑滯なし』

爾の時、黑色龍王、是の如き偈を以て菩薩を歎じ已り、心大いに歡喜して踊躍無量、十指の掌を合して、菩薩の前に在り、菩薩を頂禮す。是の時、菩薩、龍王に語つて言はく、『大いに善し龍王よ、是の如く是の如し。汝の說く所の如く、我今必ず、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん』と。而して偈を說いて言はく、

『大いに善し龍王よ汝の言の如きは　此我が精進を增益するを爲す
我今必ず無上道を成じて　一切世間に等雙無からん
餘に見らるゝ如く相莊嚴せる　大吉祥瑞我に助を爲す、
我今此の煩惱海に於て、必ず彼岸に度らんこと疑ひある無し』

爾の時、黑色龍王に一龍妃有り、名を金光(Suvarṇaprabhāsā)と曰ふ。而るに彼の龍妃、復、無量の諸龍女等の與に左右圍遶せられ、其の手に各諸の妙香花、末香、塗香、雜色の衣服、寶幢、旛蓋、種種の瓔珞を執り、天の音樂を作す。其の樂音中より、各、種種の歌讚詠の聲を作して菩薩を歎じ、菩薩に隨つて行く。歌音聲の中より是の如き偈を出し、菩薩を頌して言はく、

『世尊の身意卓として移らず　驚き無く怖れ無くして定住し
歡喜踊躍して諸欲を離れ　瞋癡悉く捨て、貪るに處無く
尊能く世の爲に醫師と作る　是の故に我今頭頂に禮す』
世間は諸使の煩惱厚く　能く解脫して彼の纒を離るる無きに
諸根自ら伏して復他を伏し　能く衆生の諸の毒箭を拔き』

無歸護の處に能く歸護となり　世間の幽瞑に導師と作り
三界の燈明として仁獨り尊し　是の故に我等今頂禮す』
世尊は人の能く伏し得る無き　貪瞋及び無明を盡すを以て
諸の煩惱欲染の情を離る　是の故に我今頭頂に禮す』
煩惱の刺衆生の意に入り　人の能く之を拔出する有る無し
世尊今大醫師と作りて　能く彼等の大苦惱を治す』
依止無きものに依止と作り　導師無き處に導師と作り
黑暗の三界中に遍ねきを　世尊の光明普ねく能く照す』
我今見るが如く諸天衆は　妙香花を持して虛空に滿ち
瓔珞を舞弄し皆散衣す　我是の如き預相を見已りて
斯事を掛量するに虛謬無し　仁今佛と作りて心に喜歡せん』
速に菩提德樹の邊に往きて　彼等四魔衆を降伏し
煩惱の䌙羅網を摑裂して　疾く無上の寂涅槃を成ぜよ』
猶往昔諸の智人の　此の處に到つて正覺を取れるが如く
仁者今已に此に來り至る　我は知んぬ佛と作る定めて疑無きを』
世尊昔因地に在りし時　行行の劫數千萬億
精苦勤苦して暫くも息まず　正覺を取つて眞如を證せんと望めり』
今時已に至る願はくは停まる莫く　速に道樹の下に詣つて坐せよ
正心もて彼の樹王に依るもの　決す菩提を證せんこと疑有る無し』

[七]爾の時、菩薩、是の偈を聞き已るや安庠として行き、菩提樹に向ひ、其の中間に於て心に是の如

【七】以下、放光偈聲三十二不吉祥相の一段、Lalitavistara 二十一章の梵文に粗ぼ一致す。

、念じたまふ、『此の欲界の内は、是れ彼の魔王波旬が、主と爲つて自在に統領す。我今應當に彼に語つて知らしむべし。若し彼に告げずして阿耨多羅三藐三菩提を取證せば、我卽ち名けて大覺と爲すを成ぜじ。所以の者は何ぞ。魔波旬を降伏せんと欲するが爲の故に、彼を攝受せんが故に、亦兼ねて一切欲界の諸天の、彼の魔衆を攝受降伏せんが故に。魔宮殿中に復無量無邊の諸魔の眷屬諸天有り。已に往昔に於て諸善根を種ゑたり。若しくは我が師子吼の聲を作すを聞き、若しくは我が阿耨多羅三藐三菩提を證するを見ん時、則ち彼悉く來つて我が邊に向ひて、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし』と。

爾の時、菩薩、是を思惟し已りて、眉間の白毫相中より一の光明を放つ。能降伏散魔軍衆(Sarva-māramaṇḍalavidhvaṃsa-nakārī)と名く。此の光を放ち已るや、時に應じて卽ち魔の宮殿に至り、彼の一切諸魔の舊宮の本業の光を翳ふ。又復斯の光、三千大千世界に傍遍し、大光明を作して一切皆滿つ。時に菩薩の放てる彼の光明中に、魔王波旬、自然に是の如き偈聲を聞きぬ。

『世間に一大衆生有り　多劫を經歷して行行滿ず
淨飯大王の太子　王位を棄捨して出家し
彼れ甘露門を開發せんと欲して　今來つて菩提樹に趣向す』
汝の身若し大氣力有らば　樹下に詣つて共に試看すべし
それ今已に彼岸邊に達し　復他を度して彼に到らしめんと欲す』
菩薩既に以に自ら覺了し　今復更に他を覺せんと欲す
又自ら彼の寂定禪を得て　更に人をして寂靜せしめんと欲し
既に自ら無繫縛の路を行きて　他をして解脫の城に趣かしめんと欲す』
三惡を破散して悉く空ならしめ　人天に充溢する道を滿ぜしむ

禪定の五通力を示現して　安置して甘露宮を知らしむ』
それ今久しからずして大明を證し　必ず當に汝の境界を虚空にすべし
愚癡黑暗瞋恚の侶たる　汝の朋黨を捐てて悉く餘す無けん』
旣に摧碎せられて走るに方無く　爾の時に當りて心に何の計をか作さん
彼若し甘露法を證せば　常樂我淨湛然として安からん』

爾の時、欲界の魔王波旬、光明中より是の偈を聞き已り、睡眠中に於て心忽ち驚動し、自然に、夢に三十二種の不吉祥の相を見たり。何等か名けて三十二夢と爲す。

所謂、夢に其の諸天界の自許の宮殿、悉く皆黑暗にして光明有ること無きを見る、一。自らの宮中に諸の沙礫糞穢ありて盈滿するを見る、二。自の身體恐怖して樂しまず、心情有るなきを見る、三。其の自身、諸方に馳走するを見る、四。其の自身の頭上の天冠、忽然として墮落し、革屣を遺失して徒跣にて行くを見る、五。自の咽喉、脣腭乾燥して、身體の寒熱なるを見る、六。自の園中の有らゆる樹木、枝葉、花果、悉く皆乾枯せるを見る、七。諸池泉の有らゆる諸花、皆悉く枯竭せるを見る、八。自の園中の有らゆる諸鳥、鸚鵡、鸜鵒、孔雀、鴛鴦、鴻鶴、鵁鶄及び拘翅羅、命命鳥等の翎羽衣毛、悉く皆[八]氄落するを見る、九。其の宮内の有らゆる音聲樂器の具、螺鼓、琴瑟、箜篌、笙簧の有らゆる一切五種の音聲、悉く皆破折し、斷壞し、故敗し、狼藉として地に在るを見る、十。其の從來愛せる左右、皆悉く自然に其の身を遠離し、憂愁困苦して却いて一面に住まり、獨り地上に臥するを見る、十一。其の端正喜ぶ可き玉女の赤露拳攣し、自ら兩手を擧げて以て頭髮を拔き、地上に臥すを見る、十二。諸魔子の巧智辯なるもの、悉く皆菩提樹下に趣向して彼の菩薩の足を頂禮するを見る、十三。其の四箇の愛する所の女、各兩手を擧げて大聲に號哭して、是の如く『嗚呼嗚呼、阿爺阿爺』と言ふを見る、十四。其の自身の著くる所の衣裳の垢膩不淨なるを見る、十

【八】氄。毛羽のぬけること。

五。其の自身、諸塵土の坌穢する所となり、周遍して體に滿つるを見る、十六。其の自身、忽然瘦劣して精光有る無きを見る、十七。自の宮殿の城壁、戸牖、樓櫓、窻門、却敵、雀探、天井、皆悉く崩頽落壞するを見る、十八。其の有らゆる諸大兵將、夜叉、羅刹、或は鳩槃茶、或は復、龍王、彼等悉く皆兩手を垂れ、或時は臂を擧げて頭を拍ち胸を搥ち、各極大の苦惱を受くるを見る、十九。其の有らゆる一切の欲界の諸天主等、四鎭天王、帝釋、夜摩、兜率、化樂、他化自在、皆悉く號哭して瀝涙滿面、走つて菩薩に向ひ、菩薩の面を觀て菩薩の前に立つを見る、二十。其の鬪場の内に在るや、刀杖失壞し、自許の左右及び眷屬等悉く魔王を捨てて諸方に馳走するを見る、二十一。其の從來の吉祥の缾の、皆崩れて破壞するを見る、二十二。那陀羅天(Nārada, *Lalit.*)仙の口に不吉祥の事を唱ふるを見る、二十三。一神有り、名を歡喜と爲すが、門に當つて聲を作し、是の如く唱說して不歡喜と稱するを見る、二十四。虛空中に塵霧烟雲の悉く皆遍滿するを見る、二十五。魔宮を守る功德大神の聲を擧げて大いに哭するを見る、二十六。その從來自在の處の不自在と成れるを見る、二十七。自の朋友の悉く怨讎と成るを見る、二十八。諸の魔宮の、或は黑暗と成り、或は復火を失して、悉く皆燒盡するを見る、二十九。其の一切の諸魔宮殿の震動して安からざるを見る、三十。其の有らゆる樹木叢林の、或は他に斫られ、自ら地に倒るるを見る、三十一。其の有らゆる思念判事の、或は方計を作して竟日籌量するも一口だも得ず、唯、亂心有るを見る、三十二。

爾の時、欲界の魔王波旬、是の如き等の三十二夢の不祥の相を見已り、睡より寤めて遍體戰慄し、心意安からず、内に恐懼を懷き、普ねく一切の魔家眷屬を喚びて、皆集聚せしめ、及び、其の宮内の左右の侍臣、幷びに大兵將の諸城門の守護に當る人に向つて、夜、夢に見し所の事を說く、『汝等諸人、我、昨夜、夢に諸の變怪を見たり』と。前に說く所の如し。『我、是の如き不祥の夢を見已りて、甚大恐怖して身心安からず。是を以て疑を生じ、忽然として睡覺めたり。我、應に久しからず

【九】雀探又は摧墥に作らる。探は恐くは塖の誤。塖は堂塾也。

して必ず此の處を失ふべし。恐畏らくは、更に或る大威德福力の人有り、此の處に來往して我に替代らん』と。而して偈を說いて言はく、

『昨夜光明自然に現はれ　光明中に此の偈言を說けり』
「釋種の太子今出家し　三十二相莊嚴の體もて
出家の苦行六年に滿ち　今漸く來つて道樹の間に向ひ
自ら覺り他を覺らしむるに菩提を以てす　汝若し力有らば彼と試みよ」
彼善根を種うること千億劫　今菩提を得て正眞を證し
汝の境界を破して悉く當に空ずべし　汝若し彼を折伏する能はずんば、
彼甘露身の常住なるを證して　汝等の此の魔宮を破らんと欲す」
是の故に我汝諸魔に告ぐ　「若し强力有らば早く彼に向へ
沙門は獨自にして樹下に在り　速疾に彼を破つて全からしむる莫れ」
汝等若し我が愛言を取らば　我が爲に四兵衆を辦具せよ
世間に多く辟支佛有り　彼今出で已らば涅槃せしめよ
望むらくは我獨自法王と作りて　如來の種を斷絕せしめざらんことを』

一〇爾の時、魔王波旬の長子、名を商主(Sārthavāha)と曰ふ。時に彼の商主、卽便ち偈を以て其の父に白して言はく、

『父王何が故に面に色無く　心戰き身體に威光無きか
此の形相を看るに大いに驚けるに似たり　未だ審かにせず曾て何事を見聞せしかを
唯願はくは子等に向つて實說し　聞見する所の如く一一に論ぜよ』

時に魔波旬、還、偈を以て其の子商主に告げて、是の如き言を作す、

【一〇】以下、Lalit. に無し。

『子よ汝今當に善く諦かに聽くべし　昨夜の我が夢甚だ異常なり
若し我衆中に具さに之を說かば　大衆聞いて皆地に絶倒せん』
時に魔波旬の長子商主、復更に偈を以て其の父に報へて言はく、
『大衆の地に倒るるは敢へて辭せず　陣に入つて若し退けば是大苦なり
若し夢に是の如き相有るを見ば　寧ろ住まれ鬪うて他に追はるる莫れ』
時に魔波旬、復還偈を以て其の子に告げて言はく、
『丈夫鬪に勝を取らんと發意す　勝たざるを以て卽ち鬪を休むべけんや
彼の獨沙門何の能くする所ぞ　我樹下に到らば當に起つて走るべし』
是の時、商主、復更に偈を以て其の父に白して言はく、
『有力衆力は弱力の人なり　獨一の智慧のみ他の鬪に勝つ
螢火蟲は三千界に滿つとも　一日世に出でて悉く能く遮せん
若し人自ら慢じて心に思はず　貢高他を欺きて廣く問はず
諸の智人來つて相開諫せんに、若し語を取らずんば此れ治し難し』

爾の時、菩薩、菩提樹に向つて未だ彼處に至らず、其の間に一菴羅の樹を見て謂言はく、『此はこれ菩提の樹なり』と。菩薩彼の樹下に至りて坐せんと欲し、意中に以て菩提の樹と爲す。是の時彼の地、菩薩身の威德力を以つての故に、重くして禁ふる能はず、下に向つて陷らんとす。爾の時、菩薩、是の如く思惟したまふ、『世に二人ありて、行坐の處、其の地陷沒す。何等か二と爲す。一には諸善根を斷絶し盡すなり。二には福德の諸善深多なり。計るに、我卽ち今、應に是れ善根を斷じ盡せる人に非ざるべし。此、或は菩提樹下に非ざるべし』と。爾の時、色界の淨居諸天、眞の菩提樹を幖幟せんが爲の故に、妙なる繒旛を懸けて其の上に置く。又、復、彼の中の有らゆる諸樹の枝

幹、悉く傾きて菩提樹に向ふ。是の時、菩薩、卽ち、此は是れ眞の菩提樹なるを知り、便ち前舊の菴羅樹を捨てて步を迴らし、安庠として漸漸に菩提樹の邊に向ひたまふ。

爾の時、菩薩の菩提樹下に向つて行く時に當りて、一夜叉有り、名を香獸と曰ふ。彼の菩提の樹を守護し、樹を去ること遠からずして其の中に停止す。菩薩の來りたまふを見て、卽便ち急に更に一の同伴、名を赤眼と爲す別夜叉に告げて言はく、『仁者、汝來れ、我今汝に語らん。汝、須らく知覺すべし。汝、速に我が爲に欲界の主たる魔王の邊に往きて、斯の如き語を諮り道へ、「昔、拘留孫及び拘那含、幷びに迦葉等の諸大仙聖は、此の地中所居の處に於て大等覺を成ぜり。今、復、更に精進の人有り、功德圓滿し菩提の行備はり、以て三十二相を具足し得て、魔王の境界所住を侵す。これ彼の釋種淨飯王の子にして悉達多と名く。已に苦行を捨てて正念を得、此の最勝地處に來至して居停せんと欲す。願はくは大王時を知れ」と』。赤眼、香獸夜叉の此の如き語を聞き已り、速に魔波旬の所に往詣し、既に彼に到り已りて、上に語る所の如く悉く具さに之を說く。

爾の時、欲界の魔王波旬、彼の赤眼夜叉の邊より此の如き語を聞き已りて、卽便ち他化自在の一切諸天、化樂、兜率、三十三天、四天王、幷びに地居の天、諸龍、夜叉、諸乾闥婆及び阿修羅、緊陀羅、摩睺羅伽、鳩槃茶、羅刹、毘舍遮等の一切大衆を召喚し、之に敕して言はく、『汝等悉く集つて我が處分を聽け。一釋迦種姓の子有り、菩提を取らんと欲す。我等相共に彼處に至り、その此の如き勇猛の心を斷じて、證を取らしむる勿らん』と

爾の時、魔王の長子商主、其の父王魔波旬に白して言はく、『父王よ、是の如くば、子の心、樂しまず。何を以ての故に。今、父王は悉達菩薩大士と怨讎を作さんと欲す。唯恐らくは後時、父王、內心に悔ゆとも及ぶ所無からん』。是の語を作し已る時、魔波旬、子商主に告げて是の如き言を作す、『咄、汝、小兒、愚暗淺短にして未だ曾て我が變化の神通を知らず。未だ曾て我が自在の威力を覩

ず』と。爾の時、商主、其の父に白して言はく、『父王、當に知るべし。我は父王の愚癡の兒に非ず。亦、父王の神通、威力の自在を知らざるに非ず。但、父王、今未だ悉達菩薩の神通を知らず。未だ悉達菩薩の德力を見ず。其の事然りと雖も、但、願はくは父王、彼の邊に至りて、彼の神通を應當に自ら見るべし、應當に自ら知るべし』と。

爾の時、欲界の魔王波旬、其の子商主の言を取らず。聞き已りて、忽然、四種の精銳の兵衆を裝束して、悉く聚集して、甲を帶び仗を持せしむ。譬へば大力最猛健將の、畏る可き雜種の軍衆を率領し、人之を覩る時、能く毛を竪たしむる如く、世に未だ曾て見ず、又未だ曾て聞かず。是の如き無量百千萬億の天神鬼兵、所謂一身に能く多種百千の面孔を現じ、其の一一の面に能く無量種種の蛇身を出し、手脚繚戾して形容畏る可し。皆、弓箭、槊矛、槌、棒、斧鑿、刀劍、最勝金剛の諸器仗等を取り、或は復、身體、頭目、手足に衆の異形を雜へ、或は復、頂上に大火熾燃し、或は肚の邊に於て極猛火を出し、或は復、語言麁澀にして叫喚し、或は棃木を執り、或は杵等を持つ。是の如き諸物の眼孔畏る可し。或は眼睛（一）眣りて高低を視眄し、或は口喎斜にして、復、齒多く、其の舌廣大にして多種の形を現はし、或は舌下垂し、或は舌拳縮すること猶礓石の如し。或は眼に光を放つこと猶黑蛇の如く、其の中に毒滿つ。或は頸項に諸蛇を纒遶するあり。或は手に蟒蛇を執りて食ふこと、猶ほ金翅鳥の海より龍を取つて之を噉食するがごとし。或は、復、手に人の肉、骨、血、頭目、支節を執りて之を噉食し、或は、手に人の五臟、腸肚、糞穢を取つて食ひ、或は靑眼にして師子王の如く喧張畏る可き有り。或は眼凹凸して開合に光を放ち、或は復、猛火の大山に騎りて空に乘じて來り、或は兩肩頭に焰火の熾燃すること山の如きを擎げ、或は地上に於て兩手もて樹を拔き根を合せて擔ひ來る。其中、或は耳の（二）羖羊の如き、或は簸箕の如き、或は蚌蛤の如き有り。或は象耳の如く、或は猪耳の如く、或は朶耳を垂る。或は復、肚、病水人の如く、脚脛細弱、身體

【一】眣。かたよる。

【二】羖。めひつじ。

羸瘦なる有り。或は、鼻、[一三]匾㔸に、或は腹、甕の如く、足、覆鉢の如く、身體皮乾きて猶ほ曝脯の如く、其の肉枯燥し血脉乾竭す。或は復、手足を割截して懸け、或は復、頭を斫つて手中に執り、或は身より血を出して更互に相飲み、飲み已りて復吐く。或は白沫を吐き、或は融銅を飲み、或は鐵丸を呑む。或は手足を[一四]刖り、[一五]肘膝にして行き、或は、唯骨身のみにして皮肉有ること無き、或は猪形を作し、或は驢騾形、象形、馬形、駱駝、牛羊、羖[一六]羝、犀[一七]兕、水牛、狐、兎、[一八]犛牛、[一九]狚獀、[二〇]摩竭、鯨、[二一]鷁、師子、虎、狼、熊羆、禽、[二二]狛、獼猴、豺、豹、野干、狸、狗、諸是の如き等の種種の形容もて大恐怖を作し、大可畏を作す。是の如き軍衆皆悉く整備し、儼然として承奉し、命を待つて卽ち行かんとす。

【一三】匾はうすし、㔸はうすし。
【一四】刖。あしきる。
【一五】肘。ひぢ。
【一六】羝。をひつじ。
【一七】兕。野牛に似たる一種の獸。
【一八】犛。長髦の牛。
【一九】狚獀は駏驉、騾馬に似たる一種の獸。
【二〇】摩竭(makara)。鯨。
【二一】鷁。一種の水鳥。
【二二】狛、狼に似たる獸。又、駱に同じく、一種の驢馬とせらる。

巻の第二十七

向菩提樹品第三十の下

爾の時、魔王、即ち赤眼夜叉の使に告げて、是の如き言を作す、『汝赤眼に謂はん。汝今此の軍衆を見るや以不や。誰か輒く我が境界を侵さんと欲する有んや』と。是の時。赤眼夜叉の使、即ち其の王、魔波旬に白して言はく『大王當に知るべし。此は是れ釋種淨飯王の子、悉達多と名く。彼の善生村主の女の前より、猶牛王の如き大音聲を作し、吉利(Svastika)なる刈草人(tiṇihāraka)の邊に向ひて一把の草を乞ひ得、一樹有り、羖羊多羅尼拘陀樹と名くるに、漸漸に來る。復、五百の青雀有つて圍遶し、初春月に出づる所の愛す可き一切の樹木、悉く華果を著くるを以て、枝柯自ら垂れ、無識の諸樹も猶尚頭を傾け、低れて供養し、大地を震動して彼の菩提樹下に向はんと欲す』と。

爾の時、波旬、既に菩薩の、彼の菩提樹下に向はんと欲するを見、是の思惟を成す、『願はくは此の釋種、餘の樹下に向ひて草を鋪いて坐し、此の菩提樹に向ひて坐する莫らんことを』と。其の心に是の如く思惟し、念じ已りて彼の一切の夜叉衆に告げて言はく、『汝等一切の諸夜叉輩、宜しく少許の夜叉の衆を減じて速に彼の菩提樹の下に往詣し、伏藏して住り、愼しんで此の釋種の子をして、彼の菩提樹の間に趣向せしむる莫るべし』と。其の夜叉等、魔王に白して言はく、『謹しんで大王の嚴命の敕する所に依らん』と。是の時、夜叉、即便ち少許の人衆を抽減し、彼の菩提樹下を去ること遠からずして伏藏して住まりぬ。其の彼の魔の家の諸夜叉衆、遙かに菩薩の來つて菩提樹に向はんと欲する時、身體赫弈として猶金山の如く、照耀して光を放つこと譬喩すべからざるを見、其の夜叉衆、既に覩見し已つて即ち偈を說いて言はく、

『此れ必ず千光の新日出なり　威德照耀して金山の如く

一切の諸天人を憐愍し　師子の如くして漸く樹王に到る』

時に彼の樹林を守護する所の神、卽ち偈頌を以て彼の諸夜叉に報答して言はく、

『世尊は千劫の功德圓かに　備さに六度――施・戒・忍・
精進・禪定及び智慧を滿じ　一切の諸莊嚴を具足したまふ
今漸く來至して樹王に向ひ　無上菩提の道を證せんと欲す
諸天及び人と八部の衆　是の如きを思惟して悉く隨行す』

爾の時、彼の諸の魔の家の眷屬　夜叉衆等、此の偈を聞き已るや、皆悉く彼の菩提樹の側を離れて、星散して走る。是の時、菩薩、漸漸にして來りて、十六種の相、功德具滿せる地分の處（soḍa-śākārasampanna-pṛthivī-pradeśe）に到る。何等か名けて十六種相と爲す。所謂、彼の地劫燒の時、最後に燃え盡し、劫初めて立つ時、最も先に在つて成る(一)。又、復、彼の地の出す所の諸草、所謂優波羅、波頭摩、拘勿頭、分陀利は、最勝最妙、充足して少けず二。又、復、彼の地は閻浮提に於て最も中に在り三。又、復、彼の地には頑鈍愚癡の衆生居らず、唯聖種に住する大福德人のみの行坐する所なり四。又復、彼の地、諸の坑坎無く、四面寬にして平整の處たり五。又、復、彼の地は下からず高からず、淸淨洪滿なること猶手掌の如し六。又、復、彼の地、多く優波羅、波頭摩、拘勿頭、分陀利の諸花有り、自然に生長す七。又、復、彼の地は悉く一切聖人に通知せらる八。又、復、彼の地は自然に顯現す九。又、復、彼の地は一切時に於て、恒に聖人居して空闕せず十。又、復、彼の地は終に人の能く降伏するを得ること有るなし十一。又、復、彼の地の名稱遠く聞こゆ、所謂師子最高の座なり十二。又、復、彼の地は心有りて覓むるも、過――所謂、若しは魔、魔家の眷屬――を得る能はず十三。又、復、彼の地は一切地に於て最も中齊に在り十四。又、復、彼の地は金剛の成す所たり十五。又、復、彼の地に生ずる所の諸草は、正高四指、柔軟青綠にして孔雀の項の如

く、觸るる時は猶迦尸迦衣の如く、顏色美妙にして喜ぶ可きの端正、香氣芬芳として頭悉く右旋す十六。往昔に諸の轉輪聖王有りて、悉く皆此の愛樂すべき希有の事を知聞す、是の故に恒に來つて彼に往きて此の地處を觀看せり。

爾の時、菩薩、臨みて彼の菩提樹の側に至らんと欲す。是の時、其の地自然に掃除せられて清淨嚴麗に、香汁灑灑して喜ぶ可きの端正、心をして樂觀せしめ、又、一切の沙礫・瓦石、蒺蔾・棘刺、諸惡草等無し。是の時、菩薩、初めて草を執りて行くに左手を用ひ、後、樹下に至るや、則ち羅網を莊嚴して赤色猶燕脂を塗れるが如き右手柔輭の五指を以て、左手より彼の一把の草を取り、安穩に菩提樹下に置かんと欲し、東面に草を持つて地上に擲てば、根卽ち樹に向ふ。菩薩、心に是の如きの願を發したまはく『我、今、此の處所に於て坐し已り、煩惱海を越えて彼岸に度り至らん』と。時に菩薩、彼の一把の草を擲てば、地に至りて猶餅中に華を置くが如く、或は河旋の如く、或は萬字の如し。爾の時、菩薩、自ら執る所の草を漫ろに地に擲つに、自然に亂れずして是の如き等の吉祥の相有るを見、口に是の言を作したまはく、『我が今日擲つ所の草の如きは、應に亂るべきに亂れず、此れ吉祥の相表なり。我、亂世間中に在つて必定して當に不亂の法を證すべし』と。菩薩、是の如く草を擲ちて鋪き已りぬ。是の時、彼の地六種に震動す。

時に欲界の主、魔王波旬、菩薩の所に至りて是の言を作すらく、『刹利子に謂はん。汝、今、此の樹下に在りて草を鋪きて坐すべからず。何を以ての故に。其の此の樹下は、夜半中に於て、多く無量の毘舍遮鬼(piśāca)及び[一]富多那(pūtana)夜叉、羅刹有り。數々恒に來つて人肉を噉食す。今、此の樹の北に別に一林有り。是れ大仙人の居停する處、彼の處所の名を優婁頻螺聚落と曰ふ。喜ぶ可きの端正、人の樂觀する所なり。汝釋子、宜しく彼の地に至つて意に隨つて坐すべし』と。

爾の時、菩薩、彼の魔王に報へて是の如き言を作したまはく『汝、魔波旬、知らざるべけんや。我、

【一】富多那。餓鬼の一種。

山の阿蘭若の處、空閑の澤中に在るに、或は樹下に在り、或は塚間に在り、或は林內に居るに、夜半安然として心に畏る所無し。又復、我今亦、無智に非ず。亦復、是れ無方便力に非ず。凡人の此の地に至る如きに非ず。但、我、久しく知る。往昔の諸佛、此の樹下無畏の所に在りて、聖道を成ずるを得たるを。是の如きの義を以ての故に、我此に來る』と。

爾の時、別に更に一夜叉有り、魔王波旬の右に在りて立つ。時に彼の夜叉、菩薩に語つて言はく、『汝釋種の子、今、何を苦しんでか、此の樹下に坐するを用ひん。自外の四邊に大いに餘の樹有り。汝、速疾に他處に移つて去る可し』と。時に菩薩、彼の夜叉に報へて言はく、『我に心願有り、餘の樹下に於ては、所願を成ずるを得る能はず。唯、此の樹下に在りてのみ、決定して當に成ずべし、餘の處は得ず』と。時に彼の夜叉、其の魔王に白して是の如き言を作す。『大王、今、彼の言を聞きたまへりや以不や。更に何事を作してか、能く彼を去らしむるを得ん』と。魔波旬、彼の夜叉に報へて言はく、『我今、唯、種種の方便もて勸動の心を作し、斷じて彼に此の處に坐するを聽さざるべし』と。爾の時、菩薩、魔波旬の是の如き言を作すを見、草を鋪きて坐し、內心に思惟して是の如き願を發しぬ『我、今、彼の往昔過去の諸佛の坐する所の金剛の處に坐し、坐し已りて當に魔王波旬に伏すべし。我、今、此の處に坐し已り、欲、瞋、恚、癡の諸の煩惱等を斷滅せん。我、今、此の處に坐し已りて當に微妙、甘露、清凉の法を證すべし』と。

爾の時、菩薩の鋪く所の草、其の根は內に向ひ、頭は皆外に向ふ。鋪き已りて彼の菩提樹を右遶すること三匝し訖竟り、加趺して坐したまふ。身心端直にして蛇の身に纒へるが如く卓然として動かず、口に三唱して言はく『我、甘露を證せん。我、甘露を證せん。我今、定めて當に甘露を證得すべし』と。而して菩薩、心に是の如き弘誓の願を發したまはく『我、此處に坐して、一切の諸漏、若しは除盡せず、若しは一切の心、解脫するを得ずんば、我、終に此の坐よりして起たじ』と。偈

有り說いて言はく、

『菩薩樹下に加趺して坐するや　大蛇を以て自ら身を纏ふが如く
　是の如き弘誓の心を發すらく　「事若し成ぜずんば坐を起たじ」』

爾の時、魔王波旬、彼の地所より身を隱して現ぜず、少時間を經て卽ち其身を化し、頭髮解亂して塵土身に滿ち、麁褐衣を著け、口脣乾燥して狀飢渴せるが如く、手中に一大束書を執持して、速疾に來つて菩薩の所に向ひ、菩薩の前に立ち、所持の書を將つて菩薩に擲げ與へ、口に是の如く言ふ『此の一封書は、是、汝釋種摩那摩(Mahānama)の許より、我に遣はして送り來る。此の一封は、是れ尼婁馱(Aniruddha)の許より。此の一封は、是れ難提迦(Nandika)の許より。此の一封は、是れ拔提伽(Bhadrika)の許より。此の一封書は、是れ難陀(Nanda)の許より。此の一封は、是れ阿難陀(Ānanda)の許より。自外の諸書は、各是れ彼の諸の釋種の子より、汝に寄與し來る』と。時に一書もて、僞抄不實、虛妄の言辭を上りて、是の如き語を作す『提婆達多(Devadatta)は、今、此の迦毘羅城に在り。已に王位を受け、汝の宮內に入りて悉く皆汝の妃后を納受し、汝の父淨飯大王を取りて牢獄中に繫ぎ、自餘の叔父、白飯、斛飯幷びに甘露飯、一切の宿老、諸の釋種王を、盡く皆城外に驅逐し遣出しぬ。汝、此の書を見ば、速疾に須く來るべし。汝、何ぞ彼の阿蘭若に住するを爲ん』と。

爾の時、菩薩、是の語を聞き已りて、心に是の如き三種の思惟を發すらく『婇女に因るが故に欲心を發す。而るに我妃后を提婆達多は實に能く納れたり。提婆達に因りて鬪諍心を起す。彼、實に能く我が國土父王の位を奪へりとか。釋種に因るが故に殺害心を生ず。彼等何が故に各自ら身を惜んで我が父を護らざりしぞ』と。菩薩復更に是の如く思惟すらく『世間の境界は、悉皆無常、穢汙不淨にして念念生滅し、暫くも住る時無し。一切を思惟するに、皆悉く是れ破壞の法、生じ已りて

卽ち滅す、是の如く思惟せば、便ち欲心を斷じて出家心を發し、諍鬪心を息めて慈愍心を起し、殺害心を斷じて悲哀心を生ぜん。是の如き等の事、我久しく棄吐せり』と。是を思惟し已りて卽ち[二]捨心を發しぬ。

魔怖菩薩品第三十一の上

爾の時、菩薩、菩提樹下に在つて坐し已りぬ。時に、菩提樹を守護する所の神、大歡喜を生じ、心意踊躍、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず。卽ち其身の有ゆる瓔珞を解き、并びに頭髻を散じて、速疾に菩薩の所に向ひ、最勝妙吉祥の事を以て菩薩を讃美し、內心殷重に大希奇を發し、悉く諸親及び其の眷屬に命じて菩薩を守護せしめ、恭敬儼然たり。

爾の時、彼處の四面の林木、大小を問ふ無く、有らゆる樹神各其樹より身を出し、護菩提樹神の邊に來り到りて問うて言はく『大善樹神、今、汝の樹下に在つて坐するは、此は是れ何人ぞや。我等、由來、未だ曾て聞見せざる最妙最勝の身、一切諸相の莊嚴を爲すこと、天中天の如し』と。是の語を作し已るや、其の護菩提樹神、彼の諸の樹神に告げて言はく『汝諸神の輩、當に知るべし。此は是れ淨飯王の子、甘蔗種姓なり。往昔劫初に、大衆推擧して置立せる所の王、世世相承け、今に至つて來る。此は是れ其の胤なり』と。諸の樹神、復、菩提守護神に語つて言はく『菩提樹神よ、汝今眞に最大の利益、大善福業を得て、汝の居處をして是の如き勝上の衆生、三界の尊たる勝妙の衆生有るを得しむ。此の衆生は優曇花の如く世に現じ難し』と。

爾の時、彼等一切の樹神、各、沈水、牛頭栴檀、諸の末香等を將て、又復、種種の妙好香花を菩薩の上に散じ、散じ已りて復散じ、歡喜踊躍、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず、手を擧げ頭を低れ、十指の掌を合して菩薩に向つて禮し、口中に各復是の如く唱言すらく『衆生の最首、唯願は

【二】捨心 upekṣa-citta)。喜怒哀樂に偏せぬ平等心。

くは仁者、早く此の誓を成じ、速に菩提を證せよ』と。次いで、復、四天所居の諸天、及び四天王有り。次で、無量の三十三天、夜摩、兜率、化樂、他化自在天等の無量無邊の一切の諸天、及び諸梵天有り。各、種種の天上の妙花、曼陀羅花、摩訶曼陀羅花、曼殊沙花、摩訶曼殊沙花、天の拘勿頭、及び波頭摩、分陀利等を將ち、復、種種の末香、塗香を持ちて、雨の如く菩提樹の上に散ず。其の菩提樹は、猶車輪の如く、周匝遍滿して一由旬の內に、種種の香花積つて膝に至りぬ。

爾の時、菩薩、彼の菩提樹下に坐せる時に、一の蚍蜉蟻子の聲を作す無し。況んや復、大獸、一切の諸鳥は、亦、聲を作さず。假使風有るも、一切の諸樹亦傾き動かず。菩薩の彼の菩提樹下に坐せる時に當り、淨居の諸天、心喜踊躍、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず、菩薩を頂禮して心內に各是の如き願を作して言はく『衆生の最首、願はくは仁、此の心早く圓滿を得て、速に菩提を成ぜよ』と。

爾の時、菩薩、彼の菩提樹下に坐せる時、此の要誓を發すらく、『我成道せずんば此の座を起たじ』と。是の時、魔王波旬、內心に大恐怖を生じて、卽ち是の言を作す『應に此の刹利釋種の子は我が境界を除滅するを得んと欲し、我をして此の境界を出でしむるを得んと欲すべし。彼若し我に勝たば、我が前に在つて必ず諸人を教へて涅槃を得しめ、諸人の爲に涅槃の方便を說き、我が境界をして當に虛空と成らしむべし。而るに彼、卽ち今未だ淨眼を得ずして、我が境界に在り。我今須らく勤劬方便を作し、其の所行をして退失起走せしむ可し』と。而して偈を說いて言はく、

『彼今若し菩提を成ずるを得ば　便ち廣く他の爲に正法を說き
卽ち當に我が境界を損耗すべし　衆人既に正路を開くを得ば
自然に我が境界をして空ならしめん　境空ならば我は則ち寡婦と成らん
其れ今未だ淨眼を得ずして　乃ち復我が境界の中に住す

我應に速疾に彼の邊に往き　先づ障礙を作して其の事を破るべし
猶河水の來りて未だ至らざるに　逆に須らく預め橋梁を造作すべきが如し』

[一]爾の時、魔王波旬、滿一千子を具足す。其の中間に於て、菩薩を助くるもの五百子有り。商主を首と爲し、魔波旬の右邊に在りて坐す。其の中、魔波旬を助くる者、亦五百有り。第一頭首を名けて惡口と爲し、魔波旬の左邊に在りて坐す。時に魔波旬、其の諸子に告げて是の如き言を作さく『汝等諸子、我今汝と共に進退籌量して、汝等子別の意智を取らんと欲す。共に何の計を作してか、若しは力能く菩薩を降伏することを爲ん』と。爾の時、右邊の長子商主(Sārthavāha)、偈を說いて父、魔波旬に白して言はく、

『若し人敢て大睡蛇に觸れ　復能く狂醉の象を盤迴し
曾て嚴熾の獸王と鬪はば　是乃ち能く彼の沙門を伏せん』

爾の時、魔王波旬の左邊の次子、惡口(Durmati, 惡慧)、復、其の父の爲に偈を說いて言はく、

『若し人我を見ば心破傷し　諸樹も根を拔いて卽ち地に倒れん
況んや彼の沙門若し我を覩ば　一氣に遠く走つて藏れざらんや』

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて妙鳴(Madhura-nirghoṣa)と爲す。卽ち、復、偈を以て其の父に白して言はく、

『若人大海に浮渡して　還つて海を飲んで悉く乾かしめんと欲する
父王よ此の事驚くに足らず　若し菩薩の面を見んこと怪しむ可し』

爾の時、左邊に、復、一魔子あり、名けて百鬪(Satabāhu, 百臂)と爲す。卽ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『我が身の膊上百臂生ず　一臂能く三百箭を射ん

【一】以下、Lalit. 二十一章の中に大同の梵文あり。魔名はそれにより、括弧內に譯名を出せるは、原本と一致せざる場合に方廣大莊嚴經のものを示せるなり。

【二】百鬪に百臂の誤傳ならん。

父王但去つて愁惱する莫れ　我獨能く彼の沙門を破らん』

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて善覺(Subuddhi) と爲す。卽ち復偈を以て其の父に白して言はく、

『若し其の力有ること象馬の如く　或は復毘紐(Viṣṇu) 及び金剛(Vajra) なりとも
人の宿業の忍辱威を藏するには　彼等の諸力も及ぶ能はず』

爾の時、左邊に復一魔子あり、名けて嚴威(Ugratejā) と曰ふ。卽ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『我虛空に於て水火を雨らし　彼に至つて能く比丘の身を破り
彼の身をして一聚灰の如くならしめん　猛火焔の乾草を燒くが若くせん』

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて善目(Sunetra) と爲す。卽ち復偈を以て其の父に白して言はく、

『若し最勝の須彌崩れ　一切の天宮殿盡く壞れ
大海の諸水皆枯涸し　日月空より悉く墜來らしめ
能く日光をして冷けきこと氷の如く　天宮墮落して地に到らしめんも
菩薩樹下に一び坐し已るや　未だ正覺を成ぜずして終に移らじ』

爾の時、左邊に復一魔子あり、名けて報怨(Dīrghabāhugarvita, 傲慢) と曰ふ。卽ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『我が指能く日月を執持し　虛空の星宿及び諸辰
彼等一切天を捉搦し　四海の水も手掌の內に入る
況んや此の沙門一釋子をや　卽ち今捻つて海水の外邊に擲たん

但　速に此の諸軍兵をして　疾く彼の沙門の所に向はしめよ』

爾の時、右邊に復一魔子有り、名けて德信(Prasādapratilabdha)と爲す。卽ち復偈を以て其の父に白して言はく、

『[三]日月の運移に朋を求めず　輪王の應化に等侶無し
諸聖菩薩は衆を假らずして　獨自ら能く大魔軍を破らん』

爾の時、左邊に復一魔子有り、求過失(Avatāra-preksya)と名く。卽ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『戰鬪の器仗は刀に過ぎず　身に鎧甲を著くれば心怯るる無し
是の如きの兵馬は必ず能く殺さん　父王彼の沙門を畏るる莫れ』

爾の時、右邊に一魔子あり、名けて福德瓔珞莊嚴(Puṇyalaṁkāra)と爲す。卽ち復偈を以て其の父に白して言はく、

『彼の身の御きこと那羅延の如く　破壞すべき難き四諦の體
忍辱の鎧甲　[四]三脫の刀　智慧の箭を執つて我等を降さん』

爾の時、左邊に復一魔子有り、名けて不迴(Anivartya)と曰ふ。卽ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『好き乾草は火立ろに燃え　善解神射の箭は剋中し
霹靂山に擬すれば便ち突過するが如く　釋子我を見ば手から必ず降らん』

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて法身(Dharmakāma, 樂法)と曰ふ。卽ち復偈を以て、其の父に白して言はく、

『人有り彩を以て空中に畫くとも　諸の衆生を同一の心と作すとも

【三】Lalit. は一緣慧(Ekāgramati)の偈とす。

【四】三脫とは、空・無相・無願の三解脫門をいふ。

月天風神を羅網もて纏ふとも　菩薩の道場は動かす能はじ』

爾の時、左邊に復一魔子有り、恒作罪[五](Anupaśanta, 不寂靜)と名く。即ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『我は毒を飲みて消すこと人の食の如く　指器仗に觸るれば悉く灰と成す

若し彼が身を碎いて塵の如くせずんば　終に此の二手を畜へず』

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて成利(Siddhārtha)と爲す。即ち復偈を以て其の父に白して言はく、

『三千世界は、諸、中に滿つれど　世尊之を觀て怖畏する無し

三毒の畏る可き彼滅盡すればなり　我等宮に還らん用つて鬪ふも何か爲んや』

爾の時、左邊に復一魔子有り、名けて貪戲(Ratilolo, 喜著)と曰ふ。即ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『我音聲の萬億を過ぐると　嚴飾せる玉女數百千とを將つて

彼を幻惑して其の心を亂し　寂禪を失して諸欲を受けしめん』

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて法戲(Dharmarati)と爲す。即ち復偈を以て其の父に白して言はく、

『彼は禪定の法を以て戲と爲し　常に解脫の甘露に入りて遊び

諸の極樂を用て衆の殃を拔き　五欲を持して以て適と爲さず』

爾の時、左邊に復一魔有り、名けて捷疾(Sarvacaṇḍāla, 施陀羅)と云ふ。即ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『我が力捷疾にして日月を掇め　亦能く勁き火風を裁斷す。

【五】原語 anupāpam となり居たるものか。

沙門を撮取して父前に置き　碎けし麥芒の吹散せらるるが如くせん』

爾の時、右邊に一魔子有り、師子吼(Siṁhanādi)と名く。卽ち復偈を以て其の父に白して言はく、

『曠澤に無量の野干鳴くは　乃ち未だ大師子吼を聞かざるなり
諸獸若し師子吼を聞かば　四散奔馳して百方に走らん
是の如く我等一切の魔は　未だ法王の大聲に唱ふるを聞かずして
各其の意を說きて肯へて止まざるも　彼の邊に至らば當に自ら休むべし』

爾の時、左邊に一魔子有り、名けて惡思(Acaramati)と曰ふ。卽ち更に偈を以て其の父に白して言はく、

『我今惡思彼を得んを願ふ　其れ此の魔軍を見ざる可けんや
彼の心眞癡にして意懷なきも　云何ぞ走り起つて疾く避けざらん』

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて善思(Brahmamati)と曰ふ。卽ち復、偈を以て其の父に言して言はく、

『彼も亦是れ癡無力なるに非ず　汝等自ら短く人情に乏し
今汝未だ彼の[六]善權を知らざるも　後當に智を以て汝を降伏す可し
汝等魔子恒沙の衆　是の如きの才辯三千に滿つるも
彼の一毛頭を損する能はじ　況んや復殺害を能く起らしめんや
汝等淨心もて彼處に向ひ　口に讚歎を言ひ身を曲躬せよ
怨惡を作して自兵を殘ふ莫れ　彼當に必ず三界の主と成るべし』

是の如くして、乃至、一千の魔子、其の中間に於て、或は白を助くるあり、或は黑を助くるあり、各自心に隨つて其の意見を說けり。

【六】善權（Kuśala）は方便に同じ、善き手段。

爾の時、魔王波旬に一りの最大たる兵臣有り、名けて賢將と曰ふ。時に魔波旬、彼の兵臣大賢將に語つて言はく、『汝賢將、來つて我に隨つて行け。今此に一釋種の子有り。其れ無上菩提を成就せんと欲す。我今汝と共に、彼處に至りて、其の道法を斷じて、無上菩提を證するを得るを聽す勿らん』と。

時に賢兵將、即便ち偈を以て、其の大王魔波旬に白して曰はく、

『王の統領する所の四天王　阿修羅王、緊那羅
迦婁羅・摩睺羅伽は　頭に十指を戴いて彼に歸依す
況んや復一切の諸梵世　光音、廣果及び淨居
地住欲界、色界の天　悉皆彼に向つて足を頂禮す』
又王の諸子は智慧勝れ　勇力世間に比倫無きも　心內恒常に彼の尊を禮す』
王の軍は八十由旬に滿ち　夜叉、羅刹幷びに諸の鬼　地上に住して王の前に在りと雖も
心恒に彼の無過の人を念じて　十指合掌して頭頂に禮す』
魔軍千萬彼の聖を見るや　私かに香花を以て遙かに之を散ず
我此の　類の相の分明なるを見る　菩薩必ず魔軍衆に勝たん』
魔家の兵馬の所住の處に　多く鵂鶹鳴鴟の鳴
或は復梟鴉烏鵲の聲　驢狐諸畜の聽くを惡むの響あり』
我彼の菩提樹下を見るに　吉祥の諸鳥の種種の音
鳧鳫鴛鴦倶翅羅　鸜鵒鸚鵡孔雀鳥
彼の聖を圍遶して音微妙なり　是の如きの勝相あり彼必ず强からん』
又魔軍の衆の住する所の營は　常に砂石埃塵土を雨らし

【七】以下、兵將の偈、Lalit.は上の千子の偈の前に出せり。大臣の名を欠く。恐らくは本經はそれを材料とするに當つて、前後順次を變ずるに際し、こゝに魔王の語二三行を加へたるものならん。

【八】此類相の類の字、宋元明の三本には預に作る。

菩提樹下に聖の坐する處に　天は種種の妙香花を降らせり』
魔衆の住處は地平かならず　高下の坑坎堆阜多く
礓石　荊棘糞穢饒きに　菩提樹下の地の周圍は　金銀七寶を以て莊嚴す』
是の如き[九]等類の相有るを見て　智慧人の輩若し意有らば　此の相を見已りて應に迴還す可し』
是の如く莊嚴せる遍地の間に　必ず當に無上道を成就すべし
大王若し臣の諫に隨はずんば　夢に見る所の如く當に虛ならざるべし』
是の如きの仙人は近づく可らず　應に兵衆を迴して本處に向ふ可し
往昔の王は諸仙に觸れしが故に　國土を呪焚して悉く灰と成しき』
過去に一梵德王(Brahmadatta)有り　毘耶娑仙(Vyāsa)の意に違犯せり
王に妙園雜花果有りしを　呪咀して火を出し悉く燒燃せしかば
多年彼の園に草生ぜず　況んや復樹林花果等をや』
世間の有らゆる多苦行もて　諸惡を斷じ梵行を修する時
諸王來つて悉く足に頂禮せり　我等今本に還歸す可し』
王昔應に維陀論(Veda)を聞きしたるべし　三十二相の明有る人
彼の人道を求むるが故に出家せば　必ず諸纒羅網の結を斷じ
無上正眞道を成ずるを得て　眉間より卽ち白毫の光を放ち　普く十方億刹の中を照さん』
況んや復此の魔軍の衆等をば　豈降伏し得る能はざる可き　王若し鬪はんと欲せんも勝つを得じ』
彼が頭頂の如きは極天に至り　千萬の諸天も覩る能はず
應に彼の微妙の果の　世間未だ聞かず今聞くを得るを成ずべし』

【九】等類相の類字、三本には頂に作る。

猶須彌及び鐵圍　日月帝釋梵天王
夜叉羅刹の諸林木の　皆菩提樹に向つて身を屈するが如し』
疑無し此の大福德衆や　歷劫以來此の行を修せる
施戒忍進禪智の力たり　今必らず我が魔軍を退散せん』
象の諸瓦坯を蹈破するが如く　諸獸王の師子吼するが如く
日の諸螢火を翳覆するが如く　世尊の魔を破る亦復然らん』
師子は獨り諸獸蟲を散じ　毒蛇は一螫して多衆を殺す
菩薩の熏修せる善根力は　獨り自ら能く我が諸魔を破らん』

爾の時、魔王波旬、大臣の邊より此の偈を聞き已りて、心に恐怖を生じ熱惱して安からず、身心憂愁し苦惱して樂しまず、慚恥し羞愧し、爲す所を知らず。然れども其の內心猶我慢を懷きて、迴還するを肯んぜず。復、逃走せず。復、更に餘の諸軍衆に語つて言はく、『汝等、齊しく、意に驚く莫れ、怖づる莫れ、畏るる莫れ、走る莫れ。此に乃ち是の我、彼を試み看ん。我、今、美言もて更に彼を慰喩し、其の起つて菩提樹を離るるや不やを見ん。是の如き衆生の竇をして、忽ち大殃に値はしむる莫らん』と。

〔一〇〕爾の時、魔王の長子商主、其の父に白して言はく、『魔主大王、我が意父王と彼の釋迦種の子と怨讎を作すを願はず。何を以ての故に。若し百千萬億の魔衆有つて手に刀劍を執り此の釋の邊に來りて障礙を作さんと欲するも、終に作す能はざらん。況んや、復、父王の獨自一身なるをや。父王よ、但、此の釋種の子の此の間の菩提樹下の師子座に在りて坐し、驚かず怖れざるを觀よ。父王よ、此の釋迦種の子の搖がず動かざるを觀よ。又、復、虛空の無量の天衆、十指合掌して彼を頂禮するも、是の如く諸天の頂禮供養讚歎する時にも、曾て歡悅せず。其の父王の惡心惡意もて、來つて屠害せん

【一〇】 長子商主の諫言、Lalit. け次下に出づる魔女誘惑の次に出せり。

と欲するを見るも、亦、瞋恚せず。父王よ、當に知るべし。假使、人有り、諸の妙色を將つて能く虚空に畫くとも、設使、彼の大須彌山王を、一人有つて指もて能く擎げ將つて行かんこと、此の事亦可なりとも、或は復人有り、大海を浮渡して、彼岸に至るを得んこと亦可なりとも、人有り、最大の風神四方に吹く時、忽然として縛著せんこと亦可なりとも、彼の日月星宿を取つて地に下し置かんこと亦可なりとも、一切の諸衆生等を合せて一心と作さんこと、亦可なりとも、一切の諸衆生等を諸處に移し置くこと亦可ならんも、終に此の釋種の子の魔に降伏することを得可からず』と。

時に魔波旬、偈を以て其の長子商主に告げて、是の如き言を作さく、

『汝は眞に我が怨なり是れ子に非ず　更に面を將つて我に向つて看ること莫れ
汝の心今既に沙門に著す　汝宜しく彼の釋子の所に向ふべし』

二 爾の時、魔王波旬、長子商主の諸諫するを取らず、其の諸女に告げて是の如き言を作すらく、『汝等諸女、各相共に、我が言を聽き用ひよ。汝、宜しく彼の釋種の子の邊に至つて、其の心に欲情有りや不やを試觀すべし』と。其の諸の魔女、父の勅を聽き已りて、相共に安庠として菩薩の所に向ひ、彼處に到り已るや、菩薩を去り離ること近からず遠からずして、種種に、婦女の媚惑諂曲の事を示現す。所謂、覆頭(一)、或は復露頭(二)、或は復半面(三)、或は全面を出し(四)、或は微笑を作し、白齒を示現して數顧眄して菩薩を觀瞻し、或は復、頭を以て菩薩を頂禮し(五)、或は其の頭を仰げて菩薩の面を觀、或は復、低頭覆面して地を觀(六)、或は雙眉を動かし(七)、或は眼を開閉し(八)、或は髻を解散して手を以て髪を梳り(九)、或は兩臂を拘へ(一〇)、或は兩手を舉げて腋下を示現し(一一)、或は復手を以て乳房を執弄し(一二)、或は胸背を露はし腹臆の間を現はし(一三)、或は復、手を以て臍上を拍ち(一四)、或は復、數衣裳を解脱し(一五)、或は復、數還衣服を繫け(一六)、或は復、數内衣を褰撥して尻髀を露現し(一七)、或は瓔珞を解きて地に擲著し(一八)、或は耳璫を解き(一九)、或は復還著け(二〇)、

【二】以下、魔女誘惑の一段、Lalit. に類するも、著しく改作の跡を見る。

或は嬰兒を弄し(二一)、或は諸鳥を弄し(二二)、或は復、行歩して左右を顧眄し(二三)、或は復、嚬呻長嘘して歎息し(二四)、或は脚指を以て傍に地に畫き(二五)、或は歌ひ(二六)、或は舞ひ(二七)、或は腰身を動かし(二八)、或は意氣を作こし(二九)、或は復、舊時に行へる恩愛の欲事、喜笑眠臥姿態の時を憶念し(三〇)、或は復、童女の身を現作し(三一)、或は時に婦女の身を現作し(三二)、或は復、新嫁の女の身を現作し(三三)、或は中年の婦女の身を現作し(三四)、是の如き等を作して、婦人の諂媚惑著の種種の事を示現す。

復、香花を將つて菩薩の上に散じ、復、種種五欲の事を以て菩薩を勸請し、欲心の姿態有りと爲すや以不や、彼れ、今復欲心を以て、我等を觀察するや以不や、或は欲心無くして我を觀るや不やと、其の面を觀看し、其の心情を觀ず。彼等魔女、菩薩を見るに、深心寂定にして本來清淨に、無濁無垢にして面目の清淨なること、猶、滿月の羅睺阿修羅王(Rāhosurinda)の手中より出づる所の如く、清淨無垢なること日の初めて昇るが如く、光焰の顯赫たること融金の鋌の如く、清淨無染なること猶蓮花の水中より出でて染著せざるが如く、火光焰の如く、須彌山の如く、確然として動かざること鐵圍山の峻嶒高峻なるが如く、善く諸根を攝して心意を調伏す。彼等、既に菩薩の是の如きを見て、皆、慚愧羞恥の心を生じぬ。

頻頭婆羅 348

—フ—

布髮 43
浮圖 23
富多那 411
福業 38,131
福田 128
佛眼 25
佛刹 7
分陀利 18
糞 196

—ヘ—

毘陀 34
偏袒 29

—ホ—

菩提 2
菩提種性 45
法行 230, 244
北鬱單越國 236
發心 1
本行 1,71
本行願 73
本性來空寂 203
凡業 83
梵行 17

—マ—

摩訶僧祇 27
摩訶波闍波提 69
摩竭 28
摩登伽 76
摩那婆 35
摩尼 23
摩樓迦 207
曼珠沙華 25
曼陀羅華 25
卍字 135
彌尼迦 261
彌勒 9

—ミ—

微細三事 335
名色 155
明行足 5
明相 130

—ム—

無畏 229
無畏の道路 359
無爲 233
無見頂相 275
無見之處 335
無邊虛空 333
無等等 16
無餘大涅槃 346
無量劫海 228

—メ—

滅度 6

—モ—

目揵連 2

—ユ—

唯自一人獨尊 394

—ヨ—

欲天 72

—ラ—

羅網 18

—ロ—

六界 160
六根 96
六師 221
六塵 201
六入 188
六波羅蜜 7
漏盡法 27

—ワ—

和合 204

—本緣部二索引終—

四魔 137
四無畏 105
四維 18
尸棄 51
尸陀林 241,292
師資 37
持更 235
七肢 92
七處 122
七助道菩提分 105
七多羅樹 45
七寶 32
悉曇 318
濕鑊 366
舍婆提 76
捨心 414
奢摩他 105
赤露 241
釋 2
釋迦牟尼 299
邪求 371
闍維 22
首陀會天 72
首陀娑婆 3
芻衣 226
受有 81
修習 311
十惡 7
十號 2
十善 200
十八種相 90
順法忍 213
初禪乃至四禪 333
諸有 74,206
諸行 230
諸根の不調 205
生死輪 101
生濕木 367
生分 104
正法 18
唱宜出家 287
聲聞 3,200
椒房 201
聖財 204
上無生 213
淨居天 2
淨不淨 204
常樂我淨 182,394
心眼 217
眞如 230
眞如眼 205
軫宿 151

—ス—

隨形好 132

—セ—

世間解 4
刹利 31
千輻輪相 122
千目 228
善權 420
善思 6

—ソ—

粟散 62
相好 2
相作 222
相法 47
相嘲 184
僧伽梨 229
箏 198

—タ—

多陀阿伽度 2
大士 70
第三は手に因る 204
檀 392
搏食 390
端正可喜 349

—チ—

箎 198
筑 198
竹林精舍 56
長者子 189

—テ—

天行 1
天人三惡道 206
天魔 182
轉法輪 17
轉輪聖王 3

—ト—

兜率 17
兜率陀天 70
灯明 24
忉利天 26
陶師の旋火輪 206

—ナ—

那由他 12
那羅陀 291
泥犂 358

—ニ—

二婁宿 301
尼拘樹 122
尼拘羅王 68
尼沙塞 28
人師子 279

—ネ—

涅槃 17,231

—ハ—

波頭摩 18
波羅蜜 84
芭蕉 82
芭蕉の心 202
婆伽婆 1
婆私吒 171
婆陀羅耶那 92
八關齋 81
八功德水 18,106
八部 42
甜 185
般遮會 36
槃涅槃 7

—ヒ—

非想非非想處 342
非道言無 339
彼岸 8
毘舍浮 52
毘沙門 20
毗婆尸 51
毗耆婆蜜多羅 154
毗闍羅 75
毘首羯磨 49
毘盧遮那 1
白衣 22,229
白鐵 106
貧窮 205
頻婆羅果 133

索　　引

（頁數は通頁を表す）

—ア—

阿迦膩吒　71
阿耆蹉時　379
阿修羅宮　71
阿僧祇　8
阿浮陀　98
阿難　8
阿尼盧豆　16
阿耨多羅三藐三菩薩　3
阿羅訶　2
阿羅漢道　6
阿蘭若　231
頞誰那　176

—イ—

韋陀論　307
施張の施　181
一子想　45
一生補處　70
一百八法明門　84
因緣　7,202
陰、入、界　204

—ウ—

有爲　89,230
右脇生　102
有處　305
優陀那　56
優婆夷　1
優婆塞　1
優鉢羅　18

—エ—

穢　34
廻施　109
緣生　202
閻浮提　3

—オ—

王　56

—カ—

柯俱婆　391
迦葉　52
迦葉遺　27
迦荼　397
迦那迦牟尼　52
迦尼迦羅　370
歌羅邏　98
魁膾居　206
角宿　151
攪屛　206
活想　244
灌頂　31

—キ—

木　203
記　4
鬼宿日　81
祇樹給孤獨園　8
機發　200
經行　301,369
憍陳如　379
行　202
拘翅羅　20

—ク—

具足戒　46
拘勿頭　18
拘婁孫　52
箜篌　198

—ケ—

解海算數　390
悔業　292
袈裟　276
牙席　153
髻裏明珠　281
結　102
見身　97
賢劫　53
揵闥婆城　24
眼と色と識　203

—コ—

去來　204
五支五根　98
五神仙　165
五神通　213
五仙人　388
五通　28
五欲　26,206
後際　102
黑業　358
劫　2
劫火　213
劫初　57
降怨　31
降神　90
恆河沙數　16
羮臛　368
光明幢　210
好寶　229
根　8
金翅鳥　208
金毘羅　243

—サ—

坐像彝　212
歲星　308
薩婆若　221
三有の循復　205
三闇道　26
三患　233
三種譬喩　366
三十三天　71
三十七助菩提分法　50
三十二大人相　6
三說　418
三昧　8
三藐三佛陀　2
釤斷　184

—シ—

四苦　205
四衆　1
四種辯才　51
四種兵　34
四種の魔　17
四種攝　29
四種食　97
四種事　365
四事　3
四禪　63
四大河　91
四諦　27
四天大王　71
四毗陀　113

昭和六年十二月十日印刷
昭和六年十二月十五日發行

國譯一切經本緣部二

不許複製

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一一九四七一番
電話芝（二三）二〇一一番
〃　三〇四〇六番

製本所　兩角製本所

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 4520